収容書目

日本經濟叢書

卷二十

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷二十目次

目次終

解題

本朝地方春秋

本書は第十七卷へ收容したる「井田附言」及「經國本義」の著者三木量平の著す所なり、量平の著書は皆不文難解にして、其の一言一句に付きて之を評する時は、往々讀過し難き所なきにあらざるも、我國の田制論は彼の最も得意とする所にして、其の說大に參考とするに足るものあらん、「井田附言」に記する所に依れば、本書は辛巳の年(文政四年)秋八月、門人の需めに應じて記述したるものにて、其の內容は、武田・豐臣兩家の田制を比較し、其の撿地の異同、取個の寬嚴及耕作の方法等を詳にしたるものなり、本書の底本は、故田口博士の舊藏本にして、是れには著者の署名なきのみならず、全書誤字多く、體裁亦整はざるが故に、編者は數年來諸方の圖書館及藏書家に付きて、對校

すべき別本を捜索したるも、遂に見當らざりしが、頃日前記「井田附言」を校正するに當り、偶然本書の同著者なることを發見したるに依り、取り敢へず、之を此に採收する事とせり、他日若し善本を得れば訂正する所あるべきも、「井田附言」にも「他に不出」云々の語あるを見れば、本書は多く世上に傳はらざるを知るべし

著者三木量平の傳は、本叢書第十七卷「井田附言」の解題の下にあり

封事

本書は第一・第二・第三及第四の上書四篇より成り、其第一は漢文を以て記し、第二以下は皆邦文を以て記せるものなり、第一は寛政九年、著者が年二十四の時、其の藩主に上りたる封事にして、此の封事は著者が少壯の客氣に乘じ、少しくも忌避する所なく、最も痛切に時弊を快論したるものなり、而して其の要旨は先づ初めに藩中の迂儒輩が功利を云ふ事を忌み、富國强兵を覇術と

して擯斥するの非なるを論じ、續きて當路の人々は、皆陰謀祕計、譎詐維れ勉むるの惡習あることを指摘し、外虜邊徼を窺がふの急なるも、藩主は恬として因循姑息、爲す所なきを攻撃し、貧民逋債に苦み、富豪兼併を肆にしつつあるも、有司之を聞する事を知らず、彼等は又興利を名として、大坂に金を借るの大害ある事を覺らざるを論じ、一國の士は商の如く、賈の如く、奔競貪利の徒充滿して、禮儀廉恥の風悉く地を掃ひ、教養素なく、法令信なく、上下共に偷安に甘んずる事を極言し、以て大に藩主及其の左右の當路を痛罵し、遂に苟も爲すあるの志あらば、宜しく自ら己を罪するの令を下して、士民の心を收めざる可らずと云ふに至れり、著者の嗣子東湖の輯錄せる幽谷先生略譜の記する所に依れば、著者は此の封事の爲め、不敬に坐して職を奪はれ、鄕に歸り客を謝して、益古今を研究し、復た人間に來往せざりしと云ふ、（此の封事の末尾に栗田寛氏亦此事を附記せり）第二は文化四年に奉呈したるものにして、其の主意は經世の大道は正德・利用・厚生の三事にあることより說き

起し、爲政の三綱領として（第一）御用の日帳方を御糺させ精密に取調べ候て、政令の發するの處を、正敷被ㇾ遊候事（第二）大吟味方の會計を明らかにして、理財の節度を制せられ、上下共に不足なく、仁政行はれ候樣に被ㇾ遊候事（第三）御郡方の課條を御立被ㇾ成候て、牧民の吏、眞實に治績有ㇾ之、邦本を固め候樣に被ㇾ遊候事の三箇條を擧げ、其れより屬僚政治の非なる事を詳述し、小量なる胥吏に政權を委ぬる時は、淺薄なる了簡を以て國事を紊るの處ある事を痛論したるものにて、文中往々警拔の語あり、例へば「蟹は甲に似せて穴を掘るとやらん申候如く、鄙夫の了簡多くは卑劣瑣細にて、大に事體を失ひ候事有ㇾ之筈と奉ㇾ存候」云々と云ひ、又「國家の武備にかゝり候事迄も、そろばんの上にて打破り……大數の本を取極め申候には、小吏抔の如くそろばんは入不ㇾ申候、然るを出納の勘定を十重八重にこしらへ、巧に六ケ敷仕り候事、皆皆奸吏欺罔の手段と可ㇾ被二思召一候」云々と云ふが如く、又「奸贓の吏次第に出來、一役所悉く小人の淵藪に罷成、其惡弊近頃の調達方（大坂などに至り金の

借入れに從事する役人)に至て極り申候」云々と云ふが如きは、何れも逆め今日の時弊を痛論しつゝあるものゝ如し。然れども文中餘り矯激に失して今日の經濟社會には、決して容る可らざるの言語なきにあらず、例へば「春秋傳にも有」之候通、民間にあまり財寶の自由なるは、驕奢而不」務」本の基に御坐候」と云ひ、又「當時御國產品如きもの、御國にはやり候へば、却て無用の費多く國の衰弊に罷成候」など云ふの類なり。然れども此の第一上書も亦第一と同じく一讀の價值あるものなるは疑を容れず、第二は第一と同じく矢張正德・利用・厚生の三事等を敷衍して、尙詳に之を論述し、第四は其題下に注記するが如く、專ら御勘定方に關する吏員並に職掌の事を詳述し、且其の吏員に關する歷史沿革の如きものを記したるものなり、此の第三及第四の兩書は、共に其の奉呈の年月を記さゞれば、之を知るに由なきも、皆議論一貫したる有用の上書なりと云ふべし

著者藤田一正は、子定と字し、幽谷と號す、通稱は初め與介、後ち次郎左衞

門と改む、安永三年水戶に生る、幼にして穎悟、神童の稱あり、立原東里に師事して、學業大に進み、年十五藩公召見して詩文を爲らしむ、筆を執れば數千言立ろに成る、公大に之を奇とし、頻に秩祿を進められ、寛政三年、年十八にして彰考館の編修となる、同九年江戶に祇役中、第一封事を上り職を奪はれて國に歸され、同十一年、赦に遇ひて又編修となり、其れより數年、江水の間を來往し、文化五年、出で丶濱田郡の奉行となり、史館總裁の職を兼帶す、同九年奉行を罷め爾來專ら史館の事に鞅掌して、獻替する所少なからざりしと云ふ、文政九年、年五十三にして、水戶の私邸に歿せり、著す所は下記勸農或問二卷・幽谷先生遺稿五卷(東湖編纂)の外數部あり

本書の底本は東湖先生の女壻宮崎幸麿氏の收藏本にて、此れは同氏自ら著者の自筆本を借寫せられたるものにして、最も正確なるものなりと云ふ、此に一言して同氏の厚志を謝す

勸農或問

本書上卷は勸農總論を最初に叙し、其れより原弊五條と題し(一)侈惰之弊(二)兼併之弊(三)力役之弊(四)横斂之弊(五)煩擾之弊の各條の下に、大體論を述べ、下卷に於ては總論五弊緩急と題し、首めに去煩擾之術を論じ、次に除横斂之術を論じ、次に均力役之術を論じ、次に破兼併之術を論じ、次に禁侈惰之術を論じ、終りに節用愛人之術を論じたるものにして、農政經濟を研究せんとする者に欠く可らざるの良書なりとす、殊に兼併の弊を記述する一段の如きは、參考資料として、取るべきこと少なしと爲さゞるなり、本書は明治二十年の頃、水戸先哲叢書として出板したるものを底本とせり、編者が別に收藏せる古寫本と此の叢書本とを對照すれば、字句に於て多少の相違なきにあらざるも、先哲叢書は水戸の名家栗田寛、內藤耻叟兩先生を始め、其他諸氏の同盟に依て發刊せられたるものにして、比較的正確なりと思はるゝが故

に、本書の原稿としては、全く此の叢書本を採用したるなり
著者藤田一正の小傳は、前記「封事」の下にあり

農政座右

本書は著者が常陸鹿島郡紅葉村の郡衙にありし頃、故事の農政に關するものを抄錄して、冊子に綴りたるものなり、著者の緒言には「寡聞書に乏しく、僅かに一二の友人より、借覽せるのみなれば、猶考ふべき書の漏たるも多くあり、又他書に引用せるを其の儘取用ゐて本書を見ざるもありて、其誤あらんも計り難く、實に無用の物なれども、今捨んも惜むべきこと鷄肋に似たり」、などと謙遜して記しあるも、本書は國郡・職役・田圃（以上卷之一）步段・租稅（以上卷之二）稻穀・帳簿（以上卷之三）寶貨（卷之四）の八門に分類して第三卷までは專ら土地に關する各種の名稱を和漢の諸書に據つて最も詳かに考證し、最後の第四卷には、主として金銀銅鐵錢に關する諸事を考證して、處々に著者の

私案を附記したるものにして。田地及貨幣に付きての名稱并故事の來歷を調ぶるに於て、眞に座右に欠く可らざるものなり、本書は前記藤田一正の「勸農或問」と同じく水戸先哲叢書本を底本となしたれども、尚著者の家に珍藏しありたる原本を借寫せる大藏省本と對校して。二三の誤謬を訂正せり

著者小宮山昌秀は水戸の人なり、字は子實。通稱次郎右衞門。楓軒と號す（初め忍亭、又芙蓉樓の號あり）少くして立原萬（翠軒）に師事し。高野文助（「富強六略」及「籠田の水」の著者）藤田一正等と共に秀才を以て稱せらる、其志す所吏務經濟にあつて詩文の末技に齷齪たるを好まず、其の鹿島に郡宰となつて、紅葉村に赴くや。同地は他領接續の地方にして、公事訴訟間斷なく、且つ貧窮無賴の民多くして。從來水戸領內に於ける第一難治の場所と稱せられたる所なるも、數年ならずして郡民皆昌秀の徳に化し、姦黠輕薄の風。變じて謹直敦厚の俗となり。各産業を勵みて貧民亦次第に減少するに至れり。居ること十數年にして町奉行に轉じ、それより又累進して忽ち御側用人となり、藩

公の爲め大に優遇せらるゝに至れりと云ふ、昌秀は博覽強記、勢力人に絕し、平生常に吏務繁劇の中に在りと雖も、少しく閒暇あれば、手、筆を閣かず、日夕孜々として著述に從事し、其の歿するや（天保十一年、年七十五にて歿す）家に遺れるの書數百卷の多きに及び、就中垂統大記七十二卷・楓軒文書纂三十餘冊・水城金函錄三十餘冊（以上二書、史館文庫にあり）貫針錄二十七冊・同續錄二十八冊・楓軒筆錄五十二冊・水府志料十八冊・同續錄十冊・同附錄五十冊、其他楓軒叢記・同紀談・諼草小言等にして、之に文化四年祝融氏の爲に奪はれたる盈篋錄五百卷を加ふれば、彼が一生の著作、優に千卷に上る、又盛なりと云ふべし

井田集覽

本書は主として孟子の井田に關する本文を掲げ、又其他諸書より關係の言辭を摘錄して、之を注釋考證したるものにして、井田法硏究の資料としては、

最も有益なるものなり、小宮山楓軒の序文に依れば、本書の性質は、友部直夫の需めに應じ、同人の著せる孟子井田釋なるものに、楓軒自ら先賢の諸說を補集して、改めて井田集覽と名けたる由記しあるも、直夫の原著孟子井田釋は如何なるものなりしや、又楓軒の補集の範圍は何程なりしや今之を知ること能はず、楓軒の門人大內正敬なる者が著したる精愼錄（楓軒の治民事蹟を錄したるもの）には、楓軒の著述の事を記し、井田集覽・農政座右など云書數部を著し云々の語あるを見れば、本書は全く楓軒の著述として傳へられしものなるべく、隨て內容の大部分は同人の補集に成りしものにして、書中特に「秀按」の記入ある部分のみに限らざるや圖り知る可らず、而して此等の事の明かならざるは編者の甚だ遺憾とする所なり

本書は帝國圖書館に藏せらるゝ小宮山楓軒の自筆原本を借寫したるものなり、友部直夫は其の傳詳かならざるも、精愼錄附記の文面を見れば、楓軒の友人にして、矢張翠軒の門人かと思はるゝも確かならず

商道九篇國字解

本書は一之卷を（第一）商術（第二）知務とし、二之卷を（第三）習勞（第四）使令とし、三之卷を（第五）教養（第六）接待とし、四之卷を（第七）繼業（第八）主權（第九）應變とし、總て九篇に分類して、商業の術を理論的に論述したるものなり、本文は漢文にて堤正致、之を著はし、國字解は其門人松川修なるもの、之を解釋し、親切丁寧に說き明したるものにして、最初に「商業の道は有無を貿易し、民用供給するものであつて、治生の計は大に、用智の地は廣く、其の術深奧なるが故に、學ばざる可らずと云ふ事を述べ、それより三擇と云つて「地を擇び業を擇び人を擇ぶべき事」と、三經と云つて作力・鬪智・逐時、即ち骨を折て働く事（作力）智慧を鬪はす事（鬪智）時期を前見する事（逐時）の必要を說き、進んで商業上の競爭は戰爭に異ならざる事を述べ、單に正理にのみに據る可らざる事等を詳論したるものなれども、全篇の主意は、

易に所謂窮すれば變じ、變ずれば通ずと云ふの根本思想を敷衍し、「商の業たる常に在ては常の利を收め、變にありては變の利を收む、常の利は爭ふ者多く、變の利は爭ふもの少く、故に商の大利を得る大變の時に在り、然れ共人の情は愚成ものにて、兼て期したる事さへ、時に臨んではうろたへさわぎて取亂すものなり、まして時變の起るには、定りたる體相なくして、いつも思ひがけぬ所より事起る、故に大變の時に當りて、身の置き所に忙迷して、利の有所に眼の付暇あらず、故に眼前に大利有りとも、人是を爭ふものなし、是則大商の變に乘じて、恣に大利を得る所以なり」云々と云へるが本書の主眼とする所にして、其の論法頗ぶる面白しと云ふべし、又貨幣を論じて「金銀と雖もと賣買する代物なり、故に貨の字を金玉を以て物を買ふ義とし、又人に賣與る貨物の義ともするなり」と云へるが如き、正しく貨幣の眞意義を解するものらしく思はれ、又貨物の價に高低ある所以を說きて「夫貨物の價に貴き賤きある所以は、物品の精麁と、庸俗の喜好と、時用の變との三つによれり、

物品の精麁は、正當の價にして動かぬ所なり、喜好と時用とは、正價の變ずる所にして、常に動いて定る事なし」云々と云ひ、尙一步進んで品質・喜好・時用の三つは正價變價の由て出る所なるも、其の實は品質と時用とを以て價値の要素とするが如く論じたるなどは、「粗漏ながら稍〻近世的の學說に似たる所ありて、學說史上好個の資料と爲さゞる可らざるなり、著者堤正敏、字は子行、一雲齋と號し、京師に住して儒を業とす、惜らくは其の傳詳ならずと雖も、寬政年間、岩垣龍溪の門人中所源勤の著はしたる「五倫談」の跋文を撰みたることあり、文中中所先生云々の語あるを見れば、或は此の一派の儒者なる歟、且らく記して他日を待つ

勸農策

本書は備前の人武元立平の著す所なり、立平名は正恆、字は君立、北林又高林と號す、有名なる古詩韻範の著者、登々庵の弟なり、明和七年（一說作六

年)備前和氣郡北方村に生る。本姓は明石氏、世々里正にして、地方の名族たり、父正勝立平を井上四明(經濟十二論の著者)に託して昌平校に學ばしむ、居ること幾もなくして鄕に歸り父の職を嗣ぐ、後ち出でて藩校閑谷學館の敎授となるに及び、舊職を男正平に讓り、家を挈げて閑谷に移り、專ら子弟の薰陶を以て任となす、而して立平の學は、多くは獨學にして、程朱を主とせるも、其の固陋を疾んで、涉獵該博、最も史學に通ぜり、著す所史鑑二十卷・續史鑑五卷の如き、其の引證精確にして、具眼者の嘆稱する所となり、現に友人賴山陽が政記を著述するに當り、立平の史鑑を藍本とせりと云ふが如きは、必ずしも全然虛構の談にあらざるが如し、立平の閑谷校に敎授たること五年、復た官を辭して京師に入り、帷を下して生徒に授く、數年の後、鄕に省し、先墓を掃はんとし、發して播州に至り、門人小田某の家に宿し、病んで暴かに歿す、實に文政三年九月二十七日なり、立平の四男を正軌と云ひ、正軌の男を景秀と云ふ、景秀明石靜一郎と稱す、本會の贊助員明石照男

（今現に第一銀行大阪支店長たり）氏の父なり、本書勸農策は即ち照男氏の家に藏せらるゝ原本に依り、對校是正したるものなり

本書の內容は先づ第一に農民の困窮を救濟するの急務を說き、農民が商人と爲りて耕作する者の減少するは啻だ農業界の衰因たるのみならず、一般商業界の爲めにも亦甚だ不利なる事を述べ「農民ハ多キ程勢ヒヨク、商人ハ少キ程勢ヒヨキモノニテ御坐候」と云へるが如きは、夫の農村の人口過多を杞憂しつつある一派の論者より之を見れば、或は奇異の思を爲すなるべきも、當時の人口は今日の如く增殖の盛況を示さざるのみならず、封建の悪政の結果全國一般に農民の減少に苦しみつゝあつた折柄にして、所謂收獲遞減法の働くべき限界は、實際に於て尚頗ぶる遼遠なりし時代なれば、農民が多ければ多き程農業の爲めにも亦商業の爲めにも非常の利益なりし事は、疑ふ可らざるの定說なりしならん、著者は此の說を開陳したる後、農民救濟の一法とし、「稅歛を薄くして民力を休養するの方針を取らざる可らざる事」を論じ、次ぎに當時

一般の流行、殊に岡山地方に於て最も盛なりし新田開發の利害に論及し、「人力餘ある時は田地の新開は大に利益あるも、現在の如く農民減少の時に於ては却て古田を荒らすの不利益あり」と云ふ事を說き、又農民を取扱ふには誠を推し信を失はぬやう、實意を以てせざる可らざる事、及撿見の時などには最も注意を加へて農民の便利を斟酌し、時節を後くらして麥の生立の妨害をするが如きとなからん事」を懇切に論述したるなどは、別に奇論卓說と云ふにあらざるも、却て大に價値あるの言と爲さゞる可らず、之を要するに著者は藤澤某の撰みたる墓碣文に云へるが如く、「溫厚汎愛」の君子儒にして、而かも眞正の經濟に長じたる實務家たりし事は、本書所說の往々證明する所なり、例へば井田の主意を賛成するも、其の法の復古すべからざる事を述べ、「我邦ハ總テ平嘖ノ土地少ク御座候故、井田ノ法ハ行レ不ㇾ申候、但其法ニ準ジテ征法ヲ立候テ出來可ㇾ申事ト奉ㇾ存候」と云ひ、又頻りに兼併の弊を論じつゝ、「兼幷游惰ノ弊ト申候テ、百姓平均ナラザル譯、古ヘヨリ憂ト仕候儀ニテ御座候、

兼併ナルモノハ多クハ游惰ニ成申候、然レドモ人ニ貧富ノ次第アルハ自然ノ道理ニテ御座候、俄ニ平均ニハナラザル事ニテ御座候得ドモ、御上ヨリ手厚御世話無二御座一候テハ小民取續不レ申候」と說き、又「俄ニ兼併ノ弊ヲ止ント仕候テ豪農富商共ノ田地ヲ削奪シ、小民ニ返シ與ヘ候樣ノ說モ御座候得ドモ、是ハ彼德政ト申仕方ヨリモ理無樣ニ奉レ存候、本價ヲ出シ買集候田地ヲ、其アタヒヲ償ヒ候テ取戻シ候事ハ、莫大ノ銀數ニテ迚モ出來不レ申、又故ナク田地ヲ奪ヒ候ハヾ、豪民共一向服シ不レ申、亂ヲ興シ候樣ニモ可二相成一、殊ニ今ノ無力ノ小百姓共自分持株田地ヲサヘ作リ兼居申上、俄ニ田地ヲ返シ與ヘ候テモ所詮得作リ不レ申、却テ散田ヲ多クコシラヘ、困窮ノ基ニ相成可レ申候」と云ふが如きは眞に農民の實情を得たるものなるべく、又農民が商業を兼營するの害を痛斥しつゝ、「在方商人ノ儀ハ御禁制モ御座候事ニテ御座候得ドモ、只今ハ耕作計ニテハ糊口出來不レ申ニ付、無レ據片手ニテモ外ノ商買ヲ營ミ申事故、商人嚴敷御制禁御座候ヘバ、飢寒ニ及ビ候者御座候、然ドモ此制禁無二御座一

候テハ、彌田畠荒廢農民衰微ニ相成候得バ、在方ニテ新ニ商人ニ成、店ヲ出シ候事ハ勿論嚴敷御停止被仰付ニ云々と說きたるは、何れも皆、穩健着實の思想にして迂儒の大言壯語と同日同年の論にあらず、是れ立平氏の立平氏たる所以なる歟

著者は本書の外に南畝偶語・足食論・耕漁論等の著作ありと云ふ、南畝偶語は明石照男氏の所藏を借寫して編者之を珍藏し居るも、內容は勸農策と同一にして、字句文章亦大なる相違なし、編者の信ずる所にては、南畝偶語は、著者が藩の當局へ上呈したる勸農策の形式を改作し、一の成書と爲して子孫に貽したるものに外ならざるが如し、他の二書は編者未だ其の全文を見ず、他日之を得るの機會あらば、更に採錄する事あるべし

本書の刊行に付ては前記著者の孫、明石照男氏は其の原本を貸與せられ、且編者の需めに應じて傳記材料を供給せられ、又大阪天王寺中學校長鈴木券太郎氏は本書の古寫本一部を寄贈し、且つ著者の略傳を寄送せらる、此に一言し

て兩氏の厚意を謝す

大正五年一月

瀧本誠一

解題終

本朝地方春秋

三木量平著

本朝地方春秋

三木量平著

武田家地方經濟之制度

曰に、甲斐州國政の遺法を察して、倩武田家地方經濟之古を稽るに、武田家は天數を主とす、法を嚴にし度を緩くし、境界を正くし税法を等くし、鑑鎮を造りて勸農を教導し、間作を用ひて贓吏を誡む、法を立て勤行の正理を示し、令を出して國家の無道を禁ず、能く經國の才ありて人を用ゆ、故に國富み兵強くして、遺風百歲の後に傳ふ

標にいはく、法とは、檢地繩入をいひ、度とは、石盛取箇附を謂ふ

標に曰、天數を主とすとは、方六十五間を一町として、一反を三百六十歩とするを謂ふ

標にいはく、鑑鎮は、農具を謂ふ

標に曰、贓吏は、奸曲の役人を謂ふ

傳に曰、甲斐州古檢地の法は、一反三百六十歩なり、然るを慶長・寛文の度より一反三百歩と定、右の反・畝・歩を檢地帳に引合試るに、少しも餘歩なく、繩詰なり、土性幷立毛登り高を以て其石盛

に引合試るに、何れも三四等づつ卑し、亦國境。山境は見通を定、村堺•林境等は小徑亦は小溝を通じ、道境•畑境は中央石亦は埋杭。屋敷境•田堺等は境木等あり、亦是に正理を示すに五繪圖を以てす、亦稅法を見るに、何れも檢見取にして、偶定免場なるも、五ヶ年亦は十ヶ年切替也、又其土性に從ひ餘國になき土地相應の鑑鎮を作りて、耘培耕耨の道を敎ゆ、然れども檢見取亦は年季定免故、其時々貢の定に附ては、上下につき賄賂の沙汰あらん事を思ひ、間作を以て贓吏の禦に其備を置なり、亦四民共に年中日夜勤行の式も定、これを俗に所作と謂ふ、其式を勤るものは平也、其式不足なるは怠なり、其式過るは精勤なり、亦士は勿論農屋召抱の下男女にいたるまで男女の別を敎へ、男は戶外に居り、女は戶內に居り、各別閭なり、其年中用る所の業器•農具等まで其ものに委ね預けて、他器と混雜を禁ず、正理を示す事斯の如し、かく法度有故に、其法に背くものは如レ此、また此法に背くものは如レ此と令を下す事嚴重なり、亦能く經國の才ありて、人を用る事高坂•馬場•山縣等、亦下りては廣瀨•曲淵などの類ひ、各其人才長ずる所を知りて其役に任ずる故、其職とする所其正理に通ず、是を以て下に怨なく、上に奢りなくして、上下の失費なし、上下の失費なき故、國富み兵强くして其國風正し、其國風正しき故に、百歲ののちに至るまで其遺風に歸す

標にいはく、一等とは、穀一斗の違ひあるを謂ふ

標にいはく、國境•山境等は、見通し榜示杭あり

標に曰、關東は登り高を以て石盛を定る故、是を毛高と謂ふ、毛高とは、立毛登り高を謂ふ、中國は收納米高を以て石盛と定たる故、是を本高と謂ふ、本高とは、即石納高を謂ふなり、今毛高を草高と書は誤りなり

標にいはく、五繪圖、一に曰、郷村耕地、二に曰、遂田宅地、三に曰、山岳叢林、四に曰、畦歩、五にいはく、邦國割賦、右五法とも各別法にして、武田家一家の法なる故、世に傳ふる事稀なり、悉くは予が著述する所の本朝國本三寶秘要の五繪圖の部を熟覽して知るべし

標に曰、武田家を人を遣ふに、日を以て忖度とす

註にいはく、武田家在世中、元龜・天正年間は悉く貫高也、故に其土地によりて、上田一反を四百文と定もあり、亦三百五十文或は三百文、上畑一反を三百二十文、亦は二百七十文、或は二百五十文などと定、其餘中・下。下々に至るまで皆此法なれど、其時の一反は三百六十歩にして、一年三百六十日に象るなり、是を以て武田家は天數を主とする事明らけし、然る時は一町は方六十間にして三千六百歩也、故に畦畔の餘歩なし、是を以て尺を六尺五寸となし、一歩に付方一尺成物六ッ二歩五厘の餘歩を加へ、一反に付六十二歩半、一町には六百二十五歩也、是を畦畔となし、立毛採苅桝入には六尺を用ゆ、是則ち天數に合すれ共地數に不レ合故に、慶長・文祿・寛文御檢地の度より一反を三百歩と定、六尺五分の尺を用ひ、方一町にして一町歩となし、地數に象る、しかりしより以來四

勺五才四を免じて五合摺となす、是を以て是を見れば、武田家までは天數を主とし、豐臣家は地數を主とす、然れども古法に效ふて少も餘歩なし、是を以て法嚴也と謂ふべし、亦土性とは、九土の性を謂ふなり、一に曰、眞土、二に曰、疏土、三に曰、粘土、四に曰、波丹土、五にいはく、剛土、六に曰、簇土、七に曰、土老土、八に曰、灰土、九にいはく、砂土也、眞土は菌作にて穀麥九石を納、疏土は八石を納、砂土まで各其差ひ一石づつなり、然れども九土混雜の土多くして一樣ならず、其品百種も有べし、能土性に達せざれば、其土地を見て何石登ると定る事かたし、好古の士能土性に習熟すべし、今甲斐州田畑登高の法を以て其場所石盛に引合せ見るに、譬ば攄にて八石登るべきも七斗七升と定、是を五合摺にして三石六斗に當れるを、內にて糞代三ッ一を引、殘高二石四斗と成、右國中に擴なし、攄を以て上品とす、故に二石四斗の石盛高免也、右石盛の法を以て上田一石九斗なれば、中田は一石六斗、下田一石三斗、下々田一石一斗、畑も亦此の如し、各三等の差あり、是を以て是を見るに、度則緩也、亦國境・山境見通し榜示杭を定、村境・林境・小徑亦は小溝・道境・畑境は中央石埋杭、屋敷境・田境は境木等也、其法畔巾三尺なり、畔巾三尺にして並田一尺五寸づつ也、各外に左右一尺五寸づつを除き、他の地を踏毀ひ後日に諍ひあらん事を禁ず、是則境界正しき事斯の如し、亦夏秋兩毛ともに何れも檢見取にして、麥は六合摺と定、其法繁多なり、故に爰に略す、然れども當時は永定免同樣にして、何れも五ヶ年十ヶ年の切替なり、田は年季定免もあり、亦檢見

取もあり、検見取は平均法にして良法なれども、當時その官に居るもの務に怠り、多くは定免を宗とす、古法には免振法と謂もの有て、運田の貢並に公私の夫役にいたるまで、高下なきやうに平均す、是を以て税法等し、亦其土性剛柔・結脆・軽重に隨ふて、其土地相應の鑑鐵を造りて耘培耕耨の道を教ゆ、其品長鑱・踏犂・鐇銚・鎌鍘・斧斵等の類ひ餘國に無類の農具なり、亦藁を以て篭畚と謂ふものを造り、雨雪を凌ぐ具とす、亦女子手業の器に至るまで、糸を度るには排と謂ふものを造りて、一日曳き伸す所の丈尺を度り定、亦機經を度るに束絲擲を以て度り、綜になし梭へ貫き篭束に納む、其度る事少も過不足なし、其細密なる事斯のごとし、是を以て鑑鐵を造りて勧農を教るなり、亦検地の法は古來巡狩の例にして、立毛の多少のみを試るに非ず、夏秋作方の出來不出來を見て、國人の農不農を知り、農を勸る事信切なるものは是を賞し、怠り荒むものは是を譴て、人心を勵ましむる法なり、然れども總じて正善なるもの少き故、私慾にまよひ奸曲に欺かれ、賄賂の爲に農を賞し不農を譴ましむるの本をうしなひ、もし邪曲を行ふ贓吏あらん事を恐れ、その贓吏を禁ずる爲に、間作を用ひて是を禦ぎ、正直なるを賞する也、これ則ち贓吏を譴ましむるなり、亦日夜勤行の式是を所作と謂ふ、その法男田を荒著する事五畝歩、仰著する事一反、磨著する事二反、畑代鑿五畝歩科鑿一反、女稻扱六斗六升入二俵、麥六斗入一俵、男穀ずり六斗六升入三俵、米舂三斗六升入二俵、粟片づき六斗入二俵、□搗同一俵、女麥粉挽一斗五升、□粉一斗六升、蕎麥粉一斗二升、米粉九升、

男綯五尺尋二十曲十五房、俵作六ッ、女絲曳七幾半、男槇木割五貫目束四駄、女木綿繰二斤、其外農事手業共に諸家百工に至るまで、悉く其所作と謂ふもの有て、事繁多なる故爰に略す、又男女別を示すの教、居宅の外に長屋を造り、當時の武家の如く男一人別に局を渡しおき、其もの遣ふ所の農具を預け置て、紛亂なき樣にはかるなり、女は居宅の內に二階を作り、數女入込になして互に其不義を制す、是も其もの遣ふ所の器共ものに預け置なり、其正理を示す事斯の如し、敎示する事懇切成ゆへ、亦是に背くものあれば、其罰を正す事も嚴重なり、法令嚴重なる故に、國人法令を恐るゝ事猛火の如くにして、法を犯すものなし、是を以て國家の無道を禁ず、斯天下國家を經濟する才智ありて人を用る事、縱令千石萬石の家に產れたるものにても、其祿を食ひ其官に任ずるほどの才智なきものに其家を繼せ置ては、婦人の仁にして丈夫の仁に非ず、故に是を其もの相應なる百石二百石の小祿の家に移し其家名を繼がせ、亦百石二百石の小家に產れても、三萬五萬の大祿をも食らひ、三千五千の人數をも指揮する才智有ものには、其大祿の家名を繼する故に、其祿を食らひ其官に任ずるもの愚弱なるはなし、其官に任ずる者才智にして正明を行ふときは、諸家百工雜家に至るまで政事行き屆き、各々其業を大切に守る故に少しも失費なし、失費なきときは國富む、國富めるときは兵强し、兵强きは義を守る故なり、義の歸する所はその遺風百歲の後に至れども、人能是を守る

標にいはく、貫高は束高より起る、束高の濫觴は稲七十二莖を一握といひ、十握を一把といひ、十把を一拱と謂ふ、是を五尺藁番ひにて束ね一束と謂ふ

亦一握を一歩といひ穀一合を出し、一把を一文といひ穀一升を出す、一束を十文といひ穀一斗を出す、十束を百文といひ穀一石を出す、百束を一貫文といひ穀十石を出す、この穀五合摺にすれば、當時の五石に中れども、古の法は五合摺に非ず、五合四勺五才四の法故に、一貫文の地は今の五石四斗五升四合に當るなり、其證當時甲斐州にて、穀一俵と謂は六斗六升入なり、此六斗六升へ五合五勺五才四を乘ずれば、分米三斗六升と成、是を以て古法の五合四勺五才四の法を知るべし、この六々の法は地の極數六より起り、六々にして天數三百六十に合す、是を以て一俵を六斗六升入とす、此六斗六升を天地人の三ッにて除けば二十二と成、此二十二を以て取米一石を除ば四五四五と成、此法口米の出る所也、此四升五合四勺五才のうち、三升を以て三升口米と唱、殘る一升五合四勺五才を公納口米と呼、此法足利三代義滿公より起る、その以前は取米一石に付四十四歩一をとる故に、取米一石に付口米二升二合七勺三才なり、此法は天地人三才の內、人の一ッを以て國民へ惠の法也、此天は貢、地は耕、人は夫役にして、税法も三ッ一ッの法にして、登り高一石に付三斗三升三合取なり、二十二分一の法より、五ッ取にして五斗取の法起る

標に曰、穀上品にして克乾なるもの、六合より七合まで摺也

標にいはく、穀五合摺の法は東照神君御仁政の法也

標に曰、豊臣家の地數を主とする事正理ならん、

標に曰、眞土壤◦疏土壚◦粘土墳◦波丹土◦埴剛土◦墢鏃土◦墝土◦老土◦泥土◦灰土◦塗砂土墋なるべし

標にいはく、糞作にして九石を納るものは、素作にして六石を納むと謂ふ

標に曰、甲州の内、賀茂◦市川◦南部等の外、壚なし、其餘は稀なり、委しくは其國に至りて見るべし

標にいはく、畔巾三尺にして並田一尺五寸宛なり、是を二ッ合て六尺馬入と謂ふ、亦三ッ合て九尺、是を野路道亦は後背路といふ、亦四ッ合て二間、是を在郷道と謂ふ、また六ッ合て三間、是を往來道と謂ふ、亦十合して五間、是を市場道と謂ふ、亦十二合して六間、亦十六合して八間、これを城下の道とす、亦二十合にして十間、將軍の都下とす、二十四合にして十二間、京師とす、其大なるもの廣の字を加へ、俗に是を廣小路と呼ぶ、是を以てこれを見れば、東都にて廣小路と謂るものは三十間成べし、今京師にあらば三十六間成べし、然れども京師に廣小路なく、十二間の道も半減にして六間也

標にいはく、甲斐州にて麥一俵は六斗入也、此麥六合摺にして一俵三斗六升となる、然れども今是を舂法するに、克熟して乾けるものは、七合より七合五勺をすり、中なるもの六合なり、上成物六斗にて四斗二升を納む

標にいはく、畑は檢地繩入之節定たる位、百歲二百歲のゝちに至るまで格別の異變なし、故に年季定

とす、田は水乾の二ッに依て異躰あるもの故、検見取を以て平均し、定免法を是とせず

標に曰、免振とは、譬ば検地之節上田の縄受にても、後年に至り流末洲高に成か、水吐悪しくなるか、亦はさし水涌水など有て冷田になるか、亦は水源涸渇して乾地になるか、亦は居村林等あり悪水掛らざるか、彼是の異變にて、検地の節より登方悪敷なりし場は、譬ば上田にて一反歩に付一石九斗の石盛にて、此取米高一石に付五斗取にして九斗五升成とき、三斗取にして五斗七升にするも有、亦二斗五升取にして四斗七升五合取もあり、亦下田にて一反に付一石三斗の石盛も、此取米四斗取にして五斗二升の所を、検地の時より水掛り宜敷なりて登方能か、亦村方繁昌して、悪水多くかゝり地性立直るか、上田よりも登方勝る場は、四斗取の所も七斗に直し、此取米九斗一升に定るも有、是を免振と謂ふ、検見は一村耕地の平均にして遂田の平均に非ず、故に村方にては遂田の平均を明細になし、税法高下なきやうにするを良法とす、振とは、取箇のうち彼を以て是に替差略するを謂ふ、俗にこれを取まし取下と謂ふ

標に曰、重剛の土には鍬鐃を用ひ、其塊を鑿碎くに板塊打を用ひ、亦丸塊槌を用、重柔の地には踏鋤を用ひ、荒著には大鋤を用ひ、仰著(くわかへし)には磨著(あらし)、亦耕には小鍬を用ひ、亦耘には重剛の土に峯鋤を用ひ、輕柔の土には鎌薫を用ゆ、其練切なる事彌精くして、關八州の如く雞を割に牛刀を用るの類にて、都て大鍬を以て作るに非ず

標にいはく、苧蓁は其形蓑に似て少く異なり、蓑は網結び綴結びなり、苧蓁は綴結にして堅固なり

標にいはく、作方出來、不出來を以て農。不農を知るに法あり、素作にして不出來成は、其程細く其ふし卑し、蕘作にして出來たるは、其程太く其節高し、總じて作り出來たるは頴太く、不出來なるは頴細く、穀皺あるは瘦なり、諸作皆是に同じ

標にいはく、奸芒とは、奸曲の民を謂ふ

標に曰、代鑿とは、稠しく平起しを謂ふ、科鑿とは、壠を通し起すを謂ふ

標にいはく、槓は六束を以て一駄とす、實綿六百目を一斤とす、此繰綿百六十目を定式とす、是摘綿一斤と謂ふ、都て女は男の務る所其業三ツにして一ツを減じ、殘り二ツを務めしむ、譬ば男穀三俵扱ふときは女は二俵扱が如し、餘は皆是に同じ

標にいはく、諸家百工の業所作悉く式あり、委くは其國其職に問て知るべし

標にいはく、拵の製作一度にて一丈六尺、亦一丈七尺、亦長尺とて一丈八尺もあり、然れども一丈七尺を平尺と謂ふ、其一丈七尺を一縷と謂ひ、二縷を片手振といひ、四縷を一手振と謂ふ、十手振を片幾といひ、二十手振を一幾といふ、其尺百三十六丈なり、是を三丈四尺にして四十縷、二幾にして八十縷、是を梭に貫き一升と謂ふ、十五幾の糸は七升半の梭に入る、平女二日の所作なり

標にいはく、夜仕事は八月十五夜より初り、同月より九月十三夜までを片夜職(よなべ)といひ、九月十三夜よ

り本業にして半日の業を勤む、俗に是を本夜職と謂ふ
標にいはく、法緩成ときは犯すもの多し、故に罪人多し、法嚴成ときは犯す者なし、故に罪人少なし
標にいはく、用ゆとは、是をつかふて能其事の辨じたるを謂ふ
標に曰、小祿の家に產れし者も、其才智有ものは大祿の家名を繼せたる類ひ、傳に載る所馬場・山縣・
高坂等の類也
標に曰、人を用るとは、譬ば大番の家に產れし者にても、地方の才智あるものは地方の役に移し、亦
百姓の家に生れても、武事に精きものは番頭、亦は軍用にもなす類也、各々其人才の長ずる所を知り
て能其才智をつかふ、故に用るとは謂ふなり
標に曰、大祿の家に生れて、其祿を食ひ其宮に任ずる才智なき人に、其家を繼するは婦人の仁とは、
人は漸生涯の事にて、名は千歲の後に殘る物故、其家名を汚すは其先祖を耻かしむるの第一不孝の甚
しき也、是を以て大祿の家に生れしも、其才智無者は小祿の家に移轉さする也、大祿の家に生れ愚弱
にして武備に拙き者は、其耻辱其者一世に非ず、汚名を千歲の後に流すは歎敷事也、是を以て是を見
れば、長子にても愚成は他に移し、次子にても賢成に國を讓りし例有も、豈大丈夫の仁にあらずや

豊臣家地方經濟之制度

曰に、五畿內國政の遺法を案して、倩豊臣家の地方經濟の古へを稽るに、豊臣家は地數を主とす、法嚴

重にして度嚴なり、境界を正し税法を定め、勸農正直を勵まし、贓吏の奸曲を除き、法定ては百歳の後にいたるまで、諍論の是非を決し、令出ては千里の遠にいたるまで、各々其分を守らしむ、能正理に達し、行ふ所規矩に不レ違、故に國用足る

標にいはく、地數を主とすとは、方六十間を一町として、三百歩を一反となしたるを謂ふ

標に曰、規矩は、天地自然の正法なり

傳にいはく、五畿中國豐臣家治世中、文祿の檢地一反三百歩にして少しも餘歩なく、繩詰なり、糞作九ヶ年平均の法を以て其一ッを三ッに除けり、一ッを糞代に除き、一ッを耕夫役に除き、殘る一ッを貢米と定、永定免に取る故貢の上げ下なく、耕し務るものは利を得る事多く、倦怠るものは利少なし、是を以て農正直を守る故、贓吏も奸曲ならず、亦耕地内或は耕地續に、沼地亦芝地など有ば、荒地にても檢地之節繩入高詰になし置、總高の內にて右の荒地高を引、年貢諸役を除き、殘高を本高となし、水旱風損にても一統三割損までは免引なし、四割損なるときは一割免引を加へ、半毛なる年は三割免引を加ふ、亦古き百姓は居所を屋敷繩に受させ、新き百姓には屋敷を上畑受にな し、亦別に水帳と謂ふ物を造り、其村惣高の內にて畑高を除き、殘田高の內何川用水掛り田反別何ほど、譯何耕地にて何反何畝步と、一筆限に檢地の節水掛りを定め置り、亦穢多・非人・雜家のものを新百姓になし、往來驛宿の間は勿論、在々村方にても右の百姓を置き、穢多・非人其外雜家のも

の往来の節、四民の宿泊する旅籠やへ同宿する事を禁ず、是を止供と謂ふ、また百姓召抱の下男女に到るまで、一日の所作に拘はらず、男は一人にて田畑何反歩作り、女は一月に機何升は何反織、何升は何反織、絲は月に何升、經緯は何反曳何、升は何反曳と定、耕夫を內事に用ひ、行歩夫を耕事に用ひ、織子を繰子に用ひ、繰子を農女に用るの煩法なし、故に農は耕農事に精く、工は工業に賢く、商は商利に疾く、織子は機に精く、繰子は綿繰に疾し、各其業とする所精功にして人に勝る、是すなはち人性の生稟たる自然の性に叶ふ故なり、能其正理に達し何事も行はれし故、自づから國用たる

標にいはく、九ヶ年平均の法其一ッを三ッに割とは、たとへば初年一歩に穀三升を苅、次どし三升五合、次年二升九合、次年三升一合、次年二升三合、次年三升四合、次年三升、次年二升、九ヶ年日三升なれば、九ヶ年合二斗六升二合なり、是を九ヶ年の九にて除れば、一ヶ年に付二升九合一勺一トと成、此一勺一トを捨、二升九合を法として一反三百歩へ乗ずれば、八石七斗と成、是を五合四勺五才四摺にして、分米四石七斗四升五合と成、是を三に除れば一石五斗八升一合六勺となる

標にいはく、本高とは、貢納高を謂ふ、五畿中國の法は村方千石にては納高千石なり、故に是を本高と謂ふ、關東は是に異なり、登り高を高詰になしたる故に夫へ取米を附、是を毛高と謂ふ、毛高とは、立毛高と謂ふ事也

標にいはく、新き百姓には屋敷を檢地の節上畑受に定、其群れ居る所を俗に是を出頭地の內と謂ふ

標に曰、今に止倶百姓と謂ふて、百姓の內にても男女の緣組を嫌ふなり、然れ共當時は猥になりて、穢多・非人・乞食・鮱・猿引・力若防御坊の類ひまでも、往來の節に四民と同宿をなし、不淨を加ふる事忌度事也、今驛宿の間にあいの宿と謂ふ所には、多く穢多・非人のあるは、是昔の止倶成べき歟

標にいはく、武田家は人をつかふに日を以てし、豐臣家は人を遣ふに月を以す

標にいはく、織子とす、織女なり、繰子とは、木綿繰女を謂ふ

標に曰、男女共等の別ありて、男女席を異にするの別なし

註にいはく、豐臣家までは一反三百六十歩也、一反三百六十歩成ときは一町三千六百歩にして、方一町にては畦畔の歩なし、故に六尺五寸の繩を用ひて方六十五間となる、然ときは天數に合して、殘り六百歩を畦畔となし、地類を主とす、法とは、檢地繩入を謂ふ、文祿の繩入嚴重にして少も餘歩なし、亦山林にいたるまで繩を入れ町・反・畝・歩を定、納米を定め置たり、亦耕地內或は耕地續の空地は繩入高詰也、亦屋敷は餘歩を加ふる故に、別に竹藪の反・畝・歩を改め、其畝歩に應じ別に竹役上納をとり、其法嚴重也、然れ共法嚴なる時は境論なし、法緩なる時は境論多し、其譯一反三百歩成に三百二十歩もあり、三百六十歩もある時は正をとる所なし、是を以て境論多し、故に法は嚴なるを尊む、又度とは、石盛取箇附を謂ふ、豐臣家の法は度も亦嚴なり、其故は武田家は土性に因

りて其位を定、故各々三等の差ひあり、豊臣家は土性にかゝはらず、其村の老農を集めて、數年其田畑立毛登り高の過不足を議論させ、決斷のうへ一より三までは上、四より六迄は中、七より九までは下と石を定、石盛は九ヶ年實作り平均の法を以て、登り方九石に當る所は、是へ五四五四の法を乘じ四石九斗八合六勺也、是を三ッに除れば一石六斗三升六合となる、是を年貢納高と定置、年の豊凶にかゝはらず永定免成るは、度嚴なる事斯の如し、亦境界正しき事は前に述る如く、山林までも稅法にかゝはる所は繩入にして、田畑地續は空地にても繩入なり、是を以て境界の正しき事押て知るべし、亦稅法も檢地の節、上田は一反に付何石何斗何升何合、中田・下田・上畑・中畑・下畑・屋敷其外桐畑・萩畑・萱畑に至るまで初に納米を定め置、亦大豆、稗其外種品に至るまで、納品は高百石に付何程納と定置、年の豊凶、種品の高下にもかゝはらず、定式直段を以て代米にて渡し、亦屋敷は繩餘歩を加ふる故に、別に竹役上納と謂ものを定置、竹篁一反に付竹束何十束と上納也、其法繁多なる故爰に略す、如ㇾ斯稅法定有故に、農を能務るものは穀を得る事少なし、亦諸品定式直段を以て上納代米わたし成故過不及なし、依て穀を得る事多きものは富み、穀を得る事少きものは貧し、是を以て自然勸農正直を守るの外他事なし、勸農正直を守る故に、賄賂を以て貢の上げ下げ、亦は諸納物の高下に依て利潤を貪る事不ㇾ能、また境界嚴重なる故、たとひ地所異變流地などに成ても、五町の流地を八町九町と僞り欺く事能はず、これを以て贓吏も賄賂を掠る事不ㇾ成、是を以て是

を見れば、境界正敷税法を定、贓吏の奸曲を除き、勧農正直を励ましむるなり、亦境界厳重なる故、後世に到り高違・位違・字違など出來ても、檢地帳を以て地押速かに分る也、亦用水不足にて水論など有ても、檢地の節水掛りを定置ゆへ、水帳を以て是非を分れば事明らかなり、亦百姓新古を論じ、動もすれば訴に及事有も、檢地帳にて屋敷受と畑受と明白なる故に、正疑決する事詳かなり、其外豐臣家の制度繁多なる故爰に略す、是を以て是を見るに、法定りては百歳の後に到るまで、諍論の是非を決するなり、亦人を遣ふの法も、各其性の長ずる所を以て其業を勤めさする故に、其業とする所他に勝る也、其他に勝れる才を以て其役に居、其事を指揮する故に、一度令を出す時は千里の遠に到るまで、己々が分を守り務る事少も怠るものなし、是を以て彼につかひ、彼を以て是に遣ふ如は、一年の所業精不精を正すに因なし、此故に法を定置、亦是に令を出して其賞罰を糺す事厳重也、令一度出るときは千里の遠きに至るまで、其禁を犯すものなし、又能其性に隨ひ人を用ひ、丈尺に私なく、法令の正敷は則ち天地の正理に達し、行ひ天地の規矩に違はざるなり、規矩を曲るは賊也、規矩を曲る時は正をとる所なし、一反三百歩と定たる所に三百五十歩有るは、則五十歩規矩を曲げたる也、亦法を緩くするを仁と心得たるもあれど、婦人の仁にして丈夫の仁にあらず、丈夫の仁は正眞を教、婦人の仁は僞り欺くことを教るの基なり、能自然の正理に違はざる故、豐臣家御治世天正九年より文祿三年迄、漸十四ヶ年の內、姬路・大坂・二條・淀・伏見五ヶ所の城、其外

大佛殿或は三條・五條石橋迄も悉く造れり、治世にても難き事ならん、況や亂世のとき右の物入などは、上下衰へ疲れ國用乏しかるべきを、能く正理に達し行ふ故、所規矩に不ㇾ違故、國用大いに足る

標にいはく、天數による時は地數に不ㇾ合、地數に因る時は天數に不ㇾ合、しかれども三百歩を一反と定めし法は良法ならん

標に曰、豐臣家の法は、餘國にいはゆる山の手小もの成と謂るものとは異なり、小物成に何山小物成何程と定めたり、此法は何山納米高何程、此町・反・畝・歩・何町何反歩と定めたる法也

標にいはく、屋敷は四壁の竹木を免ず、故に古き百姓は屋敷受、新百姓は上畑受ゆへ四壁なし、屋敷に四壁の竹木を免ずる時は、山林竹木免許の古法辨じ難し、然れども其法異なり、山林竹木免許は竹木數尋にして、其枝葉蔓りて田畑の蔭翳をなすも不ㇾ伐、屋敷の四壁は其丈屋を過るは伐る、所謂木屋を過るは伐るべしと謂ふ古語に基きたるなるべし

標にいはく、武田家の法は上田一石九斗なれば、中田一石六斗、下田一石三斗と、各々三等の差ひ有て、亦石盛に升合なし、亦毛高なり、豐臣家は升合を加へて本高也

標にいはく、大豆・稗等の納は、高百石に付大豆一石、亦は一石五斗、稗は五束、亦は十束などと定式あり、右代米は豆一石に付米一石二斗、亦は一石三斗、亦稗十束に付米三斗、亦は三斗五升抔と、

其國に依り別法有

標に曰、竹役の法は其竹篁によりて、一反に付五束納、亦は六束納、また六束半などと納方の品あり

標にいはく、屋敷へ餘歩を加ふる法は、屋敷は不毛にして穀を生ぜざる故也、穀を生ずる事なき地より貢をとらるゝ時は、百姓日々に勞れ衰ふ、是を以て其生ぜる物を取りて、其不生をとらざるは正理なり、好古の士屋敷へ餘歩を加へたるに疑念を生ずる事なかれ

標にいはく、空地亦は川附沼池等繩入なき時は、流地のとき跡調に正をとる所なし、故に殘り總高を改るより外なし、然るときは費レ時多し、是を以て奸曲の民上を欺き言を僞はり、隱田をする事多し、是が爲に空地まで繩入をするなり

標にいはく、古き百姓を屋敷受となし、新き百姓を上畑受とする法は、古舊忘れざれば民非からざるの意歟

標にいはく、令の行はれざるは、賞罰正しからざるより起る、上に贓吏あるときは、賄賂の爲に罰なきを罰し、功無を賞し、賞罰明らかならざる故、昨日觸出し事も明日は是を守るもの稀なり、守らざるは法を侵すなり、其侵すものを不レ罰故、俗にこれを三日法度と謂ふ、是を以て是を見れば、法令嚴重なるを良法と謂ふべし

標にいはく、令を出して其令嚴ならざるは、下に賊吏ある故なり

標にいはく、圓を作るものは規を用ひ、方を造るものは矩を用ひぬ、もし是を曲げば方圓の形をうしなはん、其法を失ふ時は政令行はれず、是を以て制度を侵すものは賊なり、その賊は婦人の仁より起る

標にいはく、正理に達する事は名を正すにあり、名正しき時は出入明らか也、出入あきらかなるときは國用足る

標にいはく、地有ば人あり、人あれば食あり、食有ば財あり、財あれば國用足る、其國用の足れるを以て、民を移し地を開らき、家を富し國を豐かにせば、千歲不朽の寶ならん

封事

藤田幽谷著

封事（第一、寛政九年丁巳）

藤田一正著

臣聞未㆑信而諫、則人以爲㆑謗㆑己、唯明主能愛㆓盡言㆒、雖㆓狂夫之語㆒必察焉、臣一介書生、學識淺陋、不㆑通㆓時務㆒、而愚忠之性、稟㆓諸天賦㆒、不㆑顧㆓罪戾㆒、敢陳㆓瞽說㆒、伏惟閣下、常山降㆑神、東海鍾㆑精、挺㆓不世出之姿㆒、纂㆓先君之緒㆒、既資㆓聰明之質㆒、而加以㆓學問之力㆒、體㆓慈仁之德㆒、躬㆓恭儉之行㆒、不㆑嗜㆓酒色㆒、不㆑耽㆓聲樂㆒、如㆑圭如㆑璧、無㆑有㆓瑕玷㆒、常講㆓文藝㆒、習㆓武技㆒、以率㆓先士丈夫㆒、蓋義公以來一人而已、誠非今之諸侯所㆓能冀㆓望萬一㆒也、是以令聞廣譽、偏㆓于天下㆒、豈不㆑盛哉、一國之治、宜㆑無㆓遺憾㆒、而今國用歲窮、士風月衰、民力日困、而政之大體壞矣、朝四暮三、支㆓吾目前㆒、譬猶㆓勞瘵羸疾之人㆒、呼吸喘息、幸延㆓旦夕㆒、若一有㆓外邪乘㆒㆑之、則雖㆑有㆓良醫㆒、不㆑可㆓復藥㆒、束㆑手待㆓其斃㆒耳、閣下修身齊家之道、無㆑媿㆓聖賢㆒、而治國之政、反不㆑如㆓管商㆒、豈學問與㆓政事㆒二㆓其本㆒、而擇㆑術有㆑未㆑精耶、不㆑然何其相反之甚也、一國之人、羣疑衆怪、遂至㆓相謂曰㆓今之政是耶非耶㆒、我公之賢、顧不㆓之知㆒乎、知而故爲㆑之、則我公之學問、不㆑過㆑爲㆓干㆑譽獵㆑美之具㆒、而其實無㆑益㆓邦家之治㆒也、豈不㆑悲哉、以㆑臣觀㆑之、此非㆓閣下之過㆒、而儒者之誤㆑道、迂闊腐爛、有㆓以致㆒㆑之也、自㆑古將㆓大有㆒㆑爲之君、必欲㆘立㆑功興㆑利、以貽㆓子孫之

業、成當世之名、而後世儒者、徒談道德仁義、諱言功利、富國强兵、黜爲霸術、其常言曰、仁人明其道、而不謀其功、正其誼、而不計其利、殊不知上古聖人之立道設教、利用厚生、在正德之先、而六府三事、謂之九功、孔子論政、亦以足兵足食使民信之爲先、則聖人之汲々乎功利可見矣、惟後人志趣之卑、率狃於近功小利、而不知反其本、故鄙之耳、其實功利何可諱哉、且古人之所謂正心修身者、亦將以有爲也、豈徒使心如明鏡止水、身如木偶泥塑之謂哉、大學一書、主於治國平天下、而後儒之衍其義者、僅至齊家而止、謂治國而下、特擧而措之耳、夫治平之以修齊爲本固也、然治平之略、談何容易、當西山之作此書、宋之衰弱極矣、一切不講施設之方、而日擧而措之、不亦踈乎、大抵後儒之學、高者談大極無極之旨、細者究一草一木之理、論事則拘先王之陳迹、常昧變通之機、閣下之聰明絕倫、蓋見其如此、遂謂儒書可以資脩齊、而不可以施於治國、於是治國之術、一切權時之宜、不用儒者之說耳、夫道有升降、政從沿革、閣下不取鄙儒小拘之說是也、然懲鄙儒之末弊、而不由聖人之大道、是猶聞噎廢食也、且其所以爲權時之宜者、恐未必悉得其宜、而或雜以術數、察々好詳、乏正大光明之氣象、此其所戊以圭璧其行、屢下德音、而未信孚於上下也歟、夫聖教中、自有正大光明之學、而有變通神化之道、何必他求之爲、人君之存心、開誠布公、如青天白日、溫厚如春夏、嚴凝如秋冬、雨露之恩、雷霆之威、並行而不相悖、則人人莫不畏服愛戴矣、苟用區々之術數、陰秘權譎、使人不測、則似深而反淺、不啻智者善窺其

意一、而人心之靈、雖二愚婦一亦或疑レ之矣、差レ之毫釐、謬以二千里一、可レ不レ愼哉、聖人之道高矣、美矣、莫三以尚二焉、諸子百家之術、惟老子深遠矣、其術專以レ柔爲レ尚、而陰謀秘計、皆由レ此出焉、用二之衰世一、不レ爲レ無レ功、惟譎詐之習、大壞二人之心術一、不レ可レ不レ察也、閣下豈或好二其術一乎、臣進見之初、語先及レ此、臣雖レ未レ欲三遽犯二躁替之愆一、然君語所レ及、敢言無レ隱、極斥二其流二於譎詐之弊一、因欲レ推下及發二於其心一害中於其事上之由上、然自顧薄劣、齡未レ滿レ壯、闇々乎發二儒者臭氣一、彰二主之過一、以訐二忠直一、豈臣之所レ願哉、是以默々竢レ時耳、然私心竊以爲政之弛張、寬猛相成、而治性之道、亦當二剛柔相克一、蓋閣下高明之性、固可三以レ柔克一、而亦未三必能無二沈潛之失一、最宜二剛克一、或用二老子之皮膚一、而不レ究二其要一、則其所二以施二於事一者、恐流二於純柔一、而委靡不レ振之形成矣、臣下化レ之、則闇然媚レ世、徒託二和光同塵一、而剛毅正直之風、日以沮喪、國家之事、不レ可二復爲一矣、今日陵遲之勢、正坐二是故一也、可レ不二長大息一哉、臣年少氣鋭、不レ堪二憤激一、每欲三犯レ顏進說一、然抱レ史侍讀、所レ問不レ過二摘章尋句之事一、胸中所レ蘊、欲レ發無レ由、耿介之性、不レ能下苑舌固聲、擬迹投足、俯二仰一世一、以取中榮達上、以爲讀書學レ古、無レ補二當世之務一、修レ身愼レ獨、不レ能レ格二君心之非一、小廉曲謹、釣レ名弋レ利、使下人謂中儒者獨善二其身一、而無上レ益二國家一、是可レ羞也、不レ若下混酒豪放、稱二狂生一之爲上レ愈也、業在二文史一、苟無レ曠二其職一、斯可三以免二素餐之罪一矣、於レ是卓犖不羈、特或微行、夜飲二狭邪之間一、俗士側レ目、遂照二蠱心粉黛者一同レ科、固所レ不レ恤也、退而自念、寄二愁天上一、埋二憂地下一、割二散五經一、滅二裂風雅一、其於二輕世肆志之計一則得矣、然不レ責二難於一君、而

吾君不能、是老氏爲レ己之術、豈人臣敬レ君之義哉、臣既惡二老氏之學一、而又傚二其尤一非二臣素志一也、是以不レ能二自已一、復爲二閣下一竭二蹇々之誠一、而汚行之餘、論レ學談レ道、閣下必罵以爲二屠兒禮佛之比一、然臣自二結髮束脩一、于レ今十年、甚信二古人一、慷慨自奮、雖下近來不レ拘二細行一、若上レ不レ可三繩以二法度一、然大義大節、確乎自守、假使納二履瓜田一、以負二衆人之譏一、豈至三遽失二其本心一哉、詩云、采レ葑采レ菲、無レ以二下體一、閣下棄二其人一、而取二其言一可也、臣職事稍竣、歸鄕有レ日、卑賤遠臣、辭二公府一、望二見顏色一、不レ知三其復在二何年一、今而不レ言、何時可レ言、敢輸二寫心腹一、吐二露肝膽一、以效二千慮一得之愚一、夫今代以レ武立レ國、犍橐以來、幾二百年、海內晏然、莫レ有二鼠竊狗盜之警一、民至二老死不一レ知二兵革一、太平之盛、開闢以來所レ無也、武人兵士、世官世職、酒肉之池、歌吹之海、蕩二耳目一、治二筋骨一、天下滔々醉生夢死、忘二戰之危一、亦開闢以來所レ無也、而北溟黠虜、窺二窬神州一、常有二圖南之志一、奈何今人小智不レ及二大智一、妄以二斥鷃之見一、哂二大鵬之所爲一、所レ謂厝二火積薪之下一、而寢二其上一、火未レ及レ然、國謂二之安一、當今之勢是也、天下之憂、孰甚二於此一、而我藩負レ海作レ邦、與レ寇隣接、尤不レ可三以無二豫備一、豈閣下因循姑息、玩レ歲愒レ日之時也哉、三家鼎立、海內巨鎭、而閣下德望之隆、天下所二倚賴一、異日幕府或有二諮訪一、則閣下空可二循默一哉、然斯乃廟堂之秘籌密策、固非二草野之人所一レ宜二輒言一、而閣下命世之英略、當四既有三熟二算於胸中一、則固無レ竢二狂愚若レ臣者之言一矣、獨一國之政、至近至切、而上下貧弱、離心離德、由二今之道一、無レ改二今之俗一、一旦緩急、豈足レ折二衝方面一乎、孫武有レ言、勿レ恃二其不一レ來、恃三吾有二以備一、願閣下慨然發レ憤、用二剛克之德一、施二

更張之政、無為婦人之仁、無事匹夫之諒、惠而不費、與民同好惡、激厲群臣、黜陟必行、則國可富、兵可強、而民信可立矣、語云、耕當問奴、織當問婢、今臣不過一介書生、而喜論兵事、闇下必咲以為畎畝習潤之類、是以姑置是、請先論富國、夫興師十萬、日費千金、雖有石城湯池、無粟不可得而守也、故古之欲強兵者、必先富其國、今之人、孰不欲富國、而國之憂貧、歲甚一歲、收斂之務、曹猶捧漏甕而沃焦釜也、凡賣官鬻爵之政、市駔牙儈之術、傷風敗俗、所以失士民之心者、雖知其非、而故為之、豈復以為權時之宜邪、百姓足、君孰與不足、百姓不足、君孰與足、此千萬世不易之格言、然遊諸今世、則為迂遠而濶於事情、知予之為取、政之實也、今人何不察於此乎、苟不務其本、而徒逐其末、國何由富乎、書曰、民惟邦本、本固邦寧、又曰、德惟善政、政在養民、養民有道、其要在扶弱抑強、養老慈幼、禁傘拜戒游惰、簡節疎目、信賞必罰而已、今之為吏者反是、苛細之法、朝令夕更、紛々擾々、莫知適從、而民不信矣、民之爭訟無已、而吏不敢斷、模稜手段、以延歲月、左之右之、聽其私和、而民不畏矣、無賴弟子、怠敖放蕩、莫有圖土著使之法、而聞民之轉移城市者、欲還諸本土、官不肯給移食授農器、則不復趨南畝矣、貧民之苦於逋負者、賣田宅於富民、以免一時搥撻之責、遂得私相賣買、則貧民田纔餘十畝、而常出百畝之稅、富民纔出十畝之稅、而常收百畝之饒、是以富者益富、而貧者益貧、是謂助強而懲弱、民何由殖乎、前年徒錄高年之數、竟不施優恤之典、罪下育子之令、稍已怠檢覈之方、汲々

小利一、變レ貢爲レ稅、以貪二歲入多一、而不レ知二民力不一レ堪、故棄二其田一而不レ耕也、此所二以田野日荒、而賦入歲減一也、故養レ民得二其道一、則多取レ之、而民益勸矣、失二其道一則寡取レ之、而民益困矣、奈何今之不レ知二大體一者、欲レ施レ惠則言二賑恤一、欲レ收レ利則談二聚斂一、賑恤徒費二金穀一、而民不レ被二其澤一矣、聚斂雖レ抽二繭絲一、而國不レ享二其利一矣、牧民之官可レ不レ擇哉、雖レ然今之大弊有レ二、二弊不レ除、則雖レ欲下施二仁政一建中上策上、徒善徒法、何益二於富國一耶、二弊既久爲二邦家之沈痾一、非レ用二瞑眩之藥一、不レ可二得而醫一也、臣欲レ言レ之、恐閣下之駭且怒矣、何謂二二弊一、曰好貨之疾、曰借金之弊、夫好レ貨者名也、借レ金者實也、臣今言レ事、請先二其實一、而後二其名一可乎、昔唐陽城起二布衣一、爲二諫官一、一時言レ事者、紛々然毛二舉細瑣一、以聒二人主之耳一、人主厭二苦之一、而城獨縱レ酒消レ日、時人莫二能測一、賢如二韓愈一、猶以爲レ譏、及二裴延齡爲一レ相、當時之失、莫レ甚二于此一、而嚮之言レ事者、未二肯一言一、城獨出二死力一爭レ之、卒以貶斥、今臣之出身、頗有レ類レ城、而所レ居之職、非レ有二言責一、固大與レ城異、然其志則未二嘗不一レ同也、今之爲レ相者、固無二延齡之比一、而有三一猾吏操二會計之柄一、大姦似レ忠希レ旨承レ意、植レ黨成レ朋、游二說要路一、外挾二富商大賈一、以固二己權一、逞二狡計一欺二君相一、其罪浮二於延齡一矣、凡有志之士、莫レ不二彈指一、而雖下時有中負二泰斗之望一如二韓愈一者上、未レ聞二其一言排一レ之、臣竊慨焉、彼姦人者、居二司會之職一、不レ爲レ不レ久、厶藝之智、不レ能下講二節用之政一、獻中富民之策一、爲二國家一建中永世之利上、乃始建議、借三金於二大阪之富商大賈一、虛而爲レ盈、約而爲レ泰、大阪之金、其息雖レ賤、然胥吏之往來、僮僕之出入、費用不レ貲、借金之數、歲多二一歲一、而其息亦

相借進、遂至奪仕者祿俸之半、以償借金之息、其說以爲獲罪於大阪、則凶年飢歲、無所仰給也、不亦可憫笑之甚乎、閣下之就國也、善敎德澤、士民嚮化、及有奪祿之舉、一國失望、皆竊相謂曰、我公之撫循士民、甘言好語、皆詐也耳、自今以往、勿爲我公所欺也、姦人誤國、罪不容誅、當是之時、一國之人、莫不欲得之而甘心焉、閣下不勝臣民嗟怨之心、不得已而姑使之致仕、柰何執政無識、信彼徒之游說、復起而用之、以三家上士之貴、與市人之賤相周旋、其所爲常在繩墨之外、喪廉恥傷風俗、莫甚于此、而執政不問、執法不糺、以爲非此、則無以能成其事、問其事則不過借金於人而已、夫仰給商賈、權固在彼、而借金必出息、出息彼之所利、則權亦未嘗不在我也、臣嘗游大坂、遇加島某者、因得頗聞當世諸侯貧富、及大坂借金之說、大抵今之諸侯有三等、善自富其國、不仰給大坂、坂之人爭欲出金借之、而不肯借、權常在己、此爲上等、如黑田細川是也、其國雖貧、善借而善歸、人不厭其借、侯家之出息、商家之收利、皆有定額、而胥吏之與其事者、僮僕之掌出納者、因緣朋比、以營己私、此爲中等、如我水戶是也、既不能自富其國、徧借金於人、棄信背約、一借而不歸、借貸不通、無可柰何、此爲下等、如仙臺秋田是也、夫大坂之人、能成素封之富者、恃諸侯之財用不足、而常借其金也、設使海內諸侯、悉不借金、如黑田細川、則不出一二年、而大坂之富商大賈困矣、然而今之諸侯、莫不皆憂貧、故不能一日不仰給大坂、此其所恃以爲生也、故諸侯之欲借金者、苟善借而善歸、則大坂之人、何爲

不肯借乎、由此觀之、則其事情可知也已、韓非有言、長袖善舞、多錢善賈、言有資者之易爲力也、夫善舞者、雖乏美服、宛轉俯仰、態度可觀、況於資長袖乎、善賈者、雖乏産業、隨時廢居、貨利斯殖、況於資多錢乎、其不善者反是、雖有長袖之美、多錢之利、或如木偶人、或將爲守錢虜、何則巧拙之異也、我藩雖不及黑田細川之大、提封四十萬石、不爲無資、善制國用、以成富庶之業、何渠不爲彼乎、閣下命世之姿、當此隆古之賢君、而反不若今之諸侯、善借而善歸、徒取悅於市人、失士民之心、而貫胥吏僮僕之腹、僅稱爲中等、可謂國有人乎、蓋古之善制國用者、量入以爲出、而今則量出以爲入、而猶不足、乃仰給於人、借金之息、積微成大、國之貧弱、歲甚一歲、不及今之時爲之處置、雖徒假幕府之金穀、彼此轉貿、以支吾目前、豈復足以爲長久之利哉、其極必不至更奪士祿增民稅則不止、豈不悲哉、古人有言、貧不學儉、富不學奢、言其自然也、今不借金於人、而減省用度、雖似窮迫、然無後患、且使人君常知用度之不足、而不敢妄費、有司亦或有爲國興利者、借金於人、以虛爲盈、非無後來之憂、而聊有目前之饒、故人君或至妄費、有司亦無敢爲長久之計者、此其利害得失、豈不較然著明乎哉、夫邦家之憂貧、莫甚於斯時、而人君之節儉愛費、亦莫過閣下、竊聞近來、頗有不急之土木、此非彼侫人以約爲泰之效耶、其啓人君之奢心、罪豈淺尠也哉、小不忍則亂大謀、閣下宜斷然斥之無疑矣、夫借物於人、而不肯歸者非也、然自初借金、出息與利、不知其幾、甚至減閣下衣食之供、奪仕者歲

俸之半一以償ヒ之、其立ニ信於ニ商賈一、亦可ニ以已一矣、古之設ニ四民一、各有レ所レ業、商賈之職、不レ過下彼此貿易、以通中有無上而已、今之富商大賈、則異ニ於此一、出レ金收レ息、座營ニ素封之業一、錦衣玉食、王侯不レ若、天下無レ事、則乘ニ諸侯之拙一、以牟ニ大利一、天下有レ事、則莫下肯養ニ一卒一出ニ一馬一、以赴中邦家之急上、豈非ニ國之大蠹一乎、貪ニ我士民一、以資ニ彼輩之富一、何以異レ於下割ニ赤子之肉一、以飽中豺狼上哉、違レ道而干レ譽、君子不レ取也、立ニ信於商賈一、爲ニ行吏僮僕一謀則得矣、苟爲ニ邦家一謀、則豈可下貪ニ虛名一而受中實禍上哉、

然則大坂之金、宜レ勿ニ遽歸一、勿ニ遽歸一者、非レ不ニ肯歸一也、世俗所レ謂年賦之說耳、指ニ其息一而償ニ其本一、雖レ本亦以レ漸償レ之、則今之國用、可ニ以少舒一矣、傳曰、國君含レ垢、願閣下忍而行レ之、勿レ恤ニ人言一也、夫既與ニ大坂一絕、則一國之用、宜ニ量レ入以爲一出、而所レ出之數、多レ於レ所レ入、宜レ思ニ減省之方一、會計之數、有司所レ秘、臣等不ニ敢與聞一、故不レ得レ言ニ其增損伸縮一矣、然苟得レ與ニ聞其說一、則豈無下可レ加ニ減省一者上乎、節儉之政、行レ之二三年、其效可レ見矣、牧民得レ道、民務ニ稼穡一、不ニ數年一、而所レ入之數亦倍ニ於今一、富國之業於レ是乎成矣、過レ此以往、國有ニ三年九年之蓄一、亦何難之有、其所ニ困苦一、僅二三年、而有ニ百世之利一、所レ謂暫勞、而永逸者也、閣下何憚、而不ニ敢爲一乎、但二三年之間、所レ出未ニ遽減一、所レ入未ニ遽增一、假ニ幕府之金穀一、亦不レ足ニ以給一レ之、則宜三暫借ニ國中富人之金一、閣下苟革ニ弊政一、使下一國一曉然知中其與ニ大坂一絕上、則國中之人、孰敢有乙不レ顧下出ニ其儲蓄一、以助中國用上者甲乎、臣請爲ニ閣下一保レ之、今之爲レ吏者、亦豈慮不レ及レ此乎、借ニ國人之金一、則不レ足三以爲ニ己功一、而借ニ諸大坂一、則利實歸ニ于己一、故

不二敢言一耳、閣下之明、何不三之察一也、且臣所レ謂借二金國人一者、不レ過二二三年之間一、而非三以レ暴易レ暴、永以爲二常一也、苟能行レ之、則國計給矣、古人有レ云、有二非常之人一、然後有二非常之功一、非常者、固衆人之所レ驚也、故節用之政、興利之策、可三與樂二成、而不レ可二與慮一始、雖レ然使下二閣下一好貨之名不上レ除、則人心不レ服、雖レ有二良法一、不レ可二得而行一也、夫好レ貨而與二百姓一同レ之、古之道也、故天子藏二於四海一、諸侯藏二於其國一、大夫藏二於府庫一、士庶人藏二於筐筥一、人君之好二私財一、如下唐德宗有二瓊林大盈之庫一、垂中譏靑史上、皆閣下之所二熟知一也、閣下之賢、豈宜三實有二此疾一乎、惟其迹未レ免レ涉二衆人之嫌疑一、故負二此不韙之名一耳、蓋國用之經費、會二計於有司一者、有二定額一、而公宮之雜費、有司之進二奉於閣下一者、亦有二定數一、閣下恭儉之性、不レ欲二妄費一、菲二飮食一惡二衣服一、就二其定數之中一、常加二減省一、其所レ餘者、留爲二內帑一、或供二不時之頒賚一、或備二非常之賑給一、是以一國之人莫レ不レ知三閣下有二內帑之藏一矣、夫明主愛二一顰一笑一、況金幣乎、其不三妄賜二左右一是也、國計不レ立、國用無レ節、雖レ有二萬金一、用レ之輒盡、其不レ出二附有司一亦是也、然內帑之金、既爲二閣下之私財一、永積而不レ散、則不レ知者以二閣下一爲レ嗇二於財一矣、凡賞二賜功勞一、振二貸貧窮一之類、有司沮以二國用不一レ足者、十常八九、而不時之頒賚、非常之振給、或偶出二於內帑一、則一國之人、咸疑二府庫之虛、而筐筥之盈一矣、聚歛言利之臣、悉在二顯列一、而獻金納貲之徒、皆獲二美官一、則民之蚩々、胥然咨曰、我公有二好貨之疾一、朘二士民之膏血一、而獨富二筐筥一、故儉約吝嗇之別、損上益下之義、雖三甞面諭二諸吏一、然不レ從二其所一レ令、而從二其所一レ好、不二其然一乎、嗚呼今世言路壅塞、下情不レ通、

閤下其亦知民間有此說耶、夫仁者惠而不費、與民同好惡之謂也、取諸其懷中而與人、人情不能無愛惜、而及物之惠、亦不廣矣、然則恩澤之出內帑者、不足以獲衆人之歡心、而適足以成好貨之醜名矣、苟使一國之人、愛戴閤下如父母、則一國之財、閤下之有也、雖無私財、何害於事、閤下盍速散之、以示其實無好貨之疾乎、然四境之內、不可戶說而人喩、散之不得其宜、雖散而盡之、猶無益也、散之有道、臣不欲贅言、要之使一國明知閤下無好貨之疾、則節用之政、與利之術、惟閤下之所欲爲、夫然後富國之計得、而强兵之略亦可施也、所謂强兵者、豈唯器械犀利、甲冑鮮明之謂也哉、謂士民之有勇知方、而可以用也、今小大憂貧、而衣食是急、何暇脩甲冑器械、上有好柔之失、則一國之人、如脂如韋、巧言令色之風日盛、而剛毅木訥之俗月衰矣、上有好貨之疾、則一國之士、如商如賈、奔競貪利之徒盈列、而禮讓廉恥之節掃地矣、黜陟失宜、故賞不足勸、而罰無所懲、語曰、以不教民戰、是謂棄之、教養無素、法令無信、兵將不相識、上下不相親、臨事用之、豈不危乎、夫上之化下、猶風之靡草、東風則西靡、西風則東靡、好柔之失、好貨之疾、臣既言之矣、苟能去之、仁漸義摩、崇尚名節、則使士民死長上矣、今北虜之警、歲切一歲、而當路之人、率喜無爲、常鎭以靜、以臣觀之、其不知時甚矣、如寬永天草之變、雖世既屬太平、然去戰國未遠、驍將悍卒、不甘老死牖下者、所在有之、桀驁諸侯、睥睨時變者、未必無之、一旦搶攘、將激天下之變故、幕府雖速運方略、發兵征勦、然視如鼠竊狗

盜、不足以爲憂者、時或游獵、以示無事、此靜以鎭之術也、今海內皆溺於宴安矣、以已甚人、夏蟲疑氷、若有談兵事者、笑以爲狂、皆曰、苟當吾世無事是可也、遑恤其後、故英主在上、皷舞作興、猶恐其偸惰不振、而乃用鎭靜之術、是猶敎猱升木也、不亦惑乎、孫臏減竈、而虞詡增竈、豈好相反哉、各從時宜也、昔北條氏爲政鎌倉也、執蒙古之使、而斬其首、以明示與彼絕、乃令諸州曰、蒙古將襲我、不可不備、天下將士、宜務儉約資軍用、於是將士人々爲備遂得殲彼十萬之衆於西海、雖賴宗社垂佑神風助威、抑亦北條經略得宜之力也、前年虜使之來、甘言重幣、以誘我、恫疑虛喝、以威我、廟堂無人、禮而遣之、偸一日之苟安、而惰天下之士氣、堂堂幕府、曾不若北條乎、閣下縱不能建議于幕府、以救既往之過、亦何可無激勵一國士大夫之術乎、夫在無事之日、爲敎戰之事、固有平地起波之嫌、然有爲之君、安不忘危、必作內政、以寓軍令、自有北虜之警、幕府屢營下令、使緣海諸侯豫備不虞、此强兵之良機、不可失也、閣下何憚、而不敢爲乎、臣竊爲閣下惜之、夫以閣下之明、用意政事、而治功未立者何也、豈閣下率作興事之勤、或有所未至耶、將臣鄰輔翼之力、或有所未足耶、蓋閣下聰明博學、多材多藝、皆群臣所不敢及也、而自執政以下、皆受敎於閣下、閣下目指氣使、而群臣奉承、莫或敢違、大臣之當國者、不學無術、足己而不問、其他則碌々備員、奉行文書而已、閣下發言、自以爲是、而群臣莫敢矯其非、大夫發言、自以爲是、而士莫敢矯其非、詩云、具曰予聖、誰知烏之雌雄、國事之

曰レ非、固不レ足レ怪、而閣下好詳之失、不レ能下明二委任一以責中成功上、或至下以二人君一下侵中有司之職上、則群臣畏レ罪、救レ過之不レ遑、孰敢有下展二布四體一竭二力其職一者上哉、書云、元首叢脞、則股肱惰、不二其然一乎、周任有レ言、陳レ力就レ列、不能者止、今自二大臣一至二胥吏一、皆不三敢專力二其職一、職事有レ失、則曰、是非二我罪一也、我有レ所レ稟レ之也、委任不レ明、黜陟莫レ施、故委瑣齷齪之人、反得レ久二其任一、累レ歲積レ月、增レ祿進レ位、奇偉倜儻之士、常苦二於掣肘一、而不レ獲レ竭二其材一、或以二直言忤一レ旨而斥、夫爲レ政在レ人、而用レ人之失如レ此、閣下雖レ有二憂勤之心一、而未レ得レ致二治之功一者、不二亦宜一乎、夫講レ學脩レ德、當下去二虛文一而務中實效上、閣下無二有爲之志一則已、苟有二有爲之志一、則莫レ若下速下二罪レ己之令一、以收二士民之心一、開二直言之路一、以通中上下之情上、勵二大臣一、集二衆思一、盡二忠益一、先二有司一、赦二小過一、擧二賢才一、循レ名責レ實、黜陟必行、如レ此而不レ懈、則其致二富强之業一、可二翹レ足而竢一也、臣不レ堪二至願一、嗚呼閣下聰明博學、固已絕倫、而春秋既强、更嘗亦多、臣以二年少初學、極不レ解レ事之人一、敢上二此書一、煩二瀆左右一、豈非下所レ謂持二布鼓一過二雷門一者上耶、然孺子之歌、聖人聽焉、芻蕘之謀、先民稱焉、臣雖二愚賤一、不二猶愈下於三芻蕘與二孺子一乎、夫口之所レ不レ能二輙陳一者、既筆二諸此書一、而意之所レ蘊、亦非三筆端之所二能盡一也、臣之獻言、止二於今日一、閣下幸寬二狂妄之誅一、賜二燕閒之暇一、使下臣得丙進盡二其餘說甲、則雖三退而蒙二重戮一、所二甘心一也、臣今陳二狂言一、左右或以爲二訕レ上賣一レ直、臣雖レ贛乎、豈敢觸二不測之逆鱗一、以徼二不急之虛名一哉、雖レ然臣之愚忠、素不レ欲二顯諫一、故平居混レ酒絕レ口、不レ談二時事一、跅弛稱爲二狂書生一、

非ニ復昔日循レ規履レ矩之醇儒一、豈復敢有ニ一毫自進之志一、唯閣下省察、干ニ瀆威尊一、冒ニ犯忌諱一、激切屏營、歸レ舍待レ罪、臣藤田一正昧死百拜上

有感二首

莫ト將ニ弟子一累中其師上、維昔荀卿有ニ李斯一、抗直能攻明主短、佯狂甘、受俗人疑、正當憂國忘身日豈是低頭拱手時、志大才疎成ニ底事一、上書未レ報報ニ歸期一

稽古不レ貪當世榮、愚忠抗疏一身輕、君臨勿レ恃區々術、駕馭何須察々明、奇策竟無ニ能富レ國、空談豈合レ說ニ强兵一、佯狂混酒猶豪氣、贏得青樓薄倖名

右寛政九年丁巳、先生年二十四、祗ニ役江戸一、所レ呈ニ文公一之封事也、而議論抗直、頗觸レ諱坐ニ不敬一、奪レ職歸ニ鄉里一、謝レ客家居、不ニ復來ニ往人間一云

栗田寛識

封事（第二）

上書

此度御家中一統へ厚き尊慮を以被二御出一候、御直書の內、祖宗御舊制の意味を御尋、殊更先公御遺志を御紹述被レ遊候て、風儀を正し武備を整へ、士民の御撫育御行屆被レ遊候て、天下の御見はり、諸家の目當とも相成候樣にとの深遠なる思召、大本の所御忠孝の至誠より御發被レ遊、尙又言路を御開き、聖賢人に取て美を爲すの道を以て、衆人の忠益を御待被レ遊候事、千古盛事、誠以難レ有御儀奉レ存候、假令近年の內御入國被レ爲レ在候共、有尊慮の通にさへ參り候はゞ、大要の所無二此上一御儀と奉レ存候、古先聖人經世の大道。正德。利用。厚生、これを三事とし、孔子衞に適く時、庶。富。敎の言あり、又它日政を論じて「足レ食足レ兵民信レ之」との玉ひしも、皆同一揆にて御座候、此度被二仰出一候風儀、武備士民の御撫育、即ち聖人の三事に御符合被レ遊候間、此上此三事を御推廣め被レ遊候所、專要と奉レ存候へ共、積弊の餘り、名實紊亂いたし、考績の法も御施被レ成兼候間、先づ聖人正名の義に本づき、綱維を御振擧被レ遊候はんには、祖宗御舊章の意味、能々御尋被レ遊候はゞ、三事の御政敎、段々に御行屆可レ被レ遊候、乍レ去庶。富。敎の手段、容易の談には無二御座一候、君上の御盛德を以てすら、人に取て美を爲すと被二仰出一候上は、まして執政執事の面々も、誠心を開き公道を布き、衆思を集め忠益を廣め候て、

君上の御美意を將順仕り、御德澤流行仕候樣と、不二心掛一候ては、不二相濟一事と奉レ存候、威公初て老中職を命ぜられし時、被二仰出一候如く、日夜心にかけ、御爲を存じ、身がまへ仕らず、我慢をやめ善に從ひ候樣、また義公御襃封の最初に、御識被レ遊候如く、酒家の人嚙む狗に成不レ申樣に有レ之度ものと奉レ存候、大學にも論候通、大臣はたとへ它の技能無レ之候とも、其心休々焉として如レ有レ容、媢疾の心さへ無レ之候はゞ、一國の賢能悉く上の御用に相立候事故、あながち何事も自分の智惠を出し候にも不レ及、只治典の大要を惣括り候迄にて可レ然奉レ存候、乍レ去御初政の砌、御剛明の御英斷を御發被レ遊候て、上下目を覺し候大機會に乘じ候て、舊染汚俗御一新不レ被レ遊候ては、執政の面々は一日一日と因循仕り、折角被二仰出一候難レ有御儀も、虛文の樣に罷成候ては、何程御明德被レ爲レ在候ても、新民の御功業十分に御行屆被レ遊兼候哉奉レ存候、庶・富・敎の手段も、彼是可レ有レ之候へ共、まづ「敬レ事而信、節レ用而愛レ人、使レ民以レ時」の三句至て近が如くにして、實に深遠の意味御座候事、古人も被二申置一候、今日事業の上にて、手短に了簡仕候所は左に相述候、三職の條理を正しく、其紀綱をば上より御取締め被レ遊候上、才能の士を御引立被二召仕一候はゞ、兵食共足り候て、敎化の行はれ候儀も、難事にも有レ之間敷奉レ存候

第一　御用の日帳方を御糺させ、精密に取調候て、政令の發する處を正敷被レ遊候事

第二　大吟味方の會計を明らかにして、理財の節度を制せられ、上下共に不足なく、仁政行はれ候

樣に被ㇾ遊候事

第三　御郡方の課條を御立被ㇾ成候て、牧民の吏眞實に治績有ㇾ之、邦本を固め候樣に被ㇾ遊候事

一　御用の儀、執政執事の面々心力を盡し、相談の上、舊章を尋ね、時宜を計り、其事の大小輕重により、或は御前の尊慮を奉ㇾ伺、或は自分々々にて致ニ判談一候て、一切の政令始終御摸通り宜敷樣に、可ニ心懸一候事勿論にて、日根役の如きは、もと書記の賤職大議に與り候筈は無ㇾ之候へ共、中葉已來歷々の御役人中に、賢能乏く相成候に隨ひ、故に大體と申もの有ㇾ之事をば相忘れ、夫々に委任して成功を責候仕方は無ㇾ之、簿書期會無益の瑣細を要務と心得、一體身がまへを致し、作爲に心を盡し候事薄く罷成候故、何事も已前の御見合と申事にて、責を塞ぎ、又は小量にて我慢をやめ、善に從ひ候事無ㇾ之、衆人の了簡を盡させ候事を嫌ひ、何事も自分の下に立候自由に手に叶ひ候者へのみ、相談仕候より起て、書記の職輕きながらも、大抵吏務にも練熟仕候故、遂に入幕の賓と相成、選叙の任、號令の發、すべて御政事の儀此職にて取調候樣罷成候事、自然の勢にて御座候

これを「權在ニ胥吏一」と申候て、古人の論にも「事繁而官不ㇾ勤、故權在ニ胥吏一、欲ㇾ去ニ其弊一也、莫ㇾ如ニ省ㇾ事而勤一ㇾ精、省ㇾ事莫ㇾ如ㇾ任ㇾ人、勤ㇾ精莫ㇾ如ニ自公率一ㇾ之一」と申置候、然ば在位の君子眞實に事を敬候はゞ、精を勵して上より下を率ゐ候は勿論「居ㇾ敬而行ㇾ簡」と申事も有ㇾ之、萬事叢脞に相成候ては、氣根も續き兼、了簡も出合不ㇾ申事ゆへ、樞機の取しめ却て疎略に相成、且諸職の勤方は存分

の働出來不レ申候ゆへ、何事も伺ひものに罷成、怠惰廢壞仕候、夫故に任レ人省レ事と申二語、意味面白相覺候、論語に先レ之といひ、また先二有司一と有レ之、此道理にて、執政の面々眞實敬事の心御座候時は、是非々々此通り不レ仕候ては不二罷成一候、衰世の政は此大意を失ひ候故、和漢古今ともに、權在二胥吏一と申樣に相成儀と奉レ存候

一　凡政令の事始終をとくと考究仕候上ならでは、妄に發し不レ申候時は、信を士民に失ひ候事は無二御座一候、然るに執政の面々御仕置の儀に心を盡し候事薄く、また衆思を集め、忠益を廣め候事無レ之、前後始終の利害得失を考へ候迄も無レ之、容易に鼻の先にて了簡仕候まゝ、諸事を判決仕り、日帳役任せに取調觸出させ申候間、何事も最初の議定にて據通候事は少く、甚しきに至候ては、朝令而夕改と申樣に罷成、下々自然と上を疑ひ、命令を輕じ、いか程御尤なる儀被二仰出一候ても、三日法度抔と心得違候輩も有レ之候事、是迄の流弊にて御座候、乍レ去日帳の役、もと書記の胥吏に御座候間、何程格祿を御進め被レ遊、執政の腹心に被二成置一候ても、胥吏だけの心得にて、たゞ時々の御振合を見合、元老の心に合せ相勤候迄にて、御政事始終の所を、身に引かけ了簡仕候筈は無レ之候間、此所は書記を責候には不レ及候事勿論奉レ存候、御親政以來、彼是御英斷被レ爲レ在、執政の外にも御用役の面々、拾遺補闕の任に當り、老奸宿猾の吏も、段々御沙汰も有レ之、衆人御善政に目を拭ひ候へ共、御政治臨時の御裁斷は格別、是迄の行來にて、書記の手前にて取調候事共、政體に於て不レ可レ然事共も、數多可

レ有レ之候へ共、歴々の御役人中、夫迄立入候事は無レ之、たとひ立入候とも、不案内の事がちにて、中中俄に其舊弊を灘ひぬき申候樣には罷成申間敷奉レ存候、此所御一洗不レ被レ遊候內は、相應の人物を御撰み、或は調役或は頭取抔申物に、其中へ御入置被レ遊候共、是迄吏の並に相成候ては、無益に御座候、或は別に時政の疑失を議いたし候職抔をも御立被レ遊候共、是亦外樣に罷成居候ては、豫め日の前より建議仕候事、不案内の事を申出候と申事に罷成、事の發し不レ申內は、默々いたし、事の御座候後に至て、彼是論爭仕候ても、其說によりて改候樣にては、事體も輕く相見へ、また尤なる說あり共、遂事不レ諫と申勢にて、其まゝに致置候はど、諫官も無用に可ニ相成一候、是所は君上の御賢慮次第、如何樣にも行屆申候仕方も可レ有レ之奉レ存候

一　書記の職元來簿書の事を預り候迄にて、御政事に預り候筈は無レ之候へ共、重立候御役人は、時々相替、日帳役は其の職を久敷相勤、平日吏事にもなれ、前後の御見合等をも覺居候ゆへ、歷々の族譜事不案內なるよわみより、此輩を服心に相たのみ候によりて、次第に要劇の職と罷成、自然と權を招き、賄を納候者共も有レ之勢に罷成候、たとひ上より御吟味つよく、招權納賄候事は不ニ相成一候樣に罷成候へども、數十年來還叙の任を、彼役の調べ申候事に相成候得ば、朋黨比周背公營私候事たへ不レ申候

其證據、彼役初て小十人組よりの出役にて、年勞の上御土藏番新番、或は御普請御矢倉等の奉行に

遷候位にて、寛文年中より享保の比迄は、甚微々なる事に御座候處、延享年中、妻木與左衞門始而格式大番の列に罷成、御切符三拾石被㆓下置㆒候由、是其先祖の內知行取兩番已上有㆑之故も可㆑有㆑之候へ共、日帳役にて此等の格式被㆑命候事、古に無㆑之儀に御座候、其後寛延年中より、頭取は必新番組頭の格に罷成、御切符も世祿に罷成、且新知百五十石づつ被㆓下置㆒候例出來、安永以來御近習番にも相進み、其後御小納戶御通事等に遷り候輩も有㆑之候、昔の書記一色の勤方と違ひ、次第要劇に罷成、骨折も仕候上は、格祿も夫に准じ相進申候事、自然の勢に候へ共、文にも非ず、武にも非ず、胥吏の輩ヶ樣に淸流に混候樣罷成候事。名器の輕く、風俗の衰へ候一端に御座候、頭取は勿論、平役にても、一たび彼役に入候もの、たとひ御役不相應にて他へ出候とも、又々漸を以相すゝめ、終には兩番已上に至候樣取扱候申合の由、其身計にも無㆑之、子孫に至候ても、互に見棄申間敷との誓約御座候由、世人あまねく申ふらし候、是迄の成行を以て考候得ば、大抵は相違無㆑之樣御座候、右の如く相互に朋黨比周仕候勢に御座候間、遷敍の際人の目に立不㆑申樣、漸々に下地より組立候事ゆへ、執政の面々も氣も付不㆑申、たとひ心付候ても、大方の事は彼輩が私を見濟候て、又人々の身上に付、平日の勤方打任候のみならず、御慰勞等の事も、前例を以てよき樣に彼輩が注文いたし、指出候樣に致來候ゆへ、其勢牢固不拔の姿に御座候、平士の儀は不㆑及㆑申、其上とても前例を付出し候事、彼輩の職に有㆑之候へば、其贔屓いたし候方へは、よき例を引當、其氣に不㆑入方

へは悪き例を引當申候故、歴々は其しらべの上を見て致二了簡一候迄にて、十に七八彼輩意中の通に成行可レ申候、然れば自然と請託を受け、賄賂を納候様にも可二罷成一候、すべて役人部類は相持に持合候勢ゆへ、何事も役方へ贔屓いたし、表方を疎略仕候ゆへ、總御家中の氣うけも不レ宜候事と奉レ存候、此所能々御改正被レ遊候様仕度奉レ存候

一　胥吏の輩に權の歸し候も、畢竟簿書を取扱、彼是御見合と申物を相覺居候故にて、外に他の技能無二御座一候へ共、日用の事十に八九は故事に因循仕候を以て、書記無レ之候ては不二相成一姿に候へ共、臨時の斟酌彼輩に了簡をかけ候時は、いやしき諺に申候、蟹は甲に似せて穴を掘るとやらん申候如く、鄙夫の了簡多くは卑劣瑣細にて、大に事體を失ひ候事有レ之筈と奉レ存候、扨又其見合と申物、祖宗の御舊制に御座候へば、夫を本據として、斟酌仕候事尤に候へば、惣て諸役所の先例古格、みな〱寶永年中、奸人共御改革と申説を唱候時分より、一切に打破り、其時の了簡次第に取扱來、其後御改革相止候ても、舊章の內或は故に復し、或は改候まゝにて、段々に今日迄推遷來候故、威義二公の良法美意、不二取失一候、諸職は多く有レ之間敷候、然れば日用の事、みな〱寶永・正德・享保・寛延已來、時々の御役人中、了簡次第にて、行來候事多く、近世に至てもまた一大變いたし候へば、何を目當に御見合を付出し候哉、無二覺束一奉レ存候、乍レ去是迄の見合善惡は指置、まがり成にも已前の成ふりにて、大なる過は仕出來し申間敷候所、歴々御役人の內、萬一手おろしにいたし、胥吏に口をきかせず候様

にいたし候共、是亦聖賢の古訓に本づき候歟、祖宗の舊章によりて、事を了簡仕候はゞ宜候へ共、左も無レ之候はゞ、當座の了簡にて、跡先の考をも深く不レ仕、容易に事を決し候はゞ、無知妄作の患、胥吏の仕方よりは、其過ち十倍可レ仕候、仍ては今度被二仰出一候御直書の趣を以、祖宗の御舊章を御糺し被レ為レ成候て、一體紀綱の振擧仕候樣、御工夫被レ遊可レ然御儀奉レ存候〔以上日帳方の事を論ず〕

一　金穀出納の會計、其職司の得失により候て、上下の損益、君民の足不足にも係候事ゆへ、昔よりこれを重じ、租税の御取附、幷領蘇の御黒印帳等、於二御前一御極め被レ遊候事、量入爲出の大本、成義二公已來の御舊制にて、凡金銀米錢請取渡、金拾兩以上、銀拾枚・錢五十貫・米拾石より已上は、奉行人裏判、用人等、表に可レ致二加判一旨、御條目にも被レ載候事、甚深遠の意味有レ之譯と奉レ存候、周易に「節以二制度一、不レ傷レ財、不レ害レ民」といひ、孝經に「制レ節謹レ度、滿而不レ溢」を以、諸侯の長く富を守る道とす、皆同一義にて、洪範八政も食貨を最初へ列し、三事の正德も厚生利用ならでは立兼候間、愛人の仁政も必節用より始る事、古今不易の義に御座候、執政は姑置き、御奉行御用人の兩職共は、水戸江戸を分掌いたし候事にて、財用の出納ひとり會計の吏へ獨任せず、屡々にてこれを總べ候事、甚仔細有二御座一儀と奉レ存候、勿論算勘損益の儀は、屡々の族委細には立入兼候間、制物奉行の職、右の兩職を佐けて、國用を制するの下地を仕候得共、大だゝいの儀は、上の方にて判談有レ之筈に御座候、乍レ去古より「善治二其國一、而愛二養斯民一者、必立二經常簡易之法一」と申候所、天下一とう奢侈

の悪弊にて、次第に國用不足いたし、法制壊變候て、繁務瑣細の事多く相成、もとより歷々は、土地方算用等不案內がちなるまゝ、何事も心を用ひず、割物奉行任せにいたし候より、其權いよ〱盛にして、寶永年中より大吟味と申ものに罷成、近世に至候ては、財用の權悉く其掌握に歸し、御奉行御用人手を束ね候は勿論、執政の面々大體の上にて、彼是議論ありといへども、始終つまる所は、大吟味申次第に不ㇾ仕候ては、御勝手御取續不二相成一と申事に相成、國家の武備にかゝり候事迄も、そろばんの上にて打破り、さて又彼職にて存込候出納の儀は、御勘定所よりも委細に勾勘いたし候事不二相成一、何事も自分配剤に罷成、裏判加判の制も有名無實に相成候得ば、慢藏誨盜と申候古語の如く、奸贓の吏次第に出來、一役所悉く小人の淵藪に罷成、其悪弊近比の調達方に至て極り申候、是等甚しき儀は、君上の御英斷を以て御罷め去被ㇾ遊、內外心服恐悅無二此上一奉ㇾ存候へ共、一體舊制を失ひ候故、何程老奸共御退被ㇾ成候ても、相殘候頭役勿論、手代共迄甚不ㇾ宜候風儀に御座候、其中たま〱一人ばかり善士を御交へ被二成置一候ても、一體の紀綱を取締候事、上より御手入無二御座一候ては、舊染の汚俗一洗いたし候樣には出來兼可ㇾ申歟と奉ㇾ存候、只今の內こそ忌憚る所御座候而、大分なる姦計は仕間敷候へ共、是迄行ひ來候事の上にて、御咎めにも不二相成一分は、小吏より御取立に罷成候輩、何ぞ別に了簡可ㇾ有ㇾ之哉、一人ばかり相應の善士を取入置候ても、只今の姿にては、假に惣體を取直し候事、無二覺束一奉ㇾ存候、是には被ㇾ成方可ㇾ有ㇾ之奉ㇾ存候、扨又會計の事、細か成所こそ面倒に入組候て、不算に

ては相分り兼候へ共、大だいの所は、條理さへ明白に候へば、誰が目にても一覽了然たる筈に御座候、老子に大數は不二籌策一と申候如く、大數の本を取極め申候には、小吏杯の如くそろばんは入不レ申候、然るを出納の勘定を十重八重にこしらへ、巧に六ヶ敷仕候事、皆々奸吏欺罔の手段と可レ被二思召一候、此所一旦は御取調出來候共、經常簡易の法よく立不レ申候ては、又々小人の爲め亂られ可レ申奉レ存候

一　調達の儀、大阪の方は御止に相成候由、恐悅無二此上一奉レ存候、但夫々致候ては、御藏屋敷其外取かたづけの儀、べん／＼と仕置、無用の御物入も御座候事、是亦舊來の大吟味共、其職の永業をのこし候計に相違有レ之間敷候、其外御借財等の儀いか樣の次第に相成候哉、外人の存じ不レ申候事に御座候へ共、其職の惡習に染こみ候輩の了簡は、一向あてに罷成不レ申候、町人共を引付御用たさせ候事、古へは御目附職神文の一ヶ條に戒置候事の由、然るに大吟味の儀は、是に反し候へば、萬づ風化をみだり候事是より起り申候、此所根を絕て葉をからす樣に不レ被レ遊候てはだめに御座候、廉耻の風興り不レ申候內は、萬石の大名にも貪り候もの有レ之候へば、役人の淸濁は祿の多少に不レ依とは乍レ申、畢竟諸吏の廉耻を養ひ候事不二相成一候は、擇レ人候事不行屆にて、頭數計ふやし候所へ、御儉約の說を以て、一體の御あてがひ被レ減候ゆへ、役により物入も有レ之、中々廉潔に仕候ては、取續兼候樣成事も有レ之、自然と貪濁を御導き被レ成候道理に御座候、宋の太祖の詔に、「吏員冗多、難二以求一レ其治一、俸

隣鮮薄、而未レ可ニ責以レ廉、與ニ其冗員而重レ費、不レ若ニ省レ官而益レ俸一と被レ申候事、明智の言と奉レ存候、是はすべて諸吏御取扱被レ遊候事同様にて御座候處、別て機務にもあづかり、財用をも司り候役には、尚又の儀に御座候、吏員少く罷成候へば、小田原評定も少く、御用もはか取、御えり人にて被ニ仰付一候へば、其人にはげみも厚く、俸祿も饒に御座候へば、勝手にかまけ申候事も無レ之、御奉公に身を入、清廉に相勤候道理かと奉レ存候

一　御貸金の儀、於ニ御國一彼役所のもの取扱候由の所、是又調達同樣一種の惡弊に御座候、御金の筋合こそ違居可レ申候へ共、表方のものは委細のわけは不レ存、諸方より御借財も被レ爲レ在候砌、御金貸出しと申候事、町人の山師共いたし候樣成儀にて、諸人嘲り申候、其上右御金貸出しには、其事にかかり候小吏借り方の者共より音信を申請、右對談に付、他所もの逗留中、莫大の物入も有レ之、且又利分も高利に御座候へば、中々本渡に勘定仕候て、わり合申候筈は無ニ御座一候間、かゝると其儘横にねる事なり抔申物語承及候、右かりかし懸合に付ては、小吏共過分の利潤にも相成、頭役も申出候上とは乍レ申、其配分を申請候由、第一廉耻を害し候事に御座候、小吏共右に付ては、奢侈等はやはり調達方の小きものに御座候、たとひ莫大の御利益罷成候共、風俗の害に相成候儀、御大名には似合不レ申候、況や大國の經濟には、二千三千の御元金、八千九千乃至一萬餘にふえ候とも、みな〳〵虚名ばかりにて、實數は無レ之、世上に申候帳面ぶげんと申ものにて、國家の御益にも相成間敷候、貸出し候

て利を生じ候數をば、其役人の勤功にいたし候て、すたりに罷成候をば、其まゝ指置候事、奸計尤可レ惡事に御座候、陸宣公が奏議にも、裴延齡が姦を論じ候て、「移レ東就レ西、便爲二課績一、取レ此適レ彼、遂號二羨餘一、愚二弄朝廷一、有レ同二兒戲一」と申候通、奸利の小人古今一轍御座候間、御貸金の外にも、右等の儀も可レ有レ之候へ共、私承及候所計申上候、重立候御役人兒戲の樣成事に愚弄いたされ候事、如何の心得に候哉、呑込不レ申候、尤右御貸金も、當時のおこりは、やはり粟田野航が計ひにて、初め候由に候へば、其仕方の善惡は論にも不レ及候儀と奉レ存候、扨右之御貸金早速に御止被レ遊候と宜候へ共、只今御止被レ遊候ては、御損罷成候間、段々かしつゞけ置、折を以御止被レ成候樣にと、彼役の者可レ申候へ共、帳面ぶげんは何程ふえ候ても、實用に不レ立と申處を、御見破り被レ成候はゞ、只今の内さつぱりと御止被レ成候御手段さへ立候はゞ、右御かし金の内、何程にても返り候だけは返り候て、それだけの國用をたすけ可レ申候、只今の姿にて御貸出被二成置一候はゞ、返濟無レ之分は次第に多く、たとひ十年二十年役人を付置、守つめて催促いたし候共、中々返納有レ之間敷候、且又右に付取扱候手代等、餘計に御人も抱置、御不益に御座候事は勿論、第一風俗をみだし候媒に御座候間、少も早く御決斷被二仰付一候樣仕度奉レ存候

一　御國産の事、もと小吟味の役にて取扱ひ、大吟味にて其奉行致二兼職一候ものも、轉役被二仰付一候由御座候へば、當時は如何被二罷居一候哉不レ奉レ存候へ共、一體御國の品を用ると申事、道理は宜候へ共、

肝要の所は不二行屆一、彼是世話をやき候事を見聞仕候に、皆々末業の利を事とし候者を助け候致方にて、眞實國の利には不二罷成一候、然るに御國用御窮迫之最中、御役金等の内より、莫大の金子を取出し、奸利を謀り候町人共へ御貸出しにて、御損に罷成候事何の見込に御座候哉、上みの利にも罷成候事ならば、此節不レ得レ已の御一計とも可レ存候へ共、民の利にも、上の利にも不二罷成一候事、深く御世話御座候事、是亦上下心服不レ仕候事に御座候、此儀も發り久敷候へ共、其事の最盛に相成候は、松崎丈左衛門大老職へすゝめ申候物語有レ之、已來別て盛に相成候由承及申候、小人のすゝめ申事よき筈は無二御座一候、俗人の了簡、たゞ御國へ金錢澤山落込候はゞ、國富み可レ申心得候故と相見へ候得共、「近レ寶公室乃貧」と申事、春秋傳にも有レ之候通、民間にあまり財寶の自由なるは、驕侈而不レ務レ本の基に御座候間、國政の上に於て、甚だ嫌ひ候事に御座候、管仲が書にも、「工事競二於刻鏤一、女事繁二於文章一、國之貧也」と申て、當時御國産品如きもの御國にはやり候へば、却て無用の費多く、國の衰弊に罷成候、且諸の品々一家の株と申ものに申付候事はやり申候所、諸品何れにてもうり次第ゆへ、買調候もの少もやすき方へ赴き候間、物價俄に騰貴不レ仕候へ共、一家の株と申事に罷成候へば、其者一人へ計利の歸し候て、他の商人は迷惑仕候、是は運上を取候上には有レ之事に候へ共、當時御國産の品々、永久に摸通候事は存も不レ寄候へ共、町人どもは是を仕候は、名聞を好み候者共、これを功に面々の家格と申物を、競望仕候内心も有レ之、又跡先の考もなく、浮氣にてはり込候馬鹿ものも有レ之候へ共、中々運

上を差上候て、わり合候事は無御座候、萬一運上差出候樣罷成候共、夫だけ物價あがり候間、一體の爲には不宜候、惣而運上の惡敷儀、天下の御勘定奉行名譽有之候、伊丹播州抔申置候事も有之、其外國主にも藤堂家の始祖抔、其弊を極論被仕候事御座候、當時御國產の儀不宜候次第、誰の了簡にも相分り候所、是迄大小の吟味役も、何樣の事を取扱、歷々の御役人中も、それをよき事と心得居候事、是にても國用の節制不相立候筈と奉存候、此度會計の一條御取締被遊、序に大吟味方の公務御止被遊候方も可然奉存候〔以上大吟味方の事を論ず〕

一　鄕村の儀は邦本に御座候事、勿論貧家を賑はし、遊惰を戒め、戶口を殖し、草萊を闢候事抔、當時郡吏のつとむる所にして、其職に出精と稱候輩不少候へ共、多は皆病源を究不申候て、表へ見へ候樣子計にて療治仕候間、年來の大病、中々元氣初に復し候段には無之奉存候、其上一分の功を見せ候心よりして、一國の內にていろ〳〵不平有之事、尤以不可然御儀と奉存候、凡百官の職掌考績の法立不申內は、欺罔の患まぬかれ不申候得共、別て鄕村の儀は、眞實愛民の心深く御座候て、しかも又治體に通曉仕候ものを以て、能々一體を廉察仕候樣不被仰付候ては、始終民瘼を療し、上惠を播し候事行屆申間敷奉存候

一　草萊を開き候事、當時のはやり物にて、貪功の吏早速に驗を見せ候事、是より近きは無之候故、是等の事を申行ひ候儀と相見へ候得共、世上にては此事を笑ひ不申ものは無之候、當時人別の大に

減じ候て、むかし百家有レ之村には、五十家も無レ之、古來の良田さへ手餘り有レ之所、人別もふへ不レ申内、荒地を開き候には、いろ〳〵の手段を以仕候へ共所詮當座まかなひにて、永久の利には罷成申さず候、其事を奉行仕候ものも、たゞ近功を立度一念ばかりにて、跡々の儀は不二相搆一、其募に應じ候百姓も、たゞ當分啗(ハマ)しめられ申候利を貪り候て、無理につとめ申候へ共、一體は邦家の御損、鄉中の費に罷成候事無レ疑候、むかし關東筋にて、新田澤山開墾仕候由、東照宮被レ爲二聞召一候て、古田の不レ荒候樣に可レ仕旨仰られ候由、古き物語に相見へ候、慶長。元和の際、初て戰國の苦を離れ、民力方に壯なるすら、神慮の所レ及既に如レ此に御座候、況や二百年來太平遊惰の民を取扱候事、其心得無レ之候て罷成申間敷候、陸宣公が奏議にも、「所レ貴二田野墾闢一者、豈不レ以二訓導有レ術、人皆樂一レ業乎、」今或は「率二黎蒸一播二殖荒廢一、約以二年限一、免二其地租一、苟農夫不レ增、而墾田欲レ廣、新畝雖レ闢、舊畲反蕪、人利レ免レ租、頗亦從レ令、年限纔滿、復爲二汙萊一、有レ益二煩勞一、無レ補二稼穡一、不レ度レ力、而務レ闢二田野一、有二如レ是之病一」と申置候事、實に千古不易の確論と奉レ存候、扨今の百姓へは、已來の田地を不レ荒候樣爲レ仕候事、上策に御座候、荒廢を開き候には、足兵の政さへ眞實に御行ひ被レ成候はゞ、如何樣にも致方可レ有レ之奉レ存候、此儀論餘程事長く罷成候間、追而可二申上一候

一　戶口を殖し候事、百姓に別家取立させ候事抔は宜候へ共、是も田分けの患なきにしもあらず候、其多越後ものを引込候抔、多くは當座計にて摸通かね、たとひ摸通候とも、夷虜のいやしきを以て、

良民の風俗をみだり候儀も可レ有レ之候、又育子の儀御世話被レ爲レ在候事、御惠政の一にも御座候へ共、其事をあつかひ候輩、心得違も有レ之、甚しきは無父の子を取擧させ、知レ有レ母、而不レ知レ有レ父、禽獸の樣成惡俗を、御當代御領分より手初め仕候事、國恥を天下後世に貽すとも可レ申候、是皆有司當分の勤功を立ることを競ひ、執政の輩政に大體ある事を不レ知して、只管に近功小利を以て、郡吏の功績を取立候故、ヶ樣の弊も出來可レ申候、且又人別改抔申事、六ヶ敷仕候へ共、たゞ帳面の上にて、人數をへらし不レ申候仕方計にて、其人地に着き、耕作をつとめ候事無レ之候へば、有名無實の事共に御座候、何事も帳面の上計にて申立候虛文の弊を破り、實の效を責候樣不レ仕候ては、徒に奸僞を長じ候迄にて、御政事は行屆申間敷奉レ存候

一　遊惰を戒め候事、博奕の禁嚴に仕候事抔は、尤宜候へ共、夫ばかりにては、行屆申間敷候、元來奢侈の惡弊、御城下町人共より、延て鄕村一面にしみわたり、悠々たるもの、皆侈惰ならざるは無レ之候、是等の取締中々一通のなまやさしき儀にて、行屆候筈は無レ之候、乍レ去何程嚴酷に申付候ても、農を貴び農を利するの道を開き不レ申候內は、本をつとめ候者有レ之間敷候、聖人「使レ民以レ時」と被レ教候も、畢竟力農のものゝ便なる樣に仕候事に候處、當時一體の姿、力農は不便なる勢に候間、御役使の方、時不時にも至り不レ申候、漢の食貨志にも、「今法律賤ニ商人一、商人已富貴矣、尊ニ農夫一、農夫已貧賤矣、故俗之所レ貴、主之所レ賤也、吏之所レ卑、法之所レ尊也、上下相反、好惡乖迕、而欲ニ國富法立一、不

可㆑得也㆒と申候、上下相反、好惡乖逆候ては、法も立兼候得共、せめて法律に商人を賤で、農夫を尊ぶと申事を不㆓相忘㆒候內は、賴もしき儀に御座候、只今は市井鄕村ともに、民に爵位を授け候事はやり、鄕黨にて貴ばれ候もの、皆商賈の利潤を以て、金錢を多くたくはへ候者共にて、力田の者には無㆓御座㆒候、農をつとむれば貧、商をすれば富、是ばかりにても、人情勞苦を厭ひ候て、安逸に趣き候所、況や商なれば人に貴ばれ、農なれば人に賤まれ申候姿にて、誰か力田仕候者有㆑之べく候や、然れば奢侈を禁じ、遊惰を戒め申候事も、抑㆑末力㆑本しむるの手段、能々相立不㆑申候內は、行屆申間敷奉㆑存候

一　貧家を賑はし候事、鰥寡孤獨を惠み候事は、仁政の第一勿論に候へ共、其外貧民の扱ひ方は、容易の儀には無㆓御座㆒候、凡民の貧富は、其ものゝ巧拙、時の幸不幸さま〴〵有㆑之候へ共、大抵侈て惰る者は、貧しく儉にして勤るものは富める道理に御座候、豪富の子孫侈惰にして、貧に至り候といへども、田地の高をも持居候ゆへ、郡吏の舊弊御救と申候へば、第一に此者共へ過分の時借等を申行ひ候事に御座候處、右の者共は、多くは大名の出來そこなひとやらん申樣成ものにて、これを扶け候共、力田の役には立申間敷候、扨又劣弱の民豪强のために兼幷いたされ、いか程力田いたし候ても、取續き兼申候者數多有㆑之候、豪富は田を多く持ち、貧弱は少く持候事は、自然の勢不㆑得㆑已候へ共、威・義二公の良制壞れ候而より、田地賣買の間に奸甚しく、うぶせ高と申事出來、富民にて廣き土地よ

り幾の年貢を出し、作り取同樣にいたし居候て、貧民は狹き土地より、富民の爲に年貢を償ひ納め候類澤山御座候、是等の類中々金錢計にては、救ひ屆け出來不レ申候、聖人の語にも、「惠而不レ費、因ニ民之所一レ利而利レ之」と申候如くならでは、大なる仁政は行屆不レ申儀と奉レ存候、唐の劉晏が傳にも、「善治レ病者、不レ使レ至ニ危篤一、善救レ災者、勿レ使レ至ニ賑給一、故賑給少、則不レ足レ活レ人、活レ人多則闕ニ國用一、國用闕則復ニ重斂一矣、又賑給近ニ僥倖一、吏下爲レ姦、强得レ之多、弱得レ之少」と申候事、よく古今吏治の弊に中候事と奉レ存候、すでに先年の御救ひ、全村拜借と申ものは、みな／＼豪民の奸利を資け候迄にて、貧民の手前へは不ニ行屆一、甚しきは執政大臣の家來抔、鄕村の小吏を相對いたし候て、表向百姓名前にて、實は大臣の家へかりこみ、或は小吏共一統に、右の金子をかり込候ゆへ、其事露顯いたし、南郡の奉行より手代迄、一面に貶黜を蒙候事、十數年以前の事に御座候、只今は此所は精密に御吟味も有レ之、左程の儀は無レ之筈に候へ共、すべて一體の取締方、疎略の樣に御座候間、後には奸吏出候はゞ、如何樣の事を相謀候哉も難レ計奉レ存候、鄕村役所に罷成候て以來、吏民の間あまり近く相成候間、よく／＼人を御擇不レ被レ遊候ては、弊の生じ候事深く可レ有レ之奉レ存候

一　惣て鄕村の取扱方、人々の心得によりて、樣々有レ之候へ共、大抵爲レ民興レ利除レ害候事、根本の處より世話不レ致候ては、諺に申候飯上の蠅を逐とやらん申類にて可レ有レ之候、孟子の語に、「仁政必自ニ經界一始、暴君汚吏必慢ニ經界一」と申事、是井田に限りたる儀にも無レ之、古今ともに此所不ニ行屆一候

ては、民の農にすゝみ候事は勿論、兵食も足り、穀祿も平かに、國用も饒に相成候事は決無二御座一候、乍レ去此儀は一體の制度・紀綱・大本より御立被レ成候て、育澤民に降候勢ならでは、容易に手を下し候事不二相成一候、仁政を行はずして經界を正さんとせば、檢地の打出しより、租税を餘計に收斂する迄にて、百姓困窮益甚しく、是衆を富すの類にて、民の變亂を激する事、指掌の如くに御座候、但仁政方に行はれ候時、仁者をして其事を掌らしめば、貧富共に不平なく、上下共にゆたかにして、永世不拔の基も立可レ申候、此儀は年來相考置候事も御座候へ共、事長に罷成候故、荒增の所計申上候、

〔以上 御郡方の事を論ず〕

右の條々、大略當時の弊を述候て、除弊の仕方も大意其中に寓し候、但淺見寡聞の私、定て心得違も多可レ有二御座一奉レ存候へ共、只其大意を御省覽被レ遊候樣奉レ希候、古より爲レ政在レ人と申候へば、いか樣の良策御座候ても、其人に非ず候ては、行はれ不レ申候事勿論御座候所、聖人の道「敷奏以レ言、明試以レ功」と申事、尙書に、「三人有レ所レ譽、必有レ所レ試」と申事論語にみへ候通り、紛々の毀譽に不レ拘、明試の上にて黜陟を加へ候より外は有レ之間敷候、衆職ともに考績の法不レ明候へ共、就レ中郷村の御取扱方、甚統紀を失ひ候事と奉レ存候、執政の職於レ事無レ所レ不レ統にてこそ、大臣の甲斐も御座候、然るに郡鄕の組分けを夫々に支配仕候事、執政とは乍レ申、御郡奉行の頭取も同樣に罷成候、尤土地を分ちて持口を請取置候事、侍大將の任、軍制の上には可レ有二御座一候へ共、郡奉行の組頭を執政にて仕

候事、國體に於て甚害有レ之事と奉レ存候、私愚察仕候には、此儀もと近年鄕村御世話被レ爲レ在候砌、一郡宰と浪人左金吾が謀より出候事と奉レ存候、其故は執政の諸臣各一郡預り候へば、御郡代も同樣にて、其勢自ら輕く、獨上丈夫一人總功を統候へば、大老の勢のみ益盛に罷成候事、是左金吾の秘計と奉レ存候、只今の執政如何の了簡に候哉、其節のこり居故老の輩は、甚不本意に存候由承及候、扨執政の面々一郡を御預り被レ遊候上は、是非々々成功を奏不レ申候ては不二罷成一候處、鄕村の儀及びごしに世話も屆兼、とかく御郡奉行を頼に仕候より外無レ之候、郡吏の輩は掛りの執政へ伺ひの上取扱候事ゆへ、參政以下諸役人わざ〳〵つき當り候事有レ之候ても、故障と申事も相成兼、何事も郡宰の申行ひ次第に參り、萬一事破れ候時は、掛りの執政も其咎に任ぜざる事を不レ得候はゞ、郡吏は却て罪をのがれ候所有レ之候、功ある時は執政の身方ゆへ、賞の及び候事諸役に超候、右の勢ゆへ、只今にては鄕村の治め方たとへ惡儀御座候てゝ、大抵の儀にては、御役人中より惡敷とは申出ざる姿に御座候、尙又郡吏の內より追擢せられて、御用の役をも被二仰付一候人、心殊に專鄕村の御用を司り候へば、是より以後鄕村の利病得失、何事も明白に上達仕候事少く可レ有二御座一候哉と奉レ存候、御入國に付候て、御仁政の仕方、いろ〳〵可レ有二御座一候へ共、年來の積弊御一洗被レ遊候て、人々震懼不二敢飾一レ非と申樣に罷成不レ申候內は、叡慮十分に行屆候樣には罷成申間敷候、むかし齊の威王即位の初、三年が間わざ〳〵人任に仕置、親政の時に至ては、第一に先づ阿。即墨の大夫兩人。幷兩人を毀與仕候ものへ

功罪を正し、勢によりて、國中大治、威振二隣國一候由申傳候、只今郡吏の能否を御糺被レ遊候時は、是迄各郡御預けの大臣も、善惡に從ひ、御沙汰無レ之候ては、不二相濟一候樣に候へ共、此仕方もと大臣の建議より出候事にも無レ之、奸人の爲めにはめられ候姿に御座候へば、事情に於て可レ憫儀に御座候、況や大臣の儀、一と通りの小臣を御取扱被レ遊候共違ひ申候間、きびしく御沙汰も不二罷成一候半奉レ存候、然れば只今の內少も早く、各郡の掛り御免被レ遊置候て、自今以後洗心滌慮一體の上を取締、執政職の本意に相叶ひ候樣、其名を正しく被二仰付一候はゞ、以來御仕置の儀、いかにも思召の儘行屆可レ申哉と奉レ存候、御勝手方の儀も、御用役の內一人にて惣司被二仰付一候事、御相續以後の儀とは乍レ申、いまだ冢宰に聽くの御砌被レ遊候御事、是亦鄉村懸り抔の類にて、正名の筋には相叶不レ申候樣奉レ存候、當座の了簡計にて、大體の上より正し來り不レ申候ては、是迄大吟味共舊弊に狃候邪說の方へ引込れやすく候半、安心不レ仕候、惣て任レ人の方、君上の御明德群下へ御照臨被レ遊候處、善惡の御黜陟皆々御尤至極の儀、衆人奉二感服一候間、此上申上候迄も無二御座一候へ共、舊制久壞てより、諸職の筋合甚致二紊亂一居候事故、是を御正被レ遊候事、所レ謂平二章百姓一と申物にて、治國の要務と奉レ存候、右三役御仕置相立候上には、御仁政も行屆、足食足兵富强の勢を張り、敎化大に行はれて、四方も來て則を取り候樣罷成候事も、君上の御盛德に在レ之候へば、御勵精次第御六ヶ敷儀にも有二御座一間敷奉レ存候、愚賤の身無用の議論申上候事、誠以不レ堪二慚懼之至一奉レ存候へ共、御下問も御座候に付、

心付候次第無二伏藏一申上候、以上

丁卯五月朔

封事（第三）

御親政以來、御剛明の御德を以て御英斷被レ爲レ在、權臣手を收め上下肅然、賢能之士追々御擢用被レ遊候て、老奸宿猾の吏一時に跡を屛け、人心も悅服仕候處、尙又御脩德無二御油斷一、日々御勵精被レ遊候て、人に取て善を爲すの道、聖賢に法らせ給ひ、大に言路を御開被レ成候て、時政の得失を上言仕候樣被二仰出一候上は、是迄壅弊の舊弊も自然と決し候勢に罷成候へば、私ごとき愚賤の小臣何事を申上候にも不レ及候へ共、不肖の身不二存寄一御先代より段々御取立に罷成、未熟の文學を以て左右へ咫尺仕候樣に罷成、去年今年打續此表へ被レ爲レ召、彼是御下問も被レ爲レ在候事、書生の本望無二此上一、誠以不レ堪二感激流涕之至一奉レ存候、仍ては迂濶ながらも、平生學び居候處を以て、君のため民のため、日夜焦思仕候事ども、段々に上言仕度心願に御座候、尤近年の內御入國可レ被レ遊御內慮に付、御國中士民の心を得候仕方、幷寬猛弛張の次第、前日進講の節御內々御意を奉二相伺一、寬猛の義管見の趣大略口上にて申上、其他の仕方は追て封事にて申上候樣被二仰付一奉レ畏候、謹按に、士民の心を得候は、仁政に在レ之事勿論に御座候處、世俗の仁政を論候もの、多くは姑息に流れ、或は道に逆て百姓の譽を干むと申事に罷成、一旦は人を悅ばしめ候へ共、後には繼べからざる勢にて、却て政理の妨を生じ、永久の道に無レ之奉レ存候、仁道の根本は、人君克己復禮を以て其身を脩め、能近取レ譬の方を以て、人を治め給ひ

候はゞ、內外表裏不二行屆一筈は無レ之事に御座候所、是亦御平生御學問の上にて御合點被レ遊候御儀今更不レ及二申上一候、但「治世以二大德一、不レ以二小惠一」と申事、諸葛孔明が格言、三代以後爲政の說にて、よく古聖人の意に叶ひ候もの、此一語に過たるは無レ之奉レ存候、孔子は「惠而不レ費」と說給ひ、孟子は「爲レ政者、每レ人而悅レ之、則日亦不レ足」と申候事、甚深遠の意味有レ之候、然れば眞に仁政を御行被レ遊候はんには、先づ庸人姑息の論を破りて、治體の大要を御講究被レ爲レ在候樣仕度奉レ存候、仁道の大本は、公の天資御英邁、しかも聖學の大意を御自得被レ遊候上は、不レ及二申上一候へ共、これを事業に御施被レ遊候に至ては、當時從政の諸臣大抵淸光を望に不レ足候へば、每に含糊模稜の論を以て、御前の盛意を沮め候事多く可レ有二御座一歟と奉レ察候、「徒善不レ足二以爲一レ政、徒法不レ能二以自行一」と、孟子も被二申置一候て、惻怛の實意無レ之候て、法度ばかりを恃み候ては、政行はれず候事勿論、何程、仁心仁聞御座候ても、先王の仁政に法らざれば、民其澤を被らずと申候へば、返す〴〵も御仁政の儀、古を稽へ今を揆り、道德事業一致に出る樣被レ遊候はゞ、無二此上一御儀と奉レ存候、夏日の暑雨にも小民怨咨、冬日の祁寒にも小民亦怨咨仕候へ共、日月の行は冬夏寒暑の功を以て歲を成候事故、人君執中之道寬猛並用ひて、時中の宜に叶ひ候樣被レ遊候事專要歟と奉レ存候、庸人の論至善の極を不レ知候故、みだりに中道を貴び候へ共、却て時中の意を失ひ候、たとへば冬日にも寒からず、夏日も暑からざる如くに相成候はんには、天地の氣候いつも〳〵中にしてくらしよき樣に可レ存候へ共、夫にて歲

功來就可レ仕候哉、冬煖夏冷なるこそ、時を失ひ候て不レ宜候へ共、寒き時分にいかにも寒く、暑き時分はいかにも暑きこそ、生長收藏の造化も行はれ可レ申、されば洪範の三德も、剛・柔・正直各其用を異にし、周禮の三典も、治國・亂國・平國の差別によりて、或は輕く或は重く、或は中を用ひ候事も御座候、「君子而時中」と中の上に時の字を加へ候意味、是にて明白に相分り候樣被レ存候、是等の事も定て君上御學問の上にて、既に御發明被レ爲レ在候御儀、今更論じ候事無用に御座候へ共、とかく庸人の流儀、至善の道をば指置候て、當世の上にて物ごとに中を取候故、爲政には寬ならず猛ならず、何とも止り所なき姿に相成、取レ人には剛ならず柔ならず、毒にも藥にも不ニ相成一ものを用ひたき心より、鄕愿の流いつも〱志を得候て、共に堯舜の道に入るべからずと申事に罷成候ゆへ、贅言ながらもあらましをのべ候て、前日の餘論を竟へ申候、是迄の姿は、宋人の申候、「患ニ柔弱一而不レ振、怠惰而不レ肅、苟且偸安、而不レ知ニ長久之計一」と申候時勢に相當候樣奉レ存候、然れば此處一きわ御奮勵被レ遊候より、提ニ擧綱維一、變ニ化風俗一の御手段不レ被レ爲レ在候ては、中々思召儘に御仁政も御行屆被レ遊間敷奉レ存候、扨又霜雪の後必有ニ陽春一と申候へば、いつ迄もはりつめにて、弛めなきをば、文武も不レ能候事に御座候間、御初政萬端御取締の勢すべて行屆候上には、大綱を御惣攬被レ遊候て、上下優々として斯民を仁壽の域に御躋せ被レ遊候樣仕度相願候、乍レ去天地の大德を曰レ生と申候へば、春夏の陽氣生長は勿論、秋冬の陽氣肅殺にて閉藏に至候ても、天地生々の心は少しも强ることと無ニ御座一候間、人君

御剛明の德、天行の健なる如く、どこ迄も御勉强被レ遊候はゞ、御成德の至、至誠無息共申樣に罷成、自然と德澤流行仕候樣可二罷成一候事、指掌の如く奉レ存候、扨古今仁政の仕方、其說まち〳〵に候へ共、つまる所は孔子衞に適候時に、庶・富・敎との給ひ、又子貢が問に答て、「足レ食足レ兵、民信レ之」との給ひ候事、堯舜以來天地の大道にて、唐虞三代の書に、厚生・利用・正德、これを三事と名づけ候、即ち此三ヶ條にて、孟子王道を論ずる、先づ恒產恒心を說き、管仲が齊を以て覇たるも、「倉廩盈而知二禮節一、衣食足而知二榮辱一」といひ、又禮義廉恥を以て四維とし、「四維不レ張、國乃滅亡」と申候事、王覇純駁其說各淺深ありといへども、皆三事の古訓に符合せざるは無二御座一候、後世儒者の道學を談ずる、多くは專敎化を先として、事業に疎なり、第士の經濟を論ずる、多は專二功利一を務て德敎を略にす、皆一偏にて御座候、然れば今聖賢全體大用の政を御擧被レ候はゞ、第一足食厚生して、人の庶ある樣に、第二利レ用足レ兵、當國の富候樣に、第三正德信レ之て、敎の立候樣にいたし不レ申候ては、眞の仁政とは難レ申奉レ存候、假令御入國被レ爲レ在候とも、始終の御目當此三事にて相濟候樣奉レ存候、此三事は私愚賤の身ながらも、篤く古人を信じ候所より、聖賢有用の學を心掛、堯二舜君一民とやらん申候、萬分の一にも叶ひ候樣にと志願仕候て、年來講究仕候事ゆへ、或はこれを古に稽へ、或はこれを今に揆り、時ありては同學の友と試にこれを論じ候事抔もレ有之候、固陋の見識了簡違も有レ之べき勿論に御座候へ共、此三事に付候て存寄たる次第なきにもあらず候へ共、野人の献芹とやらん申事の如く、大

方の御笑草と可二相成一候、乍レ去芻蕘に詢ると申候古語の如く、求言の思召御深切にして、しかも又御下問の趣も御座候得ば、追々は可レ奉二申上一候、しかしながら凡そ事には緩急先後の序御座候間、いかなる道理なる事にても、時と所と位との宜に不レ合候ては、行はれがたく御座候、三事の儀は始終の目當と極め置て、扨今日施行の所は、先づ「論二卑而易一レ行」と申候様に無レ之候ては無益に御座候、但論卑とても道を枉て卑近に就ては無レ之、遠に行は、必近よりし、高に登るは、必卑きよりする心にて御座候、されば論語に「道二千乘之國一、敬レ事而信、節レ用而愛レ人、使レ民以レ時」と申事御座候、所二其言一至て近きが如くに候へ共、甚深遠の意味御座候事、古人も申置かれ候、是は聖語ゆへ勿論に候へ共、今其意を推究申候へば、庶・富・教の次第も自ら其中に含蓄いたし有レ之候、今日事業の尊く、論卑して行ひ易き所を手短に申候はゞ、先づ御用の日帳方を能御取調させ被レ遊候事第一にて、次に大吟味方の會計を正しくして、理財の節制を御立被レ遊候事第二次には、御郡方の綱紀を御立被レ成候て、牧民の政眞實に行届候樣被レ遊候事第三、尤皆當時の急務たるべき歟と奉レ存候、古より「爲レ政在レ人」と申候て、「賢者在レ位、能者在レ職」と申姿に無レ之候ては、大有爲の功業御建がたく候、「人君修レ身以レ道、修レ道以レ仁」の本立候て、大臣の賢者を御選任被レ成候はゞ、其下の諸有司は大臣の目利次第にて、夫々の職掌相辨可レ申筈に御座候間、今日の急務を論じ候て、日帳方・御吟味方・御郡方の三職をのみ、汲々として申上候事、あまり〱論卑き様に候へ共、「道二千乘之國一」云々以下三句の政、行はるゝも行はれざ

るも、此三職の得失に繋り候、所謂故國は必有二世臣一と申候へ共、また才難しと申候古語も御座候如く、いか程大臣を御選任被レ遊度候共、皐陶・伊尹は勿論、管仲・子産が徒も、只今の勢にては容易に有二御座一間敷候、乍レ去今日は今日相應の人才可レ有レ之候へば、其下に立候有司も、また今日相應の人才にて、御用相辨可レ申候得共、積弊の餘、名實紊亂いたし居候世界に御座候へば、いか程任レ賢使レ能の思召にても、執政執事一と通の善き人、目帳・大吟味・御郡奉行一と通のはたらき者抔と申候位にては、中々御中興の功業は立兼可レ申候、然といへども大臣は具瞻の位に御座候へば、容易に御動搖は不二相成一候間、大學に秦誓を引候如く、たとへ他の技無レ之候共、「休々焉如レ有レ容一」にして、娼疾の心なき人に候はゞ、先づ其通にて宜御座候、君上の御盛徳を以てすら、人に取て善を爲すの道を御行ひ被レ遊候、況や大臣に在ては、いかにも開二誠心一、布二公道一、孔明が所謂「集二衆思一、廣二忠益一」と申樣に不二心掛一候ては不二相成一次第に候、さりながら政の大體を不レ知候人は、下に委任いたし候へば、悉くわたし切に仕候、拱手座視いたし、考績のすべも不二相分一候、扨又彼是指圖をいたし候時は、鎖屑の所迄も無益に掣肘いたし、其人存分のはたらきも出來不レ申候て、つまる所萬事叢脞に相成、下々怠惰仕候姿に成行候、仍て頭立候歷々は、大綱の取締方を日夜工夫し、尚又虛心平氣にて、人々の忠益を廣め候樣心掛、夫々の有司へ委任して、成功を責ると申候樣に仕候はゞ、君上の御德意不二行屆一筈は無二御座一奉レ存候、乍レ去諸職夫々のはたらきは、其人器量次第に盡させ候て宜候へ共、大本の紀

綱はきつと立居不レ申候ては、一體を總攝整齊いたし候事不二相成一、面々勝手次第に爲レ致候外無レ之、又諸人の存寄を聽んとすれば、「築二舍道邊一、三年不レ成」と申勢に罷成、紛々の議いづれに適從可レ仕哉も不二相分一候へば、臨時の了簡にて何れの故障こゝの故障抔申事もいろ〳〵出來、朝令夕改と申樣に相成候ては、人心の信を取候事なく、扨又まけ惜みに以前の仕方を遂げ度、彼是取繕ひ候もの有レ之姿にも相成候、いづれ紀綱の御立被レ遊候樣專一と奉レ存候、此紀綱不レ立候内は、たとひ三職（日帳、大吟味、御郡方）相應の人才御擇被レ成候ても、非常の俊傑車載計量いたし候程有レ之ものにも無レ之、たま〳〵そこに一人こゝに一人、有志の士有レ之ても、一體のつゝり合相直り不レ申候ては。其職掌振擧いたし候樣にも參兼、一日々々と因循姑息仕候迄に可レ有レ之候、其上迂遠の樣には御座候へ共、孔子の「必也正レ名乎」との給ひ候如く、「名不レ正、言不レ順、事不レ成」と申候事、別て官職の上に多く有レ之事に御座候、何程衆職被二取立一置候ても、所謂「鳥不レ爲レ鳥、鵲不レ爲レ鵲」と申す姿にては、諸事行はれ不レ申候、是は只當時の習俗に溺れ候俗眼よりは、大抵聰明の人にては見へ兼可レ申候、其本に反て見候時は、今の御役に其人の賢愚は指置、大小となく一も其職制を取失はず候もの無二御座一候、御家老職は御用を承候人には勿論、其外にても平生の小事にこそ旁觀いたし候て、御國中公事沙汰六ヶ敷儀、又は他領へかゝり合申し候程の出入は、一同寄合可レ致二吟味一事、一國の老臣に候へば、道理の上にても左樣可レ有レ之筈、他家の振合も大抵如レ此、まして祖宗の御制條如レ此、番頭職もこれに准じ候筈の處、右の歷々今

日御代拜御使御供等仕候計を自分の本職と心得、國家の安危、士民の利病に至り候ては、秦人の越人の肥瘠を見候姿に相成來候故、文武を講じ、古今を明らめ、國の柱石と相成候心がけは、自然と薄く相見へ候、せめて政理の事は不案内に候共、身上をすりきらず、御定の軍役人馬を嗜居候て、祿高相應の御用にも相立候はゞ、大臣の甲斐も可ㇾ有ㇾ之候へ共、今の勢にては中山・山野邊・鈴木三氏の大名分は格別、其以下は段々に譜代の家來も無ㇾ之萬一の節は千石取も御切米取も、同前の姿に御座候、次に大寄合頭はもと總寄合の支配頭に候故、其名も起り、最初は一人或は兩人程にて、上高祿の寄合衆より、下諸役人の御番入不ㇾ仕候者をすべる故、番頭より一等上に立ち、御家老にも亞ぎ候所、只今は寄合の衆指引の支配と心得、頭と稱候人共數猥多々相成候へ共、組分の儀も不分明、頭は其組あるを忘れ、組は頭あることを不ㇾ知候姿にて、指引と申は小頭にて、諸番の組頭同前に候へば、やはり寄合衆の內にて、格式も外にかはりたる事無ㇾ之筈に候所、近來はこれを布衣の列に加へ給ふ、畢竟布衣以上を別段に重く御立被㆓指置㆒候も、自ら人を支配して、其身の上に頭なき故と奉ㇾ存候所、寄合指引は寄合衆の小頭にて、寄合頭の組下なり、頭も布衣、支配も布衣、名實不相當の甚しきなり、諸番頭の職組子を扱申候事勿論にて、平日の指引は不ㇾ及ㇾ申、組子の內に訟獄等有ㇾ之時は、夫々の番頭執政奉行の席に同坐し、判談にも預りたることにて、萬一依估贔屓等有ㇾ之もの有ㇾ之は、其爲に御目附列席にて、これを見屆及㆓言上㆒候事故、諸士の頭をも被㆓仰付㆒候程の歷々は、自然と人品をも相嗜、組

中の指引、理非の裁斷も不㆓出來㆒候ものは、頭職にはつとまり不ㇾ申勢に御座候、其内より尙又御選擇被ㇾ成候て、老中職を被ㇾ命候へ共、組を持候事はやはり番頭なり、功用既に顯れ、德望益部に及で、寄合頭の席に進み、御家老に被ㇾ進候へ共、梶川彌三郎、武藤長左衛門の類眞の家老に異なり、故に才德次第にて三百石以上の騎士よりは、段々此職に進むものも有ㇾ之候所、今は執政なれば最初より大寄合頭に列候ゆへ、輕き族は勿論、番頭布衣以上等の御譜代衆にも、たとへ其器ありとも、容易に其職に擧試むること能はず、御奉行の職またこれに准ず、昔は老中職さへ、兩番頭の出役なりしを、今は御奉行すら、初より大番頭の上座と云事に相成、しかも組をも持たず候、然る故に番頭職に長く居候は、老中奉行等のえりのこしに御座候へば、數多の人々自然と其器の擇みも薄く、家柄祿高計にて、賤推に其席にすゝみ候ゆへ、其人自ら御番頭は馬鹿にても濟抔と、心得候輩有ㇾ之候由相聞へ候、右樣の姿にて諸士を預り居候ゆへ、頭と申も名計にて、其組中の仕置は上より及越の御世話にて御座候、其頭既に無用の閑官と相成候上は、況や組下の御番士は、誠にはきだめ同樣に罷成、自らはげまし候もの少く罷成候道理に御座候、武家の諸役何事も軍役を以て根本として相立候故、諸士の頭としては至て本意に御座候所、別て騎士を預り候事、中小姓步士の支配とは各別ゆへ、其頭も重く候間、小番頭以上は素袍以上の組を持ち、小十人御徒の頭は物頭の間に雜りて、布衣の列に非ず、御奉行の政事に參知する所は、至て重く候へ共、其實は支配に屬するもの、もと醫師隱居、其外定水戶の小役人等なり、然れば其座

席もと兩番頭より一等卑きこと、歴々騎士の大將と差別有ㇾ之故と相見へ候、近世公邊の御眞似を被ㇾ遊候て、役名若年寄と御改被ㇾ成候時より、座席大番頭の上座と被ㇾ遊、其後寄合衆の內よりも、其支配に歸するもの往々出來候へども、雜流の支配を歴々騎士の頭より上に御立被ㇾ遊候事、武を尙ぶの古意に非ず、これは昔がたり迂遠の樣成說話ゆへ姑置、今日事務の上にて申候時は、老中は大體の上に於て統べずといふことなく、細事をば夫々に委任いたし候筈の所、此所如何安心不ㇾ仕候、次に奉行職はもと水戶の惣奉行にて、一體諸役人の指引いたし、政令訟獄の事は勿論、第一土地會計の事を以て專務といたし候故、分別五郎左衞門抔申候古人は勿論、其後に至候ても、近比まで其遺意は少しく相存し候、既に藤田次郎兵衞抔は、土地會計等の事不案內の故を以て、誓紙を上りて參政の命を固辭いたし候由、系纂等にも相見へ候、只今は其職に居候もの、生ながら高祿の歴々とは乍ㇾ申、土地方の事は御郡奉行申出次第、會計の事は大吟味役申行次第、深く立入候事無ㇾ之、たま〳〵御勝手がかり抔申候へば、誠に瑣細なる鄙夫小人の管略いたし候樣成事を、胥吏と同じく世話いたし候迄にて、大體の所は夢にも不ㇾ見候人多く相聞へ候、御奉行の職既に定水戶に候へば、江戶の事はもと御用人これを判し、其後御奉行水戶より交代いたし候に及で、御用人の勢稍々減候事と被ㇾ察候へ共、江戶はもと老中の下は直に御用人にて持候故、小役人等の支配分けも、定府は御用人支配にて、水戶は御奉行支配の故實にて候、御用人は江戶を重に致候故、今に至て御國御用人より比候へば、其職の重き事同日の談に非

ず、御國とても昔は江戸より休息に御遣被レ成候事にて、御勝手方金穀の出入は勿論、町奉行郡奉行等政令の指引も、御奉行御用人連署仕候事古法にて、評定所御用部屋同席にて事を判決いたし候由の處、御奉行職甚重く相成候てより、同席無レ之、江戸計は、此間迄古き形を存候所、是亦水戸の例にて改り候事と相見へ候、古來の通にてこそ、御用人と申名目にも相當り申候所、今は其上に一層御用役出來申候、御小姓頭は御側衆の頭にて、其職掌も亦其主とする所御座候處、今は表へ出候て、御用人の見習と申事に相成候へば、布衣以上の面々一職にても、其職の古意を不レ失候ものは無二御座一候、重役既に如レ此御座候上は、其下の役々は一々論ずるにも不レ及候、名は實の賓也と申候へば、其實さへ立候時は、其名目はいか樣にも宜候得共、名不レ正、言不レ順候故、循レ名責レ實と申候所に至て、見通し甚不便利ゆへ、事不レ成の本に御座候、然りといへども一概に古を是とし、今を非とし候流儀には無レ之候へ共、祖宗の舊章を御尋被レ遊候て、時宜を御斟酌被レ爲レ成候にも、當時の習俗に溺れ居候俗眼にては、不二相知一事の樣に奉レ存候、名實を御正被レ遊候事、上より下まで、段々に御正不レ被レ成候ては不二相成一候事勿論に候得共、御家老以下布衣以上の所は、皆々歷々の事に候間、愚賤の小臣彼是評議仕候も、輕卒に近く、殊には歷々の事にて、朝には必坐し、燕には必預る人々の儀に候得ば、其人々の賢否は不レ及レ申、其職掌の得失までも、もはや大抵君上の御明察被レ爲レ在、漸を以て被レ成度候御工夫可レ被レ爲レ在歟と奉レ存候、仍て其以下の有司まで位は卑しといへども、其職掌の得失に依て、

一國の紀綱にかゝわり候もの、御目附の職尤以要とする所に御座候へ共、是は既に君上の御英斷を以て、權臣手を收め、衆猾跡を屛め申候勢に相成候上は、監察糺彈等の事、大半古に立返り可ㇾ申と奉ㇾ存候、其上の事は一體の制度御脩整の上ならでは、參り申間敷候、然れば返すぐも、日帳方大吟味方御郡方の三職を御手入御座候事、急務たるべくと奉ㇾ存候、尤御郡の奉行共追々召登せられ、御尋等被ㇾ爲ㇾ在、日帳大吟味の兩役も、老奸衆賊の輩、近比御沙汰も被ㇾ爲ㇾ在候へば、是亦始終善き方へ赴き可ㇾ申候へ共、年來の積弊は勿論、當時近功を貪り、小利を求め候習俗の內より出身いたし候人を以、御勝手鄉村等の御用を惣掌り、尙亦衆人の論摸稜姑息を貴び申候風儀ゆへ、三職の功課を責候事も、靴を隔て痒を搔くと申候樣に可ㇾ有ㇾ之奉ㇾ存候、君上の御英斷を以て、上下肅然たる勢に御座候處、此機會に乘じて、舊染汚俗御一新不ㇾ被ㇾ遊候ては、一日々々と因循怠惰仕候樣に罷成、何程の御明德被ㇾ爲ㇾ在候ても、新民の御功業十分に立兼可ㇾ申哉と、乍ㇾ恐殘念奉ㇾ存候。仍ては庸人の俗論を御破り、古今に通じ治體に達し候もの、兩三人も御擇被ㇾ遊候はゞ、右三職の內へ御交へ、御前幷執政執事の前に於ても、存寄次第直言極論を御盡させ被ㇾ遊候て、其上にて君上御剛明の御威德を以て、惣體の紀綱を御取締、且英雄を駕馭するの術を御施し被ㇾ遊候はゞ、踶齧の馬も千里の道をいたし可ㇾ申候、左も無ㇾ御座ㇾ候ては、當路の人々媢疾の心よりして、己に從ひ制し易きものを好候時は、名馬の足をばつなぎ置、奔踶の患を防ぎ、駑馬を日々に鞭策仕候共、はかぐ敷用をも成さず、平坦の途は無事にも

あゆみ可レ申候へ共、一たび險阻にあひ、兼日倍行仕候時は、力盡き汗流れて、自ら斃れ荷物を覆し候より外有レ之間敷奉レ存候、ヶ様の狂論如何敷可レ被レ爲二思召一候得共、とかく今日の姿庸人の論破れ不レ申候内は、目前の小利害にのみ拘り居候て、しかも又諸事目當相立不レ申、折角厚き御慮を以て被二仰出一候祖宗御舊制の意味を御糺し、殊更先公御遺志を御紹述被レ遊候て、風俗を正し武備を整へ、士民の御撫育御行屆被レ遊候樣にとの、深遠なる思召自然に聖人庶・富・教の古訓に御合被レ遊候難レ有御儀共も、これを事業に御施し被レ遊候所、右の盛意をよく〳〵奉行仕候もの無レ之、虚文の樣に相成嘆敷奉レ存候、御初政の砌御德化流行仕候と、壅塞いたし候との大機會實に今日に御座候事と奉レ存候間、能々御工夫被レ遊候樣仕度奉レ存候、愚者千慮必有二一得一、狂夫言も明主擇焉と承候へば、狂愚の說も少しく御心得の一端にも可二罷成一かと奉レ存候故、三職の事務に付取調の致方、愚案の趣別項に可二申上一候

封事（第四、御勘定吏員幷職掌の議）

一御勘定奉行、格式是迄之通、但し其人によりて物頭以上にも列すべし其員三人にて、一切の會計を惣括し、財用を均節するの式ありて、諸の調度、皆此職の承知を經て後すますべし、豫じめ地の小大、年の豐耗を視て、金穀多寡損益の勘へを定め、執政の大老、國用を制せらるゝに、「量ㇾ入爲ㇾ出」の資となれる事を、專ら職務とすべし右當國寛永の初制に據りて、斟酌せしめ、遠くは異國周公古への聖人の周禮に考へ、將軍家の御定めに本づきて建議する所なり

但近世財用の權、專ら大吟味役に歸し、勘定方は金穀損益の政にならざれば、其奉行を撰むにも、ただ律義一篇の人物を用ひ故久方忠衞門嘗て此職に居り、のちに其親きものに語て曰く、某多年其役筋を勤めしに、御勘定奉行ほど、閑散なる職はなし、役所へ出ても、上ノ間に居て、一切の事務は、下勘定と手代のまゝなり、御勘定きはまりて後、下吏券書を捧て、押印すべきよし申にまかせて印を押す、たとへ下に姦吏ありて、我首の落べき程の事を計られても、其書付に押印せよといへば、押印すべきなりと、此物語はむかし久方が手につきし小吏の說也と云、是によりて見る時は、當時の御勘定奉行は、有名無實にして、自ら姦をなさゞれども、萬一下に姦吏ありとも、糺察すること能はざる事勿論なり、しかるに古昔要劇の職たりし時の故事を追ひて、此職に任ずる者、年勞によりて御切符より知行に成、知行にては御加增を賜はる事無用の事ならずや濟ㇾ事の急務に供するに足らず、故に大吏の賢者にも、其職の廢すべき歟と慮られし事もありといふ、但し其名を正しくする時は、大吟味といふ役名はやむべくして、御勘定奉行といへる名、天下普通の職名にして停廢すべからず、因て大吟味の號を止めて此職に倂せ、役名御勘定奉行として、其人は

大吟味役つとむる程の才を擇で入替にすべし、寛永十四年より割物奉行始りて、其職寛永御改革の時に至りて、大吟味と改まりたれ共、割物の名目は可なり、大吟味の名正しからず、財用の出納は上士已下の有司に割物をさせて、其大吟味は執政の大老にて爲し給ふべきなり、扨割物奉行の號は可なれども、もとこれ勘定所の職掌繁劇なるゆへ、其務を分ち掌る樣にしたる故、其役の初はみな御勘定役より移されて、長谷川五太夫等が如き、特に其才を擧らるゝと見えたり、正保年中御引替地の事あるに至つて、貳百八十石不足のよし、公儀御代官衆申旨ありといへども、御家老御用人御勘定奉行割物奉行各壹人づゝ、江戸御勘定奉行所に趣き、却て千七百石餘取返せし事、専ら長谷川が才幹によれば、是等の人才初て割物奉行に任ぜらるゝ事、其所を得たりと謂ふべし、然れども當時に在ては、其職掌を分られたるに利あれども、今は却て弊生じたれば、寛永の初制に立返りて合併せられんに、かたゞゞ便利多かるべし、是たゞに紛更を務むるにあらず、時の宜に隨ふなり但し寛永の初制には、此上に御勘定頭格式御旗奉行御勘定の目付などといふ役あれども、是は今の御奉行御用人い兩職いまだ置き給はざる已前の事なれば尤なり寛永十二年己亥、御勘定頭御勘定目付の兩役を止られ、此職の人々御奉行御用人になさる、是御奉行御用人の初也、寛永二十年癸未三月の御條目に、一金銀米錢請取渡、金拾兩以上銀拾枚以上錢五十貫以上拾石以上は、奉行一人可レ爲二裁判一用人等裏に可レ致二加判一事」と見へたり、是にて職制の沿革を明らむべし既に御奉行御用人といふ顯職を創め設け給ひて、右の役より移され、執政に亞で諸役人の上に立、御勝手御用を聽せられ、御勘定奉行下勘定役皆御奉行衆の支配する所なれば、右の役は無くして可なりこの故に寛永十二年より今に至て、御勘定奉行のみにて、頭并目付といふものなし且公儀にて松原右衞門大夫正綱・伊丹播磨守康勝等、御勘定の頭となりしより後、或は奉行と稱し、或は頭と稱し、差別ある事を聞かず、されば御勘定奉行を以一役所の首長とすべき事勿論なり、人數の事も是迄の通りにては、皆々無用の冗員と見て、新に大吟味の職をこゝに轉ずる事なれば、三人程にても其人さへ得れば、不足なかるべし、公儀にて、御勘定奉行、今は數人に成たれ共、公事方道中奉行等に、其掌る所分れ居り、御勝手掛といふもの三人に過ず、天下の大なるすら既に此のごとし、其他は推して知るべし御勘定方大吟味方分れ居る時は、各其下役に分れ附せらるれ共、今兩役を併せて一となすときは、御勝手の御用一所にてすむゆへ、其下の手代悉く併省すべし、此事詳に下に述べし其上勤功によりて兩役へ御慰勞

ありしを省て、一役となるゆへ、たとへ何程の劇務にて三番交代に命ぜらるとも、相應の役料別に賜はらんにも、御手支は有まじきなり

一　御勘定吟味役、格式是迄之通、（但し其人によりて、差別ある事もあるべし）其員九人（但し御勘定奉行と同く、三番交代にて壹ツめ三人ヅヽなり）御勘定奉行の佐となりて、諸の簿書會計（テガタカンヂヤウ）を鈎考（ギンミ）し、凡出納の事妄に費へざる工夫を專一として、清廉に沙汰いたすべし

右公儀の制度に倣ひ、大吟味を勘定所に併せ、寛永の舊規に復する時は、小吟味の役をも此役所にて持つべければ、江戸水戸御用部屋の支配たる吟味役といへるものゝ職掌を、こゝに併せ掌らしむるつもりなり、（吟味役の初も、寛永十六年己卯より置かれて、大吟味の濫觴なりといふものを、御勘定役より移し置かれし後の事なり、初は人數も少けれども、後世次第に瑣細になりて、今は江戸水戸合せて貳拾人にも餘りぬべし、餘りに冗員あれども、其吟味する所はいさゝかの事にて、小給の士より加扶持、并に三年三石、五年五石の常例御加恩等あれども、恐らくは其得るところ、失ふところを償はずと云事に至らんもはかりがたし、宜しく減省あるべし、但是まで吟味方にて兼職せし、御普請奉行御賄頭等の數は、各々其事務もかはるによりて、吟味役とは別物になし、其中より才幹清廉の人を擇びて、其本職に定め、常の吟味の務は、吟味役中より其萃を拔て、御勘定吟味役と定られん事は、便利なるべし）　今の所謂御勘定吟味役といふものは、安永二年御勘定役の數を減じて三人となし、因て其初此役所より出身せし御代官（小濱次郎衞門）吟味役（中野兵助）のうち各壹人を以て、此職に補す、御勘定役減ずと雖も、昔なき此役兩人設けたれば、實は御勘定役五人に增たる同前なり、其上今は下勘定二人を增たれば、すべて七人になりたるなり、さて此御勘定吟味役の號、公儀にも四五人づゝ置るゝ事なるによりて、其名を擬（マネ）して此方にも立たると見ゆれ共、其名同じくて實異なり、正德年中新井筑後守君美建議して、當時御勘定所と申は、天下の財を生じ、出すも納るも、此御役にかゝりぬれば、六十餘州の人民の樂しむべきも苦しむべきも、此職を

奉れる人々の、其人を得ると得ざるとによる、是等の劇務備らむことを一人に求むべからず、されば
むかしの御代のごとく、其吟味の役といふ職置れずしては、しかるべからずと申によりて、杉岡彌太郎・萩原源左衛門兩人、御勘定衆の組頭より撰び出されて此職を承る、此職を置れし明年、御料の貢米凡四拾三萬三千四百俵を増して、百姓ども相よろこぶこと大かたならず、是下吏の奸私をたすを得ざればなり河堤等修築の料は、また金三萬八千兩を減じて、水旱の患もなく、漕運の事も是までは、年ごとに海に沈みし米數萬俵、此後よりは覆沒の患ある事を聞かずといふ事、ある記に見へたり、是公儀の事にて、天下の大なる御勘定所より精く吟味せば、其利を興し費を省くこと莫大なるも尤の事なり、天下と一國と大小の差こそあれ、御勘定吟味役と號する上は、死物にばかり吟味せずして凡諸の所用簿書にのりたるを勘定して、其拂さへ立てば、其餘は管せざるゆへ、これを死物といふ、活物の上にも吟味を加ふべきに、分財用の費績、貨物の損益、役是出すも納るるも、吟味の上にあればこれを活物といふ左には非ず是は今にて大吟味小吟味の役、他にありて、御勘定所は契券（テガタ）のみにあづかればなりたゞに下勘定の頭取となりて、會計出納の指引を極るのみと見へたり、是にては吟味の名に當らず、定りたる出入の勘定吟味を加へざれば、定むる事能はずんば、下勘定其器に堪へざるなり、若出方入方の勘定惣しらべをなして、指引を立る事能はずとならば、是御勘定奉行奉職無狀といふものなり、故に名に循て實を責むる時は、是までの御勘定吟味は廢して可なれども、幸に其名の存するに因て、吟味方をこゝに合併せば便利なるべし、吟味方を正むれば、是まで統帶の諸役は、各其本職を立べき事、既に前に述るが如し、但し御詮次のくみ立等は、元來御勘定所にあるべき筈なれば、則こゝに移して可なり、御用人支配の吟味方と御勘定所の吟味役を合併して、是まで江水二十餘人の所なるゆへ、九人にて三人ヅツ交代と記せども、能其人を得て事務の條理を整ひたらんには、六人にして兩人ヅヽ交代すとも、闕に合

はざる事ある可からず

一 御勘定役、格式是迄の通、但御規式の本格 其員六人にて入方出方の勘定を分ち掌るべし 但し兩人づつ三番交代

一 下勘定格留附より以上、御買物使御徒目付次坐まで、各其人によりて差別あるべし、但し御規式にうつらば、御勘定衆と唱へて下勘定と稱せず、 其員拾貳人にて、御勘定役の手に付 壹人に兩人づつ 入方出方の務を分ち、且一手ぎりの小勘定をつとむべし 交代

一 留役 格式何にても、員は宜きを計て置、但見習衆より兼るも可なり 見習衆 御郡奉行已下の子供惣て召出され、以上の子御役筋かせぎ候者 此外手代務一切無用たるべし

右御勘定役と、下勘定との品をわかつ事、御勘定衆の格、古と今と段々に差降あるによりて、 むかし御勘定奉行の下に、たゞ御勘定役數人あり、即ち此を下勘定役と稱すれ共、御規式日帳役吟味役等の上に列す、しかるに寛延二年己巳十月六日、御勘定方より村上數衛門此役被ニ召出一に、初めて御徒目付次座と云ふ事になり、其後年數を歷て、御規式の本席となる、久しく此例なりしが、天明七年丁未八月廿九日、安藤市左衛門を被ニ召出一るは、また等を下りて御買物役格となり、今に至ては御勘定役皆この格にて、御規式は勿論、御徒目付次座たるものなしと云、 然ども是より直に御買物役吟味役等に役替して、御規式已上にも至れば、初の階級を細かにきざしたる迄にて、下吏出身の路を悉くに防ぎたりとも見へざるなり 御規式の人にて出方入方の勘定を職とするを、御勘定役と稱し、不規式にて其手に付てつとむるを、下勘定と稱する時は、名正しくして言順なるべし 公儀の御勘定奉行の下に、吟味役と云者四五人あり、其下に御勘定衆と云ふもの數十人あり、勘定衆にも上中下の三等ありと或記に見ゆ、其詳なる事はいまだきかず 但し見習ひ衆の中より、御規式已上に召出さるべき家格の人にても、俄に御勘定の本役に成りがたき事もあらば、御勘定役と稱せず、御勘定衆といひて、其つとめ方は下勘定同樣たるべし、御勘定奉行並吟味役の下に、御勘定役ありて、各其出入を計り、其下に小勘定をなす者拾貳人 今まで手代の數も段々まされて、拾貳人に及べり これを號して下勘定と云時は、其下に又手代をつかふべき樣なければ、已來は一切にこれを停廢すべし、〇大吟味方も此役所に合併する上は、是まで大吟味の手代といふもの亦皆やむべし、但是よりさき召出され、已上に爲りて其手につき居

るもの等は、直に下勘定に補せらるべし

さて入方と出方と局（モチマヘ）を分て、各其勘定を掌るは聖人の遺法なり、周禮司會職の下に、職内といふは、「掌二邦之賦入一」是入方勘定役なり、職歳といふは「掌二邦之賦出一」是出方勘定役なり、さて職内は上士二人、中士四人、職歳は上士四人、中士八人といへり、何れも其職の實位は同じけれ共、其員に多少あることは、蓋し入方には其收る所の數、其所より若干、某所より若干と分つと雖も、大抵つゞまりて出るゆへ勘定に手間取れず、出方には事緒多端にして、某の用に若干、某の用に若干といふ事、いくつをもあつめて會計を為すゆへに其員入方の役に倍するなるべし入方の職は出方を知らず、出方の職は入方を知らず、是其上にこれをすべ司どるもの有ゆへなり、下勘定に至ては、其持前益小さくなりて、一方ばかりの勘定を受取るべし是までは手代にても、國用の惣數を知り、出入の有餘不足より一切の經費、某に若干、某に若干といふまでをも見ることを得るゆへに、何の材識なきものにても、此役所より立身せしものは、御勝手の事に功者なる尋常小吏の所レ及に非ず、まして其間に少しく才ある姦猾の徒は、此に於て心を生じ終に立身して國用の柄を操らんと欲す、其害あげて言ふべからず、凡國用出入有餘不足のわけ、其職にては御勘定奉行大吟味これを知りて、上の執政御奉行までこれを聽き、御用人よりは聽こと能はずといふ、かくまで重ぜらるゝ秘數を、手代の輩まで知ることは、是まで職制のしまりなきに似たり、但御用人衆にも、此數を秘し玉ふといふこと心得られず、御奉行御用共に諸役人の貫首をして、就中御勝手の御用を專ら司どらるゝに、割物奉行の知べき程の事、聽こと能はざる謂れなし、恐くは寛永御改革のころ、割物奉行を以て、大吟味とせられし以來の事にも有べきか、とかく古制にあらざるに似たり、寛永の比は御町奉行御勘定奉行等の職へ、政令を傳へらるゝに、御奉行御用人連名の狀、いくらも見へたり、殊に郷村檢見取附等の事、并御中仕置等の事迄、御奉行御用人一同に相議ありし事、古き記録に見へたり、今は是等の事、御用人衆の與かる所とも聞へざれば、この歳計の惣數なども、昔は聞かれて今は聞かざる如く變ぜしにや、いづれ御用人の職掌其本を失せるに似たり、——御勘定奉行より以下の役人は、たゞに損益のみを論ずるゆへ、君子より見る時は、——所謂出納の吝謂二之有司の失なきこと能はず、[illegible]に其上に立たる御奉行御用人の兩頭職に居らるゝ人は、政の大體を知て諸役人を指揮せられば、大小の政其失少なるべし、然るに今は御用人の職を承りながら、勘定手代さへ知れる歳計の總數を知らず、徒に吟味役の小頭の如くなりて、米味噌瑣細の事のみ沙汰せられ、格式諸役人の上に立といへども、其時務の緩急にあづかる事、却て大吟味に如かず、怪むべき事なり、これより上御年寄衆にいたりては、位祿貴ければ、歳計の大要を聽て國用を制せらるといへ共、當今の弊勘定むつかしく、斗筲の人ならでは呑込がたき仕方なるゆへ、遂に割物をすべき輩に、國用の大本を制せしむ、これら一概には論じがたけれども、多く御勘定所の小吏等より出身せし、政の大體は夢にも知らざる輩なり、在上の歴々も、不レ得レ已して手を拱き、成ことを此輩に仰がるゝ事、嘆かしき事ならずや、是しかしながら在上年寄の過には非ずして、制度の失せるが所レ致なるべし、老子にも「國利害不レ可二以示一レ人」と云事あれば、凡紀綱の大なるは歴々のみ知り玉ひて、小吏には小吏だけの事ならでは知らせざる事、爲政の體を得たりと申すべき歟

凡御勘定役を命ぜらるゝに、必御勘定手代より召出さるゝ事、至極の宿弊なり、斗筲の人を以て御勝手の役人となすゆへに、終に國體の害

となるは勿論、諸役所の手代は御取立少く、此役所と大吟味方とに限りて、年數によりて士流に列し、其尤不才にて用に立ざるものも、與力にはなる事なれば、立身を好むは貴賤人情の同然なれば、諸手代の少しく利口たるものは、此役所をかせぐなり、御備方などは大切の役なれ共、元〆の外は立身のみち埒明かざるゆへ、其中少しく才あるものはこゝをかせぐゆへ、其本役はこしかけにて身をはめず、また器量ありても不勝手等にてかせぐ事ならざるものは、空しく沈滯身を終るなり、此かせぎの事に付て、風俗の害に成こと甚多けれ共、事長ければこゝに略す、經常易簡の法ありて、算術さへ學べば誰にても勘定出來ること、正大公平の道なるべきを、さまざまの瑣細邪曲の法あるゆへ、他より入ては容易に呑込がたき故、所謂「權在二胥吏一」といふものに成て、國家の利に非ず、凡勘定を造作もなくして、誰にても呑込やすく、しかも姦欺の出來ざる仕方あるべけれども、事長ければこゝには記さず

元和寛永のころ、此役を設けられし時、內原勘衞門 貳百石のち御勘定奉行 長谷川五太夫 切符より貳百石、のち割物奉行 津田作左衞門 寛永年中奉仕貳百石、後割物奉行、 駒井又兵衞 上に同じ 林十左衞門 寛永二年奉仕貳百石、のち勘定奉行 三宅兵衞門、 百貳十石、のち御代官役 岡村太左衞門、 百俵に六人扶持、後百五十石を賜ひ、御代官御郡奉行等を經 近藤七左衞門 切符にてのち百貳拾石を賜ふ、其後御代官 松本平左衞門 切符より後百貳拾石を賜ふ、以上三宅まで、共に寛永二年奉仕の事なり 等の類は、何れも他家の士にて、知行を賜て 其内切符の輩もあれども、厚俸なり、且のちにみな知行となし給ふ 召抱らる、後世の御勘定役に比擬すべからず、其後承應明曆の頃より、下勘定に召出さるゝ輩、みなみな切符なり 貞享三年丙寅七月、淺田貞衞門、元祿七年（マヽ）四年正月、大井武左衞門いづれも五拾石にて召出さるれども、是皆其父の本祿の內を分ち賜はりし也、淺田が父は御代官の隱居、大井が父は御郡奉行にて兩人ともに其次男なり

威公・義公の御代には、御勘定方のもの其才によりて進撰せらるゝなきには非ず、然れども今の如く此役所より生れ出さゞれば、つとめがたしと云事決してなし、故にむかしは御勘定役に御徒よりうつるもあり、元和年中に小池七左衞門 或は御徒目付より、寛永年中、及川彥左衞門、高七拾石 或は御小姓目付より、寛永年中、成見何衞門、高百石小川喜太夫は御切符なり、 或は小十人組より、正保年中、村松五郎は高百石 或は與力より、慶安四年、溝口平左衞門、高百石、寛文二年、御勘定奉行、 或は元與力御暇後歸參より、

延寶五年、岡澤角右衛門行なり、のち吟味役となる或は御進物奉行より、貞享元年原忠右衛門或は御用部屋物書より寛永六年、己丑四月、入江庄介、但し猷公御代の事なれ共、他よりうつりたるゆへ、こゝに附記す、或は御膳奉行の次男より、大井弐左衛門の事、上に見ゆ、或は御勘定所見習と云より、明暦元年、篠本七衛門、是嚴有公の御時なり、寛文二年壬寅十一月廿八日、岩本安右衛門、是義公の御時也、其後にも寶永元年甲申正月十八日、佐久間覺兵衛、享保二十年乙卯九月九日、佐藤軍次、寛延二年己巳十月六日、小澤文司、寶暦十三年癸未十一月八日、高橋市兵衛、是皆見習より御勘定本役になりし也、其外もあるべけれ共、書漏しければ委く考へず、皆此役に爲りし例ある也、其見習と云ものには、ひとり二男三男のみに非ず、割物奉行貳百石の惣領にても、切符を賜て勤めしもの有、廣木大衛門の惣領長八、元祿七年甲戌六月の事也、但し父隱居するに及では、家督百五十石を賜り、御馬方となり、御勘定役とはならず、此外にも其類あるべし、猶又追て考べし しかるに近世一際に手代の中より、年數の順にて召出されて、下勘定の闕に補するゆへ、しばらくの間其本格に爲さず、御徒目付の次座とし此例寛延二年十月より初る其後また一等を下げて御買物使格とし此例天明七年八月より初る其頭取に吟味役あるのみにて、御勘定役の本席は勿論、御徒目付次座にものぼせず、是其階級を細かにきざみて、容易に御規式に登せざること、古人の所謂愛二惜名器一と申す意にて、惡きには非ず、然ども胥吏の權を奪ひて、其宿弊を革め、何方よりうつりても、此役つとまるべき工夫はなく、其手代より取擧ることは、依然として舊の如く、遂には御規式の役にうつせば、何の詮も無き樣也、其上實に其才器の拔群ならば、昔の如く直に御規式になすとも、惜むべきに非ず、もし又たゞに手代古役の手數のみにて、此役所に限りて非レ文非レ武の輩を騰推にて士流に列せん事、風俗の害名器の卑くなること、是より甚しきはなき事勿論、他役所手代の心を惡くすること莫大なり但し昔の勘定手代と云もの、今とは同じからざる事もあるにや、或人の記書に、元切米拾石五斗五人扶持、御勘定手代淺田貞衛門、貞享三年寅七月十一日に、親傳兵衛隱居被二仰付一、知行地方百石を拜領にて、五拾石づゝ兄弟へ分知被レ下候とあり、水府系纂を考るに、右手代たりし事は載たるにや見へざれ共、父

の分知五拾石を賜て、勘定役となる事を載す、父傳兵衛に、寛文元年義公に奉仕、百石を賜て與力となり、七年十一月、御代官にうつり、貞享二年十一月、老衰によりて小普請組、三年七月十一日、致仕して意伴と號す、惣領忠八は、家督を繼、本祿の內五十石賜て、小十人組となる、貞衛門が事をば傳五衛門、初名喜八と系纂に見ゆ、是傳兵衛の次男たりといへ共、傳兵衛既に與力より、御代官にうつれるに、貞衛門猶手代をつとめしと云事、不審なきに非ず　すべて此役所の習俗新故の分を嚴く立て、智愚賢不肖を論ぜず、古役に手をおく風なるゆへ、手代には諸役所勤のものかせぎといふを入てうつれども、諸役所の手代より、表向てかせぎといふを入るゝには、其頭よりも詞をそへて、御勘定手代あき有次第召抱下され候へど、御勘定奉行へ賴むとなり、近來たま〳〵かせぎを入ずしてうつるものも有しといへども、是はたゞ表向てかせがざる計にて、內證は御勘定所一とうへ取入て、其推擧を得れば、かせぎたるも同樣なり

元來其かせぎを入る時より、下勘定幷に手代へ屈伏して自由になるゝものゆへに、其まゝ指引て勤めさす也、手代は下勘定の闕を待ち、下勘定も本は手代より出たる輩なれば、順ぐりに其見合せを拵ゆる事故、御家中の子弟は親の格式重きものは勿論、御廟番等の跡にて召出されには、不規式となるべき者にても、見合を入る事此役所にて實は甚嫌ふ事なり、威・義二公の御世は勿論、時代も古く下勘定役皆御規式なれば、たとへ割物奉行御代官等の子弟見習に出る共、別て邪魔にもならざれ共、其格次第に卑くなるまゝ、寛延二年より、御徒目付次坐、天明七年よりは、御買物使格 己が上に立ものを嫌ふは俗吏の常情なり、故に高橋市兵衛より以來久しく見習と云こと絕たりしを、近來また御廟番等の子供を見習より召出す事初れるは、大なる善政なり、願くは此機に乘じて、宿弊を一洗し、右に述議する如く、職制を定めて手代と云ふもの、此役所に壹人もなき樣にせば、其政體に益あること勝ていふべからず　大吟味もこゝに合併するゆへ、其手につきし平手代も減ずれ共、是は先づかぞへずして、御勘定手代といふもの凡拾貳人、其切符壹人三人扶持に八石とつもりて、其數合て米九拾六石に、扶持方三拾六人分なれば、金にして大抵百三十八兩程、知行にては數石に當るべし、右悉く減じたるうちより、見習の衆へ年々少々づつ御褒美金、或は御扶持を賜る共、不足はなくして有余

莫大なり 是までは手代といふもの有て。下勘定にうつり、たま〱見習とて入れば、其手につきて勤方手代と同様なれば、諸士の子弟は耻て見習に出ざるなり、但淺田が事は年久しき事にて、今とは様子も違ふべければ、其事情も明かならず、妄に此を例として、諸士の次男も此役所の手代をつとむべしといはゞ甚あやまりなり、自今以後手代と云者、一切絶て諸士の勤る所と定まらば、諸役人は勿論表方平士の子弟よりも、乃至與力物書等の子までも、それ〱に見習を命ぜられば、のち〱御勘定奉行下幷勘定等に、人の乏き患なきのみにあらず、其外の諸役人にも事かぎ給ふまじきなり

右の述る所にて、御勘定職員の要其大略を見つべし、若夫れこれを潤澤せん事は、明君と賢相との上に在せば、吾儕小人の敢て及ぶ所にあらず、大抵古より會計を職として、身を進る者、國政の是非を顧みず、民情の弊疾をも度らずして、唯利のみ是積、惟節のみ是求るときは、或は仁を傷り義を害ひて、國體を損ずるに至る、故に司會の職を統る政の大體を知て、才且賢なるものに非んば不可なり、今御勘定奉行上に御用人衆あり、御用人の上に御奉行衆あり、又其上に御年寄衆ありて、何れも顯貴の位に居て御勝手の御用を聽せらるゝ事、聖人の遺制に協へり、御年寄御奉行御用人と申は、たとへば古く太宰また冢宰とも云ふ 小宰々夫の職のごとし、さて司會の職は此下に屬するなり、深く考へざるものは、國用出納の事、賤有司の務の様に思へども、財の有無、國の貧富、民の休戚、兵の强弱、世の治亂、皆これに繋る所なれば、實に人君治世の大用にして。大臣經國の要務なりとかや、故に財用は有司より上に供すれ共、其式法は大臣にてこれを掌ることは、有司は職卑しければ、衆に抗して衆を制すること能はず、大

臣なれば下は有司を制して、式法に逆て擅に供せざらしめ、上は人主を約（マヽ）しするに禮を以てして、式法に違ひて過用なからしむ、故に經常易簡の法一定して變せず、用を節して人を愛するの政能く行はれて、兵を足し、食を足し、民をしてこれを信ぜしむる事も、皆こゝより生ず、然れば財用を均節するも、尋常官府の經費こそ賤有司の力にも及ぶべけれ共、其上の事は大臣の任に非ざれば能はず、古の聖人量ㇾ入以爲ㇾ出、歲の國用を制する事、これを冢宰の大臣に司どらしむ、其慮至て深遠なりと申べく候也

封事（第四）大尾

勸農或問

藤田幽谷著

勸農或問卷之上目錄

侯皆然ラザルハナシ、土地・人民・政事ハ諸侯ノ三ノ寶タルコトヲバ忘レテ、屑々トシテ工商ノ徒ト利ヲ爭フニ至ル者アリ、夫レ町人ハ素封ノ富ト號、元尺土一民モ有ラザル者ナレバ、貨殖ノ術ヲ善クシテ金錢ヲ寶トスルヨリ外ニ、寶トスベキ寶ナキコト勿論也、夫ニヨリテ貨殖ニ巧ナルコト、中々士大夫ノ智ニテ及ベキ所ニ非ズ、シカシ各々其寶ヲ寶トセンニハ、古ノ英雄豪傑、富國ノ術樣々アリト雖、皆々其務トスル所、農桑ニ基ヅカザルハ無シ、百工ヲ來シ商賈ヲ通ジテ、國ノ利ト爲ルコトヲ謀レル類モアレド、其本立テノ後也、或ハ常賦ノ外ニ山海ノ鑛ノ類、并諸ノ國産ヲ興シテ財用ヲ助ルニトヲ富ス、猶本末也ト謂ベシ、但古ト今ト時異ナリ、徒ニ古人國産ニヨリ國ヲ富マセシ陳跡ヲ見テ、其實傚ヲセントセバ、守株待兎ノ類ナルベシ、古ハ民ニ取ルコト細カナラズ、定レル賦稅而已ニテ用足リシガ、軍國多事ノ時ニ及デ、國用或ハ足ラザレバ、英豪ノ士時ヲ濟ノガ爲常賦ヲ增サズ、別ニ國産ノ利ヲ考ヘ、富饒ヲ以テ國ヲ富セシ事モアル也、今ハ民ニ取ベキ程ノ物、毫釐モ遺ル所ナク、昔ハ意外ノ急事有トキノ用ニ備ヘシ所マデ、今ハ悉クニ取リ盡シテ無事ノ時ニ用ヒ、皆々冗費ニテ廢スヤウニ成タレバ、昔ノ財利ヲ議ル者ハ工ヲ爲シ易ク、今ノ財利ヲ言フ者ハ術ヲ爲シ難シト先哲ノ言シハ、誠ニ尤ナルベシ、古ノ人ノ利ニ喩ルハ天性ナレバ、諸々國産ノ品ヲコシラヘテ利アルコトナラバ、是迄下ニテ爲サズニ置ベケンヤ、常國ハ威公。義公ノ基ヲ立玉ヒシ所、富強ノ業他ニ譲ルベカラズ、當時智計ノ臣、望月五郎左衛門（後ニ分朝恭順左衛門ト稱セシハ、此人ナリ）、長谷川五太夫（後ニ庄左衛門ト名アル人）、平賀勘衛門（[illegible]人、[illegible]ヲ以テ名アリ、義公ノトキ[illegible]）

ノ如キ、共人ニ乏シカラズ、上ニシテ興スベキ國利アラバ、後人ヲ待テ殘シ置ベキ謂レナシ、一槪ニハ論ジ難ケレドモ、今マデ上下トモニセザル遺利アリトイハヾ、多クハ利ナキコト、知ベシ、但威・義二公ヨリ已來百餘年來、時移リ物換レバ、土地・人民・政事ノ三寶在リハアレドモ、弊生ジテ昔ノ如クナラザルモノ多シ、今明君賢相千載一時ノ際會ニテ、大ニ言路ヲ開キ仁政ニ志シ、百年ノ積弊ヲ振ヒテ、昔ノ純治ニ返サンミトシ玉フ、願クハ三寶ヲ寶トシテ、勸農ノ政ヲ先キトシ玉ハヾ、誠ニ民ノ父母タル君子ニシテ、庶富ノ業成ルコト、日ヲ指シテ待ベシ、國用ノ不足、何ゾ憂フルニ足ラン

問　勸農ノ急務タルコトハ勿論ナリ、人民減少、田野荒蕪ノ餘リナレバ、タトヘ農ヲ勸ムルトモ、荒地急ニオコス力アルマジキカ、入百姓シテモ多クハ成就セズ、管子ノ令ヲ嚴ニストモ、五年十年ノ役ニハ立マジ、取箇ノ什ガ三餘折タル、イカニシテ早ク立返リ、國用タルベキヤ、但庶・富ノ策目前ノ用ニ迂遠ノヤウナリトモ、後ニヨキコトハ爲サデ叶ハザルナリ、七年ノ病ニ三年ノ艾ト申コトモ侍レバ、今ヨリ心ガケハ間ニ合コトモアランカ、如何　曰、元祿十三年庚辰（義公西山ニテ薨ジ玉ヒシハ此年ナリ、明年辛巳始テ廿八萬石ヲ三十五萬石ニ發算セラル、）國用大ニ不足シテヨリ已來、今ニ至ルマデ凡一百年、聚斂ノ臣踵ヲ繼デ出、所謂「竭レ澤而漁、豈不レ得レ魚、明年無レ魚」トイヘル勢ニテ、國民次第ニ疲弊セシカバ、戶口耗損田野荒蕪シテ、税亦隨テ折減セシコト、一朝一夕ノ故ニ非ズ、其由來スル處漸アリト知ルベシ、昔元和・寛永ノ際ハ萬民始テ戰國ノ苦ヲ離レ、太平ノ樂ヲ得タリシカバ、人々競テ本業ヲ務メ、力ヲ田畝ニ盡シ、武家ノ諸浪人ハ多ク

農間ニ歸シ、編民トナリテ草萊ヲ墾闢ス、是所謂「人有レ餘而地不レ足」ト云フ勢ナリ、本ヨリ、干戈ヲ捨テ耒耜ヲ事トスレバ、夏畦雪蓑ノ勞骨折ルトモ思ハズ、大半ノ賦税五ツ取ヨリ以上收納セルコトアリトモ左マデ怨苦セズ、寛永之檢地段歩ハ古ヨリ縮メ、豐臣氏ノ法六尺五寸ヲ一歩トシテ、三百歩一段ナリ、當代ノ法六尺ヲ一歩トシテ、三百卅一段ナリ、段別ノ分米ヲ盛付ルコト舊數ノ儘ナレバ、田租ノ額舊ニ比スレバ、許多ノ增過アルコトハ勿論、時人ノ力マカセニ墾開セシ山ノ半腹、谷ノ中間、尺寸ノ餘地モナク、繩ヲ入テ税ヲ起セシト云、是後寛文・延寶ノトキニ至ルマデ、勸農ノ政行ハレ、民力甚壯ニシテ、名田少キ者ハ人數ニ齒セザル風俗ナル故、競テ新田ヲ起セシニ、「物極則變、盛之有レ衰、猶ニ朝之有ヒ暮」、古今ノ定勢ナリ、太平モ既ニ久ケレバ、人是ヲ常トシ游惰ニナレテ、日ニ勞ヲ厭ヒ佚ヲ喜ブ、故ニ新田多ケレバ、古田手餘リト成ル、是所謂「地有レ餘而人不レ足」ト云フ勢ニ趣ケルヲ、剰ヘ元祿ノ末ヨリ新法行ハレ、寶永ノ改革暴賦重斂、大イニ斯民ニ禍シ按ニ、寶永改革ノ政、ヒトヘニ松並勘十郎ガ所爲ニ非ズ、元祿ノ末年ヨリ、萬ヅ侈大ヲ好ミ、虛飾ヲ事トシ玉ヒシ故、國用大ニ不足シ、甚キノ新法ハ立タルナリ、新法行ハル、ニ隨ヒ、前朱ノ憲令、良法美意ノ存セル所、是ヲ高閣ニ束ルハ必至ノ勢ナリ、松並ガ取レシ時、一切ノ罪ヲカレ一人ニ負ハセ、江戸町ノ些事ニヨリ、木戸ノ有司ヘ移書セシニ、自後御改革御止被成候ヘドモ、役人中内々取計、只今マデノ通リ被ニ拍置一御尤ニ存候、萬端追々被ニ成方可レ有レ之ト云ナ見レバ、松並已ニ罪セラル、モ、其弊法悉ク除キタルニハアラザルナリ、今謂ニテ元祿已前ノ舊規ナレバ、悉ク麻城ノ土藏ニ籠メ、元祿ノ末年已後ノ事業ノミ存セルト云ハ、是「模レ不レ換レ不レ範」ト云フモノ也、又稅ノ取付ニ、丑ノ本取ト云ナ立テ目當トス、是ヨリ相悖ナ挑フモノト云、其本取トハ、何レノ丑年ニヤト問フニ、寶永六年己丑ナリト云、今年暦ヲ考フルニ、松並ガ改革ノ新法盛ンニ行ナハレ、村々ノ取付至極高免ニ成、其頃ニコレ二ツ三ツヅツ上リ、一段五倍增ニシテ永業ト欠ナ用、其手間年ノ内ノ事規ニ一倍スル故、百姓不レ堪シテ難立セシハ、コノ己丑ノ年ナリ、此トシ勘十郎罪ナ蒙リシカバ、丑ノ取付ハ民心ナ慰シ為ニ永業ナ止、税法古ニ復シ、其ノ付カロカラシヤ否ハ知ラネドモ、丑ノ本取ト云フコト甚高免ニテ、今ハ引合ガタシト云フ時ハ、恐ラクハ松並ガ聚斂ノ遺法ヲモヤウニ思ハル、也、畢竟ナラズトモ、外ニ本取ノ規定ナキニ非ザレナ、カ、ル不幸ノコトアリシ年ノ取付ナ、後世マデ法則トハ、大ナル誤ナキモ、是一事ニテモ寶永已後ノ有司ニ、一卓識ノ人ナキヲ知ルベシ、皆偏ニ一手ニ付ナ持ミ、国ナ保チシ [illegible] ト云ヘルノ、本取 [illegible] 賦稅 [illegible] ナ以テ進擢セラレ、專要ノ職ニ任ジ、

勢ニ乘テ惡ナ恣ニセシカバ、終ニ大變ニ遭ヒタレドモ、其法ハ後ノ世ニ傳ハリ、國ノ害トナリシト云ルコト、カノ國人ノ說ナ聞ケリ、然ル故ニヤ、近年外蓮民ニ困窮ニ及ビ、人民モ多ク亡ヒシト云、氣ノ毒ナルコト也、願クハ吾皆田ノ法制ニヨリ、貧民已後ナ今ニ至ルマデ、國ノ元氣ナ養玉ヒ、聖來仙蓬ノ如ナニ至ラザルヤウニ仕サスキコトナリ、百姓ノ故ニ其田畠ヲ棄作ニスルノ樣、已ニ此ニアラハル、正德二年ニ至リ、戶口ノ減損ヲ患ラレシト見エテ、始テ人別ノ吟味キビシク、他國出入返シ等マデ在シカドモ、其仕方如何ニヤアルラン、是マデ他邦ニ游食セル者、郷里ニ歸來テ農ノ力田ハセズ、却テ其作奇巧彫文刻鏤ヲ事トセシ故、民間ノ家居器物等以ノ外美麗ニナリシコト、是ニ始マルト云ヘリ、今人深ク考ザル者ハ、享保ノトキヲ盛事トスレドモ、當時ノ文案ヲ擬スルニ、國用不足セルニヨリテ、儉約省費ノ令クダルコト屢々也、庚戌享保十五年ノ秋ニ至テハ、貧民取續クコト不レ能、離散セル者アレドモ、郡官ノ吟味不行屆ニ候間、遂クセンサク候ヤウニトノ事モ見エタリ、享保丙午ヨリ延享ノ丁卯マデ、僅カニ二十二年ノ間ニ、總人別ニテ既ニ三十萬餘人ヲ減ズ、丙午ニハ總人數二千六百五十萬八千百七十人、詳ニ上ニ見エ、丁卯ニハ合人別二千六百八萬七千五百四十八人、內男千四百十八萬九千四百三十一人、女千二百十八萬八千百十七人ニテ、二十六萬三千四百二十八人、木作二萬四千百二十六人、合テ、享保ヨリ三萬ヲ減ズト雖、今ニ比スレバ猶五百萬人ノ多カリシ也民間次第ニ衰弊、既ニ如レ此トキハ寬延。寶曆ノ際、或ハ郡代ヲ置カレ、或ハ御郡奉行御代官數ヲ減ゼラレ、或ハ諸大夫ニテ直ニ民政ヲスベラル、類、一ニシテ不レ足ドモ、戶口ノ消スコトモナク、田野ノ荒蕪セルコト、當時ニ在テ既ニ夥シキコト也ト云リ、寶曆中民間ニテ殺ノタル者苦痛トイヘル則殺ニモ、時ノ間力ヲ衰ヘ、寬永・正保ノ百年ニハ有ルベクモナク、昔ノ開墾セシ田畠、多ク虫獸ノ棲カトナリシヨシ見エタリ、兔合ノ益々折タルコト、有司常ニ其故ニ復セント欲シ、議論種々ナムコトナケレドモ、終ニ其實効ナシ、加之戶口ハ增サヾレドモ、徒ニ租賦ヲ減ゼズシテ、國用ノ不足ヲ補ンコトヲ計ルヲ以テ功

ナス、日ヲ終ヘズシテ改マルモノアリ、期月ニシテ可ナル者アリ、三年ニシテ成ルコト有、五年七年ニシテ績ヲ底スモノアリ、今ノ議者或ハ目前ノ小利近効ヲノミ求メ、或ハ悠々トシテ十年生聚、然後ニ功ヲ成サント欲ス、二ツノモノ皆非也、十年生聚固ニ庶アラシムルノ本履スベキニハ非ズ、イカニ人別寡ナケレバトテ、耕スベキ田地荒ザル術ナキハ、迂遠ニシテ時ヲ濟フノ急務ニ昧キ也、今ノ民ヲ富シムルニハ、惠シテ費ヘザルノ仁政ナラデハ、何程財ヲ授ケテモ益ナシ、惣人數少シト雖モ、二十餘萬アリト云、勸農ノ道行屆カザル故、今一夫ノ耕ス處、古ノ一夫ノ半ニモ及ブマジ、老幼並癈疾ノモノハ除テ、外ハ悉ク田畝ヲ勤ムベキモノナルニ、游手シテクラス者數シラズ、兼併ノ業ハ阡陌ヲ連レドモ、貧弱ノ徒ワヅカノ土地サヘ持タザル有、提封四十萬石、其墾田ヲ惣人數ヘ平均シテツモリ合セ、聖人ノ法一夫百畝（今ノ十七石餘ノ地、古ノ百姓一軒前ノ持分ナリ）ノ如ク、一人ギリニ割詰ニコソナラズトモ、貧富大小トモニ相應ニ田地ヲ持セ、人力ヲ盡シテ耕作ヲ勸メシメバ、手ニ餘ル田地大分ニハ有ルマジキナリ、（昔ノ井田ハ民ノ私業ニアラズ、民ノ二十ヨリ六十マデノ者ヘ分チ授ケシ者ニテ、其者老死スレバ、又他ノモノヘ授ルコト、仕形ハ異ナレドモ、後世大百姓ノ澤山ニ田地持チタルカ、其村ノ小作人ヘアヅケ作ラスル如ク、田ハ農人ノ私田ニ非ザルユヱ、ソタスモ取カヘスモ自由也、夫故ニ土地ヲ平均ニシテ、人力ヲ盡テ田ヲ授ル事モ、思フ儘ニナレドモ、是ハ昔語リマデニテ、後世ハ制度大ニ違ヒ、田ハ皆百姓ノ私田ト成テ、其多少各々同ジカラズ、公儀ニテノ只年貢ヲ收ル許ニテ、田地ハ百姓ノ持分ナレバ、其多少並授受ノ事、公儀ノ勝手ニナラザル事ナリ、）妄ニ税斂ヲ薄クスルヲノミ仁政ト心得テ、古今ノ制度ニカハリアルヲ知ラズシテ什一ノ税聖人ノ法、今ニ行フベシナド、云フハ、愚儒ノ腐談ト謂ツ可シ、扨又人別ノ不足スルニ隨ヒ、手餘ノ田地出來、且游惰ノ民日々ニ末業ヲ事トシテ田地ヲ離レ、年貢幷夫役ハ田畠持居ル者バカリ責ラレテ、難儀スレ

ドモ其本ヲヲサメテ是ヲ救フ術ナキハ、俗吏ノ拙謀トイフ可シ、井田ノ法ハ今ニ行フベカラズ、其意ハ
萬世トイヘドモ用ヒズンバ有ベカラズ、土地ノ廣狹肥磽ニ損得ナク、貧富ノ甚大ニ懸隔セズ、風俗勤儉
シテ、驕奢游惰ノ民ナカラシムルコト、聖人ノ遺意ニ本ヅクニ非ザレバ、決テ行屆カザルコトナリト
知ベシ、サレバ一有レ國有レ家者、不レ患レ寡、而患レ不レ均、不レ患レ貧、而患レ不レ安、蓋均無レ貧、和無
レ寡、安無レ傾」ト云ヘリ、不均不和ノ政ナラバ、人別多ク租入ノ増スヤウニハナルベカラズ、喩ヘ此上
ニ免ヲ下ゲ、金穀ノ御救アリトモ、徒ニ僥倖ノ者ノ幸トナリテ、貧民蘇息ノ期ナシ、一民之多幸、國之
不幸也」ト云コトアレバ、國計ニ於テ甚ダ嫌フ所ナルヲ、俗吏ノ悪シサニ是ヲ心付クコトナク、或ハ
心付テモ手ヲ束テ、如何ニトモスルコトナク、徒ニ人別ノ不足ヲ而已イフコト、無術ノ甚シキニ非ズヤ、
夫勸農ノ術他ナシ、是ヲ利シ是ヲ貴ブニ在ル而已、是ヲ利シ是ヲ貴ブトキハ、民ノ農ニス丶ムコト、水
ノ卑キニ流レ、獸ノ曠キニ走ルガ如キコト疑ナカル可シ、今ノ如キ農ヲ貴バズ、農ニ利セザル而已ニ非
ズ、五ノ大弊アリテ、日々月々ニ其病深ク成ルトモ是ヲ止ルコトナシ、嘆ズベキコト也、人別吟味育子、
或ハ入百姓ノ世話、又ハ取付ケヲ下ゲ、力田ヲ賞スル類、人皆庶富ノ要務ト思ヘドモ、五弊除カザレ
バ、何ノ益ニモ立ザルナリ、凡弊ト云フコト聖人ノ法ニナシ、末ニ成テハ生スルコトヲ免カレザルモ
ノナレバ、マシテ其已下ハ何レノ賢君良佐ノ立タル法ナリトモ、世ノ末ニ成テハ昔ノヨキト思ヒシコ
ト、今ハ却テ悪ク成ルコト、タトヘバ砂糖ノ入タル菓子ハ甘クテ美味ナレドモ、久シク置キ過レバ、

其甘キ所ヨリ又蟲生ジテ、其ノ甘キ所却テ食フベカラザルノ本トナルガ如シ、救弊ニ法ノ弊アリ、時ノ弊アリ、何レモ明君賢相中興シテ是ヲ革メザルトキハ、治ヲ爲スコト能ハズ、獨リ民政ニ限タルコトニハ非ズ、殊ニ本藩ハ威公・義公ノ御國ナレバ、建國ノ法モトヨリ惡キコトナキハ勿論、遺風餘烈四方ニ被及シテ、他ノ法則トナルモノ少ナカラズ、然ルニ今民政吏治トモニ其弊ニ勝ザルハ、中葉已來ノ奸人俗吏、輕シク祖宗ノ政ヲ改革セシニヨリ、良法美意モ皆跡方ナキ樣ニナリタル也、然バ是多クハ時ノ弊ニシテ法ノ弊ニ非ルヲ、其本法ヲ取失ヒシニヨリ、今ハ法ノ弊ト成タル也、世人其然ルコトヲ知ズシテ、祖宗ノ法只今ノ法ノ如ナル物ト思フハ、疎濶ノ甚シキナリ、但シ祖宗ノ良法ト雖モ、既ニ百數十年ノ世變ヲ經レバ、斟酌ナクテハ今ニ行ハレ難キコト勿論ナリ、昔管仲齊ノ桓公ヲ輔ケテ霸業ヲ成セシ初ニ、其國ヲ安ズルノ術、第一ニ「修二舊法一、擇二其善者一、而業用レ之、遂二滋民一、與レ無レ財、而敬二百姓一則國安矣」ト云ノ、管仲ノ才ヲ以テスラ、舊法ヲ修メ其善者ヲ擇テ用レ之ト云ントキハ、マシテ管仲ニ及バザルモノ、一己ノ物ズキニ新法ヲ建立シテ、民ノ心服有ベキヤ、聖人モ「無レ徵則民不レ信」ト敎ヘラレタリ、然バ譬ヘ才器管仲ガ上ニ出ル人ナリトモ、其國民ノ信從スルヤウニハ、舊法ヲ修ルニ如ハナシ、タヾシ其善者ヲ擇ブト云トキハ、舊法ナリトテ一概ニ泥ミ、悉ク其マヽニ用フベキト云ニハ非ズ、威公・義公ノ政中葉已來、奸人俗吏ノ爲ニ改革セラルヽト雖モ、ヨク是ヲ故府ニ求メバ、其遺文ナキヿ有ベカラズ、某ガ如キ陋巷ノ匹夫ダニモ、好古ノ癖ニヨリ、耆老ノ多聞ナ

ル者ニ從テ、當時ノ良法美意ヲ採究シ、纔其一二ノ小ナルモノヲ試ヿヲ得タリ、況ヤ明君賢相中興ノ功業ヲナシ玉ハントナラバ、元祿已前ノ舊法ヲ修メ、威・義二公ヲ規範トシテ、今ノ世態人情ヲ考ヘ、斟酌シテヨク用ヒ玉ハヾ、四境ノ中誰カ心服シ奉ラザル者アラン、是ニ希フ所ナリ、然レドモ百年來ノ積弊ヲ承ケ、是ヲ一洗シテ民ノ耳目ヲ新ニシ玉フヿ、極テ容易ナル義ニ非ズ、姑ク戰ヲ以テ喩ンニ、廟算豫メ定ラズシテ、事ニ臨デ少々ノ勝負ニ氣ヲ奪ハレ、左ヤ右ヤト前後狼狽スルヤウニテハ、決シテ始終ノ功ヲ立ガタシ、古人戰ヲ論ジテ、「不ㇾ知則不ㇾ知二民之極一、無三以銓二度天下之衆寡一、不ㇾ仁則不ㇾ能ㇾ與二三軍一共二饑勞之殃一、不ㇾ勇則不ㇾ能ㇾ斷ㇾ疑以發二大計一」ト云リ、是獨リ戰ヲヨク論ズルノミニ非ズ、今ノ民政モ此三德ナクテハ行ハルベカラズ、第一ニ土地ト人民トノ積リ合セ肝要ナリ、「地有ㇾ餘人不ㇾ足」ニナリトモ、不足ナラバ不足ノヤウニ仕方有ベシ、人力モトヨリ限アレドモ、動靜ノ相違各別ナリ、且人數ノ積リヤウ惡シカラシバ、衆ト雖モ其用ヲナサヾルニ、昔ノヨク兵ヲ用ル者ハ、寡ヲ以テ衆ニ勝コトモアリ、人民ヲシテ地力ヲ盡サシムルコトハ、一人ヲ二人三人ノ用ニ立ルコト能ハズトモ、一メテ一夫ヲ一夫ノ用ニ立ル樣ナラバ、四十萬石ノ地モ餘リハ有マジキモノ、撫育ノ政ヲ施シ、本ヲ務メ末ヲ非ジ、弱ヲ扶ケ強ヲ挫ヘントスルトモ、先ヅ仁德ヲ以テ萬民ノ歡心ヲ得、富貧トモニ心服セザレバ事ヲ成コトアタハズ、又非常ノ事ハ常人ノ驚ク所ニシテ、「民可ㇾ以樂ㇾ成、不ㇾ可ㇾ以慮ㇾ始」、其紛紛之議一アルハ必然ナリ、然レドモ「疑事無ㇾ功」ト云フコトヲ初ヨリ明カニシテ、始終ノ大計カク

アラデハ叶ハザルト見屆ケタラバ、大勇ヲ以テ決斷シ、オヂズ、オソレズ、無二無三ニ行ハザレバ、英雄ノ擧トスルニ足ラズ、此三德ヲ以テ民政ヲ爲シ玉ハヾ、庶富ノ業ハ勿論、武備ヲ張リ文敎ヲ敷キ、天下後世ノ手本トナスコトモ、明君賢相ノ上ニ在テハムツカシキコトニモアルベカラズ、扨ヨク病ヲ治ルモノハ、必ズ先ヅ其病ノ本ヲ究ムト云ヘバ、民政ヲ修ルニモ、先ヅ其ノ大弊ヲ盡クスベシ、所謂五弊ハ一ニ侈惰ノ弊、二ニ兼併ノ弊、三ニ力役ノ弊、四ニ橫斂ノ弊、五ニ煩擾ノ弊ナリ、此五弊アルユヱニ、弊之又弊種々樣々ニ成テ、仁惠ヲ布キ嚴刑ヲ施シ玉フトモ、痒キ所ヘ手ノ屆カザルト申如クナル事也

問　五弊ノ目其說如何　曰、某モトヨリ愚賤、タヾ憂國愛民ノ心ヨリ、古ヲ考ヘ今ヲ揆リ、五ノ大綱ヲ見得シガ、本ヨリ其職事ニアヅカラザル者ナレバ、郡吏村民委曲ノ談ニ至テハ、平生見聞ノ違ヒ、又了簡チガヒモ有ルベケレドモ、大體ニ於テハ少シク見ル所アランカ、一ニ侈惰ノ弊ト申スハ、民ノオゴリテ且ワウチヤクヲスルコト也、人情質朴ヲ厭ヒテ華美ヲ好ミ、勞苦ヲ嫌ヒテ安佚ヲ喜ブコト、誰モ同ジキ所ナレバ、民ノ侈惰ニ趨クコト尤ナルコト也、況ヤ當時吏治ノ失ニヨリ、勤儉モ益ナク、侈惰モ勝手次第ナレバ、蠢々蚩々タル者悉ク是侈惰ナラザルハナシ、元來當代田賦ノ制、東照宮ノ御時ヨリ、百姓一年ノ入用夫食ヲツモラセテ其餘ヲ年貢ニ取、百姓ハ財ノ餘ラヌヤウニ、不足ナキヤウニ治ルコトナリ、然ルニ太平ノ久シキ上下競テ奢侈ヲ事トシ、制度ノ疎濶ナルマヽニ、金サヘ有バ如何

ヤウノコトモ出來ル世界ニナリ、庶人ノ奢ハ富商大賈、又ハ郷里ノ豪民ヨリ手ハジメヲシ、家居・衣服・飲食ノ美、其郷里郷黨ニ誇リシガ常トナリ、次第々々ニ其風推移リ、後ニハ貧民迄モ其眞似ヲシタク思ヒ、アト〳〵ハ田宅器財迄モ典賣セデ叶ハヌヤウニナルコトハ思ハズ、先ヅ目前ノヨキコトヲ謀ル也、人情既ニ如レ是ナル上ハ、工人ハ無用ノ器物ヲ作リ出シ、永久ノ堅固ナル用ニハ立ズトモ、當坐ノ目好マシキ彫文刻鏤ノ物、其價日々ニ貴ク、商人次第ニ行渡リテ奢侈ノ媒ヲナス故ニ、今ハ其奢侈常トナリ、天下一統ニ奢トシラデ奢ニ住スルナリ、初自分ヨリ奢ルト心得テ奢ルウチハ、時ニヨリテ、了簡モアルベケレドモ、今ハ奢ト知ラデ、平常カヤウナクテハ、人界ノ交リ出來ヌコト、心得居ルユヱ、中々三日法度ナドニテ、其奢侈ヲ禁ズルコトハナラヌ也、ナラヌト知ツヽ、面テ向キ計ニテ法度ヲ立ル故、奸僞益々甚シク、上ノ威令モカロク成テ、徒ニ益ナキ而已ニアラズ、却テ政事ニ害アル也、扨四公六民ノソリニテ年貢ヲ出シテモ、昔ハ風俗勤儉ナレバ、土地ヨリ穀物ノ生ルコトモ多ク、一年ノ入用過分ナラザルユヱ、農人ハ農人相應ノクラシニテ、各々其業ヲ安ンゼシガ、今ハ農事ニ出精スルコト昔ニ及バザレバ生穀モ少ク、年貢ハ昔ヨリノ引付ニテ出シ、一年ノ入用ハ昔ニ五倍十倍ニテモタラザレバ、百姓ノ困窮日々ニ月々ニ甚シキナリ、其上ニ兼併ノ弊アリテ、膏腴ノ地ハ豪民ニ吸トラレ、力役ノ弊アリテ、田地サヘ持居レバ、其高ニ應ジテ役ニ逐ツカハレ、農ノ時ヲ奪ハレ、日夜奔走シテ安キ心ナシ、横斂ノ弊アリテ、年貢ノ外ニ重取ニ逢ヒ、非道ノ勘定ニテバカニサレ、内心面

宜カラズ、煩擾ノ弊アリテ、諸事コマカニ面倒也、訟獄アリナモ埒アカズ、無用ノ費ノミカヽル也、如レ此キ勢ナレバ、タトヘ奢侈ヲ止メ、如何ニ田畠ニ出精スルトモ、農業計ニテハ決テクラスコトナラズ、是非商ヒニテモスルコト也、始ハ吏ヨリ禁ゼラルレドモ、御年貢ノマリ合ト申セバ、吏モ亦[illegible]界ノ正シカラズ、農民ノ利少ク、不相應ノ租税ヲ責ルコトアル故尤ナリトテ打捨、サテ商ナスレバ利潤モ多ク、骨ヲ折ルコトナク、利潤ノ餘リニテハ、分限ノ外ニ奢リテモ、農業バカリカセギテ儉約セシトキヨリ暮シ有餘ナリ、田地ノ高ヲヘラシ作ラザレバ、ソレダケ役ニツカハルヽコト少シ、五百金ヲ蓄テ君上ヘ獻ズレバ、俄ニ郷士ニモナラルレバ、カタ〳〵勝手ヨロシ、左ナクトモ商買ニテ金錢ヲ儲置キ、田地ヲヨキ所計リエリ取ニシテ兼併ノ豪トナリ、或ハ奴婢ヲカヽヘ、或ハ小作人ニ渡シ其利ヲ收ム、名ハ百姓ニテモ、鍬鎌手ニトラズトモスムコト也、是ヨリ一等下リテハ、百姓ノ不勝手ナルヲ知リ、飲酒・博奕・遊蕩・無頼ニ流ルヽ者モアリ、モトヨリ產ヲ破リ、田畠ヲバ沽却スレドモ、田畠ナキマヽニ、一日半身モ御國ノ夫役ニツカハルヽコトナク、四方ヘ徘徊シ、安樂世界ニ住スルナリ、游手シテ衣食スルコト出來ザレバ、御城下ヘ出テ日用ヲ取ルモアリ、ボテイヲフルモアリ、諸士ノ長屋持トナルモアリ、町家ノ使役ト成ルモアリ、種々樣々ナレドモ、百姓ヨリハ安樂ニシテクラシヤスシ、郷中ハ如何ナル惡地ニテモ、百姓居屋鋪トスレバ、其屋鋪ヨリ上畠ノ年貢ヲ取ラルヽ定法也、町家ハ何十間ノ間口持タリトモ、一錢ノ租税ヲ出スコトナシ、町内ノサシ錢トテ月々出スコトアレドモ、是ハ自分〳〵ノ勝手ニテ、自身ニツトムベキ火消役ヤ、其掛役等ノ定ムル事ニヨリテ出シ、

出テ、甚僻伏スルハ勿論ナレドモ、年頭節句ノ類上下ヲ着シ、僮僕ヲ召連、其身ニ双刀ヲ佩ブ、從者腰刀ナキノミニテ、其出立ハ中々小身ノ諸士ヨリモ宜シキ也、扨又鄕中ハ窮民御救ヒノ料、郡吏ヨリ願出ルモ容易ニハスマズ、鄕中ヨリ出テ長屋持ナドニ成候類、村々ヘ返ルベシトハイフト雖、元ヨリ田宅ヲ失ヒタル者、何ヲ目當ニ歸ルベキ、サレバトテ役所ヨリ右ノ類ハ種夫食ヲアタヘ、屋作ルベキ材木ニテモ授ケシト云事ヲ聞カズ、町家ニテハ貧乏人家普請ナラズ、大破ニ及ベバ役所ヨリ金ヲ下サル、長屋持等ハモト鄕中游惰ノ餘民ニテモ、町家ニ移住スレバ困窮ヲイヒタテ、育子金ナドスム事也、町人ハ幾千人アリテモ、御城下ニ住スル計ニテ、一粒半錢ノ租税ヲ上納セズ、太平ノ世奢侈ヲ導ク害ヲ爲スノミ也、百姓ハ今ハ兵役ニハ立ズトモ、治世ニモ年貢ノ外夫金舫金ヲ出シテ、軍國ノ用ヲタス爲トス、町人ニハ此事ナキノミナラズ、亂世トナラバ第一ニ逃走ルベシ、百姓ニモ逃ルモノモ有ベケレドモ、陣夫ノ數今ノ黒鍬中間ナド計ニテ、中々間ニ合事ナラネバ、イヤトモ催促シテ召使ハズバ叶マジ、常日ニモ夫金舫金ヲ出シ、軍國ニナリテ又召ツカフハ無理ナレドモ、用捨ハ有マジ、百姓ハ如何ナル因果ニテ此クアルラン、町人ハ治世亂世トモニ武家ノ役ニ立ズ、シカノミナラズ凶年飢歳ニハ、食物不足ニテ第一ニ御救ヒヲ願ヒ、國ノ倉廩ヲ耗ス者ドモ也、商モ四民ノ一ニテ、昔ヨリ有無ヲ通ズル用ニ立置モノナレドモ、其數大抵士ト農トノ數ニツモリ合セテ、ヨキ程アルベキ也、有司ハ大體ヲ知ラザル故、町方ニテハメツタニ町人ニ贔屓シ、鄕中游惰ノ民ニテモ引込ミ、不課無用ノ人ヲ、金ヲ

クレ〳〵産ミ殖サセテ、人別ノ増ヲ喜ビ、町人ノ本職ヲ忘レテ侈リ且惰リテ、大名ノ出來ソコナヒ、如クニテ家産ヲ破ルヲモ、舊來ノ御町人ナリトテ、過分ノ金ヲ與テ是ヲ賑ハス、是ニヨリテイフトキハ、町人ヲバ是ヲ貴ビ是ヲ利シテ、農人ヲバイヤシメ且困ムルハ、今ノ吏治ノスガタ也、勞苦ヲ厭ヒ安佚ヲ好ムハ凡人ノ情ナルニ、商賈末業ノ者ハ貴ク且利アリテ、良民力田ノモノハ賤ク且不利ナル世界ニ、誰カ農ニ勸ムモノアランヤ、ソレニカマハズ、ヒタスラニ力作スルモノハ、ヨク〳〵ノバカ律義ナルモノ而已ナリ、少シモ利口ナルモノハ、皆々骨折ラズシテ金錢ヲ儲ケクラス工夫ヲスルユヱニ、百姓ノ内田畠ヲ多ク作ルモノハ稀ナリ、南領ナドニハ百姓人別ニテ、ワヅカ高三四百石ヲ持チ、家居ヲ美麗ニシ、數百金ヲタクハヘル者多シト云、尤ナルコト也、百姓ノ人別ヘリタリトテ入百姓ヲセンヨリ、先ヅ御國中ニツブレ百姓ナキヤウニ、農ニ利アリテ力田スルヤウニアリタキ事也、又金穀ヲ玉ハリ育子ノ御世話アリトモ、中々行キ屆カズ、屆タリトモ今ノ如クニテハ、成長ニ及テ他所ニ出ルモアリ、游民ト成モアリ、又十歳計ヨリ已上、商人ノ店子ト云フ者ニ遣シ、御城下ノ富商大賈、幷ニ鄕村末業ノ家ニモ出居ルモノ、幾ラト云數ヲ不レ知、是皆眞ノ百姓ニ立返ルコトハナシ、其外游惰ノ民種類極テ多シ、寺社人ノ如キ只其ノ一ナレドモ、此弊ハ近世ニ初マリタルコトニ非ズ、誰モ知タルコトナレバ論ニ及バズ、但出家ニハ得度ノ法ニ準ジテ、御領中ノ民ヨリ妄ニ剃髮スル事ヲ禁ジ、寺々ノ小性ヤ中間モ、寺領幷門前百姓ノ外ヲ禁ジタキコトナリ、是ハ寺領ノ百姓ハ元ヨリ國ノ夫役ヲモ不レ勤、不

課ノ民ナレバナリ、古人ノ政農ヲ勸メテ游惰ヲ抑ヘシニ、今ハ相反スレバ、百姓ノ游惰ナルコト尤ナリ、幸ニ游惰ニナラズシテ、農業ヲ事トスルウチニモ、亦一ツノ惰リアリテ、散田棄作トテ、已ガ力モ餘リ有リ、土ノ性モヨクトモ、經界ノ政正シカラズシテ、賦税ニ厚薄ノ損得アル故ニ、出來ベキ良田ヲワザト棄作ニシ、皆引ニナルコト也、貧民御救ノ爲メ免サグレバ、其免ノ折レタル所計ヲヨク耕シ、其外ヲバワザト荒ス也、是ヲタムルハ常免ノ法ニ如クハ無レドモ、今ノ如ク兼併ノ奸有テ、經界正シカラザレバ、常免ニシテ當坐ハ民ノ悦ブヤウナルベケレド、本取ヲサケ公納減ズルウチニ、兼併僥倖ノ民マジハリ居レバ、何ノ益モナキ也、同ジ常免ノ内ニモ、土地ノ幸不幸アルナレバ、常免ニ免ノ下リタルガ常トナリタラバ、後ニハ今ノ免下リタル地、豪民ニ兼併セラレ、永ク公損ト成ベキナリ、然ル時ハ小百姓ニ利薄ク、大百姓ノ大利ヲネダム心ヨリ、又々自然ト農ニ惰ルベシ、トカク是ヲスクフニハ、均田ニシテ常免ニ行ハザレバ、散田棄作ハ止マジキ也、昔ヨリ人數數萬減ジタル上ニ、現在ノ百姓大半惰農ニシテ末業ヲ事トシ、其内貧且愚ニシテ農ヲ事トスル者モ、ワザト散田棄作ヲナセバ、今ノ萬人昔ノ五千ノ力作ニ及ブマジ、一國ヘカケテハ大ナルコトナルベシ、田野日々ニ荒レ、租入歳ニ減ズル、亦宜ナラズヤ、昔魏文侯ノ臣李悝盡ニ地力ニノ敎ニオ、モヘラク地方百里ノ國、（大抵今ノ十里四方程ノ國）山澤邑居ニ三分一引テ、アマリタル田地六百萬畝、コレ諸侯ノ國ニシテ、其民治田勤謹ナル時ハ、畝ゴトニ三斗ヲ益ス、（此一畝ハ今ノ一畝二十一歩餘ニ當ル、三斗ハ今ノ二升六合九勺四撮餘ニアタレルナリ）勸メザル時ハ其損亦此ノ如シ、此積リニテ地方百

里ノ増減、則チ粟百八十萬石（今ノ十六萬一千六百八十三石零々二合ニ當タル）トナルト云リ、是ハ異國ノムカシ語リニテ、今ニ引用ユベキニ非ザレドモ、今三十五萬石ノ地ニテモ、耕作勤謹ニセシト、惰テ勤メザルトニヨリテ、生穀ノ増減アル、夥シキ事ナルベシ、何トゾ勸農ノ政行ハレ、是ヲ稱シ是ヲ貴ビテ、惰農ノ惡弊ヲ革メタキモノ也、扨是ヲ利スルトテモ、ミダリニ免ヲ下ゲヨト云ニ非ズ、「民不可逞、度不可改」ト云コトモアリテ、薄斂ニモ大概限極アルベシ、且免ニテユルシタル計ニテハ、上ニモ云如ク貧富幸不幸アリテ、民ノ多幸國ノ不幸トナルノミナラズ、奢侈ノ俗此マヽニテ改マラズンバ、何程免ノ折タリトモ、民ノ財用餘アルコト有ベカラズ、タトヘ作リ取無年貢ニ許ス共、五年十年ハヨカルベケレドモ、後ニハソレニテモ平生ノ物入次第ニカヽリ、其耕作ハ次第ニ骨ノ折レルコトヲ嫌フベケレバ、決テヨキコト有マジキ也、其證據ハ今ノ知行取ノ勝手スリキリタルニテ知ルベシ、知行取ハタトヘバ無年貢ノ田畠持タル大百姓ノ如シ、其田畠ノ得分ハ我物ナリ、其知行所ノ百姓ハ小作人ノ如シ、田主ノ地ヲ作リテ其獲ル所ヲ分チ、四ツ五ツ物成ヲ納ル也、然レバ知行取ホド得分オホキモノハナシ、其田畠ヲ多ク知行スル役ト云ハ軍役ナリ、是百姓ノ夫役ニ奔走スル理ニ同ジ、軍役ハ治世ニナケレバ、職事アル役人ノ外ハ、知行ハタヾ取ナル故、ワヅカ普請役金ヲ出スナリ、其平生ノクラシ奢侈ニ過タルユヱ一トウ困窮シテ、役金サヘ時々ニ上納スルコト能ハズ、平生ノ勤ト云フモ、御城府ノ上番ナド計ニテハ、家内ノクラシ、朋友ノ參會ニ勤番ヨリ幾十倍ノ費アル故ナリ、是ヲ以テ見ル時ハ、今ノ農人ドモニ

大ニ免ヲ下ゲ、作リ取同ヤウニサセタラバ、初ノ程ハ難レ有事ト思ベケレドモ、後ハ夫ガ常トナリ、今ノ知行取ノ知行ハ、取ル筈ニテ取ルト心得ル如ク、左迄難レ有事トハ思フベカラズ、知行取ノ士ハ士君子ニテ、恩義ヲモ知ルコトナレドモ、庶人ニテハ是モ左迄ノコトハナク、只其田地持タル大百姓驕奢佚樂ニ耽リ、知行取ノ如クナリテ、自身ハ耕作セズ、奴婢ヲカヽヘ佃客ヲ雇ヒテ作ラセ、其花利ヲ收ムベシ、奴婢ノ給金、小作人ノ骨折賃次第ニ貴クナリテ、後ハ作リ取ニテモ自分耕作セズ、物入多キ故大ニ有餘ハナク、困窮日々ニ甚シカルベシ、伊勢。參河ナドニ作リ取ノ所アレドモ、百姓ヨロシカラズト承及タリ、是明證ナラズヤ、今高免ニテサヘ國用足ラザルニ、所詮作リ取ニサスルト云コトナキコトニテ、無用ノ論ノ如クナレドモ、當時百姓ノスクヒ方、俗人ノ了簡ニテハ免ヲサグルヨリ外ノ手段ナシ、何程免ヲ下ゲテモ、其道ヲ以テセザレバ益ナシト云コト是ニテ悟ルベシ、如何ニモ奢侈ノ俗改マラズシテハ、敎化ヲ立ルコトハ勿論、恩惠ヲ施シテモ恩惠ニハナラザル也、育子ノ事ナドモ風俗勤儉ニテ、庶民クラシニ物入ナクンバ、官吏ノ心ヲ用ヒヤウニテ、金穀ヲ賜ラナクトモ行屆ク仕方アルベシ、今ハ小民ノ子ヲ育ルニモ、衣食ヨリ已下玩弄ノ物ナドモ富人ノ眞似ヲシ、ソレガナラズハ一向ソダテザル方ガマシナドト云モノ多シ、子ノ爲ニ婦ヲ娶ルニモ、支度ノ金、結納ノ小袖帶等遣シ、農家平生用ヒザル御制禁ノ服ヲモ長持ヘ入置カザレバ、婚禮ナラザル事ナリ、貴賤一トウノ弊風トハ云ナガラ、近來民間婦人女子ノ侈奢以ノ外夥シ、且百姓オゴレル故、畠ヲ作ルニモ食物ニハナラズトモ、

當座錢ノ多ク取レル物ヲ作ル、當座ノ錢自由ニテ妄リニ費シ易キハ、極テ後ノ困究トナルユヱニ、侈惰除カザレバ、何程免ヲサゲ御救ヒ有レ之テモ、人別ヲフヤシタリ共、田野ノ荒蕪セザルヤウニハ成マジキ也、シカシナガラ民數ノコト甚ダ重キ事ニテ、民數ヲ獻ルトキハ王者モ是ヲ拜シ玉フ程ノ物也、君子ハ民ノ父母、赤子ヲ保ンズルガ如キ政アラバ、流離ノ民モ本業ニ返リ、生兒ヲ殺ノ惡俗モ止ミ、誠ニ目出タカルベキ也、但驕子用ユベカラズト云コト有バ、民ヲ愛スレバトテ、甘ヤカシテ我儘ニサシ置ベキ事ニ非ズ、仁人ノ民ヲ視ルコト子ノ如クスルハ、其放辟邪肆無キヤウニ常產ヲ制シ、本業ヲ勤メ衣食ニ困マズ、凶年飢歲ニモ飢寒ニ至ルコトナク、安穩ナラシムルコトナリ、アタラ良民ヲ侈惰ニ習ハシメバ、失敎ノ罪父母タル人ニ歸スベキ歟

二ニ、兼併ノ弊ト申ハ、豪民ノ餘リタル財ヲ以テ貧民ノ持分ヲ併セ取、富者ハ益富、貧者ハ益貧ニ、膏腴ノ地悉ク富豪ノタメニ吸ヒトラレテ、民ノ多幸遂ニ國ノ不幸トナル事也、俗眼ヨリ見ル時ハ、鄕里ニ富豪ノ民アルハ國ノ光華ト思ヘドモ、政ヲ知ル人ヨリ見レバ、實ニ國ノ大害此ニ過タルハナシ、故ニ和漢共ニ道アル世ニハ、此兼併ヲ塞グコトヲ專務トセラレシ也、今ハ塞ガザル而已ニ非ズ、却テ是ヲ利シ是ヲ貴ブヤウニナリタルハ、俗吏ノ過ト云ベシ、畢竟ハ人別モ耗リ、荒地モ多ク、租稅モ納メカヌルニ、此兼併ノ者ハ奴婢ヲ蓄ヘ、土地ヲモ荒サズ、上納モ期ニ後レズ、或ハ臨時ノ御用金等モ獻納スル故、重寶ナル者ト思フナルベシ、知ラズヤ人別ノヘリ、荒地モ多ク、租稅納メカヌルモノ出來、

ハテハ御藏入モ減ジテ、御用金ナドト云物仰付ラレズシテ叶ハザル如ク成ルコトモ、其源ハ此兼併ノ輩有ガ故ナリ、然ルヲ口前了簡ニテ重寶ナリト思ハ、タトヘバ我ガ資財ヲ久シク人ニ掠メラレテ、其掠タル中ヨリ少々ノ餘分ヲ我ニ贈ランニ、其始我物ヲ掠タルヲバシラデ、少々ノ贈リモノアルヲ喜ブ類ナルベシ、奴婢トイフモ昔ノ譜代者トハ各別ニテ、皆々御百姓ノ人別帳ニ載居ルモノガ、困窮シテ身賣奉公ニ出ルナリ、家ニ在テ其田地ニ相應ノ作徳アラバ、其モノ力ダケハ耕作シテ、年貢ヲモ獻ルベキモノナリ、兼併ノ豪右ノ類ヲ奴婢トシテ、己ガ田畠ヲ作ラセ、己ハ知行取ノ如ク家ノ檀那ドノト成テ、耕耘ヲ事トセズ、奴婢ニテ作リアマル田地ヲバ、村々ノ小作人ヘ渡シ、其花利ヲ居ナガラ收メ取ル也、去レバ人別ノ不足ナル上ニ、此豪民ハ自身ノ働ラキヲセザレバ、一國ヘカケテハ、其ダケ田畠作ル人別ヘリタル同ヤウノ道理ナリ、但其內ニハ他所ノ甿ヲカヽヘテ、奴婢トスル類モ有ベケレドモ少分ノコト也、タトヘ他所ヨリ來ル奉公人、豪民ノタヾ居スルモノト其數ツリ合、田地ノ人別同ジコトニテモ、豪民農業ヲ自身ニセズ、且奢侈佚樂ヲ恣ニスレバ、風俗ノ大害トナリ、小民マデモ其眞似ヲシテ、骨折セズシテタラス工夫ヲスル故、惰農次第ニ多キナリ、土地モ荒ラサズ、租稅モ滯ラザルハ、元來膏腴ノ地ヲ擇取ニシテ、私ノ取實ハ多ク、公上ヘノ納メ甚少ク、家內大人數ニテモ夫役モ寬キ故、骨折ラズシテ出來ル也、貧民ハ是ニ反シ、瘠地ヲ持テ人別ハ少ナケレド、負高アル故夫役モシゲクアタリ、カヽリ物多ク、租稅ハ土地ニナキ高免ノ金穀ヲ出ス故、毎年濟期ニ後レ、或ハ繰紲ニアヒ、或ハ

借金シテ利ヲトラル、終ニハ身賣奉公四方ニ流離スルヨリ外ナシ、其者ノアラシ置タル地ハ、村一同ノ厄介トナリ、年貢高役マデモツトムレバ、惣體ノ痛ミトナル、數年村ワキマヘ上免ヲ下ゲ、或ハ永引トナリテモ、村民ノ肥ルコトハナク、只公上ノ損ノミナリ、貧民ノ田畠何故ニカク瘠地ニテ租税多キト云ニ、豪民ニ膏腴ヲ割キトラレシ餘ナレバナリ、豪民ノ土地ハ膏腴ニテ、其納ルトコロ實ハ什ガ一、廿ガ一ノ税ヨリモ輕ク當ルナリ、貧民是ヲ見習ヘバ、タトヘ己ガ土地税ノ厚薄、田畠相應ノ取付ケニテ、有餘不足ナキツモリニテ勤メサヘスレバヨキヲモ、豪民ノ幸ヒ多キヲ羨ミ、己ガ得分ノ薄キヲ怨ルコトアルナリ、夫故ニ土地相應ノ取付ニテ、公儀ニ無理ハナケレドモ悦バザルモノ多ク、農ニ惰ルハ兼併ノ奸アルガユヱナリ、土地平均ニシテ經界正ク、上中下ノ差別ヲ以テ、相應ニ輕カラズ、重カラザル年貢ヲ出サシメンニ、誰カ心服セザルベキ、然ルニ豪民有テ一己ノ利ヲ專ニスル故、衆民ノ心ヲソコナフ也、物之不レ齊ハ、物之情也ト云ヘバ、民ニ貧富アリテ一ヤウナラザルモ其筈ノ事ナレドモ、ヨク政ヲ爲スモノアラバ、百姓ハ同ジ百姓ニテ、古ヨリ齊民トモ平民トモ云ヒタルモノナレバ、豪強ト貧弱ト、大名ト奴僕ノ相違アルガ如キ事ハ、決シテナキ筈ナリ、聖人ノ政ニハ、土地ト人別ヲ量リ合スル法アル故、民ノ内ニ貧富懸隔ナルコトナシ、アリト雖モ只其身ノ勤儉ト侈惰トニヨリテ、或ハ富或ハ貧ナルノミニテ、土地ノ多少幸不幸ハナキコト也、世ノ末ニ成、井田ニモ弊生ジ、其法壞レテ後ハ、民ニ貧富ノ差別大ニ出來タル也、富者ハ利多ク貧者利少キ、古今定マレル勢ナレバ、昔ノ政ヲ爲ス者ハ、

弱ヲ扶ケ强ヲ抑フト云コト有テ、兼併ノ民我儘次第ニスルコトナラズ、然レ共昔ノ兼併ト今ノ兼併ト、其害ノ淺深異ナリ、昔モ田地ヲ賣買スルト云コト出來テヨリシテ、兼併ノ弊オコル也、其事ヲ論ジテ富者ハ連ニ阡陌一、貧者ハ無ニ立錐之地一ト云ヘリ、是ハ豪富勢ニ乘ジテ、澤山ニ田地ヲ買取故ニ、貧民ハ力及バズ、少シノ持分モナク、産業ニコマルト云マデ也、今ノ兼併ハ然ラズ、富者ハ名ハ持分ノ高少クシテ、其土地ノ取實ハ多ク賦役輕シ、貧者ハ名ハ持分ノ高多クシテ、實ハ其土地少ク賦役ハ重シ、富者ハ賦役ノカヽラザル膏腴ノ地バカリ兼併シテ、隱田モ同ヤウナリ、其故イカニト云ニ、田地ノ賣買百姓ノ自由ニサスル故、此弊オコリタルナリ、聖人ノ法ニハ、田地ノ賣買ト云コト決シテナシ、然レドモ田制一變シテ、田地民ノ私業トナリシ上ハ、賣買ヲ禁ズルコト一概ニハナリガタシ、但永代賣渡ト云コト、民ノ産業ヲ失ヒ、且ハ農人ノ本業ヲ捨テ末業ニ趨ル基ヒナレバニヤ、東照宮ヨリ已來、寛永ノコロ仰出サレシ幕府ノ御法ニモ、カタク是ヲ禁ジ玉ヒ、賴納賣ト云コトトトモニ、是地主方ニテハ年貢諸役ヲ勤、買主ハ作リ取ニスルコトヲイフ、今ニ至ルマデ天下ノ嚴禁タリ、東照・大猷二公ノ仁政アリガタキ御事ナリ、後ノ俗吏制法ノ本意ヲ悟ラズ、文ニ泥ミ末ニ拘ハリ、法ヲ守ルト心得、永代賣禁ジナガラ、質地ノ流レ、或ハ讓リ地ナドト名ヲ付カヘテ奸ヲユルス故、嚴禁モ名バカリ也、畢竟ハ田畠既ニ民ノ私業タルヲ、聖代上ヨリ授ケシトキノ如ク、一概ニ賣買ヲ禁ジテハ、人情ニモトル所アルユヱ、其法壞レシ也、先王ノ令ニハ賣ニ買宅地一、經ニ所部官司一申レ條、然後ニ是ヲ聽スト云、田令義解云、宅地田園皆同 田宅トモニ民ノ私業ナレバ、

無レ據トキニハ吟味ノ上、官司ヨリ其賣買ヲユルスコト古法ナリ、本藩ニテハ昔ヨリ田宅ノ賣買ヲ禁ゼズ、幕府ノ法ニハ違ヒシヤウナレドモ、昔ハ先王ノ令ノ如ク官司ヲ經ザレバユルサズ、其カタ今ハ町屋敷ノ賣買幷ニ[illegible]シニ殘リ居ル也貿易ノ際ニ奸ヲ爲スコト能ハズ、東照・大猷二公ノ制ヲ設玉ヒシ本意ニ叶テ、且古今ノ制度人情ニ叶ヒタルコト、幕府ノ有司ノ及バザル所ナリ、井田收受是漢土ノ三代聖人ノ法班田是本唐ノ法ニシテ、天朝ノムカシ、大化已來ノ聖主世ニ用ヒ玉フ等ノ制ハ、古ニ行ハレテ今ニ行ハレズ、田地既ニ民ノ私產タル上ハ、貧富强弱ニヨリテ、其土地ニ廣狹瘠腴ノ不同アリテ、一ヤウナラザルコト必然ノ勢ナリ、當時既ニ兼併ノ患ナキニ非ズ、然レドモ戰國初テ治リ、豪傑世ニ出デ、檢地ト云フコトヲ爲シ、民ノ私業ノ上ヘハ奪ハザレドモ、其瘠腴ニ隨テ上中下ノ位ヲ分チ、廣狹ニヨリテ幾石幾斗ノ數ヲ定メシカバ、豪民獨リ利ヲ占ムルコト能ハズ、貧弱獨リ苦ムコトナシ、誠ニ時措ノ宜ヲ得タリト云ベシ、檢地ノ後田畠ノ額既ニ定マリシ上ハ、民ノ私ニ貿易スルニモ、其舊數ノマヽ一反ナラバ一反、一町ナラバ一町、檢地ノ御圖帳ニ載ル如ク、賦稅ノ高モ一石カ十石カ舊ノマヽニシテ、百姓ノ名モ六兵衞トカ七兵衞トカ、昔ノ名田ノトホリナラデハ、讓ルコトモ許サヾルコト、今ニ下野邊ニ如レ此ノ所アリト聞ク、不自由ノ如クナレドモ、舊來ノ法ト見エタリ、是ニテハ兼併ノ奸行ハルベキヤウナシ、是ハ他邦ノコト、本藩ニテモ威公・義公ノ御時ハ、田畠賣買ノ制明ラカニシテ奸ヲ容ルヽコトナシ、寬永二十年未三月廿四日、辛巳檢地アリテ、第三年ニアタル、鄕中ニテ田畠ヲ賣申ス百姓於レ有レ之ハ改帳ニ作リ、一年切リニサシ上可レ申事御郡奉行ヘ仰出サレ、又寬文十一年亥八

月七日、鄕中田畠賣買仕候者、庄屋組頭致二吟味一、御郡奉行御代官ヘ申出候樣可レ被二申付一事仰出サル、是人情時勢ニヨリテ、幕府ノ法ニモ拘ハラズ、私田ノ賣買ヲ許シ玉ヒ、又後ノ弊ヲ考ヘ玉ヒ、貿易ノ際ニ奸アル事ヲ防ギ玉ハンタメ、所部ノ有司ヲ經テ是ヲ許シ、且年ゴトニ帳ヲ改メ呈上セシム、誠ニ先王ノ遺法ニ叶ヒ、幕府有司ノ名ハ禁ジテ、實ハユルスモノニマサレルコト遠シト謂ツベシ、本藩威・義二公ノ制度、幕府ノ法ニマサリタルコト少ナカラズ、是ソノ一端ナリ イツノ比ヨリカ此制弛ミ、奸僞日ニ甚シ、經界正シカラザル故仁政モ施シガタシ、凡田地ヲ賣ホドノモノ、必ズ窮迫ノ輩ニテ、其ウル處ノ相手ハ必富厚ノ家ナリ、富者ハ其餘有ヲ恃テ、實ハ買タク思ヘドモ、ワザト買フコトヲ欲セザル眞似ヲス、貧者ハ饑寒ニ迫ラレテ、其速ニ售ンコトヲ欲スル故、タトヘバ上畠十段ニシテ十石ノ高アルヲ、土地ニテハ買人ヘ七段モワタシ、其高ヲバ僅カ三石トモ定、自分ニテ餘ス所ノ地ヤウヤク三段アリテ、公儀ノ前ハ七石ノ高持ナリ、ソレ故ニ富者ハ地日々ニ益セドモ、高ハフエズ、貧者ハ地ヲバ日々ニ削ラルレドモ、ソレダケノ高ハ減ゼズ、又富民ノ持分ニ、位違ノ上田ヤ、或ハ不相應ニ取付ケ、高キ所ニテ割ニアハザルヲバ、ワザト金ヲ添テ貧民ニ讓リ與フル也、扨手前ニテハ下ノ位ニテ上ニ當ル土地、或ハモト窮民ノ持ニテ、過半ニ免ノ折タル所ヲ、金ノ勢ニテ擇取買ヒ、又ハ初ニ云タル如キ貧キ民ト、相對ニテ高ヲ元地主ヘ負セ、手前ヘハ高ナシ同ヤウノ土地ヲ持コトナリ、故ニ富民ノ土地ハ次第ニ肥エ、貧民ノ土地ハ次第々々ニ瘠、取實ハ少ナクシテ、賦役ハ多クカヽル、元來愚戇ノ者故、シバラクノ間ハセツナキ思ヒヲシテ、年貢ヲ償ヒ諸

役ヲ勤ムレドモ、後ニハ間ニ合ハズ、棄作ニスルカ、或ハ家業ヲ打捨テ、四方ヘ離散スルヨリ外ナシ、カヤウノコトハ初ニ負ヒ高ヲシテ賣コト、或ハ金ヲ添テ土地ヲモラフ時ヨリ知タルコトナレドモ、貧民ハ愚ニシテ前後ノ了簡モナク、或ハ了簡ハツキテモ、貧スレバドンスルト云ヘル諺ノ如ク、當坐ノ苦ノガレト思ナセルコト、遂ニ終身ノ患トナル也、此ノ如ク經界正シカラザルコト、田畠トモニ貧富ノ損得ハアリト雖、キリ賣ノウブヒ高ハ多ク畠方ニ有レ之コト也トイヘリ、田ハ毎年毛見アリテ水帳ノ吟味アリ、畠ニハ其事ナキ故ニ、今ハ村々ノ畠高ト土地ノ廣狹、撿地ノ帳ニ引合フ所ハ稀ナリト聞ク、嘆ズベキコトナリ、此外ニ田畠ヲ質ニ置タル如ク、永代賣渡ノ證文ヲ渡シナガラ、毎年利息ヲ出シ、且年貢諸役ハ元主ノ方ニテ勤ル類モアリ、其契券ニ種々ノ奸曲アリテ、双方訟ニ及ベドモ、今ノ癖ニテ皆內濟ニナル也、遠クハ先王ノ令ニ違ヒ、近クハ東照宮。大猷公ト、我威公。義公ノ嚴制ニソムク、有司タルモノ愼マズンバ有ベカラズ、且人間ノ事興廢常ナキハ天ノ道ナレバ、昔ノ豪强今ハ貧弱トナルモノ少ナカラズ、兼併ヲ塞グノ制ナキ故、思フマヽニ阡陌ヲ連ネヨキヤウナレドモ、身上ダン／＼衰ヘ行ケバ奴婢モ少ク、雇ヲスレバ日傭賃タカシ、小作人ヘ渡セバ、小作人ニ奸ヲ謀ラレ、今ハ兼併ノ豪ト云ドモ、スコシク物入ノ多キニコマリ、田地ヨリハ高賣ニ利アリト思フモノ多シ、況ヤ昔ノ兼併セシ者ノ子孫膏腴ノ地ハ、己ガ先祖ノ貧弱ヲ愚ニシテ買取シ故智ノ如ク、段々ニ他人ニ割キ賣ニシ、産業日々ニ衰ルヲヤ、昔ノ名殘ニテ通例ヨリハ持高多ケレドモ、持方多キ儘ニ賦役ハシゲク、昔ノ如ク

人數ハナクテ、二十石・三十石ノ餘モ持タル田地、手餘リニナラズト云コトナシ、是有司タル人兼併ノ豪ヲ惡ムコトヲ知ラデ、却テ力田ノ良民ト心得、其田地ヲフヤスヲ思フ儘ニ兼併サセ、曾テ其限制ヲ立ザル故、末ニナリテハ右ノ如クナル勢ナリ、限田ノ制ニテ、人力相應ニ土地ヲ耕サシムル術ヲバシラデ、奉公人ノ給金高ク、或ハ小作人ニ奸多ク、大百姓コマル抔トテ、大百姓ヲヨキ物ト思ヒ、兼併ノ子孫驕奢ノ餘リ、家產ヲ破ントスレバ、過分ノ大金ヲ出シテ是ヲ救フ、埒モナキ事ナリ、異國ニテ三代聖人ノ世ニハ、兼併ノ豪民決テナシ、戰國ヲ經テ秦ニ至リ、田制一變シテ此弊アリ、然レドモ漢唐已來有爲ノ君有識ノ士、安民ノ方ヲ論ズルニ此兼併ヲ塞ガザルハナシ、我朝ニテハ大化ヨリ年號初マリ、諸ノ制度モ立テ、天智帝大職冠トトモニ謀ヲ合セ、逆賊ヲ誅シテ後、御身ハ儲位ニ在テ、時ノ政ヲ輔ケ玉フ、後ニ即位マシマシテ、イヨ／＼大化ノ政ヲ修メ、中興ノ業ヲナシ玉フ、其第一ノ政ニハ兼併ヲ禁ジテ、諸民大ニ悅ブ道ヲ行ヒ玉ヘリ、中葉已來朝廷衰微貧弱ニナラセ玉ヒシハ、兼併ノ弊オコリテ、豪民ノ武士タルモノ國郡ノ大名トナリテ、公家ヘ納ル正税次第ニ少ケレバ也、去レバ今ノ大名ノ本ハ、昔ノ無爵ノ武士ニテ、其武士トイフハ、多クハ莊園持タル富有ノ豪民也、故ニ古書ニ足利殿天下ノ柄ヲ執リシ事ヲ論ジテ、民ノ世トナルト云リ、武士ノ世界トナルト云ベキヲ、民ノ世ト云ハ、武士ハ即チ昔ノ民ナレバ也、今天下武家テニ政ヲスベ玉ヘバ、昔武士ノ莊園ヲ私領トセシ事目出度ヤウナレドモ、本ニ立歸リテ公家ヨリ是ヲ見ンニ、公家柄ヲ失タルハ、此兼併ノ豪民ヲ恣ニセシヨリ起

レバ國家ノ貧弱ニナルコト、兼併アルガ故也、天下政事ノ上ニテハ甚ダ嫌フコト、智者ヲ待タズシテ知ルベシ、然レドモ昔ノ兼併ハ、田產ヲ專一トシテ小百姓ニ作ラセ、自身ハ家ノ子郎黨ヲ澤山ニ持テ、弓馬ノ藝ヲ習ヒ、武士ノ業ヲ嗜ミ、朝廷ノ催促ニ隨ヒ、軍國ノ役ニ立シ也、田地ハ兼併スレドモ、小民モ今程ハ苦シマズ、公家ハ貧弱ナレドモ、武士ハ富强ナリ、上ミ一人ノ德化次第ニテ、武士ノ富强ハ即天下ノ富强トナル道理也、故ニ昔ノ兼併ハ公家ヨリ見テハ惡キヤウナレドモ、實ハ天下ヨリ大觀セバ、害アルウチニ又大ナル利アリ、今ノ世ハ兵農既ニワカレタルコトナレバ、民間ノ兼併イカホド富タリトモ、昔ノ如ク武士ノ用ニハ立ベカラズ、澤山ニ奴婢ヲ持タルモ、昔ノ家子郎黨ニ異ナリ、平生驕奢ノ樂ミ皆町人ノ所爲ナリ、身體フヤケ心氣惰弱、百姓トテモ百姓ノカヒハナシ、サレバ昔ノ兼併ハ武士トナリ、今ノ兼併ハ町人トナル、今ノ兼併ノ民ホド國ノ蠹害タルモノナシ、慶長・元和ノ比マデハ兵農既ニ分ルト雖モ古風ニ近ク、村々ノ草ギリナド云大百姓ハ、必ズ武士ノ浪人シタルモノ、其譜代ノ家來ドモヲ引連レ田舍ヘ隱レシガ、草萊ヲキリヒラキ田畠ヲオコシ、大分ノ高ヲ持、家來ノ養ヒニクラセシ類多シ、故ニ寬永檢地ノ比マデモ、掃部ヤ主水ナドカハリタル名ヲ付居ルハ、昔ノ武士ノ名殘ニテ、古キ百姓村ノ小百姓ヲバ、奴僕ノ如ク呼ビテスモ其謂レナリ、檢地ト云モ其者ドモノ持分ヲ改メ、土地相應ニ年貢取付セシ迄ニテ、其初ヨリ持居タル田畠ヲ、多過ギルトテ奪フベキヤウナシ、且又譜代ノ家來アリテ耕作怠ラズ、田主モ百姓業ヨク勤ムレバ、手ニ餘リテ荒スコト昔ハナカ

リシ事也、後ニハ譜代ト云フモノ絕果テ、奴婢ハ皆年季ノ出替奉公ニテ、元ハ並々ノ百姓困窮シテ、身賣質物ニ出タル也、年季ノ奉公ニテ眞ノ主人ニ非ズ、ナルタケ尩弱ヲシ、骨折ヌ工夫ヲスルコト尤ナリ、農家ノ奉公ハ骨折ル業ニテ、人ノ嫌フニ乘ジテ年ゴトニ給金高クナルモ尤ナリ、小作人モ貧ニシテ良田ヲ持タヌトイフ計ニテ、兼併ノ家モ御百姓ナレバ、己モ亦御百姓ナリ、モトヨリ彼ガ奴隷ニ非ズ、相對ニテ作德少ナケレバ、作ラザルコト尤ナリ。且昔ノ豪民ノ舊キモノ今ハ多クツブレテ、今ノ兼併ハ大半新シキモノドモ也、然ルヲ古今ノ時勢人情ニカハリ有コト知ラズシテ、今ノ田地高持ノ百姓ヲ、元和・寛永時代ノ大百姓ノカタニテクラサント欲スルハ、大ナル過ナリ、今ハ今ノ時宜アルベシ、寛永ノコロカトヨ、江戶ノ市中ニ井上喜庵トイヘル隱君子アリ、其時政ノ得失ヲ論ズル、數十年ノ後ヲ洞見セズト云コトナシ、嘗テ人ニ語リテ、國ニ入テ百姓ノ中ニ大ニ富タル者アリト聞バ、其君政ヲ知ザルヨト知ヌル也、其國ハ小民必ズ困窮スベシ、又商ノ中ニ大富ノモノ有ト聞ク時ハ、其國君ノ政ニ邪アルヲ知ル、必小キ商彼ノ大ナル商ニシメラレテ困窮スルコト也、政正シク風俗ヨキトキハ、己一人利ヲ恣ニシテ奸計ヲナシ、人ヲイタマシメテ獨リ富ムモノヲバ、刑罰ニセラルベキ事ナリト云ヘリトゾ、誠ニ知言ト謂ツベシ、近キ比ロ豪民ノツブレタル村々ハ、年久シクカジケタル小百姓蘇息シテ、荒タル田畠モオコリタルコト屢々聞及べリ、是レ明證ナリ、俗人ノ論ニハ、他邦ニ大ナル豪富アレドモ、御國ニハ是ナシトテ、他邦ノ事ヲ羨シキ事ト思フ、以ノ外ノヒガコトナリ、國ニ兼併ノ大商大

貫ナキ威公・義公ノ餘烈ニテ、羈縻ノ權未ダ町人ノ手ニ墮チザル故ナリ、鄕邑ニ兼併ノ豪民アルハ、吏治偸惰ノ弊ニヨリテ也、二公ノ制豫ジメ兼併ノ奸ヲ防ギ玉ヒシコト、上ニ擧ルガ如クニシテ、就レ中義公ノ元祿ノ初ニ仰出サレシ扶弱抑强ノ令 戊辰四月二十五日仰出サレシ書付ノ寫シニ〇先年難レ有思召ヲ以、士衆拜借金有レ之面々ハ、亥年ヨリ卯年ニ至ル迄五ケ年ノ內、拜借金ノ上納元利トモニ悉御免被レ遊候、其後百姓町人ヘモ拜借金ノ利足御サゲ、一割ノ利ニ御直シ被レ下、重々御仁惠被二仰出一候、品々御領分貴賤目前ニ存知ノ通ニ候、然ルニ御領內ニ罷在候富有ノ百姓町人、件ノ御仁情奉レ及レ見、自分々々ノ借金ノ利分チモ減可レ申處ニ、唯今マデハ無二其了簡一催モ有レ之體ニ相見、貧賤ノ百姓ドモニ高利ノ金錢米穀ヲカシ、大分ノ利足、或ハ證文ニ書入ル處ノ田畠、又ハ家財等マデ引取候段、御仁慈ノ御仕置ト不相應ノ至ニ候、此通ニテハ富タルモノハ益富、貧キモノハ益貧ク、カタオチナル可レ爲二次第一候、御領內ニ居住仕諸法正敷御影ヲ以テ富有ニテ年ニ罷在、小民ノ困窮ヲモ不レ省、自分々々ノ利欲ヲ逞ク可レ致道理無レ之ノ條、向後於二在々一カシ申候金銀米穀等ノ利分、可レ限二一割之利一足候、一割ヨリ內分ハ可レ爲二心次第一、勿論一割ヨリスコシモ高利ニカシ候儀ニオイテハ、借シ人ノ可レ爲二損金一事、一、不レ論二新借金古借金一、當年ヨリ利足有ノ通リ可二相改一事、一、此度被二仰出一候一割利足相定メノ義ハ、貧民ヘカシ候分計ノ義ヲ以テ被二仰出一候、御家中衆幷奉公人ヘカシ候金銀米穀利足分ハ可レ爲二相對次第一、聊サカ上ヨリ御構無レ之事、付出家社人ノ義、是亦上ヨリ御構無レ之事、一、知行取ノ面々、自分々々ノ知行所ノ百姓ヘカシ候種カシノ利分計ハ、御大法ノ通リ三割ノ可レ爲二利足一事、一、證文書加フル所ノ質地カシ方ノ代ニ、小百姓ヨリカシ主ドモヘ引取候事エリ取不レ仕、御郡方御代官吟味イタシ、平均可レ令二裁判一事ト云々、難レ有仁政、眞ニ英雄ノ擧ト頌シ奉ルモ中々オロカナルベシ、俗吏斗筲ノ人ハ云ニタラズ、明君賢相舊法ヲ修メ、其善キモノヲ擇テ業ニ用之ニシ玉ハヾ、必ズ〱兼併ヲ破ルノ術アルベシ、易ニ、「窮則變、變則通、通則久、是以自レ天祐レ之、吉无レ不レ利」トイヘリ、今ノ時兼併ノ弊既ニキハマレリト謂ツベシ、イカニモ是レヲ破ラザレバ、百姓ノ足ルコトモ、國用ノ豐カナルコトモ有マジキ也、「通二其變一使二民不一レ倦、神而化レ之、使二民宜一レ之」ト云コトモ有レバ、孝德・天智二帝ヲ祖述シ、東照・大猷二公ヲ憲章シ、威公・義公舊法ヲ申明シ、時勢人情ノ宜キニ因テ變通神化ノ方アリ度キコト也

三ニ、力役ノ弊ト申ハ、百姓ノ田畠相應ニ年貢上納スル上ニ、持分ノ高ニ應ジテ又諸役カヽリ、傳

馬・歩夫・配符番等ニ逐ヒ使ハレテ、田地ヲ持チ耕作スル者計リ難儀スル事也、聖人ノ訓ニ、「君子勞レ心、小人勞レ力」一トテ、力役ノ征古ヨリアルコトナレドモ、古ハ租稅甚輕ク、田地ヨリハ定マレル年貢ヲ出シ、民ノ二十ヨリ六十ニナル迄ノ者、悉夫役ヲ勤メザルハナシ、軍役ハ格別、平生ノコトニ民ヲ使コト多ク、農ノ時ヲ奪ヒ百姓難儀スル故ニ、王制ニハ、「用二民之力一、歳不レ過二三日一」ト云ヒ、論語ニハ、「使レ民以レ時」一ト云リ、今ノ俗吏古今租法役法ノ沿革アルコトヲバ知ラズシテ、論語ナドノ片端ヲ聞ハツリ、百姓ヲバ使フベキ者ト心得、事アルニ臨デ大ニ是ヲ驅役シ、「使レ民以レ時」一ト有レバ、農ノ時ニサヘヒドク使ハザレバ、ヨキコトト心得ル類多シ、古ニ民ヲ使フコトハ、使フベキワザ有ツテ使ヒタル也、今ハ田畠ノコトヨリ外一切民ヲ役使ス可ラズ、モシ使役スルコトアラバ、賃ハ夫ダケノ直ヲ償フベキ理アリ、先王ノ後世ニハ李唐、租・庸・調ノ法ヲ用ヒ玉ヒ、民ニ取ニ三段アリ、「有レ田則有レ租、有レ身則有レ庸、有レ戸則有レ調」一ト定メテ、民ノ丁タル者一年ニ幾日ト役日ヲキハメ、其分ツトムレバ論ナシ、勤メ過ヌレバ調ノ布ヲ減ジ、猶モ大ニ日數多ク役スレバ、田ノ租ヲモ免サルヽコトアリ、モシ日數程勤メ不足スレバ、庸布トテ布ナドヲ納ムル法アリ、是李唐ノ法ト雖モ、三代聖人ノ法ニ本ヅキテ立タルナリ、如レ此定ムル上ハ、一年ニ使フベキ日數ホド民ヲ使フコト勿論ナリ、ソレスラ「凡差(ヤクナ)科(カケル)先ニ富強一、後ニ貧弱一、先ニ多丁一、後ニ少丁一」等ノ制、民ヲ恤ムコトイロ／＼アルコトナリ、王道衰テヨリ此法壞レ、夏秋兩稅ノ制トナル、租・庸・調ヲ混合シテ一トナシ、專ラ田地ノ高ヨリ取ルコトトナリ、

田主ト佃客ト田穀ヲ半分ケニセシ五ツ物成ヲ、一ツユルシテ四公六民ノ制立チ、此外一錢ニアタル役ナリトモ、百姓ニ課スベカラザルコト近古ノ定法ナリ、然レバ一年ノ勤ムベキ役モ、家内ヨリ戸ゴトニ出スベキ手ヅクリ物、（調ノコト也）皆々田地ノ年貢ニテスムコトナリ、此外ニ公儀ノ入用アッテ、民ヲ使フニ賃錢・扶持米ヲ給ハラザルハ、實ハ非法ナリ、故ニ當代ノ初制、諸路ノ驛場ナド過分ニ人馬費ル處ハ、ソレダケ外ニ優恤ノコト有ト聞ク、本藩ニテモ驛場ナド、昔ヨリ雜穀或ハ夫食等優免ノ制アルモ此謂ナリ、然ドモ南北ノ法元來一時苟且ノ制ニテ、租。庸。調ノ詳審ニ及バザル故、弊モ亦數多アリ、先ヅ方役ノ一端ヲ云ハンニ、モト民ノ身役ナルユヘ、老幼癈疾ノ外ハ誰モ勤ムベキコトナルニ、人ノ面ヘ管（カマ）ハズ田地ニカケタルユヘ、民皆本業ヲ勤ムル内ハ損得ナケレドモ、商賈及ビ手游浮浪ノモノ、一向ニ國ノ徭役ト云フコトヲ知ラズ、尫弱モノヽ勝手ナル世界ニ成ルコト也、高カケノ役ト云コト甚無理也、田地ヨリハ租。庸。調ヲ一ニ合セシ高免ノ年貢ヲ出シ、且軍國ノ用ニ夫金飭金マデ平日既ニ納ムル上ハ、一切臨時ノ役高カケニスベキ道理曾テナシ、高カケノ役ト云フコト二重取ニテ、非道ナルコトナレドモ、其廻リ百姓ノ仲間ニテ年貢ニテモ運ブハ、手前ヨリ運ブコトナルユヱ、年貢米ノ多少ニ應ジテ割合スルニヨリテ、田地ノ高ニ應ジテ人夫ヲアツルコトノ旨ヲ混ジテ、公儀ヨリアツル夫モ、ソノ法ヲ用ヒタルナラント先輩ノ論ゼシ也、サレドモ天下・盡ク南北ノ法ヲ用フレバ、賦役ノ仕カタ諸國一同ニ田地ノ高ヘカヽルコト今ノ通例ナリ、ヒトリ本藩ハ威公・義公ノ御國ニテ、百ノ制度佗邦ニ勝レタル故、

昔ハ夫金ノ外平生ノ雜徭田地ノ高ヘハカケズシテ、人別ヲ校シ人ノ面掛ニテ有シヲ、元祿ノ末年ヨリ此良法ヲ改メ、今ノ高掛トハ成シトナリ、面掛ニテハ大百姓モ小百姓モ、一ヤウニ役ニ當テ損得アルヤウニ俗人ハ思ヒ、且田地持タザルモノニ役ヲ勤メサスルコト、佗國ニハナキコトナド云鼻ノ先キノ了簡ヨリ、舊法ヲ改メ人數ニカマハズ、田地ノ高ニテ出サスル故、何程人數使ヒ候ニモ、存分ニ使ヨキト云フヨリ、今ノ如ク成リシナルベシ、田地ノ高大小アルハ、年貢ノ出シヤウ多少アルニテ、其差別スミタルコト也、人夫ハ人ノ身ニテ勤ムベキモノナレバ、人ノ頭數ヘワリカクルコト當然ノ理ナリ、均シク是國ノ民ニシテ産業ハ樣々アレドモ、君上ノ政刑明ラカニ治メ玉ヘル御影ニテ、一生安穩ニ年月ヲ送ルモノ、田地耕サヾルトテ、國ノ徭役ツトメザル謂ナシ、士大夫ハ士大夫ノ職事アリ、大工ハ大工ノ御國役有テ、歲ニ十日宛無賃ニ使ハレシモ、十日勤メザレバ其傭錢日ニ一匁宛、十日二十匁普請カタヘ納ル也、御城下ノ町人ハ故有テ安樂ナレドモ、町役ニテ徭役アタルコトアリ、四民ノ者各々其職ナキコトナシ、然ニ鄉中ニテ商賈末業ヲ事トシ、或ハ游手懶惰ノ氓ノミ徭役ヲ勤メザルコト、豈善政ト云ベケンヤ、聖人ノ制ニ、「民無二職事一者、出二夫家之征一、宅不レ毛者、出二里布一ナド云ニハ表裏ノ相違也、是ニ依テイフトキハ、古ハ農ヲ勤ル者ヲ恤ミテ、農ニ惰ル者ヲ罰セシニ、今ハ勤者ヲ困メテ、惰者ハ優ナル仕方ナリ、是ニテ民ノ農ヲ勤ムベキヤウナシ、威公ノ寬永中ニ仰出サレシ制條ニハ、郡奉行代官無二自身之働一、鄉中ヲ手代マカセニイタシ、不レ入夫傳馬ヲ仕カヒ候ハヾ可レ爲二曲事一ヨシ見

ユ、義公ノ寛文中ニ仰出サレシ制條ニモ、夫傳馬不レ費ヤウニ可レ仕事、但夫傳馬帳可レ出事等見ユ、寛永十六年ニハ、町奉行ノ同心郷中ニ出候節、常扶持ノ外二人フチヅツ被レ下候ニ付、夫傳馬等取候事停止セラレ、元祿元年ニハ、在々ヘ役人中幷諸手代參リテ逗留候ハヾ、屹ト宿錢爲レ拂、百姓モタヒニテ內夫出候事停止シ玉フ、二公ノ民瘼ヲ恤ミ玉フ事如レ此深厚ナリ、今ハ此制失ヒタルノミナラズ、凡吏漸頻擾ニナリシカバ、村々人馬ハ昔ノ半分モ滅ジタルニ、胥吏ノ爲ニ驅使セラルヽ人馬、昔ニ幾倍ト云コトヲシラズ、其役法一變シテ高掛ニ成リシ故、人數ノ內ヨリ割合ヲ以テ召仕フト違ヒ、百石四分掛ケニテ高ヨリワリ出ス故、何程ニテモ存分ニツカハルヽ也、人數ヘカヽレバ、少ナキ人別ヲシゲクハ使ハレザレドモ、高ニカケレバ、年貢同ヤウニイヤトモ割合テ出サネバナラズ、故ニ今日百石ヨリ四人出シ、又明日モ明後日ニモ入用次第アテラルヽナリ、百石四分トハ雖モ是ハ高ヘカケテ召使フトキノ數ニテ、百石ノ摘ヨリ一年ニ何程使フト云極メハナシ、アタリ次第使フ故、役ノ多キ所モアリ、少キ所モアリテ、平均ナラザルナリ、長岡。小幡南村ナドハ各數百石ノ村ナルニ、江戸往來ノ驛場タツ故、夫金雜穀モトヨリ御免ナルニ、又村々一割カケテ歲々百餘兩ノ金ヲ下サルト云、然ルニ長岡二十五人ニ馬二十五疋、小幡二十人ニ二十疋、定ノ如ク出シ終レバ、旁近數里ノ村々ニ助鄕ト云フコト有テ、兩驛ヘ役ヲ助ル所五十ケ村ニ及ベリ、其助鄕ノ人馬如何ナル割ト云ニ、五十ノ村々輪次ニアタル故、毎日ニハ有ザレドモ、百石四分カケノ積リ也、四分掛ハ本役ナルニ、助鄕ニモ只此法ヲ用ヒ、往

來ノ人馬多ク出ル程助鄕ノ助役繁キナリ、其上兩驛ノ驛長ニ私曲種々ノ事ニテ、助鄕ノモノ怨且怒ラザルハナシ、右ノ村々兩驛ノ助役アリトテ、少シモ本村ノ諸役優免ノ沙汰ヲ聞カズ、片ツリナルコト也、其外村々ニモ普請方・分付方等色々ノ夫役有テ、農時ヲ奪ハザルハナシ、去戊午一年ニ、向井町一町ニテ費ル所ノ歩夫配符番等凡六千人ニ及ビ、上町惣町ニテ諸役所ノ配符等ニ出シ人、一萬何千人トカ役セラレシト云、是ヲ以テ推ストキハ、鄕中ノ煩擾知ヌベシ、御城下ハ土地ヨリ年貢出ザレドモ徭役繁ケレバ、市井ノ民嘵怨ニ至ル、況ヤ鄕中ハ年貢ヲ出シテノ上ニ、種々ノカヽリ物有テ、如レ此徭役シゲキトキハ、民ノ力給スベキヤウナシ、或人ノ說ニ、鄕中一歲ノ人夫四郡合テ大抵二百萬人ト云、然ラバ惣人數二十餘萬、男女・老幼・遺喪・罷疾ヲ論ゼズ、惣人數ハナラシテハ歲ニ十日出ルナルベシ、男女其數相半ト見レバ、十餘萬ノ男子ニテ歲ニ二十日ナリ、十萬ノ男子ノウチ、壯丁ハ三分一カ四分一ナラデ有マジ、然ラバ壯丁一歲ノ役數十日ニアタル、三代什ガ一ノ稅ニシテ、用ニ民之力ニ歲ニ三日ナド云コトハ姑クオキ、租・庸・調ト三段ニ定タル庸ノ日數ヨリ、役セラル、日多キナリ、租・庸・調ハ三段ニ分ケタル故ニ、田租甚輕キコトニテ二十分一ニアタル、ソレニテサヘ正丁ノ歲役十日ニ過ズ、三十日已上役スレバ租・調共ニ免スナリ、但シ雜徭ト云フモノ此ノ外ニアリ、令ヲ可レ考今庸・調トモニ田租ニ混合シテ厚ク取ル上ニ、右ノ如ク民ヲツカフコト甚非道ナリ、但公上ノ御用ニツカフヨリ外昔ハ瑞龍山御普請等ニモ、皆日用錢ヲ下サレシト云、其安ニ民ヲツカハザル事見ツベシ訟獄政令ノコトニヨリ、配符ノ往來又ハ田畠川除普請等、皆彼等ガ身ノ上ヘカヽリ、無レ據事ニテ

而已使ヒ、其他一切ノ雜徭煩擾ノ弊ナキ時ハ、使ヒヤウニテ非道ナラザル仕方有ナリ、右ノ一歳數十日ノ役ト云モ、國ノ壯丁平均ニ積レル故如レ此ナレドモ、今ノ役法高掛ケニテ平均ニ人ヲ以使ハザルユエ、田畠ヲカセギ持高多キモノ而已、件ノ徭役ニツカハレテ、カタ〳〵ハ年中佚樂ニテクラスモノ多シ、カタ〳〵ニ年中佚樂スルモノ多キ程、田畠持タルモノ役繁クアタリテ、春時ナドハ七八石已上ノ高持タル農夫、步役ノ爲ニ逐ハレテ、耕スニ暇ナシ、況ヤ大分ノ高ヲ持タルモノヲヤ、田畠ノ手オクレニ成、農人ノ咨嗟怨嘆當ニ止コトナキ事亦宜ナラズヤ、トカク大ニ煩擾ノ弊ヲ除テ、無用ノ雜徭ヲ省キ、高掛ノ濫法ヲ改メテ均役ノ法ヲ行ヒ、民ノ力ヲ寬フセザレバ、農ヲ勸ムルコトアタハズ、此賦役ノ不均ハ今諸國一ヤウノ弊風ナレドモ、本藩ニハ威◦義二公ノ良法アルヲ不レ用シテ游惰ヲ利シ、力作ノモノヲ困シム、長大息スベシ

四ニ、横斂ノ弊ト申ハ、年貢正供ノ外ニ、横役ニカケテ民ヨリ取ル、三雜穀切返シノ類ノコト也、十アル物ヲ四ツ公、六ツ民ニユルスヲ四公六民トシ、是ヲ四ツ取トモ、四ツ物成トモ云、半々ナレバ五ツ取、五ツ物成ナリ、此等ハ土地ノ上下肥磽ニヨリテ、取付ノ厚薄アルコトナレバ、土地相應ノ取付ナラバ先ヅ正供トスベシ、タトヘバ十石ノ地ヨリ一ツ取ニテ一石、四ツ取ニテハ四石納レバ、兎ノ通ニテ無理ナシ、此外ニ何ニテモ餘計ニ筋ナキ名目ヲ立テ取ルコト皆横斂ナリ、取付ノ外ニ二割ノ延ト、一石ニ三升ヅツノ口米ハ、前代ヨリ取米ノ外ハ、百姓ヨリ出シ損ヲサスル也、口米ハ元來諸國一同代

官ヲ置料トシテ、代官ノ得分タルヤウニ定テ取シカバ、百姓相對ニテ出シ來リシ也、二割ノ延ヲカケルコト、耗米ノ無キヤウニ、納升ヨリ餘計ヲ取シ往昔ヨリノ法苛キニ似タレドモ、是ハ姑ラク是非ヲ論ズルニ及バズ、今納升ヨリ口米ヲ取、二割ノベテハカリ立テ、其上ニモ餘計ヲ入テ俵トナシ、御代官ノ手代ワザ〳〵出テ是ヲ改メシモノヲ、御藏納メニ至テハ、又々メリ米アリトテ、重取ニ逢ヒ難儀スル類多、是又横斂ナリ、又村々ニテ鳥運上納ムルコト、初ハ御鷹場ノ外殺生ノ多少ニヨリテ梲ヲ納メ、既ニシテ又殺生ノ有無ニ構ハズ、例ノ高掛ニテ、百石ニ付金一分ヅツ取ルト云（此法元祿・寶永ノ際ニ起ルカ）是亦横斂也、是等ノ類其職ニ在ル人、身ヲ致シ力ヲ竭シテヨク吟味セバ、イカ程モアルベキナリ、然レドモ已上ノコトハ姑ク置、有司ノ仕カタ惡シキニヨリ、大ニ民心ヲソコナフモノハ、三雜穀ノ切返シヨリ甚シキハナシ、畠方ニハ雜穀ノミ生ジ、稻生ゼザルユヱニ、段別石盛ノ法同ジ三百坪ノ地ニテモ、畠ノ分米田方ヨリ三段計モカロシ、是雜穀ヲ米ニ直シツモルニヨリテナルベシ、田ハ素ヨリ取米ヲ其儘納ムレドモ、畠ノ取米ハ名バカリニテ金納ニナル、是ヲ代方金ト云、即チ雜穀ヲ米ニ直シタル代金也、既ニ代方金ヲ納ル上ハ、別ニ雜穀代トテ取ルベキ理ナシ、寛永ノ比雜穀ヲ取シコトモアレドモ、入用アリシ程、代方金ノ内ヨリ金ヲ渡シ、百姓ヨリ買タル也、正保ヨリ後ハ、百石ニ付大豆五石・稗三石・荏一石二斗トワリツケ、代方金マデ此代ヲ引ケドモ、是ハ元直段トテヤスキ勘定也、其品ヲ直ニ收納セバ、直段ノ少々ヤスキハ其分ナルベケレドモ、是ヲ買取テ後、百姓ヘ預ケ置ク體ニシ、其收納ノ時ニ

至テハ二割ノ延ヲカケテ、五石ヲ六石トシ、三石ヲ三石六斗トシ、一石二斗ヲ一石四斗四升トシ、シカノミナラズ、貢附直段トテ大ニ其價ヲ貴クシテ、其代金ヲ納メシム、兎ハ四ツ取ニテモ、此雜穀ヲ勘定スレバ、五ツ三四分ノ取ニアタルナリ、扨其外ノ夫金ヤ、繩代等ノ諸ガカリモノ又此外ニアリ、民ミナ是ヲナゲク、正保ノ初三雜穀ノ課ヲ立シ初ニハ、其年ノ出來秋賤キ直段ニテ買、來年ノ貴キ相場ニテ貢附、勘定ヲ立、利ヲ見シマデニテ、今ノ如ク其年ノ蒂限ニ、年貢同ヤウニ金納ニ取立ルコトハナシト云人モアリ、傳ニ云ハズヤ、君子作ニ法於涼一、其弊猶貪、作ニ法於貪一、敝將ニ如之何一ト、元來正供ノ外ニ、和買再折ノ帶法ヲ設ケ、元直段貢附直段ノ相違アルヨリ、中葉已來國用不足ナルマヽニ、民ノ心服セザルニモ構ハズ、次第ニ元ト貢附トノ直段ヲ違ハセ、益ヲ上ニ取ル也、地理要法トヤランニ、畠ハ田方ヨリ納方少ニ付、外ニ掛リ物アリ、大豆・小豆・稗・荏等ヲ畠方ニカケ、代金ハ勘定立ツト雖モ、其直段下直ニ定ルナリ、併シ畠方不相應ニ多分掛ルトキハ、百姓困窮仕ルベシ、了簡專一ナリト云リ、畠ノ年貢少ナク、定 外ニ又掛物ヲシテ、勘定ニ無理ヲスル朝四暮三ノ術ト云モノ也、所詮トルベキ程トニモノナラバ、初ヨリ民ヲ欺カズシテ畠ノ代方金ヲ、輕カラズ重カラズ相應ニ取テ、後ノ横斂ヲナマジキコトナルヲ、朝三暮四ノ術ヲ以テ民ヲ愚ニスルコト、一時ヲバ欺ベケレドモ、百世ヲ欺ノベカラズ、貢ニ詐術ヲ用ヒズシテ、年貢ノ正供ニテ横斂シタルヨリ、造作モナク收納シテ、民モ心服スベキ方アルヲ、俗吏ハ舊例ニ因循シテ是ヲ知ルコトナシ、一智者作レ法、愚者制焉、賢者更レ禮、不

肯者拘焉」ト云コトモアレバ、俗吏ノ舊例ヲ金科玉條ト心得ル、是非モナキ次第也、八九年前村上ニ此切返シノ非法タルコトヲ申上シ人有ニヤ、是ヲ除クベキ事議セラレシニ、百年來ノ舊法タル上、今ノ國用數千金等ヲ損スベキユヱニ、全ク除クコト能ハズ、漸々ニ元直段ト貢附トノ相違ヲ少シヅツ下ゲテ、數十年ノ價ヲ平均シ、民ニ利スベキトノ事アリ、有司ノ卓識少キニヤ、君上ノ德意ヲ下ニ布クコト能ハズ、孟子ニ所謂、「月攘ニ一鷄」ノ議ヲ犯シ、カヘツテ民心ヲソコナフ、嘆ズベキナリ、有司ノ帳面ニテコソ數十年ヲナラシ少々ヅツノ價ヲ下ゲテモ、合セテハ大ナル公損ナレド、民ノ一人前ヘカケテハ中中目ニ見ヘズ、イヤシキ諺ニ、損シテ耻カクトハ此類ノ事ナルベシ、其ノ外有司ノ勘定、分釐ノ米ヲ爭ヒテ大計ニハ昧ク、市井ノ賤丈夫ニモ耻ベキ多シ、ヨク其本ニカヘリテ正供ヲ取、瑣細猥鄙ノ會計ヲ革除シテ取付ヲ下ゲ、所收ハ却テ多キ術モ有ルコトヲ、只今マデ建議スル人ナキハ、遺憾ナルコトナリ、何事モ指置キ、國ノ政法ニ無理ナルコトハ、決シテセザルモノト云コトヲ明カニ吏民ニ示サザレバ、大事ヲナシ大功ヲ立ルコトモナラザル也

五ニ、煩擾ノ弊トハ法令煩ハシク吏治コマカニシテ、大事ノ肝要ナル所ハ却テ行屆カズ、無用ノ末事ニ隙取多ク、一度ニテスムベキヲモ、五度モ十度モカヽリ、萬端ラチアカズ、民ノ疲レニナルコト也、法令ハ本ヨリ民ヲ治ムル道具ニシテ、聖賢ノ德化ニテモ法令ヲ廢スルコトアタハズ、爲レ政人ノ愼ミ行フベキコト勿論ナリ、サレドモ法令ハ器ノ如シ、器ヲヨク用ルモノハ人ニ在リ、故ニ何程良法アリ

トモ、是ヲ用ルモノ其人ニ非ザレバ、利器アリテモ、拙工ハヨキ細工ハナラザルガ如シ、法令ハ國ノ利器ナリ、利器モ用ヒヤウ悪ケレバ鈍クナル、創業ノ君立テ玉ヘル法令、元來ヨキ筈ナレドモ、今ニ至テ人情ニ合ハザル如キハ、法令ノ過ニハ非ラズシテ、法ノ末ニ弊ノ生ジタルナリ、後ノ人其本ニハ立返ラズシテ、當座ノ了簡ニテ、目前ノ小利害ニ就イテ、左ヤ右ト自由ニ法ヲ更ルユヱ、法令滋々彰レテ、一事ニテモ二ヤウモ三ヤウモ、前後ノ令カハルユヱ、民守ル所ヲ知ラズ、文書ヲ奉行スル有司サヘ、悉ク條目ヲ記臆スルコト能ハズ、況ヤ愚民ニ於テヲヤ、是ニ背キタルトテ悉ク罪セバ、民手足ヲ措ク所ナシ、打ステ措置ケバ、威令タヽズ、故ニ今ノ俗吏輩ノ先キニテ文ヲ舞ハシ、民ノ犯シテモ表向ノ犯サヾル體ニナシ、人ギキノヨキコトヲ而已謀ルユヱ、耻モナキコトニ念ヲ入ルヽ也、法令ハ古ヨリ易簡ナルヲ貴ブ、「易則易レ知、簡則易レ從」トイヘリ、今ノ法令煩細ニシテ知リガタキ故、亦從ヒ難シ、凡法ヲ立ルニハ、「設而不レ犯、犯而必誅」ト云コトアル故ニ、令行ハレ禁ズルコト止ム也、上ヨリ知リガタク、從ヒガタキ法ヲコシラヘ置ク故ニ、法ハ設ケテモ犯シ易シ、犯セドモ必誅シガタシ、人ニ守ラセザル法ナラバ、初ヨリ設ケザルニハ如カズ、且有司ヲ先ジ、小過ヲ赦シ、賢才ヲ擧ゲヨト云コトモアレドモ、法令ニテ人材ヲ束縛シテ、何事モ舊例舊比ト云ニナレバ、智者モ愚者モ一面ニテ、賢者ハ功ヲ成シガタク、不肖者拙ヲ藏シヤスク、拔委任スルト云コトナキ故ニ、及ビゴシノ指圖ナリ、大體ノ上ニテ成功ヲ責メズシテ、當座々々ノ事ニ就テ、念ヲ入タルノ、不念ナルノト、イラザル吟味強キ

故、小吏タルモノ小過ヲ畏レテハ存分ノ働ヲセズ、一身ノイヒワケ立ヤウニ、スリマハリテ立マハル故、筈ノ折タルホドノ小事モ、一分ニテ決斷セズ、相互ニ人ニモタレテ事ヲ行フ故ニ、少シク常ニ異ナルコトアレバ、イツモ小田原評定トナリテ、民ノ申出ルコト即座ニハ埒明カズ、其村ニテスムコトモ役所ニ出ル、役所ニテスムコトモウカヾヒニナリ、村役人ノ往來繁ク、日返リノ筈モトマリニナリ、一日ニテ濟カトスレバ、三日モ四日モカヽル、其逗留往來ノ費、例ノ村割高掛ケニナレバ、小民ノ費一年ニカケテハ莫大ナリ、訟獄ナドモ是非曲直ノ當否ハトモカクモ、其聽人ノ器量ダケナラデハ出來ヌ筈ニテ、聖人ノ上ニモ過ナキコト能ハザレバ、其事ニアヅカリタル役人存分ニ取扱ヒ、私ノ心サヘ挾マズバ、少々ノ訟獄何ノ造作モナクスムベシ、裁判速カナレバ民モ畏服シ、且無用ノ隙費ナシ、多クノ中ニスコシク間違ヒアリトモ、利大ニシテ害少ナシ、スベテ如何樣ナルコトニテモ、官府ヘ申出タル程ノコト、其役所ニテ是非決スルコトナラザレバ、役所ヲ立タル甲斐ナシ、タトヘ申出ザルコトニテモ、其事體ステオキ難キ類ヲバ、速ニ糺明シテ曲直ヲ明ニスベシ、然ルヲ今ハ申出サヌコトハ捨テカマハズ、申出タルコトモ曲直ノサバキ、當不當ノ批判ヲ畏レ、當座ノ苦ノガシニ申付テ內濟セシム、其內濟ノ入ワリニハ庄屋横目、又ハ寺院社人等ヘ、ワザ〳〵配符ニテ申コス也、內證ノ和談ニテノミスムベキナラバ、元來訟獄ト云モナキ筈、官吏モ無用也、然ルヲ有司ニテ裁判セズ、人ヲタノンデ和談ヲ取行フコト、如何ナル思慮ニヤ有ラン、內濟ト云コトアルユエニ、イツモ強キモノガチニテ、小民ノ寃

抑伸ルコトアタハズ、且奸人法ヲアナドリテ上ヲ犯シ、以ノ外ナルコト也、育子ノ世話・人別ノ吟味ナドモ、名バカリニテ實トヾカズ「法行則人從レ法、法敗則法從レ人」ト云フ如ク、法ハ表ムキ立テ居レドモ、法ノ中ニテ奸ヲ爲ス、タトヘバ生兒ヲ拉殺スルコトヲ禁ズレバ、詐テ胎死ト稱シ、它所へ出人ヲ禁ジ人別ヲ改ムレバ、改ノ時バカリカヘリ居テ、又他所へ出ルナリ、是ヲ禁ズルニハ、禁ズル術モアレドモ、其本ニハカマハズ、タヾ帳面ノ見ヨキコトヲ專一ニ働ラク也、人別ヲ改メタリトテ、大半浮浪ノ濫ニテ、其土地々々ノ田畠ニ地着サセズンバ、當座ノ着到帳ヲ付ケテ、人數ヲ多クコシラヘタリトモ、實用ニ於テ何ノ益モナキコトナリ、何ノ益ナキ而已ニ非ズ、無用ノ郷村へ入コミ居テ、民ノ役介トナリ、百姓ニ隙ヲ費サセ、筆墨等モ無レ謂ツカヒツブシ、村ノ費トナル、其外一切ノコト、君上ヨリ民ヲ恤ミ玉フヨリ仰出サレシコトニモ、小吏ノ仕カタニヨリテ、セハシナク號令ヲ出シ、配符ヲ妄ニツカヒステ、高持ノ老幼寡婦ノ類モ、是ガ爲ニ驅役セラレ、夜中ニ松明ヲ燃シ、隣村へ傳送スル御用ノ文書、イカナルコトカト思ヘバ、明日ニテモ明後日中シフレテモスムコトヲ、思ヒ出シ次第ニ觸チラシ、役ニアタルモノハ難儀ヲ顧ミズ、平生實ニ民ヲ恤ム心アラバ、如何ニモ除ベキ害、興スベキ利アルコトモ、力ヲ竭シテ爲ルコトナシ、タトヘ爲ルコトアル志アリトモ、亦獨立ニハ成ガタシ、スベテ有司ノ弊風、其職事ノ理不理ヲカマハズ、虚文末節次第ニコマカニナルマヽ、御用繁多ナリトテ是ヲ自慢シ、繁多ナルマヽニ、簡要ノコトモ中々手ニ及バズ、一時ノガシニ打ステ置クコト當時ノ人情也、右ノ如ク勤

メ居テ、尺寸ノ功モナクトモ、表ニ上ノ法令ヲ守リ、官長ノ指圖ニ違ハズ、綿密ニ念ヲ入テ、御用ノ繁多ヲ鼻ニカケ、精勤ブリヲ立レバ、歳月ニ隨ヒ慰勞セラレテ立身スル故、民ノ爲ニナルコトモ、君ノ御爲ニナルコトモナキ也、スベテ郷中ノ入用、小百姓ヘ割カケ候時、庄屋私曲無レ之ヤウニ、威公ノ御制條アリテヨリ、義公ノ御條目ニモ、小割附ノ改メ、指錢ノ改メ、小百姓ノ手前ヲ吟味、一人切ニ判形イタサセ候ヤウニ仰出サレシコトアリ、二公ノ尊慮、庄屋組頭ニ私曲ヲナシテ、小百姓ヲ侵漁セサセマジキ仁政ナリ、然ルニ今煩擾ノ弊ニヨリテ、村々ノ指錢ハ次第ニ多ク、庄屋組頭少々ノ給分ニテ、御城下ヘノ往來、幷平生ノ隙ツブシ、間ニ合ベキナラネバ、役人耳目ノ不レ及所ニハ、常ニ奸曲絶ヘザルナリ、帳面ニテノミアラタムレバ、指錢ノ名目如何ヤウニモ、此方ノ知ラザル所ニテ奸ヲナシ、小民ヘ割カケルナリ、小割付アラタメタリトモ、是ハ定レル田ノ取米、畠ノ代方金バカリニ書タルモノニテ、是ハ勘定ノ筋明白ニテ、奸ヲナシガタキ故、是ニテハ奸ヲナサヾレドモ、雜穀ノ切返シ直段ヨリ已下、其外ノカヽリ物ハ小割付ヘ載セザル、ムツカシキ勘定ニテ、是モ高持ヨリハ納ムルホド出スモノナレバ、是等ノ所幷人足ノ代、米穀御藏納ノカヽリ、手代ノ賄ヒカヽリ等ニテ、奸計自由ニスベキ也、小割附指錢改トテ、兩役所ノ手代ワザ／＼夫傳馬ヲ費シテ郷出シ、御藏入ノ米ヲクヒヘラシ、且百姓ノヤクカイニナリテ、庄屋組頭ノ奸ヲ防グ爲ニハナラデ、却テ是ラノ出張ハ、其年指錢帳ヘ記スベキ一端トナルコト也、其ウチニテ淺慮ナル庄屋組頭、帳面ニテトガメラルヽ私曲ヲモナセドモ、如

此類ハ畢竟淺智ニテ、人ニトガメラルヽ程ノモノ、大奸ハナシ得ザル也、大奸ヲ爲スニハ、如何ヤウニモ帳面ヨロシク、トガメラレヌヤウニスル也、小百姓ノ前ヲ吟味スルトテモ、一人切ニハ呼出サレズ、惣百姓ノ名代ニ十人組トヤラン木偶人ノ如キ愚民、庄屋ドノヽ前ニテハ、左ヘモ右ヘモ自由ニ馬鹿ニサルヽ者、來リテ判形押切シタリトモ、何ノ證據ニモナラズ、奸黨ノ庄屋ナドハ、下代ノ詮モナキ帳面ノ上ノ穿鑿、腹中ニハ笑止千萬ニ思フナリ、租税ノ法ハ勿論、力役ニモ定制アリテ、一切ニ横役カケルコトナク、百姓ノ出シ分易簡明白ニ知レヤスキ仕方ヲ立テ、庄屋等ニモ私曲サセザルコトハ、如何ニモ術アルベキナリ、下代ハ輕キ役ナレドモ、大切ノ御百姓ヲ取扱フ職、妄ニ其人ニ非ザル者ヲ、見習ヒノ年數バカリニテ頭數ニ備ヘ、勤メサスルヨリシテ諸事弊ルコト多シ、心得アルベキコト也、然ドモ今頃樣ノ弊アルハ、諸有司一トウノ惡風ニテ、下代バカリノ咎ニハアラズ、此弊除カザルトキハ、仁政ハ決シテ行ハルベカラズ

已上ノ五弊極テ是ヲイフトキハ、誹謗惡口ニ近キ所モアリテ、甚ダ憚ルベケレドモ、其弊ノスガタ悉ク其大意ヲ詳ニセザレバ、明君賢相時ニヨリテ宜ク制シ玉フベキ策ヲ獻ル人アリトモ、無形ノ敵ハ防ギガタキ如ク、スガタノ見ヘザル弊ハ革メニクキ故、見聞ノ及ブ所、有ノマヽニ述ル也

勸農或問卷之上 終

勸農或問卷之下目錄

勸農或問卷之下

或問　富國ノ本務ハ勸農ニ在テ、勸農ノ政先ヅ五弊ヲ除クニ在ルヨシ、五弊ノ目既ニ其詳ナルコトヲ聞コトヲ得タリ、然ドモ侈惰・兼併・力役・横斂・煩擾五ツノモノ、皆大弊ト謂ツベシ、今コレヲ救フニ何ノ處ヨリカ手ヲ下スベキヤ、先ヅ最初ニ侈惰ヲ矯ムベキカ如何　曰、五ノ弊悉ク除カザレバ其効ナカルベシ、コレヲ救フニ術アリ、侈惰ノ禁ジタキコト勿論ナレドモ、此勢ニテハ中々禁ジテモ益ナカルベシ、益ナキトテ終ニ禁ズベカラズト云ニ非ズ、前後ノ次第アルベシ、邦ノ貧クナリテ課丁日ニ寡ク、曠田歳々アレ、如何トモスベカラザルスガタヲ以テ云ハヾ、一ニ侈惰、二ニ兼併、三ニ力役、四ニ横斂、五ニ煩擾ノ弊、嚮ニ次第スル所ノ如シ、今是ヲ改メ仁政ヲ施サントナラバ、却テ先ヅ第五ノ弊ヨリ手ヲ下シテ、第四・第三・第二・第一ノ弊、倒シマニ除クベシ、煩擾ノ弊革ラザル時ハ、吏治ノ本立ズ、民ヲ治ントシテ、却テミダルコトモ有、如何ナル仁政良策有テモ行屆クベカラズ、故ニ首トシテ是ヲ除クベシ、次ニ横斂ヲ除テ稅法ヲ簡易ニシ、民ニ心服サセ次ニ力役ノ法ヲ更メテ民力ヲユルクシ、農時ニ違フコトナク、凡身アルモノ悉ク役アリテ、游手浮浪ノ徒幸ニシテ免カル丶コト能ハズ、力田ノ者獨困ムコトナカラシメ、役ヲ施スニ其年ヲ論ジ、因テ以テ老ヲ安ンジ、幼ヲ慈スルノ教ヲ施

シ、次ニ兼併ヲ除テ貧富幸不幸ナク、民ヲシテ其業ヲ安ジ、均田常免ヲ行ヒ、上下共ニ利アルベシ、然後ニ百姓ヲ敬スル道アリテ、嚴ニ侈惰ヲ禁ジ、風俗勤儉、庶アリテ且富、教化行ハレ易ク、四境ノ内悉ク仁壽ノ域ニ躋ラシメント欲ス、是寔ニ明君賢相ニ仰グ所ナリ

問　煩擾ノ弊ヲ除クコト如何　曰、省レ法擇レ人、虛文ヲステ、實効ヲ責ルニ如クハナシ、今ノ繁密瑣細ノ法、多クハ元祿已後ノ出來物ニテ、民治ニ益ナキ者盡クコレヲ革除シ、威公・義公ノ舊法ヲ修テ世態人情ヲ揆リ、善キモノヲバコレヲ存シ、斟酌スベキヲバ斟酌セシメ、サテ一切ノ政令ヲ威・義二公ノ舊制ニ遵ヒ玉フノ旨、貴賤大小トモニ告諭アラセラレ、有レ徵コトヲ示シ玉ハヾ、信從セザルモノ有ベカラズ、是歷代賢君良佐中興ノ功業、皆此道ヲ以テセザルハナシ、一國ノ紀綱是ニテ復張ベキ本ナレバ、獨民政吏治ノ末ノミニ非ズ、「修ニ舊法一、擇ニ其善一而業ニ用之一」齊管仲ノ故智、今ノ世ニ用テ大効アルベキ也、イカニ威公・義公ノ舊法ヲ修メ玉フトモ、「苟非ニ其人一、道不ニ虛行一」トモ、「神而明レ之、存ニ乎其人一」トモ、又「其人亡則其政息」ト云事アレバ、法バカリハタノミニナラズ、人才ノ擇ミ肝要也、法ヲ詳密ニ立テ、人才ヲ束縛シ、智愚一樣ニ舊法故例ヲ以テ牽制センヨリハ、却テ其ノ大綱ヲ存シ、易簡ニシテ易レ知易レ從カラシメ、臨時ノ了簡ニ至テハ、便宜從レ事トテ器量次第ニ取扱ノコトヲ許シ、小々ノ過失ハ咎メズ、其職事一體ノ理不理ノ上ニ就テ賞罰アル時ハ、煩擾ノ弊ハ滌然トシテ除キ去ルベシ、擇レ人ノ事ハ極テ容易ナルコトニ非ズ、サレド委任シテ責ニ成功一之道ヲ專用ヒ玉ハヾ、左マデムツカシキ事

ニモ有ベカラズ、久シク委任シテ成功ヲ責ル時ハ、賢者ハ績ヲ底スベシ、不肖者ハ職ニ不レ堪シテ去リヤスシ、上ニシテ好レ詳玉ヒ、八十餘人ノ手代共ノ能否マデ詮議シ玉ヒテ、黜陟ノ事モ及ビ腰ニ御世話アル樣ニテハ、中々行屆クコト有ルベカラズ、明君既ニ賢相ヲ擇ビテ任ジ玉フ時ハ、執政大夫相應ニ良キ郡奉行ヲ擇ビテ任ジ玉フベシ、郡奉行既ニ一郡ノ政ニ任ゼラル丶トキハ、其ノ支配鄉村ノ諸事ハ申ニ及バズ、御アヅケノ手代、能否ノ品進退ノコト、頭ノ存分ニ取行ヒ、遠慮アルベカラズ、其ウチ殊ニ勝レタル者ヲバ上ヘ薦擧シ、器量次第ニ升擢シテ其資格ヲス丶ムベシ、應用スル所ノモノ不肖ナラバ、擧立ノ罪過モノガレガタカルベシ、凡ソ古ノ賢君良相知レ人ノ明、後人ノ及ビガタキ事ハ、古人ノ今人ニ勝リタル而已ニ非ズ、其知レ人ノ仕方、要ヲ得ルト得ザルトノ差別也、君ハ執政大夫ヲ擇ビ玉フ而已ニテ、執政大夫ハ又諸ノ奉行頭人ヲ擇ビ、諸奉行頭人ハ又其支配ノ小吏ヲ擇ブ時ハ、一國ハサテ置、天下ノ廣キト雖、知レ人ノ明骨折ラズシテ行屆ク道理也、然ヲ奉行頭人ノ選ヲバ麁略ニシテ、其下ノ手代ドモノ吟味マデ、執政大夫ヨリセラル丶ヤウニテハ、叢脞繁雜ノ患ニ堪ヘザル耳ニ非ズ、奉行頭人モ自然ト其職ニ怠ル也、俗人ノ了簡ニハ、今ノ世ニ一郡ヲ任ゼラレテ、一分ニテ諸事ヲ裁制シ、支配ノ手代トモガ務メ方ノヨシアシヲ能呑込、黜陟宜ニアタル程ノ郡奉行ハアルマジト思フテ、郡奉行ノ心得、幷諸手代ノ勤メ方、能否賢不肖、一ニ執政大夫ヨリ指揮セラレルヤウニ申人モアレドモ、コレハ大體ヲ知ラズト云フモノナリ、ソガ僚屬ノ治メサヘ行キ屆カザルニ、一郡ノ政ヲ任ズベキ謂ナ

シ、古ヨリ長官ノ僚屬ヲ擇ブコト定レル事ニテ、今モ幕府ニテ三奉行幷御郡代。御代官等ハ、皆一職ノ事各々アヅカリ切リニテ、下役ノ辟除ハ奉行。頭人ノ心次第ナリト承ル、尤其中ニハ弊モ有ベケレドモ、大體ニ於テハ其宜ヲ得タリト謂ツベシ、凡テ諸役所ノ小吏ヲ立替ルコト、頭人ノ存分タルベシ、奉行頭人モ年數ノ勤務ニヨリテ祿ノ加增アルコト、今ノ時勢ニハ甚不可ナリ、縱十年二十年、乃至四十年五十年、又ハ百年勤タリトモ、只碌々トシテ員ニ備ルノミニテ、所部ノ戶口モ增サズ、田野モ闢カズ、風俗モ美ナラズ、アラハレタル大功ナキ人ハ、年數ノミニテ、子孫ニ傳ル世祿ヲ與フベキ謂レナシ、カヤウノ輩ニ年功ニヨリテ加增アル故、知行ノ引ハリ足ラズシテ、自由ニ賢才ヲ擧ルコトアタハズ、役人モ職事ヲバ第二義トシテ、先己ガ利祿ヲ計リ、百姓ハ如何ヤウニ成トモ構ハズ、上ヨリ仰出サレタル條令ヲ奉行シ、下ヨリ申出ル訟獄決斷シ難キハ、內濟或ハウカヾヒニシ、トカク年數無事ニサヘ勤メ居レバ、骨折ラズシテ知行ハ取退ク物ト心得ル故、眞實ニ民事ニ心ヲ盡ス者ナシ、自今已後ハ凡テ諸役人ノ役料ヲ定メ、小給ノ士ヨリモ擧用ヒ、其役スグレバ舊ノ給分ヲ賜ルコトハ、幕府ノ法ノ如クナルベシ、ソレバカリニテハ殊功大勤勞アル者ノ、ハゲミ薄キコトモアルベケレバ、是ハ考課ノ法ヲ嚴ニシテ、加恩ノ仕方アルベシ、小吏ノ辟除ニ至テハ、頭人ノ心得ニ在レバ、選擧ノ術クハシク論ズルニ不レ及、寛永條令ニ、「手代雖其道不鍛錬者ヘ人數一分ニ抱置、其役所滯有レ之者可レ爲二越度一事」ト仰出サレタリ、義公ノ御時ニモ、人才ノエラミ屢其命アリ、今手代チカヽユルニ、多クハ人數一分ニ抱置故、碌々トシテ頭數ノミ多、八十人有テモ四十人ノ用ニモ立ザルコト多シト聞ユ但今ノ手代給分甚微薄ニシテ、善キ人ヲ得ガタク、ヤヽモスレバ賄賂ヲ招キヤス

シ、人ニヨリ何程大祿トリテモ、賄ヲ好ム者アレドモ、是ハ格別小吏ノ月俸衣食ノ足ラズシテ、代耕ノ祿トモ云ヒガタキ程アテガヒ置其廉潔ヲ欲シ、贓罪アリトテ是ヲ咎ニセンハ不仁ナリ、昔ハ手代モ十四石取有、十石三人扶持、次ニ七石二人フチ、右次第ニ薄俸ニ成タリ、然レバ頭人ノ了簡ニテ手代ノ口利ヲシ、御アヅケノ手代料ノ内、十四石位マデハ御斷リヲ申テ授クベシ、其次ニ十石、次ニ七石ヲ限、同ジ手代ノ内ニモ、人才ノ高下、歳月ノ勤勞ニヨリテ、幾段ニモ品ヲ分ツベシ、カク俸ヲ増ス上ハ、公上ヘ御費ヲカケズ、只今ノ手代ノ人數ヲ大ニ減ジ、其給分ニテユリ合セ、餘アルベキナリ、今郡邑ノ治、御郡方ト御代官方ト二ニワカレタル事、頗ル繁ニ失スルノ弊ナキニ非ズ、シカレドモ是ハ先仕参驗ノ術ヲ施シ玉フベキ為メ立玉ヒシ所ナレバ、姑ク置テ論ゼズ、御代官方ニテモ、昔ハ土地方訟獄等ニモ、参預セシト云、今ハ其事絶テ無ニ、手代凡ソ四十餘人有ト云、是モ人ヲ選ミテ員數ヲ減ズル仕方モ有ベシ御郡方バカリニテ、四郡ノ手代スベテ八十人ニ及ベリ、提封四十萬石ト見バ、一萬石ニ二人ノツモリナリ、昔人モヨク郡ヲ治スル者ハ、一萬石一人ノ下代ニテモ治ルト云ヘルコトアリ、委任ノ道明ラカニ、法令易簡ニシテ便宜從レ事ヲユルシ、一切煩擾ノ弊ナキ時ハ、八十人ヲ四五十人ニ減ジテモ餘裕アルベシ、然ル時ハ是マデ八十人ニ付テ、逐ツカハル、夫傳馬モ自ラ減ジ、無用ノ虚費モ自ラ省キ、萬事果敢ユク故、民ノ喜コト限リナカルベシ、手代三四十人ノ役ヲ奪フ事、不慈悲ナル樣ナレ共、是モ仕方アルベシ、且手代ヲ召放サレテコマル者ハ、ワヅカ三四十人ナレドモ、喜ブ者ハ四郡ノ廿余萬人ナリ、大ヲ以テ小ニ易フベキ謂レナシ、古人監司ノ不才ヲ患テ、其班簿ヲ視

テ一筆ニ勾(カギ)ヲカケテ罷去ントセシ時、一筆ニテ一家ノ哭スルヲ奈何ト云シ人有リシカバ、一家ノ哭何ニ如一路哭ニ耶トテ、遂悉ク其者ノ職ヲ罷メシコト有、後世マデ稱シテ良相ノ法則トス、然ラバ郡吏ノ治民ノ職ニ堪ヘザル者ハ、罪ナシトテモ其職ヲ取替ル事、何ノ不仁カ有ベキ、今郡吏ハ賤シト雖、牧民ノ職其任甚重ケレバ、他ノ手代ヨリハ卑賤ニアシラハズ、廉耻ノ心ヲ勵シテ召使フ術アルベシ、廉耻ヲ養ハザレバ、何程俸祿ヲ多ク與ヘテモ、盜心生ズレバ益ナキ也、既ニ是ヲ優ニスルニ厚秩ヲ以テシ、衣食ニ不足ナカラシメ、又此ヲ遇スルニ下士ニ准ズルノ禮節ヲ以テシ、（此ハ手代ヲ士分ニアゲ玉ヘト云ニハ非ズ、一ツノ仕方ニヨリ廉耻ヲ勵シ、人人自重スルコトヲ知ラスル術ナリ）廉耻ヲミガカシムルニ、奸曲贓罪アラン者ハ人ニ非ラズ、追放永暇ナドニテハ、貪吏ノ膽ヲ寒スニ足ラズ、宋太祖ノ法ヲ用ヒテ死刑タルベシ、死刑トハ云ヘドモ、カリソメニモ牧民ノ職ヲ勤〆シ處ヲ重ンゼラレテ、且ハ其仲間ノ餘人ニ氣節ト云事ヲ立サセルタメ、切腹ヲ許シ玉フベシ、如レ是トキハ、平生ノ衣食ハ憂ナク、耻ヲモ知リ罪ヲモ畏ルベケレバ、是マデノ如ク細カニ疑心ヲシテ、猜防スルニモ及バズ、手放シニ諸事委任シテ、其成功ヲ責ル術如何ヤウニモナルベシ、法令簡易ニシテ人材ヲ盡サセ、賢能職ニ任ジテ一切ノ煩擾ヲ去、民間ノ害ヲ除キ利ヲ興ス、一擧シテ成ルベキナリ

問　横斂ノ弊ヲ除クコト如何　「曰、理レ財正レ辭、禁二民爲一レ非曰レ義」ト云コトアリ、一切ノ横斂ヲ除ク事是ニテ心得ベシ、畢竟理財其道ヲ得ズ、辭ヲ正シク取ルコトアタハザル故ニ横役ヲカケ、民モ迷惑心服セザルナリ、總テ小利ニサトキ者ハ、必ズ大計ニ昧キモノナリ、大ナル處ニ損ヲスレドモ悟ラザル

故、種々ノ奸法ヲコシラヘ、分釐ノ利益ヲ計ルナリ、上ヘ取ル處ト下ヘ渡ストハ、算數ノ勘定ヲ違ハスル類、一切除テ正直ニスベシ、城米ヲ納ルニモ、御代官手代糺改メノ時、嚴ニ此ヲ吟味スル法アリテ、糺主ノサシ札改人ノ姓名書付テ、後妄ニ抜キ替ザセザルヤウニ、初ヨリ貫目ニテ成トモ改記シ、サテ御藏ヘ納ル時ハ、直ニ吟味シテ納メサセ、耗米ノ重取ニ逢ザル仕方有ベシ、是ヨリ急ニ改ムベキハ、三雜穀切返シ直段ナリ、御藏納ノ難儀ハ下吏ト百姓ノ上ノ事、上ノ法ニカ、ハラズ、切返シ直段ハ上ヨリ立ル法ニ非、法アリテハ甚アシキ也、畠方取米二石五斗ヲ金一兩ニ換ヘルコト、寛永十四年間ニ始リシヲ、今ニ至テ俗吏輩金科玉條トシテコレヲ守ル、昔ハ時ノ米價ヲナラシテ、其時相應ニ立タル定價ヲ、今米價大抵一石一兩ニ當ル世界ニ其法ヲ承用ル故、上納ノ代方金、取米ノ數ニ較ブレバ甚少キナリ、百石ヲ四取ニテ取米四十石トハ雖、其餘ワヅカ十六兩ニ過ズ、故ニ既ニ雜穀ノ代方金ヲ取シ上ニ、又三雜穀ヲ横ニ課シテ、強(オシ)買強(オシ)賣ヲシテ贏餘ヲ得ルコト、ワヅカ四五兩ナリ、其上ノ勘定ニサマ〲ノ無理ヲシテ、代方本金幷口金雜穀ウリ付代、共ニ合シテ廿餘兩ニ過ズ、兎ニシテハ四ツ取ト云フ名ハアレドモ、實ハ百石ヲ二ツ取ニセシ二十石バカリノ取米ノ價ニ、左マデ過ザルコト、笑フベキ事也、コレ二石五斗定價金一兩ト云コト、何故ニ定リシト云フコトヲ知ラズシテ如レ此ノ損ヲシテ恥カク事ヲスルト見ヘタリ、古ノ田制一變シテ、夏秋兩税ノ法起リショリ、天正・文祿已前マデハ、諸國悉ク田畠ノ額ヲ定納幾貫幾百文ト稱シ、米穀ヲ納ムルニモ、錢ノ價ヲ主トシテ是ヲ勘定シ、サテ

品納ナラデ錢ヲ納ルニハ、勿論其數ノ如ク納メシニ、豐太閤已來天下一統ニ、石盛斗代ト云コトニ成テ、撿地ノ後町段畝歩ヨリ出ル所ノ分米ヲ定メ、取付ノ法（太閤ノ定制ハ大抵三分一、當代ノ通法十ニシテ四ツ取ヲ以テ率トス）ヲ以テ年貢ヲトルコト當代ノ通制ナリ、米價ト錢價トノ低昂（アゲサゲ）ハ、時ニヨリテ一定セズ、田地ヨリ出ル分米ハ、天ノ時・地利・人力ノ三ツサヘ相得レバ、年ヲ經ルトモ大ナルカハリハナク、一石ノ地ヨリハイツモ一石出來べキ也、然ルヲ土地ヨリ生ズル穀ヲ主トセズシテ、ウリカヘテ獲ル錢ヲ主トシテ税ヲ定ムルコト、甚理ニタガヘリ、定納トハ云ヘドモ、時ニヨリテ貫高ヲ上下スル事モ有べケレドモ、錢金ハ土地ニ作ラザル物ヲ主トシテ、貢税ヲ定ムべキ謂レナシ、貫高ヲ主トスルトキハ、其定メシ時ヨリ米價賤ケレバ、百姓ハ土地ヨリ取レザル所ヲ償ヒ、米價貴クナレバ、公納ノ一貫ハイツモ一貫ニテモ、昔賤キ時ノ半ニ當ル事モアリ、方々不便利ナル子細アル故、今ノ如ク石高ニハ改メシ成べシ、穀ノ價ニ貴賤ハ有レドモ、一石ノ地ハイツモ一石ト定テ取付スル時ハ、公私トモニ損得ノカタオチナルコトナシ、サスガ太閤ノ英雄石田治部ガ才幹ニテ定メタル法ナレバ、中々今ノ俗吏ノ及ブべキ所ニアラザル也、然ルニ石高ノ法ヲ以テ取米ヲ定メナガラ、二石五斗定價金一兩ヲ、百年不易ノ科條トスル時ハ、即チ昔貫高ヲ稱セシ弊ニアタリテ、石高ヲ用ユル詮ナシ、不吟味ノ至ナリ、慶長元和ノ比ハ諸國米價甚賤ク、京都ニテ一石ヲ十八匁ニ換シガ、後廿四五匁ニ成、其ヨリ段々貴クナリテ、寛文已前マデハ平價四十匁ニ下ラザル如クナリ、延寶以後ハ甚貴クナレリト、古キ人ノ筆記ニ見ヘタリ、上國スラ如レ此時ハ、東

國米價ノ賤キ推ハカルベシ、サレバ伊奈氏ノ當國ニ御代官タリシ時、畠ノ納方永錢取ニシテ、米五石ヲ金一兩ニ換シツモリ也、元和ヨリ寛永元年マデノ割付ニテ知ルベシ、其後蘆澤伊賀氏ノ國賦ヲ掌リシ時ニ及デハ、金一兩ニ米四石代トナル、寛永二年ヨリ十三年マデノ割付見ツベシ、十四年間ヨリ後二石五斗代トナリテ、今ニ至ルマデ是ヲ承用ユ、二石五斗ノ定價今俗吏ノ金科玉條トシテ守ル所ノ如ク、古今不易ノ法タラバ、昔トテモ一定ノ法タルベキニ、慶長・元和・寛永ノ時五石ヨリ四石、四石ヨリ二石五斗ト三タビ法ヲ變ゼシコト、當時米價ノ稍ク貴クナルニ隨ヒテ改メシコト明ラカ也、但毎年ニ直段ヲ替ヘズシテ、十餘年ノ平均ヲ以定ムルコト、畠ノ取米ハ田ノ取米直ニ其物ヲ納ルト違ヒテ、諸雜穀ヲ引クルミ、米ニ准ジテツモリタル數ナレバナルベシ、古ノ御切米直段覺書ヲ見ルニ、正保二年酉金二兩ニ米三石七斗七升、同三年戌米三石六斗二升、同四年亥米一石七斗、慶安元年子米二石二斗、同二年丑米二石七斗四升五合トアリテ、其已後低昂一定ナラズトモ、二石ニ至ルコトナシ、正保・慶安ノコロ米價カクノ如キ時ハ、寛永中二石五斗代ト定ムルコト、當時平均相應ノ價タルコト知ヌベシ、寛永二十年癸未ノ古文書ヲ見シニ、金一兩ノ籾八俵ガヘトアリ、然レバ此時モ畠方二石五斗代ニテハ、年ニヨリ既ニ公損アリシ也、マシテヤ正保・慶安ノ後米價益々貴ク、金一兩ニ一石餘ト成、甚シキハ纔八九斗ニ至レル時ヲヤ、然ルニ二石五斗ノ畠方定直段ヲ變ジ玉ハザルコト、當時ノ民左コソ損上益下ノ恩澤難レ有事ト思ヒタルナルベシ、シカシナガラ是三雜穀切返シノ法ニヨリテ起ル所也、凡ソ理財ノ

コト、此ニ緩ナル所有レバ、必亦彼ニ急ナル所アルコト、定マレル勢ナリ、故ニ二石五斗代ニテ民ニ悦バシメ、三雜穀ノ切返ニテ、ヒソカニ利ヲ上ニ收ム、所謂朝三暮四ノ術ナリ、寛永癸未ノ條令ニ、種カシウリ付籾ノ代金ニ、籾ヲ貢納候モノアラバ、初秋籾ヤスキ時分ウラセ、金取候儀無用ニイタシ、籾ヲシチ物ニ取置、籾直段ヨキ時分ウラセ、金ヲ取可レ申候事トノ德音アリ、三雜穀切返シノ事モカヽルコトニ混ジテ、初ハ來春ニ至リ勘定シ、民ヲ愚ニセシト見ヘシガ、今ハ國用ノ急ナルマヽ、其年ノ暮マデニ皆濟スレバ、其奸法ノ迹尤露レ易シ、爲レ僞ハ心勞シテ日ニ拙シトハ、此謂ナルベシ、二石五斗ノ賤キ拂方、昔ハ百姓サゾ難レ有事ト思フベケレドモ、今ハ其ヤスキガ常ト成、恩澤タルコトヲバ知ラズ、却テ雜穀切返シ等ノ非法ヲ怨嗟スルノミナリ、然レバ二石五斗代全ク死法ニテ、活法ニハ非ザル也、雜穀ノ切返ハ勿論、分毫ノ勘定マデモ一切損下益上ノ法ヲ用ユル世界ニ、獨畠方ノ取米代ノミ公損ヲシテ、民ニ益ヲツケラルベキコトハ、取扱フ有司モ心付カズ、マシテ百姓ノ中上ノ恩澤ヲ知ル者有ベカラズ、喩ヘ千萬ノ一二畠勘定ノ輕キヲ知ル者アリトモ、萬民嗷々トシテ三雜穀切返ノ非法ヲ怨ムルガ衆キニ勝ベカラズ、今其弊ヲ革除センニハ、一切繁密ノ勘定ヲ止メ、其本ニカヘリテ取米ヲ收ムベシ、二石五斗代ヲ打破リ、今ノ米價大抵一石金一兩ナレバ、百石ヲ四ツ取ニシテ現米四十石、モシ金納ナラバ四十兩ハ骨折ラズシテ收ムベシ、然ドモ今ト昔ト民間ノ樣子モ違ヒ、夫金繩藁等種々ノカヽリ物モ多ク、其上久シク暫ク納タル勘定ヲ、今理窟バカリニテ、急ニ常年ヨリ多ク取ラン事甚不可

ナリ、故ニ四ツ取ナラバ、半免ニシテ二ツ取二十石ナルベシ、モシ先年ヨリ雜穀御免等ノ地ハ、其レダケ又免ヲ下ゲ、一ツ六分トモスベシ、四ツ取ヨリ已上五ツ取、六ツ取等ノ地ハ、雜穀切返シノ益ヲ取米ノ代方ヘ見コムトモ、二石五斗ノ代大抵一石バカリニツマル故、四ツ取ヲ半ニシテ二ツ取トセシ如ク、一概ニ今マデノ半ヲ下ゲテ百姓コマル故、右ノ割合ヲ以テ大ニ免ヲ低クスベシ、畠ハ元來米ノ生ゼザル所ヘ石盛ヲシテ、米ヲ取コト無理也ト云人アルベケレド、石高ト云コト旣ニ天下ノ通法タレバ、カヤウアルベキ筈ナリ、且錢納モ金納モ皆ウリシロカヘテ納ルコトニテ、錢モ金モ土地ニ作ル物ニテハナケレドモ、是サヘ定額ヲ立テ取納スル也、況ヤ米ハ畠ニ無キ所ナレドモ、畠ノ諸雜穀一段ヨリ幾程出來、ソレヲ米ニ准ズレバ幾程ニ當ルト云ツモリニテ、分米ヲ定メシナレバ、雜穀ハ何ナリトモ百姓ノ勝手ニ作ラセ、其カハリニ年貢ヲ取米ニテ定、其代方金ニテ納メサスルコト、少モ無理ニハアラザル也、モシ其内ニ雜穀ヲバ夫食ニノコシ、田ノ米ヲ引クリテ品納ニスルトモ、又ハ作リタル雜穀ヲ取米ノ價ニ准ジテ、直ニ品納ニスルトモ、各々民ノ勝手次第タルベキナリ、併品納ニテハ俵ノ拵、運送ノ費等迷惑ナルコト多ケレバ、大カタハ代方金納ヲ願フベキ也、如レ此トキハ取付ヲ過半下ゲ、横斂ヲ除クノ名アリテ、而モ公納ノ數ハ甚シキ不足ナク、一切無用ノ虛計ヲ去テ、吏民トモニマドフ事ナカルベシ、獨二石五斗代ヲ改ムルコト舊例ヲ變ズレドモ、改ムベキ道理アリテ改ムル事、ヨク〱百姓ヘ告諭セバ、心服セザルモノ有ベカラズ、且是マデ三雜穀ヲ課セシコト、仕方ハ惡シケレドモ、

是ホドノ上納ハトカク百姓ヨリ納ムベキ筈ニテ、公上ニ無理ノコトハナサレザル物ト云事明カナルベシ、三雜穀ノ課悉ク除テモ既ニ公損ナク、取米ヲ時價ニ准ジテ收ムル時ハ、此外ニ一ツノ惠ヲ布キ玉フベシ、今御城米金納ノ直段、金十兩ニ付二三四俵宛モ平均ノ相場ヨリ多ク出サシムルツモリ也ト承ル、是雜穀ノ切返シヨリハ輕ケレドモ、亦横斂ニ近シ、金納不勝手ナラバ、米納タルベキト云ハバ、百姓イヤトハ云コトナラネドモ、道路ノ運賃御藏前ノ費用等ヲ厭ヒテ金納ヲ願フ事ナレバ、其年ノ米價ヲ平均シテ、公私トモニ損得ナキ樣ニ正直ニ勘定タツベキ也、十兩ニテ三四俵ヅツ贏餘アリテモ、一國ヘカケテハ大ナル益ノ樣ニ思フ人モアルベケレド、タカノ知レタル事也、今マデ品方ノ勘定一石一兩ニテ當ルベキヲ、二石五斗ニ拂ヒテ損ヲセシニハ不ㇾ似合ㇾ事也、オヨソユルスト云ハ、取ツムルノ初ナレバ、初ヨリ輕重ナク算用スベキコト勿論ナリト云ヘドモ、今新ニ勸農ノ政ヲ施玉フニハ、姑ク是年ノ米價賣附ヲヤスクシテ民ヲ悅バセ玉ハバ、二石五斗ヲ切上ゲラレタル事ヲバ忘レテ、十兩ニ一二俵ノ得分ヲモ莫大ノ恩澤、義公以來ノ仁政ト感誦シ奉ルベキ也、義公ノ御時ニヤ、御郡奉行ヨリ上川井下川井等ノ村々ヘ御賣附直段ノ事申觸シ狀アリト、某嘗テ其眞本ヲ見タリ、其文ニ云ク、「急度申觸候、例年之通今日御賣附直段御城廻リ、金十兩ニ籾卅九俵ニ被ㇾ仰付ㇾ候、當月ノ平均十兩ニ三十六俵ニ有ㇾ之所、御慈悲ヲ以如ㇾ斯被ㇾ仰出ㇾ候間、難ㇾ有御儀可ㇾ奉ㇾ存候、色々ト御慈悲被ㇾ遊候間、隨分農業ニ精ヲ出シ、田畑ニ念ヲ入、カテ等モ取交、夫食ノ貯油斷有ル間ジク候、巳上六月十五日藤田清内・鵜飼覺之允」トアリ、是モ永久ニ如ㇾ是當トナリタラバ、徒ニ公損アルノミニテ、民コレヲナシテ德トセザレバ益ナシ、永久ノ法ハ多カラズ少ナカラズ、平均ノ價ニテ收納シ、サテ勸農ノ爲メコトサラニ一年是ヲ緩クシテ、非常ノ特恩ヲ示シ玉フ樣ニ仕タキ事也

問　力役ノ弊ヲ除クコト如何　曰、「有レ身則有レ庸」ト云フ言ニヨリ、遠クハ聖王ノ遺意ヲ考ヘ、近クハ義公ノ舊法ヲ修ムベシ、年貢ト役トハ元來別物ニテ、田地ヨリハ既ニ租・庸・調ノ三ツヲ一ニ混合セシ高免ノ年貢ヲ出シ、且夫金助金マデ上ヘ收ムル上ハ、平生ノ雜徭田地ノ高ヘカクベキ謂レナシ、「君子勞レ心、小人勞レ力」古今ノ通誼ナレバ、庶人ノ凡ソ身アル者、悉ク國ノ徭役ヲ勤メ、田地ノ有無多少ニ管セザル道理ナリ、然レバ元祿已前ノ如ク、傳馬配符番歩夫等ノ役高掛ケニセズシテ、人ノ面掛ケニスベキコト、其理顯然也、今ニ村ニヨリテ「コロバシ」ト稱シテ田地ノ高ニカヽマハズ、家並ノ役ニテ勤ムル所モアレドモ、其仕形大簡ニシテ詳密ナラザレバ、其利害如何ニヤアル、「ランコロバシ」ノ所ハ高持ノ大百姓ハ喜ベドモ、小民ハ悦バズト云リ、其詮ハ喩ヘ家内ノ人口ハ少クトモ、田地ヲ過分ニ持ツテ作ル上ハ、ソレダケノ人ナクテハ作ラレザル筈ナリ、喩ヘ小作人ヘ渡シオクトモ、田地ニ付タル人ヘ其ダケノ分ハ有ル心ナリト小民云リト云フ、是モ尤ノヤウナル說ナレドモ、畢竟世上ニ高掛ト云コト見習ヒ聞習ヒテ、年貢ト役トハ、元來別物ト云フコトヲ知ラザル故也、ヨクヨク告諭セバ、小民ニモ心服サスベキ術アリ、田地ノ多キハソレダケニ年貢ヲ多ク納ムレバ、モハヤスミタル事也、其上ニ役ヲ重ニカクベカラズ、然ドモ高掛ケヲ面掛ニ復シタリトモ、貧富强弱ノ差別了簡ナクテハ、元ヨリナラザル事也、先王ノ令ニ、「凡差科（謂ニ差科、正役雇夫之類、）先ニ富强一、後ニ貧弱一、先ニ多丁一、後ニ少丁一、其分番上役者、家有ニ兼丁一者、要月（イソガシツキ）家貧、單身者閑月（賦役令也）」ト云ヘリ、是本朝ノ良法ナレバ、今ノ世ニモ其心

得アルベキ也、但兼併ノ弊甚シク成テヨリハ、民ノ貧富強弱大ニ懸隔スル勢ナレバ、是ヲ處スルニ一術アルベシ、大抵田地十石バカリヲ百姓一軒前ト定メ、是ヨリ作リ不足スルハ、百姓ノ勤メザルナレバカマハズ、二十石モ持タルハ二軒分トシ、三十石四十石ニモ至ルヲバ、三軒四軒トモ定ムレバ、身上持高ノ論モカタツク也笠間領ニテハ、十六石ノ百姓一軒分ト定メ、三十餘石モ持テバ、二軒分役ヲカクルト云ヘリ、去レドモ今ノ如ク經界正シカラズ、上下厚薄ノ地ハ、名ト實ト相違アル事ニテハ、田地ノ高ニヨリテ專ラ百姓ノ身上ヲ論ズル事ハナラヌ也、トカク均田ノ法アリテ、地ノ肥瘠各其宜ヲ得セシメ、限田ノ法アリテ、漸々ニ百姓身上ノ高ニ、大概ノ極マリアルヤウニ成ラズンバ、貧富強弱ノ論悉ク行屆キタリトハスベカラズ、是レハ姑ク置キ、力役ノ征ハ庶人ノ身アルモノ悉ク勤ムベキ筈ノ事ナレバ、國中一歳人夫ノ惣數ヲツモリ、民ノ二十ヨリ六十マデ一歳ニ役日幾日ト定ムベシ、勤メ過シ或ハ不足ハ、仲間ノ吟味ニテ、相互ニ勘定立テサスル仕方モアルベシ、何レ平均ニ國役ヲツトメ、損得カタオチナルコト無キヤウ專一ナリ、古ヘ租・庸・調ノ法ヲ用ヒラレシ時、役日ヲ勤メ不足スレバ、一日分何程ト定メ、上ヘ庸布・庸錢ヲ收納アリシコトアリ、今ハ庸・調ヲ田租ニ混合シテ、年貢高ク成リタレバ、喩歳役ノ日數不足ナリトモ、百姓ヨリ庸布・庸錢ヲ上ヘ納メシムルコトアルベカラス、サテ工商ノ徒ハ田租ヲ高クシテ、庸調マデモ一ツニ納メシト云フコトナレバ、末業游手ノ輩モ頭數ノ歳役勤ノ不足セバ、其ノ日ヅモリニテ庸錢ヲ納ムルコト、今ノ大工ノ御普請方ニ於ケルガ如クナルベシ、是レマデ仕ツケザルコトナレバ、末業游手ノ輩ハ迷惑ニ思フ

ベケレドモ、末業游手ノ者迷惑シテ、田地ヲ力作スル者ノ役寛キコト、勸農ノ要術ナリト知ルベシ、且是マデ高掛ノ役法ハ、鰥寡孤獨癈疾ノ徒ト雖モ、苟モ田地サヘ持居レバ、其持高ノ割ニ應ジテ夫役ニ勤サスル故、身力役ニ赴クコト能ハザレバ、困窮ナガラ錢ヲ出シテ人ヲ雇フ也、人ヲ雇フコトモ屢スレバ錢多ク費ス故、寡婦孤兒ナドニテ門戸ヲ立タル百姓分ハ、夜中ニモ役家ナド松明ヲ燃シテ、鄕村ヘ配符ヲ傳達スルコトモ有ト云、哀レナルコト也、上ニテハ民ニ孝弟ノ教ヲ施シ玉ヒ度思召ドモ、高掛ノ役法ニテ人夫ヲツカフ時ハ、家ニ老親アリトテ役ノユルミハナシ、父母ノ喪ニ遭テモ、服中ハ勿論、忌中ニテモ役ヲアツル事ナレバ、孝弟ヲ教ルコトモ行屆カザルナリ、總テ民ノ教ト云ハ、上ヨリ談義僧ノ如キ講釋スル儒者ヲ立テ、四書五經ヲサヘヅラセテ、道ト云フモノヲ呑込マスルコトニハ非ズ、地官鄕吏ノ治メ方ニテ、平生ノ徭役公事ナドノ中ニ、自然ト民心ヲ感服スベキ仕方ヲ寓シテ、風俗ヨロシク孝弟行ハルヽヤウニスル事也、孝弟力田ナドノ賞ニモ、「凡有レ身者必有レ役」ト云フ世界ナラバ、纔ニ其身年中ノ役ヲユルシテモ、過分ノ恩澤ナルベケレバ、上ニテハ費ズシテ惠スル事自由ナリ、今ノ如ク田地ノ高アル者バカリ役ヲツトムル事ニテハ、高少キ者役ヲユルストモ、恩澤ニハナラザルナリ、夫役ヲ高掛ケニスルコト、貧富ヲ均シクスル法ニ似タレドモ、　今ノ勢ニテハ、徒ラニ末業游手ノ者ノ勝手ト成、力田スル者ノミ困ム仕方ナレバ、決シテ古法ノ如ク面掛ケニ復スベキ也、面掛ノ役ハ義公ノ舊法ニシテ、卽チ是聖人ノ遺制ナリ、周禮ニ、小司徒ノ職邦ノ教法ヲ建テ、國中及四郊都鄙

夫家ノ數ヲ稽ル事ヲ掌リテ、其貴賤・老幼・癈疾ヲ辨ジ、凡征役ノ施舍ヲ爲ス、又鄕師ノ職、「以國比之法、以時稽其夫家衆寡、辨其老幼貴賤癈疾馬牛之物、辨其可任者、與其施舍者、掌其戒令糾禁、聽其獄訟、」又卿大夫ノ職ニ、「以歲時登其夫家之衆寡、辨其可任者、國中自七尺以及六十、（正義曰、七尺、謂年二十）野自六尺以及六十有五（正義曰、六尺謂十五）皆征之、（註、城郭中晩賦税、而早免之、以其所居復多役少、野早賦税、而晩免之、以其復少役多）其舍者國中貴者・賢者・能者・服公事者・老者・疾者・皆舍、以歲時入其書」ト云リ、我先王ノ令ニモ、「凡男女三歲已下爲黄、十六以下爲小、二十以下爲中、其男廿爲丁、六十爲老、六十六爲耆」ノ制アリテ、賦役ニ課スルコト必ズ是ヨリ差別スル也、二十一ヨリ六十歲マデハ正丁ト稱シ、十六已上二十已下ヲバ中男ト稱シ、老（六十一ヨリ六十五マデ）殘（殘疾ノ人、癈疾ヨリハカロキナリ）、並爲次丁、次丁二人ニテ一正丁ニ同ジ、（庸法調法共ニ）中男ハ四人ニテ正丁一人ニ準ズ、（是調法ナリ、中男ノ作物ト云ハ是コトナリ、）サテ又一戸ノ主ト云ヘドモ、官職アル人ノ耆老・篤疾・小子・寡婦ヲバ不課（ヤクナシ）戸ト定ムル也、年數ノ事、周禮ト我先王ノ令ト少異ナレドモ、大意ハ同ジ事ナリ、今和漢ノ制ヲ斟酌シテ詳ニ役法ヲ定メンニハ、二十歲已上六十已下ノ正丁ヲ主トスルコトハ勿論ナルベシ、先王軍役ノ制ヲモ、年滿六十免ズト見ヘ、周禮ノ國中ハ七尺（周尺ノ七尺、今五尺五分餘ニ當ル、首ヨリ足マデ計ル也、昔ノ詞ニ、七尺トハ年二十ノ定稱也）ヨリ六十マデ征役ニ從フノ制ニ符合ス、又十六已上ヲ中男トシ、六十五已下（六十一マデ）ヲ次丁トスル制、野ハ六尺（謂十五）ヨリ六十有五マデヲ征トスト云フ文ヲ考合ハスレバ、雜徭ノ輕クシテ骨折レザル事ヲ擇デ中男次丁ノ任トシ、二人ニテナリトモ、四人ニテナリトモ、一正丁ニ准ズル定メ、如何ヤ

ウニモ土俗人情ノ宜ヲ撰リテキハムベキ事ナリ、禮記ノ王制ニ、「八十者、一子不レ從レ政、九十者、其家不レ從レ政、癈疾、非レ人、不レ養者、一人不レ從レ政、父母之喪、三年不レ從レ政」ノ文アリ、先王ノ古ヲ稽ヘ、宜ニ因テ令ヲ定メ玉ヒシニ、凡年八十以上ニ篤疾給ニ侍一人一、九十ハ二人、百歳ハ五人、戶令ニ見ユ、又「凡遭二父母喪一、並免二期年徭役一、」賦役令ニ見ユ、宜帝地節四年詔、「諸有二大父母父母喪一者勿レ繇事一、使レ得二收斂送一レ終、盡二其子道一」トアルモ、即此意ナリ、禮記ノ「三年不レ從レ政」トアルナ、令ニ、「免二期年徭役一」トアルハ、三年ノ喪、本朝ニテハ畢一周忌ト定メシ故也 ト見ヘタリ、此外ニ孝子順孫等モ、褒賞ノタメ其身ノ徭役ヲ免ジ、物ヲ賜タルヨリモ惠トナルコトアリ、トカク徭役ノ法高掛ヲヤメテ、面掛ニ復スル時ハ、右ノ如キ仁政モ費ナクシテ行ハルヽ事也、漢高祖七年ニ詔シテ、「民產レ子、復勿レ事二歲一」ト定メ、章帝元和二年ニハ、「諸懷姙者、賜ニ胎養穀一人三斛、漢ノ三斛ハ、今ノ二斗七升九合三勺八撮餘ナリ、穀ハモミナレバ、米ニシテ其半ナルベシ復ニ其夫一勿レ算口賦錢トテ、人毎ニ錢百廿出スヲ一算ト云フ、漢ノ制ナリ、一歲一」ト云リ、是亦保息ノ仁政、力役ヲ寬スルノ中ニ寓スル也、延喜式ニ、「凡人生ニ五男一成ニ正丁一、免ニ父課役一、雖ニ一人闕一、尙從ニ免除一」ト云リ、是育子者ノ徭役ヲユルメテ、民生ヲ蕃ルスルコトヲ勸ム、一ニハ、恩義ヲ布クノ德アリ、一ニハ、課丁ヲフヤスノ益アリ、先王ノ良法今ニ行フベシ、吏治ノ仕方ニヨリテ孝慈ノ教成ルコトモ、面掛ノ役法ヨリ行ハルヽ中ニ在リト知ルベシ、又延喜ノ主計式ニ、「凡諸國所レ申戶口增益、不レ得下以ニ不課一爲上レ功」トアレバ、今ノ人別育子ノセンサクスル人、是ニテ少シ目ヲサマスベシ、イカニ金穀ヲ費シテ人バカリ殖シタリ共、大半游惰ニ流レテ、不農不課ノ民而已ナラバ、國計ニ於テ何ノ益カアラン、悠々トシテ十年二十年ノ生聚ヲ待タンヨリ、今ノ急務マヅ現在

ノ人數ヲ用ニ立ル仕方アリタキ也、高掛ヲ改テ面掛ノ役トシ、且農人ヨリハ役日ツトメ不足ノ代ニ、上ヘ庸錢ヲ出スコトヲ免除シ、末業游手ノ者而已役錢ヲ數ノ如ク收ムルコト、アマリ嚴酷ナルヤウナレドモ、少シモ無理ニアラズ、周禮戴師職ニ、「凡宅不レ毛者有二里布一、凡田不レ耕者出二屋粟一、（三夫ナ爲レ屋）凡民無レ職者出二夫布一」ト云リ、是ニ依テ論ズル時ハ、游惰ノ輩ハ懲ラシメノ爲メニ、力田ノ者ヨリ其征役ヲ重クスベキ事明カナリ、後世ノ法ハ農民而已賦役ニ困ミテ、游手浮浪ノ民ハ泰然トシテ都テ不レ管レ事、彼ト此ト其得失、智者ヲ待ダズシテ知ルベシ、均シク是百姓トテモ、寺社領ノ民ハ古ヨリ徭役ヲツトメズ、和漢トモニ此ノ如クナレバ、是亦處置アルベキ也（延喜式ニ、「凡神寺封丁得レ黜二衞士仕丁事カ一」ト云リ、明人ノ書ニ、「虞謙洪武末、爲二杭州府知府一嘗建議、僧道民之蠹、今江南寺院田多、或二數百頃一、而徭役未二嘗及一レ之、貧民無レ田、往々爲二徭役所一レ苦、請爲定レ制、僧道毎レ人、田無レ過二十畝餘一、田以均二平民一、初是レ之、已而謂レ非二舊制一、遂廢）既ニ寺社ノ封戶タレバ、軍國ノ夫金舫金、幷傳馬步夫等出スマジキコトハ勿論ナリ、但昔ハ寺社領ハ守護不入ニテ、平常一切ノ政令モ地頭人ノイロハザル所ナレバ、國主ノ民ト各別ナルベケレドモ、今本藩ノ制、寺社ノ主司タル者ト雖モ、亦有司ノ政敎禁令ヲ受テ、其民ノ訟獄マデモ一ニ是ヲ公上ヨリ治メ玉フ時ハ、配符番ニハ寺社門前ト雖モ、役ニ從フベキ道理顯然也、尋常高持ノ百姓ハ夫金ヲ納メ、且庸・調ヲ田租ニ混合セシ高免ノ年貢ヲ出セドモ、唯城郭ノ普請ニ役セラレザル計リニテ、田畠ノ川除普請用水溜池道橋ノ事ヲバ、己々ガ身ニカヽリタルコトナレバ、役ニアタリテモ無理トセズ、然バ其在所々々ノ田畠ヘカヽリタル普請等ニハ、寺社領ノ民ト云ヘ共、土地ヲハカリテ召使フベキナリ、近キ比ノ定メニ、百姓ノ御藏入

ノ地ト寺社領ト兩方ヲ作ル者ヲバ、寺社領ノ人別ニ組入ル、ヤウニセラレシ所有ト云、イカナル有司ノ心得ニヤ、少ヅツモ農民ノ力役ヲ寛ルクスルコトヲ計ラズシテ、徒ニ不課ノ民ヲ増ス、憫笑スベキコト也、又村々ノ罷民衺惡過失アレバ、百姓ニ不似合ナル閉戸ナド申付、或ハ手ジヤウ、或ハ禁獄スレドモ、元ヨリ耻カシキコトヽモ思ハネバ、少シモ懲リテ改ムル心ナシ、終ニ村拂カ四郡追放等ニ成ル事也、其ウチニ一向ニ教訓スベカラザル者ノミニテモ無キニ、咎ニヨリテ無レ據居村ヲ拂フモアレドモ、行先ニシテ活計ナケレバ、其處ニハ居住セズ、不レ得レ已他國ヘ出デ、人別損ズル也、是等ノ類ハ古ヘ徒罪ノ制ヲ再興シテ國ノ役事ニ苦使シ、其者ニ恥ヲカヽセテ、改ル心ヲ生ジサセ、且役ニ使フテ良民ノ力征ヲ少ヅツモ弛ルムベキ事ナリ、周禮司救ノ職「掌ニ萬民之衺惡過失一、而誅ニ讓之一、以レ禮防禁而救レ之、凡民之有ニ衺惡者一、三讓而罰、三罰而士加ニ明刑一、恥ニ諸嘉石一、役ニ諸司空一、其有ニ過失一者、三讓而罰、三罰而歸ニ於圜土一也（獄城）」ト云、大司寇ノ職ニハ、「以ニ圜土一聚教ニ罷民一、凡害レ人者、寘ニ之圜土一、而施ニ職事一焉、以ニ明刑一恥レ之、其能改者、反ニ于中國一、不レ齒三年、其不レ能レ改、而出ニ圜土一者殺一ト云、又「以ニ嘉石一平ニ罷民一、凡萬民之有ニ罪過一、而未レ麗ニ於法一、而害ニ於州里一者、桎梏而坐ニ諸嘉石一、役ニ諸司空一、重罪旬有三日坐ニ期役一、其次九日坐、九月役、其次七日坐、七月役、其次五日坐、五月役、其下罪三日坐、三月役、使ニ州里任一レ之、則宥而舍レ之一」ト云リ、此法ノ意ヲ取テ用ル時ハ、鄕村ノ罷民衺惡過失アル者、閉戸禁獄追放等ノ代リニ、徒罪ノ服ヲ拵ヘ着セ、（古ヘ衣裳ニ畫クノ制、聞テ此事ナシ、嘉石ノコトハ、此邦ニナキ事ナレバ置テ論セズ）髮ヲハ髻

ノキハヨリ切テ、形ヲ平民ニ異ナラシメ、恥ヲアタヘ且逃走ヲ防グノ一ツトシ、是ヲ便アル所ノ役人ヘ預ケ置、普請或ハ荒地開發、或ハ驛場ノ夫役ニ駈使シ、扶持米ヲバ郷黨親戚ヨリ出サシメ、咎ノ輕重ニヨリ、月數ノ多少ヲ定メノ如ク是ヲ役シテ、在所親類ヨリ訟訴アル時是ヲ宥免シ、萬一在役ノ中其所ヲ缺落セバ、早速召捕成敗セシムベシ、數多ノ徒罪人出奔セリトモ、一々捕誅スルハ煩ハシク、且行屆ザルヤウニ思フ人モ有ベケレド、「誅レ一以警レ百」ト云フコトモアレバ、其初ヲサヘ嚴ニセバ、自然ト出奔スル者ナカルベシ、タトヘ出奔シタリトモ、異形ニシテ見咎ヤスケレバ、難ナク追捕セラルベキ也、如レ此時ハ教化モ立易ク、良民ノ苦ヲ休メ、カタ〴〵利益多カルベキコトナルニ、是マデ民ヲ治ムル者、士大夫ヲ遇スルノ禮ヲ以テ、庶民ニ閉戸遠慮ナド申付、恥ヲアタヘコラシムル事ナク、禁獄ヲモ無用ニ骨休メヲサセ、一タビ所ヲ拂ヘバ終ニ立返ラズ、人別ヲ損ズル類、不學無術ノ至ナリ、返ス〴〵モ役法ハ高掛ヨリ面掛ニスル事利多シ、去ドモ法令簡易ニシテ賢才職ニ任ジ、是迄一切煩擾多事ノ弊ヲ除去ズンバ、面掛ニテモ徭役多ク、民力ヲ寛スル事能ハズト知ルベシ、役法既ニ改マレバ、末作游惰ノ民ハ困苦迷惑シ、獨農人ノミ悅ブベシ、農人ノ悅ブ内ニモ少分ノ高持ト、大分ノ高モチト損得ノ談論急ニハ止ムベカラズ、此機會ニ乘ジテ兼併ヲ破ルノ術ヲ施シタキ事也

問　兼併ノ弊ヲ除クコト如何　曰、仁政ハ「必自二經界一始」ト云ヘリ、民獨リモ僥倖ニテ幸ヲ獲ルモノアル時ハ、亦必ズ不幸ニシテ其弊ヲ受ル者有ル道理ナリ、幸ヲ得ルモノハ徒ニ驕奢ニ流レ、弊ヲ

受ル者ハ坐ナガラ困乏ニ至ル、民之多幸國ノ不幸ト云ル事アリ、「有レ國有レ家者、不レ患レ寡、而患レ不レ均」ト云事ヲ會得シテ、先均田ノ法ヲ行ヒテ負ヒ高ヲ改メ、繩ノ延ツマリ且取リツケノ高下ヲ吟味シテ、各其宜ニ叶シムベシ、次ニ限田ノ法ヲ立テ、貧富共ニ安カラシムル術アリ、均田・限田イヅレモ要務ナレドモ、是ヲ行フニ緩急ノ序アリ、均田ハ此法ノ規矩サヘ立バ、速ニ法ヲ以テ正ス事成ヤスシ、限田ハ是ヲ急ニスレバ甚害アリ、漸々ニ勢ヲ以テ直ルベキ也、此二ツノ者行ハルヽ時ハ兼併破テ、百姓大ニ悦ブコト掌ヲ指ガ如シ、「善人在レ上、則國無二幸民一」ト云リ、僥倖ノ民ノミ咨嗟怨嘆スベケレドモ、寡ハ衆ニ勝コト能ハズ、且初ヨリ此方ハ無理ナル仕方ナク、畢竟民ノ爲メ貧富共ニ永久安穩ナラシムル道ナレバ、終ニハ服セズシテ叶ハザル事也、管仲ガ伍部ノ初政ニモ、「相レ地而衰レ征、則民不レ移、田疇均則民不レ憾」ト云リ、牧民ニ志アル人思ハザルベケンヤ

問　兼併ヲ破ル事固リ良策ナレドモ、近年伊勢ノ藤堂氏ニテ是ヲ行ヒ、大ニ百姓ノ亂ヲ激セシ事、面ノアタリ聞及ブ所ナリ、何程ヨキ事ニテモ、人心ノ騒動スル事ハ遠慮アルベキカ　曰、吾子其一ヲ知テ、未ダ其二ヲ知ラズ、「苟非二其人一、道不二虚行一」ト云リ、周禮ノ法周公是ヲ行ヘバ、太平ヲ成シ、八百年ノ基ヲカタクス、王莽・王安石輩ニ是ヲ用ヒテ遂ニ天下ヲ亂ル、顧フニ是ヲ用ルニエン如何ノミ、某ガ聞ケル所ハ、藤堂氏ノ吏兼併ヲ破ル事、アマリ卒爾ニナセシ故、貧民初ハ悦ビタレドモ、貧者ハ愚騃多ク、富者ハ狡黠多キ事定マレル勢ナレバ、富民謀ヲ合テ金錢ヲ閉テ出サズ、借貸ノ道塞ガリシ

カバ、貧民亦スリキリテ困リタルニ、富民ノ資産ヲ奪ハレテ怨望セル者ドモ、此機ニ乘ジテ貧民ノ愚者ヲ煽動セシカバ、遂ニ亂ヲナセシト也、元ヨリ深ク君長ヲ怨テ怨入二骨髓一ホドノ事ナラネバ、未レ幾シテ亂平ギ、平ギタル跡ニテ或ル旅客、其土人ニ前日ノ亂ハ如何ナル事ニテ起セシト問シニ、委ク左程ノ事ニテモ無キニ、心得違ニテサワギ立、今後悔ナリト答ヘシト云リ、此說ノ如キ時ハ其吏兼併ヲ破ルコト計リ善キコトト心得、前後ノ始末行屆ザルコト、アハレ殘念ナルコト也、又大坂ヨリ一書生來テ弊廬ヲ訪ヒシ者アリシガ、其雜談ニ、近比藤堂氏ニテ何某トカヤ云一聚斂ノ臣ヲ召抱ラレ、專「損レ下益レ上」ノ政ヲ行ハレシニ付、一ツノオトシ談アリ、何某途中ニテ國家老藤堂仁右衞門ト云者ニ逢シニ、禮儀ヲハリテ後、拙者儀ヲバ何如御評判被レ下候フヤト問シニ、仁右衞門答テ、國中ニテ其許事ヲバ佛ナリト云トイヒケレバ、何某喜デ謝シテ云、是ハ〳〵御アイサツナルベシト、仁右衞門ガ云、左ニ非ズ、町人百姓共其許姓名ヲ聞トキハ、手ヲ合セテ南無阿彌陀佛々々ト云ト云シトゾ、是ハ委巷ノ小說論ズルニモ足ラザレ共、其聚斂ノ臣ヲ用ユル事ハ一定ナルベシ、既ニ聚斂ノ臣ヲ用ユル時ハ、其兼併ヲ破ルモ、安民ノ事ヲ第二義トシ、最初ニ延繩ヲ打詰テ利ヲ上ヘ取ルヤウニセシ故、民モ怨ミシナルベシ、是ハ行ヒタル人ノ過ニシテ、兼併ヲ破ル事ノ惡シキ證據ニハ引ベカラズ、是ニ懲リテ兼併ノ破ルベカラズト云フハ、所謂熱羹ニ懲リテ冷虀ヲ吹クノ類、兒童ノ見ニ異ナラズ、最初ヨリ上ヘ利ヲ收メズシテ、民ヲ安ンズルタメニ而已行ハヾ、何ノ妨カ有ルベキ、昔前漢ノ世其患トスル

處、諸侯王ノ強大ニ過タルニ在リ、時ノ秀才賈生治安ノ策ヲ文帝ヘ獻ジテ、「地ヲ割キ制ヲ定メテ、齊・楚・趙等ノ大國ヲ分テ若干國トシ、悼惠王・幽王・元王ノ子孫悉ク次ヲ以テ祖ノ分地ヲ受サセ、地盡テ而シテ止、其他ノ國分地衆シテ子孫少キ者ハ、建以爲レ國、空而置レ之、須ニ其子孫生者一、擧使レ君レ之、諸侯之地、其削頗入レ漢者爲ニ其子孫ヲ封ジ、又ハ其疆界ノ不足ヲ償ヒ遣シ、一寸之地、一人之衆、天子亡レ所レ利焉、誠以定レ治而已、故天下咸知ニ陛下之廉一」ト請ヒシガ、文帝未用ルコトヲ果サズ、賈生モ程ナク死セシカバ、文帝ノ太子景帝位ニ即キ、鼂錯ガ策ヲ用ヒ過怠ヲ云ヒカケテ、シバシバ諸侯ノ土地ヲ削ル、賈・鼂トモニ漢ノ爲ニ忠臣タルコトハ一ニシテ、鼂錯ガ才術辨智亦賈生ニ亞グベケレドモ、其爲レ人峭直刻深ナルマヽニ、法ヲ用ユルコトノ過酷ナリ、且其削タル土地ヲ漢ノ郡縣トナセシニヨリ、諸侯大ニ怨、奸臣ヲ誅スルヲ名トシテ、吳楚七國謀レ反兵ヲ起セシナリ、トカクニ諸侯強大ニ過ギ、驕奢不法ノミニテハ治道立ガタキ故、武帝ノ世主父偃ガ策ヲ用ヒテ推恩ノ令ヲ下シ、大國ノ諸侯ニ子弟ヲ取立テ、悉ク分地サセケレバ、骨折ズシテ諸侯ノ勢ハソギ、漢ノ自由ニ治メラレシナリ、是主父偃ガ智鼂錯ニマサリタルニハアラズ、鼂錯ガコトニ見ゴリシテ其迹ヲ踐マズ、賈誼ノ故智ヲ用ヒテ、一寸ノ地一人ノ衆モ天子ノ方ヘ貪リ取ラズシテ、諸侯ノ身上ヲサバキシ故、諸侯モ怨ムベキヤウナク、存分ニ分地シテ勢ヲ分チタル也、諸侯ノ強大ナルスラ、ヨク其道ヲ以テセバカクノ如ク其勢ヲソグベシ、況ヤ豪民ノ兼併ヲ破ルヲヤ、本朝ニテハ大化ノ政兼併ヲ破ルノ祖トスベシ、義公ノ時兼併ヲ抑ヘ

玉ヒシコトアレドモ、當時其弊未ダ今ノ如ク甚シカラザル故、其事モ亦大造ナラズ、今兼併ヲ破ランニハ、先ヅ賈生「一寸之地一人之衆モ亡レ所レ利焉」トノ說ノ如ク、寛永廿年威公ノ仰出レシ、在々處々善惡ヲ見分、高下無レ之ヤウニ諸事可ニ取扱一、元祿元年義公ノ仰出サレシ、富者ハ益富、貧者ハ益貧、甚不レ可レ然トノ旨ヲ主トシテ、永久農人ニ利アルヤウニ告諭シ、寸步ノ地升合ノ高タリ共、上ヘ打出シテ取玉ハズ、打出シタルダケ悉クニ民ノ惣高ニ平均シテ、ユルメ玉フ事ヲヨク明ニ示シ玉ハバ、四境ノ內誰有テカ妨ヲナスベケンヤ

問　韓非ガ書ニ、「今世之學士、語レ治者多、曰、與ニ貧窮地一、以實レ無レ資、今夫與レ人相善也、無ニ豐年旁入之利一、而獨以完給者、非レ力則儉也、與レ人相善也、無ニ饑饉疾疫禍罪之殃一、獨以貧窮者、非レ侈則惰也、侈而惰者貧、力而儉者富、今上徵ニ斂於富人一、以布ニ施於貧家一、是奪ニ力儉一、而與ニ侈惰一也、而欲レ索ニ民之疾作而節上レ用、不レ可レ得也」ト云リ、此說ノ如キトキハ、富民ヲ困メテ貧民ニ得サスルコトモ、利害如何有ルベキ、曰ク、是此謂ニアラズ、田地賣買ノ民自由ニナリテヨリ、富者阡陌ヲ連レドモ、貧者ハ無ニ立レ錐之地一、故ニ當時學士ノ論ニ、「與ニ貧窮地一、以實レ無レ資」ト云フコトモ起ルナリ、去レドモ韓非ガ云ヘル如ク、同ジ百姓ニテ同ジ程租稅ヲ出シテ、外餘計ノ得分モナク、餘計ノ目ニ見ヘタル物入モナキニ、一ツハ貧、一ツハ富メルハ、力儉ト侈惰トノ差別ナリ、一概ニ有餘ヲ損シ不足ヲ補ツテ、天ノ道ト心得テ、力儉ノ者ヨリ取上ゲテ侈惰ノ者ヘ與フルコト、甚ダ埒モナキ仕方ナリ、夫ニテ

ハ向後誰モ侈惰勝手ニ成テ、力儉ハ益ナシト心得ペシ、韓非ガ譏ル處當レリト謂フベシ、今富民ノ骨折テカセギタメタル金錢ニテ買得シ田畠ヲ、貧民侈惰ニテ破産セシモノニ是ヲ與ヘヨト云ハヾ、誰カ合點スベキ、菜ガ所謂均田ノ術ハ左ニ非ズ、持分多少ハ其儘サシ置、有高ノ上ニテ帳面ト畝歩ト引合セ、收護ト取付トヲ考合セテ、高ト免トヲ均シク、貧富トモニ損得ナカラシムル事也、元來檢地ト云フコト有モ、カヤウノ吟味スル爲ナリ、當國ハ太閤ノ時文祿三年ニ檢地アリテ、後十一年ニシテ東照宮佐竹ヲ秋田へ逐ヒ玉ヒシ時、慶長七年壬寅再檢地アリ、其後威公始テ水戸ニ封ゼラレテ、シバラクアリテ寛永十八年辛巳ニ又檢地セラレタリ、上ミ慶長ノ檢地ヲ去ルコトワヅカ四十年ナルニ、辛巳檢地ノ條令、位違・石盛違・負ヒ高心ヲ付クベキコト見ヘタリ、況ヤ寛永ヨリ今ニ至テ殆百六十年、威公・義公田畠賣買ノ制條壞テヨリ、オヒ高ノ奸有ハ勿論、ムカシノ上田・上畠、今ノ下田・下畠ト成、下田・下畠却テ今ハ上田。上畠ニ當ル類ナレバ、位違・石盛違ヒイクラト云數ヲ知ラズ、吏タル者是ヨリ手ヲ下スコトナク、徒ニ紙上ノ虛科ヲ守リ、取付ケヲ下ゲテ貧民ノ救ヒトスレドモ、其免ノ下ゲタル地、イツカ富民ニ兼併セラルレドモ、是ヲ檢スルコトナシ、埒モ無キコト也、今富民ノ餘計ヲ先ヅ奪ハントセズシテ、惟貧民ノ地ナシ高ヲ除キ玉フベシ、除キタル跡ニテ、川欠白打ニテモ無ク、土地ノツマリタル事如何穿鑿シテ、其初賣買ノ際ニ奸有シ事明白ニ白狀サセ、其後富民ノ高ナシノ地ヲ檢シテ高ヲ盛付ベシ、明律ニ、「凡欺ニ隱田糧一、脫ニ漏版籍一者、一畝至ニ五畝一笞四十、每ニ五畝一加ニ一等一、罪止ニ杖一

百ハ、其田入レ官、所レ隱稅糧、依レ數徵納」ト云リ、是隱田ノ事也、又「若將ニ田土ハ、移レ坵換レ段、那ニ
移等則ハ、以レ高作ニ下減ハ、瞞ニ糧額ハ、及詭ニ寄田糧ハ、影ニ射差役ハ、并受レ寄者、罪亦如レ之、其田改正、收
レ科當レ差」ト云リ、是ウブセ高オヒ高ノ事也、隱田ハ其田土ヲ沒官シテ、其隱セシ多少ニヨリ笞杖ノ刑
ニ行ヒ、納メザル稅糧ヲ數ノ如ク徵納セシムルナリ、サテ高ノヌキサシオハセツ、オハサレタルヲバ、
隱田ノ科ニ准ジテ笞杖ノ刑ニ處シ、田土ハ沒官ニ及バズ、其持主ヘスヘ置ウブヒタル高ヲヘラシ、ウ
ブセタル方ノ高ヲ增ズシテ事スムコト也、今田畠ヲ改正スル、ヨロシク此法ヲ用ユベシ、但ウブセ高
ウブヒ高ノコト、百姓ノ相對トハ云ヒナガラ、高ヲ減ジタル者ハ、隱田同ヤウノ地ヲ持テ年貢ヲ少
シ出シ、ウブヒ高シタル者ハ、土地ニナキ稅糧ヲ償フ故ニ、公納ノ額ハイツモ減ゼザルヤウナレドモ、
畢竟土地モナキ稅糧ヲ償コト故、後ニハ散田トナリ、免ノ折ル、コト也、其免ノ折タルハ何故ト云ニ、
カタ〱ニ隱田同ヤウニ犯取スル、高ナシノ土地持者有ユヱナレバ年數ヲ考ヘ、カタ〱ニテ免ノ引タ
ル分ハ、カタ〱ヨリ追テ徵納セシメテ無理ニハアラザル也、是マデコツ細カニ行屆カズトモ、田地
ノクルヒハ是非改正アルベキ也、扨又永代賣ノ證文ヲ渡シ、質ハ質タル心ニテ每年利息ヲ拂ヒ、又年
貢諸役ヲモ置主ヨリ辨納シ、取タル者ハ作取ニスル事、公儀ニテ賴納賣トテ甚キ嚴禁ナリ、本藩ニテ
モ幕府ノ法ヲ承用シ玉フニヤ、貞享ノ比ヨリ寛延ニ至テ、屢々停止セラレタリト聞ク、幕府ノ法ハ永代
賣買、并賴納賣ハ其田畠トリ上ゲ、常人過料。加判名主役儀取上ゲ、證人叱リナリト云、永代賣ハ本藩ニ

テ制禁ナケレバ格別也、ウブセ高士地沒官シテモヨケレドモ、近世ニ至リ、凡賣買スル程ノ者、其間ニ奸ナキハ稀ナルベシ、是ヲ取上ンニハ、沒官セザル田畠ハ少ナカルベシ、沒官シテ後宜ニ隨ヒ授ケ渡サントナラバ、其通モシ左様ニスルコト煩擾ナラバ、明律ノ如ク其科ヲ改正セルニテスムベシ、賴納賣ノ質地ハ其數少ナケレバ、幕府ノ法ノマヽ取捌テモ可ナルベシ、凡田畠ノ混亂ヲ改正シテ經界整理セシ上ハ、妄ニ賣買スルコトヲ許サズ、モシ不レ得レ已賣買スル者有ラバ、先王ノ令并ニ威・義二公ノ制ノ如ク、所部ノ官司ヘ申條ヲ經テ後ニユルスベシ、宋・明ノ法ヲ用テ契ニ税スル式ヲ立テ、奸ヲ防グモ亦可ナリ、經界既ニ正シキ時ハ、古今取付ノヨキ程ヲ考ヘ、少シク民ニユルシテ常免ノ法ヲ行フベシ、取付ノ法ハ本多佐州台德院殿ヘ告奉リシ所ノ如ク、百姓一年ノ入用夫食ヲ積リテ其餘ヲ年貢ニ取、百姓ハ財ノ餘ラヌヤウニ、不足ニナキヤウニ治ムベシ、トカク自身科作ヲ勤ムレバ、年貢出シテモ有餘アリ、人ニアヅケ作ラセテハ、餘レル利ナキヤウニシテ、人ニ其力ヲ食マシムルコト、本ヲ務ル要術ナリ、兼併禁ゼザル內ハ、常免ニテモ徒ニ僥倖ノ資ト成テ、民ニ益ナケレド、兼併ヲ破リテ後ノ常免ハ、甚ダ恩澤トナルコト也、常免ニシテ百姓ノ力儉次第ニテ、如何ヤウニ富ミテ、倉廩ミチ衣食足ルトモ、少シク餘計ニ取ルコトナク、百姓モダマレ豐年ナドト云コトナリ、又田地ハ割ニ合ヘドモ、其身ノ侈惰ニヨリテ貧ニナル者ハ、少シモ免ヲ下ゲズ、如レ此時ハ農ヲ勸メズトモ、農ハ自ラ勸ムル也、是均田ノ妙術ナリ

問　限田ハ如何　曰、豪民ノ勢ニ乘ジテ、際限ナシニ田地ヲ買取コト、小民産業ニ困ム甚ナレバ、古人モ限民名田ト云議アリ、急ニ禁ジテ是ヲ取上ントスレバ行ハレガタキ故、タトヘ限制ヲ立ルトモ、是マデノ分ハ姑クサシ置、已後限制ノ高ノ外買コト能ハザルヤウニスレバ、此後富者出來テモ、大分ニ田ヲ專ニスルコトナラズ、是マデ富者ノ子孫モ盛衰ナキコト能ハザレバ、身上衰ルニ隨ヒ、次第賣ヘラスベシ、限制ヨリ多キ高ヲ減ズルヲバ、勝手次第ニユルシ、限制ヨリ少モ、餘計ニ增スコトヲ禁ズル時ハ、數年ノ後次第ニヨキ程ニ成ルベキナリ、是民ヲサワガサズシテ限田ヲ爲スコト、宋ノ蘇老泉ノ說、明ノ丘瓊山ノ說尤善トスベシ、然ドモ畢竟民ノ過分ニ田畠ヲ求ルコト、膏腴ノ地ヲ擇取ニシテ、居ナガラ大ニ其利ヲ收ンガ爲也、均田ノ法行ハルレバ、兼併ノ奸ヲ逞クスル事能ハズ、常免ノ法立テ、不レ重不レ輕ノ稅ヲ徵サバ、自身耕作スレバ餘アレドモ、小作人ヘ渡シテハ、分ツベキ花利ナシ、自身ニ耕作シテハ人力ニ限アリ、奴婢ヲ蓄フルトモ、百姓ヨリ出ル奉公人少シ、他所ノ氓ヲ招集スルトモ、高ノ知レタルコトナリ、少々ノ得分ニテ小作人ヘ渡サントスレドモ、力役ノ法改マリテ頭數ニテ役ヲ勤メ、高持タリトモ役フエズ、小作シタリトモ役ヲノガル丶コトナキ時ハ、人々出精シテ田畠ヲ買求ル心ニ成、小作人少ナク、豪民モイヤナガラ、田地ヲ減スヨリ外ナシ、是ヲ漸々ニ勢ヲ以テ驅ルト云ナリ、三國ノ時魏ノ蒼慈、燉煌ノ太守タリ、「郡在ニ西陲一、以ニ喪亂一隔絕、曠無ニ太守一二十歲、大姓雄張、遂以爲レ俗、前大守尹奉等、循レ故而已、無レ所ニ匡革一、慈到抑ニ挫權右一、撫ニ恤貧羸一、甚得ニ其理一、舊

大族田地有レ餘、而小民無ニ立錐之土一、慈皆隨レ口割賦、稍々使レ畢ニ其本直一」ト云リ、郡守ノ心ヲ用ヒヤウニテ、蒼慈ガ如キコト如何ニモ出來ベキ也、今兼併ノ子孫田地ヲ持餘シテコマル類モ有、小作人ハ高役ナキヲ利スレドモ、自今已後ハ役法改正アレバ、人數不相應ニテ手餘リノ田地小民ニ割賦シテ段段ニ其アタヒヲ償ハスル仕方イクラモ有ベシ、是レ貧富共ニ安ンジテ、各々農業ヲ勤ムル術ナレバ、「均無レ貧、和無レ寡」ト云フ道理ニ叶ヒテ、百姓ノ困窮モ直リ、人別ノ不足モ多クナル勢ナリ、扨又農業ノ書ニモ、農夫タル者、我身上ノ分限ヲヨクハカリテ田畠ヲ作、各々其分際ヨリ内バナルヲ以テヨシトシ、其分ニ過ヲ以テ甚惡シトス、其分限ヨリ多ク田畠ヲ作ルコトヲ貪レバ、縱令耕作ノ法ヲヨク知テモ人力タラズ、其法ノ如クイトナムコトナク、耕シ種ル事モ必時ニオクレ、物ゴト皆土地ノ力ヲ盡スコト能ハザル者也ト云リ、然ドモ「知レ足者富」ト云コト、老子コソ說カレタレ、蚩々ノ愚民欲ニ際限ハナク、老子ノ如ク足コトヲ知ラシムルコト、決シテ能ハザル所ナレバ、有司ヨリ人力ヲ量テ、限田ノ制アルベキ也

問　均田限田ノ制立テ兼併破ル時ハ、人々其力ニ食ミテ風俗勤儉、凶年ニ饑寒ノ患ナキヤウニ成ルコト、誠ニ此上モ無キコト也、經界ヲ正シテ民ニ取ル方法ヲ立ル、當代ノ通法四公六民ヲ規矩トシテ宜シカランヤ、如何　曰、是マデハ兼併ノ弊アルニヨリ、貧民ノ出ス所ハ大半ノ賦税ナレバ、豪民ノ太輕キ賦ヲ增シテ、平均ニ四公六民ナラバ、今マデヨリハマサルベシ、去レド四ツ取ト云コト初ニモ論

ズル如ク、元來田主ト佃客收ル所ノ半分ケニシ、十分ノ五ツ取タルヲ農人難儀スル故、一ツユルシテ四ツ取、其外一錢ニアタル儀ナリ共、公役カケベカラズト定ムルコト、小田原北條氏ノ遺制ニシテ、遂ニ當代ノ通法トハナリシ也、太閤ノ法ハ兵農大ニ分レシカバ、地頭三分ノ一ヲ取、耕民三分ノ二ヲ獲ルユヱ、十ニシテ三三餘ヲ公納トシ、六六餘ヲ百姓トルツモリナレバ、頗ル四公六民ヨリハ輕キ也、近今ノ法セメテ四公六民ナラバ、コラユベケレドモ、其外公役ノカヽリ莫大也、且又四公六民トハ云ヘドモ、十ノ物ヲ四ツ上ヘ取レバ、其外ニ一石ヘ付三升ヅツノ口米ト、二割ノ延ヲ課シテ百姓ヨリ出サセ、繩ワラノ代マデ取立レバ、四ツ取ニテモ半分ニ當ルナリ、況ヤ是ヨリ高免ナル地ニテ、百姓取續クベキヤウナシ、故ニ今ノ賦稅ハ名實不相應ノコト、多クハ兼併ノ奸モ見スム勢ナリ、一切經界ヲ正シクシテ、輕重宜ニ適スル取方ハ、太閤法三分ガ一、今里俗ノ所謂三折返シヲ定規トスベシ、田租ノ法畠方勘定ニ比スレバ、繁密瑣細ノコト少キニ似タレドモ、是モ今ハ其本ヲ失ヒ、取付ノセンサク而已コマカニ、八重十重ニ出アレドモ、徒ニ紙上ノ文具而已ナリ、百餘年來ノ陋習ヲ一洗シテ、至易至簡、名實相當、上下共ニ便ナル仕方アリ、タマタマ人ニ語レドモ、舊習ニヒカレテ我說ヲ悟ル者少シ、故ニ本文ニハ惟三折返シ定免ト而已イヘドモ、其制ノ詳ナルコトハ、事長ケレバ紙上ニツクシガタシ 豪民ノ持分ニハ、膏腴ノ田ニテ十ガ一ヨリモカロク當ル所アレドモ、兵農二ニ分レタル世界ニ、夏・殷・周三代ノ法十ガ一ト云コト用ユベカラザル也、ソレモ貧富一面ニ其通リ取テモヨキコトナラバ、是ホド重疊ナルコトハナケレドモ、所詮四公六民ニ取テサヘ國用不足ナルニ、豪民ヘノミ優免スベキ謂ナシ、豪民ノ稅甚カロキ故、貧民ノ償フ所莫大也、平均ニ三折返シニシテハ、國用不足ノヤウニ思フ人有ベケレドモ、今提封ノ地ナラシテ四ツ取ヨリハ

餘程引込コトナレバ、所詮高免ニ定タリトモ、年々ニ引ケ立、實ノ收ル處ハ三折返シニ過ズシテ、貧民ハ益困ム、今貧富一切ニ三折返シト定タラバ、貧民ハ大ニ蘇息シ、富民ヨリハ是マデ輕ク納メシ所ヨリ多ク出スベケレバ、提封ヘナラシテハ、却テ是マデ高免ニ取シヨリモ、收納ノ實ハ多カルベシ、是肝要ノ見キリ也、管子ガ所謂「知ニ與之爲一レ取、政之寶也」トハ此コトナリ、唐ノ李翺ガ平賦書ニモ、人皆固ニ重斂之爲レ可ニ以得一レ財、而不レ思ニ輕斂之得レ財愈多一也、何也、重斂則人貧、人貧則流者不レ歸、而天下之人不レ來、由レ是土地雖レ大、有ニ荒而不一レ耕者一、耕レ之而地力有レ所レ遺、人日益困、財日益匱、雖レ欲下誅ニ暴二逋一而成中四海上、使有ニ其心一、豈可レ得耶、故輕斂則人樂ニ其生一、人樂ニ其生一、則居者不レ流、而流者日來、則土地無レ荒闢拓日繁、盡レ力耕レ之、地有ニ餘利一、人日益富、兵日益強、人歸レ之如ニ父母一、雖レ欲ニ驅而去一レ之、其可レ得乎、是故善爲レ政者、百姓各自保、而親ニ其君上一、雖レ欲ニ危因一、不レ可レ得也」トイヘリ　今ノ勢ニテハ三折返シヨリ作徳少キニ、是非農業ヲツトメヨト云フコト無理ナリ、何程農ヲ勸ムルトモ、利無キ故人從ハズ、又三折返シヨリ過分ニ作徳多キトキハ、驕惰ニ流レ易シ、韓非ガ書ニ、「凡人之生也、財用足則惰レ於レ用レ力、上治懦則肆レ於レ爲レ非、財用足而力作者、神農也、上治懦而行修者、曾史也、夫民之不レ及ニ神農曾史一亦明矣」ト云ルコト、甚至當ノ論ナリ、刑名刻薄ノ說ノヤウナレドモ、今ノ民ヲ治ルニ此心得ナケレバ、何程惠シテモ費ルバカリニテ、仁政トハナリガタシ、經界ヲ正シ兼併ヲ破リ、民產ヲ制シテ三折返シノ常免ニ定メ、衣食ノ足ルヤウニシテアタフルニ、勤儉ヲ厭ヒテ侈惰ニ安ンズル輩ハ、其身ニ不調法ナレバ、何程困窮スルトモ賑給スルコトナク、嚴ニ是ヲ懲スベキコト也

問　侈惰ノ弊ヲ除クコト如何　曰、傳ニ「民生在レ勤、々則不レ匱」ト云、又「因ニ天之時一、就ニ地之利一、謹レ身節レ用、以養ニ父母一、以テ庶人ノ孝トスルトキハ、勤儉ノ二字百姓ノ護身符タルベシ、然ルニ侈惰

ノ多キハ農ニ利ナキガ故ナリ、今煩擾ヲ去テ民生ヲ安ンジ、横斂ヲ除テ民心ヲ慰シ、力役ヲ較シテ民力ヲ寛ルクシ、力作ニ優ニシテ游手ノ者困、兼併ヲ破リテ貧富幸不幸ナク、三折返シ常免ニテ、勤儉次第ニテ、衣食足リヤスシ、是農ニ利アリテ、令セザレドモ本ヲ務ムル術ナリ、兼併破ル時ハ豪民ノ勢モ自然ニ屈スル故ニ、風俗ヲ亂ル程ノ過分ノ奢侈モ先ハ成ガタシ、平民ハ勤儉ナレバ富ミ、侈惰ナレバ貧ク成ル故、教モ施シヤスシ、然ドモ此上ニモ勞苦ナクシテ富ヲ爲シ、奢侈ノ媒ト成テ民心ヲソコナフ者ハ商賈ノ民ナリ、四弊既ニ革マル時ハ、本業ニ利アルコトナレドモ、猶又一法ヲ設ケテ農ヲ利スルノミニアラズ、且是ヲ貴ビ、商賈ヲバ是ヲ抑ヘ且賤ムベシ、士農工商ノ次序ヲ以四民ノ格ヲ明ラカニシ、且其種類ヲ定メ、百姓町人カタク婚姻ヲ通ズベカラズ、御城下ニ居住スル浮浪ノ者ドモハ、悉ク其人別ノ本ヲ糾シ、郷里へ返スベシ、歸ラザル内ハ大工御國役ノ例ニヨリ、先庸錢ヲ徵スベシ、郷中ニテモ市場ノ村々ハ、交易ノコトナクシテ叶ヒ難シ、然ドモ自分手作ノ品ヲ持出シ它物ト交易スルハ、神農氏ヨリノ教ニシテ、百姓ニモスルコト也、中買々置ナド云コト商賈ノ業ニシテ、百姓ニ非ズト定ムベシ、郷中ニモ少々商賈ナクシテ叶ハザル所ハ、商人幾人ト極メ、人別帳ニモ御百姓トハ別ニシテ、帳ノ末へ記サセ、此商人ハ何程富タリトモ、田地ヲ取ニ限アリテ、百姓一軒前ノ半分トカ、三分一・四分一ナラデハ持タスルコトヲ禁ジ、イカニ著姓舊族タリトモ、既ニ商人ト定ル上ハ、小百姓ノ下座ト定メテ是ヲ辱シムベシ、其商賈ノ品物モ民間ニ有無ヲ通ズル物バカリヲユルシ、珠玉玩好ノ類凡民間

不相應ノ雜物ハカタク是ヲ停止シ、露顯ニ於テハ沒スベシ、村ノ役儀ヨリ初テ、人才ニヨリ吏胥ナドニ仕進スル事ハ、御百姓ヨリハ取上ゲ、商人分ハ遠慮アル時ハ、農人大ニ勢ヲ得ベシ、特ニ當國ナドハ百姓ニハ、古ハ地侍ノ遺風殘リ、平生專ラ門地ヲ貴ビ、訟獄ノ起ルコト大半座論ヨリ起ル風俗ナレバ、俗ニヨリテ敎ヲ爲スニ、農商ノ品ヲ分ツコト勸農ノ捷徑ナリ、商賈ノ內ニモ市易ノ制ヲ立テ、不レ中レ度物ヲ禁ズレバ、自ラ奢侈モヤムベシ、喩ヘ農人事ニヨリ御城下ヘ出ルコトアランニ、御百姓ハイカナル富商大賈ニモ上座ヲシ、詞遣ヒ等モ是迄奉公人ト庶民トノ違ヒタル如ク、町人ヲ百姓ヨリコナサセ、モシ農家少壯ノ子弟心得違テ美服紛華ヲ好マバ、商人ノヨキヽヌ着タル如ク也トテ、笑ハスル風俗ニモ、仕方ニヨリテ成ルベキ也、何ニモカマハズ、骨折ラズシテ暮スコトヲ好ミ、商賈ヲ願フ豪民アラバ、悉ク御城下ヘ移スベキ命アルベシ、鄕村ニ居リ半商半農ニテコソ利アルベキニ、御城下ニ徙ル時ハ身上耗損スル故、移ル者有ベカラズ、萬一移ルコトヲ好ム愚民ハ、勝手次第御城下ヘウツシ、是ヲ町人トシテ御城下ヲ賑ヤカニスベシ、古ヘモ豪民ヲ都下ヘ徙スコト有ル例アリ、モシ鄕村ニ在ナガラ、御定メノ商人ニテモナク、骨折ヲ嫌ヒテ末業ニ趨ルナラバ、周禮「夫里之布、夫家之征」ノ法、及ビ漢ノ高祖ノ法ニヨリ、賦稅ヲ重クシテ是ヲ困辱スベシ、此ノ如クシテ勸農大カタ行屆クベシ、夫ニテモ獨游惰ヲ事トスル者アラバ、太閤ノ法ニヨリ嚴ニ罰スル仕方モ有ベシ、天正十九年八月廿一日、秀吉公制令三ケ條ヲ出サル、其第二日、在處々々百姓ハ田畠ヲ打捨、アキナイ或ハ賃者等ニ罷出候輩有レ之者、其者ノコトハ不レ及レ申、地下中可レ爲ニ御成敗一、幷奉公ヲモ不レ仕、田畑ヲモ不レ作者、代官給人トシテ堅相改不レ可レ置、若於レ莫ニ其沙汰一ハ、給人過怠ニハ其在處召上ラルベシ、同町人百姓隱置

ニ於テハ、其一郷同一町可レ爲ニ曲事ニ事　孟子ハ戰國ノ時ニ當テ、諸侯賦斂ノ重キヲ救ヒ、四方ノ賦ヲ其所說ノ國ニ招來サンガ爲ニ、「市廛而不レ征、關譏而不レ征」ナドト敎ラレシガ、賤夫ノ壟斷ニ登テ市ノ利ヲ罔ル者ハ、是ヲ征スト見ヘタリ、市ヨリ征セザレドモ、廛ノ地子ヲ取リテ末ヲ逐フ者ヲ抑フルハ、王道ニモアルコト也、魯賢大夫臧文仲ガ六關ヲ廢セルヲ、孔子譏リテ不仁ナリトノ玉ヘルハ、六關廢シテ末業ノ者勝手ニ成、奢侈ヲサカンニスルガ故也、周禮ニハ、廛人・泉府等ノ官アリテ市中ノ征布ヲ收メ、又司門・司關ノ職アリテ、「幾ニ出入不物者ヲ、正ニ其貨賄ヲ、凡財物犯レ禁者擧レ之、以ニ其財ヲ養ヒ死レ政之老與ヒ其孤ヲ」、司門トモ、「掌ニ國貨之節ヲ、以聯ニ門市ヲ、司ニ貨賄之出入者ヲ、掌ニ其治禁與ニ其征廛ヲ、凡貨不ノ入レ於レ關者、擧ニ其貨ヲ罰ニ其人ヲ、凡所レ達貨賄者、則以ニ節傳キツテ出レ之、凶札則無ニ關門之征ヲ、猶幾司關」トモ見ヘタリ、門ハ國門ニテ、城下ヨリ郷村ヘ取付所ニ在リ、關ハ它所ノ境ニ在ル所ニテ、門關トモニ貨物ノ出入ヲ吟味シ、犯レ禁者ハ取上ゲ、一切ヌケ荷物ナキヤウニスルコト也、司門・司關ノ職ヲ設ル上ハ、貨物ノ宜キ程ヲハカリ征ヲトル事、暴政ニハアラズ、凶札ニハ征ヲ免ゼバ、時ニヨリテノ用捨モアリ、然ルヲ戰國ノ暴君汚吏ハ一概ニ重斂ヲトリシ故、孟子ハ「關譏而不レ征」ト說タルナリ、但シ孔子ノ臧文仲ヲ譏リ玉フヲ見レバ、國ニ門關ノ制ナクシテ、餘リニ末業ノ者勝手過タルハ、俗人ヨリ見テハ仁政ナル樣ナレドモ、却テ不仁也ト知ル可ナリ、漢武帝ノ時、「農民貧困、商賈滋衆、軍用不足」ナルニヨリ告緡ノ令トテ、商賈ノ貨物舟車等ヨリ算錢ヲ取シコト有リ、本ヨリ一時ノ權宜ノ制ニテ、史冊ノ美談ニハ非ザレ

共、其算錢ノ取ヤウハ、諸ノ賈人占買シテ利ヲ取ル者ヨリハ、率緡錢二千ニシテ一算ヲ納メシメ、手力所作ヲ以テ賣ル者ヨリハ、率緡錢四千ヨリ一算、商稅ノ半分ナリ、又北邊ノ富民ノ軺車ヨリハ一算、商賈人ノ軺車ヨリハ二算、富農ノ車役錢ニ一倍也、船五丈以上ハ一算、「賈人有二市籍一者、及其家屬、皆無レ得レ籍二名田一、以便レ農、敢犯レ令、沒二入田僮一」ト云リ、サスガ英雄ノ主ホド有リテ、軍國ノ爲聚斂セラレシ中ニモ、亦本ヲ崇ビ末ヲ抑ユルノ道ヲ寓ス、後人ノ心付ザル所ナリ、宋仁宗慶曆年ニ茶鹽ノ禁ヲ弛ベ、及ビ商稅ヲ減ゼン事ヲ議アリシニ、時ノ名相范希文ヒトリ不可トス、其言ニ云、「茶鹽商稅之入、但分減二商賈之利一耳、行二於商賈一、未二甚有下害也、今國用未レ減、歲入不レ可レ闕、既不レ取二之於山澤及商賈一、須レ取二之於農一、與二其害下農、孰三與取二之于商賈一、今爲レ計莫レ若三先省二國用一、國用有レ餘、當下先寬二賦役一、然後及中商賈上、弛レ禁非レ所レ當レ先也」トテ、其議遂ニ寢シト云リ、商稅ヲ弛ムルアシキコトニハ非ザレドモ、小惠ナリ、其レヨリハ先國用ヲ省キテ、農ノ賦役ヲ寬フスベキニ、是ヲサシ置テ目前ノ小惠ヲ行ハントスル、固ヨリ大體ヲ知ラザル者ノ議ナリ、范公ハ天下ノ憂ニ先ッテ憂ヘ、天下ノ樂ニ後レテ樂マント云シ程ノ賢者ナレバ、ヨク緩急ノ序ヲ得ラレシ事也、義公ノ初年ハ、藍瓶・酒桶・紙舟・高野村山札・中川舟役等ノ稅、並ニ諸ノ荷口ハ茶・烟草・織木綿・繰綿・紙・鹽等皆一箇ニ（鹽ハ一俵）錢若干ト定メテ斂メ玉ヒシ也、天和三年七月廿五日ニ至リ、綠岡ニ在セシ時、鄕村ニテノ諸役御免仰出サルル條、一ニハ藍瓶役、二ニハ紙舟役、三ニハ鹽釜役、四ニハ鮭役、五ニハ鮎役、六ニハ鱒留役、

七ニハ山札。馬札役、八ニハ在々ヨリ納メ候柿澁、例年ニ半分納メ可レ申事ト見ヘタリ、義公ノ仁政ハ四民共ニ其所ヲ得セシメ玉ヒシニ、特ニ小民ノ産業ニ利アルヤウニナシ玉フコト、誠ニ難レ有御事ナリ、諸浮役モ其利ヲ盡サズシテ民ニユルシ玉フ事、後世ニ至ルマデ誰カ恩澤ヲ仰ガザルベキ、諸荷口錢ノ事ハイヅレノ時ニ免除セラレシニヤ未聞カズ、去レドモ今ハ絶テナキ所ナレバ、免除アリシハ必定ナリ、逐末ノ徒幸ナルコト云フニヤ及ブベキ、カヽル内ニ天和中免除シ玉ヒシ郷村ノ諸役錢。藍瓶役ヲ除クノ外ハ、悉ク又收納セラルト聞及ブ、定テ寶永ノ改革已後ノ事ナルベケレドモ、義公ノ恩澤ヲ小民ニ布キ玉フ所ヲ皆々革除ラルコト、豈臣子タル者ノ能忍ブ處ナランヤ、是モ國用不足ナラバ、姑ラク是非ヲ論ズルニ及バザレドモ、其所獲ノ利幾何ゾヤ、農ノ本業ニハ非ザレドモ、小民ノ力作シテ活計ヲ助ル處ヨリ税ヲ取ル程ナラバ、何故ニ又舊時ノ如ク、商賈ノ輩ヨリ諸荷口錢ヲ取ラザルヤ、漢武帝ノ仕方ニモ愧(ハヂ)テ、宋人ノ議論ニヨリテ云フ時ハ、緩急ノ大體ヲ失ヘリト謂ベシ、紙舟役ヲバ小民ヨリ取レドモ、紙烟草ノ諸荷口錢ナキ故、商人ハ思フ儘ニ荷物ヲ境外ニ出シ、大富ノ業ヲナス也、一歳ニ江戸其外ヨリ入ル所ノ金錢夥シキコトナレドモ、皆々占買シタル豪民ノ商賈ノ業ヲ爲ス者ノ贏利ト成テ、公上ノ浮役ハ一錢モ上納セズ、然ルニ國計ヲ司ル者、國用不足ナル時ハ、士ト農トハ罪モナキ償金ヲ課スレドモ、商賈ヨリ税ヲトルコトハ夢ニモ知ラズ、唯アヤマリテ御用金ヲ借テ、借取ニスル工夫ノミナリ、國君ノ上ニテ國中ノ物ハ皆我物ナレバ、取ルトコソ云フベキ、借ルト云コト有マジ

キ由孔子モ教ラレタリ、俗吏ノ事體ニ昧キ笑フベキ事也、今農ヲ貴ビ末ヲ抑ユル爲ニ、農ノ賦役ヲユルベテ、商賈ノ荷口ヲ古法ノ如ク税シ、小民ノ力作シテ貢ル所ハ浮役ヲユルス術モ有ベシ、然ドモ商賈ノ狡黠中々己ガ利ヲ分減セラレテ、獨リ損ヲスベキニ非ズ、小民ヨリ力作シテ出ス所ノ原直ヲヤスク蹈テ買フトキハ、商賈ヲ困メントシテ、却テ小農ノ迷惑スル事ニモ及ブベケレバ、容易ニハ行ヒガタシ、但崇本抑末ト云コト、アマリ人ノ心付ザル故、聊此論ニ及ブナリ

問　制度ト風俗ニテ奢侈ヲ止サセ、游惰ノ者ハ力役ヲ課シ、且職事ナキ罰アリテ、又三折返シノ常免行ハルレバ、散田棄作ノ奸モ自ラ止ムベシ、散田棄作ノ奸ハ免ノ高ニシテ、贏利少キナバワザトアラシ、種夫食等ヲ取ル計リニ作リ、檢見ヲ受テハ皆ヒケトシ、外ニ畝延カ下免ノ地而已カヲ用ヒ、コヤシ、テ利ヲ得ルコトヲ計ルニ、檢見ノ畱モ是マデ吟味スルニ及バズ、大抵奸民ノ爲ニ愚ニセラル、ト云コト、コレ民ノ奸計ナレバ、棄作ノ田ヲ檢センニ、其田主ノ惣高ヲセンギシ、外ニ在ル所ノ田熟作ニテ、取付シ上ニモ贏餘アラバ、ソレヲ吟味シテ割詰ニ收納セバ、棄作ノ奸ハ行ハルベカラザルニ似タリ、然レドモアマタノ田土、是マデ細カニセンサク屆クベカラズ、且棄作ニスル田本無理ナル取付散ニカクスルコトナレバ奸トハ云ヘドモ、恕ス可キ所モアルナリ、一切經界ヲ正シクシテ、三折返シノ常免ノ法立チタラバ、公私共ニ備易ニシテ利アルベキナリ、御城下へ出タル僑民郷里へ返スニハ、定テ農具種夫食ノ世話有司ヨリ有ベケレドモ、御城下ニ日傭トリ少クシテ、武士町人ドモニ迷惑スベキ歟、且崇本抑末ハ至極ノ論ナレドモ、一概嚴ニセバ國中窮屈スベキ歟、管仲ナドガ富國ノ仕方左樣ニイヂケタルコトニハ有ベカラズ、如何　曰、御城下ニ日傭トリ減ジ、游民ノカタヅク事是ホド重疊ナル事ナシ、武士ハ日傭取少クシテ、僕從ナクバ何程ノ役祿高キ人モ、眞ノ家來抱ヘザル内ハ、姑ク供連ナキヤウニ定メ、知行所ノ百姓ヲ召使ヒ、軍役ノ用ニ立ツ漸ヲ爲スベシ、役法古ニ復シテ、凡身アル者庸ヲ出セバ、是ヲ規避シテ權門勢家ニ託スルコト、

古ヨリ定マレル勢也、武家ノ家來ハ庸錢ヲ出サズ、游民ヨリハ庸錢ヲ出サバ、今マデノ閒民武家へ奉公スル者多ク、給金モ自然ト賤ク、武士ノ勝手タルベシ、然ドモ過分ニ武士ノカヽヘ分ナドトテ、庸役ヲ避ル計ニ肩ヲイルヽ輩ハ、有司ヨリ嚴ニ是ヲ禁ジ、知行高軍役ノ割ヲ以テ武家家來ノ數ヲ限リ、郷村課丁ノ減ゼザルヤウニスベシ、武家ニ家來多ク給金賤キトキハ、役金ヲユルシテ古ノ如ク人數ヲ出サセ、足輕ト共ニ御普請役ニ使ヒ、是マデノ如ク來歷モ知ザル浮浪人御城下ニ居レバトテ、大切ノ要害へ入込ムヤウナルコトモ止ムベシ、（凡ソ兵ヲ足スノ法ニ、古制ニ泥マズ、今俗ニ拘ハラズ、時ニ適スルノ術アリ、其說頗永ケレバ此書ニハ略シツ、且此書ハ專ラ勸農ノコトヲ主トスレバ、武備ノコトハ別ニ論ズ）町人ノ店ノ者、他所商人ノ子ハ格別、郷村百姓ノ子ハ悉ク郷里へ歸スベシ、凡テ士ヨリ已下ニ主從ハナキ者ト定メ、上下ノ等則ヲ明カニシ、工商ノ徒ハ古ノ「易レ子而教」ト云如ク、相互ニ取カハシテ弟子トシ、（今デッチト云詞、弟子ノナマレル也、今モ近江ノ國ノ商人、デシト云フトゾ）戶ノ主一人ヲバ親方ト稱サセ、（先生ト云ト同ジ理也）檀那ト云ハセズ、農人幷工商ノ家へ年季奉公スル者モ、元是平民ナレバ、下男・下女ト云ハセズ、賃ヲ出シテ雇ヒタル心ニテ年季雇人ト稱サセ、トカクニ民ノ本業ヲハナレザルヤウニスベシ、町人モ餘リ驕奢安佚ナレバ身上衰ロフ甚ナレバ、如何ナル富家ノ子弟タリトモ、少壯ノ內ハ手足ヲモ勞スルコト、尤然ルベキ也、且崇本抑末窮屈ノヤウナレドモ、如レ此ナラデハ國ハ決シテ富ムコトナシ、管仲ガ齊ヲ治ムル女閭ナドマデコシラヘ、山師ノ元祖ノ如ク後人ハ思ヘドモ、實ハ左ニ非ズ、齊ノ國ハ元ト瀉鹵ノ僻地人民寡キ所ニ、太公望其女工ヲ勸メ、伎巧ヲ極サセ、魚鹽ノ利ヲ通ゼシカバ、人物多ク是ニ歸シタリシガ、其後管仲ニ至テ、

色々ノ奇策モ有レドモ、其第一ニ規摸ヲ定メシ參國伍鄙ノ制ト云ハ、城下ヲ士鄕・工鄕・商鄕トテ三ニ分ケ、鄕村ヲ五屬ニ分タルコト也、一屬九萬家ヅツニテ、五屬ニハ四十五萬家也、一鄕二千家ニテ八士ノ鄕十五、合テ三萬家ナリ、工鄕三ツ六千家、商鄕三ツ六千家、工商合テ六鄕、ソヅカ一萬二千家ナリ、本末ノ權衡是ニテ心得ベシ、本ヲ外ニシ末ヲ内ニシテ、富國ノ術ヲ求ルハ、木ニ緣リテ魚ヲ求ルヨリモ愚ナル也、農ノ賦役ヲバ寛セズシテ、末業ノ者恩賜アルコト甚惡シ、スベテ恩惠ノコトハ、「一則以爲レ德、二則以爲レ常、三則以怨ニ其不足一」ト管仲モイヘル如ク、町人ナドノ侈惰ニヨリテ貧困セル者ヘ、シバ〳〵救金ナド下サル、何ノ益モナキコト也、御救ノ金ウケ取テ酒ヲ買ヒ、醉ニ乘ジテ其父ヲ惡口セシ者モ有ト聞及ブ、埒モナキコト也、鄕村ノ商賈ヲ抑ヘル時ハ、御城下ノ町人ハ賑ハサズトモ繁昌スベシ、凡古ノ窮民ト云フ者ハ、鰥寡・孤獨・癈疾等ノタヨルベキ方ナキ者ノミ、上ヨリ恩惠アルコトニテ、侈惰無ニ職事一者ハカヘツテ罰セラルベキ也、五弊既ニ革マリタル上ハ、人々本業ヲ力メ田里ヲ安ズベシ、嫁娶ニ物入ナク、男女時ヲ失ハザラシメ、生子ヲ育スルノ令ヲ嚴ニシ、浮浪ヲ禁ズレバ庶アルコト、入百姓スルニ及バズ、民ノ產ヲ制シ、資財ノ源ヲ開キ、勤儉ヲスヽメ、侈惰ヲ禁ズレバ富在ニ其中一、然後ニ人倫ヲ明ニスル教ヘ、戸ゴトニ喩シ人ゴトニ告ゲズトモ、行屆ベキコト也

問　君子ハ民ノ父母ニシテ、仁者ハ人ヲ愛スト云ヘリ、聖人治國ヲ論ズルニ、「節レ用而愛レ人」トノ玉ヘバ、國用ヲ制スルコト其道如何シテ可ナランヤ、曰、「節以ニ制度一、不レ傷レ財、不レ害レ民」ト云コトアリ、國

家ノ財用ハ皆民ヨリ出ル者也、モシ制レ節謹レ度コトアタハズシテ財用足ラザルトキハ、是非ナク橫斂暴賦ヲ民ヘカケルヨリ外ナシ、何程惻隱ノ心アリテ人ヲ愛スルトモ、人其澤ヲ蒙ラズ、故ニ愛民ニハ必先ヅ節用ヲ先トスルコト也、古人モ「無二政事一則財用不レ足」ト云ヒテ、國計ヲバ甚ダ重ンジ、斗筲ノ小人ニ任セ置クベキ者ニ非ズ、王制ニ、「冢宰制二國用一、必於二歲之抄一、五穀皆入、然後制二國用一、用二地小大一、視二年之豐耗一、以二三十年之通一制二國用一、量レ入以爲レ出」ト云ヘルハ、國用惣グヘリ國ノ盛衰ニ關ル所ナレバ、執政ノ大臣一歲ノ入ヲ量テ明年出シ方ヲ考、常ニ四分一ヲ餘シテ軍國不虞ノ備トスル也、故ニ「國無二九年之蓄一曰二不足一、無二六年之蓄一曰レ急、無二三年之蓄一、曰二國非二其國一也、」コレ聖人ノ訓也、毎年ノ入ル所四分シテ、其一ヲ餘シ不虞ノ備トナシ、三十年クラシテ十年分アマル樣ニスレバ、喩ヘ天災人禍アリトモ、國ノ貧困ニ至ルコトナシ、是萬世ノ上計也、周禮ニ、家宰邦治ノ大體ヲ司リ、邦中關市山澤等ノ九賦ヲ以テ財賄ヲ斂メシメ、祭祀賓客喪荒等ノ九式ヲ以テ財用ヲ均節セシメ、大府ノ官アリテ、凡官府ノ吏執レ事者財用ヲ受ルトキハ、式法ヲ以テ是ニ授ク、「關市之賦以待二王之膳服一、邦中之賦、以待二賓客一、四邦之賦、以待二芻秣一、家削之賦、以待二匪頒一、邦甸之賦以待二工事一、邦縣之賦以待二幣帛一、邦都之賦以待二祭祀一、山澤之賦、以待二喪紀一、幣餘之賦、以待二賜予一、凡邦國之貢、以待二弔用一、凡萬民之貢、以充二府庫一、凡式貢之餘財、以供二玩好之用一」トテ、其名目後世ニハカハレドモ、何々ノ分ハ何々ノ入用ト、揚方分明ニ定リ有ル故ニ、凶年ニハ凶荒ノ禮式アリテ、夫レ丈國用ヲ減縮セル也　是ヨリ下ヲバ、一年ノ入ル所ヲ其歲ギリニ暮シ、居常無事ノ時ハ民ヨリ虐取スルコトナケレドモ、少シモ不意ノ變アルトキハ、償ヒヲ民ニ掛サスルコト能ハズ、其國大事ヲ動スコトハナラネドモ、靜ナルトキハ先ヅ小康也、亦此一時ノ中計ト云モノ也、今ノ世ニ在テ責テ一年切ニモ、他人ヲ仰ガズシテ國用ヲ制スルハ稀ナルベシ、然レドモ古聖人ノ規矩ヲ以テ云フトキハ、三年ノ蓄ナキハ國其國ニ

非ズトテ、甚危キ道理ナリ、最下ニシテ謀トキハ、一年ノ暮シ出ル所入ル所ヨリ多ク、民ニ取ルコト、國用ニスリ合セントテ日々ニ重ク、其レニテモ足ラザレバ、給ヲ富商大賈ニ仰テ目前ヲ支吾ス、是不レ終レ月ノ下計也、此萬世。一時。不終月ノ三計ハ某ガ言ニ非ズ、蘇東坡ガ論也、今ノ諸侯ハ國用此下計ナラザルハ少ナカルベシ、理財ノ道樣々アリト雖モ、國用ヲ節ニスルノ要訣、タヾ量レ入以爲レ出ノ一語ニ過可ラズ、此外ニ奇妙ノ術ヲ求ル、皆影ヲ捕ヘ風ヲ係クノ談、一切邪說也ト知ルベシ、財用盈虛ハ節ニスルト、節ニセザルトニ在リ、節セザル時ハ、盈テリト雖モ必竭キ、能節ニスレバ、虛也ト雖モ必盈、古今ノ定理ナリ、人君ノ祿ヲ天祿ト云フ、一己ノ身上ヲ養フ爲ニ非ズ、土地相應ニ民ヲ治ムル士大夫ヲ建置キ。且軍役ノ人馬ヲ養ヒ、國ノ武備ヲ張ルコト、是天祿ヲ有テル者ノ天職也、古ノ聖賢ノ制ハ論ニモ及バズ、蒲生氏鄉會津百萬石ヲ領シテ、多士ニ厚祿ヲ與ヘ、其藏入ハ纔ニ九萬石餘ナリ、池田輝政播。備。淡、三國ノ主トシテ、九十萬石ヲ食メドモ、自身ノ暮シ方ハ三萬石ノ格ニテ、後庭ノ婢妾モ三十人ニ過ズ、封內ノ田土金穀ヲ以テ多クノ名士ヲ養置テ、天下ノ干城タルコトヲ謀リシト云、英雄ノ志カクコソ有ルベキ也、又備前新太郎少將（光政朝臣、即輝政ノ孫）ハ常ニ國計ヲ重キ事トシテ、時々自分ニ是ヲ開カレ、入ヲ量テ出スコトヲセラレタリト云、紀伊亞相公ハ（南龍院頼宣卿ノ御事）自ラ工夫シテ、基盤ノ圖ト云フ繪圖ヲ作ラセ、五色。七色。八色ニ彩色、御領國納米ノ惣高ヲ擧、兎ヲ四ツ五ツ六ツト極、第一御家中ノ知行切米、第二ニ江戶參覲入用銀、第三ニ在江戶ノ入用、第四所々ノ普請、第五ニ臺所入

用、第六鷹野猿樂等ノ入用、箇ヤウノ品々ヲ分ケテ、普請作事有ル時ハ外ノ入用ヲ減ジ、又加增御金可レ被レ下年ハ、又タ普請作事ヲ止メ、アナタコナタヲ入合セ融通セシ故、勝手ニ增減ノ手品有テ、惣テ御身體スハリテ、御一代ノ內國用窮迫セルコトナシト云、是他邦ノコトナレドモ、誠ニ諸侯ノ度タルベシ、本藩モ始封ノ初ハ國ニ大ナル工役アリ、且シバ〳〵御上洛ノコトサヘ有シカドモ、國用ノ不足ヲ患ルコト、今世ノ如キコトヲ聞カズ、威公・義公ノ御時ハ節用ノ政行ハレ、軍國ノ備ヲ專ラトシテ、平生ノ浮費少キ故ナルベシ、寬永ノ末ニ高三十六萬七千三百五十七石五斗八升二合有テ、公儀向ヲバ廿八萬石ト稱シ玉ヒ、封內ニテ士大夫ノ地方ニテ、割上玉ヒシ所二十三萬三千六百餘石ニ及ブ、內三萬五百石御子方（サマ）ソノ外物成詰御切符等ヲ高ニ見テ、給分凡テ卅三萬百四十六石五斗、殘高三萬七千二百十一石八升二合ヲ御暮シ方ノ分ト定メ、入ヲ量テ出ヲ爲シ玉フニモ、田畠ノ賦稅而已ニテ、諸浮役ヲバ經費ニハ入レ玉ハザルト聞ケリ、義公ノ御時新墾ノ田アリト云ヘドモ、四萬石ノ御分地アリシカドモ、國用不足甚シキコトヲ聞カズ、二公ノ御時百姓町人ヨリ御用金御借上ゲナド云コト曾テ無キコト也、肅公ノ御時侈大ヲ好玉ヒ、元祿十四年ニハ義公薨逝翌年也始テ三十五萬石ト稱スルコトヲ幕府ニ請フ、是年ヨリ國用大ニ不足シテ、始テ淸水仁衞門トカヤ云フ浪人ヲ勘略役トシテ召抱ラレ、種々ノ新法弊政ヲ行ハレ、終ニハ松並勘十郎ナル者ヲ引込、忌憚所モナク悉ク祖宗ノ法ヲ改革セシメ、國民ノ騷動ヲ激シ、下ヲ剝ギ上ヲ附益セシメ、聚斂ノ餘毒今ニ殘リテ、國ノ元氣ヲ損スルニ至ル、是ヨリ先キ元祿十三年庚辰常憲

院殿礫川ノ邸ヘ渡セラレ、大學君・播磨君各二萬石ノ地別ニ封ヲ賜ハリ、封内ニテ分ラレシ四萬石ハ本藩ニ歸セシ也、此年國ノ富民ニ一萬六千三百三十八兩ノ御用金ヲ命ゼラレ、始封已來ノ所無也、幾程ナク寶永元年甲申、又千八百二十七兩二分御用金ヲ命ゼラル、御本宅御普請費トゾ聞ヘシナリ、是レヨリ已來、國用時ニヨリ盈縮アレドモ、大抵出ル所入ル所ヨリ多ク、有司ノ會計ヲ司ル者朝四暮三ノ術ヲ以テ、苟モ目前ヲツクロフ而已、古人國用ヲ論ジテ「前世於溷弊之時、猶能易貧而爲富、今吾以至盛之勢、用財有節、其所省者一、則吾之一也、其所省者二、則吾之二也」ト云ヒ、又「誠詔有司、按尋載籍、而講求其故、天下之費、必有約於舊、而浮於今者、有約於今、而浮於舊者、其浮者、必求其所以浮之自而杜之、其約者、必求其所以約之由而從之」ト云コト、司計臣ニ如此忠言ヲ獻ズル人ナキコト悲ムベシ、近世ニ至テハ地方ニテ給スル所纔七萬餘、物成請扶持切米多シト雖、古ノ時ニクラブレバ、御藏入ノ高段々ニ增タルコトハ必定也、然ルニ國用ノ不足ト云ハ、一切元祿・寶永已後ノ積弊ニテ、建國ノ始制ヘ立チ返ラズシテ、百年ノ間「虛而爲盈、約而爲泰」ノ仕掛ヲ用ヒ玉フガ故ナリ、此惡弊破除セザル內ハ、何程御藏入ヲ增シ厚斂ルトモ、入ル處多ケレバ、出ル所亦多ク、國用足ルコト決シテアルベカラズ、昔ハ國用ノ數、一歲ノ經費二萬ニ至ラズト云フ、今ハ數萬金ヲ費シテモ、猶不足ノ處一萬餘金也ト云フ、是レ前ニ所謂「能節則雖虛必盈、不節則雖盈必竭」ノ道理顯然タリ、有司タル者此ヲバ悟ラズシテ、御家中多過ル故、公室ノ財用不足ナド

ト云、士大夫ノ內或ハ死シテ嗣ナク、或ハ罪アリテ追放セラルヽヨリ、其祿ヲ收公スレバ、上ノ御益何程付キタルナドト常談ニ云コト、人君ノ富厚ハ元來軍國ノ爲、士大夫ヲ養フベキ天祿ナル道理ヲ忘テ、公上ノ御冥加ヲ損ズルコト、勿體ナキ次第也、士大夫ノ祿ハ地方ニテ給ハルベキヲ、近年物成詰次第ニ多ク成テ、凶年ニハ土地ヨリ生ゼザル所ヲ、府庫ノ財ヲ以テ償ヒ賜ヒ、國用不足スレドモ、臣下タル者己ガ利ニ耽テ豐年ヲ願ハズ、君臣上下憂樂ヲ殊ニスルコト、是亦制度ノ失セル惡弊ナリ、諸侯ノ寶ハ土地・人民・政事ノ三ツニテ、土地ヨリ生ズベキ物ヲ人民ノ力ニテ作出シ、貢納セル財用ヲ政事アリテ、是ガ節ヲ制スルヨリ外ノ術ナケレバ、士大夫ノ俸祿ヨリ已下一切ノ入用、悉皆知行高ニテ定メ置、頗ル餘計ヲ備テ不虞ノ備トナシ、某ノ料ニ幾千石、某ノ料幾百石トアテ置キ、扨其一歳ノ豐凶ニヨリ、邑入ノ多寡アルニ隨ヒ、明年ノ用度ヲ盈縮シ、委曲瑣細ノ割合ヲバ割物奉行ニ（大吟味役ノ替名）命ゼラレ、國用ノ大計ヲバ執政上大夫ニテ大吟味ヲナシ、君上ヘ申上、善政不籌策ト云如ク、大體ノ上バカリヲ極メ玉フコト、勞セズシテ成ルコト也、此制一タビ立トキハ、奢侈ハ抑ヘズシテモ、度外ノ浮費ヲ事トスル事能ハズ、軍國ノ備常ノ有レ餘テ、愛人ノ政惟君上ノ思召ノマヽニテ、誠ニ百年ノ盛事、千古之一快タルベキ也

寬政十一年丁巳孟秋　　幽谷居士書ニ於困學齋一

勸農或問卷之下 終

農政座右

小宮山昌秀著

農政座右緒言

予嘗テ承レ乏、治民ノ命ヲ蒙リ、楓廳ニ徙リ居ルコト數年、不幸ニシテ廳罹レ災、公私ノ藏書皆烏有シ、臨レ事テ滯ルコトノミ多カリシナリ、其後讀レ書テ偶々故事ノ農政ニ與ルモノアレバコレヲ抄錄シ、不レ圖ニ冊子ヲ成セリ、即假リニ名ヅケテ農政座右ト云、塞鄕乏レ書、僅ニ一二ノ友人ヨリ借覽セルノミナレバ、猶考フベキ書ノ漏タル多クアリ、又他ノ書ニ引用セルヲ其マヽ取用ヰテ、本書ヲ見ザルモアリテ、其誤アランモ計リ難ク、實ニ無用ノ物ナレド、今捨ンモ惜ムベキコト雞肋ニ似タリ、故ニ姑クコレヲ類聚シ、兒息輩ニ貽サントス、恐ラクハ大方ノ家ニ哄レン、謹デ人ニ示スコトナカレ

文政十二年己丑五月　小宮山昌秀識

農政座右卷之一目次

國　郡縣　鄉里
邑村　莊　保　名　坪

職役
國造（別）　稻置　縣主　村主　國司
守　介　掾　目（主典）　郡司
史生　莊司　守護　地頭　郡代
郡奉行　代官　手代（手附）　足輕　荒子
里長（五長）　村長　名主　莊屋　年寄
山守　肝煎　撿斷　問屋　組頭
定使

田圃
水田　口分田　位田　職分田　功田
賜田　公田乘田　神田寺田　私田　驛田
易田　上中下下々田　隱田　熟田　不輸田
陸田（畑畠）　園地　宅地　賣地

農政座右巻之一

水戸 楓軒 小宮山昌秀 著

國郡

國

上古ノ時ヨリ「クニ」ト云詞ハアリケン、後ニ漢字ニ記スニ至リテ、國ノ字ヲ用ヰラレシト見エタレド、「クニ」ト云ハ、コノ國ノ義ニヨクアヘルユヱナルベシ、既ニ伊弉諾尊・伊弉冊尊・大八洲國ヲ生給フト見エ、又豐葦原中國ト云ヒ、浦安國・細戈千足國・磯輪上秀眞國・虚空見日本國ナドモアリ、又國常立尊・國狹槌尊・豐國主尊・大國主神ナド云モオハセシナリ、其ヨリシテ國々ノ名モ往々見エタレド、成務天皇ノ五年ニ、「隔二山河一而分二國縣一、隨二阡陌一以定二邑里一」トアレバ、コノトキニ至リタシカニ其地ヲ分カタレテ、皆國造・稻置ヲ命ゼラレシコトト見エタリ、國造紀ニハ、百四十四國アリシヨシヲ云ヘリ、其後合併シテ、續日本紀孝謙天皇ノトキハ六十二國トアレド、ソレヨリ又分割アリテ、嵯峨天皇ノ頃ヨリシテ、六十六國ニハ定リシナリ

漢ニハ封建ノ時、諸侯ノ私領ヲ國ト云フ、禹ノ時萬國アリ、周ノ武王ノ時、八百諸侯會盟ニアヅカ

リ、其定ニ天下ニ及ンデ千七百七十三國アリシヨシ見エタリ、春秋ノ時諸侯互ニ相呑滅シテ、經傳ニ見ルモノ百七十國アリ、其後十二諸侯ニナリ、戰國ノ時ハ七國ニ合ス、漢以來モ諸侯ノ封國アリ、天子ノ公領ヲ郡ト云、故ニ漢ニ郡國ト云ヘルコトモアルナリ

國ニ五等アリ、大國・上國・中國・下國・小國ナリ、而拾芥抄ニハ、「大國十二・上國三十五・中國十一・下國九」トアリテ、小國ナシ、按ニ、戸令ノ義解ニ、「定ニ國大小一、可レ有ニ別式一」ト見エテ、何時ニ定メラレシコトニヤ未レ詳

唐代宗時、楊綰爲レ相、定ニ上中下州一、文宗相ニ韋處厚一、乃置ニ六雄十望十緊等州一、通典ノ注ニトアレバ、コレラニ倣ヒタマヒシモノナラン、凡戸四萬以上ヲ上州トシ、二萬五千以上ヲ中州トシ、二萬ニ滿タザルヲ下州トセルヨシ、制度通ニ云ヘリ

國ヲ州ト云ヘルコト、續紀卷十一ノ詔ニ、「朕君ニ臨九州一、字ニ養百姓一」トハ見エタレド、山城ヲ城州トシ、大和ヲ和州トスルガ如ク、國々ヲ州ト云ヘルハ、文人ノ唐ニ擬シテ書初メシモノナリ、況ヤ近文ニ尾陽・肥陽・甲陽ナド、陽ノ字ヲ州ノ字ニ作スモノ不レ知ニ何據一ト、刋謬正俗ナドニモ云ヘリ

唐堯有ニ九州一、舜肇ニ十有二州一、禹又別ニ九州一、漢以レ州部レ郡、「コレヨリ後ノ世々州郡互ニ變革アリ、唐ノ時ハ十道アリテ、其下ニ州縣郷アリ、サラバ五畿七道アリテ、其下ニ國郡郷アルモ、コレニ倣ヒシモノナルベキカ

郡

郡ト云モノ上古ニハ見エズ、成務天皇ノ四年、「國郡立レ長、縣邑置レ主」トアレバ、コノ以前既ニ國ノ下ニ郡アリ、郡ノ下ニ邑アリ、縣ノ下ニ邑アルガ如ク見ユレドモ、左ニハアラズ、コレハ文勢ニヨリテ書成セルニテ、其明年ニハ、「隔ニ山河一而分ニ國縣一、隨ニ阡陌一以定ニ邑里一」トアリテ、國郡トハ云ズ、東雅ニ、郡トイヒ、縣トイヒ、其名同ジカラネド、其實異ナルニモアラズト云ヘルハ理リナリ、孝德天皇ノ大化二年ニ、「置ニ國司郡司一」トアレバ、コノ時ヨリシテハ、タシカニ國ト郡トアリシナリ、和名抄ニ所レ載ハ、郡凡五百九十八アリ、延喜式・拾芥抄・節用集等ニハ不同ナリ

左傳定二年、「趙簡子曰、克レ敵者、上大夫受レ縣、下大夫受レ郡、杜預注周書作雒篇、千里百縣、縣有ニ四郡一」ト見エタリ、コノトキハ縣ノ下ニ郡アリ、秦始皇本紀ニ「分ニ天下一爲ニ三十六郡一」ト見エテ、コノトキ始メテ國ヲ廢シ、皆公領トシテ治メラレタリ、故ニ郡縣ノ治トハ云ナリ

郡ニモ五等アリ、其初ハ大化二年ニ、「凡郡以ニ四十里一爲ニ大郡一、三十里以下四里以上爲ニ中郡一、三里爲ニ小郡一」トアリ、三等ナリシガ、令ニハ、「郡以ニ二十里以下十六里以上一爲ニ大郡一、十二里以上爲ニ上郡一、八里以上爲ニ中郡一、四里以下爲ニ下郡一、二里以上爲ニ小郡一」トアリ、五等ナリ、此里ト云ハ、道程ノ里數ニハアラズ、「五十戸爲レ里」ト云フモノニテ、大郡ハ千戸ヨリ八百戸マデ、上郡ハ六百戸以上、中郡ハ四百戸以上、下郡ハ二百戸以上、小郡ハ百戸以上アルヲ云ヘルナリ

里ト云ヒテ、郷トハ云ハザルヲ知ルベキナリ

周禮注、「二十五家爲レ里、邑猶レ里也、邑是人之所レ居之處、里亦訓レ爲レ居、故云邑猶レ里也」トアリ、漢モ郷ノ下ニ亭十アリ、亭ノ下ニ里十アリト見エ、唐令ニハ、「以二百戸一爲レ里、五里爲レ郷」トアリ、明ノ洪武十四年ニハ、「以二一百一十戸一爲レ里」ト、治平略ヲ引テ制度通ニアリ

道程一里二里ト里ヲ以テ數フルコト、何ノ時ニ昉マルコトヲ知ラズ、六町ヲ一里トスルヲ上方(カミ)道トシ、三十六町ヲ一里トスルヲ坂東道ト云ヒ、或ハ三十六町ヲ一里トスルハ古ヘナキコトニテ、織田信長ノ創メテ制セラレシナド云コト皆訛リナリ、古ヘヨリ大里小里ト云アルナリ、コノ事令ニモ見エネドモ、高尾山ノ藏ニ、僧明惠眞跡ノ渡天行程記ト云アリ、コレニ見エタリ、其自注ニ三十六町ヲ一里ト定ムトアリ、コレ大里ナリ、小里トハアレド、町數何程ト云フコトナシ、サレドモ百里ハ二日トアル、自注ニ、若大里ナラバ當二八里餘一トアリ、コレニヨリ推算スレバ、小里ハ四町半餘ト見エタリ、制度通ニ、古里ハ五町內外ト云ヘル、ヨク合ヘリ、然レドモ六町一里ト云モ、其故ナキニハアラズ、上ニ見タル田里六町四方ノ地ノ一面ヲ云ヘルナリ、三十六町ハ六町四方ノ總數ニテ、六々三十六町ナリ、コレヨリ轉ゼシナルベシ、今仙臺ニ大小道ト云アリ、大道ハ三十六町、小道ハ六町一里ナリ、〔昆陽漫錄ニ、明史ニ、二百五十里ニテ天度一度ヲ距、我國三十里ニテ一度ヲ距ル、コレニテ除スレバ四町三分二厘トナル、コレニテ明ノ一里ハ、イマニ四町十九間二分ニアタルヲ知ル〕

制度通曰、書經益稷篇ニ、「弼二成五服一至二于五千一」五千里ノ事也、又禹貢ニ、「五百里甸服、百里賦納

總」等ノ事アリ、一里ト云フハ何ホドトイフコト詳ナラズ、其後孟子ニ井田ノ事ヲ述テ、「方里而井、井九百畝」トアリ、是里數ノ由リ起ル所ナリ、井田ハ百畝ヅツノ物九ニシテ、一里四方也、然レバ一面ノ長サ三百歩、是ヨリ行程ノ一里トイフ物積リ出スト見エタリ

武備志ニ、「筑前博多ノ事ヲ記シテ、花旭塔（ハカタ）ノ津松林長十里（名十里有二百里）」又兩朝平攘錄ニ、「道路用日本里數、其一里准我國十里」トアリ、コレニテ彼此ノ里ノ差ヲ知ルベシ

邑村

コレモ東雅曰、日神天邑君ヲ定メラレシト見エ、又成務天皇國郡邑里ヲ立フレシト見エ、邑ト村ト其字同ジカラネド、其實ハ異ナルニアラズト云ヘリ、按ニ、コレハ古ヘ互ニ用ヰタルト見エテ、神武天皇ノ紀ニ、「日向國吾田邑・又高尾張邑・磐余邑・忍坂邑・鷄邑」垂仁天皇紀「丹波國桑田村」景行天皇紀「伊豫國御村別・八代縣豐村、又自高來縣渡玉杵名邑」」神后皇后紀「荷田持村」ナド見エタリ、オモフニ縣ノ下ニ邑村ト云モノアリシニハアラズシテ、大ヲ縣トシ、小ヲ邑村トセルモノナルベシ、サレド其中ニハ八代縣ノ豐村ナド云モ稀ニアリシナラン、上ノ條ニ云フ如ク、後ノ世ニ至リテモ一定セズ、村ト云フモノ鄕ト並稱シタルモアリ、又鄕ノ下ニアルモアリ、正木文書、「應永十一年、新田庄內惣領知行分鄕之公田、「百町注文」トアルニ、鄕ト村ヲ並ベタルアリ、又村ノ下ニ何ノ鄕內トアルアリテ分明ナリ、凡テ亂レタル世ノ事ハ何事モ一定セザル事ノミ多シト知ルベシ、今ノ如ク郡ノ下ニ總テ村アリシ

コトニナリシハ、何ノ時ヨリト云フコトヲ詳カニセズ

周禮曰、「九夫爲レ井、四井爲レ邑、四邑爲レ丘、四丘爲レ甸、四甸爲レ縣、四縣爲レ都」、論語ニ、「千室之邑、百乘之家、朱注、千室大邑」ト見エタリ、漢ノ時列侯知行所ヲ國ト云ヒ、皇后公主ニ邑ト云ヒシナリ、制度通ニアリ、サレドモ食邑若干戸ナド云フ多ク見エ「孝文本紀ニハ、「今列侯多居二長安一、邑遠」トモ見エタリ、皇后・公主ニ限リタルニハアラズ

諸侯之國ヲ邑ト云フコト、史記、「舜一年所レ居成レ聚、二年成レ邑、三年成レ都、又武王作二邑於鎬京一」又虞芮ノ爭田ヲ記シテ、「入二其邑一、男女異レ路」トアリ、詩ノ正義ニ、「虢鄶質國言レ邑者、以二國邑一相對爲レ異、散則國亦爲レ邑、殷武云、商邑翼々、左傳毎言二敝邑一者、皆公侯之國而稱レ邑也」トアリ

村通作レ邨、村ノ名古ヘハ見ヘズ、唐ノ頃ヨリ多ク見エ、杜甫詩ニ、「借問酒家何處在、牧童遙指杏花村」、其外ニモアリ

莊

孝德天皇紀ニ、「詔罷二昔在天皇等所レ立子代之民、處々屯倉、及別・臣・連・伴造・國造・村首所レ有部曲之民、處々田莊一、仍賜二食封大夫以上一、各有二差降一」ト見エ、又「白雉元年、白雀見二于一寺莊一」トアリ、古ヘヨリアリシ者ナルベシ、其後次第ニ國々ノ莊園多クナリシヨシハ、神皇正統記ニ見エタリ、コレハスベテ故アル私領ノ地ニテ、貢賦アル事ナク、今ノ下ヤシキナド云モノヽ大ナル者ナリ、後ニ至リテハ、公田ヲ

郡ト稱シ、私領ヲ庄ト號シテ勝手ニマカセ、開發ノ地ナド云ヒ立テヽ、コレヲモ庄ト唱ヘシホドニ、終ニハ公田ヨリハ多カリシカバ、新立莊園停止スベキ旨ナド屢詔リアリシナリ、コノコト古人ノ說ニモアリテ、茲ニ云ハンモ煩ケレバ悉サズ、其地ヲ守ルモノヲ莊司ナド稱シテ、終ニ大名ト號シ、其地ヲ私スル事ニナリ、亂レシ世ニ城ヲ構ヘ、人ニ奪レマジト據リシ程ニ、自ラ封侯ノ如ク成リ行キ、勢アルモノハ近隣ヲモ併セタリ、故ニ京官及寺社ノ領主ナドハ皆コレヲ失ヒ、莊園ノ名モ廢シタルナリ

莊字彙ニ、田舍也、俗作レ庄非ナリ、韓愈詩、「去夏公請レ告、養レ病城南莊、」其外多ク見ユ

保

コレモ莊ノ類ナルベシ、其起リハ孝德天皇ノ紀ニ、「五戶皆五家相保、一人爲レ長、」元明天皇ノ紀ニ、「五保而不レ告者與(オヨブ)ニ同罪一」ナドアルニ出デヽ、拾芥抄ニ、「坊七十二坊、保三百保」トアルモノ也、東鑑、「承久兵亂後、諸國郡鄕庄保新補ニ地頭、所務之事一」ト見エ、又「丹後國志樂庄伊稱保。信州長倉保」ナドモ見エ、貞永式目ニモ、郡鄕庄保トアリ、武家ノ代ニナリテ、一轉シテ定ル所ナラント信濃地名考ニアリ、サモアランカ、常陸保內ト云地アルハ、コノ保ノ遺ナルベシ 岩城志曰、保ハ郡ノ內ニアリテ、四ケ所五ケ所ノ村里ヲ組合スルヲ云ナリ、卽保チ助ケ合フコトニテ、今云組合村ナリ、當今南組北組ト稱スル是ナリ

名

唐令ニ、「諸戶以ニ百戶一爲レ里、五里爲レ鄕、四家爲レ隣、三家爲レ保」トゾ、制度通ニ引リ

豐後圖田帳但馬太田文ノ遺レルヲ得、又常陸府中稅所氏所藏ノ作田勘文（コレモ太田文ナルベシ）ナドヲ看ルニ、鄕莊ナドニ並ビテ某名ト云フアリ、思フニ、コレハ名田ニヨリテ名ヅケシナルベシ、此名田多キモノヲ大名ト云ルナリ、今諸侯ノ稱トナレリ、コレモ廢シタルコト莊保ニ同ジ、（玉石雜抄引二赤島一曰、鎌倉邊ニテ田地ニ一名ト云ハ十三石也、是ヲ丸名ト云フ、半分持タルヲバ半名ト云、楠木村ハ六名アルナリ、シカレバ七十八石ノ村ナリ、一名ヲワカチ持タル多シ、十三石不殘持タル者ヲバ、丸名持タルト云ナリ、或人曰、村高ニヨリテ高違フナリ、城廻村ナドハ二十石一名トスルナリ）漢食貨志注、「師古曰、名田占田也、各爲立レ限、不レ使下富者一過上レ制、貧弱之家可レ足也」ト、コレニテ名田ノ義ハ知ルベキナリ

坪

今村中ノ小地名ヲ坪ト云フ、按ニ、方六尺ヲ一坪ト云ヨリ起リシナルベシ、古文書ニ小地ヲ數フルニ坪付ト云見エタリ

三國志秦宓傳註ニ、刹兒坪アリ、北魏書世宗本紀ニ、瀼城桑坪アリ、綏寇紀略ニ、蓮花坪・白溝坪見エタリ、葛原詩話曰、凡地ノ曠寛夷坦ナル者ヲ坪ト云、華山ニ娑羅坪アリ、蜀ノ峨山ニ雷洞坪・軟草坪アリ、此類甚多シ

職役

國造別

治民之職、上古ノ時ニ國造・稻置・縣主・村主ナド云アリシト見エタリ、國造ト云ハ封建諸侯ノ如ク、古ヘ其地ニ首長タリシモノヽ子孫、世々首長トシテ有リシモノナルベシ、日本紀ニ、神武天皇ノ時、「以ニ珍彦一爲ニ倭國造一」トアリシヨリ、其他多ク見エタリ、職原抄曰、「成務天皇四年、始定ニ國造一、同六年、始分ニ國境一、乃國司名也、後改云レ守也一」ト、コレハ日本紀ニ、「成務天皇四年詔曰、自レ今以後、國郡立レ長、縣邑置レ主、」古事記ニ、「定ニ賜大國小國之國造一」トアルニ據ラレシナルベシ、職原抄大全曰、「至ニ成務天皇一、始開ニ國郡一、始置ニ國造一、但上古以ニ國守一皆云ニ國造一、至ニ皇極天皇時一、始改ニ國司一」ト見エタリ、然ルニ制度通ニ云ヘルハ、皇極ノ本紀ニ、國造ヲ國司ニ改メラレシコト見エズ、推古天皇十二年、聖德太子十七憲法ニ、「國司國造勿レ斂ニ百姓一」トアリ、天武ノ本紀ニ、「諸國司國造郡司、及百姓等」トアリ、然レバ古ヘハ國々ニ國造有テ、其後又國司ヲ任ジタマヒ、國司・國造ト並置ト見エタリ、夫ヨリ後世々ノ國史ニ國司・國造ト云フコト處々ニ有テ、後世迄モ國造ノ名アリ、國造ヲ改メテ國司トスルニハアラズ、イヅレノ世ニ國造ヲヤメラルヽトイフコトモナク、次第ニ廢スルトミエタリトアリ、按ニ、世官其人ニアラズ、故ニ國司ヲ置テ治メラレシユヱニ國造ノ威衰ヘ、其才幹アルモノハ郡司ニモ任ジタリシニ、其後ニ至リテハ、「又託ニ神事一、動廢ニ公務一、自今以後、不レ得レ令下ニ國造一帶中郡任上」ト、類聚國史ニアリ、コノ後ハ其祖神ノ祭ヲ奉ズルノミニテ勢益々衰ヘ、僅ニ存セルモノモ、今ノ出雲ノ國造ノ如クアリシナルベシ

別コレモ國造ノ如キモノト見エタリ、日本紀景行天皇ノ紀ニ、「磐城別・播磨別、・伊豫國御村別」ナド云フ多ク見エ、又「其七十餘子、皆封二國郡一、各如二其國一、故當二今時一、謂二諸國之別一者即其別王之苗裔焉」トアリ、是ニテ知ルベキナリ

稻置

稻置、其名ヅクル故ヲ知ラズ、或ハ農事ヲ勸メテ、民ニ稻ヲ置蓄ヘシムルノ職ナランモ知レズ、コレモ國造ニ次ギ、其職ヲ世々ニセシモノニテ、後ニ郡司ナド云ヘルモノヽ如クナルベシ、日本紀景行天皇ノ時、尾張田子之稻置・乳近之稻置ナド見エ、成務天皇ノ紀ニハ、「四年、國郡立レ長、縣邑置レ主、五年、令二諸國一、以二國郡一立二造長一、縣邑置二稻置一、並賜二楯矛一以爲レ表」トアリ、其後詐僞アリシニヤ、孝德天皇大化元年ノ詔ニハ、「若有レ求レ名之人一、元非二國造伴造縣ノ稻置一、而輙詐訴言、自二我祖時一、領二此官家一、治二是郡縣一、汝等國司、不レ得三隨レ詐便牒二於朝一」ト見エタリ、コレニテ其職ヲ世々ニセルコトヲ知ルベシ、又「天武天皇十二年、作二八色之姓一、以混二天下万姓一」トアル、第八ニ稻置トアリ、コレ其職ニヨリテ尸ニ名ヅケラレシモノト見エタリ、公望私紀日本紀通證ニ引ク曰、「今村長也」ト、成務紀ニヨリ云ヘルナルベシ

詩豳風田畯至喜傳曰、「田畯大夫也」左傳昭二十九年、「稷田正也」疏云、「稷爲二田官之長一」トアリ、コレ等ノ類ナランカ

又周禮籥章、凡國祈年于田祖、龡豳雅、擊土鼓、以樂田畯、註、田祖始耕田者、謂神農也、鄭司農云、田畯古之敎田者、爾雅云、畯農夫也、疏曰、田祖者即郊、特牲云、先嗇一也、故甫田詩云、琴瑟擊鼓、以御田祖、以祈甘雨、毛云、田祖先嗇者也

縣主

日本紀「神武天皇二年、弟猾爲猛田縣主、弟磯城爲磯城縣主」トアリ、孝元天皇ノ紀ニ、「磯城縣主大目」景行天皇紀ニ、「水沼縣主」ナドモ見エタリ、又姓氏錄ニ、縣主ト云ヘル戸族ノ者多クアリ、コレモ世職ニヨリ稱セシナルベシ、古事記ニハ、「成務天皇時、定賜大國小國之國造及大縣小縣之縣主」トアリ、國ヨリアリシモノナルヲ、此時ニ至リテハ無キ地ニモ、スベテ置レシモノナラントオモヘリ

村主

日本紀雄略天皇ノ紀ニ、「身狹村主靑檜隈民使博德」ナド見エ、孝德天皇大化二年ノ詔ニハ、「臣連伴造國造村首」トアリ、又「凡養馬於路傍國者、將被雇人審告村首」ト見エ、コヽニハ注シテ首長ナリト見エタリ、制度通ニ、古ヘ一邑ノ長ヲ「スグリ」ト云ヘルヲ、漢字ヲ以テ村主ト書キ、子孫ニ至テ戸トナルト見エタリト云ヘリ、姓氏錄ニハ、村主ハ多ク蕃別歸化ノ子孫ニアリ

國司

職原抄曰、「國造乃國主名也、後改云守也、又曰、國司之選和漢重之、此云烹鮮之職、又云分憂之

官一」大全曰、「上古以二國守一皆云二國造一、至二皇極時一、始改二國司一、歷代皆云二國司一、至二文武一、改二國司一曰二國守一」トアリ、然ルニ制度通ニ、日本紀ヲ考ルニ、皇極ヨリ以前仁德ノ世ニ、遠江ノ國司表シテ上言スト云コトアリ、崇峻ノ世ニ、「河内國司即依二符旨一」トイフコトアリ、皇極ノ本紀ニ國造ヲ國守ト改メシコト見エズ、何ノ據ル所ヲ知ラズト云ヘリ、按ニ國號考ニ、皇極ヨリ以前ニ國司アルハ、後ノ國司ノコトヲ漢文體ニ記シタルナリ、皇極紀ニ、「諸國司宜下之二厥任一、愼中爾ノ所上レ治」トアルニ始リテ、其後アリト云ヘリ、然ラバ大全ノ說不可ナルニハアラズ

以上古ヘノ官人如レ此、コノ後ハ國ニ守介掾目アリ、郡ニ大少領・主政・主帳アリテ、國郡ヲ治メラレシコト左ニ云ヘルガゴトシ

守

職原抄曰、「大國守相當從五位上、上國守從五位下、中國守正六位下、下國守從六位下」ト見エタリ、其職掌ハ職員令曰、「掌下祠社戶口簿帳、字二養百姓一、勸二課農桑一、糺二察所部一、貢二擧孝義一、田宅・良賤・訴訟・租調・倉廩・徭役・兵士・器仗・鼓吹・郵驛・傳馬・烽候・城牧・過所・公私・馬牛・闌遺・雜物、及寺僧尼名籍事上」トアリ、其祿ハ至テ薄シ、田令ニ、「凡在外職分田、大國守二町六段、上國守二町二段、中國守二町、下國守一町六段」ト見エタリ、其始テ置ク何年ナルヲ知ラズ、職原抄大全ニハ、文武天皇ノ時、始テ置レ之ト見エタリ、然ルニ制度通曰、コレ何ニヨルコトヲ知ラズ、誤リナリ、令ハ文武ノ時ニナリ、國守

アルニ因テイフ成ルベシ、然レドモ國ノ守トイフコト、文武以前日本紀ニ見アタラズ、孝德天皇二年ニ、郡ノ大領少領等任ゼラルヽコトアレバ、守介掾目ノ名ハ見エザレドモ、國守ノ名アルコト知ベシト云リ、コレモ國號考ニ、「文武四年、詔ニ諸國司一」トアリ、次因幡守・遠江守トアリ、後ハ國守ト記ストアリ、サラバ大全ノ說モ是ナルニ似タルカ

大守　職原抄曰、「爲ニ親王一置レ之」トアリ、サレバ太守ト云ハ、親王ニ限リタルコトナリ

權守　又曰、「權守者、近代遙授之官也」トアリ、大全ニモ、「正者居ニ其國一執ニ政務一、權者其身居ニ京都一、以爲ニ兼官一、曰ニ之遙授一也」トミエタリ

漢ニハ、刺史・太守・牧ナド云アルナリ

太守ハ、史記秦始皇本紀曰、「分ニ天下一爲ニ三十六郡一、置ニ守尉監一」漢書百官表ニモ、「郡守秦官掌ニ治其郡一、秩二千石」ト見エタリ、景帝記ニ「中元二年、更ニ郡守一爲ニ太守一、郡尉爲ニ都尉一」トアリ、コレヨリ太守ノ稱ハアルナリ

刺史ハ、漢書武帝紀「元封五年、初置ニ刺史一」注、「初分ニ十三州一」コレヨリ世々アリ、事類全書曰、「刺之爲レ言、猶ニ參覘一也」制度通曰、「刺ハ刺擧ノ義ニテ、吟味スルコトナリ、隋唐ノ時ハ、州或改爲レ郡、州郡互ニ稱ス、州則稱ニ刺史一、郡則稱ニ太守一、揚升庵丹鉛總錄ニ、刺史太守不レ同、今混呼爲レ一、非也」トアリ

牧ハ、「漢成帝安和元年、更二刺史一名レ牧、哀帝建平六年、復爲二刺史一、元壽二年、復爲レ牧、後漢建武十八年、復爲二刺史一」コレハ舜典ニ、「肇二十有二州一、有二十有二牧一」ト云ニヨリテナリ、牧ハ養也、司也、ト見エタリ

介

職原抄曰、「大國介相當正六位下、上國介從六位上、中國下國無レ介、大國上國有二權介一」凡介ノ職掌同レ守ヨシハ、職員令ニ見エタリ、「其職分田、大國介二町二段、上國介二町ト」田令ニ見ユ

職原抄又曰、「親王任二太守一時、不レ知二吏務一、仍以レ介爲レ守」トアリ、故ニ常陸・上野・上總・三國ノ介ハ守ト同ジキナリ

漢ニ郡尉長史別駕ナド云コト、介ノ如シ

郡尉、漢書百官表曰、郡尉、秦官掌レ佐レ守、典二武職甲卒一、秩比二千石、景帝中元二年、改名二都尉一長史又曰、邊郡有二長史一、掌二兵馬一、秩六百石

別駕通典、從二刺史一行レ部、別乘二一乘傳車一、故謂二之別駕一、隋改二別駕治中一、爲二長史司馬一、唐有二長史別駕一

掾

職原抄曰、「大國大掾正七位下、少掾從七位上、有二權大少掾一、上國掾從七位、有二權掾一、中國掾正八位

下、下國掾從八位下」トアリ、其職掌ハ職員令ニ、「掌下紏ニ判國內一、審ニ署文案一、勾ニ稽失一、察中非違上」ト見エ、職原抄大全ニ、「掾、玉篇與絹切、訓ニ勢字一、書ニ其公文一作ㇾ帳、其外細事皆掾職也」ト見エタリ、職分田ハ、「大上國掾一町六段、中國掾一町二段」トアリ

漢官ノ司馬ニ當ツ、長史司馬前ニ見エタリ

目 主典

職原抄曰、「大國大目從八位上、少目從八位下、上國目從八位下、中國目大初位下、下國目少初位下」トアリ、其職掌ハ「掌下受ㇾ事上抄、勘ニ署文案一、檢ニ出稽失一、讀中公文上」ト職員令ニ見エ、職原抄大全ニハ、「一向執筆役也」トアリ、職分田ハ、「大上國一町二段、中下國一町」トアリ

主典　職原抄大全曰、「延喜式、凡太政官、幷左右辨官史生召使等、毎年一人除ニ諸國ノ主典一、主典目也」ト見エタリ

目代　後ノ世ニ至リテハ王綱モ紐ヲ解キ、國々ノ守モ京ニアリテ、目代ト云モノヲ國ニ遣ハシテ事ヲハカラハセシナリ、朝官ニアラザル代役ナレバ目代ト云ナリ

目ヲ漢ノ主簿ニアツ、事類全書曰、「主簿自ㇾ漢以來、皆令ㇾ二長自調用一、至ㇾ隋始置ㇾ之、唐高宗始以爲ニ品官一、宋元皆有」

郡司

職原抄大全曰、「郡司者昔每ニ一郡一、有ニ大領・少領・主政・主帳一、曰ニ之郡司一、今世如ニ郡代一者也、大領長官也、少領次官也、主政判官也、主帳主典也」ト云ヘリ、職員令曰、「大郡大領一人、掌下撫ニ養所部一、檢ニ察郡領一事上、少領一人、掌同ニ大領一、主政三人、掌下糺ニ判郡內一、審ニ署文案一、檢ニ出稽失一、讀中申公文上」トアリ、上郡大領一人、少領一人、主政二人、主帳二人、中郡各一人、下郡無ニ主政一、小郡領一人、主帳一人ノミナリ、「其職分田、大領六町、少領四町、主政主帳各二町」ト、田令ニ見エタリ、其守介ヨリ多キコトハ、位田ナキユヱナルベキニヤ、日本紀孝德天皇二年ニ、置ニ畿內國司郡司一タマヒシニハ、「其郡司並取下國造性識淸廉、堪ニ時務一者上、爲ニ大領少領一、强幹聰敏、工ニ書算一者、爲ニ主政主帳一」トアリ、京ヨリ國司ヲ置レシニヨリ、國造ヲ下シテ、郡司ニハ用ヰラレシト見エタリ、其コレヲ止ラレシコトハ、國造ノ條ニ云ルガ如シ、又日本後紀國號考ニ引「弘仁二年、夫郡領者、難波朝廷置ニ其職一、百勞之人世序ニ其官一、逮ニ延曆年中一、偏取ニ才良一、永廢ニ譜第一」トモ見エタリ

周禮、縣正各掌ニ其縣之政令一、漢書百官表曰、縣令長皆秦官、掌ニ其縣萬戶以上一爲レ令、秩千石至ニ六百石一、減ニ萬戶一爲レ長、五百石至ニ三百石一、皆有ニ丞尉一、是爲ニ長吏一」トアリ、コレヨリ世々アリ、「唐制縣有ニ六等之差一、凡一千五百七十三縣、縣令各一人、掌下導ニ揚風化一、撫ニ字黎民一、救ニ四民之業一、崇ニ五土之利一、養ニ鰥寡一、恤ニ孤窮一、審ニ察冤屈一、躬親中獄訟上、凡民田收受、縣令給レ之」ト、事類全書ニ見エタリ

史生

職員令曰、「大上中下國史生各三人」、職原抄大全曰、「史生書ニ紀雜事ヲ勤ニ守之ヲ使ニ公用ヲ令ニ驅仕ヲ也」トアリ、今ノ物書又手代ナド云モノ、如シ

周禮ニ、府史ト云モノアリ、コレニ同ジ

以上皆朝廷ヨリ任ゼラルヽ官人ナリ、コレヲ以テ國郡ヲ治メ玉ヒシコトヲ知ルベシ

以下ハ領家ヨリ私ニ命ズルモノ、及武家ノ役人ヲ擧グ

莊司

莊司ハ公領ニ公司アルガ如ク、私領ノ莊園ニ、領家ヨリ私ニ置レシモノナルベシ、大治二年ノ官符ニ、「宰吏得替之刻、庄司招ニ取公民ヲ」ナド云コトモ見エ、保元物語ニ、山田小三郎伊行ハ、山田庄司行末ガ孫トアリ、其他大畠莊司・畠山莊司ナド云フ多ク見エタリ、古クアリシコト知ルベシ

論語「子曰、求也千室之邑、百乘之家、可レ使レ爲ニ之宰ヲ」、又「季氏使ニ閔子騫爲ニ費宰ヲ」、「子游爲ニ武城宰ヲ」、「子夏爲ニ莒父宰ヲ」、朱注、千室大邑百乘、卿大夫之家宰、邑長家臣之通號、知新日錄、李南黎曰、大夫所レ置者皆宰也」ト、コレラノ類ニテ、莊司モ私ニ命ゼルモノナルベシ

守護

文治元年、源頼朝諸國ノ國衙莊園ニ守護地頭ヲ置レシコト、東鑑ニ見エタリ、コレハ官人ノ國衙庄園

ヲ守護スル爲ニ兵ヲ置クト云ルガ如シ、後ニ其威漸ク强ク、京官ハ無キガ如ク、守護自ラ國司ノ如ク成リシト見エタリ、貞永式目ニモ、諸國ノ守護人ヲ責メテ、「非二國司一而妨二國務一、非二地頭一而貪二地利一、甚以無道也」ト云ヘリ、太平記ノ時ニハ、自然ノ勢ニ從テ一變シ、朝廷ヨリ命ゼラレシコトモアリト見エタリ

地頭

賴朝以前ニモ、庄園ニハ地頭ノ名モアリシヲ、賴朝取用テ諸國ニ置シナルベシ、東鑑ニ、不レ論二權門・勢家・庄公一、段別ニ兵粮米五升ヲ課スヨシ見エタリ、續古事談ニ、地頭ト云名心得ザリシニ、唐書ノ中ニ、謀反ノ者ヲ討ントテ兵糧米ヲアツムル、地頭錢ト云フアリ、コノ義ニカナヘリト云リ、思フニ、一段ゴトニ其地ノ頭ヲ改メテ、軍役米ヲ收納セシナルベシ、拾芥抄ニ、「三十六歩爲二一段頭一」トアルナリ、後ニハ是モ勢アリテ、自ラ官職ノ如クナリシニヨリ、院廳ノ下文ニテ行家ヲ四國ノ地頭ニ補シ、義經ヲ九州ノ地頭ニ補セラルト云フニモ至リシナリ、故ニ終ニハ領主ノ如クナリ貴ブコトニテ、異國迄モ此事ヲ傳ヘ、「郡守曰二地都一」ト、兩朝平攘錄ニ云ヘリ、地都即地頭ナリ

郡代

郡代ハ郡司ノ代ヲ勤ムルユヱ、郡代ト云フナルベシ、何ノ時ヨリ命ゼラル丶コトヲ知ラズ、關東郡代伊奈氏其職ヲ世々ニセシガ、近ク絕ヘタリ、其ノ他ノ郡代皆十萬石以上支配ノヨシ、代官ハ九萬石マ

デニ限ルヨシヲ聞ケリ、水戸ニテモ先年郡奉行ノ上ニ置レシコトアリシガ、幾モアラズシテ停メラレタリ

郡奉行

郡奉行モ郡代ノ如シ、奉行ノ意ハ、正名緒言ニ、「唐詔勅式、中書令宣、侍郎奉、舍人行、本朝亦效レ之、中務卿宣、大輔奉、少輔行、盖謂奉ニ上旨一而行ニ于下一也、後來遂爲ニ職名一、如下東鑑云以レ某爲中鎭西奉行上是也」トアリ、今郡政ヲ掌ドルユヱ、郡奉行トハ云ナリ、諸侯ノ國ニハ必ズアルコトナリ、舊ハ公儀ニモアルコトニテ、五畿内郡奉行ナド編年集成ニ見エタリ、又關東郡奉行・關西郡奉行ト云フモアリシトゾ、何ノ頃停メラレタルヤ詳カナラズ

代官

代官ハ官人ニ代リテ事ヲ行フ意ナルベシ、源義經ヲ鎌倉殿ノ代官ト云ヘルコトモアレバ、古キ稱ナリ、貞永式目ニモ、「諸國守護人奉行、近年分ニ補代官一」トアリ、又「代官罪科懸ニ主人一否之事」ナド云モ見エ、又朽木文書ニ、正慶ノ頃ヨリ代官職ト云フ多ク見エタレバ、賦稅ヲ收ムルモノヲ代官ト云モ、此頃ヨリノ事ナルベキカ、收納ニ口米口錢ト云フアルハ、元代官ノ給分ナリ、故ニコレヲ口米役ト云ヘルトナリ、今ハコレモ公儀ヘ收納シタマヒ、右ノ代リ役料ヲ給ルコトニハナリシナリ、地方答問等ニ見エタリ

手　代　手附

古ヘノ史生、又彼府史ナド云者ノ類ニテ算筆ノコト、奉行代官ノ代リニ役スルモノユヱ、手ノ代リト云ヘルナルベシ、何ノ時ヨリアルコトヲ知ラズ、近頃代官ニ手附ト云アリ、是ハ公儀ノ人ナリ、手代ハ代官役料ニテ召抱ユルナリ、水戸ハ皆公ノ人ナリ、但官長ノ辟除ニテ、公ノ命ニハアラザルナリ、郡奉行ハ舊クハ足輕アリテ、手代ナカリシガ、コレモ代官ト同ク手代ニナリシナリ、手代ニ元〆ト云アリ、手代ノ總括リヲスルモノヲ云ナリ

足　輕

コレモ胥徒ノ類ニテ、代官役料ニテ召抱ユルナリ、舊クハ軍陣ニ用ヰシモノニテ、凡ノ事ニ駈使セルモノユヱ、足輕ト云ナルベシ、呉子ノ注ニ、輕足ハ能走者トアリ、コレナリト南嶺子ニ云ヘリ、源平盛衰記ナドニモ見エタレバ、古クアリシモノト知ラレタリ

荒　子

古ヘ仕丁ト云ヘルモノナルベシ、日本紀孝德天皇大化二年詔、「凡仕丁者、改下舊每ニ三十戶ニ一人上（以ニ一人ニ宛レ廝也）而每ニ五十戶ニ一人（以ニ一人ニ宛レ廝）以宛ニ諸司ニ、以ニ五十戶ニ宛ニ仕丁一人之粮ニ」トアリ、賦役令曰、「凡仕丁者、每ニ五十戶ニ二人、以ニ一人ニ充ニ廝丁ニ」義解ニ「廝猶レ使也、言給ニ使於汲炊ニ、與ニ火頭ニ同也」ト見エタリ、サテ荒子ト云名ハ、何レノ頃ヨリアルカ知ラズ、三好軍記・甲陽軍鑑・北越軍談・三河物語ナドニモ見エタレバ、

天文・元龜ナドノ頃多クアリシモノト見エタリ、石川正西聞見集ニ、掃部殿彦根ヘ移リ、近邊ノ野山ヲアラコキラセトアリ、サラバ荒田畑ヲ開發サスルニヨリ名付シモノナラン

以上武家ニナリテハ、大抵是等ノ役人ヲ以テ治ルコトナリ

以下ハ村吏ヲ擧グ

里長 五長

日本紀、孝徳天皇白雉三年、造㆓戸籍㆒、凡五十戸爲㆑里、毎里長一人、凡戸主皆以㆓家長㆒爲㆑之、凡戸皆五家「相保、一人爲㆑長、以相檢察」ト見エ、又戸令ニハ、「毎㆑里置㆓長一人㆒、掌㆘檢㆓校戸口㆒、課㆓殖農桑㆒、禁㆓察非違㆒、催㆗駈賦役㆖」ト見エ、又「凡戸皆五家相保、一人爲㆑長、以相檢察、勿㆑造㆓非違㆒、如有㆓遠客來過止宿㆒、及保内之人、有㆑所㆓行詣㆒、並語㆓同保㆒知」トアリ

周禮、里宰掌㆘比㆓其邑之衆寡㆒、與㆓其六畜兵器㆒、治㆗其政令㆖、鄭注、邑猶㆑里也、疏曰、里宰二十五家、又曰、五家爲㆑比、比長一人

隣長掌㆓相糾相受㆒、疏曰、隣長不命之士、爲㆑之各領㆓五家㆒、五家有㆑過、各相受察、宅舍有㆑故、又相察受也

村長

續日本紀天平寶字元年ノ勅書ニ、「京畿內百姓村長」ト見エタリ、サラバ古ヘハ村長ト云ヘルナルベシ

檀弓、子臯曰、以ニ吾爲ト邑ニ長於斯ニ」トアリ

名主

名主ハ名田ノ主ト云フコトニテ、田地多ク持シ者ヲ云フ、古ヘニ御名代ト云アリ、名モ代モ共ニ田地ノ名也、歌ニモ、十代田(シロ)トヨメリ（寸簸地理ニアリ）後ニハ村長ノ稱トナレリ、名田ハ占田ナリ、漢食貨志ニ見エタリ、東鑑元久二年ニ、公文名主ノ訴、建暦二年ニ「常陸那珂西沙汰人等乖行、地頭可レ令レ安ニ堵名主一之由被ニ仰下一」「寛元三年ニ、「上總國米澤村名主職事、」寶治二年ニ、「西國名主庄官等」ト見エ、貞永式目ニ、「惣地頭押ニ妨所領内名主職一事」ナドモ見エ、庭訓往來ニ、「御領田堵土民名主庄官等」トアリ、其後應仁記ニ、國々ノ名主百姓ト見エ、森本氏文書ニ、「文明十七年、六人名主之次第」ナドアレバ、引續キテ今ニ至リシモノト知ラレタリ

莊屋

莊屋ハ、上ニ見エタル莊司・莊官ナドノ類ニテ、莊園ヲ主ドリシモノ、遺稱ナルベシ、今ハコレモ一村ノ長ヲ云フ、名主トモ、庄屋トモ、國ニヨリテ稱シ來ルナリ、地方要集ニハ、關東ニテ名主組頭、上方ニテ莊屋年寄ト云、西國ニテ莊屋ヲ別當ト云フトイヘリ、當代記ニ、淸康君ノ時ノコトヲ記シテ、宇都左衞門五郎升役ヲ免ゼル條ニ、市場ノ庄屋トアリ、サラバ古クアリシモノナラン、郡縣要錄ニ、庄屋名主ヲ申シ付ルコト、村中入札ヲ取、入札多キモノヲ申付ルコト定法ナリトアリ、水戸モ寛永以前ハ、名

主又肝煎トモアリ、寛永元年ニ始メテ庄屋トアリト、田政考證ニイヘリ、今ハ皆庄屋ト稱スルナリ、承應ノ頃マデハ惣百姓相談ニテ頼ミ、莊屋ヲ立ルコトナリシガ、今ハ郡奉行ヨリ命ズルコトニハナリシナリ、〔天正十一年、前田玄以下知狀、禁裡御料所十一ケ鄕、御百姓中吉祥院北條庄屋幷定使職事申付候トアリ〕〔按ニ、天正ノ末已ニ庄屋アリ、菅又氏文書相渡申連判手形之事、一江戸田島守所緣者一人モ拵置申間敷候云云、末ニ天正十九年卯正月、庄屋長左衛門同七郎兵衛トアリ、又同文書慶長三年三月、宗門改ノ一札ノ末ニモ、庄屋小半次トアリ〕

年寄

年寄ハ、村ノ父老ト云ガ如シ、廣村ニハアレド、狹村ニハナキモノ多シ、コレモ何ノ時ヨリアルコトナルカ詳カナラズ

漢書百官表曰、「十里一亭、亭有レ長、十亭一鄕、有二三老一、三老掌二敎化一」トアルノ類ナリ

山守

山守何年ヨリ置クコトヲ知ラズ、水戸舊山奉行アリ、山虞ナド云モノヽ如シ、コレニ屬セシモノナルベシ、今ハ郡奉行ニ屬シ、莊屋ノ上ニ立テ勢アリ、水戸領南ハ大山守・小山守アリ、北ハ山横目ト號ス、名異ナレドモ實ハ則一也〔寛永秘錄、板久山守之事トアリ、板久ハ今ノ潮來ナリ〕

昭二十年、左氏傳、晏子曰、山林之木、衡麓守レ之、」周禮ニ、山虞林衡アリ、「山澤稱レ虞、川林稱レ衡」トアルモノニテ、麓衡ハ山守ナリ

肝煎

肝煎モ、名主莊屋ノ類ニテ村長ヲ云ナリ、肝ヲ煎トハ、猶意ヲ刻スト云フ類ニテ、何角苦心スルヲ云ナルベシ、水戸領ニテ慶長中ハ肝煎ト云アリ、今有ルコトナシ、松藩搜古ニ載セタル慶長・元和古文書ニ、肝煎百姓トアルモノ多ク見エタリ、其後モ他ニテ名主ノ事ヲ、奥州ニハ肝煎ト云ヒ來リシガ、今ハ之モ多クハ名主ト稱スル由ヲ聞ケリ、〔岩城志曰、天正年間ノ古文書ニ、走リ廻リ肝ヲ被レ可レ入ト云ヘルアリ、是ニヨレバ、肝膽ヲ碎キ念ヲ入、身ニ引受世話スルコトト見エタリ〕

檢斷

檢斷、正名緒言曰、「檢校裁斷之意也、」按ニ、太平記六波羅ノ役人ニ、檢斷ト云見エタリ、又庭訓往來ニ、檢斷所務沙汰人」トアリ、コノ遺ニテ村吏ニモ名ヅケシナルベシ、水戸ニアルコトナシ、コレモ松藩搜古元和八年ノ古文書ニ「高倉村撿斷職」ナド云見ユ、コノ子孫今ニ其職ヲ襲ヘルヨシ、其外奥州ニハ今町年寄ノ次ニ、檢斷ト云役人有リト聞ケリ

問屋

賦役令ニ、「帳驛子免二徭役一」ト云モノナルベシ、庭訓往來ニ、「浦々問丸、同以二割符一進二上之一、任二僦載一運二送之一」トアルモノ、今ノ諸商貨物運送ノ問屋ナルベシ、松藩搜古ニ、慶長十五年ニ、問屋甚之丞ト云アリ、寛永元年、小田原村問屋職ナド云モ見エタリ、水戸ニモアリ、驛所ニハ必ズアリ、其外川岸問屋、又貨物ノ問屋アリ、何年ヨリアルコトナルカ詳カナラズ、〔武州文書、（多摩郡關戸村）天文二十四年ニ、商人トキ屋ノ事、又商人道者問屋ノコトアリ〕

組頭

組頭、何ノ頃ヨリアルヲ知ラズ、水戸ハ寛永中ヨリ見エタリ、久方定明見聞錄ニ、寛永十五年、村々莊屋組頭始ルトアルハ誤リ也、其ヨリ前十二年ノ割付ニモアリ

定使

定使ハ、莊屋ノ駈使スルモノナリ、吉田社文書ナドニ見エタル定使ハ、定リテ京師ニ使スルモノ、如シ、正木文書應永十七年ニ見エタル畠五反分錢二百文定使免、又定使給分ナドアルモノ、今ノ定使ノ如シ

以上、皆村吏ナリ

田圃

水田

倭名鈔曰、田倭名太、水田古奈太、釋名云、「土已耕者爲レ田、」漢鈔曰、水田田塡也トアリ、按ニ、漢ノ下ニ語ノ字ヲ脱スルカ、コレハ釋名ニ、「田塡也、五稼塡二滿其中一也」トアルヲ云ヘルナリ、說文ニハ、「樹穀曰レ田、象二四口十阡陌之制一也」ト見エタリ、神代卷一書、「保食神實已死矣、唯有下其神之頂化爲中牛馬上、顱上生レ粟、眉上生レ蠶、眼中生レ稗、腹中生レ稻、陰生二麥及大豆小豆一、天熊人悉取持去、而奉レ進レ之、于レ時天照大神喜レ之曰、是物者則顯見(ウツシキ)蒼生可二食而活一之也、乃以二粟稗麥豆一爲二陸田種子一、以

レ稻爲ニ水田種子一、又因定ニ天邑君一、即以ニ其稻種一、始殖ニ于天狹田及長田一、其秋垂レ穎八握、莫莫然甚快也」ト見エタリ、大神不測ノ神德聖智ヲ以テ、耕作ノ事ヲ始テ敎ヘ玉ヒシト見ユ、彼神農氏ノ如クナルベシ、其後田ト云モノモアリシト見エ、一書ニハ「天照大神以ニ天狹田長田一爲ニ御田一」トアリ、一書ニハ「以ニ天垣田一爲ニ御田一」ト見エ、一書ニハ、「日神之田有ニ三處一焉、號曰ニ天安田・天平田・天邑田一、幷此皆良田、素盞嗚尊之田、亦有ニ三處一、號曰ニ天樴田・天川依田・天口鋭田一、是磽地」トアリ

三皇本紀曰、炎帝神農氏姜姓、斲レ木爲レ耜、揉レ木爲レ耒、耒耨之用、以敎ニ萬民一、始敎レ耕、故號ニ神農氏一

五帝本紀曰、軒轅之時、神農氏世衰、註、皇甫謐曰、易稱、庖犠氏沒、神農氏作、是爲ニ炎帝一、班固曰、敎ニ民耕農一、故號曰ニ神農一

月令曰、孟夏其帝炎帝、正義曰、何胤曰、春秋說文、炎帝號ニ大庭氏一、下作ニ地皇一、作ニ耒耜一、播ニ百穀一、曰ニ神農一也

月令又曰、仲夏毋ニ發レ令而待一、以妨ニ神農之事一也、鄭注、發レ令而待、謂レ出ニ徭役之令一、以豫驚レ民也、民驚則心動、是害ニ土神之氣一、土神稱曰ニ神農一者、以ニ其主ニ於稼穡一、正義曰、土神能吐ニ生萬民一、成ニ其農事一、故曰ニ神農一

口分田

田令曰、「凡給二口分田一者男二段、女減二三分之一一、五年以下不レ給、其地有二寛狹一者、從二郷土法一、易田倍給、」義解曰、「受レ田足二二段一者爲レ寛、不レ足者爲レ狹也、易田者、其地薄埆、隔レ歲耕種也、」コノ令ニヨリテ考フルニ、タトヘバ匹夫ノ農ナレバ

夫正丁　口分田二段、獲二稻百束一、舂得二米五石一、此租四束四把、」米ニシテ二斗二升ナリ

妻　口分田一段百二十歩、獲二稻六十六束二分一、舂得二米三石三斗三々一、」此租米一斗九升ナリ

合テ獲二米八石三斗三々一ナリ、其中租米四斗一升、殘米七石九斗二升三々ナリ、二人ノ飯米一日五合ノ積リニテ、三石五斗五升引テ殘四石三斗七升アリ、老少ノモノヲ養ヒ、凶年ノ蓄トスベキナリ

周禮載師注ニ、半農人ト云アリ、疏ニ、「士工商家受田五口、乃當二農夫一人一者」ト見エタリ、カヽル類モアルベキナリ

又曰、凡官戸奴婢口分田（謂二此不レ税田一也）與二良人一同、家人奴婢隨二郷寛狹一、並給二三分之一一」トアリ、コレ官人タルモノヲ優ニスルタメニ、奴婢ノ口分田ヲ不税ニシテ、其使令ニ給セシムルト見エタリ、家人ハ官人ノ家來ナルベシ、頼朝以來鎌倉ノ御家人ト云アルニテモ知ルベシ、コレガ召使フ奴婢ニテモ、三分一ノ口分田ヲ賜ハリ、コレヲ不税ノ田ニシテ共ニ使令セシムルナルベシ、物茂卿ノ説ニ、今ノ士ハ古ノ良民、今ノ民ハ古ノ奴婢ト云ヘル、理リアルコトナリ

孟子盡心篇、「分定故也」トアル、存疑曰、「分者分也、其所レ分者即其分也、如レ曰二口分一、則以二所レ分

之田ニ言也

淵鑑載、隋文帝令自ニ諸王一以下、至ニ於都督一、皆給ニ永業田一各有レ差、多者至ニ百頃一、少者至ニ三十頃一、唐開元二十五年令、田廣一歩、長二百四十歩爲レ畝、百畝爲レ頃、丁男給ニ永業田二十畝・口分田八十畝一、其中男年十八以上、亦依ニ丁男一給、老男篤疾癈疾、各給ニ口分田四十畝一、寡妻妾各給ニ口分田三十畝一、先永業者通充ニ口分之數一、黄小中丁男女、及老男篤疾寡妻妾當レ戸者、各給ニ永業田二十畝・口分田二十畝一、應レ給寛郷、並依ニ所レ定數一、若狹郷所レ受者、減ニ寛郷口分之半一、其給ニ口分田一者、易田則倍給

杜氏通典曰、「諸永業田、皆傳ニ子孫一、不レ在ニ收授之限一、卽子孫犯除レ名者、所レ承之地亦不レ追

歴史綱唐鑑武德七年、初定ニ均田租庸調法一、丁中之民（丁者當也、當ニ强壯之時一、中者謂ニ上下通一、四歳爲レ小、十六爲レ中、二十爲レ丁、六十爲レ老）給ニ田一頃一、篤疾減ニ什之六一、寡妻妾減レ七、皆以ニ什之二一爲ニ世業一、八爲ニ口分一（口分田、人八十畝）

位田

田令曰、凡位田一品八十町、二品六十町、三品五十町、四品三十町、正一位八十町、從一位七十四町、正二位六十町、從二位五十四町、正三位四十町、從三位三十四町、正四位二十四町、從四位二十町、正五位十二町、從五位八町、女減ニ三分一ニ」ト見エタリ、コレヲ彼奴婢ニ作ラセ、獲稻ヲ皆收ムルコトト見エタリ、奴婢ノ不税ノ口分田アルハ、コレガ爲メナルベシ、然ラバ八十町ハ現米二千石、七十四

町ハ千八百五十石、六十町ハ千五百石、五十町ハ千二百五十石、四十町ハ千石、三十四丁ハ八百五十石、三十町ハ七百五十石、二十四町ハ六百石、二十町ハ五百石、十二町ハ三百石、八町ハ二百石ナリ、前ニ云フ如ク物茂卿ノ說ニ、古ヘ公田ヲ耕ス民ヲ良家トス、是卽武士ナリ、私田ヲ耕スモノハ奴婢ナリ、耕ス田ノ米ハ皆主人ノ物トナル、今ノ百姓ハ此奴婢ノ類ナリト云ヘリ、何サマ位田・職田ハ、今領主ノ知行トナリ、良民ハ其武士トナリ、其奴婢ノ類今ノ百姓ナランニハ、今ノ賦稅重キコトモアヤシムニ足ラザルベキカ

職分田

田令ニ、「凡職分田、太政大臣四十町、左右大臣三十町、大納言二十町」ト見ユ、其外、外官ノ職分田モ、職役ノ所ニ云ル如ク次第アルナリ、コレモ位田ト同ク、獲稻ハ皆收ムルト見エタリ、然ラバ太政大臣正一位ノ位田・職田、合セテ現米三千石ヲ得玉フベシ、大抵今ノ一萬石許ノ給分ナリ、餘推シテ知ルベシ、田令又曰、「凡在外諸司職分田、交代以前種者入二前人一、若前人自耕未レ種、後人酬二其功直一」トアリ、職分田自ラ耕シ收ムルコト是ニテ知ルベシ、主稅式ニハ、位田・職田モ輸地子田ノ中ニアリ、心得ガタキコトナリ

文獻通考曰、隋開皇中、始給二職田一、又給二公廨田一、唐貞觀以二職田一給二逃還貧戶一、每畝給レ粟二斗、謂二之地子一、十八年、復給二職田一、永泰元年、百官請納二職田一充二軍糧一、宋眞宗興二復職田一、慶曆均二

公田ハ、復限ニ職田ハ、紹興復ニ職田ハ、金元志官、皆有ニ職田一

功田

田令ニ、「功田、大功世々不レ絶、上功傳ニ三世一、中功傳ニ二世一、下功傳レ子」ト見エタリ、位田・職田ハ罷免セラル、時ハ收メラル、功田ハコレニ異ナリ

左傳僖十五年、「晋於レ是乎作ニ爰田一」註、分ニ公田之稅應レ入レ公者一、爰ニ之於所レ賞之衆一、晋語作ニ轅田一」コレモ功田ノ類ナリ

賜田

田令ニ、「別勅賜ニ人田一者、名ニ賜田一」トアリ、別段ノ恩召ニテ賜ハル田ト見エタリ

周禮ノ載師ニ、賞田ト云アリ、注ニ、「賞賜之田」ト見エタリ、又加田アリ、通典ニ、「加田者既賞レ之、又重賜之田也」トアリ

公田乘田

田令ニ、「凡諸國公田、皆國司隨ニ鄕土估價一賃租、其價送ニ太政官一、以充ニ雜用一」義解曰、「公田者乘田也、賃租者、凡乘田限ニ一年一賣、春時取レ直者爲レ賃也、與レ人令レ佃、至レ秋輸レ稻者爲レ租、即今所レ謂地子者是」トアリ、今入レ作田ト云モノト知ラレタリ、諸國ニ口分田ナドノワリ餘リアルヲ、公田ト云ナルベシ

按、「雨ニ我公田一」トアル、公田ニハ異ナルベキカ、周禮ニ、「公邑之田」アリ、注ニ、「公邑謂ニ六遂餘地一、

天子使ニ大夫治ヒ之」トアルモノ、コレニ近カランカ

孟子曰、「孔子嘗爲ニ乘田一矣、」朱注、「乘田主ニ苑囿芻牧一之吏也」ト、コレモコヽニ云ル乘田ノコト也

神田寺田

田令ニ、「凡田六年一班、神田守田不レ在ニ此限一、」義解曰、「此即不稅田也」トアリ、守田トアルハ、寺田ノ訛ナルベシ、今御朱印地ト云フモノ寺社ニ賜ハルハ、コノ神田寺田ナルベシ

通典曰、「圭田者、祿外之田、以供ニ祭祀一」

私田

田令ニ、公私田トアル、義解ニ、「位田・賜田、及口分田・墾田等類、是爲ニ私田一、餘皆爲ニ公田一」ト見エタリ

驛田

田令ニ、「凡驛田皆隨レ近給、大路四町、中路三町、小路二町」ト見エタリ、今コレナキハ闕典ナリ、コノ外ニ布薩戒本田・放生田・敕旨田・公廨田・御巫田・采女田・射田・健兒田・學校田・諸衞射田・左右馬寮田・飼戸田・賙急田・勸學田・典藥寮田・節婦田・易田・職寫戸田・膂力婦女田・惸獨田・船瀨功德田・造船瀨料田ナドト云アリ、並不レ輸レ租田ノヨシ、主稅式ニ見エタリ

周禮載師ニ、宅田・士田・賈田・官田・牛田・賞田・牧田ナドト云モアリ

易田

田令ニ、「凡給ニ口分田一云々、易田倍給、」義解曰、「易田者、其地薄埆、隔レ歳耕種也」トアリ、一年代リニ地ヲ休ムルナリ

漢食貨志、田民受レ田、上田夫百畮、中田夫二百畮、下田夫三百畮、歳耕種者爲ニ不易一、上田休ニ一歳一者爲ニ一易一、中田休ニ二歳一者爲ニ再易一、下田三歳更耕レ之

又代田ト云アリ、漢武ノ時、趙過能爲ニ代田一、一畮三甽、歳代ニ其處一、毎レ耨必附レ根、根深能ニ水旱一、一歳之收、常過ニ縵田一一斛以上、用レ力少而得レ穀多

上中下下々田

延喜主税式曰、「凡公田獲レ稻、上田五百束、中田四百束、下田三百束、下々田一百五十束ト見エタリ、田ヲ上•中•下•下々ニ分ツコトハ、古ヘヨリアルコトナリ

書ノ禹貢ニ、上中下田各三等アリ、凡九等ナリ

周禮、小司徒遂人上地•中地•下地アリ、併セ見ルベキナリ

隱田

東鑑「承元五年七月十一日、下野國中泉庄、有ニ隱田等一之由、及ニ本所訴一之間云々」ト見エタリ、郡縣要錄曰、隱田トハ、檢地ノ時ニ地ヲ隱シタルヲ云フ、然ルニ世ノ人心得誤リテ、年貢不納ノ地アルヲ、

訴人アレバ隱田ト號シ、罪科ニ行フコトアルハ甚不可ナリ、是ハ其見出シタル年ヨリ、改出シト名付テ收納シ、以前ノコトハ强ク僉議ニ不レ及コトナリト見エタリ

熟田

ヨク熟スル田ヲ云ナラン、庭訓往來ニ、一佃御正作之勸農除ニ迫地一、撰ニ熟田一令レ下ニ行種子農料一トアリ、抄曰佃ハ、地頭ノ田ヲ百姓トシテ作リ立テ進ズルヲ云、御正作ハ、我ト分チ宛作ル田ナリ

不輸田

輪軒小錄曰、津國豐島郡南鄕村春日ノ社藏ニ、太田文ト云傳ヘタルアリ、其初ニ文治五年御檢注加納田畑取帳トアリ、其中ニ勅旨田・公田ナドト云アリ、不輸田ト云アリ、一人持ニテ、回リ持セザル田地ノコトナルベシト云ヘリ

陸田 畑畠

陸田旣ニ神代卷ニ見エタルコト、水田ノ條ニ云ヘルガ如シ、畑畠ノ字、並ニ漢ニナキ字ナリ、東雅曰、暎、日本紀「ハタヱ」トイヒ、耕麥ノ田ト注セラレタリ、倭名抄ニハ、日本紀師說ヲ引テ「ハタケ」ト讀、別ニ畠ノ字ヲ出シテ、一曰ニ陸田一「ハタケ」ト讀ムト注シタリ、サレド畠ノ字訓故ノ書等ニ見エズ、コレ俗字ナルベシ、又倭名抄ニ、火田ノ字ヲ出シ、漢語抄ヲ引テ「ヤイハタ」ト讀ム、唐韻ノ火田ナリ、「不レ耕而火種也」ト云フ說ヲ引ケリ、「ヤイハタ」トイフハ、火種之田ノ義ナリト云ヘリ、秀按ズ

ル二何レニシテモ古ルクアリシ文字ナルベシ、然レドモ田令ニモ畑ノコトハ見エズ、「只給二園地一者、隨二地多少一均給」ト見エ、義解ニ、「殖二桑漆一者、必於二園地一」トアリ、詩ノ疏ニ、「園者圃之藩、故其內可レ種レ木也」トアリ、サラバ元來水田ノミヲ作リ、宅地ニハ果蓏ヲ樹ル圃アリ、其カコヒニハ桑漆ヲ種タルノミニテ、畑作ルコトナカリシユヱ、續日本紀元正天皇元年ニ詔曰、「百姓唯趣二水澤之利一、不レ知二陸田之利一云々、宜下令二百姓一兼中種麥禾上、男夫一人二段云々」トアリ、コノ時ヨリシテ水田ノ口分ノ如ク、ワリ付テ作ラセシモノト見エタリ

月令曰、季夏可三以糞二田疇一、」正義曰、「蔡曰、穀田曰レ田、麻田曰レ疇

齊語曰、井田疇均、則民不レ憾、註、九夫爲レ井、井間有レ溝、穀地曰レ田、麻地曰レ疇

四書通義、仁山金氏曰、按、古人重二黎稷粱菽一、種二豆麥一者、作二田疇一也、詩所謂西二東其畝一、謂田間作レ疇、向レ南向レ東、視二水土之利一也、古者中土既平田、但止以二田疇一爲レ計

田園類說曰、晉書、「白田收至二十餘斛一、水田收二數十斛一」ト、白田ノ二字ヲ一字ニシタルト見エタリ

周禮遂大夫ノ疏ニ、「土地所レ宜者、若高田種二黍稷一、下田種二稻麥一、丘陵阪險種二桑棗一、是也」トアリ、サラバ又高田トモ云ベシ

園地

田令ニ、「凡給二園地一者、隨二地多少一均給、」義解曰、「戶內之口、不レ論二多少一、每人均給、何則殖二桑漆一

者、必於ニ園地一故」トアリ、桑畑ナリ

周禮載師、「以ニ場圃一任ニ園地一」トアリ、注、「圃樹ニ果蓏之屬一、季秋於レ中爲レ場、樊レ圃謂ニ之園一、詩曰、折レ柳樊レ圃、傳曰、樊藩也、圃菜園也、正義曰、郭璞云、種レ菜之地謂ニ之圃一、其外藩籬謂ニ之園一、故曰、圃菜園也、」太宰九職ニ曰、「園圃毓ニ草本一、注云、樹ニ果蓏一曰レ圃、園其藩也、是圃内可ニ以種ニ菜、又可ニ以樹ニ果蓏一、其外列ニ藩籬一以爲レ樊

宅地

田令ニ、「賣ニ買宅地一、皆經ニ所部官司申牒一、然後聽レ之、」義解曰、「謂ニ舍宅之地一也、略擧ニ宅地一、田園皆同、其賣ニ買舍屋等一者、自須ニ證據分明一、不レ可レ經ニ官司一也」ト、コレニヨレバ願ノ上賣買スルコトモアリト見ユ、田園皆給ハリ、私地ナラヌモノヲ賣買ト云ハ疑ハシキコトナリ、唐ノ例ニ効ヒタマフト見ユレドモ、ヨカラヌコトナリ

文獻通考曰、唐制、其自ニ狹郷一徙ニ寬郷一者、得下幷ニ賣口分永業一而去上、周之制、最不レ容ニ民遷徙一、惟有レ罪則徙レ之、唐却容ニ遷徙一、幷得ニ自賣ニ口分之田一、方ニ授レ田之初一、其制已不レ可レ久、又許レ之、自ニ賣民一始有ニ契約文書一、而得ニ以私自賣易一、故唐之比ニ前世一、其法雖レ爲ニ初立一、然先王之法、自レ此大壞矣

周禮載師、宅田アリ、鄭注ニ、「民宅曰レ宅、宅田者以備ニ益多一也」トアリ、又「以ニ廛里一任ニ國中之地一」

トアリ、注、「廛市中空地未レ有レ肆、城中空地未レ有レ宅者、共謂レ廛、民居之區域也、里居也」トアリ、町屋敷ノ類也、又「凡任地國宅無レ征」トアリテ、今ノ地子御免ト云ニ似タリ

賣地

日本紀孝德天皇大化元年詔云々、「有レ勢者分ニ割水陸一、以爲ニ私地一、賣ニ與百姓一、年索ニ其價一、從レ今以後、不レ得レ賣地、勿ニ妄作レ主兼ニ幷劣弱一、百姓大悅」ト見エタリ、惜哉令ノ時ニコレヲ改メラレシコト、當時モ永代賣ハ制禁ナレド、年季賣又質地ノ流地ナド云コトニナリ、賣買ニ異ナラヌコトニナリシハ、歎カハシキコトナルベシ

農政座右卷之一終

農政座右卷之二目次

農政座右卷之二

步段

步

雜令曰、「凡度レ地五尺爲レ步、」三代格曰、「以ニ大方六尺一爲レ步、」拾芥抄曰。「凡田以ニ方六尺一爲レ步、」制度通ニ、「步數唐ニ准ジテ、五尺ヲ一坪トス、今六尺ヲ一步トスルノ異同アレドモ、土地ノ五尺ト云ハ、即今ノ六尺ナリ、古ヘ尺ニ大小アリ、土地ノ廣サヲ積ルニハ、一尺二寸ノ大尺ヲ用キテ一尺ト云フ、五尺ノ中ニテ二寸宛延レバ、一步ニテ六尺ナリ。然レバ令ノ五尺モ、格。拾芥ニ六尺トアルモ、其實ハ異ナルコトナキナリトアリ、其外和漢三才圖會。地方問答。三器攷略。日本紀通證。地方初心集等ニハ、中古ハ「六尺五寸爲レ步」ト云ヒ、和爾雅ニハ、「日本六尺五寸爲レ步」ト云ヒ、律原發揮ニハ、「本邦六尺三寸以ニ曲尺一算レ之爲ニ一步一」ト云ヒ、白石退私錄ニハ、六尺五寸爲レ步モノハ、太閤秀吉ノ法ナリト云ヒ、成形圖說ニハ、「文祿步法ハ六尺三寸ナリト云ヒ、安齋隨筆ニハ、秀吉ノ時一坪ヲ六尺ニ定ムトシ、日本紀通證モ、「天正中復用ニ六尺一」ト云ヘリ、三器攷略ニハ、「元和以降モ、新田法ハ「六尺五寸爲レ步」、地方

初心集、近代棹段々短クナリ、六尺三寸・或六尺二寸・六尺ナリ」ト云ヘリ、是等ハ皆撿地ノ時、竿ニ縮ミヲ取リシモノニテ、歩ノ定メトハ云ヒガタシ、歩ノ數ハ古今六尺四方ニ定マリシモノト知ルベシ、海東諸國記ニ「凡計レ田用ニ日本町段一、其法以ニ中人平歩兩足相距一爲ニ一歩一」トアルハ、傳聞ノ訛リナラン

周語曰、夫日之察レ度也、不レ過ニ歩武尺寸之間一、註、六尺爲レ歩、賈君以ニ半歩一爲レ武

王制曰、古者以ニ周尺八尺一爲レ歩、今以ニ周尺六尺四寸一爲レ歩

論語集解曰、司馬法、六尺爲レ歩

孟子說解曰、毎ニ一擧下足曰レ跬、跬ハ三尺、再擧レ足曰レ歩、歩六尺

歷史綱鑑、藺相如曰、五歩之內、臣請得下以ニ頸血一濺中大王上矣、注、周尺六尺四寸爲レ歩

按、勸農固本錄曰、周尺ハ日本ノ曲尺ニテ、六寸六分六厘三分厘之二トツモリ、周歩六尺四方ハ、日本ノ四尺四方ノツモリナリ、紫芝園漫筆ニハ、「周尺當ニ今曲尺之七寸二分弱一、古者六尺、當ニ今曲尺之四尺三寸二分一」ト云ヘリ、其外周尺ヲ云フモノ、多クハ今ノ六寸四分弱ニ當ルト云ヘリ、猶考フベシ

又曰、秦商鞅用レ法酷、歩過ニ六尺一者有レ罰

始皇本紀曰、數以レ六爲レ紀、六尺爲レ歩、注、索隱曰、管子司馬法、皆曰、六尺爲レ歩

漢書食貨志曰、古者建レ歩立レ畝、六尺爲レ歩

孟子說解曰、古步周尺八尺、是漢尺六尺四寸也、漢以二周尺六尺四寸一爲レ步、是五尺一寸二分也

唐六典曰、凡天下之田、五尺爲レ步

按、制度通曰、開元通寶ノ錢ヲ八分ト積ルトキハ、唐ノ時ノ一步ハ、今ノ六尺一間ニ合セテ短シ

宋謝察微算經曰、步方五尺也 制度通ニ引

舜水文集曰、敝邑六尺爲レ步、如二今百工之尺一

淸俗記聞曰、一步ハ、今ノ小尺ニテ六尺四寸ナリ、小尺ハ即此方ノ曲尺ト同ジ

朝鮮ノ申叔舟我邦ノコトヲ記シタル海東諸國記ニ云、「計レ田用二日本町段一、其法以二中人平步兩足相距一爲二一步一、六十五步爲二一段一、十段爲二一町一、一段准二我五十負一」トアリ

大步・小步・半步ト云アリ、地方問答曰、田畑反步ヲ大步・小步・半步ト記シタル水帳アリ、大步ハ二百步、小步ハ百步、半步ハ五十步ナリ、或云、越後蒲原郡ニ反別ヲ大步・小步・半步ト用來ル所アリ、是ハ三百六十步一反ノ積リニテ、大ハ二百四十步、半ハ百八十步、小ハ百二十步ト云フ、コレハ承應三年溝口內匠頭檢地ナルヨシ、然ラバ古來ノ大・小・半ニテハナク、承應中ニワリアヒセシナルベシトアリ、秀按ニ、承應ノ定ニハアラズ、古昔ヨリ大・小・半ヲ用キシナリ、鹿島文書「元德二年、大賀村檢注取帳副日記」ト云アリ、其中ニコノコトヲ記シテ六十步ト云ハ、足數六十也、小ト云ハ二六十步也、半ト云ハ三六十步也、大ト云ハ四六十步也、三百步ト云ハ五六十步也、一段ト云ハ六六十步也トアリ、コ

レ一段ノ地ヲ六等ニ分チシナリ、二六十歩ハ百二十歩、三六十歩ハ百八十歩、四六十歩ハ二百四十歩、五六十歩ハ三百歩、六六十歩ハ三百六十歩、コレ今ノ世ニ一段ヲ十畝ニ分テル如ク、一段ヲ六等ニ分テルナリ、元六尺爲レ歩ヨリ組立シモノナレバ、三百六十歩ヲ六々ニ分テルナリ、理リアルコトナリ、今ハ段ノ地三百歩ニ減ジタレバ、コレヲ廢シテ十畝ニ分チシモノヲ用ヰシト見エタリ、古歩ノ姿タマタマ越後ニ遺リシモノアルヲ見テ、知ラザルモノ紛紜ノ説ヲナセシモノナラン

畝

和爾雅・田園類説並曰、「三十歩爲レ畝、」制度通曰、一段ヲワリテ一セト云フ、何レノ頃ヨリ始ルヤ知ラズ、類説又曰、石高ニ成リ起レリト見エタリ、何レニモ古ヘハ無キ名目ナリト、秀按ニ、コノ説可ナルニ似タレドモ、朽木文書寛正二年ノ賣劵ニ、一段二畝ト云フ見エ、同六年ノ文書ニハ、壹段トアリテ、注ニ、此内九畝十八分ハ字谷口、十八分字同谷口トアリ、サラバ三十六歩ヲ一畝トスルコト、其頃ヨリアリシトミエタリ

事物紀原・杜氏通典曰、皇帝始立レ歩制レ畝、是田以レ畝計、起レ自ニ軒轅一也

王制曰、制ニ農田百畝一、百畝之分、上農夫食ニ九人一、又曰、古者百畝、當ニ今東田百四十六畝三十歩一

漢書食貨志曰、古者建レ歩立レ畝、歩百爲レ畝

孟子大全、金仁山曰、古所レ謂畝、其廣六尺、其長六百尺、是爲ニ一畝一、若以ニ今大歩一計、則古百歩、

當ニ今四十一畝ニ、古者二畝半、當ニ今一畝十歩ニ

按、勸農固本錄曰、周ノ一畝ハ十歩四方ニシテ、一歩ノ物百ナリ、日本ノ法ニシテ一畝七分八厘餘ナリ、高ニシテ一畝ヲ一斗ニツモレバ、一斗二升六合二勺餘ナリ、紫芝園漫筆曰、「古者一畝、當ニ今五十一歩六百二十五分歩之五百二十五ニ、五畝宅、當ニ今二百五十九歩六百二十五分歩之二百ニ」トアリ、是モ周尺ニヨリ異同アルベシ

事物紀原、顧野王曰、秦孝公以ニ二百四十歩ニ爲レ畝、今又二百四十歩也、青齊諸部、又以ニ三百六十歩ニ爲ニ大畝ニ

明董穀碧里雜存曰、畝法古今不レ同、漢書鹽鐵論曰、古以ニ百歩ニ爲レ畝、漢高帝以ニ一百四十歩ニ爲レ畝、今時俗語曰、横十五竪十六、一畝田穩々足、蓋以ニ十五ニ乘ニ十六ニ、正是二百四十、若ニ古之百歩ニ以ニ今弓ニ准レ之、則其一畝當ニ今四分强ニ耳、古之一夫百畝、當ニ今四十畝ニ耳

杜氏通典曰、開元二十五年令、田廣一歩、長二百四十歩爲レ畝

唐六典曰、凡天下之田、二百四十歩爲レ畝、杜祐謂自ニ秦漢ニ以降、卽二百四十歩爲レ畝、非ニ獨始ニ於國家ニ、蓋具ニ令文ニ耳

倭名鈔引ニ唐令ニ曰、諸田廣一歩、長二百四十歩爲レ畝、畝百爲レ頃、今按、頃今之法六町六段二百四十歩

宋謝察微算經曰、畝横一歩、竪二百四十歩、即潤一丈、長六十丈也

青藤山人路史曰、二百五十歩、古田一畝雜存以下除ニ倭名抄一外制度通ニ引

舜水文集曰、二百四十歩爲ニ一畝一

段

日本紀孝明天皇大化二年詔ニ「凡田長三十歩、廣十二歩爲レ段」トアリ、令モコレニ同ジ、「方一歩者三百六十」トアリ、拾芥抄ニハ「凡田三十六歩爲ニ一段頭一註、三百六十歩爲ニ一段積一」トアリ、然ルニ地方問答ニ、文祿、豐臣秀吉改メテ、三百歩ヲ以テ一段トスト云ヘリ、明良洪範ニハ、コレ長束大藏ガ奸智ニテ、竿ヲ縮メシナリト云ヘリ、鈴錄ニハ、古ヘ六貫一疋ト云フ軍役アリ、田六千坪ヲ一貫トス、三百坪ヲ一段トシ、三千坪ヲ一町トスレバ、二町六貫ニテ積リ安キ故ナリト云ヘリ、田園類説コレニ從ヘリ、分田備考ニハ、御遺状百ヶ條ニ、郡國所領ノ高ハ、文祿元年大河内淺野ガ割付ノ通リ、禁裏ノ惣政所ヘ注進ス、此時ヨリ三百坪ニ改メ直ストアリ、何レノ道ニモ今ノ三百歩ヲ一段トセシハ、秀吉ノ時ト知ルベシ、制度通ニ、段ノ字、今反ノ字ヲ用ユ、段ノ草書ナリ、コノ段ト云コトハ、漢土ニハ見アタラズ、一シキリヲ段ト云ハ、後世ニモ多ク見エタリト云ヘリ、海東諸國記ニ、「凡計レ田用ニ日本町段、六十五歩爲ニ一段一」ト云ヘルハ、傳聞ノ訛ナルベシ、按ニ、拾芥抄ニ見エタル「三十六歩爲ニ一段頭一」ト云フ、心得ガタキコトナリ、思フニコレ三十六歩四方ノ地ヲ、小口ヨリ見テ一段頭ト號シ、コレニテ兵粮ヲ

收ムルモノヲ地頭トモ云ヘルナルベシ

小學、朱仁軌曰、「終身讓レ畔、不レ失ニ一段一」ト、コレモ一シキリト云コトカ、猶可レ考

町

日本紀安閑天皇元年ニ、「良田肆拾町」ト云文見エ、孝德天皇大化二年ニハ、「十段爲レ町」トアリ、田令ノ文モコレト同クシテ、「方一步者三千六百」トアリ、拾芥抄ニハ、「一段爲ニ一町頭一、十段爲ニ一町積一」ト見エタリ、今ニ至リテコレニ易ルコトナシ、但今ノ一段ハ三百步ナレバ、町モコレニ從テ三千步ニ減ジタルナリ、漢ニハ田地ニ町ト云コト遂ニ見アタラズト、制度通ニ云ヘリ、和名鈔ニモ、「町和名末知、蒼頡篇云、町田區也」トアリテ、何ホドヲ町トスト云コトハ見エズ

左傳魯襄公二十五年曰、「町原坊杜注、隄防間地、不レ得ニ方正如ニ井田一、別爲ニ小頃町一」賈逵曰、「原防之地、一夫爲レ町。九面而當ニ一井一也」トアリ、本朝町段之名是ニ出ルナルベシト、制度通ニアリ、又左傳疏說文曰、「町田踐處曰レ町、」史游急就篇云、「頃町界畝、是町亦頃類、故連言レ之也」ト、コノ文秉燭談ニモ引ケリ

正字通、「町字下引ニ區種法一曰、一畝之中、地長十大方爲ニ十町一、町間分ニ十四道一通ニ人行一」トアレバ、町段ノコト和漢相似タリト、玄同放言ニハ云ヘリ

里

雜令曰、「凡度レ地五尺爲レ歩、三百歩爲レ里、」拾芥抄曰、「三十六町爲二一里一、」制度通ニ、里ト云コト三アリ、戸令ニ、「以二五十戸一爲二一里一」ト云ハ、土地ノ廣狹ニカヽハズ、家數ヲ以テ云フ、在所ヲ立ル名ナリ、雜令ハ路程ノ法ナリ、「三十六町爲二一里一」ト云ハ、田地ノ積リナリト云ヘリ、コレニテ知ルベシ、今ハ一町ヨリ上ノ名目ヲ立ズ、故ニ里ノ名ナシ、下ノ條代モ同ジ

孟子曰、方里而井、井九百畝

王制曰、方一里者、爲二田九百畝一、鄭注、一里三百歩

秉燭譚曰、「公羊傳疏、古六尺爲レ歩、三百歩爲レ里、」字彙、「路程以二三百六十歩一爲二一里一」ト、本井田ヨリオコル、孟子曰、「方里而井、井九百畝」ト、百畝ノモノ九ツヲ井ノ字ノゴトクスル時ハ、一面各三百歩ナリ、故ニ三百歩ヲ一里トス、字彙、三百六十歩爲二一里一ハ、後世ノ事トシルベシ、本朝ノ制モ唐ノ法ニ因ル、公羊疏ニ同ジ、宋ノ謝察微ノ算經ニ、「歩ハ方五尺也、里ハ三百六十歩」ト、字彙ニ同ジ

條

拾芥抄、「三十六里爲二一條一、條起レ從レ北行二於南一、限二三十六條一里起レ西行二於東一、限二三十六里一町始レ艮終レ乾、但已上可レ隨二國例一」制度通曰、「右ノワケ令文ニ見エズ、其後ノ制法」ト見エタリ、是今ノ三十六町一里四方ノ處ヲ、西ヨリカゾヘ始テ一里二里ト云、毎二一里一方一町ノモノ三十六箇アリ、然レバ幅一町ニ長サ三十六町也、

又是ヲ北ヨリカゾヘ出テ一條二條ト云フ、毎ニ一條ニ又方一町ノモノ三十六箇アリ、幅一町ニ長三十六町ナリ、里ト云モ同ジコトニテ、竪ト横トヨリ積ル迄ノカハリ也、古ヘ田地ヲ分ツノ定法ト見エタリ、今ニ至ツテ郷村ノ名ニ東條・西條ノ名アリ、又古文書ニ某條ト云フコト多クアリト云ヘリ、又蓋簪餘錄ニモ云ヘリ

代

三代格曰、令前租稅、熟田五十代、二百五十步爲二五十代一

拾芥抄注曰、「七十二步爲二十代一、百四十步爲二廿代一、二百六十步爲二三十代一二百八十步爲二四十代一、五十代爲二一段一、式云、代頭也」トアリ、田園類說分田備考ニコレヲ解シテ曰、七十二步ヲ十代トシ、五十代ヲ一反トスル積リナレバ、二十代ハ百四十四步、三十代ハ二百十六步、四十代ハ二百八十八步ナルヲ、落字顚倒誤リシナリ、「式云代頭也」トハ、「或云代頃也」ノ誤リナラント云ヘリ

一條禪閤令抄云、俗謂二一段一曰二百代一、謂二一段一曰二五十代一、（三百六十步也、一段租五十束故也）廿五代爲二段半一、十代謂二七十二步一、五百代謂二一町一也（一町租五百束、故爲二五百代一）

萬葉集坂上郎女ノ歌、「しかもあらぬいほしろをたをかりみたり、田廬（たふせ）にをればみやこおもほゆ」八雲御抄ニ「ソシロ」ハ、シロハ田ニアルモノナリトバカリアリ、袖中抄曰、「ソシロ」ハ十代也、一代ハ一段ナリ、然レバ一町タルベシトアリ、年山記聞ニ、西山公ノ說トテ、三十六步ヲ一畝トシ、十畝ヲ

一段トシ、十段ヲ一町トス、七十二歩ヲ一代トシ、五代ヲ一段トス、然ラバ一代ハ二畝ナリ、代匠記ニモ、五百代小田トハ、二畝ヲ代トイフ、日本紀ニハ、頃ノ字ヲモ「シロ」トヨメリ

河内石河郡形浦山碑曰、「淨原大朝廷大弁官直大貮釆女竹良卿所ニ請造一墓所、形浦山地四十代ト、コレヲ好古小錄ニ釋シテ、方五尺爲ニ一歩一、四十代ハ二百歩

律原發揮曰、「古者以ニ方六尺一爲ニ一歩一、七歩二分爲ニ一代一、五代爲ニ一畝一、（三十六歩）十畝爲ニ一段一、（三百六十歩）十段爲ニ一町一、（三千六百歩）今無ニ此名一、當下以ニ六歩一爲中一代上、稱ニ十代一者二畝也、五十代者一段也、五百代者一町也」ト、コレヲ駁シテ三十六歩ヲ一畝トスルコトハ、古ニナキコトナリト分田備考ニ云ヘリ、然レドモ朽木文書ニ見エタルモノ、前ニ云ヘルガ如シ、右ノ如ク諸說アレド一定セズ、正木文書應永中ノ物ニ、岩松方公田四十八町廿五代ナド云フ多ク見エタレバ、其比マデハ行ハレシモノト見エタリ、輪軒小錄ニ、播州宍粟邊山ヨセノ村ニハ、今ノ一町一反ト云フツモリナク、一代ト有コト有テ、廣狹同ジカラズト云トアリ、恐ラクハ古ノ形ノ遺リシモノナラン、（玉石雜抄引ニ赤島ニ曰、一代（七坪一尺二寸也）、二代（十四坪二尺四寸）三代（二十一坪三尺六寸）四代（二十八坪四尺八寸）、五代（三十六坪一畝也）六代（四十三坪一尺二寸一畝七歩余也）、七代（五十坪二尺四寸一畝十四歩余）、八代（五十七坪三尺六寸一畝二十一歩余）九代（六十四坪四尺八寸一畝二十八歩余）十代（七十二坪三畝也）二十代（百四十四坪四畝也）、三十代（二百十六坪六畝也）、四十代（二百八十八歩八畝也）五十代（二百六十歩一段也））

檢地

檢地ノ事、日本紀孝德天皇大化元年、詔ニ國司等一曰、「方今始將レ修ニ萬國一、凡國家所レ有之公民、大小所

レ領人衆、汝等之レ任、皆作二戸籍一、及校二田畝一、其國池水陸之利、與二百姓一俱」ト見エ、又「於二倭國六縣一、被レ遣二使者一、宜下造二戸籍一、幷校中田畝上」トアリ、注ニ、「謂レ檢二覈墾田頃畝、及民戸口年紀一」ト見エ、然ラバコノ時ヨリアリシコト成ベシ、其後アリシコトヲ聞ズ、太田文ナド云モ、其國々ヨリ書出セシモノナラン歟、豐臣秀吉ニ至リテコソ、天下ノ田皆檢地アリシカバ、毀譽ノ言モ少ナカラズ、其譽ル者ハ、秀吉事記曰、「天正十三年、此先數十ヶ國遂ニ檢地、昔之所務帳過二一倍一、當年亦踏二分田地一、土民百姓不レ接レ私、又如レ不レ及二飢寒一、勘二辨之一以二五畿七道圖帳一、作二一枚鏡一照二覽之一、忝成務天皇六年、始分二國界一、其後聖武朝行基菩薩、以二三十餘年之勞一定二田地之方境一、爾來雖レ有二增減一、無レ改レ之者一、今也殿下所作、非盤如レ盛レ目、自他無二入組一、限レ繩打レ之、故國無二堺目之相論一、民無二甲乙訴訟一、於二諸國之寺社領一者、尋二佛神之由緒一、可レ用者用レ之、可レ捨者捨レ之、然五山十刹會下叢林、其外靈地名山者、修二理伽藍一遺二舊規一者也」トイヘリ、毀ル者ハ、太閤記曰、此君ハ日本之賊鬼也、檢地ヲシ侍リテ萬人ヲ惱シ、兆民ヲセタゲシボリ取テ、其身ノ榮耀ヲ盡セリナド云ヘリ、其外ニモ見エタリ、此事異國マデモ聞エテ、兩朝平攘錄ニ、秀吉ノ事ヲ記シテ、「卽將二田地一、丈量起レ稅」ト見エタリ、コノ後檢地ノコト多クアリ、管見ノ及ブ所左ニアグ

天文繩　若狹守護代記曰、天文廿二年、將軍義輝公國々ノ守護人ニ被二仰付一、國々ノ所領ヲ糺シ、日記ヲ以可二言上一由ヲ仰下サル、仍テ國々知行ノ地自領他領トナリ一國切ニ記ス、日本國中知行高寄、

高木光貴・上野晴時兩人命ヲ承テ諸國ノ帳請取、若州三郡八萬五千三百十石餘、日本惣石高千八百六十九萬七千二百四十二石、右ノ外島々多シ、年貢等ヲ不レ納ニ依テ不レ知、將軍家ヨリ國々ニ檢使シ改レ之玉フ、天文繩ト土民ノ云ハ、此時ノ事ナリ（按ニ、或曰、此事佐野氏文書ニモアリ）

筑前續風土記曰、天文十二年（疑ラクハ二十ノ二ヲ脱ス）日本國中毎國知行高ヲ記シ、其簿ヲ將軍家ニ献ズ、是ヲ民俗ニハ天文ノ繩ト云、筑前國三十二萬五千六百九十石ト記セリ

按ニ、此時足利氏ノ號令天下ニ行ハレズ、此事アルベシトモオモハレズ、疑シキコトナリ、秀吉事記ハ、由己當時ニアリテ記ス所ナルニ、天文ニ其事アランニハ、四十年ニ過ズ、コレヲ云ハザルモ不審ナリ、サレド秀吉以前ニモ、其事ハアリシヲ、取用キテ天下ニ行ハレシモノナルベシ

大和　多聞院日記曰、天正十五年八月朔日、去年檢知ニ無禮ヲ仕タル曲事トテ、國中庄屋衆卅七人籠者了

和泉　淺野考譜曰、泉州ノ檢地ハ、秀吉自身被二相正一處、一郷ノ土民悉ク出不審ヲナス、依レ之長政公ニ命ジテ再ビ改メシムルニ、僅ナル鄕中ニテ三千石改出シタリトイヘドモ、土民正直ノ道理ヲ感ジテ、賦斂ノ倍事ヲイトハズ

伊勢　木造記曰、文祿三年御撿地ノ時、伊勢ハ朽木河内守・岡本下野守・一柳右近・新庄東國・一柳監物・服部釆女・羽柴下總守七組ニテ撿地シタマヒケル

武家閑談曰、稻葉藏人通義（藩翰譜作二通道一）勢州多氣郡岩手城二萬千三百五十石（作二萬六百五十七石一）ヲ領シケルガ、文祿三年ニ撿地有テ、二萬五千七百石トナル

陽復記曰、秀吉公ノ神德モ重ジタマハズ、神郡ヲモ撿地シタマヒシカバ、度會郡サヘ半バ他領トナリヌ

編年集成曰、文祿四年乙未六月、秀吉諸國ノ田畠悉ク撿地シ、餘分ノ賦稅ヲ取公セラルベキ旨命アリ、勢州ヲ撿地シケルガ、先達テ兩大神宮ノ御神領ヲ悉ク勘落セラル處ニ、剩ヘ相殘ル宮川ノ內四十ケ村ヲモ撿地ヲ遂ントス、尼孝藏主ガ膝ヲ枕トシ、秀吉睡ラセラル、所ニ、神慮殊ニ憤ラセ玉ヒテ、撿地スベクンバ命ヲ斷ントノ靈夢ヲ蒙リ、眠覺テ後徧身汗水ニナリテ驚キ、急ニ羽書ヲ勢州ニ飛セ、其コトヲ止ラル、是ヲ以テ彼四十ケ村ハ、後世ニ至テ穀高ノ沙汰ナシ、蓋本朝諸國一統ニ撿地ト云コトハ、往古ヨリ曾テナシ、文祿四年ノ撿地高ト稱スルハ、此時改メ出ス所ナリ

勢陽雜記曰、秀吉撿地高五十九萬六千三百三十石六斗八升八合也、大神宮領ハ代々改ザル例ニマカセノゾキ玉ヒヌル

尾張　太閤記曰、秀次公天正十七年（秀按ニ、十九年ノ訛カ）撿地仰付ラル、尾州幷西三州北伊勢ノ內ニテハ、萬石減シカ共露悔玉ハズ、欲心ニ溺レテ天下ノ法ヲミタラン君ニハナカリキ

創業記曰、慶長十四年正月廿三日、大御所右兵衛主淸須へ御着、去年秋被レ當レ竿時、高六萬石減ジ

ケル分ヲ割合セ、喩バ六百石ガ千石ニ成ル按ニ、千石ガ六百石ニ成ルニ非ズヤ

參河　編年集成曰、天正十七年、神君參・遠・駿・甲・信五州ノ田畠經界廣狹ヲ糺サル

常陸　天正軍記曰、太閤御撿地常陸國五十四萬石、事蹟雜纂ニ引リ秀按ニ、今民間ニ文祿三年ノ撿地帳ヲ藏スルモノアリ、石田治部少輔奉行藤林三右衛門トアリ、又山田勘十郎トモアリ、田政考證ニモ云ヘリ、又木葉下村ニ慶長三年牛丸兵左衛門撿地帳アリ、コレハ佐竹家臣ナリ

當代年錄曰、慶長七年八月、佐竹領撿地アリ、知行高ヲ改繩ヲ入ベキ由仰付ラル、御代官奉行樂帝州ヘ打入、此國古來ヨリ久敷繩打ナシ、奉行ハ內藤修理亮・島田次兵衛・長谷川七左衛門・伊奈熊藏仰付ラル、熊藏內・修理內ニ功者アリテ、神社・佛閣・山林・古跡悉打ツメタルニヨリ、士民ナンギ中計ナシ、熊藏目代簃善兵衛殊ニ酷吏ニテ、少シモユルミナシ、コレニヨリ入水スル僧モアリ、又佛殿ニ火ヲカケヤキハラフモアリ、善政ニアラズト人皆申ケリ

那須記曰、佐竹モ常陸ヲ召上ラレ秋田ヘ遣サレケリ、時ニ慶長七年壬寅七月ノ事ナリ、家康公右ノ所領御撿地アルベキトテ、長谷川七左衛門・伊奈備前守・島田治兵衛・內藤修理四人ニ撿地仰付ラル、常陸・下總・陸奥國合テ二百二十一萬石トゾ記サレケル

增井正宗寺所藏ノ古書ニ、義宣水戸居城領地之高ト云ヲ載テ、米ニシテ五十萬貳百卅一石三斗二升トアリ、次ニ慶長九年家康御繩之時七十五萬三千六百石、常陸十一郡之高

水戸領、寛永十八年ノ撿地アリ

美濃　創業記曰、慶長十四年七月下旬ヨリ美濃國有ニ撿地一

飛驒　飛州志曰、金森氏時三萬八千石、上山ニ移ルニ及デ、大垣城主戸田釆女正氏定ニ命ジ、元祿七年田畑經界ヲ正シ、戸籍ヲ改メ四萬一百五石餘ト成レリ

下野　編年集成曰、慶長元年秀吉淺野長政ヲ以テ、宇都宮國綱ガ常陸・下野兩國ニ於テ、十八萬石ヲ書出セシ領分撿地セラレケルニ、三十萬石ニアマレリ、國綱ガ僭上押領ノツミヲ稱シ、備前國ヘ配流シテ領知收公セラル

宇都宮系圖曰、下野國本領昔繩七十五萬石、大帳記レ之、（慶長三年、國綱領知被ニ召上一時、淺野長政檢地記レ之）下野國者五十五萬石少餘、其内那須領、日光神領除レ之、常陸ノ内笠間・武茂・馬頭・小貫・深澤、上野内小栗、奥州若松領ノ内横川、下總内關宿、總而七十五萬石也

奥羽　小田原記・北條盛衰記・關八州古戰錄並曰、關白家奥州マデ御支配、黑川マデ御下向也、淺野彈正少弼・石田治部少輔・大谷刑部少輔三手ニ分、奥羽ノ撿地ヲ改メタマフ

武家閒談・編年集成並曰、天正十八年八月、奥羽兩國ノ監使三好中納言秀次也、則石田淺野奉行ニテ、利家卿奥州五十四郡ヲ改メテ撿地ヲトゲ玉フ、出羽國中十二郡ノ撿地景勝卿承テ、撿使ハ大谷刑部ナリ、景勝羽州ニ打入、或ハ城々ヲ請取人ハカキ上ヲ設テ籠置、段々田品ヲ改メ正シ玉フ、六

郷ニテ右谷衆繩ヲ入ルヽ、百姓共強ニ訴訟スルヲ、大谷衆權ツヨク、三人ハ斬伏セ、五人ヲ禁メケ
ル故一揆起リ、大谷衆五六十人打殺ス、上杉衆奮戰シテ、討捕首千五百餘級、翌年春マデ由利仙北
所々ノ經界ヲ糺ス、利家モ一揆ヲ鎭メ奧州ノ撿地ヲ沙汰ス

太閤記曰、今度御退治之國撿地爲レ可レ被ニ仰付一、秀吉公至ニ會津一有ニ御動座一テ、淺野彈正少弼・石田
治部少輔奉行トシテ出サレシガ、漸撿地モ出來ズ

淺野考譜曰、奧州退治ノ後、國ノ撿地ノ事アリ、其中ニ長政公撿地ニ預リシ所ハ、今ニ其恩ヲオモ
フト也、伊達領ニハ賦斂ノ過不及アル故ニ、長政公撿地ヲ究テ其秩ヲ改メラル、今ニ至リテ仙臺ハ
　此改ヲ要トス

越前　關原軍記曰、慶長三年、其後ニ長束ハ、越前ノ撿地仰付ラレ罷下ル

若狹　若狹守護代記曰、天文繩八萬五千三百十石餘、慶長十年巳、若州撿地斛高八萬五千百七十四石
　七斗八升二合九勺

土佐　土佐遺鑑曰、慶長ノ頃、一國悉ク地撿セシ地撿帳百餘卷アリ、其後籠宗丞ト云算者國中ノ點撿
麁末ナリ、私ニ仰付ラルベシ、一萬石ノ地ヨリ千石ヅツ打出スベシトテ、先己ガ住居ノ邊ヨリ始メ
　シニ、近邊ノ農民コレヲニクミ、宗丞ガ家ニ火ヲカケ燒殺セリ

周防・長門　蕃翰譜毛利譜曰、寛永ノ初、秀元マヅ周防長門ノ地ヲ丈量ス、ハジメ兩國ノ租入三十七萬

斛ト聞エシヲ、今代世ノ位ヲ以テ計ルニ、凡七十八萬斛ヲ得タリ

筑前　筑前續風土記曰、和名抄、筑前國田一萬八千五百餘町、延喜式・和名抄ニ、筑前國正税公廨各二十萬束、合四十萬束ニ五升ノ米ヲ得レバ、現米二萬石也、天文繩三十三萬五千六百九十石、小早川秀秋領田畠町數二萬九千六百九十三町餘、田畠高三十萬八千四百六十一石、（怡土郡公領除之）福岡秋月直方、及怡土郡公領唐津領迄ニハ、田圃凡五萬町成ベシ、福岡領田畠高五十萬二百九十九石八斗八升餘、內畠高九萬三百十九石九斗四升餘ナリ、筑前大養院住持功傳、山野田圃ノコトヲ知リ、數量ノ才覺アリ、慶長ノ頃、長政公國中田圃ノ廣狹ヲ改メ計リ玉ヒシトキ、嘉摩穗波等ノ檢地ノ役人ニ功傳ヲ加ヘラル、秋月領ナドニ今ニ功傳竿ト云アリ

立齋舊聞記曰、慶長元年筑前ヲ始、九州悉檢地ヲ仰付ラレ、其年ノ正税ヲ悉皆御倉ニ納置テ、檢地ノ後當ル年貢ヲ給主ニ渡シ、殘ル米ハ御用米タルベシト定ラル

肥後　佐々傳記曰、天正十五年六月、秀吉公肥後國ハ佐々成政ニ賜リヌ、成政ツクヅクト思案シケルハ、當國ハ數十ケ年守護トテモアラザレバ、國中ノ田畑ヲ檢地スベシトテ、生駒小千（チセン）ト云モノニ竿ヲ打セ、是マデハ何町何反トイヒシヲ、何石ト究メケル、土俗傳ヘテ生駒竿ト云フ、一反三百六十歩ナリ（秀按ニ、コレラニテ天文繩ト云モノ無キヿヲ知ルベシ）

薩・隅・日　戴恩記曰、太閤御所九州陣ニ、薩摩國ノ檢地ヲバ此幽法公ニ仰付ラル（按ニ、細川幽齋ナリ）

征韓録曰、文祿四年五月廿九日ニ、島津義弘ニ薩摩・大隅・日向三州ノ經界ヲ正シ置レタル、知行ノ目錄ヲ頂戴シテ歸國ノ暇ヲタマフ

延寶檢地　玉滴隱見曰、延寶五年三月、上方筋御領ノ分近國大名ニ被ニ仰付一、檢地ノ國々

一山城ヲバ、石川主殿頭・井伊玄蕃頭

一江州ヲバ、戸田左門

一和州ヲバ、本多中務少輔・松平九十郎

一丹波ヲバ、小出伊勢守

一河内ヲバ、本多兵部少輔、本多出雲守

一攝州ヲバ、青山大膳亮・永井市正・九鬼和泉守

一泉州ヲバ、岡部内膳正・石川主殿頭

一播州ヲバ、松平日向守・松平大和守・脇坂中務少輔

一小豆島ト直島ヲバ、木下淡路守

一備中ヲバ、水谷左京亮

右ノ檢地、當御代延寶八年ニ、何ノ國ニモ不レ殘返シ被レ下候ト也

一延寶五年三月ヨリ、御領ノ分不レ殘檢地被ニ仰付一也、但是虛說ニテ、和州一國計御免ト云々

一伊勢ノ神詫云々（檢地ニテ天下亂ンヨシチ云ヘリ）

玉露叢曰、延寶七年正月十四日、松平九十郎丹波筋檢地仰付ラルニ付、家臣共ニ白銀・時服等ヲ玉フ、二月十六日、本多出雲守ヘ大和筋檢地仰付ラルニ依テ、家臣共ヘ白銀・時服等ヲ玉フ

遠碧軒隨筆曰、田地ノ竿ハ六尺三寸ナリ、太閤ノ時ノ間竿ハ六尺二分、延寶五年ノハ六尺一分ナリ

租稅

租

〔上古ノ時ハイカヾアリシヤ不レ知、後ニ唐ノ制ニ倣ヒ租庸調ヲ用キタマフ、租ハ田賦ナリ、庸ハ口賦ナリ、調ハ戸賦ナリ

日本紀孝德天皇大化二年詔、「凡田長三十步・廣十二步爲レ段、十段爲レ町、段租稻二束二把、町租稻二十束」、田令モコレニ同ジ、義解曰、「謂ニ田賦一爲レ租也、謂段地獲ニ稻五十束一、束稻舂得ニ米五升一也、即於レ町者、須レ得ニ五百束一也」ト見エタリ、制度通曰、然ラバ二十五分ノ一ヲ稅シテ少シオモシ、然ルニ日本紀白雉三年ノ註ニハ、「段租稻一束半、町租稻十五束」ト見エタリ、是ハ續日本紀「文武天皇慶雲三年九月、遣ニ使七道一、始定ニ租法一、町十五束」ト見エタルモノニテ、後人ノ註セシモノナルベシ、制度通曰、コレ三十ニシテ一ヲ取ヨリモ輕シ、按ニ、古ヘノ一段ハ三百六十步ナレバ、今ノ一段二畝ナリ、コノ取實(トリミ)米二石五斗アルトキハ、一坪ヨリ米六合九勺四才ヲ得ベシ、水戸ノ田ニテハ耕作ニ念ヲ入タルニアラ

ザレバ、如レ此ハカタシ、三百六十歩ヲ水戸領ノ上田十三ノ盛ニシテ高一石五斗六升ナリ、此租一斗一升納ルトキハ、今ノ一ツ取ニモアタラズ、七分五厘一糸ホドナリ、如レ此租薄キコト故、皆力田シテ取實モ多カリシト知ラレタリ、況ヤ文武天皇ノ減ジタマヒシ後ハマス〳〵輕ク、五分九厘餘ノ取ナリ、今高一石五斗六升ノ地、今ノ如ク米二石五斗ヲ得レバ、籾ニシテ七俵（四斗二升入）一斗八升ナリ、此租四ツ取ニシテ米六斗二升四合、籾ニシテ一石二斗四升八合、水戸ノ延米・口米ヲ加フルトキハ、籾三俵一斗六升九合ナリ、今ハ四公六民ホドノ見アテナリ

庸

日本紀孝德天皇大化二年詔、「一戸庸布一丈二尺、庸米五斗、」賦役令曰、「凡正丁歳役ニ十日一、若須レ收ニ庸者布二丈六尺一、一日二尺六寸、須ニ留使一者滿ニ三十日一、租調倶免、役日少者、計ニ見役日一折免、通ニ正役一並不レ得レ過ニ四十日一、次丁二人、同ニ一正丁一」制度通曰、右ノワケハ年二十一ヨリ六十マデヲ正丁トシテ、一年ニ夫役十日使トシテ、役ニ使ハザレバ布ヲ取ルヲ庸布ト云フ、一日ニ二尺六寸、十日ニ二丈六尺一端ト取ナリ、又十日正役ノ外、加役三十日ニ滿ルトキハ、租幷ニ調トモニ免ズ、三十日ミタザレバ、一人前ノ租調ヲ三十ニワケ、其一分ヲ一日トシテ、加役ノ日數ヲ算用シテ是ヲユルス、所謂折免ナリ、正役加役通ジテ四十日ニ過ズ、次丁ハ六十以上ノ者又ハ病人ニテ、二人合セテ正丁一人ノ役ヲスルナリ、然ルニ「文武天皇慶雲三年、准ニ今正丁一歳役庸布二丈六尺、當下欲ニ輕ニ歳役之庸一、息中

人民之乏、並宜減半」トアリ、コノトキ二丈六尺ヲ半分ニセラルヽト見エタリ、日數ノコトハ令ニ替ルコトモナカリシト見エタリ

調

日本紀孝德天皇大化二年詔、「罷舊賦役、而行田之調、凡絹絁絲緜、並隨鄉土所出、田一町絹一丈、四町成疋、長四丈、廣二尺半、絁二丈、二町成疋、長廣同絹、布四丈、長同絹絁、一町成端、別收戶別之調、一戶皆布一丈二尺、凡調副物鹽贄、亦隨鄉土所出」トアリ、コノトキハ田ヨリモ調ヲ收メラレシナリ、其後改メラレシト見エタリ、賦役令曰、「凡調絹絁絲綿布、並隨鄉土所出、正丁一人、絹絁八尺五寸、六丁成疋、長五丈一尺、廣二尺二寸、美濃絁六尺五寸、八丁成疋、長五丈二尺、廣同絹絁、絲八兩、綿一斤、布二丈六尺、並二丁成絇屯端、端長五丈二尺、廣二尺四寸、望陀布四丁成端、長五丈二尺、廣二尺八寸、若輸雜物者、鐵十斤、鍬三口」ナドトアリテ、其外種々ノモノヲ、絹絁等ノ代リニ納ムルナリ、又調ノ副物ト云モアリ、コレモ「正丁一人紫三兩・紅三兩」ナドアリテ、其外種々ノ物ヲ上ルナリ、コレモ「次丁二人、中男四人、各同一正丁」ト見エタリ、又コレヲ出サヌモアリ、戶令ニ、「爲不課戶、不課謂皇親及八位以上、男年十六以下、幷蔭子・耆・癈疾・篤疾・妻・妾・女・家人・奴婢」トアリ、皆唐ノ法ヲ模セラルトイヘドモ、唐ヨリハコトノ外簡易ニシテ事輕シ、古ノ盛ナリシ時、上下相安ジテ無爲ノ治ヲ樂ムユヘンナリト、制度通ニモ云ヘリ

制度通曰、唐ノ租庸調ト云ハ、古ノ布縷之征、力役之征、粟米之征ト云フ三品ニ過ズ、名ハ替レドモ同ジキワケ也、唐書食貨志ニハ、「授レ田者、歳輸ニ粟二斛稻三斛一、謂ニ之租一」トアリ、又云、「歳輸ニ絹二疋一、布加ニ五之一一、非ニ蠶郷一則輸ニ銀十四兩一、謂ニ之調一」トアリ、調ト云ハ、軍役ニ士卒ヲトリ立ルヨリ云、杜氏通典云、「夫調者、猶存下古井田調ニ發兵車一名上耳、此豈直斂ニ人之財一者乎、」是ニテ調ノ名義シルベシ、陸宣公奏議云、「租庸調之法、祖宗本ニ前哲之規模一、考ニ歷代之利害一、有レ田則有レ租、有レ家則有レ調、有レ身則有レ庸、法制均一、一丁不レ困而上用足」トアリ

唐鑑曰、高祖武德七年、初定ニ均田租庸調法一、丁中之民、給ニ田一頃一、篤疾減ニ什之六一、寡妻妾減レ七、皆以ニ什之二一爲ニ世業一、八爲ニ口分一、丁歳入ニ租粟二石一、調隨ニ土地所一レ宜、綾絹絁布、歳役二旬不レ役、則收ニ其傭一日三尺、有レ事而加レ役者、旬有五日免ニ其調一、三旬租調俱免、唐食貨志曰、天寶以來、財利之說興、聚斂之臣進、蓋口分世業之田、壞而爲ニ兼幷一、租庸之法、壞爲ニ兩稅一（歷史綱鑑ニ見エタルモコレニ同ジ）

地子

田令ノ義解曰、「公田一年賣、春時取レ直者爲レ賃也、與レ人令レ佃、至レ秋輸レ稻者爲レ租、即今所謂地子者是」トアリ、今ノ世ニ入作田ト云モノ、類ナリ

主稅式ニ、「凡公田獲レ稻、上田五百束、中田四百束、下田三百束、下々田一百五十束、地子各依ニ田品一、令レ輸ニ五分之一一、若惣ニ計國內一、不レ滿ニ十分之九一者、勘出令レ塡、但不レ堪ニ佃田一、聽レ除ニ十分之二一、其

租一段穀一斗五升、町別一石五斗、皆令ニ營人輸一レ之

弘仁式曰、「上田一段地子十束、中田一段八束、下田一段六束、下々田一段三束、」拾芥抄曰、「租地子雖レ出ニ一流一、格式之時、租者數少、地子數多」ト云々、地子ト租ト各別ナリト、制度通ニ云ヘリ、按ニ、地子ハ調庸ナケレバ、租ヨリ重キト見エタリ、今ノ田租ハ皆コノ地子ヨリ來リシナリ

太閤記ニ、天正十六年、京中銀地子五千五百三十兩餘、可レ爲ニ禁中御領所一、米地子八百石之內、三百石院御所、五百石六宮關白領ニ寄ラルヽヨシ見エタリ、是ハ京町宅地ノ稅ヲ云ヘルナリ

制度通曰、唐書食貨志云、貞觀十一年、以ニ職田一侵ニ漁百姓一、詔給ニ逃還貧戶一、視ニ職田多少一、每畝給ニ粟二升一、謂ニ之地子一、是歲以ニ水旱一復罷レ之、名物六帖曰、按、當時地子之名、爲ニ俸給之稱一、與下今以ニ地租一爲中地子上異矣

租稅

令義解曰、田賦爲レ租也、又曰（神祇）謂ニ租稅一者、並是田賦、唯新輸曰レ租、經貯曰レ稅也

三禮義疏、（禮玉藻）馬晞孟曰、周官司書言、賦而終レ之、以ニ凡稅斂一、掌ニ交言ニ九稅一、而餘官言ニ九賦一、司徒言レ征、而繼レ之以レ賦、載師言レ賦、而繼レ之以レ稅、則稅者以レ地取レ之也、征者以レ正取レ之也、斂則收而聚レ之、賦則取而布レ之、租則取レ之、不レ可ニ以悉一、稅者取レ之以レ道、征者取レ之以レ義、斂者取之事、賦者取之法、租者取之戒、其言不レ同、相備故也

周禮、司稼巡レ野觀レ稼、以二年之上下一出二斂法一、註曰、豐年從レ正、凶荒則損、若三今十傷二二三一、實除二減半一、疏曰、年雖三豐與二中平一一、皆從二正法一、十一而稅レ之、凶荒年穀不レ熟、則減二于十一一而稅レ之、十傷二二三一者、十分之內、傷二二分三分一、餘有二七分八分一、謂就二七分八分中一爲二實在一、仍減去レ半、不レ稅二於半內一、所レ優二饒民一可也

貢調

制度通曰、國々ノ貢物ヲスグニ調ノ内ヘ入レテ、租庸調ノ外ニ別ニ貢ノ名ナシ、雜物・鐵・鹽・鰒・堅魚等ノ類ヲ出セバ、調ノ綿布ハユルサルト見エタリ、又調ノ副物紫・茜・木綿等ヲ出ス、品々アルコトハ令ニ見エタリ

貢禹正義曰、九州之土、物產各異、任二其土地所一レ有、以定二貢賦之差一、既任二其所一レ有、亦因二其肥瘠一、多少不レ同、制爲二差品一、鄭玄云、任レ土、謂レ定二其肥磽之所一レ生、是言下用二肥瘠多少一爲上レ差也、賦者自レ上稅レ下之名、謂二治レ田出一レ穀、故經定二其差等一、謂二之厥賦一、貢者從レ下獻レ上之稱、謂下以二所レ出之穀一、市中其土地所レ生異物、獻上二其所一レ有、謂二之厥貢一、雖下以二所レ賦之物一爲上レ貢、用三賦物不二盡有一也、亦有下全不レ用二賦物一、直隨二地所一レ有、採取以爲レ貢者上、此之所レ貢、卽與二周禮太宰九貢一不レ殊、但周禮分レ之爲レ九耳、其賦與二周禮九賦一全異、彼賦謂二口率出一レ錢、不レ言レ作レ賦、而云レ作レ貢者、取二下貢レ上之義一也

貫納

貫納ノ起ルユヘヲ知ラズ、又何時ニ始ルヲ知ラズ、太平記ニ、相模守近國大莊八ヶ所靑砥左衛門ニ給ヒタリ、左衛門補任ヲ啓キ見テ、何事ニ三萬貫ニ及ブ大莊ヲ給リ候フヤラント云ヘルコトアリ、コノ相模守ハ北條時宗ナリ、サレド東鑑ニ、貫高ノコト見エズ、太平記ニ如レ此アレバ、時宗ノ時代ニ始マリ、京都將軍ノ時專ラ行ハレシト見エタリト田園類說ニ云ヘリ、サレドモコノ外ニハ太平記ニモ見エズ、鈐錄ニハ、大抵十貫ハ百石、百貫ハ千石ニ當レドモ、上中下ニヨリテ一定セズ、貫ト云ハ軍役ヲ田地ノ坪數ヘ掛テ割付シヨリ起リテ、六千坪ニテ軍役一疋ノ積リ、是ヲ一貫一疋ト云フトイヒ、暇積抄ニハ、或ハ云フ、今五十石ノ地ヲ十貫トツモル、又一說ニハ、千石ヲ百貫ト云トモイヘリ、北越軍談ニハ、二萬貫ハ今ノ二十萬石ト云ニ同ジト見エ、北條五代記ニハ、永樂五十貫百貫ト名付、田地ノ跡ハ今五千石一萬石アリト見エタリ、武家系圖相模入道平高時ノ條ニハ、田五段ヲ一貫ノ賦トス、相模鶴岡八幡ノ祝史大伴松亭ガ說ニハ、鎌倉永一文一坪、一町三貫ノ賦ナリ、土佐國幡多郡不破村八幡宮文祿中文狀ヲ考フルニ、田千步ヲ一貫トス、今ノ三段三畝十步ナリ、サレバ百貫ハ田十萬步、今ノ法ニシテ、三十三町三段三畝十步ニシテ、三百三十三石三斗三升三合ナリト云ヘリ、編年集成ニ、菅沼家傳ヲ引タルニハ、六百貫ヲ三千石ニ對當スト注セリ、和漢名數・夏山雜談ニハ、畿內近國八百貫ヲ千石ニ充、遠國ハ百貫ヲ八百石・七百石・六百石・五百石ニアテタル所モアリ、畿內近國ハ運送タヤス

キ故ニ八木ノ價賤シ、遠國ハ運送艱難ニシテ價ヤヽ貴シト云ヘリ、此外ニモ彼是云ヘルアリ、高倉胤明田政考ヲ著ハシテ曰、貫納何故錢ニ積リタルト思フニ、是段別ヲ基本トシ、一段ニ錢三百文、或ハ二百八十文ナド、土地ノ厚薄ニ從ヒ、毎段ニ數ヲ定メ、錢ニテ收納シタルナリ、常陸ハ大抵段ノ地ヨリ三百文迄ニテ、所ニヨリ甲乙アリ、町段ノ土地ニハ、厚薄ニヨリ收獲アリ、甲乙アリ、軍役ハ町數ニカヽリ、所務ニ多少アル費ヲ除ンタメニ、貫代ノ法ヲ立シナラント云ヘリ、此說是ニ近カケレド、太閤檢地及鈴錄ノ說ニヨリテ云ヘルナルベシ、秀思フニ、是ハ朝廷ノ政衰ヘ玉ヒシニ及ビ、天下ニ庄園ト云モノ多クナリ、京地ノ人々遠國ニ所領アリテ、其租ヲ收ンニハ運脚多クカヽリ、其地ノコトモ行屆カザルコトノミ多ケレバ、田令ニ見エタル公田隨ニ鄕土估價ニ賃租ストアルモノニ本ヅキナラヒ、又宋人ノ錢納アルヲ模シテ、今ノ相對定免ト云モノヽ如ク、土人ト相對代納ニ定メシモノナルベシ、青砥左衞門ニ賜リシモ、大莊八ケ所トアリシナリ、カヽリシユヱ國々ニ不同アリテ、定ラヌコトヽ知ルベシ、其法相對自然ニ出來タルモノヽ、終ニ世ノ習ハシトナリシモノニテ、公ヨリノ定メニハアラズ、

其證一二ヲ云ハヾ

常陸吉田藥王院文書ノ中ニ

應永十二年ノ文書ニ

仁治帳、一段別ニ籾一斗九升五合（穎錢百十五文）

此內籾一斗錢百文ハ上御物錢、籾九升五合十五文ハ政所・田所二人ノ給分

惣合一反別に三百文になさる

コレ仁治ノ定メヲ、此時改メテ三百文ノ相對納メニナリシナリ

檜垣兵庫家藏ノ文書ニ

相馬御厨雜掌請文案

下總國相馬御厨每年御年貢事

合貳拾貫文者

右當御厨二十七鄕半雜掌職事、遂ニ入部一徵ニ納神稅一、上分並色々萬雜公事物等備ニ進之一、以ニ每年九月中一、於ニ貳拾貫文一者慥可ニ運送仕一候、但此外夫賃者可ニ副進一候、次御年貢內每年貳貫百文者、別進分仁可レ被レ召候而、今度彼雜掌職云ニ千葉殿御口入一云ニ領家御免一、如レ元所レ令ニ拜任一也、此上者御年貢任ニ員數一、每年以ニ九月中一、必々慥可ニ送進一候（下略）應永廿六年己亥九月三日、雜掌佐久間式部入道沙彌妙景判

コレ伊勢ノ神領ノ打切定免ナルベシ、コレラノ類其古ヘモ如レ此ナルベシ、雜掌ト云ハ、其地ノヿスベテ引受ケ掌ル役人ト見エタリ、其他モ類推スベシ

正木文書ノ中ニ

新田庄江田郷内得河方日録

一四町五段　分錢拾貫三百文　又三郎
一壹町八段　分錢伍貫二百文　木部
一三段半　分錢壹貫五十文　太郎二郎入道
一壹　町　分錢二貫七百文　江田御坊
一五段此内半不作　分錢壹貫三百文　了實
一二段　分錢六百文　孫八入道
一二段六斗也不作　彦七
一五段此内四段半不作、一段開分錢二百文　又三郎入道
已上田數九町半、分錢二拾一貫三百五十文

同所畠分

一八段　分錢一貫六百文　木部
一三段　分錢六百文　六郎二郎入道
一八段　分錢一貫五百文　江田御坊
一一段　分錢一貫文　江田孫六

一四段　　分錢八百文　　江田六郎五郎

一一段　　分錢二百文　　彥七

已上畠數三町二段、分錢六貫百五ノ訛ナラン十文ノ定

合田畠拾二町二段半分、錢都合二十七貫五百文定

明德五年甲戌八月二十七日　　國政花押

百姓ヨリノ納次第ハ如レ此、コレモ不同ニテ一定セザルモノト見ユ、今ノ入作畠ナド云モノ、如クナルベシ、サレドモ所ニヨリテ米麥ヲ納メタルモアリ、又米麥錢ト納メタルモノアルモノハ、コレ上ニ云ヘル相對モノユヘ、一統セザルナリ、亂レタル世ニハ、國々思ヒ〳〵ノ相對取納ニテアリシト知ルベシ、古ヘ軍功ヲ賞セラル、ナドニモ、誰ノ跡、何ノ庄・何ノ鄕ヲ賜フナドアリテ、何千何百貫文ヲ玉フナドアルハ見アタラズ、タマ〳〵神社寄附ノ地ニ、何ノ所ノ地何貫文トアル、文和永正ノ文書ニ見アタリシナリ、國々皆貫ヲ以テ稱スルコトニナリシハ遠カラヌコトヽ見エテ、天文天正頃ノ文書ニハ、何貫文ヲ玉フト云コト多ク見エタリ、又鈐錄以下ノ說ニ、皆貫納ハ軍役ノタメト云ヘルモ心得ガタシ、軍役ト云モノモ、元來租庸調ノ庸ニテ、身ニカヽリシモノニテ、田ニカヽルモノニハアラズ、故ニ後ノ世マデモ身ニカヽリテ、諸家ノ古文書ニ、何ノ事アレバ參陣可レ致ニ軍忠ニナド云ハ多クアレド、何貫ヨリ何人何疋ヲ出スベシトアルハ見アタラズ、今ノ世ノ如クスベテ田高ニカヽリ、百石何ホドト云コ

トニナリシハ、秀吉以來ノ事ト知ルベシ、今ノ形勢ヲ以テ古ヲハカルユヱニ、貫納モ軍役ノ爲ニセシモノト云フ說モ多クアルナリ、古ヘノ租庸調ハ、スベテ身ヲ本ニセシト云フニ心付ザルユヱトオモハル丶ナリ、猶知ル人ニ質スベシ、分田備考ニ、貫ハ錢納ヨリ出シ名目ニテ、軍役ノ積リニアラズト云ハ理リナリ、宋人ノ錢納ト云ヘルハ、書影曰「今民間輸レ官之物皆用レ銀、而猶謂ニ之錢糧一、蓋承ニ宋代之名一、當時上下皆用レ錢也

永錢

永高ノコト、田園類說ニ、貫高トハ別ニシテ、關東ニテ年貢辻ヲ永樂錢ニ積リテ、知行領知ナドニ此永高ヲ用ユ、今鎌倉ナドニ永高ヲ用キル所アリト云ヘリ、諸書コノ心得ナル多シ、然レドモコノ永高ハ彼永樂以前ヨリアルコトナル故ニ、其說ヲ得ザルモノハ、强テ通平永實ノ永ナリト云ヘリ、（笠澤筆麈）實ニ附會ノ說ナリ、秀藥王院文書ニ、穎錢トアルニ心付テ、穎ノ字ノ假借ナルベシトオモヒ、段々穿鑿セシニ、穎稻ト云フ延喜式ニ見エタレバ、イヨ〳〵コレニ決セル心地アリシナリ、其後暇積抄ヲ見ルニ、大伴忠男ガ相撲志料ニ、永高ノ永舊穎ナルベシ、古昔租法ニ、稻納・穎納ノ二種アリ、和名抄ニ、某國本稻幾束、雜稻幾束、某國本穎幾束、雜穎幾束」トアリテ、五畿七道ノ諸國相半セリ、蓋上古ハ政事寬裕ニシテ、稅則モ束ヲ以テセラレシガ、世務細密ニナリ行、初稻納ナリシヲ中葉稻穎相交、遂ニ稻ヲ廢シ、一般ニ穎收トナリ、秤ニ懸テ輕重ヲ樣シ歛ムル法ヲ立ラレタルヨリ、田地ノ高ヲ幾貫文ト云名目

ハ起リシナラン、夫木集ニ、正三位知家「民ノ戸ノ秋收スル稻斤(イナハカリ)、年アル御代ヲカケテ知ルラン、」又權僧正公朝「掛稻ノ斤ノ石ハ重クトモ、コトシハ民ノ憂アラジナ」ナドアリト見エタリ、秀按、分田備考ニ、古ヘ稻ノ束ハ斤目ヲ以テ云フコトニテ、三代實錄ニ「出羽國元慶二年、爲賊所燒損稻穀三十二萬五百一束六把八分六毫」ト見エタリ、拾芥抄ニ「十毫爲レ釐、十釐爲レ分、十分爲レ把、十把爲レ束」トアリ、是一把一匁ノ積リ也又嘗テ山崎美成ニ問ヒシニ、コレモ大伴ノ說ヲ是ナリトシテ、延喜式ノ祝詞祈年祭ニモ、「初穗(ハツホ)ハ、汗(チ)穗(ホ)乎(テ)千頴(カヒ)八百頴(カヒ)爾(ニ)奉(タテマツリ)置(オキ)氐」トアリ、江家次第ニ「本頴苅本謂ニ之稻、切穗謂ニ之頴一」コレナリ、シカレバ頴錢トイヘルハ、穀頴ニカヘテ納ル錢ヲイフ意ナルベシ、唐土ニテ稅錢ノコト也ト云ヘリ

今ノ永錢ハ一貫文ヲ金一兩ノ代リニ用ルナリ、コレハ慶長十三年ノ定メニ、永樂一貫文ハ鐚四貫文宛タルベシトアルユヱナリ、金何兩ト云ベキヲ永何貫ト云ヘルノミナリ、田園類說ニ、永高ト云ハ田畑ヲ永樂錢ニ積リテ貫ヲ用ヰ、今ノ根取ト云モノヽ如シ、ヨッテ檢地帳ニモ、大半小ト云アリ、上中下ノ位モアリテ、永高トテ別ニ檢地セシコトハナシ、地面ノ貫ト錢ノ貫ト紛レテ、一ト思フユヱ合點ユカズ、永高ハ今ノ反取ノ起リニテ、田一反ノ永何ホド、畑一反何ホドト、地面ノ位ニ從テ永盛ヲ付テ、都合何百何十貫文ト一村ノ永高ヲ極ムルナリ、永盛ハ土地ニ隨ヒ、一貫ノ地廣キモアリ、狹キモアリテ定數ナシ、是ヲ永別帳•永盛帳ナドト云フト見エタリ、秀按ニ、コレハ一貫ト云ハ、田地千坪ノコトヽアルニ從ヒシ說ナリ、分田備考ニモ、慶長十三年ノ令ヲ引テ予ガ說ニ同ジ

石高　昆陽漫錄曰、東齋隨筆ニ云、今按、斛十斗也、マタ十斗ヲ石ト云、顏書ノ說ナリ、石ヲ直ニ斛ノ音ニ讀コト何久ヨリ始ルト、此說ノ如ク延久ノ時、穀倉院ノ斛器ヲ作ラル、ヨリ始マルナラン、玉石雜抄引二赤島一曰、米穀ナド一石ト云ハ、石ノ字ハ秤目也「オモリ」ニ石ヲ用ニル故也、又一斛トイフハ、升ニテハカルヲ云也

針鋒ニハ、石高ニ定メタルハ浪人衆ヨリ出タリ、浪人衆本領ヲ放タレテ他國ニ仕フル者ニ、當分廩米ヲ與ヘタルヨリ起レリトイヒ、田園類説ニハ、文祿。慶長ノ頃ヨリ檢地改マリテ、地面ノ上中下ヲ以テ石數ヲ定メ、是ヲ高トシテ百石ハ直ニ籾百石ノ積ヲナリト云ヘリ、秀按ニ、右ノ說ノ如クナラントモオモハレズ、前ニ云ヘル如ク貫納ハ元來租制免金納ニ起リシモノナレバ、國ニヨリ所ニヨリ不同多キコトナリ、サレド物ノ直モ國所ニヨリ高下アルナランニハ、貫納ニテハコレヲ一定スベキヤウモナシ、豐臣秀吉天下ヲ一統セラレシニ及ビテ、軍役ニ不平ナカランヤウニ檢地シテ、田ヨリ生ズル籾ヲ以テ石盛ヲ定メラレシモノナルベシ、古ヘノ束納モ一段地獲レ稻五十束、束稻舂得ニ米五升一也トアレバ、一坪ヨリ米六合九勺四才ヲ得ベシ、コレヲ見アテニシテ租ヲモ定メラレシナリ、又石盛モ一坪ノ籾一升アレバ、米ニシテ五合アリ、一反ニテ一石五斗ナレバ、十五ノ盛ニシテ卽高一石五斗ナリ、其中ニテ取米何ホドト定メタルナレバ、束納ノ見アテニカハルコトモナキナリ、サテ此石ト云モ秀吉ノ創制ニハアラズ、其以前ヨリアルコトナルベシ、古文書ニ間々見エタリ、其一ヲ云ンニハ

森本氏文書文明十七年、攝津州森本森饗庭田畠納下帳ニ

公田三段半、本役一石一升八合五勺反別二斗五升一合

一色三段　本役一石九斗五升反別六斗五升アテ

佃四段　本役二石反別五斗代（下略ス）

ナド見エタリ、國々ニカヽル類アリシニヨリ、考案アリテ石高ヲ定メラレシモノナルベキカ、コノ文書ニ反別トアルハ、毎段何ホドト云コトハアラズ、本役ノ外ニ反別ト云モノ如レ此出ルト云コトナリ、コレハ源頼朝不レ論ニ權門庄公一、段別兵粮米五升ヲ課セシヨリ始マリ、後ニハ段別ト云モノ別納スルモノノ如クナリシト見エテ、古文書ニ多クアリ、今本納ノ外ニ口米ナド出ルガ如クナルベシ

信長記ニ、「天正九年、若州逸見駿河病死、彼知行八千石、此内新知分武藤上野跡・粟屋右京亮跡、三千石武田孫八郎殿ヘ被レ進」トアリ、サラバ信長ノ時既ニ石高アリシト見エタリ、又後人ノ八千石三千石ニアタル地ナレバ、如レ此書タルコトニモアランカトモ疑ヒシニ、田政考證ニ、伊藤氏藏古文書雜纂ヲ引テ左ノ文書アリ

坂田郡二萬五千石ハ爲ニ御臺所入一、如ニ先々一有ニ手長一可レ有ニ運上一、永不レ可レ有ニ相違一之狀如レ件

六月十七日

柴田修理亮　勝家

惟任五郎左衛門　長家

羽柴筑前守　秀吉

池田勝三郎　孫　興

堀　久太郎殿

（織田家士久徳左近兵衛織田信長判物、就ニ今度忠節之儀ハ多賀庄石灰庄敏満寺領諸入免、各以三ケ所都合參千石令ニ支配一候云々、末ニ元亀元六月廿六日一トアリ、天正十一年秀吉ノ判物モコレニ同ジ）

如此アリト云フ、コレ米二萬五千石ト云コトニハアラズ、高二萬五千石ノコトナルベシ、此頃ヨリ間間石高ヲ稱セシモノアリシナルベシ、我常陸ハ文祿三年ノ檢地以前ハ其事ナキト見エ、文祿四年ノ文書ヨリシテ何百何十石ナド云フハ見エタリ、コノ邊ニハ天文繩ト云フモノナキコトモ明ラカナリ

石盛　斗代　分米　分錢

田園類說曰、石盛ハ地面ノ位ヲ定メ、年貢ノ石數ヲ盛付ルコトナリ、斗代・分米・石盛共ニ同體ノ異名ナリ

又曰、地方算法前集ニ、石盛トハ、一間四方ノ稻ヲ苅テ、籾一升アレバ米ニシテ五合アリ、一畝ニテハ一斗五升、一反ニテ一石五斗ノ分米ヲ十五ノ盛ト定メタルナリ、一町ニテ十五石ナリ、盛ヲ上田ニテ立ルモアリ、中田ニテ立ルモアリ、位ゴトニ二ツノ違ナリト云ヘリ、是廻リ遠キ說ナリ、一町十五石ノ有米ノ盛トイハヾ、一反ニ一ツ五分トカ、一ツ半トカ云ベキモノナレバ、先算用アハズ、其上一

町ニテ十五石ノ割也ト云ヘバ、斷書ヲオカネバ聞エズ、元來何ノ入クミタルコトモナク、一斗ヲ一トスル故ニ、一石ヲ十トシタルモノナリ。又石盛ト云ハ、地面ニ石數ヲ盛付オクト云コト也、斗代トハ、地何斗ニ當ルト云コトナリ、秀按ニ、此駁アタラザルカ、坪刈ヨリ出ザレバ、何レニモ標準トスベキモノナシ、予ハ廻リ遠シト云ヘル前說ヲ却テ是ナリトス。勸農固本錄ノ說モコレニ同ジ

又按ニ、斗代ト云モ古キコトナリ、鹿島文書元德二年大賀村檢注取帳副日記ノ中ニ、斗代ト云ハ反ニ一斗、是ハ宮方ヘ六斗五合、當方ヘ六升五合囘分ニ納也トアリ、コレハ取米ヲ云フガゴトシ、今ノ斗代ニ異ナリ

又曰、石盛ヲ定ムル事一段ノ內同位ニシテ、一升二合ノ立毛モアリ、又一升或ハ九合八合出來ルモアリ、三段ヲ平均、其中ヲ以テ其位々ノ石盛ヲ仕出シテ無ニ甲乙一算法、左ノ通

上田一反分　　壹升毛

此籾三石、此米一石五斗（五合摺ノ積リ）內（七斗五升公納、七斗五升百姓作德）

是ヲ五公五民ノ法ト云フ、公納七斗五升十五盛ノ根取米トスル也、今世上地方ニ七五ノ法ト云フハ是ナリ

右ハ高五ツ取ノ厘取ニ當ルナリ、都テ五ツヲ以テ地方ノ元トス、サレド土地ノ善惡高下ニ隨ヒ、石盛ノ仕出品々アリ、四公六民ニ分ルトキハ、十五盛根取六斗也、又一反一升毛ノ籾ヲ干減二割引二石四

斗ト成、米ニシテ一石二斗也、是十二盛也、土地ニ應ジ色々勘辨執行アリ

畑方石盛、田方ニ六分差成ベシ、但石盛二ツ下リト云フ、中田ノ石盛上畑ニ當ルナリ、夫ヨリ二ツ下リニシテ畑石盛ヲ極ルナリ、然レドモ直ニ中田ノ石盛ヲ上畑ニ用キルハ誤ナリ、依テカラ高ト云フ

秀按ニ、此說是ナリ、中田ノ石盛ヲ用キルト云フハ、大國ノ積リナリ、土地ニヨリ勘辨アルベキコト勿論ナリ、水戸上畑ハ中田ニ一分下リナリ

又曰、分米ト云コトハ、上中下田畑夫々ノ分ノ高ト云心ニテ、分米ト認ムルナリ、古ヘ籾納ト云コトヲ辨ヘズ、米取トオモフユヘ、田分ノ米・畑分ノ米ト見タルナリ、分米トハ、米ニ分テト云コトナリ、村高ハ籾辻ナルヲ、米ニ分テバ何石何斗有ト云義ナリ

高倉胤明田政考曰、貫代ノトキ、タトヘバ段ノ地ヨリ錢三百文、或ハ二百八十文ヲ出スヲ、ブン錢ト唱ヘタリ、今分米ト稱スルモ、貫代ノ時ノ遺言ト知ルベシ、秀按ニ、二說予ハ信ゼズ、殊ニ類說ハ鑿テリ、予思フニ、分米ト云フハ、上分米ト云フハ、上ヘタテマツル分ノ米ト云コト、得分米ト云ハ、自分ニ得ル米ト云コトナリ、猶今取米ト云フガ如シ、東鑑建久四年ニ「伊勢國三日平氏跡新補地頭等募ニ武威一停ニ止太神宮御上分米一之由、本宮訴ニ申之一、彼地者當國散在田畠也、平氏謀叛領ニ地下一、於ニ上分米一者、備ニ進本宮一之條所見分明之間云々」ト見エタリ、又檜垣兵庫家文書ニ、「應永廿六年、新御寄進田地三反、分米九斗」又永正五年ニ、「岩田御園當年上分米之間事」ト見エタリ、得分ト云ハ、東鑑脫

漏ニ、「地頭得分之內」ト云文見エタリ、又得分錢何十貫ナド云藥王院文書等ニ多クアリ、一反ブンヨリ得ル錢ト云コトニハアラズ、上分得分ノ分ナリ、コレラヨリ轉ジテ、今ハ高ノコトヲ分米ト云ヘルナルベシ

藥王院文書ノ中ニ

九郞之頒名之內

吉見五郞賴房分

一公田貳間田、三丁代分拾五貫文
一名貳間田、貳丁代分拾貫文
一浮免之田、五丁四反代分貳拾七貫文
一加沼之神田、一丁五反代分七貫五百文
一堂免、參反代分壹貫五百文

以上六拾壹貫文

中納言阿闍梨御分

一公田貳間田、三丁代分拾五貫文
一名壹間田、壹丁代分五貫文

一浮免田、七丁八反代分三拾九貫文

一下若宮御こく田、壹丁七反代分八貫五百文

一天免田、五反代分貳貫五百文

以上七拾貫文

右中納言。頼房兩人之分、此目錄之分たるべく候、若いつはりを申候はゞ、若宮八幡大菩薩山王七社之御ばつを、頼房まかりかふふり候べく候、謹言上

應永七年庚辰十月日　　頼房　花押

コノ文書ニテ、分ノ字ノ義モ、又代納ト云コトモ知ルベキナリ、コレモ不同アルハ相對ノ定メ故ナルベシ

取　厘附　反取

取ト云ハ、上ノ石盛ニ見エタル五ツ取。四ツ取ノ取ヲ云ナリ、鈐錄ニ、四ツ物成。三ツ物成ナド云フハ、元來百石ト云ハ籾百石ナリ、米ニシテ四十石有モアリ、三十石有モアリト云ヘルハ、名家ノ說ナレド訛ナリ

地方答問云、厘附トハ、取米ヲ割テ高ニ幾ツ何分何厘ト極ルユヘ、厘附ト云ナリ

勸農固本錄曰、厘取。反取トモニ春法ヨリ出ル、或ハ上田一反此石盛一石五斗ト成、是ヲ五分取ニシ

テ七斗五升ノ反取ナリ、四公六民ノ時ハ、一石五斗ニ四ヲカケ六斗ノ取ナリ、又厘取ノ時ハ、右反取米ヲ夫々盛ニテ割合、毛ゴトノ厘出ル、假令バ上田盛十五、五分取反七斗五升、（高ニ五ツ）四分取反六斗、（高ニ四ツ）厘取ノ仕方ニ位々ニ合付（ガフ）ヲ以テ平均取ヲ仕立、或ハ上田ノ内ニテ一升毛何町、九合毛何町、八合毛何町トシテ反取米ヲ盛ニテ割、毛付厘ニ成、此厘付ヲ分米ニカケテ毛毎ノ取米ヲ知ル、此取米ヲ上田ノ高ニテ割、上田ノ平均幾ツ何分何厘ト知ナリ

田園類說曰、東方ハ田方ハ米取、畑方ハ永取ノ定法ナリ、反取トハ、譬ヘバ上田一□七斗取、中田六斗取、下田五斗取ニテ一斗飛ナリ、高ニテハ二斗飛ニナルナリ、上畑一反永二百五十文、中永二百三十文、下二百十文ト二十文飛ナリ、上方ハ田畑トモニ米取ニテ、厘付取ト云フ、譬ヘバ上田一反ノ石盛十五ニテ、一反ノ高一石五斗五ツ取ハ七斗五升取ルナリ、中一反十三ノ盛ニテ、一石三斗五ツ取ニシテ六斗五升取ルナリ、下十一、一石一斗五ツ取五斗五升ナリ、右上方厘取、關東反取ニ分リシハ、上方ハ貫高ヨリ今ノ石高ニ成リ、關東ハ永積リヨリ石高ニ成シユヘナルベシ、貫高ハ軍役ニ起リ、地頭四分百姓六分、又ハ地頭三分一、百姓三分二ナドノ收納ノ法ヨリ今ノ石高ニナリ、籾納止テ米ニスルユヱ、前方ノ四分取五分取ニ立返リ厘取トナル、關東ノ永高ハ、元田モ畑モ永樂錢ニテ積リテ、田ハ直ニ籾ヲ取、畑ハ夫ヲ五石代ノ永ニテ取、米ニ直シテ二石五斗ト成、田籾畑永ノ反取トナリタルナリト

秀按ニ、此ノ說果シテ是ナルベシトモオモハレズ、恐ラクハ關東ハ薄土ユヱニ、上方ニ同ジカラヌコ

トナルベシ

詩ノ緇衣ノ正義ニ、采祿ノ事ヲ注シテ、一采謂ニ田邑采ニ取賦稅一、祿謂ニ賜レ之以ニ穀一トアリ、取ト云フモアルコトナリ

四公六民

上ノ取ノコトニ五公五民ト云モ見エタレド、四公六民ト云コト大抵當代ノ取箇ナリト見ユ、秀吉ノ時ハコレヨリ重カリシト見エテ、秀吉譜ニ、文祿四年法制之中ニ二天下賦稅三分一者地頭取レ之、三分一者耕民自取レ之一ト見エタリ、コレニテハ六公四民ナリ、當代ハコレヲ輕クシタマヒシナルベシ、既ニ關東御打入ノ時ニモ、スベテ北條ノ制ノマヽニテ、收納ヲ輕ク、仰フレシコトモ見エタリ、四公六民ナリト云ヘルハ

集義外書曰、今ノ制ハ四分六分ナリ、四分百姓、六分地頭取トイヘリ、是ハ上田水ヲ入ルレバ田トナリ、落セバ畑トナル、田麥ニ年貢ナキ故ナリ、中田ハ六分百姓、四分年貢トナル、下田ハ十ニシテ二ツバカリ年貢トナル

田園類說曰、按ニ上田十ノ內地頭六ツ、中田十ノ內地頭四ツ、下田十ノ內地頭二ツナレバ、合テ地頭十二、百姓十八ニ當ル故、地頭四分、百姓六分ノ割ナリ

地方答問曰、四分上納、六分作德ト定メショリ、御取箇ハ極ルナリ

鈐錄曰、中古ヨリ兵農分レ、地頭四分、百姓六分ニ租税ヲ取ル、然レドモ地頭四分ノ中、一分ハ朝家ノ租税ニシテ、此内ニテ國司ノ祿共外國用ヲ足ス

勸農固本錄曰、今ノ法ニ四公六民ノ、或ハ五公五民ノトテ、各別取箇强ケレドモ、其代リニハ軍役ヲツトムルコトナシ

按ニ、朝鮮申叔舟ガ海東諸國記ニ、我俗ノコトヲ記シテ「田賦取二三分之一一、無二佗徭役一」ト見エ、又「對馬島郡主各於二其境一、每年踏驗損實一收レ税、取二三分一一、又三二分其一一、輸二二于島主一、自用二其一一」ト見エタリ、異國マデモ聞エシコトナリ、又此趣ハ古文書ニモ間々アリ、大賀村檢注取帳副日記ニ、反ニ五斗四升也、此内四斗ヲ宮方ヘ沙汰ス、一斗四升當方ヘ納也トアルノ類ナリ

畠租

畠ニ租アルコトハ令ニモ見ヘズ、田園類說曰、地方答問ニ、上代ハ人少ニテ田方第一ニテ、畠ニハ雜穀野菜ナド少々作ル故、畠少ク野廣シ、故ニ無年貢ナリ、中古以來段々開キ、年貢ハ金納ニ永取下免ナリ、按ニ、畠方永取ノ始リ知レズ、上代ハ畑方無年貢ト云フ、往古ハ知ラズ、東鑑、養和二年四月、「可レ令三早停二止供僧禪宥在家作、幷自作麥畠一町地子一事」トアリ、コレヲ見レバ無キニハアラズ

秀按ニ、所レ引ノ東鑑ハ、治承六年八月五日ノ條ニ見エタリ、年月訛レリ、且ソレヨリモイト古クアルコトナリ、續日本紀養老三年詔、「給二天下民戶陸田一町以上・二十町以下一、輸二地子一段粟三升也」トア

リ、コノ以來地子アリテ、東鑑ノ頃マデコレニ據リシト見エタリ、野々宮定基卿ハ公廨ト云モノ、畑年貢ノコトナリト云ヘリ、何ニヨラレシヤ知ラズ、地方落穗集ニ、嵯峨天皇弘仁二年、菅淸公內麻呂空海ニ命ジテ、稅賦徭役等ノコトヲ制ス、此時ヨリ夏ノ麥ヲ以テ正稅ノ如クニ納メシム、是又民ノ衰弊ヲ起ス云々、所謂今ノ夏成也トアリ、何ニ據ルコトヲ知ラズ、恐ラクハ杜撰ノ說ナラン、予ハ信ゼザルナリ

制度通曰、唐ノ中葉代宗ニ至リ、宰相楊炎ガ計ニヨリ、租庸調ヲ改メテ兩稅ノ法トナル、兩稅トハ、夏ハ麥ヲ取リ、秋ハ米ヲ取ル、宋明モ此通ニテ夏稅秋糧ト云フ、又略シテ稅糧トモ云フ

淸俗記聞曰、麥ハ一畝ニ付一石五六斗ヨリ二石、或ハ二石三四斗マデ出ストナリ、サラバ今モ兩稅ナルベシ

畑取米金一兩ニ二石五斗代ニ定マリシコトハ、何ノ故ヲ知ラズ、或曰、是ハ假リ取米ト云フモノニテ、眞ノ米ニハアラズ、故ニ其價廉ナリ、關東土地薄キガユヱナリト、或曰、寬永・正保ノ頃米價廉ナルヲ、今ニ至ルマデ其マヽ因循シテ用ヰタルハ、有司ノ訛ナリト云ヘリ、其說孰レカ是ナルヤ、未ㇾ詳、田園類說ニハ、永高貫代ノ定法アリテ、タトヘバ關東田方一貫文ハ糲五石ユヱ、畑方ハ錢ニテ取ナリ、此時ハ糲納メナリ、後米納ニナリテ、今ハ米二石五斗ト云モノ、關東畑一統ノ通法トナレドモ、諸國貫代ノ內ノ一ツナリト云ヘリ

地方算法集、田畑永取モ反取米ノ仕出ニテ、上田ハ上田反取米ヲ、二石五斗代ノ永ニ仕タルモノナリ、是古來ノ定ナレドモ、當時ハ米高直ナレバ勘辨アルベキコトナリ、按ニ、畑永二石五斗代ト云ハ、關東畑方ノ通法ノミニアラズ、元來永一貫文ハ籾五石ノ高ヨリ始マリテ、今ハ知行渡リノ結ビノ定法トナル、米直段時々ノ高下ヲ以テ、容易ニ上ゲ下ゲハ成ガタシ、外ニ考ヘノ入ベキコトナリトイヘリ、

按ニ、地方一樣記曰、奥州白河會津長沼三石二斗替、仙臺五石替、福島七石替、出羽米澤六石替、下野宇都宮三石替

田政考證曰、寛永元年以前ハ水戸領五石代、二年丑ヨリ四石代、十四年丑ヨリ二石五斗代ニナル、當時ノ米價ニヨリ定メラレシコト明ラカナリ

秀按ニ、寛永・正保ノ廉價ニテ眞米ト見ルコト、續紀ノ地子粟三升ヨリ來リシナレバ、其理ハコレアルベケレド、關東薄地畑ノ益少シ、民ノ一息ヲ伸ブルモノハ、コノ廉價アルノミナレバ、タトヘ理アリトモ必高下スベカラズ、殊ニ田米ノ豐歉ニヨリ、價モ高下アルコトナレバ、其價ヲ以テ畑ヨリ收ムルモノマデ高下スルモ如何ナリ、其起リハ兎モアレ角モアレ、關東ノ通法動カスベカラズト心得タルコソ宜シキナリ

本石　納升　延米　斗立

編年集成曰、元和二年七月、年貢米當秋ヨリ三斗七升ヲ一俵ト定メ、口欠米トモニ一升ヅヽ加ヘ收納スベシ、錢納ハ百文ニ三文宛ノ口錢ヲトリ、御領私領共ニ相守リ收ムベキヨシ元老ヨリ觸促ス、田園類

說ニハ、コノ文ヲ見ザリシヤ、曰、關東納升三斗七升ハ本石三斗五升ナリ、計リ立テ三斗七升ナリ、イツノ頃ヨリカ、三斗五升ニ二升ヅツ餘米ヲ加ヘ、是ヲ土用ト欠名付ク、今ハ通法トナル、コノ餘米ヲ出目トモ唱ヘ、又計立ニシタルヲ延米トモ唱フ、或ハ上州ニ四斗六升ノ出目アリ、元糶スリヨリ起リテ納ムルコシ、四斗六升ノ出目ハ七合三勺搦ニ當ル、此類外ニアルベシト云ヘリ

秀按ニ、水戸ハコノ上州ノ類ト見エ、一斗ニ二升ノ延アリテ、十二ノ延ト云フ、三斗五升ヘ七升延ルユヘ、四斗二升ヲ一俵トスルナリ

或說ニハ、三十六歩ヲ三十歩ニチヾメ一畝トスルヲ以テ、十二ノ延アルナリ、三十六ヲ三ニテ除クトキハ十二ナリト云ヘリ、信ジガタキコトナリ

通鑑、漢隱帝時、三司使王章、聚斂刻急、舊制田稅、每レ斛更輸ニ二升一、謂ニ之雀鼠耗一、章始令、更輸ニ二斗一、謂ニ之省耗一、胡註曰、唐明宗天成元年四月敕文、應レ納ニ夏秋稅子一、先有ニ省耗一、每ニ一斗一一升、今後祇納ニ正稅數一、不レ量ニ省耗一、如レ此則天成已前、已有ニ省耗一、每レ斛更輸ニ一斗一、天成罷レ輸レ之、後至ニ漢興一、王章令レ輸ニ省耗一、而又倍ニ舊數一而取レ之

清俗記聞曰、納米ノ外ニ加耗。茶菓。倉費。斗級紙張。量斛。看倉等ノ入目アリ

口米　口永

編年集成、元和二年ノ定メ前ニ云ヘルガ如シ

勸農固本錄曰、口米ハ地方役人給、幷紙筆墨等ノ入用ナリ、上方ハ一石ニ付三升、銀百匁ニ付三匁、關東ハ納三斗五升也、計立三斗七升入一俵ニ付一升宛、口錢ハ永百文ニ付三文、或ハ金三十二兩ニ付一兩、永八貫文ニテ金一分、勿論其所ノ古法有ベシ

田園類說曰、或覺書ニ口米口永起リ、口米上方ハ一石ニ付三升、關東ハ一俵ニ付一升ナリ、口永ハ八貫文ニ付金一分、或ハ永三拾二貫文ニ付永一貫文、按ニ、往古ヨリ口永ハ納一貫文ニ付永三拾文ノ御法也、中頃一貫文ヲ九六ヲ以テ割、目錢出シ取立ルニ定ル、九六ニテ割ハ三十一文二分五リントナル、是ヲ小目錢ト號ス、此三十一文二分五リンヲ八貫文ヲ掛レバ一貫文ニナル故、法ニハ二三ヲ以テ取永ヲワルナリ、又按ニ、口永ノコト當時ハ古來ノ通ニナリテ、永百文ニ口永三文ト定ル

地方一樣記曰、甲州口米ハ石ニ四升ト云、別俵ニシテ納ル、延米ナシト云ヘリ

地方答問曰、御代官知行ノ外ニ一斗ニ三合ヅツ、永百文ニ三文ヅツ、口米口永東照宮以下下サレ、手代下役等ノ給分、又ハ御役儀ノ諸入用ニ用來ル所、當御代(享保中也)公儀ヘ上リ、御代官ヘハ高ニ應ジ米金下サル

水戸ハ米一斗ヨリ三合、本一貫文ヨリ三十文ナリ、本鐚一貫文ハ金一分ナリ、コレモ慶長十三年ノ定ニ、金一兩ハ鐚四貫文可ニ取引一事トアルユヘナルベシ、水戸口米錢ハ元ヨリ代官ヘハ給ハラヌ事ト見エテ、古ヘハ代官ノ祿豐カニ賜ハリシナリ、凡口米錢ヲ代官ノ給分ニセシト云フモ、古ルキコトナル

ベシ、上ニ載セタル薬王院文書、政所田所給分ナド云ニテ察スベキナリ、其外古文書ニ間々如レ此ノ類見エタリ

漢ニ口賦口錢人口ヨリ出スコトニテ、コレニハ異ナリ、漢書ニ、「昭帝元鳳四年、毋レ取ニ四年五年口賦一注、如淳曰、漢儀注、民年七歳至ニ十四一出ニ口賦錢一人二十三、二十錢以食ニ天子一其三錢者、武帝加ニ口錢一以捕ニ車騎馬一也トアリ、捕ハ補ノ訛ナルベキカ、又元平元年詔云々、「其減ニ口賦錢一有司奏請減ニ什三一上許レ之、」又宣帝五鳳三年ニモ、「減ニ天下口錢一」ト云見エタリ、又「有ニ馬口錢一元鳳二年、令ニ郡國一毋レ斂ニ今年馬口錢一文穎曰、往時有ニ馬口出斂錢一今省、如淳曰、所レ謂租及ニ六畜一也」トアリ、惡政ナリ

夫米　夫金

古ヘノ時ニハ、戰ニ臨ンデ夫丸ナド民間ヘアテラル丶コトアリ、ソレガ替リニ出スモノト知ラレタリ、森本氏藏文明十七年田畠納下帳ト云ニ、「年夫錢反別三四五文あてなり」トアリ、朽木氏文書寛正三年ノ古券ニ、一段二畝ノ下ニ、百四文夫錢トアリ、又六年ノ古券ニ壹段者トアル下ニ、「舂成夫せん百卅文」トアリ、古クアリシモノト見エタリ

田園類說曰、地方問答云、夫米ノ事公儀ニハコレナシ、六尺給トテ御賄所ノ六尺共ヘ、年中給米下サル、私領方ニハ、心マ丶ニ夫米ヲ高ホドニ定メトル

水戸ニハ夫米ナシ、夫錢ハ舊高百石ニ金壹兩出スコトナリシガ、延寶中ヨリ倍シテ二兩納メニナル、或曰、コレモ元來年々納メシモノニハアラズ、寛永三年百石ニ三兩命ゼラル、是ハ御上洛ニ付テナリ、如レ此事アルトキハ夫丸ヲ出ス、出サヌ村ハ金納セシモノト見エタリ、其後年々モノニナリシナルベシ

水戸諸士ノ采地ヨリ出スモノヲ、舫金ト名ヅケ公納ス、コレモ百石二兩ナリ、コレヲ舫ト名ヅクルコトハ、江戸詰等ノトキハ、百石ニ五兩ナド次第アリテ、其中ヨリ賜ハルナリ、元來二兩ノモノヲ五兩タマハルコトナレバ、他ノ人ノ采地ノモノヲモ合セタマハルコトナルユヘ、舫ト言フナルベシ、舟二艘ナラベ合セタルヲ舫ト云ナリ、義コレニトレルナルベシ、外諸侯國ニモアルコトナリ

運上　懸錢

コレモ古キ事ト見エタリ、高野檢校帳（南行雜錄載）「實德三年、承仕共廿餘人、運上懸錢可レ隨二寺命一之由、捧二起請文一」ト見エタリ、又檜垣兵庫家文書「御贄底鯛、近年以二代錢一濟レ之、運上內宮可二執帶返抄一也」ト見エタリ

名物六帖、運上ノ字ニ引ケル

夢溪談曰、「慶曆中、議弛二茶鹽之禁一、及減二商稅（ウンジヤウ）一」アキナヒモノヽウンゼウト見エタリ

文獻通考曰、據二賣價一、每二一千一抽稅錢（ウンジヤウ）三十（上ニ同ジ）

居家必用抽分（ウンジヤウ）、即解二取其物一也、明律纂註、抽分、即二其貨物一、十分而取二其一也

明疏鈔、楊村富抵等處抽稅

衍義補、哲宗元祐中、劉摯言、坊場舊法、買戶相承、皆有ニ定額一、請罷ニ實封之法一、酌ニ取其中一、定爲ニ永額一、召レ人承買（ウケオヒノウンゼウ）、丘氏曰、所レ謂承買者、凡坊場河渡之處、先募レ人入ニ錢於官ニ承買、然後聽ニ其自收レ稅以償ヒ之也

船賃

檜垣兵庫家文書（無年月）曰、一下総國相馬御厨口入嫡家職内布代錢、但船賃之錢二貫二百五十文也ト見エタリ、コレモ古クアルコトナリ

清俗記聞曰、船運送ニハ水脚（カコ）・墊船（フナチン）・神福（フナダマ）等ノ備アリ

農政座右卷之二終

農政座右卷之三目次

農政座右巻之三

稲　穀

五　穀

倭名鈔引ニ日本紀私記ニ曰、「五穀以都々乃太奈豆毛乃、」日本紀神代巻一書曰、「軻遇突智娶ニ埴山姫ニ、生ニ稚産霊（ワカムスビ）ニ、此神頭上生ニ蠶與ニ桑、臍中生ニ五穀ニ」トアリ、齊明天皇紀ニハ、「七年遣レ將救ニ百濟ニ、送ニ兵仗五穀ニ」トアリ、サラバ上古ヨリ五穀ト云ヘル名モアリシナラン、暦抄大成曰、「ホカケ」トハ稲ヲカリハジムル時先ヅ穂ヲムスビテ、田ノカミ及五穀ノ元祖ニ奉ルコトナリ、田ノ神ハ地神ナリ、五穀ノ元祖トハ天照大神ヲアガメ奉ルベキモノ也、拾芥抄ニ、「五穀ハ稲穀・大麥・小麥・大豆・小豆、（内法之時常止ニ小豆ニ、加ニ胡麻ニ云々）或ハ麥・黍・米・粟・大豆、（近代用ニ此等ニ之由、光平所レ令レ申レ院也）或ハ「止ニ大豆・小豆ニ、加ニ菉豆・胡麻ニ」云々、（諸家説不レ同也）「或粳米甘麻酸大豆鹹小豆苦、麥、或黄黍辛」トアリ、又九穀ハ「稷・黍・米・菽・麻・大豆・小豆・大麥」ト見エタリ

漢ニ云ヘルモノモ不レ一

三穀

粱稲菽（孟子徴引ニ事類、本草綱目）

四穀

秬秠穈芑小學紺珠引二詩生民箋一

五穀

黍稷麻麥豆論語邢疏・鄭司農周禮注・漢食貨志注・孟子徵・本草綱目引二素問一群書拾唾一云、小學紺珠引二周禮疾醫一

稻黍稷麥菽孟子集注・論語圖解・五雜俎・小學紺珠引下職方氏五種、史記黃帝藝二五種一、月令出中五種上

麻菽麥稷黍天工開物獨遺レ稻者、以下著レ書聖賢起七自二西北一也

禾麻粟麥豆群書拾唾字彙

禾稷菽麥豆倭名鈔引二周禮注一

稷麻豆麥禾倭名鈔引二禮記月令注一

稻稷麥豆麻小學紺珠引二楚辭大招五穀注一

六穀

稌黍稷粱麥苽小學紺珠引二膳夫注一、周禮職方氏疏五種黍稷菽麥稻也、若饋用二六穀一、則兼有レ苽、若民之要用則去レ苽

稻黍稷粱麥苽周禮小宗伯注、五雜俎引三鄭注王之膳用二六穀一、孟子徵引二事類一

八穀

黍稷稻粱麥麻菽麥本草綱目引レ詩、小學紺珠引二本草注一

稻黍大麥小麥大豆小豆粟麻小學紺珠引二大象賦注一

黍稷稻粱麻菽麥烏麻五雜俎引二甘石星經一

九穀

黍稷麻麥稻粱苽大小豆五雜俎引二炙轂子一

黍稷稻粱三豆二麥五雜俎引二酉陽雜俎一、小學紺珠引二古今注一

黍稷秫稻麻大小豆大小麥小學紺珠引二大宰九穀鄭注一、孟子微引二事類一、本草綱目

百穀

稻粱菽各二十種、蔬果之實助レ穀各二十徐氏筆精引二物理論一、孟子微

五穀之屬各有二二十一、合而爲レ百五雜俎曰、近二於穿鑿一、百成數也、五穀擧二其大一言レ之也

黍稷稻粱麻麥荏菽雕胡之屬鄭語韋昭注

稻米價俵

倭名鈔曰、稻廣志云、有二紫芒稻赤穬稻一、今按、稻熟有二早晩一、取二其名一、和名、早稻、和勢、晩稻、於

久天

神代卷一書曰、伊奘諾尊與二伊奘冊尊一、飢時生（メル）兒、號二稻倉魂命一、又一書曰、保食（ウケモチノ）神已死矣、其神之腹中生レ稻、天照大神喜レ之、以レ稻爲二水田種子一、始殖二于天狹田及長田一、其秋垂レ穎八握、莫莫然甚快也」トミエタリ、海東諸國記ニハ、「成務天皇五年、諸州始貢レ稻ト見ユ、何レヨリ傳聞シテ記シタルニヤ、カヽルヿモアリシナルベシ、又日本紀天武天皇二十一年ニハ、「多禰島粳稻常豐、一蒔兩收」ト見エタリ

倭名鈔ニ、「某國本稻幾束、雜穎幾束、某國本穎幾束、雜穎幾束」ト云見エタリ、江家次第ニ、「本穎苅本謂二之稻一、切穗謂二之穎一」トアリ、コレニテ稻ト穎ノ分チ知ルベキナリ

籾ノ字古ヨリ用ヰ來レリ、釋日本紀ニ、日向國風土記ヲ引テ、「天津彥火瓊々杵尊天二降於日向之高千穗二上峯一」ト記シタル條ニ、「拔二稻千穗一爲レ籾」トアリ、又續日本紀元明天皇ノ紀ニモ見エタリ、按ニ、粱ノ字ヨリ轉ゼル字ナルベシ、粱モ粟ト同ジケレバ用ヰシモノナラン、後ニ分田備考ヲ見ルニ、コレモ同意ナリ、且曰、續字彙補ニ、「籾女梨切、音尼、見二金鏡一」トアリ、則天后ノ制スル字ナルベシト云リ、秀按ニ、兵家茶話ニ、丹波桑田郡籾井城アリ、コレハ「キヰ」トヨメリ（田園地方紀原ニハ、ヌカヰトアリ）

稴　倭名鈔引二唐韻一曰、青稻白米也、漢語抄云、美之呂乃以禰

穭　又引二唐韻一曰、自生稻也、後漢書、穭讀於路賀於比、俗云二比豆知一

穀　又曰、和名、毛美

糙　又引二唐韻一、糙米穀雜也、漢語抄云、毛美與禰、一云二加知之禰一、今按、本朝式等所謂爲レ糙者、舂

稻成レ穀之名也

粃　又曰、和名、之比奈世、野王按、粃穀實但有レ皮而無レ米也

粟　又曰、和名、阿波、唐韻云、粟禾子也、崔禹錫食經云、禾是穗名、被レ含レ稃、未レ成レ米也

米　又曰、和名、與禰、陸詞切、唐韻云、米穀實也

秔米　又曰、和名、宇流之禰、本草云、粳米一名秔米

粳　又曰、和名、毛知乃與禰、蒼頡篇曰、米之黏也、本朝食鑑曰、與レ糯同字、俗作ニ餅米一

稻　字彙曰、水田所レ種穀也、本草綱目時珍曰、稻稌秔糯之通稱、物理論所謂、稻者溉種之總稱是矣、本草則專指レ糯以爲レ稻也、稻從レ舀、音函、象ニ人在ニ臼上一治レ稻之義、稌則方言稻音之轉爾

稌　爾雅曰、稌稻、郭註、今沛國呼稌、邢疏詩周頌云、豐年多レ黍多レ稌、禮記內則云、牛宜レ稌、豳風七月云、十月穫レ稻、是一物也、依ニ說文一稌稻即糯也、江東呼レ粳

糯秔　爾雅邢疏曰、案、說文云、沛國謂レ稻爲ニ糯秔一、稻屬也、字林云、糯黏稻也、秔稻不レ黏者、本草以ニ粳米稻米一爲ニ二物一、秔與レ粳古今字、然秔糯甚相類、黏不黏異耳、本草綱目恭曰、稻者穬穀之通名、秔者不粘之稱、一曰、秫陶謂爲レ二、不レ可レ解也

稬　字彙曰、音懦、稻之黏者、可ニ用爲一レ酒、六書正譌曰、俗作ニ穤糯一並非、天工開物曰、凡稻種最多不レ粘者、禾曰レ秔、米曰レ粳、粘者、禾曰レ稌、米曰レ糯、質本粳而晚收、帶レ粘不レ可レ爲レ酒、只可

為粥者、又一種性也

秫　爾雅曰、衆秫、郭注、謂黏粟也、邢疏、衆一名秫、謂黏粟也、說文云、稷之黏者也、與穀相似、米黏北人用之釀酒、其莖稈似禾、而粗大者是也、五雜組曰、稻有水旱二種、又有秫田、其性黏軟、故謂之糯米、食之令人筋緩多睡、其性懦也、作酒之外、產婦宜食之、又謂之江米、陶彭澤公田五十畝、悉令種秫、亂離之世、藉酒以度日耳

稰穛　內則曰、稰穛、鄭注、熟獲曰稰、生穫曰穛、孔疏曰、穛是斂縮之名、明以生獲、故其物縮斂也、既稰對穛、故為熟穫、陸佃曰、穛若今早稻、食之而已、稰晩稻耐收、故說文云、稰晩粱、穛早熟穀也

秈　字彙、秈稉稻、本草綱目、秈占稻早稻、時珍曰、秈亦粳屬之先熟、而鮮明之者、故謂之秈、種自占城、故謂之占、俗作粘者非矣、內則義疏曰、今江南早稻名秈、六十日即可穫、但收少性剛、食之令人有力、宜於少者、晩稻名稉、柔美宜於老人、一名糯、更柔味美、使人少力

穜稑　周禮、舍人以歲時縣穜稑之種、疏曰、內宰註曰、先種後熟、謂之穜、後種先熟、謂之稑

陸稻　內則、煎醢加于陸稻上、孔疏曰、陸稻者、謂陸地之稻也

禾　字彙、禾嘉穀也、又稼之總名、儀禮注、禾稾實幷刈者也

秕　字彙曰、說文、不成粟也、商書、若粟之有秕

米　字彙曰、米穀、實品字箋曰、穀之仁曰米、說文、糲米乙斛、舂米九斗、釋文云、八斗精米也、吳語曰、大荒荐饑、市無赤米、韋注、赤米米之姦者、今尙無有、周禮、舍人掌米粟之出入、注、九穀六米別爲書、疏曰、太宰九職有九穀、月令有五穀、今正言而米即粢也、爾雅、釋草者粟稷粢也、稷爲五穀之長、故特擧以配米也、其實九穀皆有、今云六米者、九穀之中、黍・稷・稻・粱・苽・大豆・六者皆有米、麻與小豆小麥、三者無米、故曰九穀六米

粢　爾雅曰、粢稷、郭注、今江東人、呼粟爲粢、左傳云、粢食不鑿、粢者稷也、曲禮云、稷曰明粢、是也、郭云、今江東人呼粟爲粢、然則粢也、稷也、粟也、正是一物、而本草、稷米在下品、別有粟米在中品、又似二物、故先儒甚疑焉、本草綱目、李含光音義、引字書粢字、曰、稻餠也、粢葢糯也、佐藤成裕曰、天官甸師、粢稷也、靈壽縣志云、今之粟、在古但稱爲粢

粟　字彙曰、爾雅翼、古以米之有孚殼者、皆稱粟、今人以穀之最細而圓者爲粟、孟子公孫丑曰、米粟非不多也、大全引通考、仁山金氏曰、有殼曰粟、無殼曰米、粟即穀也、古人米與穀兼積、米切用而易腐、穀氣全可久、緩急兼儲、禮曲禮曰、獻粟者執右契、獻米者操量鼓、正義曰、粟粱稻之屬也、米可即食爲急、故言量、粟可久儲、故言書、義路彭氏曰、帶殼曰粟、去殼曰米、翠軒先生曰、路史云、粟米之分、帶穀者曰粟、脫穀者曰米、佐藤成裕曰、景州志

云、粟穀之有ㇾ桴者、新城縣志云、粟呼ニ穀子一、椿爲ㇾ米呼ニ小米一

粱　字彙標註曰、說文、米名也、一曰、粟類、米之善者、五穀之長、禮喪大記、君沐ㇾ粱、註疏、稻粱卑ニ於黍稷一、就ニ稻粱之內一、粱貴而稻賤、是稻人所ニ常種一、粱穀中之美、佐藤成裕曰、楊州府志曰、粟古謂ニ之粱一、遵化州志曰、粟即粱也、分田備考曰、本草綱目、李時珍、周禮、九穀六穀之有ㇾ粱無ㇾ粟可ㇾ知矣、自ㇾ漢以後、始以ニ大而毛長者一爲ㇾ粱、細而毛短者爲ㇾ粟、今則通呼爲ㇾ粟、而粱之名隱矣ㇾトアレバ、古ニイフ粟ハ穀實ノ事ニテ、後世ノイフ「アハ」ハ粱ナリ、漢以後粱ノ細ニシテ毛短者ヲ粟トセショリ粱粟相混ジ、俱ニ「アハ」トスル事ニハナリヌ

稻孫　成形圖說曰、廣雅、稻已割復抽曰ニ稻孫一、四民月令・養生要集等亦同

再熟稻　唐書開元十九年、楊州奏、再熟稻一千八百頃、其粒與ニ常稻一無ㇾ異、又玉篇、秩再生稻也、韻會毛氏曰、秩本再生ㇾ稻、刈而重出、後先相繼、故借爲ニ秩序字一、再穭、農政全書、其已刈而根復發ㇾ苗再實者、謂ニ之再熟稻一、亦謂ニ之再穭一、白香秫、閩書南產志曰、歲再熟

芒種　周禮、稻人澤草所ニ生種一之芒種、鄭司農曰、芒種稻麥也

米價、諸書ニ見エタルモノ左ニ抄ス

顯宗天皇二年

稻斛銀錢一文　日本紀、歲比登稔、成形圖說曰、平年モ銀錢一文ニ米五六斗ナルベシ

和銅四年

穀六升當錢一文（續日本紀、成形圖說曰、五合磨ニシテ米三升ナリ）

應和三年（本書作ニ應化一誤）

斗米百錢（海東諸國記民饑）

寬喜二年（成形圖說分田備考作ニ安貞二年一）

米一石錢一貫文（百鍊抄宣旨）

建久四年

米一斛錢一貫文（法曹至要抄爲ニ正物）

寶治元年

米一斗錢百文（常陸吉田文書）

弘安六年

八升錢百文（常陸吉田文書）

元亨元年

粟一斗錢三百（太平記、大旱饑莩野ニ滿、成形圖說曰、平年ハ粟三四斗ナルベシ）

應永二十七年

米一升錢百文（天地根元歷代圖、天下大飢饉）

永正元年

會津米一升百錢（四家合考、天下飢饉、成形圖說曰、大觀通寶ナリ）

天文十二年

米五斗四百十一文（多聞院日記）

弘治三年

米五斗金一兩（生島宗竹記）

永祿十年

米一石八百廿七文（多聞院日記）

元龜三年

三石八斗銀一枚（同上）

天正二年

九石九斗銀三枚（同上）

同七年

三石七斗ヅツ銀三枚（同上、金銀圖錄曰、銀一枚代錢十貫五百七十文九分）

同八年

廿八石五斗金一枚 同上

同九年

五十石金一枚 同上 金銀圖錄曰、錢百十六貫六百六十六文六分

同十年

五石二斗銀一枚 同上

同十一年

卅六石金一枚 同上

同十二年

廿七石五斗金一枚 同上 金銀圖錄曰、代錢六十四貫百六十六文六分

同十三年

卅三石三斗金一枚 同上

同十四年

四石六斗金一兩 同上

同十五年

六十六石金一枚 同上

同十六年

十石五斗金子十匁 同上

同十七年

米四石ヅツ金一枚 同上金銀圖錄曰、四十石ノ誤カ

慶長　年

米五石金一兩 田政考證、水戸古割付分田備考曰、永一貫文

米斛率十八錢、後至ニ二十四五錢一 盍簪錄、慶長亂後比年豐稔

寛永　年

米三石金一兩 田政考證、水戸古割付

寛永九年

米七石四斗金一兩 鶴毛衣曰、仙臺米穀初テ江戸ヘ廻ル、此時仙臺直段如レ此

寛永二十年

糴八俵 四斗二升入 金一兩 田政考證、寛永十八九凶作、己午ノ餓死ト云、コノ八俵ハ三石三斗六升米ニシテ一石六斗八升ナリ

米一石銀八十目 玉滴隱見ニ、板倉周防守殿京所司代ノ時、天下飢饉云々、秀按ニ、コノ頃ノ事ナルベシ

正保二年
水戸切米三石七斗七升金一兩（田政考證、切米直段覺）
同三年
同四年
同三石六斗二升金一兩（同上）
同一石七斗金一兩（同上）
慶安元年
同二石二斗金一兩（同上）
同二年
同二石七斗四升六合金一兩（同上）
同三年
同一石六斗金一兩（同上）
同四年
同一石七斗五升金一兩（同上、自レ是以後低昻アレドモ、二石以上ニ至ルコトナシ）
米四十二三俵（四斗入）金十兩（昆陽漫錄、勢州人覺書）

承應元年

米百苞（三十五石、下傚之）官價金十八兩（中神氏米說）

同二年

米四十俵（四斗入）至四十六七俵金十兩（昆陽漫錄、勢州人覺書）

同三年

米三十八九俵至四十三俵金十兩（同上）

萬治元年

米百苞、官價不上二十五兩（中神氏米說、四年間）

同二年

同三十四兩許（同上）

同三年

同五十三兩（同上）

同寛文元年

同夏四十五兩冬二十七兩（同上）

同二年

同二十三兩同上

同五年

糲四斗六七升金一分瑞亭漫錄

同八年

長崎扶持米一升六合五勺代一匁昆陽漫錄

延寶三年

米五斗金一兩黑一升一合錢百文玉滴隱見、大飢饉

米石銀百三十錢蓋昔錄、延寶之際萬價、食學截ㇾ路

天和二年

米百苞官價三十兩至二四十四兩一中古民米說、貨交四年迄ㇾ此十七年間

元祿八年

同二十四兩不ㇾ上二三十三兩一同上、天和三年至ㇾ此十三年間

同九年十年

同夏四十二兩冬三十二兩同上

同十二年

同五十兩舊草錄

同十六年

同四十兩至ニ五十兩一同上、十一年至レ此

米二石三斗至ニ五六斗一金一兩折燒柴記曰、元祿中マデ米價尙賤

寶永六年

米百苞官價三十七兩折燒柴記

正德元年

同三十二兩至ニ四十二兩一中神氏米說、寶永元年至レ此八年間

同二年

米九斗左右金一兩舊草錄

水戶籾四斗八升金一分探舊考證

同三年

同籾四斗四五升至ニ七八升一金一分探舊考證

精米至ニ銀二百錢一嵩簪錄、價之貴、前代未ニ曾有一也

同四年

同糭二斗六升金一分探舊考證

同糭二十一俵金十兩水戸紀年、米價大ニ貴シ

同五年

同糭一斗七八升至ニ二斗ニ金一分採舊考證

同糭十四俵金十兩水戸紀年

享保三年

百苞官價五十二兩至ニ八十五兩ニ中神氏米説、正德二年至レ此七年間、舊章錄曰、享保初年ヨリ六年迄米價貴シ

同四年

同二十九兩不レ上ニ三十兩ニ同上、此時廃賜給ニ新金ニ

同五年六年

同三十兩至ニ四十六兩ニ上同

同七年

同三十三兩至ニ五十三兩ニ上同

同八年

同五十六兩舊章錄、乾金一百十二兩ニ當ル、今ノ金一兩ニハ米六斗二升五合ナリ、米價ノ貴、是ヲ至極トス

同十七年

同十九兩不レ上ニ三十二兩ニ（中神氏米說、八年至レ此）

同二十一兩（德光錄、米價下直）

同十八年

同三十三兩至ニ四十兩ニ（中神氏米說）

元文二年

同二十三兩不レ上ニ三十四兩ニ（同上、享保十九年至レ此四年間）

寬保三年

同三十六兩至ニ五十九兩ニ（同上、元文三年至レ此六年間）

寶曆五年

同二十八兩至ニ四十六兩ニ（同上、延享元年至レ此十二年間）

同十二年明和元年

同二十六兩不レ上ニ三十七兩ニ（同上）

安永五年

同二十五兩至ニ四十一兩ニ（同上、明和七年至レ此八年間）

天明二年
同三十一兩至ニ三十九兩一同上、安永六年至レ此五年間
同三年
同春四十兩冬四十六兩市價超ニ六十兩一同上、漸貴
南部津輕米二升八合金一分農民懲戒篇、天明三卯ノ大飢饉
會津米澤米四升八合同上同上
越後米七升同上同上
水戸馬頭邊米四升　合同上同上
太田原黒羽米七升五合同上同上
江戸米二斗六升金一兩米三合百文知理惡多
同五年六年
米四合五合錢百文田政考證
同七年
米斗價過ニ二千錢一栗山文集
恒譚新論曰、漢文帝澤加ニ黎庶一、穀至ニ石數錢一

漢書曰、宣帝元康四年、比年豐、穀石五錢

水東日記、晁錯曰、粟一石直錢三十文

袁宏漢記曰、赤眉亂後大饑、黄金三片易二五升穀一（成形圖說ニ引）

唐書曰、太宗貞觀四年、米斗三四錢、人行二數千里一不レ賫レ糧、玄宗開元廿八年冬、米一斛直二二百錢一（同上）

續文獻通考曰、明洪武十八年、鈔每二五貫一准二米一石二斗一、金每レ兩准二米十石一、銀每レ兩准二二石一

四王合傳曰、自二癸丑軍興一、滇蜀之間、屢歲不レ登、米一石價五六兩

淸俗記聞曰、米一俵（五斗作リ）銅錢二貫二三百文

韃靼漂（寛永二十一年）曰、大明白米一升代銀一匁

福建漂流記（寶曆元年）曰、當年旱損高直、米一升二十三文ナリ、豐年ハ五六文、平年ハ九文・十文

成形圖說曰、琉球人ノ話ニ、福建白米一升八十錢ノコトアリ

安南漂流記（明和三年）曰、日本ノ一升程ハ、安南錢十二三文ナリ

俵

成形圖說曰、俵ハ和字ナリ、蓋把稈（タバネハラ）ノ略歟、一說ニ、田稈（タハラ）也、或曰、俵ハ字書ニ散也トアレバ、散米ト云ヨリ取リシナラントモアリ、按ニ、孝德天皇ノ紀ニ、裹ノ字加麻須トアルモノ、イニシヘノ俵ノ事ニテ、蒲筍（カマケ）テフモノゾ其遺製ナルベシ、字書ニ、裹ハ苞也ト注ス、即俵トオナジ、昔俵テフモノハ、二升以上五升盛（イリ）ノモノニテ、今ノ裹ノゴトシ、然ルニ一統ニ俵ノ大キクナリシハ、上ニ納ル料

ニ製シケルニヤ、類聚國史、「延暦十七年正月、勅量ニ收糯穀一、斗斛有レ限、又糯一俵二升已上、穀亦斛別五升已上」ト云々、雜式曰、「公私運米五斗爲レ俵、仍用ニ三俵一爲レ馱、」是五斗俵ノ始ニテ、蓋穀米(モミ)ナリ、凡馱(ダ)荷(オヒ)馬ノ荷ノ重ノ積ヲ四十貫トイフモ、五斗俵二俵ヲ負スル積リナリト云ヘリ、（公儀ノ定、一俵三斗五升入ニテ、重サ十六貫目ナリ、三斗九升八、御料所平均三ツ五分ニアタルユヘナリト云）

學山錄曰、蜀趙雲別傳云、夏侯淵敗、曹公爭ニ漢中地一、運ニ米北山下一、數千萬囊、又沈括筆談云、受ニ米八百餘囊一、此皆以レ囊容レ米也、今人謂ニ容レ米之苞一、爲レ俵此無ニ理義一、宜下以ニ米幾囊一稱上レ爲レ是也

成形圖說曰、字書ニ裹ハ苞也ト注シテ、平攘錄ニ積米豆十六萬八千包トアル、包ハ即チ俵トオナジ、西土ノ俵ハ竹網代(タケアジロ)ナレドモ、米一俵ノ收粟(ウケトリ)ニ一包トシルシヌ

麥

倭名鈔曰、麥和名、牟岐、陶隱居本草注云、麥ハ五穀之長也、「神代卷一書曰、「保食神已死矣、其陰生ニ麥及大豆小豆一、天照大神喜レ之、爲ニ陸田種子一、」コレヲ古事記ニハ、大宜津比賣神ノ陰ニ麥ヲ生ズト見エタリ、續日本紀元正天皇元年ノ詔ニ、「百姓唯趣ニ水澤之利一、不レ知ニ陸田之利一、宜レ令下百姓兼中種麥禾上、男夫一人二段」ト見エタリ、コノトキヨリシテ水田ノ口分田ノ如ク、麥畑二段ヅツ作ラスルコトニナリシト見エタリ

大麥　倭名鈔曰、大麥、布土無岐、一云、加知加太蘇敬、本草注云、大麥、一名靑科麥、本朝食鑑曰、

麥之種類多、品不レ減ニ稻類一、而有ニ早中晩一、俗稱ニ尋常之麥一曰ニ莞麥一、無レ殼者曰ニ裸麥一

小麥　倭名鈔曰、小麥、和名古牟岐、一云、末牟岐、周禮注、九穀者、稷・黍・稻・粱・苽・麻・大豆・小豆・小麥

麥奴　又曰、麥奴、和名牟岐乃久呂美、新錄單要云、麥奴

蕎麥　又曰、蕎麥、和名曾波牟岐、一云、久呂無木、孟詵食經云、蕎麥性寒者也

來牟　詩周頌思文篇、貽ニ我來牟一、帝命率育、毛傳、牟麥也、釋文曰、牟字作レ麰、音同ニ牟字一、或作レ䵏、孟子云、麰大麥也、廣雅云、䅘小麥、麰大麰也」漢書劉向傳ニハ、コノ詩ヲ引テ一作レ飴ニ我釐麰一、釐麰麥也、師古曰、釐又讀與レ來同、麰音牟」トアリ、本草綱目時珍曰、一來亦作レ䅘、說文云、天降ニ瑞麥一、一來二麰、象ニ芒刺之形一、天所レ來也、如ニ足行來一、故麥字從レ來、從レ夊、夊音綏、足行也、詩云、貽ニ我來牟一、是也、又云、來象ニ其實一、夊象ニ其根一、梵書名レ麥曰ニ迦師錯一

麰麥　孟子、今夫麰麥播レ種而耰、告子集注、麰大麥也、耰覆種也、燃犀解云、麰麥只是大、麥非ニ二物一、本草綱目、大麥牟麥、時珍曰、麥之苗粒、皆大ニ於來一、故得ニ大名一、牟亦大也、通作レ麰、弘景曰、今稞麥一名牟麥、似ニ穬麥一、惟皮薄爾、恭曰、大麥出ニ關中一、即青稞麥、形似ニ小麥一而大皮厚、故謂ニ大麥一、不レ似ニ穬麥一也

宿麥　漢書、武帝元狩三年、遣ニ謁者一、勸下有ニ水災一郡上種ニ宿麥一、師古曰、秋冬種レ之、經レ歲乃熟、

故云、宿麥ニ（コノコトハ董仲舒說ノ上曰、春秋他穀不レ書、至ニ于麥禾不一レ成、則書レ之以此、見ニ聖人於ニ五穀一、最重ニ麥與ヒ禾、今關中俗不レ好レ種レ麥、是歲失ニ春秋之所一レ重、願陛下詔ニ大司農一、使ニ關中民益ニ種宿麥一、令レ毋レ後レ時一トアルニヨリテナリ

按、月令、仲秋乃勸種レ麥、毋レ或レ失レ時、其有レ失レ時、行レ罪無レ疑、鄭注、麥者接レ絕續レ乏之穀、尤重レ之、又本草綱目曰、大小麥、秋種冬長、春秀夏實、具ニ四時中和之氣一、故爲ニ五穀之貴一、吳並曰、本草、大麥名ニ穬麥一、五穀之長也

粟

倭名鈔曰、ニ粟亦作レ㯼、和名、阿波、ニ神代卷一書曰、ニ保食神已死矣、其頭上生レ粟、天照大神喜レ之、乃爲ニ陸田種子一、又一書曰、ニ少彥名命至ニ淡嶋一、而緣ニ粟莖（カラ）一者則彈、渡而至ニ常世鄕一ニトアリ、古事記ニハ、大宜津比賣神ノ二耳ヨリ粟ヲ生ズトアリ

粱米　倭名鈔曰、和名阿波、乃宇留之禰、崔禹錫食經云、粱米一名白粱、一名穄米、粱米一名圓米

粟　字彙曰、今人以ニ穀之最細而圓者一爲レ粟、本草綱目、時珍曰、許愼云、粟之爲レ言續也、續ニ於穀一也、古者以粟爲ニ黍稷粱秫之總稱一、而今之粟在レ古、但呼爲レ粱、後人乃專以ニ粱之細者一名レ粟

粱　字彙曰、粱粟類、詩詁、似レ粟而大、爾雅翼、粱有ニ黃白青三種一、其性涼、故稱レ粱、本草綱目

時珍云、粱即粟也、考ㇾ之、周禮、九穀六穀之名、有ㇾ粱無ㇾ粟、可ㇾ知矣、自ㇾ漢以後、始以二大而毛長者一爲ㇾ粱、細而毛短者爲ㇾ粟、今則通呼爲ㇾ粟、而粱之名反隱矣

秫　本草綱目、恭曰、秫是稻秫也、今人以二粟糯一爲ㇾ秫、時珍曰、蘇頌圖經、謂ㇾ秫爲二黍之粘者一、許眞說文、謂ㇾ秫爲二稷之粘者一、崔豹古今注、謂ㇾ秫爲二稻之粘者一、皆誤也、惟蘇恭以二粟秫一爲二秈糯一、孫炎注二爾雅一、謂ㇾ秫爲二粘粟一者得ㇾ之

稗

倭名鈔曰、䅞、和名比衣、神代卷一書曰、保食神已死矣、其眼中生ㇾ稗、天照大神喜ㇾ之、以爲二陸田種子一、本朝食鑑曰、稗亦有二早晩一、其色黃白赤黑、其名品亦多

稗　字彙曰、似ㇾ稻而實細、標注曰、今冀北凡高燥低洿、當二旱潦處一、民都種二其種一、如ㇾ黍而黑、擣二其米一、炊ㇾ之不ㇾ減、本草綱目、時珍曰、稗乃禾之卑賤者也、故字從ㇾ卑、弘景曰、稗子亦可ㇾ食、時珍曰、稗處々野生、最亂ㇾ苗、其莖葉穗粒、並如二黍稷一、一斗可ㇾ得二米三升一、故曰、五穀不ㇾ熟、不ㇾ如二稊稗一、稊苗似ㇾ稗、而穗如ㇾ粟、有二紫毛一、即烏禾也、爾雅謂二之荑一

黍

舊事記ニ、粟黍ハ保食神ノ胸ヨリ生リシト見エ、古事記ニハ、大宜津比賣神ノ二耳ヨリ生リシト見エタリ

丹黍　倭名鈔曰、阿賀木々美、本草云、丹黍一名赤黍、一名黃黍

秬黍　又曰、和名久呂木々美、本草云、秬黍一名黑黍

秫　又曰、和名木美乃毛智、爾雅注云、秫黏粟也、本草云、稷米一名秫、本草食鑑曰、按、秫糯粟之名、與黍稷殊、又曰、黍多種類、稻黍似粟而低小有毛、其粒如粟而光滑、色黃白其長而短者號小黍、又有爪黑黍、稻之糯也、又有黑黍、糯黍之黑色者也、有唐黍、即蜀黍也

黍　孟子曰、夫貉五穀不生、惟黍生之、圖解云、黍谷名、苗似蘆、高丈餘、穗黑色、實圓重、五谷之長、本草綱目、吳端曰、稷苗似蘆、粒亦大、南人呼爲蘆穄、時珍曰、今之祭祀者不知稷即黍之不粘者、往々以蘆穄爲稷、故吳氏亦襲其誤也

秬秠穈芑　詩曰、誕降嘉種、維秬維秠、維穈維芑、穈即虋、音轉也、本草綱目引爾雅曰、赤黍曰虋、音門曰穈音靡白黍曰芑、音起黑黍曰秬音巨一稃二米曰秠音疕時珍曰、郭璞以虋芑爲粱粟、以薌即黑黍之二米者、羅願以秠爲來牟、皆非矣、黍乃稷之粘者

薌合　曲禮曰、凡祭黍曰薌合、正義曰、夫穀秫者曰黍秫、既軟而相合、氣息又香、故曰薌合也、又曰、尚書云、黍稷非馨、詩云、我黍與々、我稷翼々、爲酒爲食、以享以祀、然則黍稷爲五穀之主、秀按、家語曰、黍者五穀之長、郊祀宗廟以爲上盛

稷黍　本草綱目、時珍曰、稷與黍一類二種也、粘者爲黍、不粘者爲稷、稷可作飯、黍可釀

レ酒、猶ニ稻之有ニ粳與一レ糯也、稷黍之苗、雖ニ頗似一レ粟、而結レ子不レ同、粟穗叢聚攢簇、稷黍之粒、疎散成レ枝、孫炎謂レ稷爲レ粟、誤矣

豆

倭名鈔曰、本草云、大豆一名菽、和名萬米

神代卷一書曰、保食神已死矣、其陰生ニ黍及大豆小豆一、天照大神喜レ之、以爲ニ陸田種子一、古事記ニハ、大宜神比賣神ノ鼻ニ小豆ヲ生ジ、尻ニ大豆ル生ズト見エタリ

烏豆　倭名鈔曰、和名久呂末女、崔禹錫食經曰、烏豆一名雄豆、圓而黑色者也

藊豆　又曰、和名曾比末女、崔禹錫食經曰、藊豆紫赤色者也

珂孚豆　又曰、和名井知古末女、崔禹錫食經云、珂孚豆狀圓々、似レ玉而可レ愛、故以名レ之、東雅曰、「ソヒマメ」、「キチコマメ」ニアリモヤスラン、見シコトモアラズ

大角豆　又曰、和名散々介、崔禹錫食經云、大角豆一名白角豆、色如ニ牙角一、故以名レ之、其一殼含ニ數十粒一、離々結レ房

小豆　又曰、阿加安豆木、本草云赤小豆、崔禹錫食經云、黑小豆・紫小豆・黃小豆・綠小豆・皆同類也

菽　本草綱目曰、大豆尗俗作レ菽、時珍曰、豆尗皆莢穀之總稱也、廣雅云、大豆菽也、小豆荅也

豆屬　五雜俎曰、豆屬有ニ黃豆・菉豆・黑豆・江豆・靑豆・扁豆・豌豆・蠶豆一、按・本草綱目、大豆之外、載ニ

黄大豆・赤小豆・綠豆・白豆・穭豆・豌豆・蠶豆・豇豆・藊豆・刀豆・黎豆ノ豆（即貍）

雜穀

延喜主税式曰、凡雜穀相傳、粟小豆各二斗、當ニ稻三束一、大豆一斗、當ニ稻一束一、自餘如レ令

田政考證曰、水戸領古割付ヲ見ルニ、畠百石ニ付大豆五石（壹兩ニ二石代）稗貳石（壹兩ニ六石代）大麥五斗（壹兩ニ五石代）荏一石三斗（壹兩ニ二石五斗代）胡麻二斗（壹兩ニ壹石貳斗代）可レ納旨、寛永十五年下寺田村ニ見エタリ、同十七年辰マデ如レ此、十八年巳ヨリ大豆稗荏ノ三雜穀ニナル、又十五年鳥喰村鳥子村ニハ、大豆稗・荏・胡麻・小豆ノ五雜石ナリトイヘリ、秀按ニ、當時定リタルコトナク、入用ノ品ヲ畑取米代金ノ中ニテ買玉フモノナルベシ、延喜式ニハ、稻束ノ代リニ納メアルト同意ナリ、今ハ三雜穀ニ定マリ、稷・荏・大豆ヲ納ルコトニナリシナリ

周禮、一閭師四業一ト云アリ、疏ニ、「畜也、耕也、蠶也、或說以ニ四時之業一也一ト見ユ、コヽニアツカラザルコトナレド姑ク記ス

帳簿

學山錄曰、皇朝謂ニ簿籍一爲レ帳、貝原氏和爾雅、以爲今俗所レ稱、唯引ニ說文一、徐云、史籍或借ニ帳字一以證レ之、此大失ニ考索一耳、按、新唐百官志、載大府寺下丞四人從六品上、以ニ一人一主ニ左藏署帳一、凡在レ署爲レ簿、在レ寺爲レ帳、又唐六典有ニ鄉帳言一、宋史有ニ司帳官一、皆以ニ計簿一爲レ帳也、然則皇朝自レ古從ニ唐稱一、以レ帳名レ之也、一色時棟曰、魏書釋老志云、元象元年秋詔曰、城中舊寺及宅、皆有ニ定

帳ハ、書影引ニ李子田說一曰、今人出入之籍曰ニ帳目一如レ此

神帳

古語拾遺曰、至ニ天平年中ハ、勘ニ造神帳ハ、中臣專レ權、任レ意取捨

驛起稻帳

續日本紀曰、元明天皇和銅二年、令ニ諸國一上ニ驛起稻帳一

大計帳　四季帳　見丁帳　靑苗簿　輸租帳

又曰、元正天皇養老元年、以ニ大計帳・四季帳・六年見丁帳・靑苗簿・輸租帳等式ハ、頒ニ下七道諸國一

周禮鄕師ニ役要トアルモノ、見丁帳ノ類ナルベシ、鄭注ニ、役要ハ、所レ遣民徒之數トアリ、疏ニハ、役人簿要ト見エタリ

諸國挍田帳

三代實錄曰、淸和天皇貞觀四年、太政官處分、諸國挍田帳、自レ今以後、准ニ據大帳ハ、不レ許ニ損減ハ、若有レ所レ損、爲レ例返帳、但非ニ常損一者、令ニ別錄言上一

延喜式返諸帳

諸國稅返却帳

租稅損益帳

正税倉附帳
租目錄帳
同損益帳
官舍并池溝帳
修理勢多橋用途帳
諸國租帳以上主税式上
青苗簿帳
鄉帳
郡帳
國帳
正税帳以上主税式下
神名帳
驛起稻帳
實錄帳
檢交替使帳勘解由使

民部省圖帳　水帳

續日本紀「天平十年、令下天下諸國、造二國郡圖一進上」日本後紀、「延暦十五年勅、諸國地圖事跡、宜二更令一レ作レ之、」職原抄民部省ノ條ニ、又「有二圖帳國郡牓示一、載以明白、謂二之民部省圖帳一、」中山信名曰、以上ノ說ヲ考合スルニ、國郡ノ圖アリテ、其間ニ郡鄕ノ牓示、幷租稅貢賦ノコトナド、ツバラニノセタルモノナルベシ、凡民部省圖帳ト云モノ、今ニ僅カニ存セルモノアレド、皆信ジガタキモノナリ、予モ試ニ一二ヲ寫藏セリ、始ニ「大日本國五畿垣內攝津國民部省圖帳」トアリ、一紙ノ終リゴトニ、「元亨二年十月下吏日下民部省史生源忠勝史生秦行宗」トアリ、疑フベシ

田園類說曰、或書ニ水帳ハ御圖帳ト書ベシ、民部省ノ大圖帳ト云フコトナリト見ユ、按ニ、檢地帳ヲ水帳ト書コト、土地ヲ水土ト云故下略ナリト云ヒ、又田ハ水ヲ第一トスル故ナリト云、何レモ附會ノ說ナリ、御圖ト水ト和訓同キユヱ、イツトナク書チガヒシナラン

秀按ニ、書チガヒニハアラズ、文字假借セルコト、コノ類外ニモアルコトナリ、又地詰帳・地押帳ト云アリ、コレハ田畑上中下ノ石盛有來ル通ニテ、田畑ノ廣狹ノミ竿ヲ入、增減セル帳面ナリ

太田文

太平記ニ、貞應ニ武藏前司入道、日本國ノ太田文ヲ作リ庄鄕ヲ分ツトアレド、其以前ヨリアリシモノト見エ、東鑑文治五年ニ、「二品令レ求二奧州羽州兩國田文已下文書一」ト見エ、正治元年ニハ、「武藏國田文

被レ整レ之、是故將軍御時被レ遂ニ惣檢一之後、未レ及ニ田文沙汰一」トアリ、同二年ニハ、「全吾仰ニ政所一被ニ召出一、諸國文等令ニ源性算ニ勘之一」トアリ、承元四年ニハ、「被レ造ニ武藏田文一」ト見エタリ、皆貞應以前ニアリ、秀胥ナ但馬美含郡帝釋寺ノ藏書ナリト云ヲ寫シ得タリ、首ニハ「但馬國太田文（太田太郎左衞門尉政頼、弘安八年之注進）」トアリ地名町段地頭ノ名等ヲ記シ、凡四十五葉アリ、「末右註進如レ件、抑隨ニ催促一出ニ註文一之所者、就ニ其狀一註ニ進之一、度々雖ニ相觸一、不ニ叙用一輩事者、雖レ須ニ註進言上一、日數延引之條依レ有レ恐、且任ニ建久建治之帳一註ニ進之一、下略 弘安八年十二月日、守護人大江」（破失）トアリ、度々註進セシモノト見エタリ

圖田帳

秀又一書ヲ寫シ得タリ、其所レ出ヲ知ラズ、初ニ豐後國圖田帳トアリテ、「弘安八年十月十六日、自ニ國府一被レ立ニ脚力一畢、豐後田代之事」トアリ、（一本ニハ、「注進狀案、豐後國田代之事」トアリ）又曰、「豐後國莊公幷領主等之事可ニ委細註進言上一之由、今年二月廿日雖下被レ成ニ御書一候上、德政之御使被ニ下向一、去正月以來直人相共罷ニ向博多一候、未ニ尋究一處御使參レ洛候、其後依ニ兩社造營一延引候、此程令ニ歸國一雖レ致ニ其沙汰一、不レ能ニ巨細一候與、雖レ然若急速御用候者可レ違レ期候之間、直人等粗令ニ注進一狀一卷、內々爲ニ御存知一令ニ進上一候、下略 弘安八年九月晦日、沙彌道忍（裏判、一本ニハ、「税所宮內大輔、小野朝臣幸直在判」トアリ）謹上、信濃判官入道殿」トアリ、前ノ太田文ト同ヤウノモノト知ラレタリ、弘安中諸國ヨリ注進セシモノナルベシ

作田勘文

常陸府中税所氏家藏文書ニアリ、初ハ欠テ知レズ、凡十四紙ホド卷子ニシテ郡鄕庄保ノ町段ヲ記シ、末ニ「右弘安二年作田勘文大略注進如レ件」トアリ、上ノ二書ト同ジカルベシ、又同家藏ニ、「常陸國太田文事任下被二仰下一之旨上、一卷寫進二覽之一候、以二此旨一可レ有二御披露一候、恐惶謹言、延文六年五月三日、散位詮國花押進上、御奉行所」トアリ、オモフニ右ノ勘文ヲ寫シ進覽セシモノナルベシ、上ノ圖田帳ニモ、一本ニハ税所云々トアレバ、コノコト税所ノ掌ドル所ト見エタリ、税所ト云ハ、租税ニヨリテノ職名ナルベシ、領家ニテ私ニ置シモノニテ、田所ト云モノヽ類ナラン

田畑取帳

輶軒小錄曰、津國豐島郡南鄕村春日社ノ所藏ニ、田文ト云傳フルモノアリ、初ニ「文治五年御撿注加納田畑取帳」トアリ、山川田畑墓原ナド一々ヨコニ書テアリトナリ、秀按ニ、コレ恐ラクハ文治五年ニ撿注アリシ田畑ニ加納スル取帳ト云フニテ、文治五年ノ物ニハアラズ、其後ノ物ナルベシ、鹿島文書ニ見エタル元德二年ノ大賀村檢注取帳ノ類ニテ、庄鄕何方ニモアリシモノナラン、今ノ年貢帳ナドノ類ナリ

割付免狀

田園類說ニ、引二地方問答一曰、關東ニテ御年貢可レ納目錄ヲ割付ト云フ、上方ニテハ免狀ト云フ、按ニ、割付トハ、田品上中下ノ反別ニ、反取ヲ割付テ取立ルヲ云フ、免狀ハ古キ詞ニテ、年貢可レ納ノ餘リヲ、

百姓ノ徳分ニ免ズト云コトナリ

戸籍 人別帳

倭名鈔曰、戸籍、和名、不美太、文字集略云、籍民戸之書、古以レ牒、今黄紙、野王按、凡書ニ於簡札一、皆謂ニ之籍一也

日本紀孝徳天皇大化元年、詔ニ國司等一曰、凡國家所レ有、公民大小、所レ領人衆、汝等任レ之任皆作ニ戸籍一、及校ニ田畝一、其園池水陸之利、與ニ百姓一倶、又曰、其於ニ倭國六縣一、被レ遣ニ使者一、宜レ造ニ戸籍一、幷校ニ田畝一、注曰、謂レ検ニ覈墾田頃畝、及民戸口年紀一、又曰、遣ニ使者於諸國一、錄ニ民元數一、又白雉三年三月、造ニ戸籍一、凡五十戸爲レ里、毎レ里長一人、凡戸主皆以ニ家長一爲レ之ト見エタリ、コノ時ヨリシテ人別ヲ改メ、帳ヲモ作ラレシナルベシ

戸令曰、凡戸籍六年一造、起ニ十一月上旬一、依レ式勘造、里別爲レ巻、惣寫ニ三通一、其縫（ツギメ）皆注ニ其國・其郡・其里・其年籍一、五月卅日内訖、一通申ニ送太政官一、一通留レ國、其雜戸陵戸籍、則更寫各送ニ本司一又曰、凡造ニ計帳一、毎年六月晦日以前、京國官司責ニ所部手實一、（謂ニ手實者、戸頭所レ造計帳一、其戸籍亦責ニ手實一也）具注ニ家口年紀一、（謂ニ年紀一、猶レ云ニ年歳一也）ト、其外ハ本書ニ就テ見ルベシ（又人別帳ノ外ニ、名寄帳・名前帳ナド云モアルナリ）

周禮秋官、司民掌レ登ニ萬民之數一、語ニ司寇一、司寇獻ニ其數于王一、王拜受レ之、登ニ天府一

論語、式ニ負版者一、集註、負版持ニ邦國圖籍一者、重ニ民數一也、周語、仲山父曰、古者不レ料（カゾヘ）レ民、而

知二其少多一、司民協二孤終一、韋注、引二司民一見二于上一

農政座右卷之三終

農政座右巻之四目次

寶貨

農政座右卷之四

寶貨

對馬

續日本紀、「大寶元年八月、先ㇾ是遣三三田首五瀨於對馬嶋一冶二成黃金一」トアリ、金銀圖錄曰、コレヨリサキニ、宣化紀ニ、「黃金萬貫」トミエ、推古紀ニ、高麗國王黃金三百兩ヲ貢スト見エ、天武紀ニ、新羅朝貢ニ金銀アリ、マタ天武二年十二月ニ、冶金ノコト見エ、是レ等ヲ參考シテ、イマダ金銀ヲ通貨トセズトイヘドモ、スデニ貴重ノ財寶タリシコト見エシ、此レヨリ後ツネニ煉金・砂金並ラベ稱ス、既ニ冶ト云ヒ。煉ト云フトキハ、其ノ常形ナキコトヲ得ズ、古ルキ物語ニ、金ノ丸カセト云フ、古金ノ形ヲ云シ也

陸奥

續日本紀、聖武天皇天平二十一年二月、陸奥國始貢二黄金一、陸奥守從三位百濟王敬福、貢二黄金九百兩一」寶貨事略曰、コノ時我國ノ黄金ハ、始テ出タリ、コレヨリ先ニモ、本朝ニテ黄金ヲ用キラレシコトドモミエタレドモ、皆々外國ヨリ來レル所ナリ、此時大佛ノ像ヲ造ラレ、裝ルベキ料ノ黄金ナケレバ、異國ニ求ラレントセシニ、貢セシカバ悦バセ玉フコト無レ限、年號ヲ天平勝寶トハ被レ改タリ、延喜式ニモ、陸奥國ヨリ毎年砂金三百五十兩ヅツ貢セシト有バ、世々奥州ノ貢金トイヒシモノナリ、其後、後白河ノ頃マデ、此貢金ハマヰラセシナリ

金銀圖錄曰、コノ後、天平勝寶四年、陸奥國ノ調庸、多賀以北ノ諸郡ハ、黄金ヲ輸サシムト見エ、延喜式ニ、陸奥國砂金三百五十兩トミエ、源平盛衰記、小松内府奥州知行ノトキ、氣仙郡ヨリ金千三百兩マヰラセタリト見エ、小右記ニ「長元二年、前陸奥守孝義志二砂金十兩一」トミエ、東鑑文治二年、陸奥國今年ノ貢金四百五十兩、秀衡入道送獻スト見エ、觀迹聞老志ニ、砂金出ル所、小田郡黄金山神社也、後牡鹿郡ニ併セ、金華山ニ改ム、寶貨事略又曰、慶長十一年ノ頃、陸奥ノ南部ヨリ黄金ヲ出ス事殊ニ多シテ、無レ程出デズ、秀按ニ、宋史日本傳ニ、「東奥州産二黄金一」トアリ、コレ異國マデモキコエシナリ

駿河

續日本紀、孝 天皇、天平勝寶二年三月、駿河國守從五位下楢原造東人等、於二部内廬多胡浦一、獲二黄

金ヲ獻レ之、練金壹分 沙金壹分

下野

寶貨事略曰、延喜式ニ、下野國ヨリ毎年沙金百二十兩、練金八十四兩宛貢セシ由ミユ、此國ヨリ金出シ始ハ未レ詳

佐渡

寶貨事略曰、佐渡國ニハ、黄金アルヨシ、宇治大納言物語ニミエタリ、サレバ此國ニハ、昔ヨリ在シガ、世ニトルスベヲシラザルナリ、近頃上杉謙信、彼國ヲ攻メ取リ、其金ヲ取テ國用ヲ足ス、太閤秀吉、兼テヨリ此事ヲ傳ヘ聞テ、謙信ノ義子景勝ヲ奥州ニ移シ、佐渡ヲ押取テ、金ヲ採セラレシカド、金不レ出シテ薨ゼラル、慶長五年、關ケ原ノ事終リシ翌年ヨリ、此國ノ銀出ルコト、オビタヾシトモ云フバカリナシ、カヽルコトハ、我國ノ古ヨリ傳聞ザル所ナリ、同十三ノコロヨリ、銀出ルコト初ノゴトクニハアラズ、從レ是年々少クナリテ、或ハ又黄金ヲモマジヘ出セリ

石見

寶貨事略曰、石見國ヨリ黄金ヲ出セルコト、其始ハ出ルコト多カラズ、慶長六七年ノ間ヨリ出タルコト多クナレリ

伊豆

寳貨事略曰伊豆國ヨリ黄金白銀ヲ出ス、慶長十一年ノ頃ヨリ出デテ、其數大方ハ佐渡ノ國ヨリ出ル事ノゴトシ、無レ程出ルコト多カラズシテ、採事ヲトヾメラル

創業記曰、慶長十一年、伊豆金山ニ、銀子多可レ出ト云、大方自二佐渡國一出ル程モ可レ有レ之ト也

大判小判　慶長金

寳貨事略曰「天正十六年、造二黄金大判・小判一」織田殿ハ財ヲ生ズル才略オハセシカバ國富タリ、秀吉又其才オハシタレバ、天下ヲ知タマヒショリ、國用ヲ被レ足キ、天正十六年ニ、新ニ大判・小判等ヲ造ラル、天正十六年判ト云物ナリ、但從レ是三年前、天正十三年ノ秋ニ、金賦トテ大名小名ニ金銀ヲタマヒシ事アリ、金五千兩・銀三萬枚、サラバ其頃既ニ大判・丁銀等有リシナリ、是ハ古ヨリ有シモノニテ、十六年ノ制トハ同ジカラザルカ

金銀圖錄曰、天正大判金、重サ四十四匁、信長公ニ始マリ、天正八年スデニ金三十枚ヲ以テ、進見ノ禮ト爲サレシコト有ナリ

經濟錄、舊章錄並曰、濃州ノ民、掘テ織田氏ノ板金ヲ得タリ、文モ欵識モナキ精金ナリ、當代大板金ハ、三十六錢、是七兩二分也、小板金ハ、四錢八分、是一兩ナリ、一分ハ一錢二分ナリ、三品同直ナリ

老談一言記、後藤四郎兵衛曰、大判ハ信長公ノ世ニ、我先祖ノ極メタルナリ、大佛判ハ太閤様ノ時、先祖德乘極メタリ、極印ノ桐モ、德乘ノ作ナリ、大佛供養ノ入用ノタメ作リタルユヱ大佛判ト云フ、通用

ノ大判ヨリハ、金ノ位ヨキナリ、大判ニ十兩ト書タルハ、小判十兩ニテハナシ、黄金十兩ナリ、黄金十兩ト云ハ、昔ハ銀一枚ヲ黄金一兩トシ、銀十枚ヲ黄金十兩トス、大判一枚ヲ、銀四百三十目ニ通用ス、右ノ外、高下ハ兩替師ノ相場ナリ

草茅危言曰、昔ハ四角ナルノベ金ニテ、切遣ヒナリシヲ、足利氏ノ時沙金ノ二品ニ改マリ、豐臣氏ニ至リ、始テ大判・小判ノ製アリ、我照祖、關東御入國ノ砌リ、ソレマデ東土梗塞シテ、豐家ノ新幣關東ニ行ハレザルユヱ、照祖陳請セサセ玉ヒ、京師ヨリ金工後藤光次ヲ召下シ、別ニ大小鈑金ヲ鑄造シ、關東ニ行ハセ玉フ、ソノ時ノ金ハイカナル物トモ知ラネドモ、定メテ今ノ如ク、光次ノ名判アリケルナルベシ、是天下ノ通用ニ非ザレバ、右ニテ豐家ノ制ニ、別タセ玉フコトナラン、慶長御治世以來、豐金竟ニ廢シ、東金專ラ天下ハ行ハレシモ、有來ノ勢ユヱ、ソノマヽ用ヰサセ玉ヒシモ、一々理ニ中リタリ

編年集成曰、天正十九年十一月、神君關八州ヘ通用セラルベキ爲ニ、後藤德乘、幷門人庄三郎光次ニ命ジテ、黄金ヲ以テ、大小ノ形ヲ定メ、是ヲ鑄サセラル、但大判ハ金四十八文目ヲ以テ一枚トス、是ハ室町將軍家ノ流例ナリ、往古ヨリ今ニ至リ、小判ト云フ事ハナク、灰吹ノ砂金ヲ權衡ニカケテ、通用スト云ヘドモ、急務ヲナサズ、世ニ難儀スル趣、神君尊慮惱マサレ、光次ニ命ジテ、昔年ヨリ在リシ金錢ニ、四增倍ノ積リ、四文目八分ヲ以テ小判トシ、是ヲ鑄サセ、通用其便ヲ得サセ、金錢ト共ニ世ニ

行ハル

寶貨事略、又曰、慶長六年ノ後ニ、大判・小判・一分判・丁銀・豆板等ノ制改ル、駿河判・江戸判・ナドイフハ、皆々造ラレシ地ヲ以稱ス、此外ニ甲州判ト云アリ、從レ是後、元祿八年迄、年々ニ造リ出セシ所ノ金銀ノ惣數、先ハ金七千萬兩、銀八千貫目程ノ積リトマウス

金銀圖錄曰、慶長六年、大一統ノ後、始テ大小分判、挺銀ノ形制ヲ定メラレ、遂ニ萬代不易ノ模範世寶トナル、大判一枚、重サ四十四匁、小判一兩、重サ四匁七分六厘、世ニ慶長金銀ト云

玉露證話。官中秘策並曰、後藤庄三郎駿河ニテ金座ナリ、光次ノ判ヲ定ム、京。江戸・佐渡ニテ金ヲ吹ク、國々ニテモ吹ク、其吟味駿州ヘツカハシ、庄三郎ガ判ヲ取テ通用ス、大法十二兩替ノ定メナリ、然ルニ十三兩替ニシテ遣フトイヘド、金色アシケレバ判ヲセズ、故ニ十二兩替ヨリ過分ニ仕立、判ヲ取ユヱニ、慶長判ハ十二兩替ヨリ能トナリ、駿河判ハ後藤ガ御定ノ通リ、十二替ヲ以テ吹立ル故ニ、他國ノ金ヨリ位惡シク、色モアシキトナリ

老談一言記、後藤庄三郎曰、小判ハ先祖庄三郎ニ仰付ラル以前モ、小前ト云フコトアリトハ承ハラズ、

金座由來、權現様ノ御世、文祿二巳年初テ金銀ノ改仰付ラル、同四未年、江戸・駿河・兩所ニテ小判ヲ作ル、小判一兩ノ目、御直ニ窺ヒ相定マル、此小判ニ墨ニテ光次判ト書記ス、是ヲ武藏判ト名付ク、慶長五子年、墨判ヲ極印ニ直スベキ旨、仰付ラル、此節一分判、初テ仕立ル、江戸・京・佐渡三ヶ所ニ

役所ヲ立、小判・一分判、共ニ作ル、慶長年中、仰付ラルニ付、慶長金ト稱ス、此節御直ニ伺奉リ、分一金相定リ、右ノ例ニテ、代々分一金下サレタルナリ

小判ニ、コザメヲ切ルコトハ、內マデ表ノ通リナルトノ印ナリ

金子ノ名、舟印・子花印・子大佛判・古大判・武藏判・駿河判・甲州判・京小判・佐渡小判・新大判

金銀圖錄曰、天正・慶長ノ間ニ至テハ、大佛判・小佛判・二條判・三條判・五條判・駿河判・武藏判・東山殿判・嵯峨判・舟印・子花印・子大坂ノ千枚分銅・橋本判アリ、甲金ニハ、太鼓判・細字金・繩目金・古甲金・上判・飯櫃等アリ

又曰、大判・小判ノ判字、或ハ板ニ作ル、蓋シ古ヘハン金（板金ナリ）ト呼シヲ、後藤判ナド云フ始リシヨリ、判金トノミ書キ來リシナルベシ、板金トハ、薄ク板ノ如ク打延テ、切テ遣フモノニテ、延（ノシ）金ナド云モノ皆同ジ、進退記ニ、板金ノ事、是モ殿中ニテハ披露ナシ、又進上モナシ、云々ト見エタレバ、足利ノ季世、スデニ板金トハ云シナリ、土佐軍記ニ、天正十三年ニ、判金ト云コトアリ、甲州ニアル慶長ノ初ノ文書ニ、江戸判金トモ見エ、延寶ノ古帳ニ、石見國判銀幾貫目トモ見エ、元和ノ頃、長崎ノ文書ニ、板銀ト見エタリ、然レバ後藤判ナド云コト有テヨリ以來ハ、專ラ判金ト呼シコト、分明ナリ、異朝ノ書ニ求レバ、爾雅ニ、「鉼金謂二之鈑一」トミエ、周禮職金ニ、「祭二五帝一供二金鈑一」トミエ、釋文ニ、「鈑音版、」廣韻ニ「鉼音餅、金鈑也、」正字通ニ、餅傾二金銀一、似レ餅者」トミエ、通雅ニ、「韓混擔夫與二白金一

版、猶レ餅也」トミユ、此ニ據レバ鈑・又版ノ字ヲ用ルヲ當レリトス、又古ヘ遺金一餅、列女傳金十餅、梁廬江七賢傳一餅金、宋書銀十餅、列女傳ナド云ヘル、皆挺ト云ヒ、錠ト云ト同ク、猶今ノ金幾枚ト云ガ如シ、

武陵王紀ニ、「以二黃金一斤一爲レ餅トミユ

印子、夢溪筆談曰「壽州、公山側、土中及溪澗之間、往々得二小金餅一、上有二篆書文一、刻二主字一、世傳淮南王藥金也、得レ之者至多、天下謂二之印子金一」續博物志曰、「壽州八公山、土中耕者往々得レ之」トアリ、金銀圖錄ニ、コレヲ引テ曰、後ニハ金ノ上品ナルモノヲ指テ云ナリ

一分判 權重標準曰、漢志ノ五權ノ法ハ、銖ト兩トノ間遠キ故、分ト云ヲ增シ設ケタルナリ、六銖ヲ一分トスルハ、一兩ノ四ツ一ツニテ、錙ト云ニ同ジゾト、去聲ニヨムベシ、今ノ世、金子一兩ノ四ツ一ツヲ、一分トスルモ、コノブノ法ヨリ云ナリ、大秤ノ十厘ヲ、分トスルノ分ト異ナリ、分ハ平聲ナリ

寳貨事略曰、慶長四年、始テ一分判ヲ造ル

老談一言記、後藤庄三郎曰、一分判ハ慶長五年ニ出來スルナリ、金銀圖錄ニ、引二紳書一テコレニ同ジ

編年集成曰、慶長十年、後藤庄三郎光次ニ命ジテ、金一分判ヲ始テ造ラセラル、其重一文目二分也

武家閑談曰、權現樣、關八州御知行ノ時、後藤德乘ニ、誰ゾ一人關東ヘ下ルヤウニト仰ラルレドモ、誰レモ、下向セント云モノナシ、弟子庄三郞望デ下向ス、御意ニ入、天下手ニ入リナバ、其方何ゾ可レ望トアリ、庄三郞然ラバ小判ヲ四ツニ切テ、ツカハセ度ト望ム、終ニ其願ヲ遂ルナリ、小粒ハ庄三郞ヨリ始ル、元ハ大判ノミニテ、小判モ秀吉ノ頃ヨリ出來スルナリ

元金

探舊考證曰、元祿八年乙亥、九月、慶長通用ヲ元祿金ニ改ル、十年丁丑、四月ノ令ニ、金銀吹直ニ付、古金銀引替、來寅三月マデニテ、古金銀通用止メラル、旨、又十六年癸未ノ令ニ、今度金銀吹直ニ付、古金銀不レ殘吹直マデハ、新金銀ト入交通用スベキ旨、新金銀ト引替ニハ、員數ヲ增ジ渡スベキ旨觸ラル

金銀圖錄曰、元祿八年、九月十日、金銀ノ法ヲ改ラレ、大判。小判。丁銀。豆板ヲ改鑄ラル、背ニ元ノ字ノ添極印アリ、世ニ是ヲ元字金銀ト云、又元祿新金銀ト云、大判重サ四十四匁二分、享保十年十二月朔日、通用停止

折燒柴記曰、元祿八年ノ九月、金銀ノ制ヲ改造ラル、凡金一兩ノ重サハ、古ノ定ノゴトクナレド、其銀料ヲ增シ加ヘラレシニヨリ、金少ク銀多ク、其性コハクナリタレバ、物ニフルヽ時ハ折レ裂ク

舊章錄曰、元祿中國用乏キニ因テ、銀鉛錫ヲ雜ヘテ、新金幣ヲ造ル、又背ニ元ノ字アリ、是ヲ元祿新金ト稱ス

三王外記曰、憲王奢侈、且好レ與、王府遂窘、諸大臣皆病レ之、大農荻原重秀曰、海内見行金幣、既有二其數一、不レ可二遽殖一、莫レ如下和二剤他物一、以爲中色幣上於レ是下二局務一、造二色幣一、和レ金以二銀銅一、和レ銀以二銅錫一、皆半二原金一、大板。小板。方金。形重皆如レ故、錠銀。碎銀。形皆如レ故、並欵文曰レ元、故俗謂二之元金一、別造二小方金一、形如二古方金一、而重半レ之、欵文曰二二朱一、十年始行、日本造二惡幣一、此其始云

二朱判

舊章錄曰、元祿中、三品ノ外ニ、二朱金ヲ造ル、一分金ヲ半ニシテ小サシ、文廟ノ時、停止シ玉フ

金銀圖錄曰、重サ六分、元祿十年六月晦日、新金ニテ鑄ルトコロ也、寶永七年四月、停止

乾金

金銀圖錄曰、寶永七年四月十五日、元ノ字ヲ吹替ヘ、古金ノ位ニ改ラレ、小判・一分判トモ、小形ニナル、乾ノ字ノ極印ヲ打ツ、是ヲ世ニ乾字金ト云、乾金ト云、按ニ易ニ「乾爲レ金」トアルニ本ヅカレシニヤ、享保五年、此金停止

探舊考證曰、寶永七年庚寅四月、元祿金通用止ミ、乾字金ニ改マル、元祿金一分ハ、乾金一分ニ通用スベキ旨

折焼柴記曰、寶永七年庚寅ノ春ヨリ、金銀造ラルベキノ議起レリ、一兩ノ金、其重サハ古ニ及バズトモ、元祿ニ加ヘラレシ銀料ヲ去ステ、其品ハ古ノ如ク造ラルベシトノコトナリ、此時萩原近江守重秀ガ、奉行シテ造リシ所、世ニ乾字金ト云フ

舊章錄曰、文廟金幣ノ惡キヲ愁玉ヒ、故ニ復スマデノ内、小金幣ヲ造ラシム、元祿ノ小板一歩ヲ鎔シテ、雜物ヲ去テ純金ヲ以テス、其形薄ク小サクシテ、重サ故幣ノ半ナリ、小板二錢四分、一步六分五釐五毛也、大板金ハ未レ改、小板ニ乾字アリ、因テ乾金ト云フ

三王外記曰、文王嘗開元祿。寶永。新造惡幣、百姓不レ便、有レ志ニ復古一、有司奏、令レ造ニ純金新幣一、海內金幣減ニ其半一、不レ如權半ニ其重一、以ニ故價一行レ之、遂令レ改レ幣、其金幣小板、及方金、形如レ故、而薄小、欵文曰レ乾、故世謂ニ之乾金一、比ニ小方金一、其大板金未レ及レ改レ之、寶永七年之冬、始行レ之、享保十五年庚戌正月令ス、乾金ヲ貳朱金ニ通用致シ、新金壹兩ヘ乾金貳兩壹分ノ所ヘ、貳分通用スベキ旨

新金

正德日記曰、二年壬辰十月十四日、文昭公遺命、金銀元祿以來位惡シク、通用滯ニ付、權現樣御定ノ通リ、御改メ遊バサルベキ旨、思召ノ旨

金銀圖錄曰、正德四年五月十五日、金銀ノ品、慶長ノ法ノ如クニ返サル、世ニ正德新金ト云、小判重サ四匁八分、壹分重サ壹匁二分

探舊考證曰、正德四年五月、新金通用仰出サル、乾金二兩ノ代リ、新金一兩通用、乾金新金入交ゼ通用ス、令ニ曰、慶長ノ古金一兩ハ、寶永ノ新金二兩ニツカフ、但十割增、元祿金百兩ニ、寶永金二兩二分ヅツ步合出ル、但十兩ニ一分積リ、此度ノ金ハ慶長ノ金ト其品同ジキ事

舊章錄曰、章廟ノ時、慶長ノ故幣ニ準ジテ、新幣ヲ造ラル、大板ハ姑ク置テ、先ヅ小板ト一步ヲ造ル、重サ悉ク慶長ノ故幣ノゴトシ、是ヲ新金ト呼ブ、一兩ヲ乾金二兩ト直シ、一步ヲ乾金二分ト直ス、慶長ノ故幣ト並べ行フ

新金大判

金銀圖錄曰、大判重サ四拾四匁、享保十年十二月朔日、元祿大判ヲ止テ、慶長大判ノ位ニ吹改ラル、是ヲ世ニ新金大判ト云、一枚七兩二分ノ積リナリ、今用ヰルモノ、此大判ナリ

文金

金銀圖錄曰、元文小判、重サ三匁五分、一分重サ八分七厘五毛、元文元年五月十二日、金銀ヲ改ラル、文ノ字添極印アリ、世ニ文字金銀ト云、又文金銀ト云フ

元文元年丙辰六月十五日、令、文金通用仰出サル、慶長金・新金ハ、百兩ノ代リニ百兩、乾字金ハ、二百兩ノ代リニ百兩、慶長銀・新銀ハ、拾貫目ノ代リニ拾貫目、引替渡サルルノ旨、引替金百兩ニ付、增步金六十五兩ヅツ、銀拾貫目ニ付、增步銀五貫目ヅヽ相渡サルベキ旨

日記提要曰、同二年丁巳三月、令、金銀引替增步ノコト、午正月ヨリ百兩ニ付三十兩、銀拾貫目ニ付貳貫目宛、相渡スベキ旨、明年午八月、金銀割合通用停止セラル、一兩ハ一兩ニ通用スベキノ旨

延享元年甲子六月、令ニ、元文元年ノ定ノ通リ、古金ハ六割半、古銀ハ五割增ノ積ヲ以テ、古金銀取交通用スベキ旨

文政改鑄

文政二年六月、令、小判瑕金多クコレアルニ付、是マデノ目方ヲ以テ、厚メニ吹直シ、一分判モ極印

分リ兼ヌルニ付、吹直シ仰付ラルヽ旨

二分判

文化十五年四月、令、二分判新ニ吹立仰付ラル、歩判二ツヲ以テ、金一兩ノ積リ通用スベキ旨

一朱判

文政七年甲申六月ノ令、一朱歩判、吹立仰付ラル、歩判十六ヲ以テ、金一兩積リ取交通用スベキ旨

甲州金

甲陽軍鑑ニ、碁石金ト云フ見エタリ、其外ハ見アタラズ、金銀圖錄曰、按ニ甲金其始ヲ詳ニセズ、武田氏ノ舊制ニ因テ、天正中ニ改造セラレ、今ニ迨デ一國通用ヲ許サル、其金坑ハ、モト山梨郡黑川ニアリ、其金座ハ志村・野中・山下・松木ノ四家アリ、其古金ハ碁石金・板金・太鼓判・細字金・延シ金・繩目金等、其新金ハ、甲安金・中金・甲重金・甲定金ノ品アリ、其通用ハ、一分判重サ一匁、是ヲ銀拾貳匁ト定ム、今通用スルモノハ、壹分・貳朱・壹朱・朱中ノ四品ノミ、甲金凡壹百三十六品アリ、寶永四年、美濃守吉保吹トコロ元字金ニ准ズルアリ、正德四年、甲斐守吉里吹替新金ニ准ズルアリ、享保六年十月、甲斐守［本書ニ名ナシ］吹替ノ新甲金アリ、甲重金ト呼ブ、享保十二年四月、吹足シノ甲定金アリ

銀

對馬

寶貨事略曰、天武天皇、白鳳三年三月、對馬ヨリ銀ヲ貢ス、コノトキ我國ノ銀ハ、始テ出タリ、延喜式ニ、太宰府ヨリ毎年銀八百九十兩宛貢ストミエシハ、對馬ヨリ出セル所ナリ、コノ後、鳥羽・堀川ノ頃マデ、對馬ヨリ銀ヲ出セシ由見エタリ、秀按ニ、三代實錄、「貞觀十八年、唐人等到二對馬島一、其海濱多二奇石一、或鍛練得レ銀」トアリ、又延喜式ニ、「對馬島銀者、任二聽百姓私操一、但馬國司不レ在二此例一」又宋史日本傳ニ、「西別島出二白銀一」トアリ、西別島トハ、對馬ノコトヲ云ヘルナリ

金銀圖錄曰、後一條、長元ノ頃モ、此國貢銀ノ事、小右記ニ見エタリ、元祿年間迄モ、銀出シ事多カリシ也

佐渡

寶貨事略曰、慶長六年ヨリ、銀出ルコトオビタヾシ（既ニ前ニ云ヘルガ如シ）

伊豆

又曰、慶長十一年ノ頃、黃金白金ヲ出ス、無レ程採ルコトヲ止メラル（コレモ前ニ云ヘリ）

但馬

金銀圖錄曰、但馬考ニ、朝來郡生野銀山、ソノ始詳ナラズ、延喜式ニ、對馬ノ銀ハ百姓ノ操ニ任セ、但馬國司ハ此例ニ非トアレバ、當時已ニ貢上セシト見エタリ、銀山舊記ニ、天文十一年、山名氏ノ時、始テ鑛出、信長ノ時、石見ノ商人來リ、鑛ヲカヒ歸テ銀ニ吹シヨリ盛ニナリシトゾ、太閤ノ時、伊藤氏奉行ス

遠碧軒隨筆曰、但馬銀山ハ、八里廻リノ山ナリ、四百年以來、ホリ來ル、近年ハ銀少ナク出デテ、延寳七年ノ前ハ、千貫目餘出デテ、公儀ヘハ百貫目ホドノ運上ナリ

圖書編、日本圖、幷ニ平攘錄ニ、但馬出レ銀トアリ、サラバ異國マデキコエシナリ

石見

石見銀山舊記曰、花園天皇ノ時、大内介弘幸、初テ銀ヲ取、其後足利直冬・大内義興・小笠原長隆・尼子・毛利・代々領シ、慶長一統ノ後、彥坂小刑部・大久保十兵衛、奉行トシテ銀ヲ出スコトオビタヾシ、一年運上、銀三千六貫目ニ及ベリ

銀錢

金銀圖錄曰、顯宗天皇紀ニ、銀錢一文ト云フコト見エタリ

寳貨事略曰、天武天皇、白鳳十三年、用二銅錢一、廢二銀錢一、コレヨリ先キノ代々ニハ、物ヲ交易スル事、米穀絹布ヲ用ヰキ、白鳳三年、我國ノ銀出シヨリ、銀錢ヲ用ヰラレシトミエタリ、又元明天皇、和銅元年、初テ行二銀錢・銅錢一、世ニイハユル和銅錢ナリ、孝謙天皇、天平寳字四年、鑄二新錢一、コノ時銅錢ヲ改鑄ラレ、（萬年通寳）又銀錢ヲ改ラル、（太平元寳）銀錢一ツヲ以テ、銅錢十ニ當ツ、又金錢ヲ新ニ造ラル（開基勝寳）金錢一ツヲ以テ、銀錢十ニ當ル

秀按ニ、コノ以前、元正天皇、養老六年ノ詔ニ、「其用二二百錢一當二一兩銀一」ト云文見エタリ

南鐐

金銀圖錄曰、本邦ニ傳フル南鐐ノ名ハ、古キコトナリ、源平盛衰記、治承二年ノ條ニ、「砂金千兩、南鐐」トミエ、八島大臣ヨリ仲綱ヘ送ラレシ馬、フトク逞ク、キハメテ白キ馬ナレバ、南鐐ト名ヅケラレシ由モ見ユ、コレヲ平家物語ニハ煖遼ニ作リ、異本ニハ軟丁ト書タリ、東鑑ニ、南廷ト云ヒ、（廷ハ則挺ナリ、延喜式ニ、「銀一分鐵一挺三斤五兩、鑄レ延」トアリ、）砂石集ニ、軟挺ト見エタルモ皆同ジ、永享行幸記ニ、南鐐ノ建盞アリ、然レバ鎌倉・室町ノ時ヨリ、專ラ南鐐ノ名アリシナリ、爾雅ニ、「白金謂二之銀一、其美者謂二之鐐一」トアリテ、最上ノ銀ヲ指スナリ、南ノ字疑クハ、詩ノ大路、南金ノ南ヲ假借スルカ

秀按ニ、南鐐、下學集ニモ見エタリ、圖錄ニ偶々遺セリ

丁銀

寳貨事略曰、天正十三年ノ秋、金賦リトテ、大名小名ニ金銀ヲタマヒシコトアリ、「金五千兩、銀三萬枚」トアリ、サラバ其頃既ニ大判・丁銀等有リシナリ、慶長六年ノ後ニ、大判・小判・一分判・丁銀・豆板等ノ制改ル

舊章錄曰、當代ノ銀幣二品、銀錠ナリ、碎銀ナリ、銀四匁三分ヲ一兩トス、碎銀ハ大小ヒトシカラズ、重サ二三分ヨリ、四五錢ニ至ル、其形豆ノ如クナル故、俗ニ是ヲ豆板ト云、銀錠ハ十兩ヲ一挺トス、重サ四十三錢ナリ、俗ニ挺銀ト云、錠ニ大小有テ、必シモ重サ十兩ナルニアラズ

金銀圖錄曰、慶長丁銀、煎傾ノマヽナレバ、大小輕重、モトヨリ一ナルコトヲ得ズ、大概四十三匁ノ內外ナリ、慶長六年五月、定メラル所ナリ、是ヨリ先キ泉州堺ニモ、南鐐座アリ、慶長三年ニ一定セラレ、六年初テ銀座ヲ設ケラル

昆陽漫錄曰、連山雜抄云、沙石集ノ、正直ノ人寶ヲ得ルト云部ニ、宋朝ノ物語ヲ引テ、人ノ袋ヲ落シタルニ、銀ノ軟挺六アリト云、コレ今ノ挺銀ナルコト疑ヒナシ、ソノ頃、丁銀ヲ軟挺・南鋌トモ云トミエタリ、敦書按ニ、胡身之ガ釋文辨誤云、「今人冶レ銀、大鋌五十兩中、鋌半レ之、小鋌又半レ之、世謂ニ之鋌銀ニ」ト、今ノ人トアレバ、宋朝ニ鋌銀アルコト明ラカナリ、サテ連山氏ノ說ニテ見レバ、東鑑ノ南廷ハ、今ノ丁銀ノ類ナリ

金銀圖錄曰、丁銀ハ、モト鋌ニ作ルベキヲ挺ニ作リ、又丁ニ略セルナリ、唐六典ニ、「金銀曰レ鋌」トミエ、通鑑釋文誤云々」前ニ同ジトアレバ、異朝ニモ若ク呼シタリ

元銀

折焼柴記曰、元祿八年ノ九月ヨリ、金銀ノ制ヲ改メ造ラル

舊章錄曰、國初ノ銀幣ハ、純物成シニ、元祿改造ノ時ニ、銅・鉛・錫ヲ交ヘテ、其數ヲ多クス、文ニ元ノ字ヲ印シテ、是ヲ元祿新銀ト呼ブ、慶長ノ故銀ヲ停止セラル

三王外記曰、元祿中、萩原重秀奏、造ニ色幣ニ和レ金以ニ銀銅一、和レ銀以ニ銅錫一、皆半ニ原金一、錠銀・碎銀、

形皆如レ故、並欵文曰元、十年始行

寶銀

折焼柴記曰、寶永三年七月、カサネテ又銀貨ヲ改メ作ラル、其後又萩原重秀下知シテ、ヒソカニ品下レル銀ヲ造ラセタリ、是世ニイフ二寶字銀、三寶字銀ト云フモノナリ、此後モ又私ニ下知シテ改メ造レリ、重秀幾モナク、其職ヲ黜ケラレタリ

金銀圖錄曰、寶永三年六月六日、新銀ヲ鑄ラル、寶ノ字極印二ツ打、常是ノ極印ハナシ、世ニ是ヲ寶永新銀ト云、又二ツ寶銀ト云、同七年三月六日、二ツ寶銀ヲ吹改ラル、兩頭ニ寶ノ字ノ極印アリ、中ニ永ノ字ノ添極印ヲ打ツ、是ヲ世ニ永ノ字銀ト云フ、同年四月二日、銀吹改ムル、寶ノ字ノ極印三ツ打ツ、世ニ三ツ寶銀ト云、正德元年二月二日、三ツ寶銀ヲ吹替ラル、寶ノ字極印四ツ打、是ヲ世ニ四ツ寶銀ト云、享保七年、皆通用停止

舊章錄曰、寶永年中、國用匱ク成テ、鉛・銅・錫ヲ增加シテ、文ニ寶ノ字ヲ印ス、是ヲ寶永新銀ト呼ブ、元祿ノ銀ヲ止メテ、寶永ノ新幣ヲ行フ、其色黑黯ニシテ、元祿ニ比スレバ、鉛ノゴトシ、是ニテモ止マズ、又雜物ヲ增加シテ、文ニ二ツノ寶ヲ印ス、色彌惡シ、是ニテモ猶止マズ、亦雜物ヲ增加シテ、文ニ寶ノ字三ツ印ス、其後雜物ヲ增加シ、文ニ四ノ寶ノ字ヲ印ス、民間二寶・三寶・四寶ト曰ク、國初ヨリ以來、銀ハ六十錢ヲ以テ、金一兩ニ直スヲ常トセシニ、三寶・四寶ハ、八十餘錢ヲ以テ、金一兩

ニ直ス

三王外記曰、改二元寶永一、因二地動之災一、國用不レ足、於レ是廢二元祿銀幣一、更造二惡幣一、寶永中凡三改レ之、毎レ改レ之、益加以二他物一、歟文曰レ寶、有二二寶・三寶・四寶一、原銀存者四之一、往者元祿新幣、特色薄無レ光耳、至レ是其色黑黯如レ鉛、且生二赤鏽一、公家雖三行レ之以二故直一、而民間則、以二三之一一行レ之

路史曰　粟米之分、帶レ殼者曰レ粟、脱レ殼者曰レ米、今諱レ銀、既曰二白米一、又曰二脱粟一、脱粟即白米也、又不整之銀曰二荒銀一、豈亦借二義於粟一耶」、コレニテ、銀ノ隱名ヲ知ルベシ

新銀

探舊考證曰、正徳四年甲午五月、新金通用仰出サル、令ニ曰、慶長ノ古銀一貫目ニハ、今通用ノ銀二貫目ツカハス、但十割增、元祿ノ銀一貫目ハ、今通用ノ銀一貫六百目遣ス、但六割增、寶永ノ初ノ銀一貫目ハ、今通用ノ銀一貫三百目ツカハス、但三割增、此度ノ銀ハ、慶長ノ銀ト其品同キ事

舊章錄曰、文廟惡銀ヲ愁玉ヒ、有司ニ令シテ、純銀ヲ以テ故幣ノ如ク新幣ヲ造ラシメラル、正徳二年ヨリ世ニ行ハレ、五等ノ惡幣ヲモ未レ廢、新幣ト並行フ、其直モ多少不同ナリ、享保ノ初、元祿以來ノ惡銀ヲ悉ク廢シテ、專ラ新幣ヲ行ハル

文銀

日記提要曰、元文元年辰五月令ス、此度金銀吹改仰付ラル、慶長銀・新銀ハ、十貫目ノ代リ拾貫目引

替、增步五貫目相渡スベキ旨

五匁銀

金銀圖錄曰、重サ五匁三厘、明和二年九月四日鑄ラル、相場ニ拘ラズ、金壹分ニ銀三枚、金壹兩ニ銀拾二枚ノ積リナリ

二朱判

權衡標準云、劉宋雷斅炮炙論序曰、凡云一兩一分一銖者、正用今絲綿秤也、勿レ得將四銖爲一分有レ誤、コレハコノ時分ニ四銖ヲ一分トスル俗說アリシユヱ、ソレヲ破リテ云レタリ、コノ俗說、本邦ヘモ流傳シテ、今ノ俗金五兩ノ四ツ一ツヲ、一分トシ、一分ノ半ヲ二銖ト云、コレアノ方ヨリノ俗說ニテ古キコトト見エタリ

明和九年辰十月令ス、此度上銀南鐐ト唱フル銀ヲ以テ、貳朱步割仰付ラル間、無レ滯通用スベキ旨

金銀圖錄曰、重サ二匁七分五厘、長九分半、横五分半、厚八厘、明和九年九月七日鑄ラル、天明八年四月、貳朱判永代通用ノ令アリ

草茅危言曰、元來二朱ハ便利ナル物ニテ、民情ニ能合テ、三都滯リナク流布スレバ、僅ノ年數ノ内ニ金數、殊ノ外多クナレリ、二銖ノ位、ソノ量ニ少シ中ラザルニヨリ、世評ニ八片ノ價、四十八疋ニ當ルト云、然レバ一片六疋ナリ、目ヲ增シテ十片ヲ銷シ、八片トスルナラバ、一兩六十疋ノ數ニ叶フベシ

文政七年甲申二月令ニ、貳朱判極印分リ兼、目方重ク持運ビ難儀ノ旨ニ付、目方七分宛相減、吹直シ仰付ラル、ノ旨

一朱判

文政十二年七月令ス、一朱銀吹立仰付ラル、無レ滯通用スベキノ旨

豆板小玉

金銀圖錄曰、豆板銀、又小玉銀ト云、京都ニテ小粒ト云、（關東ノ小粒金チバ、上方ニテ分判ト云、）其豆板ハ疑ラクハ豆バンナラン歟、異朝ニ子銀粒ト云、劈子ト云、零碎銀ト云、散碎銀ト云、塊頭ト云モノ、皆切使ノ小玉銀ナリ

紙鈔

三王外記曰、元祿以來、諸侯漸貧、國用不レ足、於レ是私造ニ銀鈔一、以足ニ國用一者、十ニ六七、王亦不レ問、士民皆不レ便、文王立、出レ令禁レ之

中村雜記曰、寶永元年甲申二月令、曰、水戸ノ紙札ノコト、御願之上仰出サル、四年丁亥十月、諸國金銀紙札五十日ノ內、相止ベキノ旨、公儀ヨリ仰出サル

五雜俎曰、宋・元、用レ鈔不レ便、雨浥鼠齧、即成ニ烏有一、懷中槖底、皆致ニ磨滅一、人惟日々作ニ守鈔奴一耳

枚兩匁

金銀圖錄曰、金幾枚、銀幾枚ト云コト、愚ガ見ル所ハ信長公ノ時ヲ始トス、是黃金大判丁銀ナリ、其金一枚ハ大概重サ四拾目餘ナリ、水戸藥王院天正年間古文書ニ、金一枚云々

又曰、金幾兩ヲ以テ云フハ、推古紀ニ黃金三百兩トミエ、持統紀ニ、白銀三斤八兩トアルヲ始トス

日蔭蔓曰、古書ニ金百兩トアルハ、砂金ニテ秤目ノ百兩ノコトナリ

太平記卷三十一曰、遊佐勘解由左衛門ガ、金百兩ヲ以テ作タル三尺八寸ノ太刀モアリ

草廬雜談曰、民部卿法印記セル、嚴廟御元服ノ儀式ニ、賜予ノ銀三十兩ヲ以テ稱ス、正保マデハ、ソノ淳朴カクノ如シ、今ハ下々ノ音信ニモ、銀ハ枚ヲ以テ稱ス、誠ニ過分ノ至リナリ、我國古ハ唐ノ制ニヨラレテ、十匁ヲ一兩トストミエタリ、四匁三分ヲ一兩トナスハ、イヅレノ時ヨリナルヤ詳カナラズ、今ノ良子（フンドウ）ノ一兩ハ十匁ナレバ、國初ノコロヨリ、四匁三分ヲ一兩トスルニヤ

金銖圖錄曰、匁ハ錢ノ俗字ナリ、或人云、京攝ノ商賈、幾匁ヲ幾ヱント云、「ヱン」ハ「セン」（チヱン）ノ轉音ニテ、則錢ナリ、此說當否ヲ知ラズ、按ニ匁ノ字ハ、宋ノ時ヨリ既ニ用ルカ、宋版ノ醫方ニアリ、兩ヲ匁ニ作、錢ヲ匁ニ作リ、五分ヲ五分ニ作ル 篇海類編ニ、「錢俗作レ匁」トミエ、丹鉛總錄ニ、「文人奇士、多用ニ古字一、官府文移、通用ニ今字一、吏胥下流、市井米鹽帳簿、用ニ省訛俗字一、如ニ錢作ヒ匁」是也トミエタリ

字典索引曰、字義總略ニ出ス、杜撰ノ字ニ、匁ハ錢ノ字トアリ、邦俗匁ヲ目ノ省ト爲テ、幾錢匁ト云ハ重語ナリ

盍簪錄曰、「昔者二十四銖爲ニ一兩一、二十四兩爲ニ一斤一、無ニ以レ錢言者一、自ニ開元錢起一、而十錢重準ニ一兩一、故銀重準ニ錢一文重一者、稱ニ之一錢一、積而至ニ十錢重一、爲ニ一兩一、自レ是銖兩之名廢、以ニ幾兩・幾錢・幾分一起レ數矣、國家近代之制、則以レ錢起レ數、而十レ之爲ニ十錢一、百レ之爲ニ百錢一、千レ之爲ニ一貫目一、而不ニ以レ兩計一レ之也、故中國之所レ云百兩今之一貫目也

銅鐵錢

和同開珍

新撰錢譜曰、「和同開珍、錢面文循讀、徑八分、重一錢一分、製作精妙、文字甚明、今世存尙多」、秀按ニ、三才圖會、珍寶錢ノ部、外國品アリ、稱同開珍ヲ載セタリ、コノ同ハ銅ノ字ノ省ナラン歟

寶貨事略曰、「天武天皇、白鳳十三年、用二銅錢一、廢二銀錢一」、從レ是先ノ代々ニハ、物ヲ交易スルコト、米穀絹布ヲ用ヰラレシト見エタリ、其十二年ニ及ンデ、銅錢ヲ用ヰテ銀錢ヲ止ラレシ也、元明天皇、和銅元年、春、武藏國ヨリ銅ヲ貢ス、コノ時我國ノ銅ハ始テ出タリ、先レ是ニ銅ヲ用キラレシコト見エタレドモ、皆々外國ヨリ來ル所ナルベシ、和國ノ銅是ヲ始トスレバ、年號ヲモ和銅トハ改メラル、元年初行二銀錢・銅錢一、是世ニイハユル和銅錢ナリ、秀按ニ續日本紀、「文武天皇三年十二月、始置二鑄錢司一」トアレバ、異國ヨリ來ル銅ヲ以テ、鑄ラレシモノアリシナルベシ、又、元明天皇、和銅元年ニハ、「七月令二近江國一鑄二銅錢一、八月始行二銅錢一」トアリ、コレ武藏ヨリ獻ゼシ銅ニテ鑄ラレシナラン、又同三年ニハ、「播磨國獻二銅錢一」トアリ、コレイカナル錢ヲ獻ゼシニヤ、四年十月ニハ、「勅依二品位一、始定二祿位一、職事二品二位、各絁三十疋・絲一百・錢二十文」トアリ、又「詔曰、夫錢之爲レ用、所下以通二財貨一易中有无上也、當今百姓、尙迷二習俗一、未レ解二其理一、僅雖二賣買一、猶無二蓄レ錢者一、隨二其多少一、節級授レ位、其位六位以下、蓄レ錢有二一十貫以上一者進二位一階一叙、二十貫以上進二二階一叙、初位以下、每レ有二

五貫一、進二一階一叙レ」ト見エタリ、人情未ダ錢ヲ貴バザルコトヲ見ルベシ、五年閏十二月ニハ、「諸國所レ送調庸等物、以レ錢換、宜下以二錢五文一准中布一常上」トアリ、初テ錢納ト云フアリシナリ、又七年九月ニハ「制自レ今以後、不レ得レ擇レ錢、若有下實知二官錢一、輙嫌擇者上、勅使二杖一百一、其濫錢者、主客相對破レ之、即送二市司一」トアリ、此時濫錢ト云ヘルハ、イカナルモノニヤ、私鑄ノコトモ測リガタク、コノ以前五年ノ條ニ、「太政官議奏、令出、蓄レ錢、勅有レ進二位階一、恐望レ利百姓、或多盜鑄、於レ律私鑄猶輕二罪法一、故權立二重刑一、禁二斷未然一、凡私鑄レ錢者、斬、從者沒レ官、家口皆流、五保知而不レ告者、與同レ罪」トアレバ、ソノコトモアルベカラズ、劉氏鴻書ニ、「日本以二漢唐之錢一爲レ市」トアレバ、異國ノ錢多ク流レ來リシモノアリテ、反テ官錢ヲ擇ビ、或ハ濫惡ノ錢モアリシナラン歟

萬年通寶

新撰錢譜曰、萬年通寶錢、大者徑九分强、重一錢五分、小者徑八分、重八分、輪郭渾重、字文明坦、今世存甚多

續日本紀曰、天平七年、閏十一月、更置二鑄錢司一、天平寶字四年、三月、勅錢之爲レ用行レ之已久、公私要便、莫レ甚二於斯一、頃者私鑄稍多、僞濫既半、頓將二禁斷一、恐有二騷擾一、宜下造二新樣一、與レ舊並行上、庶無レ損二於民一、有レ益二於國一、其新錢、文曰二萬年通寶一、以レ一當二舊錢之十一、銀錢、文曰二大平元寶一、以レ一當二新錢之十一、金錢、文曰二開基勝寶一、以レ一當二銀錢之十一、又寶龜三年、八月、太政官奏、請新舊同

三代實錄曰、貞觀十二年、正月、詔宜レ變ニ舊色於青蚨一、文曰ニ貞觀永寶一、一以當ニ舊之十一、八月、鑄錢司進ニ新鑄貞觀錢一千一百十貫文一、十四年、九月、新鑄貞觀錢、文字破滅、輪郭無レ全、凡在ニ賣買一、嫌弃大半、譴ニ責鑄錢司一、令ニ分明鑄作一

拾芥抄曰、貞觀永寶、自ニ今年一至ニ寛平元年一、經ニ八年一

寛平大寶

新撰錢譜曰、寛平大寶、徑六分五釐、重九分、或一錢一分、錢質至厚、今尚多

拾芥抄曰、寛平大寶、自ニ寛平二年五月一、至ニ延喜六年一、經ニ十七年一

延喜通寶

新撰錢譜曰、延喜通寶、徑六分五釐、重七分」、秀按ニ、三才圖會ニ、倭國錢トテ延喜通寶ヲ載ス

拾芥抄曰、延喜通寶、自ニ延喜七年十一月三日一、至ニ天德元年一、經ニ卅四年一、錢譜曰、五十一年之訛

乾元大寶 乾坤通寶 天正通寶

新撰錢譜曰、乾元大寶、徑六分五釐、重六分、今尚存、自ニ饒益一以下五錢、皆文字昏晦、製作不レ精、脊文亦夷漫、日本紀略曰、天德二年戊午、三月二十五日、改ニ錢貨文延喜通寶一、爲ニ乾元大寶一、圖書允阿保懷之書ニ錢文一

拾芥抄曰、乾元大寶、天德二年三月廿五日、件錢自ニ今年一、至ニ應和三年七月五日一」トアリ、秀按ニ、コ

ノ文ニヨレバ、應和ニ改鑄アリシト見ユレドモ、載セズ、東鑑脱漏ニ、「嘉禎二年八月、先レ是以ニ準布一爲レ帖、至レ此又用ニ銅錢一」トアリ、サラバ應和ヨリ以來、二百餘年ハ、銅錢通用ヲ停メラレ、此ニ至ッテ、又用ニ銅錢一ラレシコトニヤ、サラバコノ時ノ銅錢ハ、イカナル錢ニヤアリシ、未レ詳

寶貨事略曰、此後本朝ニテ錢ヲ鑄ラレシコト未レ聞、皆々異朝歴代ノ錢ヲ用ヰシトミエテ、大明永樂ノ天子、太宗ノ代ニ及デ、鹿苑公方義滿ニ、永樂新錢ヲ頒賜ヘリ、其後東山公方義政ノ世ニ、寛正五年・文明七年・同十二年、三度マデ大明ノ天子ニ、錢ヲ賜ルベキヨシ望請タル中ニモ、文明十五年ニハ、十萬貫ヲダニ賜ハリナバ、我國ノ用足ナンヽ歎マウサレキ、其頃ニハカホドマデニ、我國ノ財用ハ乏シカリキ、「慶長十三年十二月、止ニ永樂錢一用ニ京錢一」京錢トイフハ、異朝代々ノ古錢ノ事ナリ

分田備考曰、乾元大寶ノ後ハ、鑄錢ノ沙汰モナク、國用乏シク、士民多クハ外國ノ錢ヲ交ヘテ通用セシニ、法曹至要抄ニ、建久四年、七月四日ノ宣旨云、「應ニ自レ今以後、永從下停ニ止宋朝錢貨一事上」トアレド、コレモ錢ヲバ鑄ラレズ、融通アシク、サシツカフルコトモアリシヤ、北條時宗執政ノ頃ニハ、金ヲ元ニ遣ハシテ、銅錢ヲ買求ム、元史ニ「至正十四年、日本遣ニ商人一持レ金來易ニ銅錢一、許レ之」ト見エタリ、天德二年ヨリ、三百七十七年ニシテ、後醍醐帝、建武元年ニ至リ、乾坤通寶ヲ鑄ラレシナレド、天下ニ流布スルマデモナク、亂世トナリ、其事ヤミヌレバ、其後タヾタヾ外國ノ錢ヲ以テ、專ラ國用ニ充ラル、建武式目追加ニ、永正五年ノ定ヲノセテ曰、セイセンノギ、京錢ウチラメヲノゾク、其

外ノトタウ（渡唐）錢、エイラクコウブ（永樂洪武）センヽセントク（宣德）、ワレ錢、（但ワレトナラザル錢）以下トリ合セテ、百文ニ三十二錢、（ケリヤウ三分一可レ在レ之）於ニ向後一トリワタスベキ事、アク錢賣買一切可ニ停止一事」トアリ、又「於ニ古今渡唐錢一者、悉以可レ取ニ用之一」トモアリ、宋明ノ錢、其頃天下一般ニ行ハレシコト知ルベシ、其内永樂錢ハ、銅性モヨク、又數多ク渡リシユヘ、遂ニハ公用ニモ用ヰルコトニナリシニヤ、天正ノ頃ハ、天正通寳ヲ鑄ラレシカド、天正十年ニ信長ヨリ、伊勢造營料ニ下行セシハ、永樂錢ニテアリシ、殊ニ關東ニテハ、天文ノ末、北條氏號令ヲ下シ、他錢ヲ用ヰズ、公私共ニ永樂錢ヲ通用スト云フ、乍レ去外國ノ錢、限リアルモノナレバ、神祖慶長十三年ニ、永樂。鐚ノ二錢、相交ヘテ通用スベキヨシ令ゼラル、サレド錢ニ美惡撰錢ノ爭ヒアランコトヲハカリテ、永樂壹貫文ト、鐚四貫文宛ノ積リタルベシト定メラル

武家盛衰記曰、應永十年八月、唐船相州三崎浦ヘ漂着ス、永樂錢數萬貫アリ、（按、分田備考曰、應永十年ハ、永樂元年ニ當ル、永樂錢ナ鑄シハ、永樂九年ナレバ、漂船持來ルベキヤウナシ）足利滿兼、關東ニテ此錢ヲ以テ賣買スベシト定ラル、（分田備考曰、足利滿兼、應永十七年卒、永樂八年ニ當ル、時代相違ナリ、）其後、天文十九年、關東ニ永樂ニ鐚ト云惡鐚ヲ取交ルユヘ、コレヲ撰ミ鬪爭ス、天正ノ始メ、北條氏康、關東ニテ永樂ヲ用ヒ、他錢ヲ用ベカラズト制ス、故ニ鐚ハ廢シテ、上方ヘ上リ、永樂許關東ニ止ル、故ニ鐚ヲ名ヅケテ京錢ト云、慶長九年ヨリ、天下悉ク永樂ヲ用ユ、然レドモ鐚モ弃ベカラズトテ、永樂一錢ノ代ニ、鐚四錢ヲ遣フ、去レドモ善惡ヲ撰ミ論ジ、賣買輙カラザリシカバ、神君永樂ヲ禁ジ、鐚ヲ可レ用ノ旨、札ヲ立ラル、是ヨリ永樂ハ廢シケリ、元和二年ノ制令アリ、大カケ錢、ワレ錢、形ナ

シ錢、コロ錢、新惡錢、ナマリ錢、コノ外撰ベカラザル旨ナリ、分田備考曰、コロ錢ハ、今世ニイフ、カハリ錢ノ事ナルベシ、白石ノ紳書ニ、コロ錢トイフ字ハ、古文錢ト覺ユトアリ、又洪武錢トモイフトミエタリ、又藤原忠寄曰、圖繪宗彝、三才圖繪ニ、梅花ヲ畫キタル中ニ、○如レ此花形ヲ、古魯錢トイフ、是ヲ以テ考ルニ、フチノアリタル錢ナルベシ、形ナシ錢ト云ハ、銅板ナドヲ切テ、文字ナキ錢也、古ヘモアリト見エテ、東鑑弘長三年ニ、切錢停止ノコトアリ秀按ニ、金銀圖錄曰、太閤ノ時、文祿・慶長ノ二錢ヲ鑄ラル、文祿通寶、重サ七分五厘、慶長通寶、重サ七分トアリ、何年鑄ラレシニヤ、未ダ所レ見ナシ

寬永通寶

寶貨事略曰、「寬永十三年、新鑄ニ錢寬永通寶ニ」江戸ト近江國坂本ト兩所ニテ鑄ル、從レ是シテ本朝ノ銅錢、豐ニナリタリ、猷廟ノ御恩德モ、又難レ有御事ナリ、コノ後、寬文年中、又新錢ヲ鑄ル、裏ニ文ノ字ヲシルサル、按、藤原忠寄云、寬永十三年ノ錢文ハ、烏丸權大納言光廣卿ノ筆ナリ

秀按ニ、水戸町人佐藤氏家記曰、祖父佐藤新助、元和中ヨリ勘辨ヲ以テ、寬永二年新錢鑄立願、江戸相濟、錢座取立、無レ間死ス、父庄兵衛、十四歲故、姑相止、十二年又相願、江戸町人三久保屋甚衛門ト、寬永ノ新錢元祖ノ旨願濟、水戸ニテ新錢大分造リ出シタリ、以後駿州、其外四ケ國ヨリ錢座願免サレ、庄兵衛及甚衛門、惣錢座頭ニ仰付ラル所、カルメノ爲レ似錢、所々ヨリ鑄出ニ付、寬永十七年、辰八月、江戸共ニ七ケ國ノ錢座、御停止ニ仰付ラルトアリ、秀嘗テ郡奉行寬永ノ舊記ヲ閱セシニ、コノ鑄錢ノ事ハ見エタリシナリ

鄉黨遺聞曰、古錢水戸手ト云モノアリ、大錢ノ皇宋通寶ナド、種々アリトイヘリ、コレハ萬千代君如

ﾚ此事好ミタマヒテ、戯レニ鑄サシメラレシトナリ、其處ハ、今ノ錢屋ナリト云フ、秀按ニ、錢屋ト云地、今水戸城東ニアルナリ、コレニヨリテ考フルニ、コレ等ノ事ニヨリ、錢ヲ鑄ルコトモ心得アリテ、佐藤新助ガ願モアリシニヤ、サラバ寛永錢ハ、水戸ヲ以テ初メトスルナリ

寛永追々鑄補アリシカド、猶融通少ナク、滯ルコトアリシカバ、錢ノ買置スベカラザル旨、數々令アリシコト、正徳ノ日記ニ見エタリ、コレニヨリ引續キテ補鑄アリ、終ニハ砂鐵ニテ鑄造スル如キノ惡錢モ出來シナリ、藤叔藏寛永錢譜ヲ作リテ、各種ヲ審カニセリ、今其書ヲ藏セザレバ挍セズ、鈴木重宣、見行錢ノ中ヨリ、錢譜ニ載セタルモノヲ選擇シテ、贈ラル丶モノ左ノ如シ

淺草錢、三種、寛永十三年、至ニ明暦中ー、江戸淺草所ﾚ鑄、銅質精練、有ニ黄褐三品ー、錢譜所ﾚ載、數十種

秀按ニ、世ニ二水寛永アリ、永ノ字ヲ永ニ作レリ、後水尾天皇ノ宸筆ナリト云フ、定テ錢譜ニハアルベシ

芝錢、紫褐二品、寛永十三年、江戸芝所ﾚ鑄

坂本錢、寛永十三年、近江坂本所ﾚ鑄

銅佛文錢、肥瘦二品、寛文三年、至ニ天和三年ー、江戸龜戸所ﾚ鑄、此鑄ニ毀平安方廣寺銅佛ー、鑄ﾚ之、背ニ文ノ字アリ

秀按ニ、舊章錄曰、裏ニ文字アリ、世ニ是ヲ文錢ト云、河越侯京大佛ノ銅像ヲ毀テ、寛文錢ヲ鑄ラル、英雄ノ仕方ナリ

北齊書、王則性貪婪、在レ州取受非レ法、舊京諸像、毀以鑄レ錢、于レ時世號ニ河陽錢一、南史南平王偉傳曰、武帝軍東下、用度不レ足、偉取ニ襄陽寺銅佛一、毀以爲レ錢、翠軒史抄引レ之

高庸書文錢、二品、寛文中、龜戸所レ鑄、左衛門大尉狛高庸書、一種有下無ニ脊文一者上

元祿龜戸錢、元祿四年、龜戸所レ鑄、一說元祿十年、至ニ寶永元年一

荻原錢、元祿十二年、平安七條、及江戸所レ鑄

秀按、三王外紀曰、元祿中、又鑄ニ銅錢一、和レ銅以下鉛・錫、及搗ニ敗陶器一爲上末、以糅レ之、而形小焉、重六分強、自有ニ銅錢一以來、未レ有ニ若レ是之惡者一

續會要曰、慶曆中、知商州皮仲容采ニ青水青銅一鑄レ錢張奮號ニ萬選青錢一、曰レ青者、別ニ其非ニ紅黃一也、紅銅加レ鉛則黃、鉛太多則色雜近レ黝、鑄者煮黃レ之

丸屋錢、寶永五年、至ニ正德四年一、龜戸所レ鑄

秀按、舊章錄曰、寶永・寛文ノ錢ハ十分ナルニ、元祿・寶永ノ新錢ハ、重サ六七分ナリ

正德龜戸錢、肥瘦二品、正德初、廢ニ寶永錢一、江戸龜戸所レ鑄、刮ニ文錢脊一爲レ樣

耳白錢、正德四年、至ニ享保三年一、龜戸所レ鑄、其鑄同ニ文錢一、按自ニ丸屋錢一至レ此、其樣同不レ可ニ明辨一

正德佐錢、正德四年、佐渡相川所レ鑄、（背有二佐字一）

七條錢、平安七條所レ鑄

深川錢、享保十一年、至二十七年一、江戶深川所レ鑄

跳錢、享保十三年、至二十五年一、攝州難波村所レ鑄

仙字錢、享保十三年、至二十七年一、仙臺石卷所レ鑄、此非三皆有二背文一、鑄所初開時、一緡百錢、兩端一錢、各置二背文一、（背有二仙字一）

享保佐錢、享保十三年、佐渡相川所レ鑄、其鎔摹二文錢一、（背有二佐字一）

十字鋏錢、元文元年、深川十萬坪所レ鑄、後止、背文置二十字一、肉郭如二鑿記一、不レ常二其處一、又有レ無二背文、及肉郭之十字者一、此錢有二銅・鋏・二品一、摸狀皆同、（背有二十字一）

秀按、梁普通四年、始鑄二鐵錢一、五代史、南唐世家、李煜乾德二年、始用二鐵錢一

鳥羽淸水錢、元文元年、山城鳥羽橫大路所レ鑄

鳥羽有來錢、元文元年、鳥羽橫大路所レ鑄

元文鳥羽錢、二品、元文元年、鳥羽橫大路所レ鑄

小字錢二品、元文元年、下總小梅所レ鑄、（背有二小字一）

猿江錢、元文元年、下總猿江所レ鑄

若山錢、元文元年、紀州若山所レ鑄

宇津中島錢、元文元年、紀州宇津・及中島所レ鑄、而二所所レ鑄、今混不レ可レ知、鐵錢

伏見錢、元文元年、山城伏見所レ鑄

佐字銕錢、無二背文一者、元文中、佐渡相川所レ鑄、背文錆鏥難レ辨

別種佐字錢、佐渡相川所レ鑄、鼓鑄年未レ詳、背有二佐字一

相川虎尾錢、佐渡相川所レ鑄、鼓鑄年未レ詳

元文龜戸錢、元文二年、江戸龜戸所レ鑄

寂光寺錢、元文元年下野寂光寺所レ鑄

後躍錢、二品、元文二年、出羽秋田所レ鑄

元文仙字錢、元文二年、仙臺石卷所レ鑄、無二背文一者

藤澤錢、元文二年、相州藤澤所レ鑄

川字銕錢、元文二年、深川小那岐川所レ鑄、川字在二肉郭一、然錆鏥難レ辨

加島鐵錢二品、元文三年、至二六年一、攝州加島所レ鑄

之呂女錢、大小二品、元文四年、深川所レ鑄

押上錢、元文四年、下總押上所レ鑄、鐵錢

元錢、大小二品、寛保元年、攝州高津所ﾚ鑄、背有ニ元字一

足錢、大小二品、寛保二年、下野足尾所ﾚ鑄、背有ニ足字一

明和龜戶鉄錢、明和二年、至ニ四年一、江戶龜戶所ﾚ鑄

長錢、明和二年、肥前長崎所ﾚ鑄、背有ニ長字一

伏見鉄錢、明和四年、至ニ六年一、山城伏見所ﾚ鑄

四當假鍮錢、二品、明和五年、江戶龜戶所ﾚ鑄、背有ニ十波一、一有ニ二十一波一

秀按、檀弓正義曰、王莽大泉、今大四文錢也、晉書食貨志曰、元帝過ﾚ江、用ニ孫氏舊錢一、輕重雜行、大者謂ニ之比輪一、中者謂ニ之四文一

明和龜戶錢、明和五年、龜戶止ニ鉄錢一、所ﾚ鑄

久錢、二品、明和六年、至ニ八年一、水戶久慈郡太田鄕所ﾚ鑄、九年以後所ﾚ鑄、久二錢、野口多新次書鉄錢、背有ニ久字一、一有ニ久二一

秀按、臨池談曰、太田錢ハ、野口多新次書、久二ハ澤田東江ノ書ナリ

千錢、明和七年、仙臺石卷所ﾚ鑄、鉄錢、背有ニ千字一

安永佐錢、安永□年、佐渡相川所ﾚ鑄

仙臺錢、天明四年、仙臺石卷所ﾚ鑄、鉄錢

秀按、此種可ﾚ疑、既ニ此鑄アランニハ、撫角ノ擧アルベカラズ

撫角錢　天明四年、仙臺石卷所レ鑄、鐵錢、仙臺通寶

秀按、是ハ仙臺領中ノミ通用ナリ、民便トセズ、通用錢一文ノ代リニ、三錢ヲ直セシトナリ

寶永通寶

折焼柴記曰、寶永二年、稻垣對馬守重富ガハカラヒニテ、當十大錢ヲ鑄出サル、六年己丑、正月十日大喪ノ御事聞ヘテ、十七日ニ大錢ヲ廢セラルヽノ由、仰出サル

舊章錄曰、寶永中、大錢ヲ鑄ラル、徑一寸五分許ニシテ、表文寶永通寶、周郭ニ永久世用ノ四字アリ、十文ニ直ス、文廟ノ初政ニ廢セラル、又曰、寶永通寶字、樋口彌門書ス、謝禮トシテ、錢座ヨリ黄金一枚ヲ贈ル、寛文中ニ、文ノ一字ヲ辻春達カキシ時ノ例ナリ

三王外記曰、萩原重秀、請レ鑄ニ大錢一、徑一寸三分、重ニ寛永二錢二分、文曰、寶永通寶、背郭有ニ四圓一、圓內款ニ永久世用四字一、一錢直ニ寛永錢十錢一、寶永五年錢成、民甚不レ便、商賈不レ取、錢益不レ行、文王立而大錢遂廢、又曰、寶永六年、正月壬午、憲王殂、翌日癸未、太子出レ令、止ニ大錢一

錢稱疋

和爾雅曰、錢數稱レ疋、見ニ于食貨志一、又和俗錢一貫、謂ニ是百疋一、近古射者、以ニ鳥獸一爲レ賄、以ニ錢十文一充ニ鳥獸一疋一、故百錢爲ニ十疋一、千錢爲ニ百疋一

金石雜識曰、中古多賭ニ鳥獸一、以ニ鳥日十錢一、充ニ鳥一疋一、故百錢謂ニ十疋一、一貫稱ニ百疋一、萬疋可ニ准知一

也、黑川氏說也

地方落穗集曰、金一分ヲ百疋ト云コトハ、古ハ鐚四貫文ヲ以テ、金一兩ニ通用ス、古ヘハ駒引錢ヲ鑄テ、一文ヲ常錢十文ニツカフト云フ、又鐚百文ノ中、十文ノ境ニ駒引一文ヅツ加フルトモ云ヘリ、仍テ、錢十文ヲ一疋トシテ、百文ヲ十疋トス、一貫文ハ一分ナルユヘ百疋ト云、又目錄ヲ何百疋トスルハ、馬代ニ用ユルニヨリ疋ト云、緣アリト云ヘリ

省百

地方落穗集曰、今九十六文ニ通用スルコト、長錢ヲ六ツ・八ツ・十二・十六ニ割時、何レモ端ト出ル、然ルトキハ、通用自由ナラズ、算用ノ通ヒヨキ故、九六ニスルナリ

甲陽軍鑑ニ、長尾意玄曰、ユタカ成代ニハ、カケミチ有コト、長久ノ政ナレバ、代物ヲバ九十六文ニシテ、四文ヅツノカケミチ、可レ然、其上卅二錢ヅツ、三ツニワケ、八錢ヲ二ツニワケ、二錢ヲ二ツニ分レバ、一錢トナル

四家合考曰、白川ハ奥州ノ大關ナレバ、往還ノ旅賈ヨリ、役儀ヲトル、百文ヲ四錢省キ、九十六文ヲ以テ、百文ノ數ニ用ユ、中頃永樂錢ノ異朝ヨリ渡リ、帝都ヘ駄上スル時、門司・赤間ノ關ニテ、百文ノ內四錢ヲ役儀ニ押取リ、九十六文ヲ以テ、帝都ノ百文ニ用キタル例ニテ、如レ此

梁書曰、武帝中大同元年詔、頃聞外間多用ニ九陌錢一、陌減則物貴、陌足則物賤、非ニ物貴錢一是心有ニ

顚倒一、自レ今可レ通二用足陌錢一

堅瓠集曰、梁時用レ錢、自二破嶺一以東、八十爲レ陌、名曰二東錢一、江・郢以上、七十爲レ陌、名曰二西錢一、京師以二九十一爲レ陌、名曰二長錢一、中大同元年、武帝乃詔、通二用足陌一、詔下而人不レ從、錢陌益少、至二末年一、遂以二三十五一爲レ陌、今民間以二九十八一爲レ陌、京師貫賚、以二三十一爲レ陌、吾鄉以二紙裹一、賚レ人者多寡隨意、大約以二四十一爲レ陌、較二梁時陌法一、不二甚相遠一

五代史、王章傳曰、緡錢出入、皆以二八十一爲レ陌、章減二其出者陌三一

夫子曰、信而好レ古、又曰、溫レ故而知レ新、夫不レ信而好レ古、則不レ能二以通一今也、不レ溫レ故而知レ新、則不レ能二以濟一其事一也、好レ古之道、知レ新之術、厥可レ緩乎哉、吾楓軒先生、以二要職之選一、出臨二南部一、最盡二意治術一、其聽斷之暇、讀レ書不レ倦、讀則必筆焉、其中涉二農政一者、爲レ輯四卷、名曰二農政座右一、採覽之博、有レ用二事實一、其與二治民一者、不レ可レ不レ知之書也、嗟呼先生、以二斯意一臨二斯民一、字愛敎戒、政績攸レ底、不レ減二五袴兩岐之古一、且逮二去レ廳之後一、民慕二其德一而不レ已、得二民心一之深也、蓋雖レ出二至誠之行一、亦好レ古通レ今、溫レ故知レ新之功、其可レ謂レ不レ然乎、正敬謹讀二是書一、有下不レ勝二其喜一者上、因跋二其言一云

文政庚寅春閏三月

門人　大内正敬謹識

農政座右卷之四 大尾

井田集覧

友部直夫
小宮山昌秀 著

井田集覽序

友部直夫好正、著ニ孟子井田釋一、使ニ予校下之、予學淺陋、何足レ知レ之、雖レ然直夫、不下以ニ予之不敏ニ而外上シ之命焉、何敢辭レ之、即受讀周閱、不レ能レ無レ疑者、集ニ錄先賢諸說一、以備ニ參考一、名曰ニ井田集覽一、有下裨ニ補直夫之書萬一ニ者上、則幸甚矣

文政二年三月十一日

小宮山昌秀識

井田集覽目錄

井田集覽

友部直夫
小宮山昌秀　著

井

周禮小司徒、乃經二土地一而井二牧其田野一、九夫爲レ井、四井爲レ邑、匠人、九夫爲レ井、井間廣四尺、深四尺、謂二之溝一

孟子曰、方里而井、井九百畝、其中爲二公田一、八家皆私二百畝一、同養二公田一、公事畢、然後敢治二私事一、所三以別二野人一也、滕文公上

朱子曰、此詳言二井田形體之制一、乃周之助法也、公田以爲二君子之祿一、而私田野人之所レ受、先レ公後レ私、所二以君子野人之分一也、不レ言二君子一、據二野人一而言、省文耳集註

趙岐曰、方一里者、九百畝之地也、地爲二一井八家一、各私得二百畝一、同共養二其公田之苗稼一、公田八十畝、其餘二十畝、以爲二廬井宅園圃一、家二畝半也、先レ公後レ私、遂及二我私一之義也、則是野人之事、所三以別二於士伍一者也

孫奭曰、方里而井、以二其方一里之地一、爲二之井田九百畝一、以三其一井之田、有二九百畝一、其中爲二公

田一、以二其九百畝一、於二井中一抽二百畝一、爲二公田之苗稼一、八家皆私二百畝一、以二八口之家一、皆受二八百畝一、以爲二己之私田一、苗稼同養、公田公事畢、然後敢治二私事一、以二其八口之家一同芙耕、兼二其公田一、乃至二公田之事了畢一、然後耕二治己之私田一、以爲二之私事一、所三以別二野人一也、此所下以、爲二野人之事一、以別中於士伍上者也

前漢志曰、六尺爲レ步、步百爲レ晦、晦百爲レ夫、夫三爲レ屋、屋三爲レ井、井方一里、是爲二九夫一、八家共レ之、各受二私田百晦・公田十晦一

公羊傳宣十五年何休註曰、井田之義、一曰、無レ泄二地氣一疏曰、謂二共冬前相助耦一云二曰、無レ費二一家一謂二共田器相通一云三曰、同二風俗一謂二共同耕而相習一云四曰、合二巧拙一謂三共治二耒耜一云五曰、通二財貨一謂下井地相交、遂生二恩義一、貨財有無、可中以相通上云因二井田一以爲レ市、故俗語曰二市井一古者邑居、秋冬之時、入保二城郭一、春夏之時、出居二田野一、既作二田野一、遂相交二易井田之處一、而爲二此市一、故謂二之市井一云

易、井卦大全

建安丘氏曰、无二君子一莫レ治二野人一、无二野人一莫レ養二君子一、君勞二乎民一、民助二乎君一、古者井田之制、或取二諸此一

雲峰胡氏曰、井以喩レ性、然則勞民勸相、所三以養二人之性一也、而以レ君養レ民、使二民自養一、又有二井田之義一焉

楊愼丹鉛總錄曰、孟子曰、詩云、雨二我公田一、遂及二我私一、此觀レ之雖レ周亦助也、孟子ハ周末ノ人也、公田私

田ノ説此時已ニ詳ナラズ、乃詩ヲ用テ之ヲ想像ス、世ヲ隔ルコトニ似タリ、故ニ孟子此其大略ト云、又曰、嘗聞其略ヿ、蓋諸侯其籍ヲ滅シ去、孟子之ヲ略シテ之ヲ疑フ、又想像シテ之ヲ云、之ヲ愼也、荀子云、孟子略先王ニ法テ其統ヲ知ズ、朱子曰、孟子ノ夏后氏五十而貢スト云一節、五十ヨリ増シテ七十トナシ、七十ヨリ増テ百畝トナス、田理疆界ノ更改スルコト、恐ラクハコノ理ナシ、愚嘗テ私ニ之ヲ論ゼン、三皇五帝ノ興ル皆中原ニアリ、楊子云、其法伏羲ニ始リテ堯ニ成ル、伏羲卦ヲ畫シテ已ニ井ノ象アリ、劉晛云、井牧ハ黄帝ニ始ル、韋昭ノ三五曆ニ曰、黄帝八家ヲ井トス、井ノ四道ヲ開テ八宅ヲ分ツ、井ヲ井ニ鑿ルトアレバ、井田ハ黄帝ヨリ始ル也、井ハ即助法、牧ハ即貢法、夏殷ノ田制、黄帝ノ世ヨリ已ニ然リ、堯洪水ニ遭ニ至テ、禹ニ命ジテ九州ヲ分タシメテ貢賦ヲ定ム、孟子ニ、所謂五十ニシテ貢スト云モノ也、然レドモ夏小正ヲ考ルニ、農公田ニ服スト云ヲミレバ、夏トイヘドモ亦助也、左傳ニ虞思有云、昔夏ノ少康田一井アリ、衆一旅アリ、司馬法ニ、十井ヲ通トス、十通ヲ成トス、周禮ニ、四丘ヲ甸トス、旁一里ヲ成トス、未ダ少康ノ一成ハ司馬法ノ一成ノ如クナルヤヲ知ラズ、抑亦周禮ノ一成ナル歟、コレハ姑ク論ゼズ、既ニ一成一旅ヲ分ツハ、固ニ井田ノ法也、井田ハ黄帝ノ良法、禹ニ至テ之ヲ廢スベカラズ、洪水方割テ未舊制ニ復スルニ遑アラズ、姑ク民ノ宜ニ從フ也、禹貢ニ陳ズル所ノ如キハ、天下ヲ有ノ後又重テ其制ヲ定タルナリ、衍沃ハ之ヲ井ニシ、皐濕ハ之ヲ牧ニス左傳未知ベカラザルナリ、禹貢楊州ノ賦ハ、下ノ下ノ如キハ其地尤窪ク、洪水モ亦甚シ、固ニ其宜也、鼎ヲ

鑄物ニ象ノ日ニ及デハ、則揚州ヲ第一トス、梁州ヲ第二トス、而雍州ハ後ニアリ、コレ詳ニ考ヘ深ク思フニ非レバ、何ヲ以カ之ヲ知ンヤ、總テ之ヲ論ズルニ、黃帝ヨリ周ニ至ルマデ井牧並用フ、貢助通ジ行フ、井ト助トハ平地ニ用ヒ、牧ト貢トハ山陵ニ用フ、所謂地ノ利ニ因ルナリ、周禮、三農九穀ヲ生ズト云、山農・澤農・平地農アリ、一論ヲ執テ云ベカラズ、（隨讀小海錄）

郝敬曰、先王之世、秋毫無レ所レ取ニ于民一、雖ニ百畝之田一、但借ニ其力一以助耕、而不レ稅、況正供之外、肯苟取乎、故關市與ニ國中一、民居皆無レ稅也（解說）秀按ニ、此說大ニ先王無私ノ意ヲ知レリ、實ニ如レ此ニシテ甚明ラカナリ

五畝之宅

孟子曰、五畝之宅、樹レ之以レ桑、五十者可ニ以衣一レ帛矣（梁惠王上）

又曰、五畝之宅、樹ニ牆下一以レ桑、匹婦蠶レ之、則老者足ニ以衣一レ帛矣（盡心上）

漢食貨志曰、井方一里、是爲ニ九夫一、八家共レ之、各受ニ私田百畮・公田十畮一、是爲ニ八百八十畮一、餘ニ二十畮一、以爲ニ廬舍一

趙岐曰、廬井邑居、各二畝半以爲レ宅、各入ニ保城二畝半一、故爲ニ五畝一也

正義曰、漢志云云

小雅（甫田）曰、倬ニ彼甫田一、歲取ニ十千一、鄭箋曰、以丈夫稅田也、九夫爲レ井、井稅一夫、其田百畝、正義

曰、史傳說助貢之法、惟孟子爲明、鄭據其言、以什一而徹、爲通外內之率、理則然矣、而食貨志云々其言取孟子爲說、而後其本旨、班固既有此言、由是群儒遂謬、何休之注公羊、范甯之解穀梁、趙岐之注孟子、宋均之說樂緯、咸以然、皆義異於鄭、理不可通、何則言井九百畝、其中爲公田、則中央百畝、共爲公田、不得家取十畝也、又言、八家皆私百畝、則百畝皆屬公矣、何得復以二十畝爲廬舍也、言同養公田、是八家共理公事、何得家分十畝自治之也、若家取十畝、各自治之、安得謂之同養也、若二十畝爲廬舍、則家別二畝半、亦入私矣、則家別有百二畝半、何得爲八家皆私百畝也、此皆諸儒之謬、鄭於匠人注云、野九夫而稅一、此箋云、井稅一夫、其田百畝、是鄭意無家別公田十畝、及二畝半爲廬舍之事、俗以鄭說同於諸儒、是又失鄭旨矣

秀按、是旣ニ漢志ノ非ヲ明シ、諸儒ノ謬ヲ開ク、其言悉セリ、予ハ是ニ從ン

朱子曰、五畝之宅、一夫所受、二畝半在田、二畝半在邑、田中不得有木、恐妨五穀、故於牆下植桑、以供蠶事、集註

蔡虛齋曰、二畝半在田曰廬、二畝半在邑曰里、廬各在其田中、而里聚居於邑也、春令民畢出在野、冬則畢入於邑、蒙引

金仁山曰、一夫一婦、受田百畝、又受田廬之地二畝半、邑居二畝半、田以九百畝爲一井、八面皆百畝爲私田、八家受之、內一百畝爲公田、又有公田之內除二十畝爲廬舍八家、則無家得二畝

半ハ、邑屋所レ受亦如レ之大全

郝京山曰、五畝之宅、一夫數口之家所レ居也、二畝半在レ田、二畝半在レ邑、漢志云々周禮有ニ國宅ハ、即城中之宅解說

伊藤仁齋曰、五畝之宅、一夫所レ受在レ邑、田中有レ木、必妨ニ五穀ハ、故於レ邑植レ桑、以供ニ蠶事ハ、舊說謂ニ二畝半在レ田、二畝半在レ邑、恐非也古義

又曰、班固有下以ニ公田二十畝ハ、爲ニ廬舍ノ之說上、然孟子無ニ其說ハ、且觀レ詩曰、同ニ我婦子ハ、饁ニ彼南畝ハ、則其無ニ廬舍ノ益明矣

東涯曰、按ニ舊說ニ云々其說始ニ乎漢志ニ云々、至レ是始有ニ二畝半說ハ、集註因レ之云々、然玩ニ本文ニ則曰、五畝之宅、樹レ之以レ桑、而又曰、百畝之田、勿レ奪ニ其時ハ、則每夫受ニ田百畝ハ、受ニ宅地五畝ノ可レ知矣、宅之五畝、猶ニ田之百畝ハ、受在ニ一處ハ、難レ見ニ在田在邑之別ハ、故此解改レ之古義標註

又曰、集註云々古義引レ詩爲レ證曰、云々或者難曰、詩不レ曰、中田有レ廬、疆場有レ瓜、則古者實有ニ廬舍ノ也、然所廬者艸々、縛廬非下構ニ成屋宅ニ之謂上也、則固不ニ相妨ノ矣、又按ニ論語ニ曰、十室之邑、孟子曰、萬室之邑、左傳曰、□□□□□□則知ニ古昔亦邑有ニ大小ハ、劇閙之差、猶ニ後世之制ノ耳讀書錄

秀按、廬井邑居各二歩半ニテハ、其不便利ナルコトイカントモスベカラズ、古人ト云ドモ如レ此ニハアルマジキナリ、殊ニ水田ノ外ニ陸田モナクンバアルベカラズ、廬ノ田ニアルモノハ假リノ廬ナルコ

ト明ラカナリ、東滙父子ノ説感ズベシ、而偶々上ニ載セタル正義ノ説ヲ遺セリ、又彼人ニモ近クコレト同説ノモノアリ、張翼ノ陔餘叢考曰、隨讀小海錄所引孟子五畝之宅注家皆云々漢食貨志云々ニ本ヅク、食貨志蓋又穀梁傳ノ「古者三百步爲里、名曰井田、井田者九百畝、公田居一、公田爲廬、井竈葱韭在焉」ト云ニ因テ、遂ニ意、公田ハ既ニ民ニ授テ廬ヲ爲バ、則邑中五畝アルベカラズ、當ニ是田ト邑各半ナルベシ、故ニ云、公二十畝、八家之ヲ分テ二畝半ヲ得テ廬舍トス、而城邑ノ居亦二畝半也、然ラバ孟子一則五畝之宅ト云、再則五畝之宅ト云、周禮ノ注ニ、「亦曰五畝之宅」トアリ、皆並ニ二畝半ノ宅ト云モノアラズ、是五畝一宅タルコト明也、モシ邑中ノ宅僅ニ二畝半ナラバ、何ゾ直ニ二畝半ノ宅ト云ザルヤ、田中ニ木アルコトヲ得ズ、既ニ二畝半ヲ以テ廬舍トスレバ、樹桑ハ邑中二畝半ノ宅ニ過ギズ、又何ヲ以テ「五畝之宅、樹之以桑」ト云ンヤ、蓋廬舍ハ憩息ノ地トス、公田中ニ於テ二畝半ノ宅ヲ占ルニ非ル也、穀梁ノ説未嘗テ本ナクンバ非ズ、詩經信南山ニ、「中田有廬、」中田ハ田中也、猶田間田ノ中ニ非ル也、詩ニ「疆場有瓜、」コレ廬ノ疆場ニ近キモノ也、廬ト云バ宅ニ非ルコト知ベシ、詩ニ又云、「饁彼南畝、」コレ又其ノ婦妻ノ邑中ノ宅ヨリ往テ饁ヲオクル也、婦女廬中ニ在ラザルコト知ルベシ

曲禮獻曰、宅者操書致、正義曰、書致謂圖書、於板丈尺、委曲書之、而致之於尊者也、古者田宅、悉爲官所賦、本不屬民、今得此田宅獻者、是或有重勳、爲君王所賜、可爲己有、故

得有レ獻

百畝之田

孟子曰、百畝之田、勿レ奪ニ其時一、數口之家、可ニ以無一レ飢矣 梁惠王上

朱子曰、百畝之田、亦一夫所レ受、至レ此則經界正、井地均、無ニ不レ受レ田之家一矣 集註

又曰、百畝之田、匹夫耕レ之、八口之家、可ニ以無一レ飢矣 盡心上

又曰、夫以ニ百畝之不一レ易、爲ニ己憂一者、農夫也 滕文公上

趙岐曰、一夫一婦、耕ニ耨百畝一、百畝之田、不レ可ニ以ニ徭役一奪中其時功上、則家給人足、農夫上中下、所食多少、各有レ差、故總言ニ數口之家一也

公羊傳 宣十五年 註、何休曰、聖人制ニ井田之法一、而口ニ分之一、一夫一婦受ニ田百畝一、以養ニ父母妻子一、五口爲ニ一家一、公田十畝、即所謂什一而稅也、廬舍二畝半、凡爲ニ田一頃十二畝半一、八家而九頃、共爲ニ一井一、故曰、井田廬舍在レ內、貴レ人也、公田次レ之、重レ公也、私田在レ外、賤レ私也

餘夫

孟子曰、餘夫二十五畝 滕文公上

程子曰、一夫上父母、下妻子、以ニ五口八口一、爲レ率、受ニ田百畝一、如有レ弟是餘夫也、年十六別受ニ田二十五畝一、俟ニ其壯而有一レ室、然後更受ニ百畝之田一、愚按、此百畝常制之外、又有ニ餘夫之田一、以厚ニ

野人也

秀按ニ、如此則國中ノ如井授セザルモノ別ニアルカ、サラバ彌佃田ノ如クナルベシ

趙岐曰、古者卿以下至於士、皆受圭田五十畝、所以供祭祀也、井田之民、養公田者受百畝、圭田半之、故五十畝、餘夫者、一家一人受田、其餘老少、尚有餘力者、受二十五畝、半於圭田、謂之餘夫也、受田者田萊、多少有上中下、周禮曰、餘夫亦如之、亦如上中下之等也王制曰、夫圭田無征、謂餘夫圭田、皆不當征賦也、時無圭田餘夫、孟子欲令復古、所以重祭祀利民之道也

孫奭曰、鄭司農云、戶計一夫一婦、而賦之田、其一戶有數口者、餘夫亦受此田也、夫圭田無征者、鄭氏云、夫猶治也、征稅也、治圭田者不稅、所以厚賢也、此則周禮之士田、以在近郊之地者也

秀按、周禮王制ニ泥ム故ニ、孟子本文ニナキコトヲ剩出ス

伊藤仁齋曰、圭田餘夫之制、蓋於井田百畝之外、別就奇間之地、以五十畝、盡爲圭田、二十五畝、盡爲餘夫、以授之也、後世講井田者、以爲盡天下之田、皆如棊局、苟如其說、則九州之中、無非井地、圭田餘夫、將何所授、可謂誤矣

王制曰、夫圭田無征、鄭注、夫猶治也、征稅也、孟子曰、卿以下必有圭田、治圭田者不稅、所

以厚賢也、此則周禮之士田、以任近郊之地稅什一、正義曰、夫圭田無征者、畿內無公田、故有圭田、卿大夫士、皆以治此、圭田公家、不稅其物、故云無征、必云圭者、圭潔白也、言卿大夫德行潔白、乃與之田、此殷禮也、殷政寬緩、厚重賢人、故不稅之、周則兼通士稅之、故註云、周禮之士田、以任近郊之地稅什一

貢

孟子曰、夏后氏、五十而貢、其實什一也（公孫丑上）

朱子曰、夏時一夫受田五十畝、而每夫計其五畝之入以爲貢、什一以十分之一爲常數（集註、郝敬曰、是仝貢自民也）

藍田呂氏曰、較數歲之中以爲常、是爲貢（性理大全六十九）

趙岐曰、民耕五十畝、貢上五畝

伊藤維禎曰、三代之制、畝數雖異、其實皆爲百畝、蓋夏后氏之五十、殷人畫爲七十、殷人之七十、周人畫爲百畝、步有長短、而地無廣狹、何者、百畝之糞、上農夫食九人、下農夫食五人、若夏后氏之制、五十而井、又貢其十一、則不及百畝之半、其所入不過足給夫婦之口、若上有父母、下有子弟、則將何以食之、故知夏后氏之制、本不若此、而三代之法、亦皆不與周制異也（古義）

秀按、仁齋臆度ノ見トイヘドモ、其理或ハ如レ此ナルベシ（再考、都敬既ニ此說アリ、仁齋ノ意暗ニ符合セルナリ）

蔡虚齋曰、夏時五十畝無ニ公田一、則計ニ其五畝之入一者、爲ニ取レ之之制一也、下文云、請野九一而助、國中什一使ニ自賦一、凡九一之内自有レ助、什一之一、則是使ニ自賦一者也、此具ニ證左一矣（引蒙）

朱子曰、嘗疑孟子所謂、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、恐不レ詳下如レ此先王疆ニ理天下之地一做中許多畝滄溝澮之類上、大段是費ニ人力一了、若レ是自ニ五十一、而增爲ニ七十一、自ニ七十一、而增爲ニ百畝一、則田間許多疆理、孟子當時未ニ必親見一、只是所レ聞如レ此、皆亦難ニ盡信一也（引蒙）

王制正義曰、劉氏及皇氏皆云、夏時民多、家得ニ五十畝一、而貢ニ五畝一、殷時民稍稀、家得ニ七十畝一、而助ニ七畝一、周時其民至稀、家得ニ百畝一、而徹ニ十畝一、故云、其實皆什一云々、夏時人衆、殷世人稀、又十口之家、雖レ得ニ五十畝之地一、皆不レ近ニ人情一、未レ知ニ可否一、熊氏一說、以爲ニ夏政寬簡一、一夫之地、惟稅ニ五十畝一、殷政稍急、一夫之地、稅ニ七十畝一、周政極煩、一夫之地、稅皆通稅、所レ稅之中、皆十而稅レ一、故云、其實皆什一、此則井田、雖レ不レ得ニ什一一、理稍可レ通、既古意難レ知、故彼此俱載農書、徐玄扈曰、三代制レ產、多寡不レ同、諸家之說互異、然以ニ愚意一言レ之、其間有ニ一可一レ論、有ニ一不一レ可レ論、嘗考ニ尺度畝法一、周之百畝、當ニ今田二十四畝五分有奇一而已、若ニ夏尺夏畝、與レ周等者一、其五十畝、當ニ今田十二畝有奇一而已、而謂レ足ニ以食ニ八口之家一乎、且聖王制レ產、必度ニ民之力可一レ治、必度ニ民之用可一レ足、此其尺度畝法、必有ニ異同一、今不レ可レ考也、此所謂不レ可レ論者也、其可レ論

者、語曰、務レ廣レ地者荒、詩曰、無田蕪田、維莠驕々、故后稷爲レ田、一畝三畎、伊尹作二爲區田一、負水澆灌、古之治レ田者、盡レ力盡レ法、而不レ務二多大一、禹時稷爲二農師一、未レ久也、於レ是洪水初治、作入之土甚多、深恐下其民務二于廣地一、以致中荒蕪上、故限二田五十一、不レ得レ踰レ制、而使レ精二於其業一、人々用二后稷之法一、即此五十之田、可三以食二八口之家一矣、治レ田既少、業既尙精、積レ久之後、因生二便巧一、如二后稷之耕一、兩耜爲レ耦、其孫叔均、遂作二中耕一是也、便巧既多、人力有レ餘、至二於殷周一、遂以漸加レ多、而其田亦治、故繇七十、而至二於百畝一、要使下人之力、足二以治下田、田之收、足二以食一レ人、必不レ至二於務レ廣而荒一耳、然周人治レ田既稍廣、蓄積必倍多、故周禮能以二九年耕一、餘二三年之食一矣約說

郝敬曰、古者六尺爲レ步、寛一步長、百步爲レ畝、畝百爲レ夫、三夫長、三百步爲レ里、四方皆三百步、爲二方一里一、中畫爲レ井、界爲二九區一、區百畝、此法非下自二殷人一始上也、唐虞以前、黃帝立レ步制レ畝、經レ土設レ井、因レ井制レ兵、兵法八陣、皆從レ井出、韋昭曰、黃帝八家爲レ井、井開二四道一、而八宅是也、至レ禹盡二力溝洫澮畎畝距川一、而井制大備、三代地皆井稅、皆什一、而畝有二五十・七十・百畝不レ同者一、非三代二易經界一也、以二尺步有二大小一也、王制云、古者以二周尺八尺一爲レ步、今以二周尺六尺四寸一爲レ步、古者百畝、當二今東田百五十六畝二十五步一寸六分有奇一、則是周尺小二于殷尺一、殷尺又小二于夏一、夏五十畝、可レ當二殷七十畝一、殷七十畝可レ當二周百畝一、地不レ增而步縮、則畝贏非二夏之貢無下井也、朱子疑二溝洫難一レ改、謂三孟子未二親見一、傳聞難レ信、非也、時阡陌未レ開、何爲レ未レ見備說

龍子曰、治レ地莫レ不レ善ニ於貢一、貢者挍ニ數歲之中一以爲レ常、樂歲粒米、狼戾多取レ之、而不レ爲レ虐、則寡取ニ之凶年一、糞ニ其田一而不レ足、則必取レ盈焉、爲ニ民父母一、使ニ民盻々然、將終歲勤動、不レ以養ニ其父母一、又稱貸而益レ之、使ニ老稚轉ニ乎溝壑一、惡在ニ其爲ニ民父母一也（孟滕文公上）

朱子曰、龍子古賢人、狼戾猶ニ狼藉一、言レ多也、糞壅也、（字集培也）盈滿也、盻恨視也、勤動勞苦也、稱擧也、貸借也、取ニ物於人一而出レ息、以償レ之也、益レ之以足ニ取盈之數一也、稚幼子也（集註）

秀按ニ、今ノ定免ト云モノニ似タリ

伊藤仁齋曰、龍子古賢人、當時或用ニ貢法一、或用ニ助法一、徒有ニ其名一而無ニ其實一、而貢法之害尤甚、故龍子因ニ其事實一而言レ之、非レ論ニ夏殷之法一也、貢者云々孟子解ニ龍子之言一如レ此、言豐年多取ニ之民一、不レ爲ニ暴虐一、則寡取レ之、至ニ於饑歲一、則民糞レ田尙無レ所レ得レ食、而反取ニ其稅一、必滿ニ其數一、不レ如ニ助法從ニ歲之饑穰一、以爲ニ登降一之爲上レ得也、然此特後世用レ法之弊、夏時貢法、必不ニ如レ此不善一也

蔡虛齋曰、按ニ數歲之中一、謂下樂歲與ニ凶歲一、二者之中上也、蓋數歲之內、自有ニ凶樂之不一レ同、此亦近ニ於子莫之執一レ中矣、然按ニ周制一、鄉遂用ニ貢法一、亦有ニ司稼之官一、巡レ野觀レ稼、其弊未レ至レ如ニ龍子之言一、乃當時諸侯、用ニ貢法一之弊耳

助

孟子曰、殷人七十而助、其實什一也、助者藉也（滕文公上）

朱子曰、商人始爲井田之制、以六百三十畝之地、畫爲九區、區七十畝、中爲公田、其外八家、各授一區、但借其力、以助耕公田、而不復稅其私田、助法乃是九一、而商制不可考、竊料、以十四畝爲廬舍、一夫實耕公田七畝、是亦不過什一也集註

趙岐曰、耕七十畝者、以七畝助公家

孟子曰、詩云、雨我公田、遂及我私、惟助爲有公田、由此觀之、雖周亦助也滕文公上

朱子曰、詩小雅大田之篇、雨降雨也、言願天雨於公田、而遂及私田、先公而後私也、當時助法盡廢、典籍不存、惟有此詩可見、周亦用助故、引之也

秀按ニ、孟子ノ學ニシテ詳ラカナラズ、詩ヲ引テ證セラルヽヲ見レバ、助法ノ行ハレザルコト既ニ久シカルベシ

孟子曰、耕者助而不稅、則天下之農皆悅、而願耕於其野矣

趙岐曰、助者井田什一、助佐公家治公田、不横稅賦、若履畝之類

孫奭曰、言耕田者、但以井田制之、使助佐公田而治、不以横稅取之、則天下爲之農者皆悅、而願耕作其郊野矣

朱子曰、但使出力以助耕公田、而不稅其私田也

郝敬曰、取民無制、由于貢法濫行、粟米布縷、一切取諸民、馴至征求無常、使卒無已、行助

法ニ置ニ公田一、使ニ上下公私、各有ニ定制一、君子之養、惟取ニ諸公田一、隨豊歉多寡、以ニ公田之入一待ニ公家之用一、秋毫無レ所レ須ニ于民一、然後可下杜ニ侵漁之端一、塞中貪暴之路上、此三代已行之良法、今日之急務也説解

王制曰、古者公田、藉而不レ稅

鄭氏曰、藉之言借也、借ニ民力一治ニ公田一、美惡取ニ於此一、不レ稅ニ民之所ニ自治一也、古者謂ニ殷時一

徹

孟子曰、周人百畝而徹、其實什一也、徹者徹也滕文公上

朱子曰、周時一夫、授ニ田百畝一、鄕遂用ニ貢法一、十夫有レ溝、都鄙用ニ助法一、八家同井耕、則通レ力而作收、則計レ畝而分、故謂ニ之徹一、什一者貢法、以ニ十分之一一爲ニ常數一、周制則公田百畝中、以ニ二十畝一爲ニ廬舍一、一夫所レ耕公田、實計ニ十畝一、通ニ私田百畝一、爲ニ十一分一、而取ニ其一一、蓋輕ニ於什一一矣集註

秀按ニ、八家同ク力ヲ通ジテ八區ヲ耕ンニハ、イカンゾ上農夫食九人ナド云フ差別アルベキ、疑ハシキコトナリ、「惟助爲レ有ニ公田一」ト云フヲ以考フレバ、徹ニハ公田ナクシテ、私田ヨリ什ノ一ヲ收メラレタルニハアラズヤ、下呂氏ノ說ニテ知ルベシ再考、仁齋會テコノ說アリ、下ニ見ニ

藍田呂氏曰、不下爲ニ公田一俟中歲之成上、通以ニ十一之法一、取ニ于百畝一、是爲レ徹性理大全六十九

「徹ハ周ノ稅名ナリ、果シテ呂氏ノ說ノ如クナランニハ、周ハ皆貢法ヲ用ヒタリト云ベシ、シカラバ貢徹ハ同物異名ナラン歟、シカレドモ孟子云、「雖レ周亦助也」トアレバ、周モ助法ヲ用ヒタルコト明ナリ、呂氏ノ說此ニ至テ究ス、サラバ徹通也ト云釋ニ從ヒ、

貢助二法チ通用スルノ名ナルニ從フノ穏ナルニシカズヤ（御尤ニ同心ニ御座候）

趙岐曰、耕ニ百畝ニ者、徹取ニ十畝ニ以爲レ賦、貢・助・徹雖レ異レ名、而多少同、故曰ニ皆什一ニ也、徹猶レ取レ人、徹取レ物也

蔡虛齋曰、徹字當下與ニ貢助二字ニ爲中一類上、即是取レ之之制也、按ニ朱子註ニ、曰、耕則通力合作、收則計レ畝而分、此便是徹、義所謂均也、通也、袁氏明善曰、請野九一而助、國中什一使ニ自賦ニ、即周之所下以通ニ用二代之法ニ、而爲上徹者也、後人緣用、誤謂以ニ其通用貢助之法ニ、而名曰レ徹則非矣、〔此說疑ハシ、此通リナレバ袁氏ノ說朱子ニ同ジ、左樣ニハアルベカラズ（後人以下ハ袁氏ノ說ニハアラザルベシ）〕此本袁氏措詞之不□、〔疑誤字（御尤如此ニ候ベシ）〕而後人亦錯ニ認其旨ニ也

通義、仁山金氏曰、徹者徹也、下徹字讀作レ澈、經書凡以ニ本字ニ解ニ本字ニ者、上字是古書、下字是當時俗語約說

郝敬曰、周人于ニ平地可レ井者ニ用ニ殷法ニ、于ニ迫隘地不レ可レ井者ニ用ニ夏法ニ、照レ數每夫田百畝耕則八家通力合作、收則公私計レ畝均分、謂ニ之徹ニ、徹者通也、遠邇通融、豐儉一體、上下無ニ偏枯之患ニ、有若所謂、百姓足、君孰與不レ足、百姓不レ足、君孰與足、即通之義、其實皆助也、地不レ可レ井、依レ助成レ賦、以通ニ助之權ニ也、及ニ周衰ニ徹法壞、而取レ民專以貢、如ニ龍子所レ云者、非ニ夏后氏之舊ニ矣、假ニ貢之名ニ、壞ニ助與レ徹之實ニ、而民始不レ堪、然阡陌未ニ盡壞ニ、疆理猶可レ尋、孟子所ニ以勸ニ滕井田行ニ助ニ、其實即周之徹、不レ言レ徹者徹壞レ田、井地不レ均、貢而不レ助、故言ニ助意主レ井也、下文請野九一

而助、國中什一使二自賦一、其爲二徹法一甚明解說

又曰、四海九州之地、古今同也、三代豈能易レ之、皆本二王都一立レ法、變通推廣、殷都二中原一、地平衍可レ井、故先助、若四方地不レ可レ井、雖レ殷亦豈得レ不レ使二民自賦一乎、夏都二安邑一、即今山西平陽、周都二岐豐一、即今陝西々安、地兼二險夷一、故或貢或徹、至二于平地可一レ井、何嘗不二助貢以權助、通レ變隨一レ時、三代皆然、非下助定在二野外一、賦定在中國中上也、滕地五十里、即今山東滕縣、四野平壤、惟有二國中一、城郭小聚、至二于齊地一、亦敎以二九一一、文王治レ岐、亦九一周齊之地、皆兼二險夷一、故行レ助須二變通一、潤澤兩字、非二獨爲一レ滕、實乃萬世法古之要、故治レ地無レ如二周之徹爲一レ通矣、易曰、往來不レ究、之謂レ通、通即潤澤也、通二于徹一、則井地萬世可レ行、深山究谷亦可レ行、如二鄭康成輩膠固之說一、雖二中原一亦未レ可レ行也解說

伊藤維禎曰、舊說謂二八家同一レ井、耕則通レ力而作、收則計レ畝而分、故謂二之徹一、如レ此則八家所レ收各均平、而無二多寡一也、然孟子嘗曰、上農夫食二九人一、上次食二八人一、中食二七人一中次食二六人一、下食二五人一、言下因用二力勤惰一、而有中此五等上也、然則謂二通レ力而作、計レ畝而收一者、其說不レ通

秀按ニ、予ノ上ニ疑ヘルモノ、先生既ニコレヲ云ヘリ

徹法

詩大雅公劉篇、度二其隰原一、徹レ田爲レ糧

鄭箋曰、度二其隰與一レ原、田之多少、徹レ之使レ出レ稅、以為二國用一、什一而稅、謂二之徹一、魯哀公曰、二吾猶不レ足、如二之何一其徹也

孔疏曰、言レ度二其隰原一、是度二量土地一、使二民耕一レ之也、下即云二徹レ田為一レ糧、明下是徹、取二此隰原所レ收之粟一、以為中軍國之糧上也、且徹與二孟子百畝而徹一文同、故知三徹レ之使レ出レ稅、以為二國用一、孟子說二三代稅法一、其實皆什一、故云二什一而稅一、謂二之徹一、引二論語一曰、明三徹是稅法、其證為二什一一也、如二孟子之言、夏曰レ貢、周曰一レ徹、徹乃周之稅法、公劉夏時諸侯、而言レ徹者、召公以二周之世一上論、公劉遂以二周法一言レ之、以二其俱是什一、其名可一レ以相通故也

朱傳曰、徹通也、一井之田九百畝、八家皆私二百畝一、同養二公田一、耕則同レ力而作、收則計レ畝而分也、周之徹法自レ此始、其後周公因而脩レ之耳

大全曰、問以二孟子一考レ之、只曰、八家皆私二百畝一、同養二公田一、又公羊曰、公田不レ治則非レ民、私田不レ治則非レ吏、恐□必是計レ畝而分、朱子曰、亦不レ可二詳知一、但因洛陽□□中、通徹而耕之說推レ之耳、或但耕則通レ力而耕、收則各得二其畝一、亦未レ可レ知也

又安成劉氏曰、蘇老泉嘗謂、井田唐虞啓レ之、夏商稍々葺治、至レ周而大備、蓋周之徹法、鄉遂用二貢法一、十夫有レ溝、都鄙用二助法一、八家同レ井、總謂二之徹一也

又新安王氏曰、大國三軍之法以治レ兵、徹田什一之法以儲レ粟、周家軍制徹法、皆起二於此一

論語顔淵篇、哀公問於有若曰、年饑用不足、如之何、有若對曰、盍徹乎、曰、二吾猶不足、如之何其徹也

何晏集解、鄭曰、周法什一而稅、謂之徹、徹通也、爲天下之通法

邢昺疏曰、云周法什一而稅、謂之徹者、公羊傳曰、古者什一而藉、古者曷爲什一而藉、什一者天下之中正也、什一行、而頌聲作矣、穀梁傳亦云、古者什一而藉、孟子云、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、趙岐云、民耕五十畝者、貢上五畝、耕七十畝者、以七畝助公家、耕百畝者、徹取十畝以爲賦、雖異名義多少同、故云皆什一也、書傳云、十一者多矣、故杜預云、古者公田之法、十取其一、謂十畝内取一、舊法既已十畝取一矣、春秋魯宣公十五年、初稅畝、又履其餘畝、更復十收其一、乃是十取其二、故此哀公曰、二吾猶不足、謂十内稅二、猶尚不足、則從宣公之後、遂以十二爲常故、曰、初言初稅十二自宣公始也、諸書皆言十一而稅、而周禮載師云、凡任地近郊十一、遠郊二十而三、甸稍縣都、皆無過十二、漆林之征、二十而五者、彼謂王畿之内所共多、故賦稅重、諸書所言什一、皆謂畿外之國、故此鄭玄云、什一而稅、謂之徹、徹通也、爲天下之通法、言天下皆什一耳、不言畿內亦什一也、孟子又曰、方里爲井、井九百畝、其中爲公田、八家皆私百畝、同養公田、公事畢、然後敢治私事、漢書食貨志、取彼意而爲之文云、井田方一里、是爲九夫、八家共之、各受私

田百畝・公田十畝、是爲八百八十畝、餘二十畝爲廬舍、諸儒多用彼爲義、如彼所言、則家別一百一十畝、是爲十外稅一也、鄭玄詩箋云、井稅一夫、其田百畝、則九而稅一、其意異於漢書、不以志爲說也、又孟子對滕文公云、請野九一而助、國中什一使自賦、鄭玄周禮匠人註、引孟子此言乃云、是邦國亦異外內之法、則鄭玄以爲、諸侯郊外郊內、其法不同、郊內什一使自賦其一、郊外九而助一、是爲二十而稅二、故鄭玄又云、諸侯謂之徹者、通其率以十一爲正、言郊內郊外、相通其率爲十稅一也、杜預直云十取其一、則又異於鄭、唯謂一夫百畝、以十畝歸公、趙岐不解夏五十・殷七十之意、蓋古者人多田少、一夫唯得五十・七十畝耳、五十而貢貢五畝、七十而助、助七畝、好惡取於此、鄭註考工記云、周人畿內、用夏之貢法、邦國用殷之助法也

九一什一

孟子曰、昔者文王之治岐也、耕者九一、仕者世祿梁惠王下

朱子曰、九一者、井田之制也、方一里爲一井、其田九百畝、中畫井字界爲九區、一區之中、爲田百畝、中百畝爲公田、是九分而稅其一也

〔朱子ノ說此所ニテハ百畝ノツモリノヨウナレドモ一、體ノ主意ハ八十畝ノツモリト見へ申候、何則文公ノ篇ニハ公田中廬舍ノ說ニヨラレ申候、大全ナドニ朱子ノ說處々ニ見ヘ候ヘ共、皆廬舍アルツモリナリ、又孟子曾三代ノ制ヲ論、其實ハ什一也ト見タリ、孟子ノ言兩處相矛盾スルハ何ゾヤ、九一ニテモ其實、什一ナルワケアリト見ヘタリ〕

〔御尤ニ存候、此處ハタマ〳〵九一ニ仕候ト見ベシ〕

〔イヅレ廬舍アルツモリト存候〕

〔國中ハ「什一而賦」ト御座候間、大筋ハ什一ノ積リト見ベシ〕

〔廬舍二畝半御座候ヘバ、十一而一ニ相成候哉、コレモ十一ニハ無レ之哉〕

秀按、公田ニモ廬舍ナクシテ、全百畝ノツモリナリ

趙岐曰、往者文王、爲ニ西伯一時、始行ニ王政一、使ミ岐民修ニ井田一、八家耕ニ八百畝一、其百畝者、以爲ニ公田及廬井一、故曰ニ九一一也、紂時稅重、文王復ニ行古法一也

秀按、如レ此ナラバ什一ニシテ、九一ニアラザルニ似タリ

孫奭曰、往者文王爲ニ西伯一、行レ政自ニ岐邑一、耕者皆以ニ井田之法一制レ之、一人受ニ私田百畝一、八夫家計、受ニ私田八百畝一、井田中百畝、是爲ニ公田一、以ニ其九分一、抽ニ一分一爲レ公、以抵ニ其賦稅一也

又曰、小司徒佐ニ大司徒一、當ニ都鄙三等之采地一、而爲ニ井田一、經曰、九夫爲レ井云々又采地之中、每ニ一井之田一、出ニ一夫之稅一、以入ニ於官一也、故曰ニ九一一也 疏註

孟子曰、請野九一而助、國中什一使ニ自賦一 滕文公上

朱子曰、野郊外都鄙之地也、九一而助、爲ニ公田一而行ニ助法一也、國中郊門之內、鄉遂之地也、田不ニ井授一、但爲ニ溝洫一、使ニ什而自賦ニ其一一、蓋貢法也、周所謂徹法者、蓋如レ此、以レ此推レ之、當時非ニ惟助法不ㇾ行、其貢亦不ニ止什一一矣 集註

秀按、コノ說ノ如クナルトキハ貢ト徹ト同ジ。孟子カツテ龍子ノ言ヲ引テ貢ノ不可ナルヲ云フ、何ゾ其レ同ジカラン

趙岐曰、九一者、井田以二九頃一爲レ數、而供二什一一、郊野之賦也、助者殷家稅名也、周亦用レ之、國中什一者、周禮、園廛二十而稅レ一、時行重法賦責之什一也、而如也、自從也、孟子欲下請使中野人如二助法一、什一而稅上レ之、國中從二其本賦一、二十而稅レ一、以寬レ之也

秀按ニ、周禮ニ泥ミ、此謬解ヲイタス

文獻通考曰、按自下孟子有中野九一而助、國中什一使二自賦一之說上、其後鄭康成註、周禮以爲二周家之制一、鄉遂用二貢法一、遂人所謂十夫有レ溝、是也、都鄙用二助法一、匠人所謂九夫爲レ井、是也、自レ是而法二晦庵一以爲、遂人以レ十爲レ數、匠人以レ九爲レ數、決不レ可レ合、以□(鄭カ)氏分註、作二兩項一爲レ是、而近世諸儒、合爲二一法一爲レ非、然愚嘗考レ之、孟子所謂野九一者、乃受レ田之制、國中什一者、乃取レ民之制、蓋助有二公田一、故其數必拘二於九一、八居二四旁一爲レ私、而一居二其中一爲レ公、是爲二九夫一、多與レ少皆不レ可レ行、若貢則無二公田一、孟子之什一、特言二其取之數一、遂人之十夫、特姑舉二成數一以言レ之耳、若九夫自有二九夫之貢法一、十夫自有二十夫之貢法一、初不三必拘以二十數一、而後可レ行二貢法一也、今徒見二匠人有二九夫一、爲二井之文一、而謂二遂人所謂十夫有下溝者、亦是以レ十爲レ數、則似二太拘一、蓋自レ遂而達二於洫一、自レ洫而達二於澮一、自レ澮而達二於川一、此二法之所二以同一也（蒙引）

蔡虛齋曰、行二助法一之地、必須下以二平地之田一、分畫作中九夫上、中爲二公田一、而八夫之私田環レ之、列如二井字一、整如二棊局一、所謂溝洫者、直欲下限田之多少、而爲二之疆界一、行中貢法上之地、則無レ問二高原下隰一、截レ長補レ短、每レ夫授二之百畝一、所謂溝洫者、不レ過下隨二地之高下一、而爲中之蓄洩上、此二法之所二以異一也

又曰、鄉遂附國之地、只是平衍沃饒、可二以分□一、宜レ行二助法一、而反行二貢法一、都鄙野外之地、必是有二山谷之險峻、溪澗之阻隔一、難二以分畫一、宜レ行二貢法一、而反行二助法一何也、蓋助法九取二其一一、似レ重二於貢一、然雖レ有二肥磽一、歲有二豐凶一、民不レ過レ任二其耕耨之事一、而所レ輸盡公田之粟、則所レ取雖レ多、而民無レ預

秀按ニ、コレ廬舍ナクシテ、九一ノツモリナリ

又曰、鄉遂迫二近王城一、凶豐易レ察、故可レ行二貢法一、都鄙僻二在遐方一、情僞難レ知、故止行二助法一、此又先王之微意也

又曰、國中鄉門之外、鄉遂之地也、包二山林陵麓一在レ內、難レ用二井田齊整分畫一、只絕レ長補レ短計レ之、約田百畝、則授二一夫一、自貢二其什分之一於上一也　引蒙

鄒敬曰、請野九而助、謂井地分二公田一、四境皆然、國中什一使二自賦一、則百之一耳、即周人之徹也、徹以レ助爲レ主、國中自賦、以濟二助之不一レ及、國中多二城池・園囿・壇舍・林麓一、不レ可レ爲レ井、但依二助

法授田、使民自賦、若國中地寬平可井者、實亦未嘗不井也、若野外地險隘傾邪不可井者、實亦未嘗不使自賦也、此即所謂潤澤之意、九一以井田之區數論、什一以收入之分數論、九一者、九區中一區爲公田、什一者、什分中一分爲公賦、君子之祿、公家之費、皆自公田・公賦出、更不外取諸民、而民庶幾休息矣、使自賦、使民自輸稅、對助而不稅者、言助則官自收公田之入、而民無賦不助則、使自賦于公、而什取其一、比于助分數更減者、野在四郊外、費轉輸助借其力、則九一不爲勞賦、分其有即什一已爲多、故先王之賦、無復有過十一者、矣、圭田餘夫之田、或取諸九一、什一之中、或取諸九一、什一之外、亦無明法、但云五十畝、二十五畝、是皆自井地一區百畝中出也、百畝兩之、則五十畝也、四之、則二十五畝也、略言其田與數如此、所當潤澤者、皆此類、死徒無出鄕、同井親睦、皆行助之效也、先公後私、助法之美意也僻說

又曰、野九一、國中什一、非以遠近對擧也、九一言其區、什一言其稅、本欲助而不稅、所以使民自賦、亦爲濟助之不通耳、國中句不重賦重什一言不得已、（不明）使之自賦、止于什一、堯舜以來中制也、萬取千、千取百、百取十、十取一、皆不違、此所謂欲重之於堯舜之道者桀也、欲輕之於堯舜之道者貉也、先王無什一以外之賦、非國中一賦、野外又一賦也、此二語爲行井地之要、先王所爲、潤色之意、周禮小司徒、云々又遂人云々鄭康我謂小司徒之井、爲都鄙用助、

謂ニ遂人之溝洫、爲ニ鄕遂用レ貢、而以ニ考工記匠人之溝洫一、爲下小司徒之井與ニ遂人一異ニ、朱子因レ之、謂下十夫與ニ八家一、終可レ不レ合、拘泥多端、按、周禮已難ニ盡信一、而又加ニ牽鑿之說一、愈不レ足レ究、唯孟子之言爲レ正說辨

秀按、此言實ニ然、予ハ是ニ從ソ

伊藤仁齋曰、周禮、都鄙用ニ助法一、八家同レ井、鄕遂用ニ貢法一、十夫有レ溝、故孟子擧ニ周制一而告レ之

公羊傳宣十五年曰、古者什一而藉、古者曷爲ニ者一而藉一、什一者、天下之中正也

何休註、什一以借ニ民力一、以レ什與レ民、自取ニ其一一爲ニ公田一

鄕遂邦國無ニ二法一

案、周禮、遂人十夫有レ溝、即一井九夫之地、百夫有レ洫、即井十爲レ通、九十夫之地、千夫有レ澮、即通十爲レ成、九百夫之地、萬夫有レ川、即成十爲レ終、九千夫之地、而云ニ十夫・百夫・千夫・萬夫一者、皆擧ニ成數一也、遂人凡治レ野節、首言ニ治野一、末レ言ニ以達ニ於畿一、則此溝洫之制、自ニ四郊一達ニ於王畿一皆然、推レ此內而六鄕、外而侯國、其溝洫之制、一準ニ乎此一可レ知矣、蓋此溝洫、即井田之溝洫、而周人井田之制、自ニ鄕遂一而都鄙、而邦國無ニ二法一也、康成乃分ニ井田溝洫一爲ニ二法一、而謂下鄕遂用ニ貢法一、十夫有レ溝、都鄙用ニ助法一、八家同上レ井、不レ知下小司徒言井ニ牧其田野一、不レ分ニ鄕遂都鄙一、而遂人掌ニ溝洫一之制、言下以達ニ於畿一、則亦兼中都鄙上、孟子曰、鄕田同レ井、鄕亦未ニ嘗不一ニ井授一矣禮記義疏

經界

滕文公使ニ畢戰問ニ井地一、孟子曰、子之君將レ行ニ仁政一、選擇而使レ子、子必勉レ之、夫仁政必自ニ經界一始、經界不レ正、井地不レ均、穀祿不レ平、是故暴君汚吏、必慢ニ其經界一、經界既正、分レ田制レ祿、可ニ坐而定一也

朱子曰、井地即井田也、經界謂レ治レ地、分田經畫、其溝（水界也、溝洫之類）塗（陸界也、如レ曰レ徑曰レ畛、曰レ道曰レ路）封植（封土堠也植種木也）之界也、此法不レ修、則田無ニ定分一、而豪强得ニ以兼幷一、故井地有レ不レ均、賦無ニ定法一、而貪暴得ニ以多取一、故穀祿有レ不レ平、此欲レ行ニ仁政一者之所ニ以必從レ此始一、而暴君汚吏、則必欲ニ慢而廢一レ之也、有ニ以正一レ之、則分田制祿、可ニ不レ勞而定一矣（集註）

秀按、コノトキ既ニ諸國ノ經界ヲ慢スルコト明ラカナリ、豈啻商鞅ガ阡陌ヲ開クノミナランヤ、商鞅ハ孟子同時ノ人ナリ、秦國ノミ經界モ正シク此頃マデ存シタルヲ、鞅ガ破リタルカ、後人井田ノ廢ヲ以テ罪ヲ鞅ニ歸スルモ、怪ムベキコトナリ

趙岐曰、時諸侯各去ニ典籍一、人自爲レ政、故井田之道不レ明也、經亦界也、必先正ニ其經界一勿レ慢、鄰國乃可下均平ニ井田一平中穀祿上、穀所ニ以爲一レ祿也、周禮小司徒曰、乃經ニ土地一、而井ニ牧其田野一、言正ニ其土地之界一、乃定下受ニ其井牧一之處上也

秀按、何ゾ鄰國ニアヅカラン、亦謬解ナリ

通考曰、及戰國諸侯之地愈廣、人愈衆、雖時君所尙者用兵爭強、未嘗以百姓爲念、然之法未全廢也、而其弊已不可勝言、故孟子云云、可以見當時未嘗不授田、而諸侯之地廣人衆、攷覈難施、故法制隳弛、而奸弊滋多也（案引）

秀按、滕小國也、何此弊アラン、然ドモ未全廢ノ言ハ可ナリ、只助法ヲ行ハザルト見エタリ

鄒敬曰、畢戰問井地、首教以正經界者、賦法壞、由公私不明也、假公剝私、故民受病、行井地、未爲制公田、以紓民困苦、又苟且模糊、界限不正、則舊敝復滋、所以前教文公急民事、在行助法、後教畢戰行井地、在正經界、務使公私有定限、不得侵乎小民、此孟子惓惓救時之意、所謂耕者助而不稅、則天下之農皆悅、而願耕於其野者、此也（說解）

陸賈曰、黃帝築作宮室、民知室居、食穀而未知功力、於是后稷乃列封疆、畫畔界、以分土地之所宜（新語）

經界ノ說、其來ルコト古キコト知ルベシ、井田アレバ經界アリ、聖人ノ民ヲ治メ其爭ヲ防グベキモノ、經界ニ始マラザルコトアルベカラズ

左氏襄十年、初鄭子駟爲田洫、司氏。堵氏。侯氏。子師氏皆喪田焉

杜注、洫田畔溝也、子駟爲田洫、以正封疆、而侵四族田

正義曰、考工記、匠人爲溝洫、耜廣五寸、二耜爲耦、一耦之伐、廣尺。深尺、謂之畎、田首倍之、

廣二尺、深二尺、謂ニ之遂一、九夫爲レ井、井間廣四尺、深四尺、謂ニ之溝一、方十里爲レ成、成間廣八尺、深八尺、謂ニ之洫一、方百里爲レ同、同間廣二尋、深二仞、謂ニ之澮一、然則溝洫倶是通水之路、相對大小爲レ異耳、皆於ニ田畔一爲レ之、故云田畔溝也、爲レ田造レ洫、故稱ニ田洫一、此四族皆是富家、占レ田過レ制、子駟爲ニ此田洫一、正ニ其封疆一、於レ分有レ剩、則減給ニ他人一、故正ニ封疆一、而使ニ四族田一也

按、此時井地既ニ壞レタルヲ見ルベシ

文獻通考曰、高宗紹興十二年、左司員外郎李椿年、言ニ經界不正十害一、乃以ニ椿年一爲ニ兩浙運使一、專委措ニ置經界一、請下先往ニ平江諸縣一、俟ニ其就レ緒、即往中諸州上、要在ニ均平一、更不レ增ニ稅額一、陂塘塍埂之壞ニ於水一者、官借レ錢以修レ之、圖ニ寫墟畝一、選レ官按覆、令三各戶各鄉、造ニ砧基簿一、仍示レ民以ニ賞罰一、開諭禁防、靡レ不ニ周盡一

光宗時、知漳州朱熹奏言、經界最爲ニ民間莫大之利一、紹興已推行處、圖籍尚存、田稅可レ考、貧富得レ實、訴訟不レ煩、公私兩便、獨漳汀泉三州(缺字)細民業去稅存、不レ勝ニ其苦一、而州縣坐失ニ常賦一、日朘月削、安可ニ底止一、臣切獨任、其必可レ行也、然行レ之詳、則足レ爲ニ一定之法一、行レ之略、則適滋ニ他日之弊一、但此法之行、貧民下戶、皆所ニ深喜一、然不レ能三自達ニ其情一、豪家猾吏、實所レ不レ樂、皆善爲ニ辭說一、以惑ニ群聽一〻〻明年春、詔ニ漕臣陳公亮同熹一、協力奉行〻〻貴家豪右占レ田隱レ稅、侵ニ漁貧弱一者、胥爲ニ異論一以搖レ之、至レ有下進狀言ニ不便一者上、前詔遂格、閱ニ兩月一熹請レ祠去（淵鑑）

井田壞ルトイヘドモ、經界猶正スベシ、故ニ附ス

伊藤仁齋曰、經界、井田之區域也、孟子時、井地雖レ廢、而尚有ニ其名一、故曰ニ井地不ヲ均、言經界不レ正、則民每困ニ於横斂一、而仁政不レ得レ行、苟正ニ其經界一、則暴君汚吏、無レ所レ容レ私、而分レ田制レ祿、亦可ニ不レ勞而定一矣

程子嘗與ニ張子厚一論ニ井地一曰、地形不ロ必謂ニ寬平、可ニ以畫ヲ方、只可ヲ用ニ算法一、折計ニ地畝一以授上レ民、子厚謂ニ必先正ニ經界一、經界不レ正、則法終不レ定、地有ニ拗垤一不レ管、只觀ニ四標竿一、中間地雖レ不レ平、饒與レ民無レ害、就ニ一夫之間一、所レ爭亦不レ多、又側峻處田、亦不ニ甚美一、又經界必須レ正ニ南北一、假使ニ地形有ニ寬狹尖斜一、經界則不レ避ニ山河之曲一、其田則就ニ得井處一爲レ井、不レ能レ就ニ成處一、或五七、或三四、或一夫、(或疑田)其實四數則在、又或就不レ成ニ一夫一處、亦可下計ニ百畝之數一而授上レ之、無ニ不レ可レ行者一、如レ此則經界隨レ山隨レ河、皆不レ害ニ於畫ヲ之也、苟如レ此、畫定雖レ便、使ニ暴君汙吏亦數百年壞不一得、經界之壞亦非ニ專在ニ秦時一、其來亦遠、漸有レ壞矣 性理大全六十九

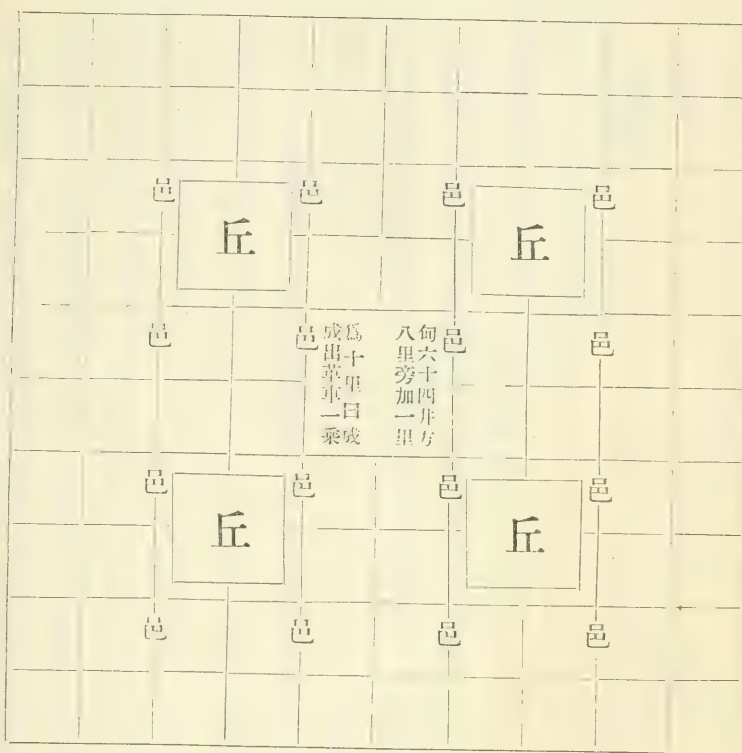
秀按、古井田ノ如クニテハ、容間ノ地多キ故ニ、暴君汙吏ノ懷ルコトアリトオモヘルナリ

呂與叔撰ニ横渠先生行狀一云、先生慨然、有レ意ニ三代之治一、論ニ治人先務一、未下始不中以ニ經界一爲上急、嘗曰、仁政必自ニ經界一始、貧富不レ均、教養無レ法、雖レ欲レ言レ治、皆苟而已、世之病難レ行者、未下始不中以ニ亟奪ニ富人之田一爲上辭、然茲法之行、悅レ之者衆、苟處レ之有レ術、期以ニ數年一、不レ刑ニ一人一、而

可復所病者、特上之人未レ行耳、乃言曰、縱不レ能レ行二之天下一、猶可レ驗二之一鄕一、方與二學者一、議二古

之法一、共買レ田一方、盡爲二數井一、上不レ失二公家之賦役一、退以二其私一正二經界一、分二宅里一、立二斂法一、廣二儲蓄一、興二學校一、成二禮俗一、救二菑恤一、患敦レ本抑レ末、足下以推二先王之遺法一、明中當今之可上レ行、此皆有レ志、未レ就而卒（滕文公集註　近思錄九）

秀宵問、備前ノ松平光政、試ニ井地ヲ作ラレシモノ今ニ存シ、コレヲ名ケテ井田村ト云フト、横渠ト同意ナリ

小司徒佐二大司徒一、掌二都鄙三等之采地一、而爲二井田一、故經云、九夫爲レ井、四井爲レ邑、四邑爲レ丘、四丘爲レ甸、四甸爲レ縣、四縣爲レ都、以任二役萬民一使下

營地事、而貢軍賦出車役、又采地之中、毎一井之田、出一夫之税、以入於官、但此都鄙、是畿內之地、小司徒並營其境界、故孟子曰、夫仁政必自經界始、經界不正、井地不均、穀祿不平、是故暴君汙吏、必慢其經界、經界既正、分田制祿可坐而定也、此圖一甸之田、則縣都之法、亦可見矣（三[illegible]）

食九人

孟子曰、耕者所獲、一夫百畝、百畝之糞、上農夫食九人、上次食八人、中食七人、中次食六人、下食五人、庶人在官者、其祿以是爲差（萬章下）

朱子曰、獲得也、一夫一婦、佃田百畝、加之以糞、糞多而力勤者爲上農、其所收可供九人、其次用力不齊、故有此五等、庶人在官者、其受祿不同亦有此五等也

又曰、愚按、此章之說、與周禮王制不同、蓋不可考、闕之可也

程子曰、孟子之時、去先王未遠、載籍未經秦火、然而班爵祿之制、已不聞其詳、今之禮書、皆掇拾於煨燼之餘、而多出於漢儒一時之傅會、奈何欲盡信而句爲之解乎、然則其事固不可一々追復矣（集註）

秀按ニ、上古私田ナシ、今ノウケ作ノ如ク、上ノ田地ヲウケ作ルト見ヘタリ、故ニコヽニモ佃田ト注セシナルベシ

問、古者百畝、今四十一畝餘、若以二土地一計レ之、所レ收似レ不レ足三以供二九人之食一、程子曰、百畝九人固不レ足、通二天下一計レ之、則亦可三家有二九人一、只十六已別受レ田、其餘皆老少也、故可三供有二不レ足者一、又有二補助之政一、又有二鄕黨賙捄之義一、故亦可レ足 性理大全

秀按、孟子ノ言ハイカニモ九人ヲ食フニ足レルコトヲマウサレシナリ、如レ此說クコトヲ待タズ、其他九人ヲ食フニ足ルコトハ、後ニ引二諸書一ニテ知ルベシ

謝肇淛曰、古者一夫百畝、無二賦役租稅一也、故中原磽确之地、上農夫足レ食二九人一、若以二今燕齊之地一論レ之、一望千頃、常無二升斗之入一者、不レ知二當時授田之制、肥磽高下、必適レ均平、抑惟其所レ値也 五雜俎

王制曰、制二農田百畝一、々々之分、上農夫食二九人一、其次食二八人一、其次食二七人一、其次食二六人一、下農夫食二五人一

鄭氏曰、農夫皆受二田於公田一、肥墽有二五等一、收入不レ同也、分或爲レ糞 正義引二周禮一、地有二九等一、可二併考一

陳浩曰、此言下庶人之田、井田之制、一夫百畝、肥饒者爲二上農一、磽瘠者爲二下農一、故所レ養有中多寡上也

佃田

朱子曰、一夫一婦佃田百畝 萬章下

通考曰、三代貢・助・徹之法、歷二千餘年一而不レ變者、蓋有四封建、足三以維二持井田一故也、三代而上、天

下非天子所得私也、秦廢封建、而始以天下奉一人矣、三代而上、田產非庶人所得私也、秦廢井田、而始捐田產、以與百姓矣（滕文公 蒙引）

通考曰、小國寡民、法制易立、竊意當時有國者、授其民以百畝之田、壯而畀、老而歸、不過如後世大富之家、以其祖父所世有之田、授之佃客、程其勤惰、以爲予奪、校其豐凶、以爲收貸、其東阡西陌之利病、皆其少壯之所習聞、雖無俟於考覈、而奸弊自無所容（蒙引說解 大意同）

王制曰、田里不粥、鄭註曰、皆受於公民、不得私也、粥賣也

古者一夫百畝、無賦役租稅也、故中原磽确之地、上農夫足食九人、若以今燕齊之地論之、一望千頃、常無升斗之入者、不知當時授田之制、肥磽高下、必適均平、抑惟其所値也、當時天子諸侯、既各有疆界、不相踰越、十分之中、取其一爲公田、仕者之家、又有世祿之田、小國不過五十里、城郭村落山川之外、田之所餘亦寥々矣、使生齒日繁、而地不加廣、何以給之、吾竊意古之授田者、亦只如今佃種之類、一夫耕百畝、而世家巨室、收其所入耳、未必便爲世業也（五雜俎）

古今步畝

王制曰、古者以周尺八尺爲步、今以周尺六尺四寸爲步、古者百畝、當今東田百四十六畝三十步

鄭氏曰、周尺之數未詳聞也、按禮制、周猶以十寸爲尺、蓋六國時、多變亂法度、或言、周尺

八寸則步、更爲八八六十四寸、以此計之、古者百畝、今百五十畝二十五步（陳註曰、疏義所算亦誤、五十二寸當云五尺一寸二分一十二寸當云一尺二寸八分）

正義曰、古者八寸爲尺、今以周尺八尺爲步、則一步有六尺四寸、今以周尺六尺四寸爲步、則一步有五十二寸、是今步比古步、每步剩出一十二寸、以此計之、則古者百畝、當今東田百（陳作五作二）二十五畝七十一步者餘（作有）、【百二十云々當云百五十六畝二十五步一寸六分千分寸之四】【千分寸御私藏本一見之】【本亦千分寸四ト御座候】【分子分母算家ノ語ト見ベシ】【同斷】與此百四十六（當云二）畝三十步不相應也、【中根元璋曰按、陳註亦誤、當云古者百畝（當今百五十六畝）二十五步古者百里而今百二十五里田祿圖經亦云】【辱存候補入可仕候】

又曰、玉人職云、鎭圭尺有二寸、又云、桓圭九寸、是周猶以十寸爲尺也、今經云、以周尺六寸爲步、乃是六十六寸、則謂周八寸爲尺也、故云、蓋六國時、多變亂法度、或言、周尺八寸也、鄭即以古周尺十寸爲尺、八尺爲步、則步八十寸、鄭又以今周尺八寸爲尺、八尺爲步、則今步皆少於古步、一十六寸也、是今步別剩十六寸云、以此計之者、謂以古步、又以今周尺八寸爲尺、八尺爲步、小剩十六寸而計之、則古之四步、剩出今之一步、古之四十步、爲今之五十步、古之八十步、爲今之一百步、計古之一畝之田、長百步待、爲今田一百二十五步、是今田每一畝之上、剩出二十五步、則方百畝之田、從北嚮南、每畝剩二十五步、總爲二千五百步、從東嚮西、每畝二十五步、亦總爲二千五百步、相伊爲五千步、是總爲五十畝、又西南一角、南北長二十五步、應南畔所剩之度、計方二十五步、開方乘之、總積得六百二十五步、六百步則爲六畝餘有

二十五步一、故云、古者百畝、當二今百五十六畝二十五步一也

論語集解、馬曰、司馬法六尺爲レ步、步百爲レ畝、畝百爲レ夫、夫三爲レ屋、屋三爲レ井、井十爲レ通、通十爲レ成

曾子曰、可三以託二六尺之孤一

正義曰、鄭玄註、六尺之孤、年十五以下

正義曰、史記齊景公時、有二司馬田穰苴一、善用レ兵、周禮、司馬掌二征伐一、六國時齊威王、使三大夫追二論古者兵法一、附二穰苴於其中一、凡一百五十篇、號曰二司馬法一、此六尺曰レ步至レ成、皆彼文也

問、古者百畝、今四十一畝餘、若以二土地一計レ之、所レ收似レ不レ足三以供二九人之食一、程子曰、百畝九人、固不レ足云々（性理大全）

金履祥曰、以二今尺步一計、古之百畝、當二今四十一畝一、古之二畝半、當二今之一畝十步一、愚謂、以レ故一夫能耕二百畝一也（蒙引）

玉海林勳曰、周制步百爲レ畝、百畝僅得二唐之四十餘畝一耳、唐之口分、人八十畝、幾二倍於古一、蓋貞觀之盛、戶不レ及二三百萬一、永徽惟增二十五萬一、若レ周則王畿千里、已有二三百萬家之田一、列國不レ與焉、是以唐制受レ田倍二於周一、而地亦足三以容二之（淵鑑）

萬乘之國

夏山雜談曰、前漢書云、六尺爲レ步、步百爲レ畝（勸農固本錄、一畝チ一斗ノ積ニシテ、今ノ法ニシテ、一畝七步八厘餘、高一斗二升七合二勺餘）畝百爲レ夫、（一町二反六畝零七步餘高十二石二斗二升三合三勺）夫三爲レ屋、屋三爲レ井、井方一里、是爲ニ九夫一、馬融云、井十爲レ通、通十爲レ成、成出ニ革車一乘ニ云々、是ヲ算スルニ、井ハ方一里（三百步チ一里トス）九萬步ナリ、通ハ九十萬步（百十三町六段二十八步餘千百三十六石七升餘）方三里四十八步有奇、【井一里ナレバ通ハ十里ナルベキニ如レ此云ヘルハ不審ナリ、下同】成ハ九百萬步（千百三十六丁零九畝十四步、一萬千三百六十石九斗四升餘）方十里、是車一乘ノ地ナリ、十乘ノ地ハ九千萬步、方三十里百八十一步有奇、百乘ノ家ハ（十一萬三千六百零九町四段六畝餘、百十三萬六千零九十四石六斗餘）九億萬步、方百里、千乘（百十三萬六千零九十四町六反六畝餘、千百三十六萬零九百四十六石六斗餘）ノ國ハ九十億萬步、方三百十六里六十八步有奇、萬乘（千百三十六萬零九百四十六丁六反六畝餘、一億千三百六十萬零九千四百六十六石六斗餘）ノ國ハ九百億萬步方千里ナリ、方千里ノ內ニハ、方百里ノ地百アリ、孟子梁惠王篇、萬乘之國ノ朱注云、千乘之家者、天子ノ公卿采地方百里、出レ車千乘也トアルハ、誤リナランカ

周井田以今尺量之圖

田祿圖經ニ、步尺數不レ一、今六尺者、古今之所ニ率由一也、以ニ本國一間一、當レ之者近レ之云、以ニ其一間一、爲ニ今曲尺六尺之圖一

周百畝	縱百間　橫百間	今日本ノ田ニシテ三町三反三畝十步	今日本ノ間ニシテ周ニ同	今日本ノ里數ニシテ一町四十間

三代井田ノ記、司馬法曰、六尺爲ㇾ步、一度擧ㇾ足曰ㇾ跬、跬者三尺、兩度擧ㇾ足曰ㇾ步、步者六尺也、步百爲ㇾ畝云、用ニ今曲尺五尺一ノ圖

周百畝

廣百間　縱百間

今日本ノ田ニシテ二町七反八畝十三步余

今日本ノ間ニシテ　廣八十三間二尺　縱八十三間二尺

今日本ノ里數ニシテ一町二十三間二尺

春臺漫筆、周尺先儒說皆云、當ニ日本曲尺之六寸四分一太短、或云、當ニ今八寸一太長、徂徠先生詳考、以爲ㇾ當ニ今曲尺之七寸二分弱一、是爲ニ定說一、予嘗以ㇾ此推ニ古今田里法一、六尺爲ㇾ步、三百步爲ニ一里一、古者六尺、當ニ今曲尺之四尺三寸二分一云ノ圖

周百畝

廣百間　縱百間

今日本ノ田ニシテ二町四反步

日本ノ田ニシテ、壹町七反二畝二十四步ニ作ルベシ（是又辱存候）

今日本間ニシテ　廣七十二間　縱七十二間

今日本ノ里ニシテ一町十二間

文化十一年甲戌正月

右

石川淸秋考

開阡陌

商鞅集小都鄕邑、聚爲縣置令丞、凡三十一縣、爲田開阡陌封疆、而賦稅平々、斗桶權衡丈尺（史記本傳）

正義曰、南北曰阡、東西曰陌、按、（字彙標註、驛道也、字彙、塍音成、田中畦埒也）謂驛塍也、疆音彊、封聚土也、疆界也、謂界上封記也

鄭玄曰、桶音勇、今之斛也、索隱曰、音統、量器名也

問開阡陌、朱子曰、阡陌便是井田、陌百也、阡千也、東西曰阡、南北曰陌、或問、南北曰阡、東西曰陌、未知孰是、但却是一箇横、一箇直、且如百夫有遂、遂上有涂、這便是陌、若十箇涂倸地、直在横頭、又作一大溝、謂之洫、洫上有路、這便是阡、阡陌只是疆界、自阡陌之外有空地、則只倸地閑在那裏、所以先王要如此者也、只是要正其疆界、怕人相侵互、而今商鞅却開破了過、可做田處、便墾作田、更不要倸地齊整、這開字、非開創之、開乃開闢之開也（性理大全卷五十九）

問三代治天下、曰、井田。封建。肉刑、後世變井田爲阡陌、變封建爲郡縣、變肉刑爲鞭笞、而末流愈不勝其弊、今欲追復舊制、於斯三者何先、潛室陳氏曰、、（同書卷六十六）

秀按ニ、コノ問ノ趣ニテハ、開ハ開創ノ開ト見タルナリ、鞅ガ傳ノ趣モ破リタルヤウノ文面ニハアラズ、猶考ベシ

秦孝公十年、衞鞅爲大良造、十二年、幷諸小鄕、聚集爲大縣、縣一令、四十一縣爲田開阡陌、東

地渡洛、十四年初爲レ賦史記秦本紀
正義曰、萬二千五百家爲レ鄕、聚猶二村落之類一也
索隱曰、風俗通曰、南北曰レ阡、東西曰レ陌、河東以東、西爲レ阡、南北爲レ陌、譙周云、初爲二軍賦一
也、徐廣曰、制二貢賦之法一也
吳國倫曰、按、阡陌田間之道、卽周禮遂上之徑、溝上之畛、洫上之涂、澮上之道也、蓋陌之爲レ言百
也、遂洫縱而徑涂亦縱、則遂間百畝、洫間百夫、而徑涂爲レ陌、阡之爲レ言千也、溝澮橫而畛道亦橫、
則溝間千畝、澮間千夫、而畛道爲レ阡、此其水陸占地頗多、先王非レ不二虛棄一レ之、所下以正二疆界一止二侵
爭一、時畜洩備二水旱一、計中永久上也、商鞅開レ之、不二亦深可一レ惜也
秦孝公十二年、初取二小邑一、爲二三十一縣一、令三爲レ田開二阡陌一、
十三年初爲レ縣、有二秩史一、十四年初爲レ賦年表
周顯王十九年辛未、秦商鞅幷二諸小鄕一、聚集爲二一縣一、縣置二令丞一、凡三十一縣、廢二井田一開二阡陌一少微通鑑

註

路南北曰レ阡、東西曰レ陌、開二田界一、首使レ不二相干一也
秀按、廢二井田一ノ字、史記コレナシ、通鑑檢スベシ檢了コレニ同
東萊呂氏曰、春秋時井田尚在、戰國時已自大故廢、須レ要二人整頓一、如二史記說一、決二裂阡陌一、以靜二天

下之業ヲ、又以レ此見得、井田亦不レ易レ廢（性理大全六十九）

秀按、史記ニ開トアリ、決裂ト云何ノ所ニアルヤ、可レ檢（再考、蔡澤傳ニ、決ニ裂阡陌ヲ、以靜ニ生民之業ヲ、而一ニ其俗ヲトアリ、然レバ阡破ノ間タルコト疑ナシ）

反ニ秦孝公用ニ商君ヲ、壞ニ井田ヲ開ニ阡陌ヲ、急ニ耕織之賞ヲ、雖レ非ニ古道ヲ、猶以ニ務本之故ヲ、傾ニ鄰國雄諸侯ヲ、然王制遂滅、僭差亡度（漢書食貨志）

師古曰、仟陌田間之道也、南北曰レ阡、東西曰レ陌、陌音莫白反

饒氏曰、阡陌是田間路、古人車制、一車濶六尺有餘、兩傍又糞レ之、以ニ人占レ田太多ヲ、商君欲レ富レ國、所ト以鑿ニ開阡陌ヲ爲セ田、前ハ此諸侯富ニ其國ヲ、井田大綱已自壞了、商君則索性壞却（纂引）

通考曰、蔡澤言、商君決ニ裂井田ヲ、廢ニ壞阡陌ヲ、以靜ニ百姓之業ヲ、而一ニ其志ヲ、夫曰レ靜曰レ一、則可レ見ニ周授田之制ヲ、至ニ秦時ニ必是擾亂無レ章、輕重不レ均矣（纂引）

秀按、秦封建ヲ破リ天下ヲ私ス、其本謀ナリ、故ニ授田ノ制、人情ノ欲セザルトオモヒ、井田ヲ壞リ皆民ノ私田永久ノモノトシテ、其意ヲ悅バシメシモノト見エタリ（直夫曰、快說ナリ）

朝鮮權侙曰、箕子立ニ八條之敎ヲ、嘗行ニ井田之制ヲ、至レ今阡陌尙存、此亦八條之一也ト、コレ恐誇言信ズルニ足ラズ、今何ゾ阡陌ノ存スルアランヤ

杜氏通典曰、自ニ秦孝公用ニ商鞅計ヲ、乃隳ニ經界ヲ立ニ阡陌ヲ、雖レ獲ニ一時之利ヲ、而兼併踰僭興矣、降秦以後、阡陌既弊、又爲ニ隱覈ヲ

又曰、秦地廣人寡、故草不二盡墾一、地利不二盡出一、於レ是誘二三晉人一、利二其田宅一、復三代無レ知二兵事一、而務二本於內一、而使二秦人應二敵於外一、故廢二井田一制二阡陌一、任二其所下耕、不レ限二多少一（淵鑑）

コノ文ハ、阡陌ヲ開創セシト見タルナリ

中郎區博諫二王莽一曰、井田雖二聖王法一、其廢已久、周道既衰、而人不レ從、秦順二人心一改レ之、可三以獲二大利一、故滅二廬井一、而置二阡陌一、遂王二諸夏一

コレモ同意ナリ、蔡澤傳ヲ讀ザリシヤ、古人モ疎略アルナリ

井田行否

或問二井田今可レ行否一、程子曰、豈古可レ行、而今不レ可レ行者、或謂、今人多地少、不レ然、譬二諸草木一、山上著得許多便生、許多天地生物常相稱、豈有二人多地少之理一（性理大全六十九）

問二横渠一、謂、世之病二井田難下行者、以三亟奪二富人之田一爲レ辭、然處レ之有レ術、期以二數年一、不レ刑二一人一而可レ復、不レ審三井議之行二於今一果如何、朱子曰、講學時且恁講、若欲レ行レ之、須レ有二機會一、經二大亂一之後、天下無レ人、田盡歸レ官、方可三給二與民一、如二唐口分世業一、是從二魏晉積亂之極一、至二元魏一、及二北齊後周一、乘二此機一方做二得荀悅漢紀一、一段正說、此意甚好、若平世則誠爲レ難レ行（同上）

荀悅論曰、井田之制、不レ宜二於衆人之時一、卒而革レ之、蓋有二怨心一、則生二紛亂一、若高祖初定二天下一、光武中興之後、人民稀少、立レ之易矣、今既難レ行、宜下以二口數占田一、爲レ之立上レ限、人得二耕種一、不レ得二

買賣以贍貧弱、以防兼幷、且爲制度張本、不亦善乎 蒙引

蘇老泉曰、議者皆言、奪富民之田、此必生亂、如乘大亂之後、土曠而人稀、可一擧而就、吾又以爲不然、今雖使富民奉其田、以歸諸公、以爲井田、其勢亦不可得、何則井田之制云々、萬夫之地、蓋三十二里有半、而其間、爲川爲路者一、爲澮爲道者九、爲洫爲塗者百、爲溝爲畛者千、爲遂爲徑者萬、此二者非塞溪壑、平澗谷、夷丘陵、破墳墓、壞廬舍、徙城郭、易疆隴、不可爲也、縱使盡得平原曠野、而遂規畫於其中、亦當驅天下之人、竭天下之糧、究數百年、盡力於此、不治他事、而後、可以望天下之地、盡爲井田、盡爲溝洫、已而又爲民作屋、廬於其中、以安其居、而後可、吁亦迂矣、井田成而民之死、其骨已朽矣 蒙引

秀按、周禮王制ノ說ヲ信ゼバ、實ニ老泉ノ言ノ如クナルベシ、孟子ノ所謂井田ハ、如此ニハアラザルベシ

舜水曰、井田方里爲井、溝塗封洫、即在其內、十里爲百井、山川谿谷、不在其內、近山川谿谷、不可井者、則爲間田、以授士大夫之圭田、及餘夫之田、諸侯之國方百里、七十里、小者五十里、無五七百里者、雖周公之國七百里、恐未必然

中原自秦以來、廢井田開阡陌之後、漢唐以來、必不能復、所以賢君治天下、止於小康、以田皆民間私產、不能井分、今惟貴國之田可井、可以復古先哲王之治、而君相皆無其志 文集、對平賀舟翁問

伊藤仁齋曰、井田之制、萬世不易之良法也、然其欲レ復レ之者、或拘ニ於周禮溝遂之法一、或疑ニ於山林川澤之勢一、當苦不レ能レ行也、是皆拘士腐儒、襲レ故承レ舊者之陋見、不レ足ニ與有一レ爲焉、若有ニ聰明疏通、大過レ人者一、而得レ任ニ其事一、則固當ニ自有ニ良法一、不レ擾ニ一事一、不レ病ニ一人一、而先王之法可ニ立復一矣、而觀ニ孟子一曰、此其大略也、則知方ニ其時一、既不レ可レ知ニ其詳一、而後世諸儒之說、皆其所ニ臆度一、而非ニ先王之意一也、學者要當レ本ニ先王之意一、而不レ泥ニ先王之迹一、酌レ古宜レ今、使ニ之可一レ行斯可矣

易地

周禮大司徒、凡造ニ都鄙一、制ニ其地域一、而封ニ溝之一、以ニ其室數制一レ之、不易之地、家百畝、一易之地、家二百畝、再易之地、家三百畝

鄭註、鄭司農云、不易之地、歲種之地美、故家百畝、一易之地、休ニ一歲一乃復種、地薄、故家二百畝、再易之地、休ニ二歲一乃復種、故家三百畝、畝本亦作ニ古畮字一

賈疏、不易之地、家百畝者、此謂ニ上地一、年々佃レ之、故家百畝、云ニ一易之地、家二百畝一者、謂ニ年別佃ニ百畝一、廢ニ百畝一、云ニ再易之地、家三百畝一者、以ニ其地薄一、年々佃ニ百畝一、廢ニ二百畝一、三年再易乃徧、故云ニ再易一也

按、彼地薄瘠、故ニ如レ此ト見エタリ、此方ニテ年々種ルガ如キモノハ、上地トスルト見ヘタリ、唯隱岐ニ一易ノ田アルコトヲ聞ク

漢食貨志曰、民受レ田、上田夫百畮、中田夫二百畮、下田夫三百畮、歲耕種者、爲ニ不易上田一、休ニ一歲一者、爲ニ一易中田一、休ニ二歲一者爲ニ再易下田一、三歲更耕レ之

秀按、コレ周禮ニ本イテ云フナリ、若此說ノ如クナランニハ、助法ハ行ヒガタカルベシ、公田ノミ上田ハアルベカラザレバ、コレモ再易三易ナキコトアタハズ、サラバ井田イカンゾ畫シ、イカンゾ界セルヤ、周禮ニ據リガタキコト如レ此

公羊傳宣十五年何休註曰、司空謹別ニ田之高下善惡一、分爲ニ三品一、上田一歲一墾、中田二歲一墾、下田三歲一墾、肥饒不レ得ニ獨樂一、磽角不レ得ニ獨苦一、故三年一換、主ニ易居財均力平一

里布屋粟

周禮司徒下曰、載師、凡宅不毛者有ニ里布一、凡田不レ耕者出ニ屋粟一、凡民無ニ職事一者、出ニ夫家之征一

鄭註、鄭司農云、宅不毛者、謂レ不レ樹ニ桑麻一也、里布者、布參印書、廣二寸、長二尺以爲レ幣、貿易物詩云、抱布貿絲、抱此布也、或曰、布泉也、春秋傳曰、買レ之百兩一布、又廛人職掌ニ斂市之次布・儳布・質布・罰布・廛布一、孟子曰、廛無ニ夫里之布一、則天下之民皆說、而願レ爲ニ其民一矣、故曰、宅不毛者有ニ里布一、民無ニ職事一、出ニ夫家之征一、欲レ令下宅樹ニ桑麻一、民就中四業上、則無ニ稅賦一以勸レ之也、故孟子曰、五畝之宅、樹レ之以レ桑、則五十者可ニ以衣レ帛、不レ知言ニ布參印書一者、何見ニ舊時說一也、玄謂、宅不毛者、罰以ニ一里二十五家之泉一、空田者、罰以ニ三家之稅粟一、以ニ其吉凶二服、及喪器一也、民雖

レ有下間無二職事一者上、猶出二夫税家税一也、夫税者、百畝之税、家税者、出二士徒車輦一給二繇役一繇音遙
賈疏釋曰、以二草木一爲二地毛一、民有二五畝之宅一、廬舍之外不レ樹二桑麻之毛一者、罰以二二十五家之税布一、謂二口率出泉一、漢法口百二十也云、凡田不レ耕者、出二屋粟一者、夫三爲レ屋、民有二三畝之田一、不二耕墾種作一者、罰以二三夫之税粟一云、廛人職掌二斂市之次布一、已下彼註、先鄭云、次布列肆之税、布總布、後鄭云、總謂レ如二租穗之穗一、穗布謂レ守二斗斛銓衡之布一、質布謂下質人所レ罰犯二質劑一者之布上、罰布者、謂下犯二市令一者之泉上、廛布者、貨賄諸物邸舍之税、彼諸布皆是泉、故引以爲レ證也

初税レ畝

春秋宣公十五年、初税レ畝
杜註、公田之法、十取二其一一、今又履二其餘畝一、復十收二其一一、故哀公曰、二吾猶不レ足、遂以爲レ常、故曰レ初
孔疏正義曰、公羊傳曰、古者什一而籍
公羊傳曰、初者何始也、税レ畝者、何履レ畝而税也、初税レ畝何以書レ譏爾、譏二始履レ畝而税一也、何譏二乎始履レ畝而税一
何休註曰、宣公無二恩信於民一、民不レ肯レ盡二力於公田一、故履踐按行、擇二其善畝一、穀最好者税取レ之

十畝之桑

詩魏國風十畝之間兮、桑者閑々兮

傳曰、閑々然、男女無レ別、往來之貌

箋曰、古者一夫百畝、今十畝之間、往來者閑々然、削小之甚

正義曰、魏地陿隘、一夫不レ能ニ百畝一、今纔在ニ十畝之間一、采レ桑者閑々然、或男或女、共在ニ其間一、往來無レ別也

又曰、此言ニ之間一則一家之人、共采ニ桑於其間一、地陿隘無ニ相避一、故言ニ男女無レ別、閑々然、爲ニ往來之貌一

又曰、孟子曰、五畝之宅、樹レ之以レ桑、則野田不レ樹レ桑、漢書食貨志云、田中不レ得レ有レ樹、用妨ニ五穀一、此十畝之中、言レ有レ桑者、孟子及漢志、言ニ其大法一耳、民之所レ便、雖レ田亦樹レ桑、故上云ニ彼汾一、一方言レ采ニ其桑一、古者使ニ其地一、而房ニ其民一、此得ニ地陿民稠一者、以ニ民有レ畏レ寇而内入一、故地陿也、一夫百畝、今此十畝、相率十倍、魏雖ニ削小一、未ニ必即然一、擧ニ十畝一、以喩ニ其陿隘一耳

甫田十千

小雅甫田曰、倬ニ彼甫田一、歳取ニ十千一

毛傳、倬明貌、甫田謂ニ天下田一也、十千言レ多也、鄭箋、甫之言ニ丈夫一也、明ニ乎彼太古之時一、以ニ丈夫稅ニ田也、歳取ニ十千一、於ニ井田之法一、則一成之數也、九夫爲レ井、井稅一夫、其田百畝、井一爲

レ通、通稅十夫、其田千畝、通十爲レ成、成方十里、成稅百夫、其田萬畝、欲レ見下其數從二井通一起上、故言二十千一、上地、穀畝一鍾

正義曰、穀梁傳曰、夫猶レ傅也、男子之美稱、士冠禮註亦云、甫丈夫之美稱、甫或作レ父、是爲二丈夫一也、言丈夫稅レ田、謂下於二丈夫一而稅二其田一、歳取中十千上、於二井田之法一、則一成之數者、司馬法計レ之然也

殊二井疆一

畢命、弗レ率二訓典一、殊二厥井疆一、俾二克畏慕一

孔傳、其不レ循二教道之常一、則殊二其井居田界一、使下能畏二爲レ惡之禍一、慕中爲レ善之福上、所二以沮勸一

正義、孟子曰、方里爲レ井、井九百畝、使二民死徙無下出レ鄕、鄕田同レ井、出入相友、守望相助、疾病相扶持、則百姓親睦、然則先王制レ之、爲二井田一也、欲レ使二民相親愛、生相佐助、死相殯葬一、不レ循二道敎之常一者、其人不レ可二親近一、與二善民一雜居、或染レ善爲レ惡、故殊二其井田居界一、令丁三民不二與東往一、猶丙今下民有二大罪過一、不二肯服一者、則擯二出族黨之外一、吉凶不乙與交通甲、此之義也

商道九篇國字解

堤正敏著
松川修解

四民繪抄
商家必讀國字解
しやうかひつどくこくじかい
全四冊
堤一雲齋著
書林
得寶堂
寛永通寳

序

孟子曰、人幼而學レ之、長而將レ行レ之也、學者之志、固當レ如レ此也、而吾邦無二科擧之制一、假令學通二古今一、才堪二經世一、徒爲二屠龍之技一、故吾輩無レ施二之邦國一、舌耕給レ食耳、而及レ門受レ教者、多是醫生商賈、間有二士大夫一、要レ之皆好二文辭一者也、故孝弟脩レ己之外、無レ益二於時事一、半世苦心、不レ當二一文錢一矣、況士異時殊、論二古今一、知二時務一、俊傑其猶難レ之、故終日談論極二奥妙一、圓枘方鑿、徒勞レ心者而已、因思士農工商、各有二其務一、因二其所二經導一而明レ之、夫或所レ益二智思一、是又納レ約自レ牖之義也、乃先著二商道九篇一、時方在二於市中一故也、士農之諸篇、他日續著レ之云

文化丙子孟春　　平安　堤　正　敏　識

文久元辛酉季秋成刻

凡例

一 商家必讀は、一雲堤先生の著す所、先生の言に曰、吾邦に於ては、下つかたのもの文字の學に疎く、聖賢の書を讀み、其玄旨に通ずる者すくなし、閑暇ある人さへ然なれば、閑暇なきものはいふもさらなり、六經は先王己を脩め、人を治るの道、論語は孔子の諸侯大夫、及門弟子の問に答る所、何れも士大夫より上の事なれば、孝弟忠信の外、庶人の會し得ぬ事多し、よりて思ふに、士•農•工•商各々其つとめあり、みな幼より馴得し事なり、其知ぬる所に因て其智思を廣めば、自ら四書六經の旨にも通じ、孝弟忠信の勤も、彌明かに知るならんと、先此編をあらはして、商家の人々に說示し給ふ、予も亦其門に有て其敎を受、日に〳〵聞所を記して、自ら解釋のごとくなれり、元より人に示さん心なければ、鄙俗をきらはず、忘に備ふる迄にて止ぬ、或人是を閱していふ、此書獨秘すべきに非ず、普く人に示して所益となしてんと、强てすゝむるに辭がたく、記せし儘を梓にちりばむるなれば、見る人予がことばの鄙なるを咎むる事なかれ

一 此書史記の貨殖傳に本づきて、商道の奥旨を述べ、六經•四書•諸子•百家の言を雜へ引て其義を廣め、庶人の身を脩め家を齊ふ道を說く、其傳曰といふものは、貨殖傳也、其餘或は書名•人名を引、或

は共語を取て共名を引ず、皆文勢に寄るとしるべし

商道九篇名目錄

商道九篇國字解一之卷

一雲堤先生著
有山松川修選解

商術第一

商字義は、財を通じ貨を粥なり、又商量裁度なりと云り、商の道は、商量裁度を肝要とす、商の字此數義を含めり、術者、道術なり、又道業なり、人を教中におき、專ら教を事とするを言なり、商人の業には其術ありて、能く是を使し得れば、金銀をもふくる事心のまゝなり、されども其術手に入ざれば、自由自在に使得がたし、故に此篇は商術の要務を擧て其大綱を示し、以下の七篇には條目分ちて、各々務とする所あることをしらしめ、終の一篇に奥儀をあらはして、商の妙用を了解せしめんと欲す、見る人篇目によりて其理をもとめ、是を實事に試て其用所をしらば、是を得ん事掌の中に有

商之爲レ道、貿ニ遷有無一、資ニ給民用一、治生之計大、用智之地廣、其術深奥、不レ可レ不レ學也

此段及次の段は、一篇の大綱にして、商術の精敷すべきを説出したり、凡商の道は、國々の産物、

并に諸職人の造作する所の諸品を賣買して、有無を通じ、不自由をさせぬ事を旨とする家業なれば、治生の計も大に、用智の地も廣く、其術には深き奧儀のあれば、學ばずしては知れがたし

傳曰、以レ貧求レ富、農不レ如レ工、工不レ如レ末、蓋末業者、貧之資也、爲レ末不レ得レ富、誠一之不レ至也、爲レ富不レ累ニ巨萬一、未レ知ニ其術一也、知レ術不レ能レ用、學之不レ精也、故考レ之以ニ三擇一、審レ之以ニ三經一、而精ニ其術一

傳曰とは、史記の貨殖傳に、貧窮人の富家にならんとするには、農業より工業は經濟よろしく、工業よりは末業は、貧窮人のこれを資として、富家になる捷徑なりと云へり、然るに世の中に末業をなして、富家にならぬもの多し、是は商の咎には非ず、一心不亂に家業を勤ざる故なり、扨また家業を專一勤ても、わづかに小富となッて、大富となり得ぬもの有、是は商術の奧儀を知らぬ故なり、又商術を知りて能口に說ども、金を得儲ぬ者有、是は醫學よくて、匕の廻らぬ醫者の如く、實の學に精しからざるなり、かるがゆへに三つのえらみ、三つの經といふ事をつまびらかに考て、其術をくわしくせしむ、能く精敷する事をえば、これを使ふて自在を得るなり

曰、地何處宜、業何爲大、人何物能、地擇ニ要通一、業擇ニ源大一、人擇ニ强忍一、地不ニ要通一、三寶不レ聚、業不ニ源大一、貿易不レ廣、人不ニ强忍一、煩勞不レ堪

此段は三擇の義を說て、術を精敷するの道を示すなり、三の擇といふは、第一には土地、第二は家

商人の店ハ所を
座帳
狀刺
文刺

夫く心苦力を合せバ繁栄ハ
渡

業、第三は人物なり、土地とは、店を出すべき場所なり、是を擇は諸方の產物を持付る所を宜とす、業とは家業なり、是を擇は賣先・買先の手廣きを宜とす、人とは、召使の家僕なり、是を擇は强忍なる宜とす、されば諸方の產物を持付る所に居らざれば、金銀貨財は聚らず、賣先・買先の手廣き家業にあらざれば、金銀の融通自由ならず、强忍の人にあらざれば、煩敷心勞なる掛引に堪がたし、此三つは家業を創る礎なれば、心をつくして擇むべきなり

三擇已得、三經爲レ務、曰、作レ力乎、曰、鬪レ智乎、曰、逐レ時乎、作力者在ニ省力一、鬪智在ニ不鬪一、逐レ時者在ニ觀變一

此段は三經の義をとく、上にいふところの三つの擇すでに得たらば、三つ經を考へて家業を創むべし、三つの經とは、作力・鬪智・逐時の三つなり、此三つは商家の骨とすべき事なる故、機の經糸にたとへていふなり、作力とは、骨折を專一にしてかせぐ事なり、商人の家業を創るに本錢なきものは、骨折りをもつて本錢とし、庸夫任夫の重任を擔ひ、手足肩のかせぎを以て、日用を濟、如レ斯に辛苦を厭はず、走り廻りて賣買をなすをいふ、鬪智とは、智慧才覺を以家業を勵合事なり、小本錢のあるものの賣買をなすには、智慧才覺を專一にして、小金を以大金の振り廻しをなすをいふ、逐時とは、賣買の時節を考へ、時に先だつて買置をする事なり是は大に本錢の有人は、作力・鬪智の小ぜり合には取合ず、時節の移り行所を考へ先を取て勝を得るを專一とするをいふ、此三つを以て吾身上を考

へ計り、何れなりとも我身に相應せる事をなすべし、何れをなすにも、又それ〴〵の要務とすべき事有、先作力の務は、無用の骨折に身體を疲らさず、有用の所に眼を付て、人に先をこされぬを肝要とす、逐時の務は、天の時の變化する所に眼を付て、變に先だつて備へをなすを肝要とすべしとなり

爲レ商賈レ爲レ戰、作力、士卒之技也、鬪智、褊將之爲也、逐レ時、大將之事也、身體强健、步趨輕捷、運レ戈如レ舞、一敵レ萬、士卒之最也、授レ之以二堅甲一、與レ之以二利兵一、教令以習二座作一、金鼓以節二進退一、鼓二其勇一驅レ之、則破レ堅碎レ剛、易レ反レ掌矣、昔夫饑二其肌膚一、疲二其四支一、奔二無人之境一、卒爾遇レ敵、不レ及二一老蓏一、故曰、良禽相レ樹而捿、賢臣擇レ主而仕、作力者、無レ若レ依二良賈一、斯謂二之省力一也

此段及已下の三段は、作力。鬪智。逐時の要務を委曲に說なり、此だんに說ところは、まづ作力の事なりといふ、意は商業の作爲は、治世の合戰にして、作力の技は、一騎立の士のごとく、鬪智の爲は、一手の旗頭のごとく、逐時の事は、惣大將軍に似たり、一騎立の士は、使ふべき家來もなく、我が一身のはたらきを以て功名を顯し、立身出世を望む者なり、尤その身健になくてはかなひがたし、それが中にも、走り廻り達者に、心も剛にして武藝拔群に秀たるは、士卒の最なり、世に是を一騎當千と呼ぶ、かゝる剛のものにさねよき甲をきせ、わざ物の力をあたへ、軍令を習し、金鼓の合圖に折敷たち、進み退くの程あひを熟練させ、其勇氣を鼓動して一陣に進せなば、何程の大軍なりとも、何の苦もなく蹈破るべし、いか成剛のものなりとも、破甲に銹刀を持せ、無用の奔走に身體

山崎の合戦
秀吉公明智
と戦ふ

大功の啚

羽柴大秀吉

を疲し、飢につきて動きえぬ所へ、思ひがけなき敵陣より俄に押寄、戰は一人の老ぼれにも殺さるべし、古き人のことばにも、良禽棲べき木を相し、賢き臣は仕ふべき主人を選と、されば加藤清正も太閤秀吉に仕へたればこそ、いつも合戰に勝利の圖をはづさず、大功を立る事を得たり、作力のつとめも此理に同じければ、良き商人を後栫に控て、心置なくはたらきなば、立身出世も速なるべし、是則無用の骨折なく、有用のつとめに即効を得るなり

夫依者爲㆑臣、任者爲㆑君、馬援曰、今之世非㆓君擇㆒臣、臣亦擇㆑君、擇之道通㆓上下㆒、依任各得㆑人、智之事也

此段は上の文の作力は、良賈を後栫にするにしくはなしといふにより、良賈を擇は容易の事に非ず、智惠有て目の利たる上、時節到來せば得がたしといふ意にて、是より發すなり、凡そ人間の有樣を見るに、獨り立はならぬ物なり、一所に群れ居て、互に介け介けられて一代を過すなり、故賢と愚と、巧なると拙きと、富ると貴き、貧き賤き、樣々に等かわれども、つゞまる所は人を頼とするると、人に頼とせらるゝとの二つに出ず、人を頼とするものは、人に使はれておのづから家來の如くになり行、人に頼とせらるゝものは、人を使ふて自ら主人の如し、家來は主人の指圖について、まゝのはたらきをなす、我身自由のはたらきを得ず、主人は家來を指揮して、萬づ心のまゝのはたらきをなすゆへに、使はるゝ所の人其器に非ざれば、我才智を十分にのぶる事を得ず、使ふ所の人

其才に非ざれば、心のまゝのはたらきをなし難し、後漢の馬援光武帝にいふ、今の世には主人が使ふて、役に立家來を擇のみにあらず、家來も又使はれて、役に立べき主人を擇なりと、されば撰といふ事は、主にも家來にもみな入用のすじなり、使ふて役に立家來が、使はれて役に立主人を得たるは、主も家來も皆智慧ありて、互に擇所を得たりといふべし

智也者、因ㇾ所ㇾ能而發、人之所ㇾ能不ㇾ同、智亦多端乎哉、知ニ機微一、智之至也、知ニ時用一、智之當也、應ニ卒然一、智之敏也、以ニ我所ㇾ知、與ニ彼所ㇾ不ㇾ知鬪、斯謂ニ之不ㇾ爭、不ㇾ爭之爭、迂直之計也、迂也者形也、直也者情也、形因ㇾ物變化、因ㇾ利制ㇾ權、無ㇾ知ニ其端倪一、鬪智之道也

此段は上の文を承て、智慧の論より鬪智の事に及び、智慧くらべの仕方を說なり、夫古へ今の事を見て、天下のひと〳〵の智惠の筋を考へ料るに、大抵の所は上智・中智・下愚と三段に分る、中庸にいふ所の生知・學知・困知といふも皆此中に出ず、先づ生知といふは、天然と持て生れたる所の智惠にして、學文修行をなさゞれども、事に觸て發明する所、各々其理に當るをいふ、上智といふも、則此事なり、また學知・困知といふ、何れも中智の人のする所なり、中智といふは、みがけば光り、みがかざれば曇る智慧なり、下愚といふは、いかにみがくとも光らぬ智慧也、天が下の人上智は無が如く、下愚も又至て稀に、多くは皆中智の人なり、中智の人の古へ今の事を學て、みがき上たる智慧を學智といひ、色々樣々の事に出あひ、艱難辛苦を嘗て、自然琢り磨かれたる智慧を困智と

いふ、かく大概を擧て三だんとなせ共、上智の中にも次第有べく、中智にも又次第樣々なり、然るに是等は皆善き智慧の上の事にて、惡敷智惠に於ては、奸智・賊智・黠智などいふて、是又樣々有、賊は是小人の智、君子にまさるといふて、奸賊の人の奸賊の事において、惡智慧を出す事は、聖人にも勝りたり、是等の智にも、生れ得たる賊根生も有べく、又中智の人の磨そこなひも有べし、凡智慧才覺は人々の生れ付てすき好む所と、年久敷爲習せし所より、巧なるわざを非ニ强明ニして、人人の得手々々とはなりぬ、されば人々のすき好む所樣々とかわれば、智慧の筋も又樣々とかはれり、事の上につきて智慧の品を論ぜば、是又三段に過ず、共一つは機微を知るの智、共二つは時用を知るの智、その三つは卒然に應ずるの智なり、先づ機微を知るの智とは、萬の事のやがてかくなんとする機微あるを、前方よりとく知るの智慧なり、是等は人に超過したる事なれば、是を智慧の至極とするなり、又時用を知るの智とは、古へは箇樣の事なれども、今ケ樣にせざれば行ず、昨日はケ樣にしてあれども、今日はケ樣にするが宜しと、共時に應ずる事を發明する智慧なり、是等は時勢を審に知りたるわざなれば、是を時の用に當る智惠とするなり、又卒然に應ずる智とは、思ひもよらぬふつてわいたる如くに出て來る時は、我も人もあわてふためくものなり、かゝる時にのぞみて少しも騷がず、機に臨み變に應じて、圖に當る作爲をなす智惠なり、是等は思案工夫に及ばぬわざなれば、是をいちはやき智惠とするなり、此三つは高坂彈正のいふ所の遠慮・分別・才覺の事に似て、

深さと淺さとの差別有、故に此三つを得んと欲せば、淺きより深さに至るべし、されば機微を知るの修行は遠慮より初り、時用を知るの修行は分別より初り、卒然に應ずるの修行は才覺より初り、商の道に於て智恵を用ゆる所は、擇の道の上下に通ずると同じく、作力・鬪智・逐時の上に通じて、何れをなすにも皆入用の事なり、然るに此段に專ら智慧の事を論ずる所以は、作力・鬪智・逐時の三つに、大小の用かはりあれば、智慧の使ひ樣にも又かわりある、作力は專ら力を用ひ、逐時は專ら術に任す、故に智を用ゆる所或は少し、鬪智の上に於ては、智慧くらべが主用なれば、智慧を用ゆる事多し、此に專ら智の事を論ずるはこれがゆへなり（是迄は智慧の論にて、此より已下は、智を鬪の事を說くなり）それ鬪といふは、利を爭ふてけあふ事なり、我も利の有所を見付て是を取んと進み、彼も利の有所を見付て、是を取んと進み爭へば、打球の球を爭ふ如く、双方ねぢ合になりて、十分の利を得がたし、すべて爭は先を取る者勝を得るなれども、我も人も先を取らんと心掛る故、進む時はやはり同時になりて、先を取事なりがたし、そこで彼の智慧の論にいふ所の、機微を知るの智を用ひて、人の氣の付ぬさきに利の有所を見付て、早く進みて是を取時は、いつも先掛して勝利を得るなり、されども是も敵方に機微を知る者あれば、やはり蹴合となる、故に爭ざるの爭といふ事を會得せざれば、鬪智の務に於て、のしたる働をなし難し、爭ざるの爭とは、彼が智慧と我が智慧とくひ違て、使の人の進む時に進まず、人の爭ふ事を爭ず、其進ざる時に進、其爭ざる事を爭ふをいふなり、是

後漢光武皇帝

れ孫子が爭地篇にいふ迂直の計にて迂とはまはり途をする事なり、直とは直途をゆく事なり、直途より行て利を取る事は承知なれども、敵も又直途より來りて利を爭ふ、故にわざと利の有所に氣の付ぬ顏に迂途を行て、敵に油斷させ、不意に出て先を取仕方なり、されば迂途によるは、おそき仕方に似たれども、不意に出る所の早業は、やはり直途より行が如し、畢竟の處、形は迂途を行なれ共、情は直ぐ途より行を、敵我形を見て我情を知らず、油斷して先掛をせらるゝなり、然れ共人の情は、形ち色に顯るゝなれば、敵に油斷させんと思へば、敵も又其色を悟りて、油斷する事なし、故に先づ敵の情を深く探り得て、其作爲する所を知り、時の樣子事の模樣によりて、或は敵の思ふつぼへ我形をはめて見せ、或は敵の思ひの外なる所へ我形をそむけて見せ、自在を變化して、何れを夫れと見分難ければ、敵我形によりて我情を知る事なし、知る事なければ、我がする所は、いつも敵の不意に出る故、先を取て勝をせいする事自在なり、是我智慧と敵の智慧と、くひ違ひて使ふ仕方にて、其端倪をしらるゝ事なき鬪智の術の妙用なり、されども此の作爲は我が心虛にして、一物も有事なし、暫時の間に草鞋をはきて、敵の腹中を廻國するの手段なければ、自由の分を得がたし、猶應變の篇を幷せ見て了解すべし

逐レ時者得ニ二者一、爲ニ己用一而後可レ爲、故曰、大將之事也、計然曰、知レ鬪修レ備、時用知レ物、二者形、則萬貨之情、可ニ得而觀一已、夫物無ニ恒用一、無ニ恒不一レ用、用與ニ不用一互變如ニ四時一、備レ之不レ用、待レ用

而出、斯曰二之逐時一、部言曰、逐レ鹿者不レ見レ山、意在レ於逐一也、故逐時所レ務、不レ在二於逐一、而在二於觀一、專任レ時而不レ責レ人、在レ觀レ變之謂也、夫三經之用雖レ異、其宜一也、作力者爭二於勉一也、闘智者爭二於人一也、逐時者爭二於天一也、爭也者、謂二驅馳而逐一也

此段は逐時の事を說なり、それ逐時をする人は、前の段の作力・闘智等の人々、皆己に使はれて旗下となる程の器量なくては出來難し、故に是を大將の事に譬るなり、されば商人の大將となりて金銀の權柄を主り、作力・闘智の人々を我が旗下となす仕方には、先づ金銀米錢萬づ相場の貴賤する貨物の情を知に在り、金銀の類はもと死物にして、情なき者なれども、活たる人の切に入用の品なれば、これを重ずる事命につゞくものなり、活たる物の如く飛あるきて所を定めず、此の活物の金銀を以、賣買する所の諸の貨物も、皆金銀の氣を通はして、活動して貴賤し、宛も情有もの丶如し、されば萬の貨物の情を知らざれば、價の貴賤する所以を知る事あたはず、貴賤する謂以を知らざれば、利用を得る事あたはず、利用得ざれば、金銀の權柄を秉る事能はず、故に萬貨の情を知るを以、金銀の柄を秉る本とするなり、昔春秋の時、越王勾踐の臣に計然といふ者有、能く貨殖の術を明にして、大に越の國を富しむ、計然が言葉にそれ弓・矢・鎗・冑・甲の類は戰場の用具なり、兼てより其用意もなく、戰場に臨て俄に是を備へん事を求めば、如何なる智者も是を辨ぜん事なしがたし、故に戰の道を知るものは、未だ戰場へ向はざる以前に、あらかじめ其備をなし置なり、平生に用ゆる所の器物

といへども、又皆其時々に當りての用具あり、故に其時々の用ゆる所を知るものは、あらかじめ其用具備へ置て、時に當りて入用の物に事をかく事なきなり、たとへば晴天に雨傘をはらせおき、雨天に草履を作らせ置が如し、此二つの情を見るべきのみといへり、是商道傳授の語にして、其眞理は賣買の上に心を用ひて獨り悟するに有、（委しくは知務篇に見へたり）凡人の平生に用ゆる所、いつにても入用の物とてもなく、いつにても入用になき物とてもなし、鍋・釜程身に切なる器はなけれども、飯時はづれては不用なり、年徳棚も平生に不用なる器なれども、節分には大切の用具なり、大抵物の用と不用とは、互にかわる事四季の移り行が如し、故に入用になき時に買置、入用の時を待てこれを出し賣るを逐時とは言なり、是を時を逐と名付たる所以は、時至りて備へをなせば、備をなすうちに時ははや過るなり、故に時に先だつて備置、時至りて是を賣り、時におくれじと追て行意なり、然るに鹿を追ふ者は山を見ずといふたとへの如く、おひ付ん／＼と鹿ばかりに目を付て、覺へず深山に入りて、歸る道を失ふ事有ゆへに、此術をせんには逐事に意をうらず、時の變る所を見物してゐる心持になるべしとなり、惣て物事に付て餘り心をくらせば、却てすじが分りかぬる、局に當る者迷ひ、傍觀の者は明なりといふて、彼の將棊を指に、傍から見てゐるものは、勝負に心なくして、詰手のよく見へるが如し、本文に逐にあらずして、見るにありとは、是また時に任じて人に責ずといふは、天の時の變動するを逐ひ、是に任じて人を責ざるなり、逐時と鬪智との差別は、鬪智は小金を

以大金と掛合す仕方なれば、小勢を以大軍に當る如く、打破りてはかけぬけ、前に在かとすれば後に顯れ、專ら手輕きはたらきを以て大軍を拔き靡かせ、或は奇謀を出して敵の不意を打、神出鬼沒の計を以て、一時に勝利を得る仕方なり、逐時はこの仕方とは事かはり、大軍を使ふ者專ら紀律を專りて、士卒の働きを賴とせざる如く、天の時を規にして術を立、强忍の人を擇で術中に置、專ら時に任じて賣買をなし、人のはたらきを貴ずして、人自からはたらく仕方を旨とする故、其務とする所は、時の變ずる處を見るに在り、此の三經の作用異に似たれども、其道理は同じ事なり、商の道は利を得るを旨とすれば、三經何れも利を爭ふ事にして、大小の爭ひ樣々異所あるを分ちたるものなり、先づ作力は專ら我が力を用ゆる者なれば、人に劣らじと勉に爭ふなり、鬪智は賣買に後じと、はげみ合ふて人々爭ふものなり、逐時は時に後じと、天に爭ふものなり、爭ふといふは、戰鬪の事にあらず、馳せ驅りて利を逐ふ事を云なり、然るに商人の作用を合戰にたとへたるは、其いわれ有事なり、昔より天下を主る人、位權を失はずして諸侯を制する事を得る時は、諸侯地を爭ひ國を攻る事なし、一たび位權を失へば、天下是を爭ひとらんと競ひ起る、是を中原に鹿を逐かけあふにたとふ、商人も其如く、天下の富商皆賢明にして、各利權を乘り家業を失ふ事なくんば、爭ふべき利もなく、貧商は只餘沫を拾ふのみならん、富商の子弟多くは愚にして、家を失ふ者あまたあれば、利貨天下に散在するゆへ、商人我一に是を拾ひ取らんと、馳せあつまりて爭ひ逐ふ事、かの中原に

百姓 諸職人
商人
ちからを

鹿を逐と相似たり、是を傳に、富に經業なく、貨に常主なく、拙者は足ず、巧者餘ありといふなり
斯六術者無レ不レ聞、精者得レ富、不精者不レ得レ富、術者載レ物而漸移、人在ニ術中一、不レ知ニ其移一、故皆知下我所ニ以富一之形上、而莫レ知下吾所ニ以爲一富之情上、知レ之之道在ニ於學一、夫可レ不レ勤乎

此一段は三擇・三經何れも商術にして、術に無窮の妙用ある事を綱々論じて、一篇の末を結ぶなり、本文の意は此の三擇・三經は、商人たるもの、何れも皆聞き知る所なれども、其術に精敷人は、無窮の妙用を得て、富業をなす事自在なり、縱令是の術を聞知と雖も、精しからぬ人は富業をなす事能はず、夫術の妙用といふは、人と物とを術中に入置、漸々に移しかゆるものなり、故商術を以貨を移さば、天下の貨財みな聚むべし、現に目に見へて移るものならば、人々も是を爭ひ逐べけれども、いつともなく自然に移しかゆる故、人も物も皆術の中に在て、其移る事をしらず、たとへば天地の人と物とをのせて移り行が如く、人其移り行處に心付ず、次第に移りて容貌のかはりたる時に至りて、始て其老たるをおどろくが如し、商術も此如く、人我が富業をなしたる表の形に驚けども、如何して富みたるといふ内情の仕方をしらず、是を知らんと欲するには、商術を學にはしかず、商術學び得れば、術の妙用手に入るなれば、商人たるものは、此學を勤めずんばあるべからずとなり
○此一篇九段に分ちて解釋をなすといへども、つゞめて七段となして見るべし、商の爲レ道より而精ニ其術一に至るまでを一段とし、曰、地何所レ宜より煩勞不レ撓に至るまでを一段とし、三擇己得よ

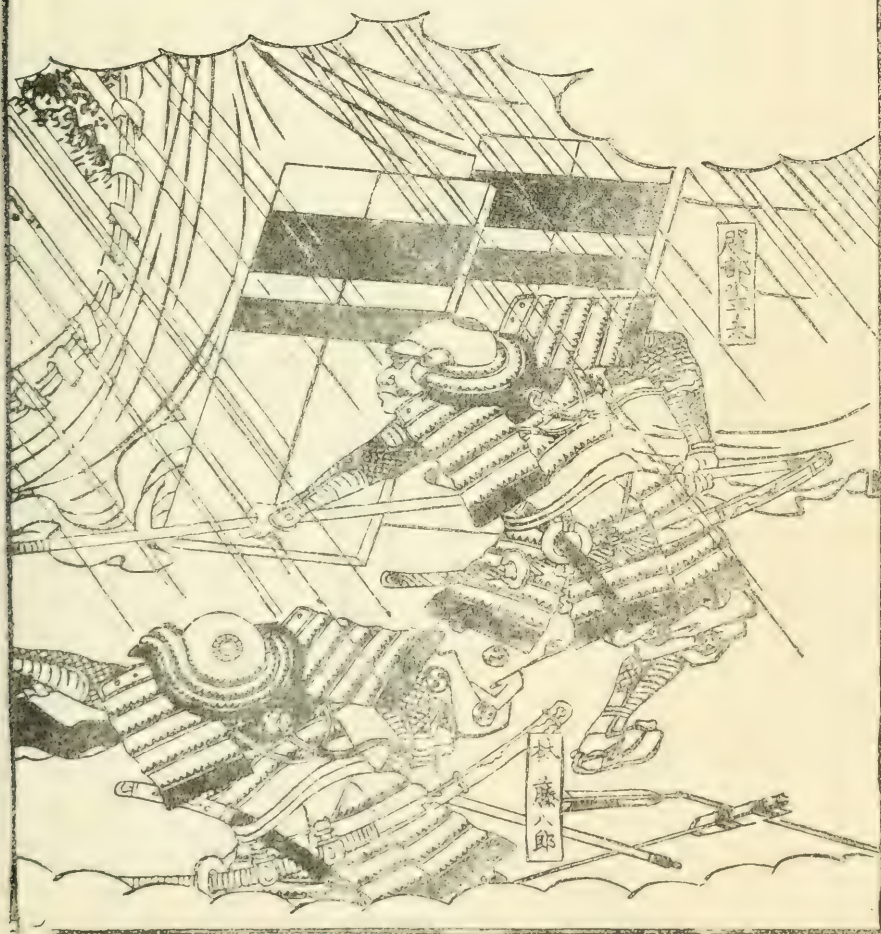
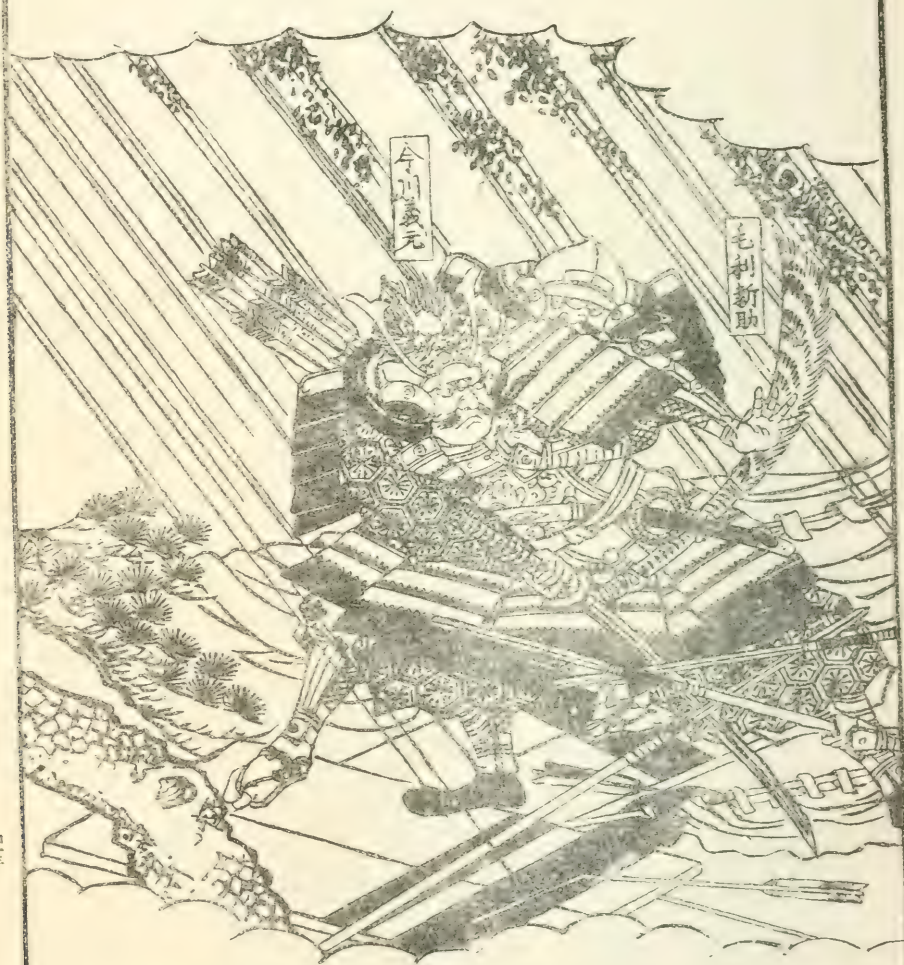
り在レ觀レ變迄を一段とし、爲レ商猶レ爲レ戰より斯謂ニ之省力一也までを一段とし、夫依者爲レ臣より鬪智の道なり迄を一段とし、逐時得ニ二者一爲ニ己用一より在レ觀レ變之謂也迄を一段とし、斯六者より夫可レ不レ勤乎迄を一段とす、都て七段なり、第一段には商の術に奥妙の理あれば、學ばずしては知りがたし、しかも是を學ぶといへども、精しからざれば術の妙用を得ず、かるが故に三擇・三經を實事の上に考て、其術を精敷すべき事をのぶ、第二段は地・業・人を擇むに、各々其宜とする處の理有を說く、第三段は、作力・鬪智・逐時の事について、各々其要務有事を示す、此一段は三經の大綱なり、第四段は作力の省力を以務とする所以をのべ、第五段は鬪智の不爭を以てつとめとするゆへをのべ、第六段は逐時の觀變を以て務とする所以を說く、此三段は三經の細目なり、第七段は商術の義をのべ論じて、一篇の末を結び、商道の學の勤めずんばあるべからざるを示すなり

知務第二

務といふ字の意は、其の身に應じ、其の時に當りて、專ら力を入れてなすべきをいふなり、都てつとめと讀字は數多ありて、字每に其の意はかわれども、何れの字にも、右か下に力の字の加らぬはなし、勉勤等の字にて知るべし、いづれもちからいれる意有、此篇を知務と名付たる所以は、商人の家業を修るに當りて、力を入べき事を知るべしとの意なり、前の商術の篇にて、三擇・三經大小の用をつまびらかに考へ、次に此篇にて、當世の務を知るべしといふ意にて、是を第二篇に置なり、夫れ

桶間合戰
今川義元
最期の圖
服部小平太
藤八郎

今川義元

毛利新助

商人の務とする所は、賣買して利を得るは、賤き時に買置き、貴を待て鬻を以てなり、故に此篇は貨物の貴賤する所以の由を論じて、時の機に應じたる作爲をなすべき事を示すなり

耕耨獲收、不レ失レ時、農之務也、制レ器適レ用、不二苦窳一、工之務也、因二俗喜好一、儲レ物待レ售、商之務也

此段は農・工・商各々其務とする所ある事を說くなり、夫農の業は春は田を耕し、夏は苗を植、水をそゝぎ、草かりを專らとし、秋は稻を刈入、冬は籾ずりこなして、年貢を役所に納む、若それ耕べき時に耕さず、耨べき時に草ぎらざれば米穀實らず、穫るべき時にかり、納むべき時に納ざれば、米穀腐れて官府責有、是皆其時に及びてなすべき事有、其時節に後じと力を盡すを農の務とする也、工の業は數多有故、すべて名附て百工といふ、工師・梓人・鍛冶・陶師・鏇匠・鎔工の輩の作り出す所の諸器皆堅固にして、所用にかなわん事を要とす、若苦窳にして所用にかなはざれば、うらるゝ事なし、故に苦窳にならぬ樣にと力を盡すを工の務とするなり、商の業も又大小樣々なれども、都て是れを商といふ、何れの業にても皆賣買を事とすれば、國・所・時の風俗をよく知り、其時々の喜好にちなみ、仕入べき時に仕入、賣べき時に賣ん事を要とす、若し其仕入たる貨物、土地の風俗の喜好に違ひ、賣買の時節を失はゞ、仕入たる所の物皆腐敗となり、損亡を取る故に、風俗喜好に違ひ、賣買の時節を取はづさじと力を盡し、商の務とするなりとぞ、此篇は務を知るを以名とする故、はじめに農工

商の務をのべて務といふ義をつまびらかにしらしめんとするなり

夫一人之身而備ニ萬姓之求一、商之業也、所レ求不レ一、時用不レ斉、風土之所レ異、嗜好亦異、儲而欲レ完、則易ニ腐敗一、不レ儲則難レ應レ急、況物價貴賤、變動無レ常、取捨失レ機、損亡忽至、紛紜之勞、大異ニ於農工書一之守一

此段、商の務をのぶるを承て、專ら商人の事に及、商人の治生は、至て煩多にして心労多き事、農や工の書一とは同じからぬ所以をのぶるなり、凡人たゞ獨りの身を過すにも、諸職人の造作する所の物を備へざれば、生涯を送り死後に葬らるゝ事能はず、我身ひとつに用ゆる所、衣・食・住の三つに過ずといへ共、衣・食・住に用ゆる所の具もまたあまたあるなり、其大略をあげて、曰、鍛冶匠・銅匠・錫匠・皃師・業師・漆匠・捲桁匠・竹匠・蔑匠・織匠・紛匠・絲工・練工・縫工・染工・刀鋳工等の作り出す所は、皆住衣の外に出ず、食物に費するところ、あげてかぞへがたし、商人の家業は是等はいふもさらなり、凡海内の國々に產出するに、異邦の珍奇に至迄、あまさず、もらさずたくわへ置て、衆人の求に應じてこれを賣り出す物なり、されば衆人の求るところ同一の物にあらず、また時節々々に隨ひて、世に用ゆる所の品も同じからず、まして土地風俗のかはる所には、嗜好も又かはり有、かく色々様々とかわる人情にもかなひ、時節々々に用ゆる所の間を合さんと、廣く買ひ置をすれば、腐敗のものも多く出來し、是を心得て少數買置ば、急に入用の時の間に合ず、就中難儀なるは、貨物

の價或は貴くなし、或は賤くなり、目たゝく間に變動して、何れを常と定めがたし、若賣買の機會ちがへば、たかき時に買たるものを、安く賣る様になり、日夜の心勞煩多なる所、大に農人・工人の只一すじを守る家業とはちがへりと也

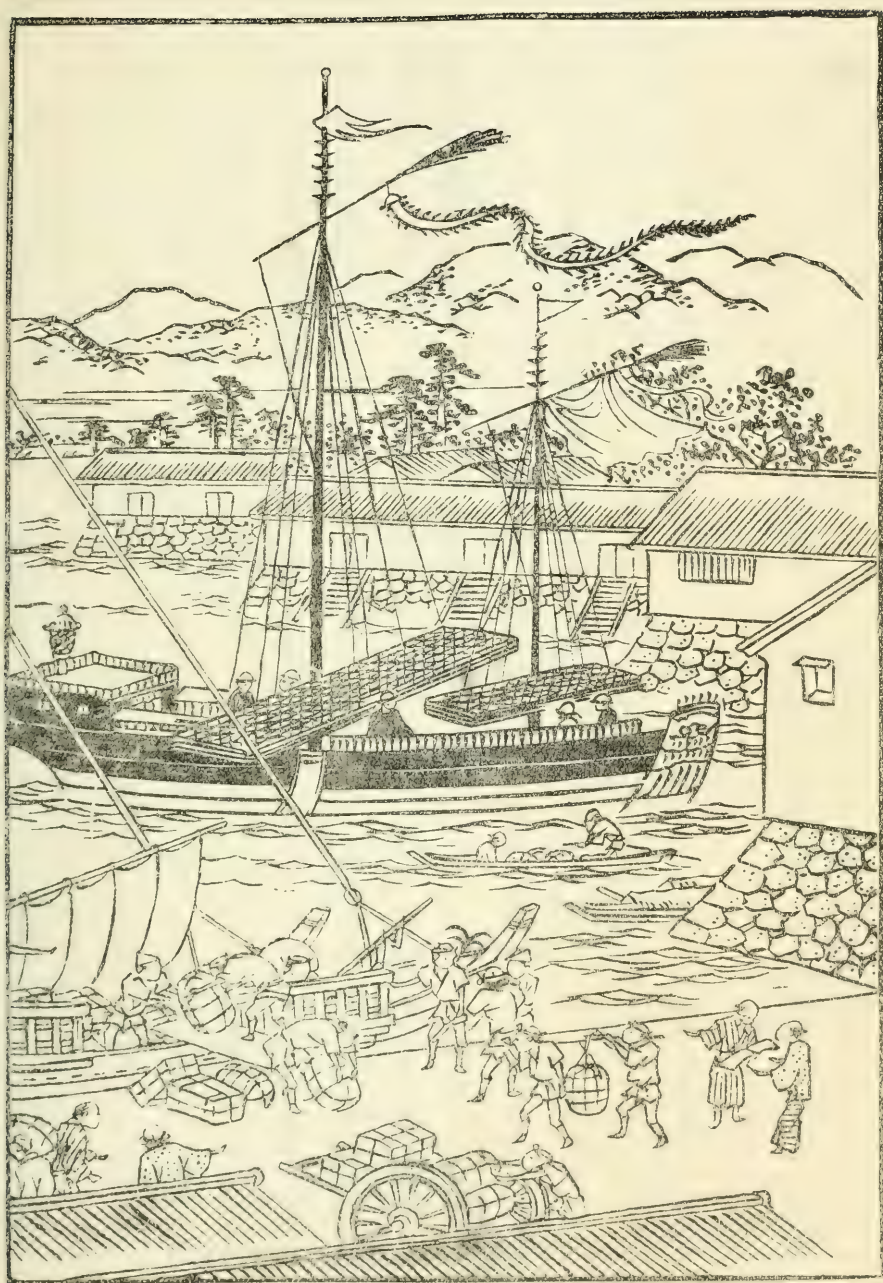
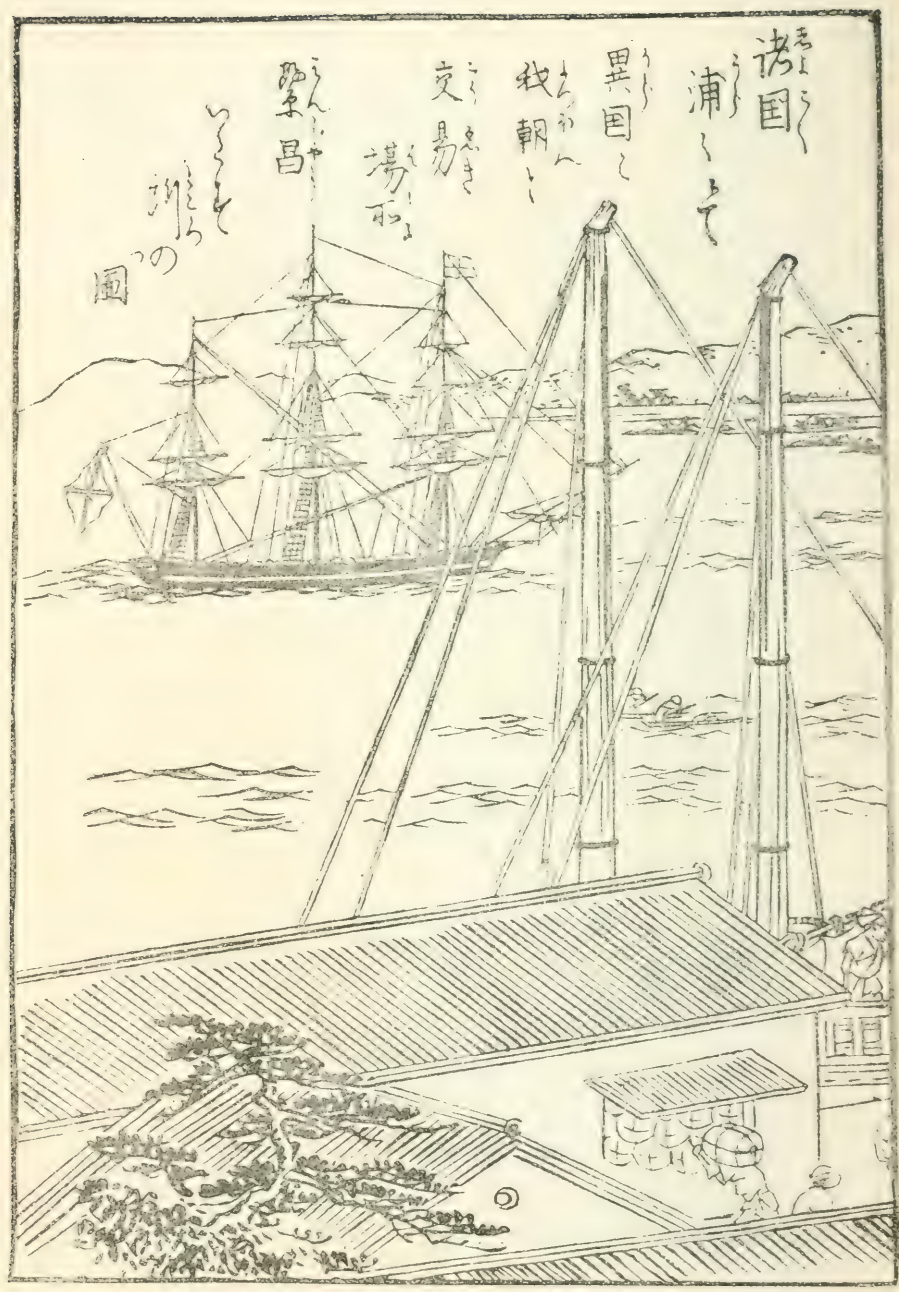
故不レ知二國土之所一レ出、則不レ能レ審二物品精麁一、不レ知二庸俗之喜好一、則不レ能レ明二物貨所一レ售、不レ知二時用之所一レ變、則不レ能レ得二積著之理一

是上を承て商の務を審に述るなり、夫貨物の價に貴き賤き有所以は、物品の精麁と、庸俗の喜好と、時用の變との三つによれり、物品の精麁は、正當の價にして動かぬ所なり、喜好と時用とは、正價の變ずる所にして、常に動いて定る事なし、故に商の務をしらんと欲せば、先正價の出る所を知るべきなり、正價の出る所を知らんと欲せば、先づ我邦はいふに及ばず、四海の內五大洲の國土に產出る所の物を知るべし、是を知らざれば、其物品の精麁と眞僞とを審に辨ずる事能はず、是を辨ぜざれば、正價の出る所を知る事なし、但し正價の出る所を知ると雖、又正價の變ずる所を知ざれば、貴賤を通じて賣買する事能はず、正價の變ずる所を知らんと欲せば、先づ國所の庸俗喜好を知るべし、昔宋の國の人端甫章をもつて、越の國に行て售ん事を求む、甫章は殷の世の冠にて、宋の國には至て貴き價のものなり、然るに越の國は邊鄙にて海に近く、所の風俗髮を斷、身に文し、裸體にして恥とせぬ土地の風なれば、誰一人これを買んといふものなし、買者なければ瓦石同前なり、さ

れば賣る所の貨物、庸俗の喜好に合へば售れ、合ざれば售るゝ事なし、售るときには賤價ものも貴價となり、售れぬ時は、貴價の物も賤價となる、見つべし庸俗の喜好する所貴賤變ずる事を、又時用の變といふ事有、是また正價の變ずる所なり、時用の變といふは、凡天下の用ゆる所、皆夫々の時有、治世には治世の具、亂世には亂世の具、春•夏•秋•冬•雨天•晴天の時々、皆其時に當る所の用具有、此當用は時に從て變ずる故、是を時用の變とは言なり、上の二つを知と雖も、又此時の變を知らざれば、積著の理を得ることなし、積著とは手廣く買置をする事なり、此の積著の理に至極面白き事ありて、是を得れば易道の玄旨に通じ、造化の巧を奪ふべし、上篇にいふ所の萬貨の情を知り、天道の變化を觀るも、皆此積著の理を得んが爲なり、されば大富を得るは、此利に通じ微明にするに有、見る人深く眼を付て省察すべし、委敷事は次の段に出す、此段に物品•喜好•時用の三つを擧て、正價•變價の由て出る所を明にすと雖も、其實は物品の精麁と、時用の變との二つに出ず、如何となれば、庸俗の喜好は、國土によりて變じ、時節によりて變ずる故、皆時用の變の中に籠れり、故に次の段に積著の理を論じ、正價の變ずる所以を說くに、專時用の變のみを擧るは、是が爲と知べし

傳曰、積著之理、務ㇾ完ㇾ物、無ㇾ息ㇾ幣、貨無ㇾ留、無二敢居一ㇾ貴、財幣其行、欲ㇾ如二流水一

此段は積著の理を得る事なしといふより、貨殖傳の語を引き、積著の理を論ずるなり、幣は帛なり

諸国
浦々にて
異国と
我朝と
交易
場所
繁昌
洲の
図

といふて、きぬの類なり、昔は是を錢の樣に使ふと見ゆ、貨金や玉の類を言ふ、是も今の金銀の樣に使ふ物と見ゆ、又代物の事を貨といふ共見へたり、古の交易は物と物とをかへ事するのみなり、然るに重き物は通用不便利なるゆへ、金玉幣帛の類の至て高貴にして、輕くかさひくなる物の等品を分ち價を定め、是を以物を買賣する事とはなりぬ、今我邦にて金銀錢の位を定め、是を以物を賣買するに同じ、然るに金銀と雖ももと賣買する代物なり、故に貨の字を金玉を以物を買義とし、又人に賣與ふ貨物の義ともするなり、扨本文の意は、史記の貨殖傳に、積著の理は貨物を仕込に、五穀絹布の類其品を選まず、只時の相場の下賤になりたる物を買置、幣帛にて溜め置なかれ、共買置所の貨物と雖も、永く留め置事なく、敢て十分のあがりをまたずして賣拂ひ、又外の相場の下賤に成たる物を買入、せんぐりに入かへて、幣帛も貨物もすら〳〵と、流れ水の如くに賣買すべしとなり、愚按に、天下の貨物至て多し、是を完く買入、少しのあがりを受て賣拂時は、運賃に費て損失多し、是は今の相場をする樣の仕方にて、我が住所の地へ運致する所の貨物の品を選まず、只其時の下賤なる物を買入、其所に預け置か、或は濱納屋に持付させ、少しの貴を請て、其場にて賣拂なるべし、上篇の要地を擇も是が爲なり、傳の趣意只貴賤變化の理に通じ、貨物を賣買して、全き勝を取る術を述るなれば、見る人文を以義を害する事なく、意を迎て解すべし、扨是迄が本文の意なり、以上の文は貴賤變化の理を論じて、此語の義を弘むるなり

夫貴之反レ賤、時用之不レ同也、衆之求レ之、時用之至也、衆之不レ求、時用之未レ至也、求者衆則物不レ足、求者寡則物有レ餘、推ニ有餘不足一知ニ貴賤一、商之至智也、其賤也衆之所レ捨、其貴也衆之所レ取、取捨互反、人之情也、故曰、貴上極則反レ賤、賤下極則反レ貴、是自然之符也

此段は上を受て正價變動常なき所以を述ぶ、それ今迄貴かりし貨物の、俄に返りて賤くなる所以は、人の用ゆる所時によりて違ふ故なり、人の用ゆる時節到來すれば、萬衆一時に是を求む、人の用ゆる時節いまだ至らざれば、萬衆一時に是を求めず、求る人多ければ貨物足らず、求る人少ければ貨物餘有、足ざる所より價貴くなり、餘あるより價賤くなる、故に貨物の有餘と不足とを推て、豫め貴賤のまさに返ぜんとする所を知るを、商の至智とはするなり、それ人情の趣向する所は略同じうして至て移りやすきものなり、故に貨物の價賤くなる時は、萬衆一時に捨る氣に移り、貴くなる時は、萬衆一時に取る氣に移る、取るといへども、いづれも取るに非ず、捨ると雖も、いつ迄も捨るに非ず、捨たる物を取り、取たる物を捨て、時々に替るは人の情なり、されば物價の貴賤高下の時時にかはるは、此の取捨の反による故、傳に是を貴が上極すれば賤にかへり、賤が下極すれば貴にかへるとはいふなり、是正價の變ずる所の機にして、盛なるゝのゝ衰、衰る物の盛に、寒往けば暑來、日暮れば夜が明るの理に同じうして、天地自然の道に符合するなり

良賈作爲、出ニ於常情之外一、捨ニ其所レ取、取ニ其所レ捨、貴價如ニ糞土一、賤取如ニ珠玉一、物無ニ腐敗一、利有ニ

餘嬴ヿ、故能積₌錐頴之利ヿ、爲₌泰山之大ヿ、是制₌全勝₋之道也

此段は上文に人情の向背、物質の多少によりて、貴賤相反するの理を論を受て、良賈の作爲を述ぶ、およそ世の中の人九分九厘は、皆中智の人なり、中智の人は大抵九分十分なるものにて、其趨向の略似たるは、上の文に論ずる所の如し、是等の人を名付て常人といふ、常人の見る所異同有りと雖ども、何れ常人の窠窟を出ず、是を名付て常情と言也、良賈とは商人の中にて勝れたる人を言なり、此良賈のする所は、遙に常人の思ひの外の事ありて、貨物の價高貴して、常人喜び好爭ひ取る時は、これを嫌ふて出し賣事、糞土を捨るが如し、其價下賤して、常人の嫌ひ惡みて捨る時には、是を喜びて買取事、球玉の如くす、是物價の賤は貴の徵にて、貴は賤の徵なるを知る、故天の時、人の情の移る所に反ひて賣買をなす、是戰場の鐵砲せり合に半間を打て先を取仕方同じく、時に後れてはつし、時に先立いたるの商術なり、上篇觀變にありといふも、此變を見るをいふ、故に財幣の行事流水の如く、腐敗の貨物なくして、餘嬴の利有所の貨に付、所の利は微小の事なれども、幾萬の數を重て買賣する故、錐の頴ほどの利を積上て、大山ほどのかさとなる、これいつも損亡なくして利を得るの道なれば、斯を全き勝を取る道とするなりとぞ、以上の文は積著の理を論ずる所にして、已下は利を得るの道一途に非ざるを論ずるなり

夫利有ㇾ三、曰、嬴利、曰、機利、曰、權利、取捨去就、與ㇾ時俯仰、收₌餘末₋謂₌之嬴利₋、見ㇾ機頴敏、

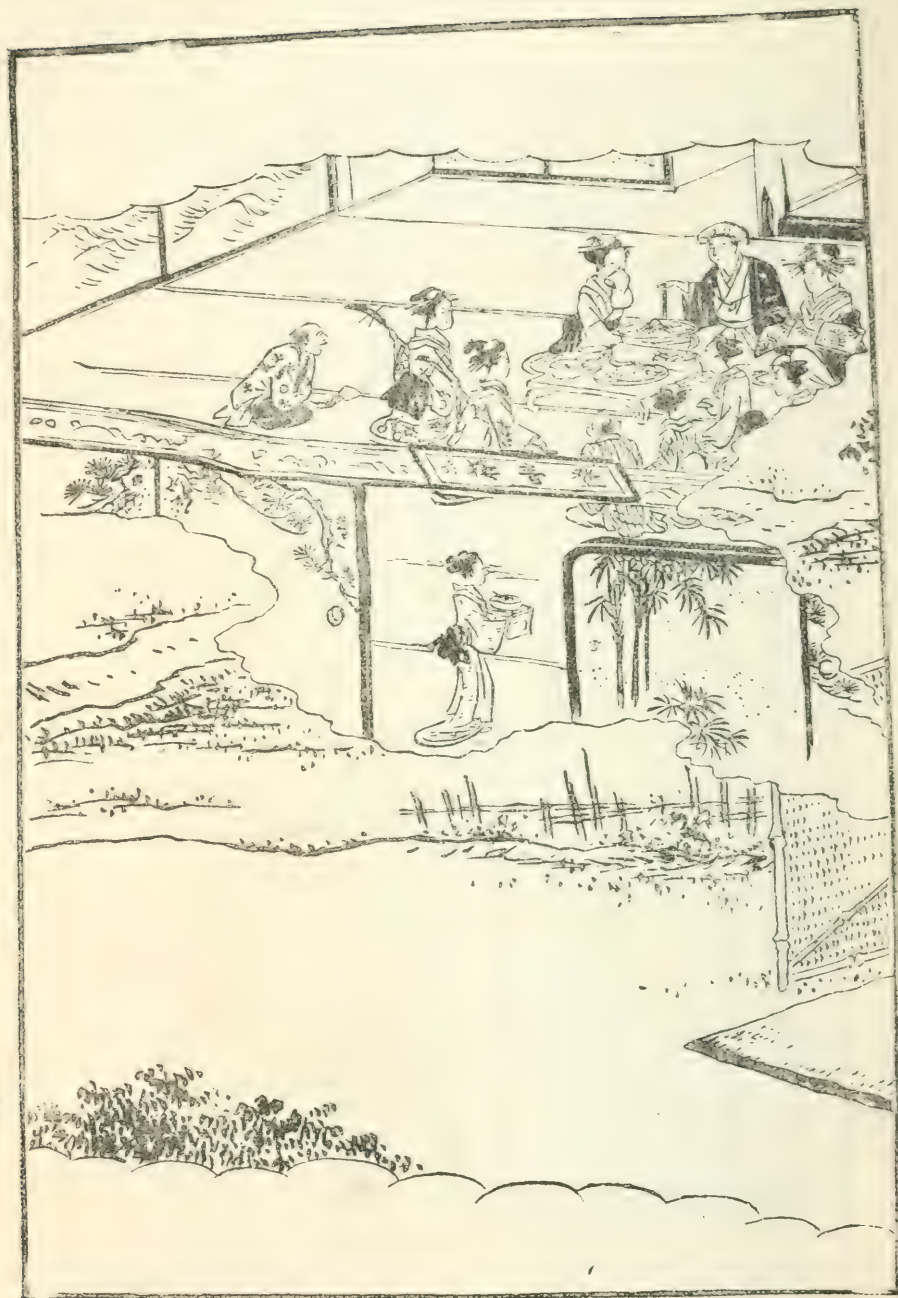
趨レ時駿速、轉レ禍爲レ福、因レ敗爲レ利、謂二之機利一、秉レ權持レ重、坐制二成敗一、與奪自在、曰二之權利一、三者、人之所レ堪レ能而爲レ也

此段は上の論を承て、利を得の道に三品ある事を論ず、それ利に三つあり、其一つを贏利といひ、其二つを機利といひ、其三つを權利といふ、先づ贏利といふは、上にいふ所の積著の理にして、全勝を得るの道なり、機利の機の字は、弩のひきがねの事なり、ひきがねはものを矢ごろに受て、切て放す機あるより、すべて物事の動くきざしを機といふ、それ天地は活動の物にて、人も又活物なり、貨は元死物なれども、活たる人の活動さするものゆへ、貨もまた活てはたらくなり、故に貨は化なりといふて、變化するの義なり、錢の字も泉なりといふて、泉の地中をめぐるが如く、人間世界をめぐりあるく物なり、かく活天地の中の活潑々地なる人が、活てはしり廻り、金銀を取扱ふ事なれば、利の聚り散ずるの速なる事は、閃電・光撃・石火の如し、それ日月の一晝夜に天を運り、四季は一年に地を運ば、活天地の小動なり、大水・大風・旱魃・饑饉・大火・兵亂等の變有るは、活天地大動なり、小動に就ては利も小動し、大動に就ては利もまた大動す、智の俊利なるものは、常に天地の大動を心がけて大利を得るなり、故に大動の將に至らんとするの機を見る事穎敏、其時にはしる事猛獸鷙鳥の駿速なるが如く、いか成禍にあつても、直に其禍をつかひ、却て是を以て福を得、假令大損の事ありとも、直に其損に因、却て是を以て利となす、是等のしわざをなし、大利を得るを

機利といふなり、權利の權の字はかりの事にて物を稱量義なり、又天下の輕重、權に依らざれば稱量を得ざるを以て、其義を轉じて、物來て稱を取るの意となる、天秤の金銀を引寄てはかるが如し、金銀を數多たくわへ置人は、此權の如き德ありて、己れ往て利を求めざれども、人來りて利を與ふ、故に利權あるものは、かたく權をとりて人に貸事なく、利の來る者を擇み與ふべき者にはこれを與へ、與ふまじき物にはこれを奪ひ、我は動ずして居ながら勝利を制す、是の作爲を以、益大富となるを權利といふ、此三ッ內贏利は逐時の事なり、機利は鬪智の事なり、此二ッを譬ば、大將のはたらきに、遲重と駿速との差別有が如し、權利は遲重中の遲重にて、褊將大將の上に立天子の如く、將に將たるの德を得て、相將の權を自在に與奪するが如し、此三ッは人々己が生れ得たる所の氣量才能の堪たる所より、商道の學文修行を得て、其德をなし其利を得る也

傳曰、織嗇筋力、治生之正道、而富者必以レ奇勝、夫以レ正守レ本、以レ奇制レ變、時措得レ宜、斯謂二之知一務

此段は一篇の要を總て商人の本分とすべき事を說くなり、それ士・農・工・商、何れの道にも、皆其本分とすべき事あり、是を知らざれば樹の根本無が如く、一時盛をなすといへども、久しからずして枯木となる、譬ば士の時を得て大將の權をとり、手廻り・中間・旗本・先手の諸將を隨へ、陣に臨んで敵を抽事、泰山の卵をおすが如きなるも、存外の事變兵變に逢ひ、一時に敗軍して、諸將は勿論、手廻り・中間までもちり〴〵になる時は、大將自ら手を下さずしてかなはぬ事なり、此の時に當りて

頼とする所は、我が一身に帶する所の弓・矢・太刀・指添より外になし、是も弓折矢盡て太刀も打落さる時は、敵と引組て差違より仕方なし、かゝる時は百萬の大將軍も、一人の士卒とかわりたる事なし、公子宴に上る、飽ざれば必ず醉ふ、壯子陣に臨む、死せざれば必傷つくといふ語のごとく、いづれ軍は勝負を爭ふものなれば、勝負るか、殺か殺されるかの二つに出ず、古よりいかなる名將にても、一代の間の軍に、敗軍はいくつも有なり、故に武士の心得は、いつも打死と覺悟を極め置て、是を我が本分として、のちに事に臨でおそれ、謀を好でなすものなり、商人の時を得て金銀の權をとり、召使の者數多抱へ、手代別家を指圖して、萬の貨物を心のまゝに賣買するも、天變・地變・人事の變不運の事重り來れば、積儲たる所の金銀、暫時の間に烏有なり、つゞまる所は手と身との外使ふべき本錢もなきなり、此時に當りては巨萬をかさねし富家も、傭夫・任夫と同じ事なり、故に商人の心得は、いかなる富を得ても、やはり手と身との心持にて、作力のはたらきを忘れず、常に筋骨を使ひ、しまつを勤むべし、纖嗇とは、無用の費を惜み、猥に金銀を遣はぬ事なり、是を本分として地場を堅め、人を使ふには隨分寛宥もちゆべし、かく鋭氣を養ひ置て、すは大利を得べき時節到來せば、其たくわへる所と其人とを使ひ、機變に乘じて奇謀を出し、一時に奇利を得て、幾百萬の大富人と成べし、如何に大利を得るとも、綱を結ばずして、錢を貫く樣なる事にては、富をたもつ事能はず、又纖嗇のみにては、百萬の上に立大將とは成難し、こゝの境をよく辨へ、無用の費

には半錢をもをしみ、有用のはたらきには、千金も芥の如くに出し捨べし、貨殖傳にいわく、纎嗇と筋力とは、治生の正道にして、富者は必奇をえて勝と、此意は萬に始末をして、身をはたらかし家業を勤るは、是商人の生計をなす正敷道なり、され共此道計にては大富を得がたき故、時變に乘じ奇謀を以て、必勝を得べきなりと、此奇と正とは能の仕人・脇の如く、三味せんの手事と地との如し、奇正互に用ひて事を濟せば、變化自在にして危き事なし、故に商人たるもの、本分の正道を以て治生の根本を守り、存外の奇謀を出し、時變に因て勝を制し、正を用ゆるも、奇を用ゆるも、皆其時々の圖をはづさぬを、商人のつとめを知るものとするなりとぞ

○此篇八段に分ちて解釋す、第一段に農・工・商各々共務とする所有事を述て、商人の務を知らずんば、有べからざるを示し、第二段には、商業のかたき事、農工の類に非る所以を論じ、第三段には、商人の務は先づ物價の正變を知るべき事を說き、第四段には、貨殖傳を引て積著の理をのべ、第五段には、物價の貴賤相反する所以の由を說き、第六段には、良賈の作爲の、深く積著の理を得たる所以を述べ、第七段には、商人の利を得るに三等ありて、各々共得手々々より是を得るを說き、第八段には、一篇の末を結て商人の本分を擧げ、常と變と時に應じ、奇と正と互に用ゆるを、商の務を知るとする事を說くなり、尤八段に分ち說といへども、全篇の要とする所は賣買の事に過ず、積著は賣買の大なるものにして、なにものかも買込大問屋の作用なり、是古の范蠡白圭がする所にし

て、此術より外に商人の大富を得る道なければ、古も今も是を以商道の軌範とする也、然るに世の輕俊の子弟、實地をふまずして大富を得んと欲し、猥りに此書を讀て逐時の作爲にならはんとせば、是鵜の眞似する鳥にして、趙括が父の兵書を讀で、天下に敵なしと思ふ類なり、實に商術を得んとならば、先づ實地に就て作力●鬪智の修行を經て、商術の難き所を知りて、後始て逐時の作用をなし得べし、大抵今の商人家業中分以上に越る者は、皆世祿の士の如く賣買の筋定りて、皆夫々の得意有、故に得意の人の情にさへ違はざれば、世を過す程の利を得るなり、さるにより生涯になす所、有來り産業を勤て、纔の出入有のみ、別に家業を廣大にせんと思ふ志なく、一日暇有時に遊樂のみ耽りて、不慮の變あらんとは夢にだに知る事なし、かるが故に天明京師の火災の如き大變に逢ては、家財家業を失ひ、皆ちり〳〵に京師を去る者幾萬人、是皆我が本文を忘れ遊樂に耽り、志氣薄け筋骨ゆるみ、家業を再興するの勞に堪ざる故なり、習勞篇に、委敷此事を論ず、此變に乘じて家を興せしものは皆作力の人にて、其時に當りては中分已下の家業に過ず、是も今は三十餘年の星霜を經て、中分以上に身を持上、其子弟は又皆遊樂にのみふければ、此後の變あらん時は、家を失ふ事前の時の人と同日の談なり、されば商人たらんもの、父祖の業を廣大にする程の力なくとも、家職の事なれば學び置べき事に非ずや

商道九篇國字解一之卷終

商道九篇國字解二之卷

習勞第三

習は慣習熟の義なり、勞は勞苦勞使の義なり、習勞とは、しんどを仕習ふ事なり、商人の作力より崛起して家業を創る者は、能く力を勞使する事に習れて、辛苦を堪へ忍と雖も、多くは文盲野人にして、思慮分別をむつかしがりて嫌ふものなり、また父祖の家業をうけついで、鬪智の事をなすものは、まゝ文字に携り、勘辨工夫をなすことをも好めども、多くは安佚を事として、力を勞使する事をきらひ、辛苦に堪へ忍ばざるものなり、また富家の子弟は奢侈の中に生長て、浮華に習ひ驕矜を好み、勞智・勞力ともに嫌ふものなり、此三つは甲乙ありと雖も、商才・商德に於て缺る所有、故に創業の人は勞智を兼て習ふべく、守文の人は勞力を兼て習ふべく、驕奢の子弟は父兄たるもの幼き時より智力ともに習はすべし、上篇に於て商人の務を知るといへども、勞智・勞力を習はざれば、實地に就て務を施しがたし、知務に次で此篇を置所なり

大廈廣屋、好衣美食、妻妾奉ニ侍於內一、便嬖使ニ令於前一、窮乏得ニ於我一、頤指唯諾、皆人之所レ欲也、破壁不レ足レ防レ風、弊衣不レ足レ蔽レ肌、妻孥訴ニ飢寒一、朋友責ニ貸債一、皆人之所レ惡、雖レ然破壁弊衣、所ニ以

得富之本、美食艶妾、所以失富之始、悪得之之道、欲失之之道、富之不可得也、可知也、夫四時之序、代天之道也、陵谷之變、移地之道也、榮枯易處、人之道也、富無經業、貨無常主、天下非少強也、有時革命、況於匹夫編戸之民乎

此段は習勞の事をいはんとて、先づ人の富を願ひ、貧きを悪むの情を述て、富の終に得べからざる所以をいふなり、本文の意は廣大なる厦屋に棲して、内には美なる妻、艶なる妾の左右に傍て介保をなすなり、外には機嫌を伺ひ、髭塵を拂ふもの、前に在て使令に供す、朋友親戚出入のもの迄、窮乏の時に恩澤を施し置ば、我が顧にてあしらへをなせ共、誰一人失禮を咎むるものなく、萬づ心のまゝにはびこりくらすは、誰人も望む所なり、又壁は破れ柱はゆがみて、更夜吹風に燈火を消し、つゝれがちなるやれ衣は、肩を褙に結て所々に肌を顯し、妻孥は米櫃の底を叩て、飢に就ん事を歎き悲み、朋友はかしたる貨を返せよと、口を極めて罵り辱しめ、何一つとして心にかなふ事なきは、誰人も忌み悪む所なり、然れども破れかべをもつゞくらず、やれ衣も洗ひそゝがず、萬づ織畜を守りて家業を勤ば、遂に富を得て發跡すべし、美妻艶妾をうながし、美服珍膳に口體を養ひ、驕奢淫逸を以年を過さば、遂には富たる家をも亡すべし、されば破壁弊衣富を得るの本なるを、却て是を忌み悪み、美食艶妾は富を失ふ初成るを、却て是を好み願ふ、人の情皆かくの如くなれば、是を以て富を求むるとも、富の得べからざる事知るべきなり、それ世の中は金石にて堅めたる如く、いつ迄

もかわらぬものに非ず、寒暑往來して四季序て代るは、天の道なり、飛鳥川の淵瀨とかわり、陵は谷となり、谷は陵となるは、地の道なり、昨日迄春の花と榮し家も、けふは秋野の枯れ草と變じ、盛者必衰の理に違はざるは、人の道なり、されば天•地•人事の道を以て世の有樣を觀ずれば、森羅萬象はしばらくもとゞまる物なし、貨殖傳に言し如く、いづれも富りと定りたる家業もなく、是は誰某の物と定りたる貨もなく、古へより天下に主として、富四海の內を有つ者は、天下の要害を占て我が家とし、天下の貨財を合せて我が府庫とし、天下の人を合せて我が家僕となすなれ、其富の强大なる小少の事に非ず、然れば業を千秋萬歲に傳へて、永く天下に王たるべきに、運衰へ命盡ぬれば、家亡び國破れ、子孫は在か無かの如くなりしは、あげてかぞへ難し、天下の富を以てすら此の如くなれば、まして匹夫の戶籍に編れて、細民の列に在る者に於てをや、其家を亡し國を破るの本はといへば、天より是を亡すに非ず、人よりこれを亡すに非ず、我が心の我身を亡し家を破るなり、むかし唐に二人の僧あり、佛堂の前に立たる幡の風に動くを見て、一人のいわく、幡の動は風の動かすなりと、また一人のいわく、風の動かすに非ず、幡の自ら動くなりと、二人爭て休ず、六祖大師折節此所へ來り、二人の爭ひをとゞめて曰、幡の動にも非ず、風の動かすにも非ず、汝が心の動くなりと、されば人の心の動きて常あるの道を守る事あたわず、驕奢淫佚に長じて、國を破り天下を失ふ、是を以て己が心の己が身を亡すを知るべき也

故居レ富不レ忘レ貧、永保レ富之道也、居レ貧不レ怠レ勤、不ニ永居下貧之道也、人知ニ其然一、不レ能レ行ニ其所一
レ然、何也、為レ厭レ労耳、昔者晋陶侃、旦夕運ニ移百甓一、人問ニ其故一、曰、吾欲レ復ニ中原一、吾習レ労、夫
人之處レ世、誰無レ所レ労乎、或労ニ其智一、或労ニ其力一、労レ智役レ人、労レ力役ニ於人一、習レ労致下勵ニ心志一、固ニ
筋骨一、幹ニ事務一之道上也、可レ不レ勤乎、習ニ労智一、不レ習ニ労力一、至レ失レ勢、不レ能ニ再振一、習ニ労力一、不
レ習ニ労智一、僅得ニ財賄一、不レ至ニ大富一、智力倶習、商之道也

此段は前の文の意を承て、富を保ち富を失ふ道を論じ、労智・労力の事に及すなり、本文の意は故に富る地位に居る人、貧敷時の辛苦を忘れざれば、驕奢淫逸を思ふ意なくして、永く富の業を保つの道、又貧敷地位に居る人、驕奢淫逸をうらやむ心なくして、専ら力を盡して家業を勤めば、永く貧の地位に居らざるの道なり、道とは道路の事にて、我が今踏たる脚根より次第に進みて、向の地位に至るのすじなり、扨此兩條は三歳の小兒もよく知ることなれども、八十の翁も行事あたわず、是他の所以に非ず、労苦を厭ふ爲のみ、昔晋の代に陶侃と云し人、官は大將軍の重任をうけ、職は八州の牧を兼、威勢諸大臣の上にありて、榮貴並ぶかたなきに、此人何の用もなき百の甓を堂の上に置て、朝には是を堂の下へ運び移し、夕にはこれを堂の上へ又運び移しせられたり、或人怪で其故を問ふ、陶侃曰、今晋の皇帝江東に都をすへられ、一時安堵の思ひをなすと雖も、舊き都中原の地は皆夷狄に犯し取られたり、是を取かへさんと思へども、未時いたらず、然に我れ榮貴の身と

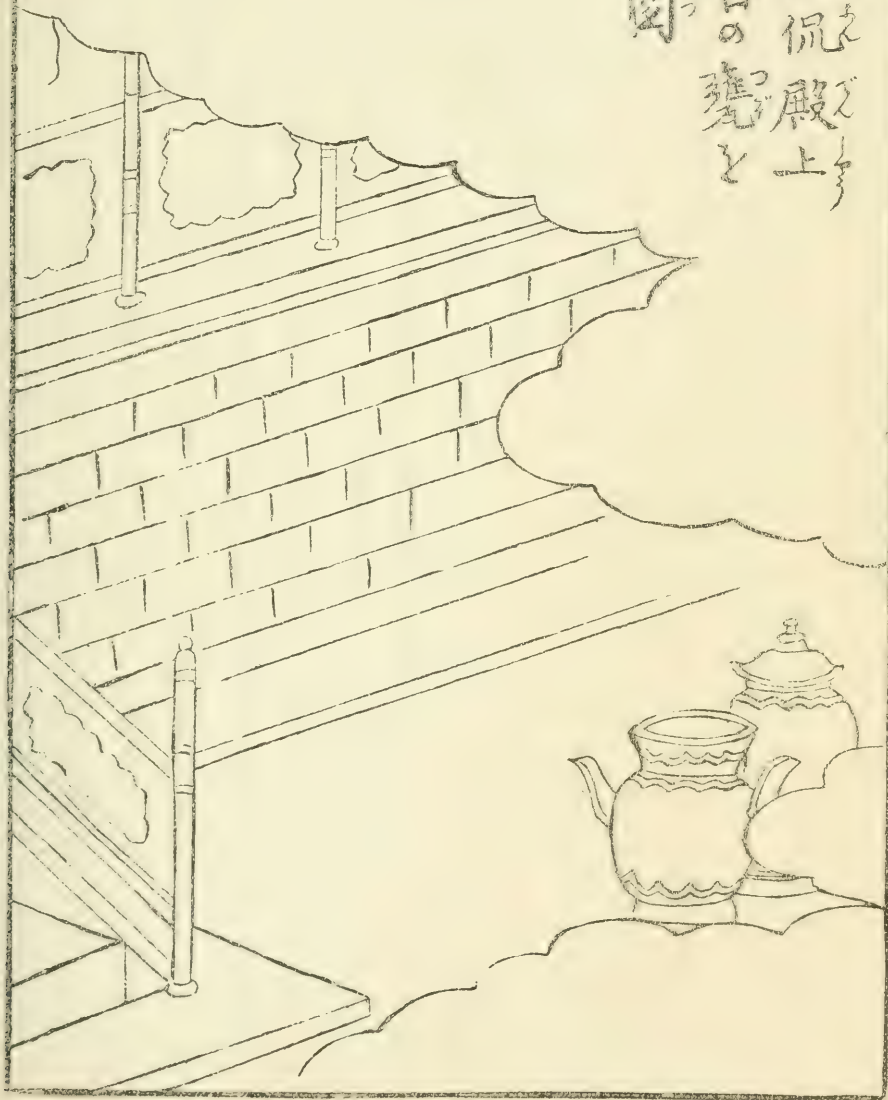
なりて、安逸にくらしぬれば、肌膚軟ぎ筋骨ゆるみ、物の用に立がたし、故にかく朝夕に百の甓を運び移し、勞苦に習れ置なりといへり、商人たるものは此語を以龜鑑となすべきなり、如何となれば、商人の本分は手と身とのものなれば、一日の間も習勞の事を忘るべからず、是商人のみに限りたる事にも非ず、凡此世にすむもの、上は天子の尊きより、下は庶人の卑きに至迄、いづれか勞苦のなかるべき、上に立人は天下の治平を致さんと、廟堂の上に座して智思を勞し、下に居るものは天下國家の事には預らざれども、我家業を建て、子孫に傳へんと、田野市中に奔走して筋力を勞す、智慧思を勞するものは人を使ひ、筋力を勞するものは人に使はるゝ、商の上に於ても、作力のものは人に使はれて筋力を勞し、闘智以上は人を使ふて智思を勞す、何れ勞苦を免れざるうへは、勞苦にをるの道を知らずんばあるべからず、凡一人の智を勞使し、力を勞使するに皆道あり、人の性質智思ありとも、事にかけて使ひ習れざれば、智謀湧出する事なし、人の性質筋力健なりといへども、事に就て使ひ習はざれば、身體疲れ易し、智思つきて湧出ず、身體疲れて健かならざる時は、立身出世の志ありとも、これを伸る事能はず、かの習勞は己が志を勵し、筋骨を固め、事の務に幹となるより出る所なれば、分けてこれをいはゞ、智勇局を分ちて司る文武官の、もと一樣に用ゆべき事なるに、却て其勢相反するに似たるあり、如何となれば、智は專ら心に預り、力は專ら氣に預る、心に預る者は氣を抑へ、氣に預るものは心を揚ぐ、氣を抑ゆれば理を得、心を揚れば理を失ふ、作力の

者の知慧に疎く、闇智の者の氣勢すくなきは、此故と知るべし、孟子の其志を養ふて、其氣を暴ふ事なかれといふは、理を以て氣を伸べ、氣を以志を養ふ説にて、智勇兼濟の道なり、此にいふ所の習勞は、智を勞使するに習れて氣を損ぜず、氣を勞使するに習れて智を損ぜず、專ら慣習の熟して、智力兼ね行はん事を欲するなり、されば智と力と兼ね行ざれば大事なし難し、故に智慧を勞使する事のみに習れて力を勞使する事になれざれば、天變事變に逢ひ、本分の手と身とに成たる時、上馬の飼下しにて物の用に立がたく、再び志を振ひ勵して家業を中興する事能はず、また力を勞する事のみに習れて、智を勞使する事に習れざれば、思慮を盡して商術に通ずる事能はず、纔に富を得るとも、大富に至らず、皆一方に偏よりたる所ありて、全體貫通妙用を得ず、故に智力ともに習ひ、文武雙全の德をなすを商の道とするなり

今彼任夫、負レ重致レ遠、終日不レ疲、習力所レ致也、文吏夙夜焦レ神、不レ至ニ昏耄一、習知所レ致也、人情求レ佚辭レ勞、愛レ美惡レ醜、而佚有レ所レ不レ求、勞有レ所レ不レ辭、美有レ所レ不レ愛、醜有レ所レ不レ惡、然則任夫不レ辭レ勞、爲レ知ニ飢寒一也、文吏不レ求レ佚、爲レ知ニ督責一也、美女不レ被レ愛、爲レ知ニ覆宗一也、醜婦不レ被レ惡、爲レ知ニ家務一也、故先知レ務、則能爲ニ習勞一、所ニ以次ニ知務一也

此段は慣習の道の、能く人の情性を變ずる効を擧て、これをなすの本は、事勢の至る所を知るにあるをいふなり、論語に、習ひ性と成といひ、習ば相遠しといふて、古より慣習の道を尊むは、俗に

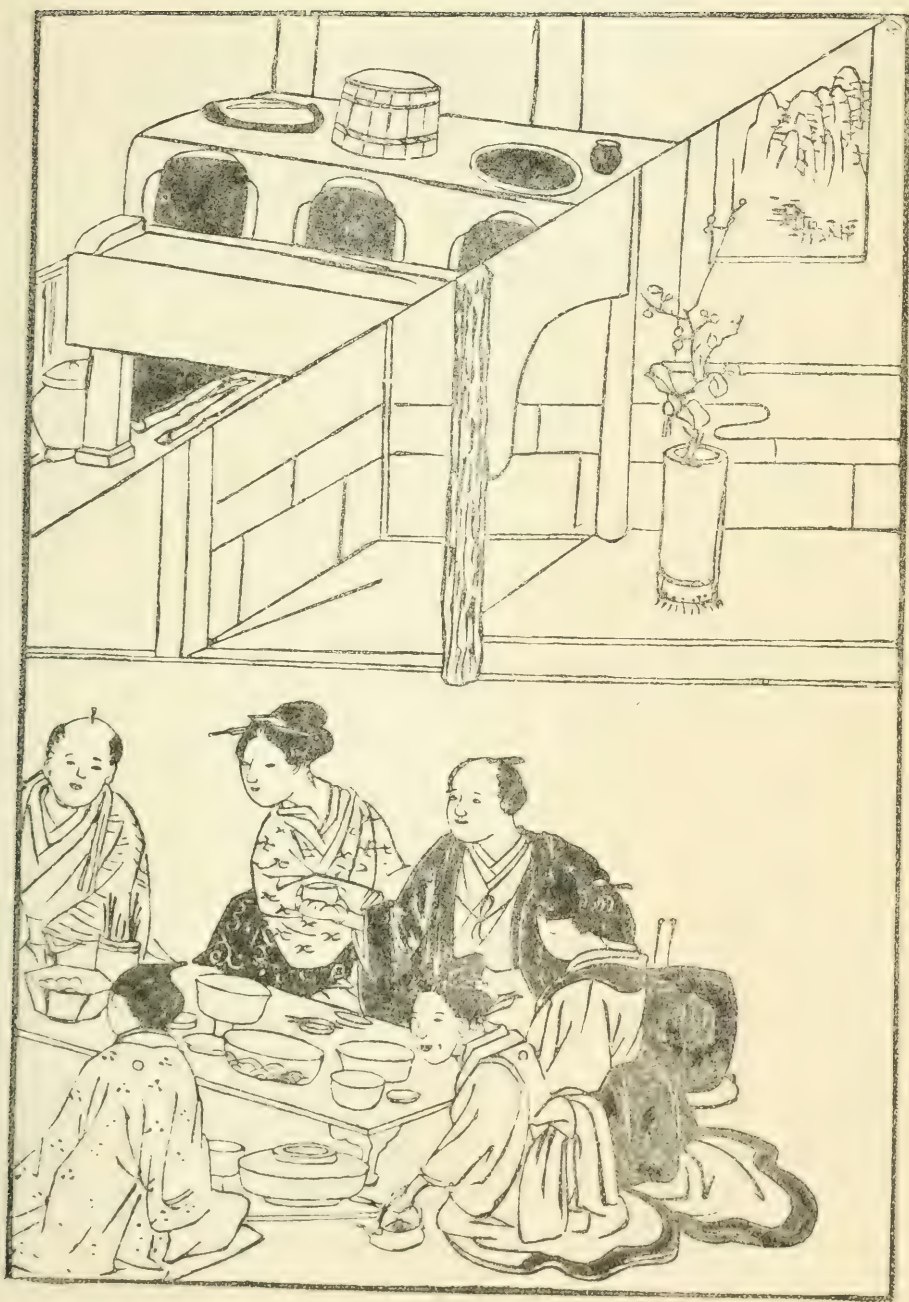
晋陶侃殿上より百の甕を運ぶ圖

陶侃

習ふよりなれるといふ如し、日に／＼つとめてこれをなせば、自然と仕習れて、性質の如くになり、今迄堪へられぬ事もよく堪へ、今迄忍びざる事も能く忍ぶやうになるは、習の熟するを以てなり、今かの任夫をなす者も、生れ落たる時は、高貴の人とさのみかはりたる事なけれど、日毎に重擔を負ひ、遠路を往來して、少しも疲れる事なきは、筋力を勞するに習れたる所以なり、又文吏の朝より晩迄几案に故事を探り先例を考へ、神氣を焦し智思を盡し、心昏み氣耄に至らざるは、智思を勞するに習れたる所以なり、此兩條を以て習ひの性となる所を觀るべし、それ人の情は安佚を求めて勞苦を厭ひ、美女を愛して醜婦を惡むものなれど、事勢の至る所を知れば、安佚をも求めざる所有、勞苦をもいとはざる所有、美女をも愛せざる所有、醜婦も惡まざる所有物なり、されば任夫の終日重擔を負ひ、勞苦を辭せざる所以は、一日勤に怠れば、飢寒身に切なるを知る爲なり、文吏の夙(つと)な夕(ゆふ)なに神を焦して、安佚を求めざる所以は、上吏に督責せられて、ふちかたの祿に離れん事を知るがため也、美女の愛せられざるは、自美容に矜て妬忌の心盛に、傾城傾國の禍まさに至らん事を知るゝ醜婦の惡まれざる所以は其醜容謙りて、繼續の勤に怠らざるが爲なり、是によりてこれを觀れば、習勞は至てなし難き事なれど、事勢の至る所を知れば、これをなすに難からず、故に商人の務とする所を知らば、勞智力の就やすからんと、知務に次で此篇を置となり

夫智者、得失之機也、力者、運致之具也、習者、情性之變也、轉レ昏爲レ明、轉レ惰爲レ勤、習之爲レ道、

夫大乎哉

此段は知る機と智と三つの徳を陳ね述て、一篇の末を結ぶなり、此智といふは、第一篇にいふ所の機微を知るの智にて、深く謀り遠く慮りて、將來の事を明に知るをいふなり、機は、弩の機にて、智のねらひ當れば的をはづさず、智のねらひ當らざれば的をはづす、此の當る當らぬのねらひを決して、切てはなす所を機といふ、此の機微の智を照して、將來の事の的當する所を謀るには、廣く其事の類例をひき、その是非長短を參へ校べ、時務に合ふ合ぬを考へ謀り、是を親敷智ある人にもとひ談合して、目前の事に眩ず、五年十年後の事迄も、今見る如くに明らかに知りて、是ぞ的當の所なりと極めて其事を行ふ、此的ちがへば毫厘千里の違ひ有、故に智は得か失ふかの機なりといふなりといふなり、此の力の字は、一時力にまかせて進む力にあらず、只ねばり強く物事を堪へ忍ぶ力なり、前段の智を以、我が身の上に在て、事の害となる失を考、氣の短より起る失ならば、是をのばして長くし、氣の長過たる失ならば、是をちゞめてみじかくす、色より出る失ならば是を戒め、酒より出る失ならば、是を禁じて、短するも長くするも、戒も愼も、何れもしんぼうづよく勤る所より、遂に變じて程よき所に至るなり、故に力は短き所より長き所へ運び致し、長き所より程よき所へ運び致すの具なりといへり、此智は前段にいふ所のなれ熟する事なり、右の智と力とにて濟べけれども、中々一日や二日にては、是迄仕込たる惡癖は直らぬもの也、竹のゆがみをため直す如く、

冨人の奢り貧
者難儀ある備
を図

じり〱直して、其戒め愼む事の我が身にしみこむ程に勤め習れねば、舊染の病ひを去りがたし、女の性質色黑なる面も、毎日々々あらひみがき、白粉にてぬりこめば、數年の後は性質の黑白を變じて白面の女と成、かの白粉は外からすりこみたる物さへ此如くなれば、まして內より智を以て其失をてらし、將來我が身に害有所を知りて、力を以其改る所を勤め、數年かろくこれを習れ熟せば、いかでか其失を去らざるべけん、故に習は生得の性情を變ずるものなりといへり、されば智のくらき者も、日々物學びに習ひて怠らざれば、遂にくらき性質かわりて明になり、氣のおこたりがちにて、物の用に立ぬ者も、日々氣をはげまして怠りを戒め、久敷是に習るれば、遂に生得の勤者となる、此の三つを以て人の德性をみがくに、いづれに劣りはなけれども、其舊染を去りて新德なす換骨の靈方は、專ら習熟にあり、故に習ひの道を尤大なりとするなりとぞ

○此一篇を四段に分ちて解釋をなす第一に、世の人の富を願ひ貧を惡むの情を述て、其富を願ふの情は、却て是富を失ふ道なるを以て、天下の富のしばらくも住(とどま)らざる所以を說く、第二段には、貧敷を去りて富を得、富るを得てよく是を保つの道を述べ、此道を得るは習勞に有事を說く、第三段には、慣習性となれば、勞を以て勞とせず、事の勢の至所を知れば、習勞の事に就き易き所以を說く、第四段は、一篇の末を結で智を以て務を知り、力を以て舊染を去り、習を以情性を變ず、此三つの效一つをも缺べからずと雖も、中に就て習を以て大なりとする事を說く、全篇の主意は習勞に在り、

商人たるもの一日も安佚を求むべからず、安佚を求る者は却て安佚を得ず、勞苦を勤れば、安佚は其中に有なり、愚なるもの〻富を求るはもと歡をなさん爲なり、富て歡樂をなさずんば、富は入らぬものと思ふべし、此の如き人は終身歡樂を求てたのしみを得ず、勞苦をいとふて勞苦を去る事能はず、眞の樂地をしらば、勞苦も皆我が樂地と成るなり、唐の太宗の語に、土塊竹馬は小兒の樂なり、有無の貿遷するは商人の樂なり、戰ふて前に敵なきは將帥の樂なり、四海寧一は帝王の樂なりとあり、されば何れの境界にも皆樂は有物なり、此境を知らざる者は、商道の九篇も何の用をかなさん、扨此一二三篇は、商人の物を格し知を致し、心を正敷し身を修の道にて、已下の八篇迄は家を齊ふ事を說くなり

使令第四

使令とは人を使ふ道をいふなり、俗の諺にも、人を使ふは苦を使ふなりといふ事有、是よく人を使ふもの〻寬敏に當る語なり、愚なる人の心には、人を使ふは我が佚をなさんが爲なり、いかでか苦を使ふ事あらんやと思召べし、是らの人は世態人情を知らず、人に欺れて家を失はん事まゝのあたりなり、古き人の詞にも、君は舟の如く、民は水の如し、水よく舟をのせ、又よく舟を覆す、民よく君を戴き、又よく君を亡すといへり、主人を助けて家業を興すも、家僕のわざなり、又主人を倒して家業を亡すも、家僕のわざなり、よくこれを使へば用をなし、よくこれを使はざれば害をなす、用も

害も皆主人の構の取樣なり、まして人の情は海路の風波の如く、今迄晴天と見つるも、俄に暴風に波を起す、いづれ一日片時も油斷ならぬは舟乘の業なり、是れ人を使ふは苦を使ふに非ずや、故に前篇にいふ所の如く、勞苦を以て樂とする心なくては、よく人を使ふ名將とはなり難し、古の聖人人を使ふ道を說て、己れ正しければ物正しといへり、先我が身を正しくせざれば、人の不正をやめさする事ならぬなり、されども天下の人に賢愚・强弱・善惡・邪正樣々とかわりあれば、遠き者は觀念をなし難き、近き者と雖も聖德に化しがたき所あり、故に法制禁令を立、賞罰を以て善に勸め惡を懲す、是もまた我身法を背きて、人に法を守らせんとすれば、法の行るゝ事なきなり、兎にも角にも我身よりして行ふにあらざれば、人はひきいられぬものと知べし、故に政事をするに德を以てすとはいふなり、それ天下國家の權柄をとつて、殺活を自在にする人すら、よく人を使ひて事を濟事能はさる事に、まして商人の家には殺活の權なく、賞は厚く行ふべけれども、罪は嚴敷行ひがたし、其上三都の地は遊樂の事多く、都下の子弟善には進みがたく、惡に染安し、彼を羨み是に習ひ、主家の財を盜み家を傾もの、年毎に幾千人成事を知らず、近世中富の人の家を失ふは、皆此弊風に座せられたり、されば家僕を使ふ者は此篇に心を留て、前車の覆あとをふむ事なかれ、上の三篇を續て格物致知、正心脩身の功積たる上は、人を治るの道を知らずんばあるべからず、習勞に次で此篇を置所以なり

商之有二僮僕一也、猶三身之有二四支一、分二其憂苦一、救二其痛一、無二不レ如レ意者一也、若夫四支之不仁也、痒亦不レ能レ搔、痛亦不レ能レ撫、非下徒不レ如レ意而已上、從而爲二其累一、商之不レ能レ令二其下一、又猶レ如レ此乎、古者論レ富、有二以レ僮數一者一、若徒食レ粟而已、何以レ僮爲、能爲二使令一者王二天下一、況於二一家一乎

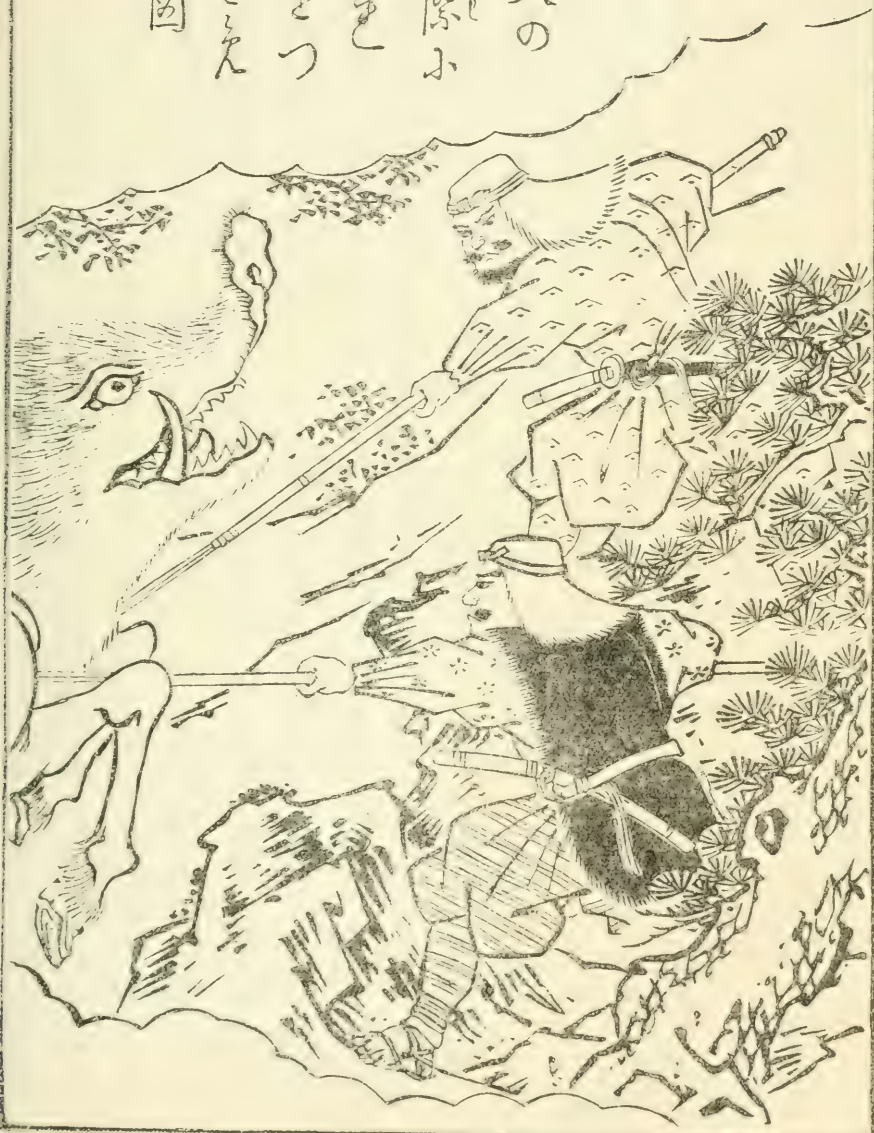
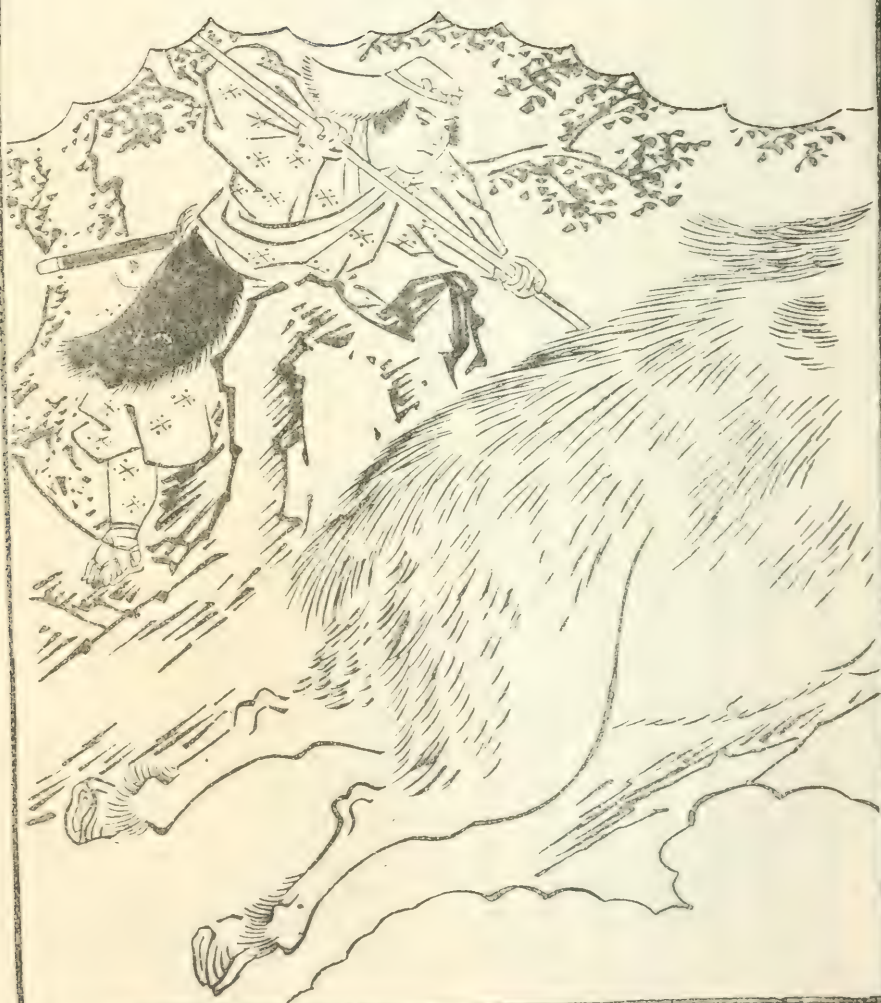
此段は人の身體と四支とを、家主と家僕とにたとへ、家僮を使ふ事身の手足を使ふ如くならしめんと欲するなり、本文の意は商人の家僕あるは、身の手足あるが如し、身の爲に手足の働く事いわざれども、主人の心を知り、さとさゞれども、主人の爲に動き、身の傾く所を撐へ、身の危き所をたすけ、かゆき所をかき、病む處を撫で、主人の心に思ふ樣にまはらずといふ事なし、若し中風などの病にかゝり、氣血のめぐらず、身體不順なる時、かゆき所あれどもかく事あたはず、病む所あれども撫る事能はず、かくなりては手足はあれども無が如く、却て我身のじやまなる事なり、彼の商人の下の者をまわす事あたはざるは、正數此類に似て、なまじいに家僮のある故、身體の倒るゝ事速なり、むかしは富の數を論じて、かしこの家には家僮千人あり、こゝの家には二千人など、僮の數にて富の大小を定めしなり、よくこれを使ふてこそ、家僮の多きを以て富とすれ、何の役にも立事なく、徒に米を食ふのみにてあらば、僕の多き程食ひ潰しの多きにて、何ぞ是を以て富と稱するに足ん、要とする所は、よくこれを使ふと、使はざるにあり、よく人を使はゞ、天下の大なるにも王となるに足れり、まして一家の小なる者に於てはいふ迄も無き事なりとぞ、これより家僮を用ゆると、用ゆる

事あたはざるとの二つを擧て、商人のよく用ひずんばあるべからざるを示すなり

古之君ㇾ人者、各以ニ其所能一令ㇾ於ㇾ下、或以ㇾ德、或以ㇾ智、若法若權、其揆雖ㇾ一、効亦不ㇾ同、宓子賤之治ニ單父一也、民不ㇾ忍ㇾ欺、子產之治ㇾ鄭、民不ㇾ能ㇾ欺、西門豹治ㇾ鄴民不ニ敢欺一、不ㇾ忍者德也、不ㇾ能者智也、不ㇾ敢者法也、德者中情悅而誠服、而又有ニ狎ㇾ愛而民慢一也、智者憚ㇾ明而畏服、而又有ニ窺ㇾ間之心一也、法者畏ㇾ威而强服、而又爲ㇾ惡之心無ㇾ息也、斯三者、古賢之所ㇾ行、而有ニ其弊一也復如ㇾ此

此段は上の文を承て、古の人の我が得手々々によりて、人を使ふの仕方異なる所有事を說なり、世の人の言に、凡碁・將棊・鞦韆・遊戲の小藝と雖も、皆我が腹より出る所に非ざれば、妙所を得ずといふ、まして人は活動のものにて皆氣の有蟲なり、故に是を使ふ道は、外の附燒刄にては行ぬ事なり、大學にも、堯舜の天下をひきゆるには、仁義の道を以てし、民其仁善に隨ひ仁を興す、桀紂の天下を帥るには暴逆の道を以して、民その暴逆に從ひ暴を興す、上の下に令する、上の好む所反き、民は上の好む所に隨ひて、令する所には從ずと有、されば我口に言に、我顏付に見せても、腹から出る所にあらざれば、氣の有虫は合點せぬと知るべし、故に古への人の下を使ふには、皆我が腹からして是を使ふ、人の生得に銘々の得手々々あれば、其腹も又人々によりて違ひ、使ひ方も同じからざる所有、以て下を使ひ、或は明智を以て下を使ひ、若は法令威權を以人を使ふ、其使ひ得て用なす所は、德智・法權異なる所なしと雖も、其治るしるしの顯るゝ所は、みなそれ〴〵違ひ有、昔宓

子賤と言し人單父の奉行となりて、專ら仁德を以て民を治めしかば、民これに懷いて上を欺くに忍びず、又子產と言し人鄭の國の家老となりて、專ら明智を以、以下の姦惡を糺しければ、民これを憚りて上を欺事能はず、又西門豹と言し人鄴の代官となりて、專ら嚴法威權を以民を治めければ、民これを恐れて敢て欺く事なし、此三人三つの治方を以て、三所に治め、何れも皆よく治りたりといへども、其治る効を論ぜば、忍ざるを上とし、能はざる事中とし、敢てせざるを下とす、然るに此三つの治方に皆其一得一失有、宓子賤の治方は、己れ奉行職たりと雖も、嚴威嚴格を以下を御めず、專ら誠心を以民の腹中に置き、舊令のあしきものを改て、民の窮乏する所を救ひ、人々家業を務めて、ゆたかに父母妻孥を養はしむならん、此の如ならば、民誠に心に服して、上を欺に忍びざるべし、然れどもその流弊の至る所、仁惠に狎れ安して、上の令する所下慢して行れざる所有べし、子產がする所の如きは、閭里の姦惡・鄉曲の奸邪、幷悉く通曉せずといふ事なく、能く微を釣り隱を顯し、民をして情實を吐ざる事能ざらしむならん、此の如ならば、民上の明を憚りて、欺く事能はざるべし、然れども民德に化するなく、間を窺て姦曲をなさんとする所有べし、西門豹のする處は、專ら嚴威嚴格を立て、法令を押し付て、惡事をなす事能はざらしむなり、此の如ならば、民威を恐れて強て服し、敢て欺かざるべし、されども民心に服せざる所有て、惡事をなさんとする事は暫らくも息事なし、此人には古の賢人にて、固より銘々の得手々々の所をよく使ひ得て下に令す、故に三所ともよく治りて、

猟夫の手際に叢より猪をつきとらえる図

後世迄是を稱す、されども其使ふ所の德•智•法の一偏によりたる所あれば、皆派弊此の如きあり、扨此使ひ得る、使ひ得ぬといふ所に心得の有事なり、劍術の上にていはゞ、鑓は長き物故、手の屆る所に用ひて、敵を衝崩に大に利有、され共手本の勝負に於ては太刀に及ばず、其上狹き所に於ては尤不便利なり、長刀は大勢を一たばに、腰膝かけて薙廻すには利あれども、鑓•太刀にくらべては尤不便利の武器なりとて、武田信玄も家中に長刀を用ゆるを禁ぜられたり、何れの武器にもせよ、用所々々を考て制たるものなれば、一偏なる所ありて、萬全を兼備たる器はなし、故に戰陣に於ては弓•矢•鐵炮•鑓•長刀•指添の諸具を帶する軍兵を兼備へ、並せ用ひて萬全の働きをなす、是はこれ正當の論にて普通の事なり、爰に又一種の人の格外の事をなす有、都て劍•鑓の類に限らず、至て不便利なる武器にても、銘々の好みによりて、よく其術に鍛錬せしものは、長き武器もよく短く使ひなし、短き武器にてもよく長き働をなし、長短自在に運用して、所として不便利なる事なし、是其手錬によりて得手となりたるにて、外の人の及ぶ所に非ず、これ是をよく使ひ得るといふなり、彼の德•智•法の三つは、鑓•長刀•太刀の一偏の利用有器の如し、よく是を用ひたる三人は、其術に鍛練せし人の長きをもよく、短きをもよく長く使ひなすが如し、御當代の初つがた、大都に奉行として民の訟を聽くに、今日の如く文法のなる事なく、其人固より學文なければ、和漢の前蹤をさぐるといふこともなく、只人情はあつさを子にて掵ふといふ事と、小僧が三ヶ條といふ事を、訟を聞

くの口訣とせり、是らの事は今よりして、是をみれば、小兒の戯の如く見ゆれども、よく此二つを取りまはして、自在に使ひ得て變化せしと見へて、其時の奉行衆何れもよく訟を裁斷せられたりとて、今の世迄も稱述す、是を譬るに獵師の猪鹿を刺すに、鑓法の敎もなく、其身がまへの不調法なる事は一笑に堪たれども、猛りかゝる猪を何の苦もなく衝仕るなり、此獵師と鑓術の先生と仕合をなして、先生負けたりといふ話有り、是れ死生の實地に就て鍛練せし事と、實地に就ざる修行との違ひなり、されば何程古今治亂に通じ、正大の見を建て、正當の論をなすとも、實地に就て試み用る所非ざれば皆空談に落て、かの猪つきの獵師に劣る事有べし、是迄は彼の德・智・法を使ひ得し人を擧て其得失を論ず、已下の文は德・智・法の各々用所有事を論ずるなり

夫三里之城、七里之郭、終歳築而無㆑成、而能不㆓期月㆒、而得㆓成功㆒者、唯法可㆑能也、昏愚之朝、邪正不㆑分、政事多梗、禍亂將㆑至、而能辨㆓黑白㆒、分㆓能否㆒、一擧撥㆑亂、致㆓治平㆒者、唯智可㆑能、世衰道微、詐謀無㆑常、民不㆑信㆑上、而能恩信結㆑民、風化歸㆑正、反㆑危爲㆑安、轉㆑亡爲㆑存者、唯德可㆑能也、夫德者能盡㆓人心㆒、智者能盡㆓人事㆒、法者能盡㆓人力㆒、故能兼㆓三者㆒而行㆑之、則令之行、猶㆓水之就㆑下㆒矣

此段は上文を承て、德・智・法の各々用所ある事を論じ、三者を兼ねて我物となし、時に應じ所に隨ひ、自在に運用して、功業を建つべき事を說くなり、先づ法の用所をいはゞ、內城の周圍三里、外

郭の周圍七里の城郭を築に、壕を鑿り土地を築上げ、石垣を疊み敵樓矢倉を組上、內外の墻屏を構へ、大將已下の官府を建る迄、夫々の人夫をかけ、普請成就の功を催すに、一年かゝりても成就せぬものを、一ヶ月の間に功をなすは、法の德なり、いかにと成らば、何程嚴敷申付ても、人夫のよくはたらく所、よくはたらかぬ所を明に知りて、賞と罪とを以て是を勸めざれば、はたらく者もはたらかぬ氣になりて、普請成就速なりがたし、そこで彼の太閤秀吉の藤吉にて有し時、割普請をせし如く、間數を割付役割を定め、人夫の精不精の分明に顯るゝ樣に法を立て、よくはたらく者には賞を行ひ、よくはたらかぬ者には罪を行ひ、賞罪分明に當れば、はたらかぬ者もはたらく氣になりて、普請成就速なり、是普請の一事を擧て萬事に通じ、ヶ樣の所には嚴敷法を用ゆるに非ざれば、卽功を得難きをしらしむるなり、次に智の用所をいはゞ、昏く愚なる君の朝に臨みて政をなす時は、邪なる臣下も正しき臣下も、一ッに混亂して分つ事なく、政事に非道ありて、民の心歸服する事なく、諸事差支勝にて絲の亂れたる如く、國家禍亂近きに至らんとす、此時家老の內に忠臣あつて、此暗君を隱居させ、新たに君を立て、政道を糺さんとすれども、何れを邪ま、何れを正と分ち難ければ、智ある臣を擇み擧、此一亂を治めしむるに、かの智臣朝に仕へて、やくを用ゆる者の白い黑いと能あると能無きを卽時に辨へ明にして、邪なるものを罸し、正敷者を賞し、能あるを官に勸め、不能なるを退役させ、亂朝の政を糺して、何の手もなく無事に治めるは、是れ智の分別を以てなり、彼

の道孟談が言に、危き時に臨で救ふ事能はずんば、智も無用の者なりと云し如く、ヶ様の時に用ゆべき智なりとぞ、是もまた一事を擧て萬事通じ、智の用所を知らしむるなり、次に德の用所を言ば、世の風俗次第に衰へ、仁義の道は有か無かの如くになり、上下とも虚飾を專として、詐僞反復實意有事なし、かく頽敗風俗となりては、上より申付る事を下是を信とせず、金銀の融通とまりて、諸事不自由に、大身小身殘なく困乏し、盜賊所々に起りて、天下の壞亂將極に至らんとす、如何なればかく迄詐僞の流行する事にやと、其來由する所を考るに、其初め世の繁榮なるより驕奢盛になり、驕奢の盛より風俗菲薄になり、風俗菲薄なるより純厚風を失ひて、世の中困窮するより、詐僞を設て人を欺く、詐僞次第に行るれば、實意なるものも每度人に欺れて損失する事多し、損失多きゆへ人に欺れじと、また詐僞を設て人を待ふ、かく欺かん欺れじと互に爭ひ、遂には一同の詐僞世界となり、詐僞非ざれば立行ず、此時に當りては誠實なるものは愚魯に見へ、詐僞なるものは賢智見へ、善惡顚倒して、賢愚處を失ふ、彼の德を尙む者に至りては、かゝる世の成行にあひても、專ら信義を守りて操を失はず、人は我を欺けども我は人を欺かず、人は愚魯なりと笑へども、我は賢智の道なりとて德行を改めず、人は事情に疎とて、是を信じ世に用ひらるゝ事無く、飢て溝壑に倒るに至れども、敢て是を愁とせず、獨立して操を守り、世の人のする所にかなはぬものなり、かゝる世にかゝる人をば、一時愚鈍なり、損なりとて笑へども、信義なき人とはいはず、故に天運循環する事

ありて、上に賢明の君出で、此弊風を改めんとする時は、此とき人を擧用ざる事能はず、此人固より衆人に詐僞なき人と思はるれば、一旦時を得て政事に預るに及で、民其令する所を信じて詐とせず、こゝに於て舊俗の惡風を改、信義の道を立、恩澤の德を施して、深く民の心に結て、德化に歸ふくせしめ、天下の危をかへして安代となし、國家の亡んとする機を轉じて、永く存するの道となす、是全く德行の深き効にして、ヶ樣の時に當りて、德に非ざれば用をなしがたしとぞ、是また前段の如く、一事萬事の理を通じて、德の用所をしらしむるなり、此の德・智・法の大概を擧て、其効驗の顯はるゝ所をいはゞ、人の情の誠を顯し、人の心の滯を固め、徹上徹下に歸服さす者は德の効なり、古へ今の事を考へ、類を比べ例を引、大小長短を計校、輕き斤兩を權量、衆心の愛憎する所を知り、世の行ふべき所を擧るは、智の効なり、よく堪ざる所を堪しめ、よく忍びざる所を忍ばしめ、情性の舊習をかへ、筋骨の勤を盡して、餘力なきに至らしむるは、法の効なり、それ德は金銀の如く、法は銅鐵の如く、智は權衡の如し、銅鐵と金銀とをかけくらべて、程能損益して是を用ゆるは、智の事なり、且かの德は人の悅ぶ所なり、故に是を用ひて誤る所ありとも、猶取かくし易き所あり、法は人の惡む所、故に是を用ひて誤る所あらば、其身は死して禍ひ國家に及ぶ、智は此の損益を權るものなれば、尤愼み審にせずんば有べからず、此の三つの者を兼ね行ふものならば、令の行るゝ事猶水のひくき所へ流るゝが如くならん、昔春秋の時周の政綱を失ひ、諸侯法を亂る、孔子列國を周

遊して、文武の道を行はしめんとすれ共、列國の君用る事能はず、遂に戰國となりて天下合縦連衡、攻伐を以て實とす、是に於て孟子齊梁の國に遊事て仁義王政を勸む、齊梁の君迂遠して事の情に疎とて是を用ひず、此時に當りて天下の大國七つ、皆愚主にして共に事を謀るに足らず、獨秦の孝公商鞅を用ひて、悉く舊法を替て新法を立、專ら刑名法術に任じて、國を富し兵を强くす、此法は商鞅の立る所にして、德行を廢し功力を尙び、專ら法に偏なるものにして、固より先王の法、仁義の道とは大に異なる所あるものなり、然れども商鞅よく是を使ひ得て、强を抑へ弱を振ひ、國民を約束して力を國事に盡さしむる事、餘國の政の能く及ぶ所にあらず、故六國の君皆是が爲に蠶食せられて、漸々滅亡に近からんとす、孝公より六代を歷て、始皇帝に至りて遂に六國を亡す、天下を一統す、是よく法の用ゆべき所を知りて是を施し、遂に法を以て天下を取たれども、天下一統の後は、德を尙び仁義を行ひ、衰弱の民を救ひ、天下と共に休息すべき事なるに、ます〳〵法網を嚴密にして民力を盡せしかば、天下是に堪へず、二世に至りて山東の豪傑並び起りて、遂に秦の一族を滅亡す、漢の高祖先づ秦の都咸陽に入て、悉く秦の舊法を廢し、法を三章に約て秦民を息へければ、秦の民大に悅服して天下是に歸す、後漢の桓帝の世に至り、漢の法大に寛みて政事あがらず、こゝにおいて崔寔といふ人政論を顯はして、政を糺し法を嚴にせん事を勸む、時の人是を用ゆる事能はず、遂に天下亂れて三國に割る、諸葛孔明劉先主を佐て蜀を取時、嚴敷法を立て蜀民を匡糺す、

法正諫て曰、昔高祖法を三章に約して秦の民悅服す、今君蜀を取て嚴を以下民を約束せば、是民の心を得る所以に非ずと、孔明曰、然らず、昔秦の法嚴密に過て天下是を苦む、故に高祖法を約て天下悅、今蜀の大守劉章暗弱にして、法を以下を匡す事能はず、遂に蜀の國を亡す、是嚴を以亡に非ず、寛を以亡なり、故に蜀の舊政は寛に過て民慢れり、民慢れば恩に習ひ德に狎て、上より下す所の恩を以て恩とせず、故に舊政を改め、威を立法を行ひ、民始て恩の恩たる所を知といへり、それ恩威は則德と法との事にして、人を使ふ道具なり、古より國を治るもの、恩威兼行ひて下民を約束すれば、令行れ禁やむ、其偏用たる所あるものは、時弊を救ふの政なり、孔子の寛を以猛を濟ひ、猛を以寛を濟ふといふも則此事なり、是等の所を以德と法と兼行はずんばあるべからざる所と見るべきなり

夫以レ家治レ國、治レ家小大相移、運用自在、唯賢者能レ之、能以ニ商家之道一治レ國、厚賂ニ戰士一、報ニ强吳一、則計然之所レ用也、擧ニ治國之法一用ニ之家一、擇レ人任レ時、則范蠡之所レ試也、薄ニ飮食一、忍ニ嗜欲一、與ニ用レ事僮僕一同ニ甘苦一、則白圭之所レ治レ生也、此三人者、非ニ苟且而言一レ之、則用ニ之國家一、建ニ功業一者也、故其片言隻語、可ニ以爲一レ法也、今之商家纔得レ富、自奉奢侈、非三視レ僮如ニ草芥一、則必放縱無ニ約束一、孫子曰、視レ卒如ニ嬰兒一、故可三與レ之赴ニ深谿一、愛而不レ能レ令、譬如ニ驕子之不一レ可レ用也

上文に於て說所は、天下國家に於て民を使ふの道なり、商人の家僮を使ふも、此の道に異なる所な

しと雖、上に言しごとく、商家に於ては活殺の權なく、よく生命を養へ共、其死命を制する事能はずといへ共、猶有司の在るあり、且一日も賞罰なくんば、一人をだに使ふ事あたわず、況や少き者五六十多き者は數百人をや、故に此段に計然・范蠡・白圭が人を使ふの道を擧げ、結に孫子の語を以てして、下段に說く所の商家人を使ふ道を興起するなり、本文の意、家を治る道と、國を治る道と、小大の違ひ有と雖も、道理に於ては二つ致なし、然りといへども家を治る法を以て國を治め、國を治る法を以て家を治め、小なるものを擴めて大に施し、大なるものを縮て小に施し、自在に運用して、各々其用所に當るは、賢者に非ざれば能する事なし、昔春秋の時越王勾踐會稽の上に困められ、范蠡と計然とを用ひて國治を治めしむ、計然商人の道を用ひて、大に越の國を富しめ、聚る所の貨財を以て天下の死士を招き、厚く賄を與へて戰陣に進ましめ、遂に吳國を亡して會稽の耻を雪たり、是計然が小を擴めて大に用ひし所にして、其人を使ふの道は、貨財を以戰士の心を釣るなり、范蠡已に吳の仇を亡し、扁舟に棹して五湖に浮び、陶に至りて陶朱公と稱し、曰、計然が策七つ、越其五つを用ひて意を得たり、已にこれを國に施せり、我これを家に試みんと欲すと、則强忍なる人を擇て、これと共に時を逐ふ、三たび千金を致して、分ち散じて貧交疏昆弟に與ふ、是范蠡が大を縮めて小に用ひし所にして、其人を使ふの法は、專ら强忍なる人に任すに在り、凡そ强忍なるものはことを仕遂るものなり、事を仕遂るものは賣買の取引を全する故、我に損失をうけぬものなり、此處を審

に計りて此等の人に任じて時を逐ひ、當座の損失精不精を責ず、始終のところに勝利を得る仕方なり、魏の文侯の時に白圭といふ人有、此人貨殖の道にかしこく、時の變を勸る事を樂しみ、時に趨る事猛獸摯鳥の發(はしる)が如くす、よく飲食を薄くし、嗜欲を忍び、衣服を節にし、事を用る僮僕と甘苦を同じうす、是白圭がよく治生の術を脩めし處にして、其人を使ふの道は、上下志を同じうして其力を盡さしむるなり、此三人は苟且是をいふに非ず、これを國に用ひ、これを家に試み、功を建、業を修めしものなり、故其人々のいふ所の片言隻語、もつて法となすべし、今時の商家の風は、纔に富を得れば、我が身は美酒美食に飽き、妻妾に綺羅をまとはせ、家僮の養ひは惡草具を用ひて、これを使ふ事は草芥の如くす、又衣食上下のへだてなく、家僮を憐みて使ふ者あれ共多くは寛に過て督使する事能はず、其放縱に任てよく是を約束する事無きものなり、此二つは何れも一偏におちて、人を使ふの道を失へり、孫子曰、士卒を我が嬰兒の如くに思ふてこれをあつかふ、かの嬰兒は寒きも著きも、饑も飽も心に知れども、口にいふ事能はず、大將父母の心を以てこれを求め知り、寒にはきせ、饑には飽しむ、皆嬰兒の心に適はずといふ事なし、ゆへに士卒の大將を慕ふ事、赤子の慈母を慕ふが如く、大將の進む處には深き谿の危をも恐れず、水火の中へもともに趣べし、かくの如く大將の士卒を愛し、命令に從はしむる事能はざるは、彼のあまやかし過て父母のいふ事を用ひぬ息子の如く、何の用にも立ぬものなり、故に商人の家僮を使ふにも、やはり國家の人を使ふ如く、恩を

以て心を結び、威を以て命に從はしめざれば、皆此弊に陷なりとぞ

夫含氣之類、咸願レ得二其志一、少壯而奉仕、老大而欲レ爲レ家、則僮僕之志也、導二其志願一、抑二其驕佚一、成二其材能一、期二其老成一、主夫之道也、故不レ知二人情一、不レ能レ結二其心一、不レ辨二能否一、不レ能レ得二其任一、不レ明二約束一、不レ能レ盡二其力一、夫使レ人之道、聖賢所レ難、不レ可レ不レ察也

此段は上文を承て、商家人を使ふの道をのべ、一遍の末を結ぶなり、それ人は含氣の類なれば、賢愚不肖の不同ありと雖も、一寸の蟲にも五分の魂といふ譬の如く、士・農・工・商、各々其心の向ふ所ありて、其志を得ん事を思ふなり、商人の家僮となりて、商の家に奉仕するものは、其父母其子皆志願の有、其子幼稚して其心なしといへども、其父母其志願ありて、其子を商家に奉仕さす上は、幼より其子に父母の志願を言聞す故、其子の心に先金となりて、父母の心を心とするものなり、其志願といふは、少年の時より奉仕して商家の務をも習らひ、賣買の筋をも辨へ、年の長大に及びて、主人よりの宿入を得て、一家の主ともならんとの志なり、尤世の人の善惡邪正色々なれば、種々の惡智も有べけれども、先づ普通は此了見ならざれば、家僮の父母いつ迄も此初志に違ふ事なければ、子の志も自ら堅固なる道理なれども、卑き者は分別なく、父母の心一定せず、或は他人のいふ所にまどひ、或は其子のいふ事を信じ、主人をかへて他家へ奉仕せんと思ふ者有、此の如きものは永く家に使ふ事なかれ、又其父母に陳嬰が母の智、陵母の見る所なしといへ共、輙親の斷機にならひ、

大家の主人学者ニ講釈をたのみ

猥に我が子のいふ所を信ぜず、嚴敷命じて奉仕させんと願ふ者あり、此の如きは先これを許して、其子の志を見るべし、又父母の志動くといへども、其子の志動く事無んばヽ其子の志の變動する所を見るべし、僮の姿性放縱にして約束なきものは、才ありとも使ふ事なかれ、眼色變動して心志一定せざるものは使ふ事なかれ、根抗(かたいぢ)にして命令に戾る者は使ふ事なかれ、猪武にして後を顧みざる者は使ふ事勿れ、桀黠にして詐僞を好む者は使ふ事なかれ、愚にして色を好むものは使ふ事なかれ、酒を好て大事を忘るゝものは使ふ事なかれ、此數者皆使ふて家務を害ふ者なり、僮の生質様々なりと雖も、强忍なるものをよしとす、其强忍ならざるものも、習て强忍にならしむべし、僮を使ふ道は、其初の志を導き養ふて、永く其心に存せしめ、其驕逸の志を抑へて、其心に存せしめず、其材能を考へ是を長じ、其能ざる所、しひて是を勸めしめず、其迷離の氣を去りて、商事に老練せん事期すべし、古より相の門には相を出し、將の門には將を出すといふなれば、我門より良買の出ん事を願ふは主人の道なり、夫主人たるものは人情を知らざれば、家僮の心を結ぶ事能はず、家僮の心を結ぶ事の能はざれば、其力を盡さしむる事能はず、僮僕の愚なるは嬰兒の心知り難きが如く、啞子の心の喩易からざるが如し、然れ共嬰兒啞も皆心あれば、我が誠心を推して其腹中に置き、其饑寒を知りて暖飽せしめば、其心感動する事なからんや、され共人情は物に觸れて移る物なり、三都の繁華酒色味の樂み、目に觸れ耳に入て其心を動かす事、春の草の萠出んと、出遊の間暇なきと

の爲に忍びて日を送りぬ、一たび大任を受て行價し、或は家に在て出入の權を主り、貨財手に觸に及びて、多年の忍ぶ所を逞して、大に主家の財を傾く、上座の家僮一たび此弊を生ずれば、次第傳染て才遣なきに至る、此僮の心に思ふには、奉仕三十年を歷て少々の貨を得、纔に小店を開きて買入の業を修めば、終身勤勞すとも、如何ぞ富を得べけんやと、大に初志を變じて此狠藉をなす、然も此例小才の計を爲すもの、千が一も發政する事なし、如何となれば、遊蕩志を亂せしより、此の荒唐の謀をなす、心志固からず、勞智・勞力の勤に就き、纖嗇の納務に屈する事能はざる故なり、商家の主夫常に視聽を開き張り、家僮の中に此念を發する者を見ば、速に退けて傳染の愁を免るべし、其家務を熟練するを以、愛惜して因循する事なかれ、家僮一たび此念を發せば、我が局中へ入て使ひがたし、久敷これを置は禍ひ合家に及ぶ、愼まずんば有べからず、凡そ誠心を推し教訓をなすも、皆此念の起らぬ以前の事なり、故に家僮の情竇未だ開けざる以前に、常に忠孝の道を聞しめ、是を以て性情の先入となし置べし、やゝ成長して情竇開る時は、此の慣々の語を聞事をいとふ、さる時も知らず顏に、其睡眠を顧みず、驅て講席などへ進むべし、是を以て其惡弊を防べきに非ざれ共、糸の如き善心を繫ぎ置手段なり、かの惡弊を止るには、智と法に非ざれば救ひがたし、則智と法を以て惡弊を止むといへども、始終誠心に嬰兒の驕惰を懲す心なければ、此煩勞の事を行ひ難しと知るべし、商家のかく心得て人情の常變に通じ、誠心を推して家僮を待する道を盡さんと欲せば、智

を以て其能否を辨じ、其能に堪る所の役に任じて其勤を盡さしめ、閑暇あらしむる事なかれ、邪念は閑暇なるより起る、閑暇なき時は邪念隙を得て起る事なし、是未萠を防の術なり、もしそれ其勤に怠り、其邪念を動し、將に邪惡の行をなさんとする所あらば、早くこれを知りて、其將に起らんとする所をおさへて、少しも動く事能はざらしむべし、大抵人情は天理の動靜あるに同じく、上智と下愚とはいざ知らず、中智の人の少年の時には、何れ邪惡の念の起らぬはなし、小人の分際に於て邪惡の念といふは、別に大望有るに非ず、上にいふ酒色味の三つより起る念にて、才智有者程此念甚敷物なり、商家の主人よく此念を收めしめざれば、少年の輩をして一生を誤らしむ、故によく是を收めしむるは、大慈大悲と言つべし、邪念をして假に興起せしめば、火の盛に炎上が如く、薪盡るに非ざれば火をさまらず、故に邪念いまに起らんとする萠を見て、早く是を滅ずれば手もなく收る、此機ざしを見るは、智の上の事にて、これをして見やすからしむるは、法の事なり、邪念の起る處を知るの術は、巫母を賴み、狐に祈りて知るにも非ず、卜筮を以て占ひ、人相を見て知りなどするにも非ず、幻術邪法を行ひ、鬼魅を使ふて知るにも非ず、但六神通の二つ耳目の見聞する所を以て知るの術なり、それ人盲聾に非ざるよりは、誰か耳の聞き目の見るなからん、只其見聞する所穎敏ならざるより、見れども見ざるが如く、聞けども聞ざるが如し、是これを肉眼といふ、肉眼とは、凡俗の人の見る所、其心を用る事なく、只きよろ〳〵と見聞するのみにて、何等の道理有事

いふ、此の如き人はあき目くら聞つんぼにて、徹上徹下に洞に見る事能はず、故に古人是を顏上の眼は眼に非ずといふ、心の眼を開きて見るに非ざれば、誠の用には立ぬとや、夫目と耳とに英靈の通ふ叡竅なり、故に心廣く大なれば、見聞する所廣大に、心狹く小なれば、見聞も又狹小に、心正しければ見聞正數、心正しからざれば、見聞も又正しからず、是を眼裏に塵ありて三界闇く、心頭無事にして一身閑なりといふ、其意は眼に塵などいれば、眼を開きて見事能はず、故に廣き世界も闇の如く、心頭に一物の障碍なければ、忙敷くらす人も、いとひまに見ゆるなりとぞ、故に心豁達にして罣碍する所なければ、正大の智見を發し、耳目の靈通を得なり、是これを聰明といふ、聰明理を照さば、微を釣り隱を明にして、天下の事情通徹明亮ならずといふ事なし、人の愚蒙なる、己が身に此靈明の德あるを知りて、其智門を開、其神識を使令て、時務を明にして、時宜を得る事を陰陽・卜筮・狐狸・鬼魅の靈に禱祈して、身の安全を願ふは、我脚根のあかりを忘れて、人の行燈を賴むが如し、笑ふべきの甚敷に非ずや、能く智門を開かば、其智の穎敏なる事、山を隔て烟を見て、早く其火なるを知り、墻を隔て角を見て、早く其牛なるを知り、一隅を擧て三隅を明し、目機を以て銖兩を知る、此如き眼あらば、一見して人の肺肝を見る事、草鞋を着て其腸中を奔走るが如くならん、何を只其邪念の萌す所を知るのみならん、然れども是はこれ一時其人を見て其肝膽を知り、其事を見て其是非を分つ作爲にして、其人の內外表裏徹上徹下洞に見て、其終身の作爲所を知り、六尺の

孤を托し、百里の命を寄せ、大節に臨で奪ふべからざるものを知るは、孔子の語により、鍛錬するに非ざれば、これを得る事能はず、世の人の善惡を斷ずるには、皆曾子の所謂十目の見る所、十指の指さす所といふを以て龜鑑とす、普通は是にても濟べけれ共、世俗の見る所甚疎漏にして、其事の根葉をも糺さず、善惡をも辨ぜず一犬影に吼れば、萬犬聲に吼るの類多く、十目の見る所、十指の指さす所もあてにならぬ事有り、故に孔子は衆の惡む所をも必察し、衆の好する所をも必察すとのたまふて、漫に衆の好惡する所に就て善惡を定め給はず、又人を觀る法も、孟子は胸中正しければ眸子瞭焉なり、胸中正しからざれば眸子眊焉、其言を聞て其眸子を觀、人焉廋哉といふ、是も普通は此の如にてよけれ共、膽太く氣强きものに至りては、大惡事をなして少も顏色に顯さず、胸中正しからざれども眸子瞭焉たり、故に是も至極の法とはなりがたし、孔子の人を見るには、其以てする所を見る、其由る所を觀、其安ずる所を察る、人焉廋哉と曰へり、此意は先人を觀るには、其平生に好む所、友として交る所、口にいふ所、身に行ふ所、其顏色容貌都て表に顯るゝ所を見るべしとなり、孟子のいふ所は都て此中に籠れり、已に其以てする所の事、この首尾相應ずるか相反すると視比べて、愼成所を知りなば、又其表に顯る所の本は、何によりて斯はするぞと見るなり、此兩條は先表を見て、次に裏を見るなり、已に內外表裏分明に了知せば、猶又其する所は、勉てこれをするか、心に安じて行ふかといふ所を明察す、此三ツを見るといふ字の意、それ〴〵の意味有、視の字

の意は事の大略を視、其事々を比て見る也、譬ていはゞ、曲りたる物を見るには、直なるものにかけ比て見ればよく分る、弦の直なるを以弓の曲たるにかけ比れば、何程曲りたるといふ事よく分るが如し、觀は歷觀の觀にて、それからそれへと段々經歷りて、觀めぐらす事なり、察は明察にて、角から角迄殘りなく察取る事なり、其事々を比べて觀るといふは、善事を好み顏に見ゆれど、其する所を視れば惡事多く、又善事を好み行ふ共、友とする所は惡人多し、又其行ふ所の事に、是は惡事にて彼は善事なり、とかく比べ云て見る時は首尾顯るゝなり、又それからそれへ歷觀するとは、其する所の善は名の爲にするか、實に德を好む所あるか、又惡をなすにも、時代につれて止事を得ざるか、陽に惡に組すれ共、實は所存有事にやと、表に行ふ所よりくらべ、經歷して見る事なり、又行屆て察るといふは、一時の事に止まらず、其人平生に氣を付て見れば、うつかりと言、うつかりと行ふ所に、其人の心に安んずる所顯はるゝなり、是安ずる所は、勉めざる所に見ゆる故なり、其人の賢愚・强弱・才不才・能不能より心術の善惡、陽に行ひ陰に謀り、心に安じ安ぜざる所、殘らず見ゆる故、人焉廋哉と曰り、それ人を視るは徒に評論をなし、批判を好むに非ず、其德行の勉る所、其才能の施す所、その心術の微なる所を察にして、或はこれを腹心に任じ、或は是を耳目四支となし、若くはこれを爪牙に用ひ、若くは是を羽翼に使ひ、廣く其用をなさんと欲するが爲なり、それ身の

四支耳目ある、一ッを欠ても不可なりといへども、其重とする所は專ら腹心にあり、かの主人の手を放れて貨財を自在にせしめ、死後の大事を托置は腹心の任なり、故に腹心に用んと欲する者は、其心術の微を明にせずんば有べからず、されば人を見るにも、其才能を知るは易し、其心術を知るは難し、心を用ひずんばあるべからず、よく此道を用ひて、彼腹心より耳目四支爪牙羽翼の任に至迄、其能に堪たる人を選み、是等を頭として其下を約束せしめば、千萬の人をも自在に使ふべし、法令の用は衆人の怠りを戒め、勤に進ましむるものなれば、上に在ては其勤め怠りの見へ易く、下に在りては其法の知易く守り易きを旨とすれば、尤事すくなにして要を得をよしとす、是を以て衆人を約束するに非ざれば、其力を盡さしむる事能はざるなり、昔堯舜の興、禹稷皐陶政を佐け、殷は伊尹に任じ、周は呂尚を用ゆ、春秋戰國の謀に至りて、列國の君にも齊に管仲あり、燕に樂毅有、文公が五臣、穆公が三臣、魏文侯が樂羊を用ひ、秦孝公が商鞅に任じ、前漢の三傑、後漢の二十八將、劉玄德が水魚の喩、曹孟德が鷹虎の說、王者。覇者。刑名。法術治効同じからず、小大趣を異にすと雖も、皆よく人を使ふの道を得たり、これを列史の上に見れば易きに似て、これを實事に用ゆれば實に難し、老子小鮮を煎が如しと言なり、高觀は惡馬を御するが如しといふ、或は是を弱に施し、或は是を强に用ゆ、いづれか心盡しにあらざるはなし、實に人を使ふは苦を使ふなり、されば人を使ふ道は、古の聖人賢人も難しと仕給ふ所なれば、まして凡庸の人々は殊に心を用ひて、此道を察せずん

ば有べからずとなり

○此篇を五段に分ちて解釋をなす、第一段には、商の僮僕を使ふは、身の四支を使ふ如くすべきを說き、第二段には、古の人に君たる者は、各々己が得る所によりて、其下を使令する事を引き、德・智・法の三ッを顯して、各々其得失有所を論ず、第三段には、德・智・法の用所を辨じ、三ッを兼ねて行ふをよしとする事を說く、第四段には、國を治と家を治と、元二法無き事を論じて、商家といへども亦た恩威かね用ずんば有べからざる事を示す、第五段には、一篇の末を結て、商の僮僕を使ふには、其願を充しめて其心を結び、其能否を辨じて其事に任じ、其約束を明にして其勤に進ましむべきをとくなり、全篇の主意は人を使ふに有、人を使ふの道は己が德性によりて、これを帥るに非ざれば從ふ所有事なし、故に德・智・法の三ッを明にして、是を身に行ひ心に得、是を以て下を御するものならば、家僕各々其志を得て、主家の命に樂み從ふべしとなり、然るに商家の人を使ふには、恩は專らすべけれども、威は專らすべからざる所有、故によく知るを明にして、其邪念の萌を防ぎ、其が局中に入るべからざる者は、早く去りて傳習の害を免るべし、名將の軍を脩るは、其心常に士卒と敵とに在りとかや、商人の家業を治るも、其心常に家僕と賣先・買先との間に在りて、一動一靜審に知らずんばあるべからず、近世西國に劍術を能くするものあり、扇子を以て蜻蜓の鼻の先へ突付れば、蜻蜓扇子に從ふて來り、左右上下只扇子の至る處に從ずといふ事なしとぞ、是蜻蜓の扇子

に從ふにはあらず、扇子を以て蜻蜓の氣先へ廻り、其向ふ前を塞ぎて他へ行事能はざらしむるなり、今の世の家僕を使ふ者、此手段あるに非ざれば、自在に使ひがたしと知べし、然れども餘りに苛察に過れば、人なつく事なし、故に家僕を使ふものは、聾ならず啞ならざれば、大厦王となる事なしといふ語を、平生に誦して忘るべからず、されども又曰、冕旒目を蔽ふと雖も、未形に視よといふ語も有れば、外は寛に、內は明にして、人をして其胸を用ゆる所をしらしめざるを要とすべし

商道九篇國字解二之卷終

商道九篇國字解三之卷

教養第五

教は聖人の名教、倫理の次序外文學によりて、内德性を養ふ、身を脩め家を齊へ、天下國家を治る、皆此道によらざる事を得ず、故に此篇に商家の妻・孥・子弟を教へ、根本を固くするの道を述ぶ、夫禮樂刑政は國家の治具、教養の行る家には、其遺間餘俗といへども、又純厚ならずといふ事、使令に次て此篇を置所以なり

百頃之池、導而漑レ之、則十村之田可二以養一也、四端之心、擴而充レ之、則仁義之德可二以成一也、養レ細爲レ大、引レ小爲レ長、則無レ善二於教養一焉、孟子曰、飽食煖衣、逸居無レ教、庶二於禽獸一、夫人之所三以異二於禽獸一、以レ有二禮義一也、禮者始二應對進退一、而終二宗廟朝廷一、古者君子小人皆有レ學、教二詩書禮樂一、習二六藝一、成二其德性一、可三以事二父母君長一、可三以交二黨朋友一、孔子曰、君子學レ道則愛レ人、小人學レ道則易レ使、故從二天子一至二庶人一、皆無レ不レ學矣

此段教養の道の大に人に益あるを說きて、次に孟子の言を以てし、人たるもの一日の間も教養なくんば有べからずをいふなり、本文の意、百頃の池を鑿、溪水・留水・湧泉の類を湛へ、溝洫を通じて

これを漑ぐものならば、十ヶ村の家に耕し種る稻田を潤し、其靑苗を養ひて幾萬石を實のらすべし、彼敎の道も此理に齊しく、徐々としてこれを導き、仁義の敎に漸々漬せしめば、其性を養ひ其質を變じ、凡俗の骨を換て聖賢の身と成べし、人の性は善にして、仁義の穀種を具へ、事に觸て顯るゝ惻隱・善惡・辭讓・是非の四ッは、仁・義・禮・智の端緖なり、能く其義を擴め其行ひを充ば、仁義の大德をなすべし、それ數十の靑苗を養ふて、秀穗を垂るゝに至るは、灌漑の斷ざる所以なり、四端の心を擴めて仁義の大德をなすは、敎養の一日斷なきゆゑなり、されば細小なるものを養ふて長大に至らしむるは、敎養より善きはなし、孟子も敎の道を說て、口は美食に飽き、身は錦繡をまとひ、四支を安佚にして徒に日月を送るは、禽獸の作爲に近しといへり、それ人と禽獸とのちがひは、禮義を知ると知らぬとのわかちなり、禮といふは、人の呼に應じ、問に對へ、言語の言かたより、身の進み退くの行義を始として、其大なるものに至りては、宗廟の祭儀、朝廷の宴會に及ぶ迄、皆禮に非ざる物なし、禮の有所は皆時の宜きに適ふ、故にこれを禮義といふ、禮義といふ禮義は、學ぶ事なくしては知りがたし、故に古へは上たる人も、下たるものも、皆庠序の敎を受て詩經・書經を誦し、禮義を習ひ音樂を學び、これに射・御・書・數を並せ講じて、家に在ては父母兄長に事るの道、國に在ては君上に仕ふる義、鄕黨の父老、州里の朋友に交る道迄、殘りなく學び得て我が德性をなし、稠人の中に在て言語の應對、身の進退、不都合無き人物となる事を得せしむ、孔子の曰、君子道を

學べば人を愛、義を知りて使令をなしやすしといふ意は、上下共に學文はさすべき事なりとぞ、故
に上天子より下庶人に至る迄、皆學ばずといふ事なかりきとなり
而其學也雖レ一、其行也又不レ同、大人小人之事、有レ異故也、孔子曰、君子喩レ於レ義、小人喩レ於レ利、
習之相遠、猶三矢人函人之有二仁不仁一也、孟子又曰、民無二恒産一、則無二恒心一、遇二其庶人一可レ見也、雖
レ然觀レ之、豈如二禽獸一哉、上供二官府之役一、下養二己妻孥一、雖下日欲上講二仁義一、不レ暇レ及也、聖人知二其
如下斯、故責二下民一不レ以二禮之精者一、曰、禮不レ下二庶人一、仁恕之至也、間有二忠孝異レ衆者一、則故表二其
閭一而顯レ之、未レ可レ有而有、將奚足レ稱、可レ無而有、故殊異而顯レ之、勸レ衆之宜也
此段上文を承て、大人小人事務を異にするを以て、其意も又異なる所あるを述べ、己が分限を明に
すべき事を示すなり、本文の意は大人と小人と同く學ぶと雖も、其する所の事は、各々見在居る所
の位になし、己が務とすべき所を勤む、大人は祿位有人なれば、世渡りの業に心を勞する事なく、
專廉隅を守りて義理を明にす、小人は祿位なく、農は田を耕し、工は器を作り、商は有無を通じ、
世渡營に暇ある事なし、故に孔子の曰、君子の心は自然と義理のすじにかたく、事に臨で早く義理
の有所を喩り、小人の心は自然と利害賢く、事に臨で早く利害の有所を喩ると、蓋天の降せる仁義
性は、君子小人もと一同なれども、矢人函人の仁不仁あるが如く、其境界につれて心の異なる所
有なり、故に孔孟の道に於て、庶人をあしらうには、庶人の心を以てして、君子の道を以てせず、

孔子衞の國に至り給ふ時は、弟子冉有御者となりて御供せられたり、孔子田野の闢け、人民の多きを見て、庶ある哉と曰しを、冉有問て曰、かく人民の多き上は、如何いたしたるものにやとありければ、孔子の曰は、まづこれを富して、世渡りに心遣なくさすべしと、冉有又問ふ、已に富て世渡りに心遣ひなき時は、如何いたすべきやと、孔子曰、已に富たらば、仁義忠孝の道を敎ゆべしと、孟子もいふ、家業を失ひ田祿なき身となりても、廉恥の操を失ざるものは只士のみこれを能す、農・工・商の輩家業を失ふに至りては恒の心なし、苟にも恒の心なければ、放僻邪侈をせざる所なしといふ意は、此輩を治るには、家業を失はしむべからざれとなり、貨殖傳にも、管子の言を引いて、倉廩に米穀實て後禮節を知り、衣服足りて後榮辱をも知といへり、故に金銀のあるに付て禮も行れ、無に付ては禮も廢れて行はれず、故に富者は勢を得てます〳〵彰れ、勢を失ひ浪々の身となりては、夷狄の振舞益々多くなる、俗の諺にも千金の子は市に死なずといふは、空言に非といへり、されば俳諧の發句に、「業平も先飯くふて杜若」といふ句もあれば、庶人にひだるいめをさせて置ては惡事をなすなり、又腹のふくれたる上、何のする事もなければ、小人閑居して不善をなすのことわりにて、又惡事をなす故、これを敎へざれば禽獸に近しとは言なり、され共犬猫に食殘を與へ、脊戸棚へ目を付させぬ樣する如く思ふにはあらず、大人君子の中にさへ、小人の心あるもの少なからず、まして小人の上に小人の心有は、事勢の然らしむる所、上は年貢運上を納め夫役を勤め、下は己が妻孥

を養ふ、世の營のひまなきに、君子の行ふ所に習ひ、仁義の道を講習せんと欲といへ共得べからざるは理なる事共なり、聖人は深く世態人情を知る故、固よりその此の如くなるを知りて、禮の精敷ものを以て庶人を責ず、禮は庶人に下さずといふて、輕きものゝ無作法はさも有べし、ゆるし給ふ故に、孝經に庶人の孝を說て、公の法度を違き罪科を犯し、父母兄弟を連累せん事は不孝の至りなり、又酒色味の三ッに耽り、嗜欲を長じて散財し、父母を養ふ料に事足らぬは、是又不孝の至りなり、故に我が身を愼みて固く公の法度を守り、日用のくらしに衣食を節にして、豐に父母を養ふを庶人の孝とするとなりといへり、いかに庶人なりとて、孝道の此に留るには非ざれ共、家業に暇なきものなれば、其大なるものゝ尤なし易き所を擧て、せめて是程の事はせよとの意なり、こゝを以て公の法にも、忠孝の事を行へと戒むれ共、何程の事をせよと忠孝の分際を立ず、上は曾子閔子の孝より、下は父母の養を失はざるに至るまで、皆孝の中にして法の網を密にせず、庶人をして法の中に居安からしむるは、法と敎とをまじへて、仁道を以て下を如心察するの至りなり、かるが故に輕きものゝ中にも、格別に忠孝を勤るものには、金銀米錢の類を賜り、御褒詞のあるは、身分に稀なる行狀なりと感心有所なり、士大夫分上に此行狀あるは、雅より有べき事にして有るなれば、是を稱すに足らず、庶人分上に於ては、無るべくてある故、殊に異なりとして是を稱す、是廣く諸人に此事を見聞せしめ、觀感して其作爲に倣はしめんと進る義にて、則是善道を敎へ導くの事なりと

ぞ、下の文に、庶人の富る者動ば身の分限を忘れ、冠・婚・葬・吉・凶の禮に於て、專ら文飾を事とし僭僞に陷り、忠孝の實意を知らざるものを戒るの語を下さんとて、此に君子小人の分限を明に述て、下のいふ所のはしを兆朕くなり

且夫農工之爲レ務、皆在二於力作一、其趨レ利也或少矣。商者以二貿易一收二十一一、趨レ利之尤者也、故居二四民之最下一、以レ末爲レ名、而又其利澤之及レ人也、有レ大レ於二農工一、今天下之商、財累二巨萬一者、不レ知二幾千人一、家僮數百人、仰二衣食一者、不レ可二勝數一也、其平生之所二會集一、豈可レ無二尊卑之序一乎、而觀二其家禮一、則文飾僭僞、無下一知二其義一者上、故衣服之美、燕飯之盛、雖レ越二卿大夫一、遂無レ免レ爲二野人一也、大抵商之弊風、唯利是視、苟非二卑吝守一レ錢、必驕傲簡レ禮、其於二父子兄弟之間一、亦皆無二不レ在レ利者一、夫人之欲レ富、元爲レ安二養父母一、依レ利間二天倫一、非二本末顚倒一乎、弊風一成、傳習難レ變、其極必放僻邪侈、犯レ罪破レ家、鄙言曰、父勞子逸、孫爲二乞丐一、不レ知二敎養一之弊也

此段上文を承て、今の商の弊風を說く、本文の意、庶人の中にも農と工との家業は、村里に住居し、窮巷に家居して、汎く人と交接する事なく、手足の動作を專らとするものなれば、利に趨るの心は少き事有、商は諸國の人々に交通して、土風人情に明に、所好に投じて利を得る事を爭ふものなれば、其利心の俊利なる事、農と工とに百倍す、故君子是を賤しとして、四民の最下に置き、農を本として商を末とせり、然れ共其の利澤の人に及ぶ所は、農工より大なるものあり、今昇平日久しく

關梁禁なく、諸國の通財自由なるにより、末を以て巨萬の富を得るもの、幾千人有事を知らず、是全く君恩の及ぶ所と、利澤の多きとによる所なり、是等の家に使ふ僮僕の數、其多き者は幾百人、買先職先賣等家中に出入して、蔭庇を蒙るもの其數擧て數べからず、五佳節・祝儀・冠婚・葬祭・吉凶の大事あるに遇て會集多き、尊卑の次序有べき事なり、然るに其家に行ふ事の禮節を觀れば、虛僞文飾の事のみ多く、上を僭し義を害ふもの少からず、是無學文盲にして、禮の本は義により制する事を知らざる故に、其衣服の美麗にして燕飮の盛なるは、卿大夫の家に越ると雖も、鄙俗の甚敷は小人匹夫の作爲を免れず、大抵商の弊風只利のある所にのみ目を付て、後の愁を慮る事なく、何事にも金がさす世の中なりと思ふ故、金儲さへすれば、何しらずとも苦しからずと思へり、是も庶人の身に於て、一應は聞へたる事なれども、次第に此心つのりて、義理を忘れねば損失多く、世法を守れば隙入多く、厄介を養育すれば物入多し、義理をかぎ、法をかぎ、厄介をかぎて、富を得るの門に入るといふに至る、此卑吝の行を以し、一旦は富を得べけれ共、一生のする所、其身は錢を守る奴となり、子孫の爲に家業を爛す基を立置に似たり、又此卑見を破るものは、使ふ爲の金銀なりとて、專ら衣服を飾り食飮を盛にして、金銀に面をはりて、人に對して無禮をなし、傍若無人に振舞ものなり、此のごとき者も、俗にいふ傾城買糠味噌吝とやらんにて、狹斜の遊には千金を一擲すれ共、親類の急を周(すくふ)には半錢をも吝み、甚敷に至りては父子兄弟の間にも利を爭ふに及ぶ、されば纖

吝筋力は治生の正道といへば、無用の事漫りの費には、一錢をも吝むべけれ共、人倫の道をかぎて金儲せよといふ事には非ず、人の富を求むる、もと父母妻子を心安く養なはんが爲なり、利のみに心奪れて、天倫の道を害せば、本と末と顚倒して、禽獸の振舞に異なる事なし、其父侈をなせば、子は父より甚敷、癩疾傳死病の子孫傳染する如く、弊風次第にはびこりて、其末極に至りては放僻邪侈せざる所なく、遂には公法を犯し家業を滅す、鄙き諺に、父は勞し子は佚し、孫は丐乞となるとは、則此事をいふなり、中富の家此覆轍をふむもの免れざるは、皆子孫を敎へ養ふ道を知らざる弊なりとぞ

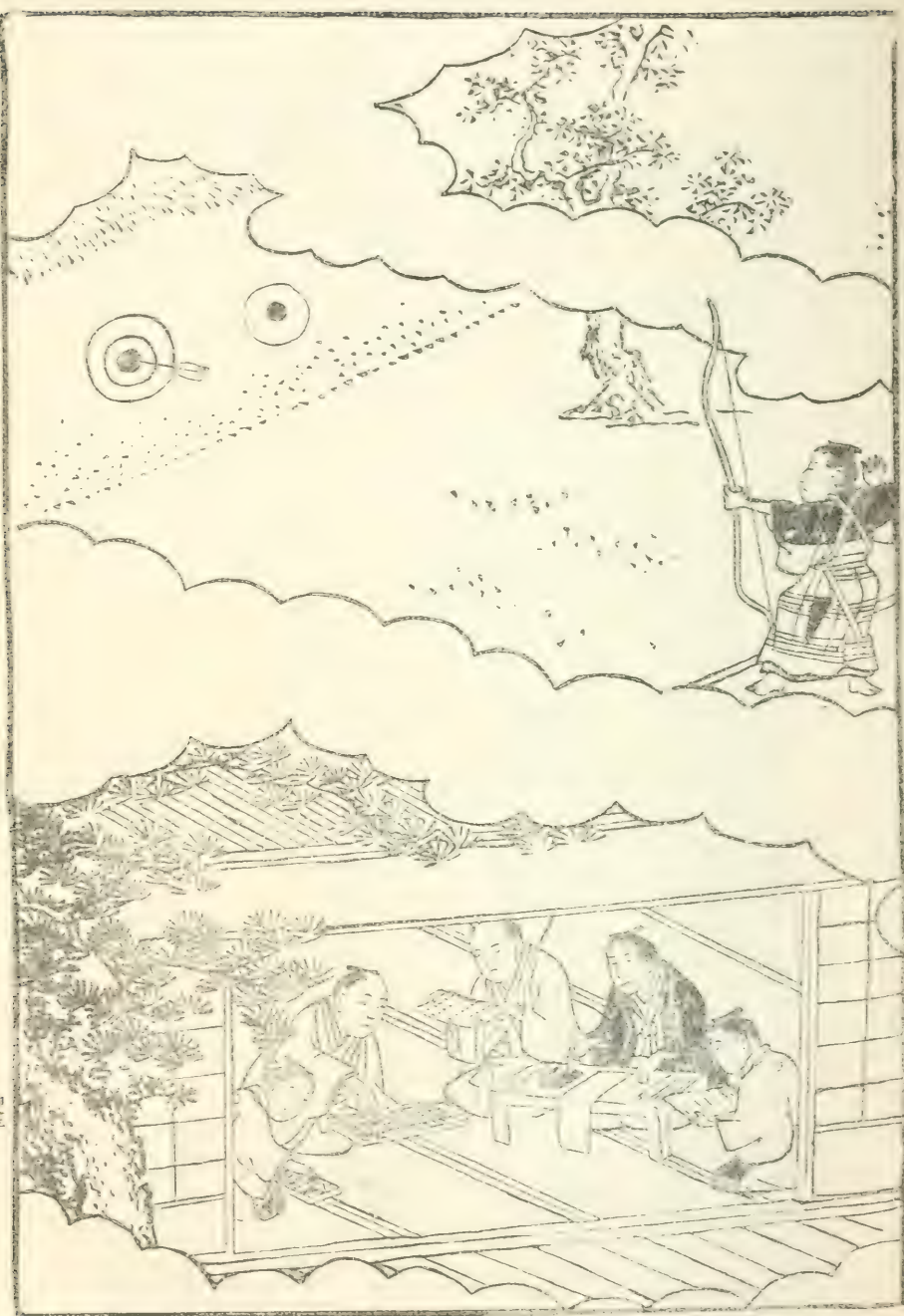
故先㆑之以㆓孝弟㆒、次㆑之以㆓忠信㆒、服勞以固㆓其心志㆒、商術以知㆓其務㆒、而後講㆘禮之宜㆓庶人㆒者㆖、頓而守㆑之、風俗謹厚、庶無㆓破㆑家之子弟㆒

此段上文を承け、商家の子弟を敎養する道を說きて、一篇の末を結ぶなり、夫人艱難に生て安佚に死し、安佚に生て艱難に死す、人の富るに隨て、驕奢の心を生ずるは自然の勢なり、故に嚴敷是を約するに非ざれば、子孫永く家を保つ事能はず、孔子曰、約を以失するものは少しと、これの謂なり、これを約するの道具は、家法と家禮との二ッに在り、家法は、使令篇にいふ所の如く、法令と賞罪とを立て、法の中に約束するをいふ、家禮は、幼き時より敎導して其善心を擴め、孝弟忠信の道より仁義の德に漸入すべし、其初の敎は先志を立しむるに有、志とは、心の向ふ所をいふなり、かの

白糸の赤くも黒くも染べきは、幼き時の心なり、孔子曰、吾れ十有五にして學に志す、三十にして立と、又道に志し德に據り、仁に依り、藝に遊と、道は人倫の道、孝弟忠信仁義の事にして、日に用て行ふべき所の者なり、此道を知りて心此處へ向へば、適く所の者正しく、他岐に惑ふの愁なし、據るとは、心に執り守の意なり、德は道を行ふて心に得る所有物なり、これを心に得て固く執り、守りて失ふ事なくんば、始終惟れ一つにして、日に新なるの功有、依とは、違ざるの謂なり、仁は其說樣々なれども、世の汎く知る所の朱注の說に依ば、私の欲悉く去りて、心の德の全きをいふなり、修行の工夫此の場に至りて、食を終るの間も仁に違ふ事なく、心を教養するの道熟して、身に行ふ所適として天理の流行に非ざるものなし、遊とは、物を玩て情に適ふの謂なり、藝は、禮樂の文・射・御・書・數の法、皆至理の寓する所にして、日用の闕べからざるものなり、朝夕こゝに遊て、其義理の趣を博れば、則務に應ずるに餘りありて、心も亦放つ事なしと、是士君子の文學によつて、德性をなす所の大略なり、庶人分上には此の如にはなし難し、故に先敎ゆるに孝弟の道、忠信の行を以てして人倫の道を諭し、事ある時は弟子其勞に服といへば、人の子弟たるものは、父母兄長に勞事すべき事を敎へ、且習勞備にいふ所の如く、庶人は筋力を以父母を養ふの料を備べきものなれば、勞苦は庶人の道なる事を其心に納得せしめ、是を慣習して其心志と筋骨とを固めしむべし、古は子を易て敎ゆと有、孝弟の道は父兄よりしては敎へがたし、嚴師友を選みて是を諭さしむべし、

尤其身孝弟ならざれば、子弟をして孝弟ならしむる事能はず、己れ父兄あらば、大切に事へて觀感せしむべし、父兄なくんば、先祖の祭に孝弟の心を盡すべし、學問はすべき事といへ共、博識文章は却て日用の妨となる事多し、只々人倫の道、義理のすじを明に辨へ、世態人情を審に知り、治亂のよる所、盛衰の本づく所、世渡の艱難辛苦なる事を曉るも、皆我が家業をつとむる益となすべき爲なれば、先第一に商術を敎て、其務とすべき事を知らしむべし、六藝の中、樂と射御とは庶人の用ゆべき事に非ず、禮は應對進退の節より、庶人の身に行ふべき事を擇み、當時に行ふ所の我邦の禮法にまじへて家禮を定め、妻孥をして禮に從て違ふ事なからしむべし、凡法は卽時に効を取ものなれば、嚴なるを宜しとし、敎へは多年漸漬で德性をなすものなれば、寛なるを宜しとす、かく家法家禮を定といへども、世に異樣なる事をなすべからず、苛察なる事をなすべからず、只なし易く行ひ易きをよしとす、其餘力を以て他の技藝を習はしむ共、深く其術を擇べき事なり、子弟の惡敷なるは皆遊樂技藝の友による、心を用ひずんばあるべからず、物を玩べば志を喪ふといふて、藝に耽りて本業を厭ふに至る者多し、尤戒め愼べき事なり、兎に角に家業に面白みの付樣に鼓動して、他に趣るの間なからしむべし、此の如くに法に順ひ禮により、子孫を敎養して德化に歸せしめば、家の風謹厚になりて、產を破るの子弟無るべしとなり

此の一篇を四段に分ちて解釋す、第一段には、敎養の人に大なる益有る事を陳て、古より君子小

人皆學ばずといふ事なきを說き、第二段には、君子小人同じく學といへども、其務とする所の同じからざるを以て、責むる所も又精麁の道あるを說く、第三段には、商人の務とする所は、專ら利に在るを以て、其弊風やゝもすれば、父子兄弟利を爭ひて天倫の道を喪ひ、上を僭し法を蔑し、子孫の家を喪ふ階梯となすに至る事を說く、第四段には、一篇の末を結で、先づ教ゆるに孝弟忠信の道を以てして、其本源をかため、家業を勤め、筋力を勞するも、皆此四つを行ん爲なる事をしらしめ、父兄君長に勞事して少しも怨懟事なく、習勞篇にいふ所の如く、勞知・勞力をならはし、商術知務の篇にいふ所によりて商の務をしらしめ、此條々を本として家禮を立て、子孫をしてこれに由らしむべき事をとく、全篇の主意は教養にあり、教養は成る事遲しといへ共、奬るゝ事も又遲し、故に君子これを尙む、謀短く志淺き者は、一旦是を行ふと雖も、久遠に怠らざる事能はず、德化の行れざる所以なり、敎養の道は妻妾より初る、妻妾命を用ひざれば子弟服せず、よく家を齊んと欲するものは、我妻を娶り子婦を娶るにも、心を用て擇ずんば有べからず、詩に曰、桃の夭々たる、其葉蓁々たり、之子于歸ぐ、其家人よろしく、其妻妾敎ゆべからざれば、其家人に宜しからず、故に先己を脩めて妻妾に及し、兄弟悦びて子弟服し、德化家僕に流て近隣に溢る、是教養の行るゝ次第なり、其序に順て行へば傾流の淀まざるが如く、其序に順はざれば逆流の汎濫が如し、妻子をだに化する事能はず、況や家僕をや、それ天下に三綱五常有、君は臣の綱なり、父は子の綱なり、夫は妻

の綱なり、是を三綱といふ、五常は仁・義・禮・智・信、綱とは、網の大綱なり。是を擧れば細目隨て擧る、一家の主たるものは三綱を兼有てり、故に妻子家僕の治らざるは主人の過なり、よく妻子家僕をして、主の命を用ひて過ちなからしむるは、主人の身一つにあり、愼ずんば有べからず

接待第六

接は應接にて、向ふ方よりの仕掛に應じて承け答する事なり、待は俟なり、遇なり、向ふ方を待うけあしらふをいふ、此篇は人に交り人をあしらふ道を述ぶ、それ孤木の仆れ易きは助けなき故なり、竹樹の長く桓るは盤根を固める故なり、孔子曰、鳥獸は共に群を同じうすべからず、我れ斯人と與にするに非ずして、誰と共にせんと、蓋人の世に在る、共に輔て仁をなすべし、衆と共にするものは助を得る事多し、助多ければ業をなす事大なり、獨自から好くするものは、業をなす事小なり、接待は助を得るの道なり、察せずんば有べからず、家人の教養已に齊ふ上は、又外人に交る道を知らずんば有べからず、教養に次て此篇を置所以なり

自身謂二之己一、對レ己謂二之人一、人來已往謂二之接一、接レ之有レ禮、謂二之待一、待レ人之道、亦樞機乎哉、恭敬遜讓、君子之待レ人也、驕傲喧爭、小人之矜レ人也、溫言怡顏、人之所レ愛、非理面斥、人之所レ惛、己和物順、拳往脚來、出レ戎爲レ好、不レ可レ不レ謹也、朝野之間、賓主之禮、尊卑有レ等、長幼有レ序、禮儀三百、威儀三千、不レ出二於接レ神待レ人之外一

此段は接待の人に模る、門戸の樞・弓弩の機あるが如く、人の和順するも此道よりし、矛盾するも又此道よりするなれば、深く謹むべき事なるを説なり、夫乾坤の身父母に活胎すと雖も、父子兄弟心を同じうせず、況千萬の中人心の異なる其面の如し、人に同を褒異を貶、恣に我意に任せば、天下は遂に治むべからざるなり、幸に人心の靈なる、明鏡の物を照して形影相隨ふが如きあり、俗の諺に、魚心あれば水情有といふは是なり、萬人の心を合せて同一の和をなすは、全く接待の道によれり、接待の道は、己れ敬して人の敬を致し、己れ和して人の和を致す、譬ば形正しうして影正しきが如し、故に本文の意は、彼我を玄同せんが爲に、先彼我を分ち、而後によく是を玄同するの道を說く、曰く、自身これを己れといふ、己の外は皆人なるを以て、曰、己に對する是を人といふ、是彼我を分ちて說く所なり、かく彼我相分れては、共々輔けて仁をなし難きを以て、これを承るに玄同の道を以てして、曰、人我方へ來れば、我も又往て答ふ、こゝに於て彼我交接して仁道行べし、然るに君子小人の交りに異なる所有、世の諺によき中には墻をせよといふは、心をへだてよとの事にあらず、心易きに過れば爭ひの端となる、禮敬心を忘れざれとの謂なり、晏平仲よく人と交る、久してこれを敬すといふも、何程久しく魂意にても、禮敬の意を忘れざる故、喧嘩口論中違はなかりきとなり、是君子の交接にて、人々の守ても手本とすべき事なり、故に曰、交接に禮敬有、これを待と言、接待の道は人の和順矛盾の分る所にして、戸の樞弩の機あるが如し、君子の人を待する

大酒とらひ
あんらもの話

には己恭敬の道を盡し、何事も人に遜順辭讓して我より先だたず、小人は是に反して己に矜り人に驕り、喧嘩して利を爭ふ、其始め人に接るや甘して醴の如しと雖も、わづかの怨恨にて忽睚眦の仇となる、是小人の交接にして、戒て倣べからざるものなり、それ人心異なりと雖、同じく然りとする所有、溫藉の言語、怡悅の顏色を以て人に接すれば、人皆是を愛せずといふ所なく、非理の言語を發し、人前に面斥すれば、人皆是を憎まずといふ事なし、柔和を以てこれを遇すれば、人又柔和を以うけ、拳を擧て擊かくれば、脚を以て御禮を申す、影の身に隨ひ、響の物に應ずるが如く、戒を出し好をなすも皆言語容貌より起るなれば、謹ずんばあるべからずとなり、古への周公は文王の子、武王の弟、成王の叔父にして、攝政の貴官たり、一日の中一たび沐するも三たび髮を握り、一たび飯するに三たび哺を吐き、起て以天下の士を待す、楚の元王は漢の高祖の弟にして、身は親王の位にあれ共、醴酒を設て穆生を禮敬す、古の聖賢身の貴きを忘れて、賢者を禮待す事それ此の如し、古語に、一夫恨を含めば城を傾ずといふ事なしと、吾朝の上杉謙信・織田信長は扇を以て成田と明智との頭をたゝき、一は弑逆の禍にあひ、一は八州の叛離を致す、是無禮を以禍を取明戒なり、聖人は鰥寡孤獨をさへ侮らざれば、まして匹夫の賤をも、非理無禮を以て是を遇せず、宗廟朝廷の上より鄉黨閭里の間に至る迄、禮敬を用ひずといふ事なし、こゝに於て賓主禮あり、尊卑等あり、長幼序あり、方策に載る所三百の禮儀、三千の威儀、神に接し人を待するの外に出でず、接待の道

の廣く大なるを見つべし

商之爲レ業、待レ人爲二生計一、人愛則業盛、人惜則業衰、愛惜之所二由來一、非レ無二其本一、今之商者、習二故俗一無二學術一、心吝志鄙、好レ矜二於財賄一、故其待レ人也、陽下陰驕、面譽腹毀、厚二有錢一、薄二無錢一、形動便佞、言語油滑、反復無レ常、征二利之所一レ在、徒知レ恃二我有一レ財、不レ知レ恃下吾有上二致レ財之道一也、夫言語容貌、中情之表也、徒以二虛飾一悅レ人、非レ所三以永取二信、孔子曰、人而無レ信、不レ知二其可一、信者人之所レ賴而立、無レ信則無レ賴、無レ賴則財不レ通、貨財不レ通、則不レ能レ爲レ商、是故良賈不レ爲二擺闔一、不レ矜二邊幅一、忠信好レ義、察レ言觀レ色、慮而下レ人、一時雖レ不レ爲レ贏、久遠而行、所三以爲二大業一也

此段は上文を承て、接待の商人に於て尤心を用ゆべき事なるを說く、夫商人の生計たる、買ひ人待て賣る、買も賣も皆人相手なれば、愛する人多ければ家業盛に、惜む人多ければ家業衰ふ、愛惜の來る所、其本なくんばあらず、今三都の商人を見るに、幼き時より我家業に仕習れ、市井の故俗、時々の流風に見習れ、徒に表裏を以賣買をなし、時の間を合す迄にて、固より學術なければ、しかと見認たる知見もなく、心吝に志鄙敷、只金銀さへあればよしと心得、少數貨財を有ては大に人に矜るの心あり、故に其人を待には矜傲の心と、表裏の心を取まぜて、陽に人を敬ふ顏をなして、陰に人を侮る心をもち、面前には譽そやし、背後には毀り罵り、錢あるものには親切を盡し、錢なきものをば疎になし、形動便佞にして言語油滑に聞ゆれど、內心の表裏輕薄いはん方なく、只利の在る

所而已に眼を付て、義理をも法をも辨へざるもの多し、その賣買して利を得は、商人の道とする處、其弊風こゝに至るも又自然の勢にして、深く是を尤べきにはあらず、然れ共金銀はもと死物にして、自ら主張するものにはあらず、水に沈むべく火に爛すべく、凶賊に盗み取らるべく、曾て恃となすべきものにあらず、且それ天に不測の風雲有、地に不測の水災。火災有、人に不測の災害有、天下の災害は萬民是に走り、國土の災害は擧國これに走り、一家の災害は妻子是に走り、神に祈り佛を信ずとも禳ふべからざるものは、禍災の常なきなり、故に商人の本色は、我々財あるを恃とせず、我に財を敬すの道有を恃とすべし、かの愚商の知見なき、世の中はいつも此の如くなるものと思ふ故、徒に我に財有を恃とする事を知りて、財の恃とすべからざる事を知らず、かの接待は財を致すの一つにして、誠實は接待の本とする所なり、一時虚飾を以人を悦しむとも、中情あらはれて人永く是を信せず、孔子曰、人をして信なくんば、其一つなる事を知らずと、信は人の頼て立處、信ならざれば頼とする事なし、人に信(まこと)とし頼とせられざれば貨財融通する事なし、貨財融通せざれば、商をなす事あたはず、見つべし巧に表裏をなすとも、何の用をかなさん、却て不信の害を招のみなる事也、故に良賈は齷齪として邊幅虚飾を以て人を悦しめず、心に忠信を存して事毎に義理を立、言語顏色を觀察して其虚實を知り、接人の道を審にして、專ら謙遜して人に下る、一時人に悦れずと雖、久遠して實意あらはれ、人皆是を信として、其言ふ所行れずといふ事なし、是良賈の大業をなす所以なりとぞ

人之常情、見近遺遠、見利遺義、孔子曰、人無遠慮、必有近憂、今一室之内、座外之地、皆爲無用、客至則爲有用、故知無用之用者、其所見大故也、不知無用之用者、其所見小故也、坐井視天謂小、非天小、所見小也、商者言云、學術無益、聚貨是務、殊不知學術禮數之所出、聚貨贏餘之所生、徒知聚貨、不知禮數、雖得忽失、富而好禮、知富之不可恃也、孟子曰、訑々聲音顔色、拒人於千里之外、人之不至、非得富之道、故曰、良賈深藏若虚、君子盛德、容貌如愚、若虚則人易至、如愚則受者多、人至且受、則往非爲盛業而已、將有益其知見、而所廣益也、舜之大智、好問察邇言、從耕稼陶漁至爲帝、無非取於人者、所以聖之益聖、愚之益愚也

此段は上文に良賈の作爲を云ふを承て、愚商の愚商たる所以を述るなり、本文の意は、常人の情は近淺なるもの故、徒に目前の利害を見て將來の得失を計らず、孔子曰、人遠き慮なき時は、則必近き憂ありと、是れ愚人の慮りなきを戒め給ふなり、是を譬るに、今一室の内に於て我が座臥する處を度れば一疊の席に過ず、一疊の席の外は、常に於ては無用の物なり、若し外客の來る事有時は、常に無用の席も忽に有用となりて、皆足ざる所有が如し、見つべし無用の時に設されば、有用の時に用ゆる事能はざる事を、此理を以て世の中の事を觀れば、目前無用の物の、後に有用となる事許多有なり、かの目前の利に眩ものは、無用の用をなす事を知らず、知らざる所以は其見る所近淺にと

どまりて、遠大に行屆ざるを以て、譬ば井の中より天を觀て天を小なりといふは、天の小なるには非ず、其視る所の小なるなり、僅の富に心驕り、表裏を以人を欺き、我程の者はなしと思ふは、二三町の間の人を視て、天下の廣さ、古今の遠を知らざるなり、愚なるもの丶いふは、商人は金儲さへすればよし、學文などは家業の妨なりと、是一應は聞へたれども、學文のすじをも辨へず、一槩に妨とのみ思ふは、目前に明にして背後に暗しと謂つべし、如何となれば、何程儲け置共、是を保つの術を知らざれば、子孫よく保たず、徒に保つ事能ざる而已に非ず、却て是を以て其身を破るの端となす、然ば金銀を儲て是を子孫に傳るは、身を害するの大毒を遺すが如し、都て萬づの物に利となり害となる事有、事物の利害を明にせざれば、其得失を謀りて能く是を處置する事能はず、世に金銀程利益多きものはなけれ共、其害となる事も又許多あり、或は金銀の有るに付て盜賊の禍に逢ひ、や丶もすれば家族殘らず白刃に命をうしなひ、又は金銀にまかせて奢を生じ、上は公法を破り、下は家產を破る、若くは金銀をへらさじと、手足は繫縛られたる如く、身は獄やに囚れたるが如き者有、又は金銀の奴となり、大困窮の人に同じき者有、或は貸附に損失をとりて、心氣を打て死する者有、又金銀を以て美妾を多く蓄ひ、床頭の賊に命を絕す者有、此數者皆金銀により害を招き、畢竟の處金銀なくて心氣を勞せず、朝夕にかせぎて心樂に世に渡る、赤身の貧乏人にも劣たりと云ふべし、されば愚商學文を無益なりとすれ共、金銀の利害を明にして、よく是を保つの術を知るは、學に非

ざれば得がたし、其理如何といふに、孝弟忠信を本とし、是を以て地上臺を占め。人に接るに禮敬を盡すは、皆學文より出づる所なり、よく此道を行ば永く家を保つべし、驕奢淫佚に身を喪ひ、人に接に無禮を以てし、愼み恐るゝ心、忌み憚る事なきに至るは、貨財のみありて學文なき故なり、此道を行て改事なくんば、遂には家を失ふべし、世に論語よみの論語しらずとそしれ共、論語よまずの論語しらずよりは、はるかに勝りたる所有物なり、論語に、孔子の弟子子貢といふ人、孔子に問ふて曰、凡人たるもの其身貧しければ、志も下り氣屈し、自然富貴の人に諂ふ心有物なり、又其身富貴なれば志し揚り氣伸び、自然貧賤の人に驕る心出るものなり、然るに此の弊風に陥ず、貧敷時にも諂ふ心なく、富みても驕り肆なる振舞なくんば、如何にてうべきといへば、孔子曰、先一應はそれにてよろしけれ共、いまだ貧富の外に超る事能ざる所有、今一段打超て、貧敷時にも心廣く、體胖氣にものびやかに樂みて、我身の貧敷事を忘れ、富たる身となりても、善事に身を處く事を安し、道理を循る事を樂て、我身の富たるを忘れて、人に接るに禮敬を盡す者ほどにはなしと仰られき、されば聖人は富の恃とすべからざるを知り給へばこそ、浮べる雲の定め無が如しと仰られたれ、學文なきものは此等の道理有事知らず、昔戰國の時、魏の文侯中山といふ所を伐取、其子擊を代官として中山の城を守らしむ、擊中山へ行く途の朝歌といふ所にて、文侯の師匠田子方といふ人に逢たり、子擊は中山の代官なれば、威勢盛に從者あまた隨へ、容易ならざる行粧なるに、田子

方は從者ゟ僅に、其身も見すぼらしけれ共、父公の師匠なれば、子擊行列を止め乘たる車を方付させ、自身車より下りて子方の前へ來り謁す、田子方これを接け待事麁略にして、禮節をなさゞりければ、子擊從者の手前面目なく、田に問て曰、富貴の者が人に驕るべきや、また貧賤者が人に驕るべきやと、子方曰、亦貧賤の者人に驕るべきのみ、諸侯にして人に驕れば其國を失ひ、大夫にして人に驕れば則其家を失ふ、貧賤の者は行合ず言用ひられざれば、去て楚越に之事躧を脫が如くと言へり、子方が此言激に過たりと雖、又其理なきにしもあらず、富る身となれば又富る果ありて、實に貧賤なるものより身の重き處あれば、富に至る程我身を愼み人を敬ひ、人に怨を取らざる樣にせねばならぬものなり、此段に論ずる所の如きは、徒に怨に遠るのみに非ず、人に接るの道を盡して、家業を大にするの資となさん爲なれば、務て人に接るに恭敬讓盡し、溫言怡顏にして汎衆を容るべし、孟子に訑々の聲音顏色、人を千里の外に拒むといへり、訑々とは、吾智慧を足りと自慢して、人の善事をいふを用ざる貌、此心あれば其色貌と聲とに顯れ、遠方賢者其風說を聞て至る者なし、遠方さへしかなれば、近き所はいふ迄もなし、是を人を千里の外に拒といふなり、孔子晋の國へ往きて、其卿趙簡子を見んと欲し、黃河といふ處迄至り給ふに、趙簡子が竇明犢・舜華といふ二人の賢者を殺せしと聞て、路より歸り給ふ、是人を千里の外に拒むの證なり、商人は別て人愛よからざれば人の寄添あし、人のより添あしきは、富を得る道に非ず、其本はといへば、我智慧を足れりとす

るより起り、足りとする本は、我腹小さく我眼狹く、井の中より天を見るが如く、わづかの金を大なる事と思ひ、わづかの智慧を是程の事はなしとおもふ故なり、孔子曰、周公は知能技藝人に超過たる才あれ共、若し其才能を負て人に驕り、心吝にてあらば、只才能のみにて、其餘の事は觀るに足ざる而已、一たび沐するも三たび髮を握り、一たび飯するに三たび哺を吐き、起ちて賢者を接待せられし故、後世までも聖人と稱するなりと仰られき、吝とは心せまく我ほどの者はなしと思ひて、我に勝りたる物を忌妬むをいふなり、夫周公すら猶この如くに仰られき、まして其他の半錢文程の才や富を持ものはいふまでもなき事なり、故に老子曰、良賈は深く藏して虚敷が如く、君子盛なる德あれ共、其容愚なるが如しと、良賈の家は内に金銀代物山の如くに儲へあれ共、店には一物もなく、其表を見ればしもたやの如くに見へ、君子の身に其德の盛なる事、泰山北斗の如くにあれども、其容顏を見れば何も知らぬ愚人の如くに見ゆるとなり、是盛德を懷くと雖、胸懷の大に度量の廣さ、須彌山をも容べく、大海を呑べき故、色に顯れ顏に見へざるなり、斯る人には寄添なつきて、これを愛する人多し、人より添愛して至る者多ければ、徒に家業の繁榮する而已に非ず、賢智ある人を還で魂意になし、其智慧をもかり、其所存をも聞きて、我が知らざる所を廣益の利あり、彼の詭々の聲音顏色ある人は、智慧をかりて我が智慧となす事を好まず、專ら自分の智慧にほこり、我獨り智慧者といはれん事を欲す、然れ共何程我が智慧ありとも、廣大なる天下の事を獨して見盡し、聞

数多の
盗賊忍入
大家の
主人を
縛る

金銀
財宝
うばひ
とる
図

盡しすべきにあらず、且人各々能あり不能あり、聖人と雖も兼てよくする事なし、故に古の賢王は禮を以賢者を招き、其智慧をかりて我智慧とする故、其智の廣く大なる、限り有事なし、昔蜀の諸葛孔明は、さしも智慧者といはれし人なれども、萬づ人の智慧をかりしと見へて、其評定所の定書に、參省は衆思を聚め、忠益を廣むとあり、此意は公の評定所を建る趣意は、人々の思慮する所を集めて、其好者を擇ぶ爲めなれば、各々覆藏なく思ふ所を言上して、公の益となるべき筋を廣むべしとなり、中庸にも孔子の帝舜を譽めたまふ言を述て曰、舜はそれ大なる智者なるかな、我れ獨の智慧を以智慧とせず、人の了見を聞ん事欲して人に問ふ事を好み、好て近く淺き言葉迄も取上て、其理ありやと察し給へば、まして道理深き言葉はいふもさらなり、扨人々の言上する處に惡き事あれば、取上給はざる而已に非ず、是を隱して人にいひ給ふ事なく、其善き言葉を取上てこれを用ひ、人に對して是は誰某がいひしなりと、其言葉の善を稱揚し給ふ、扨又其上げ給ふ所は高きに過ず卑に過ず、程よき所を取りて是を政事に施し給ふ、是舜の大智たる所なりと、愚なる人の意にては、此の如くならば皆人の智慧にして、舜の智慧は一ッもなし、是を大智といふべからずと思ふならん、然れ共舜の心に權衡と度尺と有て、其輕み重みをかけ分け、其長き短きを度り定るに非ずんば、いかでか程よき所を知る事を得ん、是大智たる所以なり、孟子も帝舜の事を擧て、舜の農民たりし時より天子の位に立給ふ迄、皆人の智慧を取り給ふに非ざるものなしと謂り、されば愚人は自

慢を好みて、我れ限の智慧を振ふ故、我が智慧盡て更に智をます所なく、聖人は謙退を好みて、廣く人智慧を取り給ふ故、智慧限有事なし、聖は益聖にして、愚はます〳〵愚なりとは、此違ひあるを以ての故と知るべしとなり

故接レ之以二和顏一、待レ之以二禮敬一、虛心以極二其言一、詢謀以盡二其理一、以レ之就レ事、則陶朱猗頓之富、可二立而致一也

此段は一篇の末を結び、商人の人を接待する道を敎るなり、本文上に論ずる所を承て、それ故萬づの人に出遇ふ時は、其人の賢愚不肖を擇ばず、先づ顏色を和らげ、禮敬の心を盡して、懇にこれをあしらふべし、顏色を和らぐるは目を第一とす、心和らかなれば目色に顯れ、身體胖(ゆたか)に擧動圭角ある事なく、向ふ人より添よく物云ひかけよし、目に角立て言論すれば、向人の氣に當り、萬づの事穩に行れがたし、唐太宗皇帝魏徵に問て曰、群臣の上る奏事を觀れば、其議論する所至極の聽事と思はるれ共、我前にて陳述するに及では、大に劣る事あるに似たり、此理は如何にてあるやと、魏徵對曰、凡人臣の君の前にて言上せんと思ふ事有時は、數日以前より兎やいはん角やいはんと、數十遍思惟して言上に及ぶ事なり、然るに御前へ出るに及で、殿中の粧ひ法式の嚴なるに心怯れ、何事も思ふ樣に言葉まはらず、言出す事もあとや先となり、故內にて相認候奏事とは格別に劣り候なりと申、太宗尤の事なりとて、それより群臣と言議するに、風采を收め顏色和らげ給ひしとなり、

風采とは、目付のきつとして嚴敷を言、聰明の人は精神彩を發て、平生の瞻視にも物すごく見ゆるものなり、故に人のより添を能くせんと欲するものは、其聰明をかくし、眉を揚げ目を張らず、細眼溫語を以人を待す、此の如くせざれば、人思ふ所を遠慮なく陳る事を得ざるなり、凡人の所存を聞き其量見を盡しめんと欲せば、虛心を以て是を聽べし、虛心とは、我が心に所存を立ず、向ふ人の了見を以我が了見となし、其言ふ所の筋を一々尤に承てこれを聞をいふ、此の如せざれば、其いふ所の理を盡して知る事能はず、假令其人のいふ所理に當らぬ事あり共、尤なりと受て其非を咎る事なかれ、これを咎れば其人畏れて再びいふ事なし、是古の賢王の言路を開く仕方なり、かく多くの人に物いはせて、其是非を人に詢謀すれば、自ら公論あるものなり、然してのち是を我が心に參考て、當世の務を得べし、是を本文に虛心もつて其言を盡し、詢謀以て其理を盡すといふなり、然も此の如すると雖も、我腹に權衡度尺ありて、其輕重長短を決定するに非ずんば、いつも小田原評定にて何の役にも立ず、却て船頭多くて船山に登るの譏を受べし、魏曹操袁紹が將の器にあらざるを論じて、我れ紹が人となりを知る、謀多して決少なく、色厲しうて膽うすしと譏りしは是なり、曹操又曰、謀は多からん事を欲し、決するは一ならん事を欲すといふ意は、事を謀るは其仕落のなからん事を要とすれば、人々の思ひ入をも聞き、幾通りにも謀り見るべきなれ共、定用ゆる所は一策に過ざれば、時の機に當る所に決定して、疑念なからん事を欲すとなり、古語にも、疑事はなる事なしといふて、

一同に思ひ極めたる事に非ざれば成就はなし難し、されば多くの人云ふ所の異同あるを集めて、短を捨、長を比、是ぞ今日の闘に當る謀なりと定むるが大將の役にて、尤かたしとする所なり、武田の家の軍評定に、大將の思慮定る時、御簱楯なしを引て照覽に立れば、諸將再び口を開く事を得ざる家法を立たるは、一決して疑慮なからん爲なり、商の家といへども此理に斉しき事あれば、人に謀り事を決するも此心持有べきなり、かく賣買のすじをはかりて、商家の務に就ものならば、古の陶朱公や猗頓の富の如きに至るも、眼前たるべくなり

○此一篇を四段に分ちて解釋す、第一段には、君子小人人を待する異なる所を論じ、人の和順するも、又牟楯するも、皆此道に出て出る所なれば、深く謹べき事を說く、第二段には、接待の商に於る尤肝要の務なる事を述て、今の商の接待の道を知らざるを論じ、良賈の大業をなすは、よく接待の道を得たる故なる事を說く、第三段には、愚商の愚なる所以は、其見る所小なるを以て、無用の有用たるをしらずして、接待の道をゆるがせにす、若よく此道を盡さば、賢智の佐を得て我が智思を廣め、商業を大にするの益ある事を說く、第四段には、一篇の末を結で、これを教るに接待の道を以てし、よく此道を行ふ物ならば、陶朱•猗頓の富も立所にして得べき事を說く、全篇の主意は接待に在り、禮敬を以て人を接待すれば、人心悅で至るもの多し、至るもの多ければ商業繁榮する而已に非ず、賢者を擇で補佐となし、其智見を盡して我が智思を益べし、それ此の如くならば、陶朱•

信繁
原
甘利
内藤
馬場
山形

武田信玄代々相傳の旗楯無鎧をかざり一統集め軍議評定する圖

信玄公

山本

土屋

眞田

小山田

高坂

猗頓の富となる事又難しとすべきにあらず、是接待の道を盡すの効驗なり、曹操の詩に、周公哺握して天下歸心すといふは是也、若夫漢高祖が床に踞し足を洗はしめて、酈食其と英布とに遇し、其これを責め是を怒るに及で、一は起て禮敬盡し、一は帳御飯食を盛にして其心を悦しめ、光武の岸幘して馬援を迎へ、銅馬の賊を遇するに輕騎案行し、劉盆子には盛に軍馬を陣してこれを觀せしめ、吾邦の頼朝が千葉之介遲參を叱て後陣へ下らしめ、太閤秀吉が茶童一人を隨て政宗を山中に伴ふなど、或は簡傲輕慢を以て其膽を挫き、或は赤心を推して其心を服す、是接對の變にして、各其用所を得たるものなり、然も出群の才に非ずんば是をなしがたく、語言、鵠を刻てならず尙鶩に類す、虎を畫てならず却て狗に類すと、各々己が分を量りて輕忽の振舞あるべからず、扨又接待中の事に就て心得べき事有、言語の問答、進退の禮節は、接待の尤肝要とする所なり、敎養篇にいふ所の詩書を習ひ禮樂を講ずる、皆接待に用ひんが爲なり、夫父に事へ君に事へ、妻孥・子弟・家僕を使令し、汎く親疎の人に交、是皆接待の事なり、其人に對して禮をなし敬を致すに、皆其程々ある事なり、是禮の接待に用ゆる所なり、人の情を知らざれば、言を發してよく投ずる事能はず、假令よく其情を知るといへ共、言語の言方により、聞人の納得すると、せざるとあり、人の情を知り、言語の道を知るは詩の敎なり、是詩の接待に用ゆる所なり、今朝廷に行るゝ所の樂は隋唐の舞にして、上古の樂に非ず、且下樣にて取用ゆべき物に非ず、假令是を用ゆるを許さるゝ共、今の世の人情に切なら

ず、孟子も今の樂は猶古の樂の如しといへば、今謠曲散樂の類是に當つべし、冠婚の吉禮・酒宴の遊興、樂に非ざれば樂しまず、是樂の接待に用ゆる所なり、書は古の事を記せしものなり、後世の歴史我邦の野史等に至る迄、皆書の類なり、是を知らざれば、歴代の制度を考へ、今古の事變を知り、世態人情に通じ、風俗の移る所、治亂の由る所を明にする事能はず、古は事に處し義を按るに、是を詩書に考事なり、詩書は義の府といふは是なり、人と交るの際、人に託し人に託せらる事あるに、許す許さぬのさかひ、是義に按へざれば前言を復がたし、是書の接待に用ゆる所なり、書は事に係り、詩禮は身に習ふ、四ッの者皆接待の道に預ると雖も、詩禮の預る所尤多し、言語進退習はずんばあるべからず、禮に容あり、和をよしとす、論語にも禮の用は和を貴とすといへり、又和を知りて和すれ共、禮を以てこれを節にせざれば、又行れずといへり、されば禮と和と程よくあしらうを禮の本意とするなり、いかに禮敬を盡さんとて、切口上にて折目高なるは、人を敬外にするに似て寄添あしく、禮和を失ふなり、茶人の上手の身取まはし宜敷、易らかにしてきめ所のよくきゝたるが如くすべし、言語の道は至てよくしがたきものなり、孔子弟子にも宰我・子貢は辭命を能すといふて、他國へ使に行て、よく口上をのべて主人の心を致し、隣國の好を失はざりしとなり、又子路は物言の麁忽なる男にて、毎度孔子に叱られたり、昔は詩経を學て物言をならひ、禮記を學びて立振舞を習らひしなり、孔子嘗て堂の上に獨立ち給ふ時、孔子の子孔鯉趨りて庭を過ぐ、

孔子の曰、いかに鯉爾禮を學たりや、鯉對て未だ學び候はず、孔子曰、禮を學ざれば以て立事なし、孔鯉退きて禮を學ぶ、他日又獨立給ふ、孔鯉又其庭を過ぐ、孔子曰、爾詩を學びたりや、鯉が曰、未だ學び候はず、孔子曰、詩を學ざれば以ていふ事なし、鯉退きて詩を學ぶ、かの詩經は今の閭里の謠歌の如く、人情に本づき物の理を談ぬ、其詩を聞て其處の風俗の盛衰を驗み、政治の得失を見るべし、其言たるや溫厚にして和平に、風諭に長ぜり、故にこれを誦すれば、政に達しよくいふ、禮は天理の節文にして人事の儀則、これを習へば品節詳明にして德性堅定す、故に孔子以ていふ事なし、以て立事なしと宣へり、禮法の事は前篇にいふ如く、我國には自ら我國の禮法、及び當時行るゝところの閭里の俗禮あれば、しばらく是に順ふがよし、言語は物數少なく、道理やすらかに通じて、耳に立ず氣に障らず、聞人のよく納得する樣にいふがよし、然もよく世態人情に通ずるに非ざれば、程よくあしらひて人の歡心を得る事かたし、凡人に對て言談する、其顏色を見て其言語を聞き、其意趣を知りてこれを投ずるに非ざれば、我が言んと欲する所を通ずる事能はず、孔子も顏色を見ずしていふ、これを盲といふと曰り、其言語と顏色擧動を照らし合せて是を察すれば、意志の向ふ所は大抵知るべし、其視聽外に馳るものは、心我に在らざるなり、其言語平易成者は、其心も又平易なり、大學所謂、忿懥・恐懼・憂患・好樂、其正心を權動して言顏に顯はるゝ、孟子の四辭も皆心其正を失て、言語平易ならざるものなり、四辭は所謂詖辭・淫辭・邪辭・遁辭なり、彼辭は、偏陂

なりといふて、水を一方へかたよせ、陂障を築き他へ漏さゞるが如く、かたくなにかたまりて通達せざるをいふ、此辭を出す人は、其心の蔽るゝ所有事を知るとなり、是はかの井の中より天を視、板を擔て一方のみを視る如き人のいふ辭なり、淫辭の淫は放蕩なりと、放は飼鳥を取逃したる如きをいひ、蕩は水波のなむ/\と動きて定る事無きをいふ、かの何の取とめたる事もなく、ぐれ/\として定りたる事なき辭なり、此辭をいだす人は、心沈溺所あるものなり、故に此言葉を聞ては、其心の陷る處ある事を知るとなり、是はかの情人眼中に西施を出すといふ如く、心沈溺所有時は、其見とめたる事正しきを得ず、言語も又淫蕩なるなり、邪辭の邪は邪僻なりとて、不正のかたよりたるなり、此辭を出す人は、心正敷筋を叛れ去りたる所より出る辭なれば、此の辭を聞ては、其心の正理を離れたる所を知るとなり、是は彼邪人は正人を指して邪とすといふ如く、邪人仲間の見る所よりいふ言葉なり、遁は逃避なりとて、逃吠して人を寄せ付ぬ事なり、此辭を出す人は、道理にいひつめられ、困屈な猶まけをしみ、強て向の道理に服する事なく遁ぼへして、向ふの人を寄せ附ぬ辭なり、故此辭を聞ては其人の窮する所を知るとなり、是はかの世にいふ渡り者のなけぶしなるもの、此の類に宛つべし、此四ッの辭は相因て起る、則心の失なり、蓋人の言葉は皆心より起る、心正理に明にして蔽るゝ所なければ、其言通達にして病なし、苟にも然らざれば則必この四ッの病あり、其言の病を聞て其心の失を知となり、此語とかの其言を聽て其眸子を視れば、人實に廋やといふ

語を合せ考て、向ふの人の心を知るの法とすべし、若し寸分違ざる事を得んと欲せば、これを熟練するにあり、此數事を擧て言及ものは、接待の道は人の顏色・言語・立振舞を視て其人の意を知り、及我が言所行ふ所麁忽なる事なく、其時々の宜きに當る事を得て、進退和を失ざるをよしとすれば、此數事に、固く今の世にいひ習ふべき言葉身に行ふべく禮節を考へしめんが爲に是を出すものなり、本文に學術の事をいへ共、漢土の書は容易に讀べきにあらず、讀事能ざるものは、假名本にても讀べし、是も六つかしがる人は人に讀せて聽き、その道理を悟るべし、只無用の酒宴・遊興・青樓の冶遊をなさんよりは、漢土の文字にても讀み覺ゆべし、都て創業の人は大斧の大木きり仆し、大割をなす利用ありて、小割をするの利用なきが如く、書を讀み禮節を習など、綿密の功をつむ事あたはざるものなり、漢の高祖は匹夫より起りて天下を取し程の人なり、人となり寛仁大度にして、人を慢り美女を愛す、尤書を讀事をきらひ、儒者を見れば其冠を取て其中へ溺せし程のきらひなり、されども張良・蕭何・酈食其・陳平・張蒼・陸賈・叔孫通等を用ひて、其諫に從事流るゝが如く、此數人は或は儒者・黄老・文法の吏等にて、文筆を事とせしものなり、又晉の石勒は書を知らず、常に書を好み、人をして漢書を讀しむ、漢楚合戰の時に酈食其が六國の後を立んといふ所に至りて、石勒驚て曰、此の如くならは天下は得べからざるに、如何して是を得たるやと不審がりぬ、次に張良が諫によりて此事の休たる段に至りて、幸にこれあるかと言ひしとかや、かく一文不通にても、其書に載

る所を聽て其理に通ずるのさときは、其人の聰明にして事を歷事多き故なり、かの書物ぎらいの人も此の石勒のしわざに習ひ、人に書をよませて聽ものならば、大に利益を得べき事なり、此接待篇は前の教養使令の二篇と互に通ずる所あれば、見人幷せ考て其意を了解べし

商道九篇國字解三之卷終

商道九篇國字解四之卷

繼業第七

繼業とは、子孫の爲に繼ぐべき基業を建るをいふ、商術知務篇にて、格物致知の工夫をなし、習學篇にて、正心脩身の功をつみ、使令・敎養の二篇にて、家僕を使令し、子弟を敎養するの道を得、接待篇にて、人の歡心を得て、賢佐の謀畫を盡し、これを以て事に就ば亘萬の富を得て、商家草創の功成たる事を得べし、創業已に成事を得ば、又子孫の爲に繼べき基業を建ずんば有べからず、故に接待に次で此篇を置き、前世繼業の短脩を論じ、人に己が德を量り力を度りて、繼業を建るの法を擇ぶべき事を示すなり

夫枝葉之繁茂、則本根之固也、流派之不レ竭、則淵源之深也、世業之永傳、則祖創之善也、昔殷周之興、以レ德建レ基、秦據二崤函一而角レ力、漢據二成皐一而鬪レ智、奕世之長短、有レ所二由來一、孟子曰、君子創レ業垂レ統、爲レ可レ繼、善之謂也、古之聖人、後二智力一先二德行一者、皆爲レ之而已、及二世降道衰一、專任二智力一、欲二功業速成一、秦漢以來、幷二天下一者、未下嘗有中以レ德者上也

此段は本末相因、源流相隨ふの譬を引き、古より垂統の歴年長短あるは、祖先の建る所に深淺大小

の異あるゆゑなる事を論ず、本文のこゝろ、彼大木の植立するを見れば、亭々數十丈、枝葉里許を覆ひ、遠く是を望ば、欝葱として山の如く、然れ共烈風にも傷られず、暴雨にも壊たれず、依然として繁茂するものは何ぞや、蓋梢末數十丈なれば、本幹もまた數十圍、枝葉里許を覆ば、盤根もまた是に倍す、傷折の愁なくして、千歳の壽を保つゆへなり、惣じて本あるものは皆此の如し、孟子の曰、原泉混々として晝夜を舍ず、科に盈て進む、いやしくも本なきことをなさば、七八日の間に雨の集るが如く、溝澮皆盈て其勢禦べからざるに似たるも、其涸る事立處にして待べしと、王者ハ洪業を世々に傳へて、子孫永く天下を保も、また此理に齊しく、祖先の創る所、善盡し美盡して、後に餘澤遠く子孫に及ぶべし、昔殷湯王の興る、其祖先契といふ人、唐虞の世に仕へて功有、商に封ぜらる、十三代を歴て湯王にいたり、幣を以て伊尹を招き、德澤禽獸に及で天下服す、夏の桀王の無道を悪み、民を弔ひ罪を伐ち、天下得ることを期せざれ共、天下是を尊で天子となす、故に湯王の子孫相傳て、天子となるもの三十一世、六百二十九年を歴て天下を失ふ、周は后稷樹を種る事を好で、民に稼穡ををしへ、陶唐。虞夏の際に仕て農師となり、邰に封ぜらる、五代孫慶節立て豳に國す、十四代を經て古公亶父に至り、獯鬻これを攻む、豳をさり漆沮を渡り、梁山を踰へ岐山の下に邑し居る、豳人曰、人なり失ふべからずと、老を扶け幼を携へて從ふ、他の旁國皆是に歸す、亶父の孫文王、西伯となりて德を修む、虞芮の訟止みてより、北方の諸侯西伯に歸するもの四十五、皆以

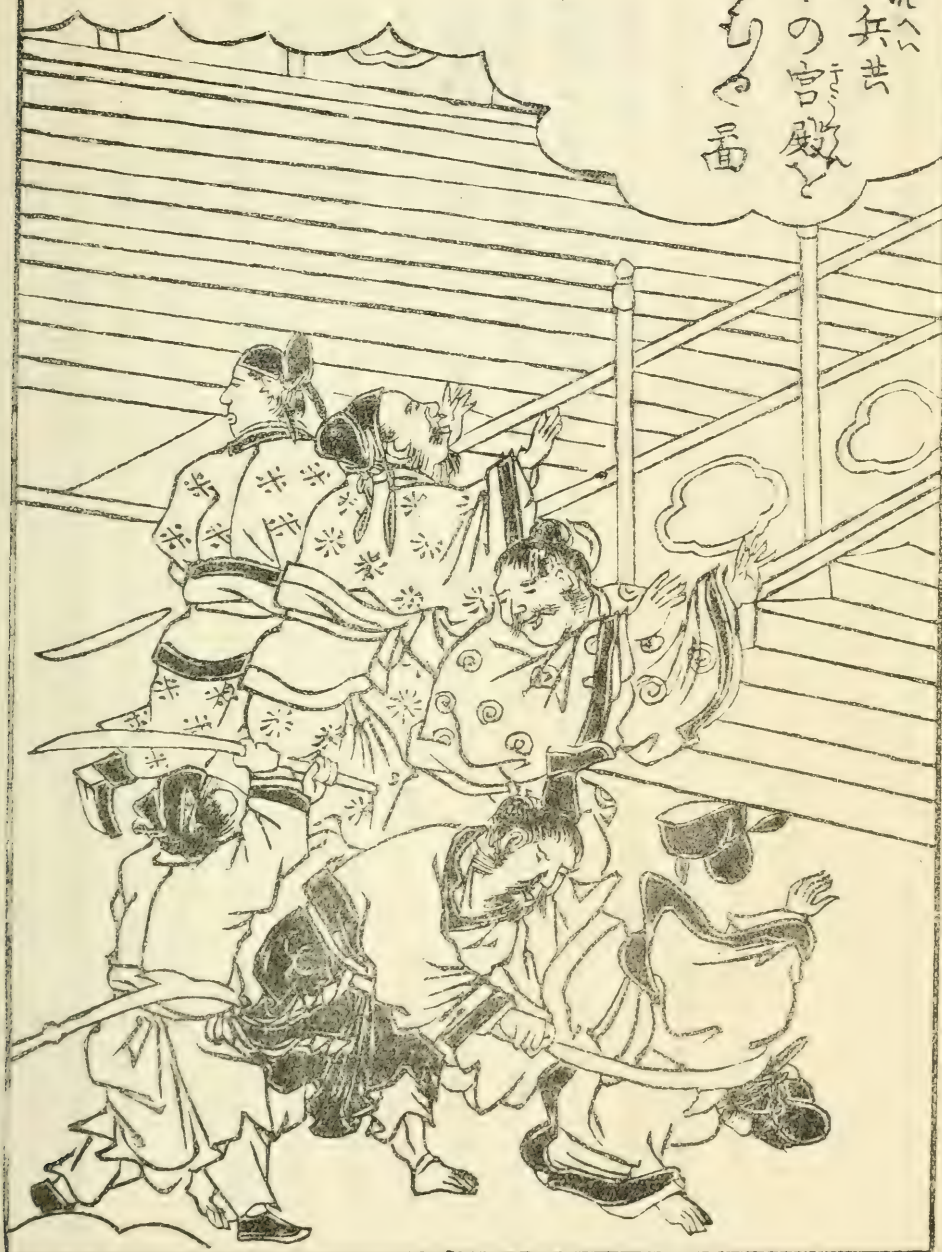
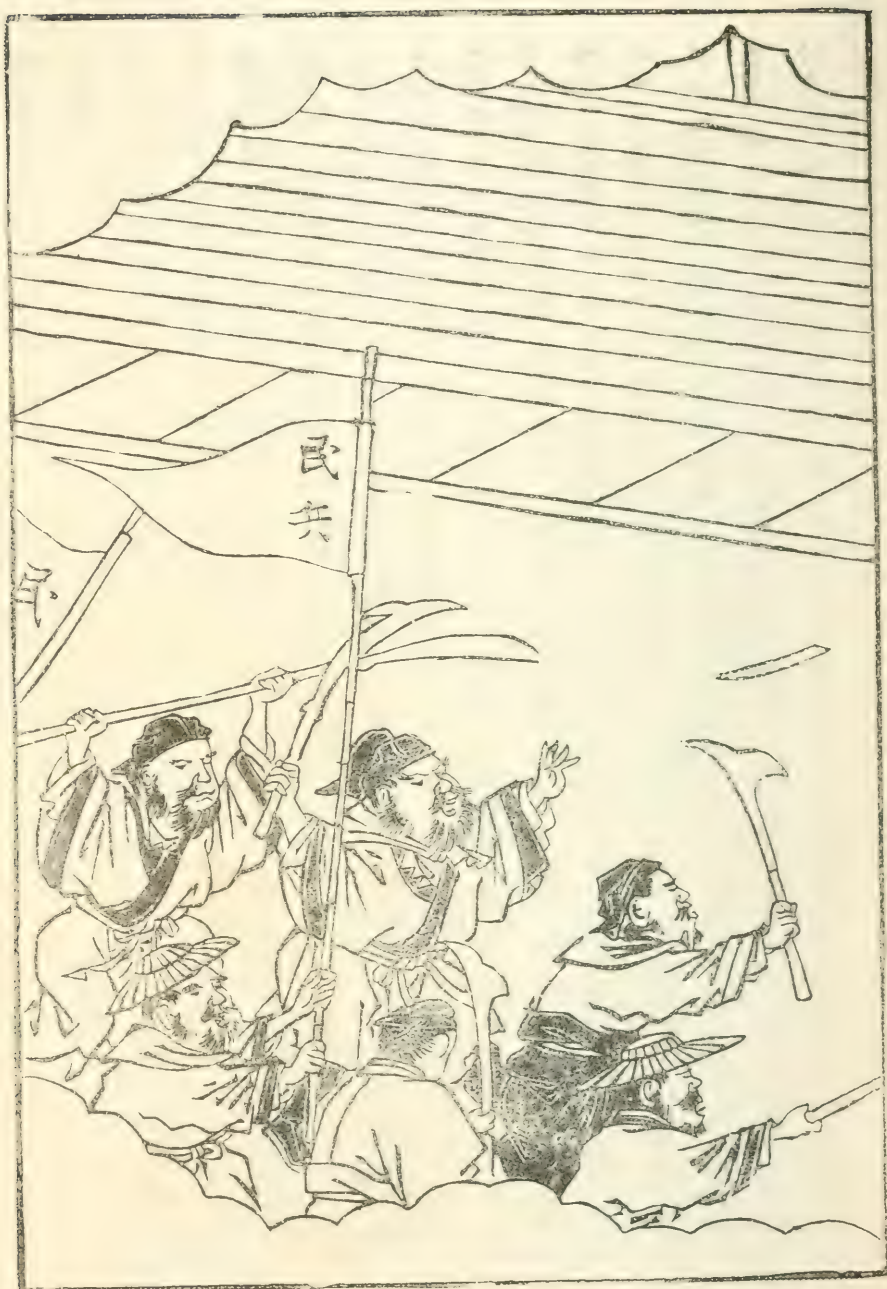
て受命の君とし、天下を三分にして其二を有ち、太公望呂尙を得て師とし事ふ、文王の子武王に至り、殷紂王の無道を伐て天下を得、世を傳ふる事三十七代、八百六十七年を歷て天下を失ふ、秦は祖先柏翳舜翳臣下となりて、嬴氏の姓を賜ひしより、蜚廉といふものあり、蜚廉が後非子馬を好み、周の孝王の馬官となりて、隴州の汧水・渭水の間に馬を主どる、馬大に蕃息す、此功により土を分ちて附庸と成、秦に邑す、非子より十代を歷て秦仲にいたりて、はじめて大なり、夫より莊公を歷て襄公にいたり、犬戎周の幽王を殺す、襄公周を救て功有、封ぜられて諸侯となり、岐西の地を賜ふ、則是西周の畿內八百里の地なり、其後八代を歷て穆公にいたり、百里奚・蹇叔・由余等西戎に霸たり、其後十六代を歷て孝公にいたりて、黃河・華山以東の强國六ッ、小國十餘、皆夷狄を以て秦を擯せしめて、諸侯の會盟に與（あづかること）ならず、孝公令を下していふ、賓客群臣能く奇謀を出して、秦の國を强する者あらば、我其官を尊くし、これに與ふるに分土をもつてせんと、時に衞の國に公孫鞅といふもの有、魏の國にいたりて惠王に仕ふ、惠王用ゆる事能はず、秦にいり嬖人景監に因て孝公に見へ、說くに帝道王道を以てし、三變して霸道となして、後强國の術におよぶ、公大に悅んで、心を決して法を變ぜんと欲す、されども又天下の己を議せん事を恐る、鞅が曰、民は與に始を慮るべからず、與になるを樂むべしと、卒に令を定め、民をして什伍をなし、相收司て連座せしむ、姦を告ざるものは腰斬にす、姦を告る者は、敵を斬と賞を同じうす、姦を匿すものは、敵に降るものと罰を

同じうす、軍功あるものは、各立千を以て爵を受く、私闘をなす者は、各輕重を以て刑を被る、大小力を戮せて畊織を本業とす、粟布を致すこと多きものは其身を復す、末利を事とし、及怠りて貧きものは、牽て以て收孥とす、令已に具て未だ布せず、三丈の木を國都の市の南門に立、民を募てよく北の門へ徙すものあらば十金を與へんと、民これを怪てあへて徙ものなし、復曰、能く徙者あらば五十金を與へんと、一人ありこれを徙す、輙五十金を與ふの令を下す、太子法を犯す、鞅が曰、法の行はれざるは、上よりこれを犯せばなり、君の嗣は刑を施すべからず、其傅公子虔を刑し、其師公孫賈を黥す、秦人皆令に趨く、これを行ふこと十年、民道に遺たるを拾はず、山に盜賊なし、家々給人々足り、民公の戰に勇にして、私の闘に拙し、郷邑大に治る、初め令の便ならずといふもの、來りて令の便なるをいふ、鞅が曰、皆法を亂るの民なりと、盡くこれを邊に遷す、民敢て法を議するものなし、民に令して父子兄弟同室の内に息まるものを禁ず、井田を廢し阡陌を開きて、更に賦稅の法を爲る、是に於て秦人富强なり、鞅を商芠の十五邑に封じ、號して商君といふ、孝公薨じて惠文王立、公子虔の徒鞅が反せんと欲すと告ぐ、鞅出亡て客舍に止まらんと欲す、店の家人の言ふ、商君の法に人の驗なきものを舍せばこれを座せんと、鞅歎曰、法をなすの弊一に此に至るやと、去りて魏にゆく、魏これをうけず、これを秦に內る、秦人車裂にして以て殉ふ、鞅法を用ゆること酷なり、步六尺に過る者は罰あり、灰を道に棄るものは刑を被る、嘗て渭に臨で營を論ず、渭

水盡く赤し、惠文王より武王を歷て昭王に至り、范雎が遠交近攻の謀を用ひて諸侯を蠶食す、昭王より、孝文王莊襄王の二代を歷て始皇帝にいたる、始皇立て十七年に內史韓を滅し、十九年に王翦趙を滅し、二十三年王賁魏を滅し、二十四年王翦楚を滅し、二十五年王賁燕を滅す、二十六年王賁齊を滅す、十七年より二十六年迄のあいだに六國を滅し、初めて天下を幷せり、先王封建の制を改め、天下を分ちて三十六郡となし、守尉監を置て土を守り民を治む、三十二年に蒙恬を遣し兵三十萬人を發し、北の方匈奴を伐て長城を築く、臨洮より起りて遼東に至る、延袤萬餘里、三十四年に丞相李斯上書して曰、異時諸侯幷び爭ひ、厚く遊學を招く、今天下已に定り、法令一ッに出づ、百姓家にありては農工を務め、士は法令を學習す、今諸生今を師とせず、古を學びて以て當世を非る、黔首を惑亂す、令の下る事を聞ては、各々其學を以て是を議り、入ては心に非り、出ては巷に議す、群下を率て以て謗を造す、臣請史官の秦の記に非よりは皆これを燒ん、詩書を偶語するものあらば、市に棄ん、古を以て今を非るものをば族せん、すてざる所の者は醫藥・卜筮・種樹の書、若法令を學んと欲するものあらば、吏をもつて師とせん、制して曰、可なりと、三十七年に始皇沙丘の平臺に崩ず、秘して喪を發せず、咸陽にいたりて始て喪を發す、小子胡亥立、これを二世皇帝とす、二世胡亥趙高にいつて曰、われ耳目の好むところを悉し、心志の樂む所を窮め、以て我が年を終んとす、高曰、陛下法を嚴し刑を刻にし、盡く故臣を除きて、更て親信所を置ば、則枕を高う

して志を肆にせん、二世これを然りとし、更て法律を爲る、谿刻深なるを務とせり、公子大臣多く僇死せらる、陽城の陳勝・吳廣蘄に起る、諸郡縣秦法をくるしむ、爭て長吏を殺して以て勝に應ず、沛人劉邦沛より起る、項梁兄の子籍と吳中の兵を擧、齊人田儋自立して齊王となる、趙の韓廣燕の地を略し、自立して燕王と成る、楚の將周市魏の公子咎を迎へて魏王となす、二世三年趙高二世を望夷宮に弑し、公子嬰を立て秦王となす、嬰已に立て趙高を族殺す、子嬰立て四十餘日にして沛公關に入、秦滅ぶ、始皇二十六年に天下を幷せてより、二世三世而亡ぶ、帝と稱するもの止十有五年なり、前漢の賈誼の秦を過りとする論に、秦の孝公殽函の固に據り、雍州の地を擁し、君臣固く守りて以て周室を窺ふ、天下を席卷て、四海を囊括の意有、是時に當りて商君これを佐く、內には法度を立て、耕織を務め、守戰の具を脩め、外には衡を連ねて諸侯を鬪しむ、是に於て秦人手を拱て西河の外を取る、孝公既に沒して、惠・文・武・昭・襄故業を守り、遺策により南の方漢中をとり、西巴蜀を擧げ、東の方膏腴の地を割き、北の方要害の郡を收む、諸侯恐れ懼れ、會盟して秦を弱めん事を謀る、嘗て什倍の地、百萬の衆を以て關を仰て秦を攻め、秦人關を開て敵を延く、九國の師逍れ逃れて敢て進まず、秦は亡失遺鏃の費なくして、天下の諸侯已に困めり、是に於て從散じ約解け、爭て地を割て秦に隨ふ、秦餘力ありて其弊を制す、利に因り便に乘じて天下を宰制し、河山を分裂す、始皇にいたるに及で、六世の餘烈を奮ひ、長策を振ふて宇內を御し、二周を呑で諸

民兵共
秦の宮殿と
せむる圖

民兵
民

侯を亡し、至尊を履て六合を制す、敲朴を以天下を鞭笞す、威四海に振ふ、始皇已に沒して餘威殊俗に震ふ、然るに陳渉は甕牖縄樞の子甿隷の人にして、遷徙の徒なり、材能は中庸に及ず、仲尼・墨翟の賢・陶朱・猗頓の富有に非ず、疲散の卒を率ゐ、數百の衆を將て、轉じて秦を攻む、木を斬て兵となし、竿を揚て旗となす、天下雲の會がごとく、響の應ずるが如く、山東豪傑遂に並び起て秦の族を亡す、試みに山東の國をして、陳渉と長を度り大を絜べ、權を比し力を量しめば、年を同うして語るべからず、然れども秦は區々の地を以て萬乘の權を致し、八州を招き同列を朝せしめ、百有余年にして、然後に六合を以て家とし、崤函を宮とし、一夫難を作して七廟墮たれ、身人の手に死し、天下に笑はるゝは何ぞや、仁義施さず、攻守の勢異なればなりといへり、漢高祖は劉氏、名は邦、字は季、沛の豐邑中陽里の人なり、寛仁にして人を愛す、意豁如たり、大度ありて家人の生業を事とせず、年壯に及で泗上亭長となる、陳渉の起る時劉季も又起る、楚に歸して沛公となる、楚懷王沛公をして秦をやぶらしむ、關に入て秦王子嬰を降し、既に秦を定む、還て霸上に軍し、悉く諸縣の父老豪傑を召て謂て曰、父老秦の苛法を苦む事久し、吾諸侯と約す、先關中に入らん者は王たらんと、我應に關中に王たるべし、父老と法を三章に約せんのみ、人を殺すものは死なん、人を傷り及盗は罪に抵らん、餘はことごとく秦の苛法を除き去ん、秦の民大に喜ぶ、項羽天下を分ち諸將を王とし、羽自立して西楚の霸王となるの日、巴蜀も又關中の地なりと、沛公を立て漢王となす、巴

蜀漢中にわたり、關中を三分にして秦の降將三人を王とし、以て漢の路を距み塞ぐ、漢王怒て羽を攻んとす、蕭何諫て曰、願は大王漢中に王として其民をやしなひ、以て賢人を致し巴蜀を收め用ひて、三秦を還り定めば、天下を圖つべし、王の國に就に及びて、何を以て丞相とす、初め淮陰の韓信數々蕭何に語、何これを奇としこれを漢王に進む、漢王拜して大將となし、遂に信が計を用ひて諸將を部署し、蕭何を留め巴蜀の租を收めて、軍の糧食を給しめ、兵を引て故道より出て、雍王章邯を襲ふ、邯敗死す、塞王司馬欣、翟王董翳皆降る、漢二年項籍義帝を江中に弑す、陽武の陳平魏無知に因て漢王に見ゆ、拜して都尉參乘典護軍となす、周勃王に言て曰、臣聞平家に居て其嫂を盜めり、魏に事へて容られず、亡て楚に歸す、又容られず、亡て漢に歸す、今大王護軍たらしむれば諸將の金を受、願くは王是を察せよ、王魏無智を責む、無智臣言ふ處は能なり、大王の問所は行なり、今尾生・孝已の行あり共、成敗の數に益なし、大王何の暇ありてこれを用ひんやと、漢王平を護軍中尉に拜し、盡く諸將を護せしむ、諸將復いはず、漢王洛陽にいたる、新城の上老董公遮說て曰、德にしたがふものは昌へ、德に逆ふ者は亡、師出る時名なきは、事速にならず、其賊たるを明にせば、敵の心服すべし、項羽無道して其主を放殺す、天下の賊なり、夫仁は勇を以てせず、義は力を以てせず、大王宜しく三軍の衆を率て、これが爲に素服して、以て諸侯に告てこれを伐つべしと、是に於て漢王義帝の爲に喪を發し、諸侯に告て曰、天下共に義帝を立、今項羽これを弑す、寡

人悉く關中の兵を發し、三河の士を收め、南の方江漢に浮で下り、願くは諸侯王に從て、楚の義帝を弑せしものを擊んと、漢の元年漢王五諸侯の兵五六十萬を率て楚を伐、項羽方に齊を擊つ、これを聞て自ら精兵三萬を以て還て漢を擊つ、大に漢の軍を睢水の上に破る、死者二十萬人、水これが爲に流れず、漢王を圍む事三匝、大風西北より起るに會て、木を折り屋を發く、砂石を揚て晝くらし、王數十騎と遁る事を得たり、漢王滎陽に至りて諸の敗軍皆會す、蕭何また關中の老弱を發し、悉く滎陽に詣しむ、漢軍復大に振ふ、蕭何關中を守り、宗廟・社稷・縣邑を立て、事の便宜なるを施し行ふ、關中の戸口を計り、轉漕(こめをはこび)て兵を調ふ、未嘗て乏絶(とぼしく)ならず、魏王豹叛す、漢王韓信をしてこれを伐しむ、信既に魏を定め、兵三萬人を請ひ、願くば北燕趙を擧げ、東齊を擊ち、南楚の糧道を絶ち、西して大王と滎陽に會せんと、王張耳を遣り與に俱にせしむ、漢軍大に趙を破りて陳餘を斬、趙歇を擒にす、韓信李左軍が策を用ひ、辯士を遣り書を燕に奉ぜしむ、燕風に從て靡く、隨何九江王黥布に說き、楚に叛て漢に歸せしむ、既に至り、漢王方に床に踞し足を洗ひ、布を召て入見す、布悔怒て自殺せんとす、出て舍に就に及で、帳御・食飲・從官皆漢王の居の如し、又大に喜で望に過たりとす、酈食其漢王に說く、六國の後を立よと、王の曰、趣(すみやか)に印を刻せと、張良來謁す、王方に食す、具に良に告ぐ、良曰、請前箸を借りて大王のために籌せん、遂に八難を發す、其一に曰、昔湯武の桀紂を伐て其後を封ずるものは、能其死命を制することを度りてなり、今陛下能く項籍が死

命を制するや、其七に曰、天下の遊士親戚を離れ墳墓を棄て、大王に隨ふて遊る者は、徒に尺寸の地を欲望するなり、いま復六國の後を立ば、遊士各歸りて其主に事ん、大王誰と與にか天下を取んや、且楚は惟より彊ものなし、六國また撓て是從ば、大王焉得てこれを臣とせんや、誠に客の謀を用ひば大事は去ん、漢王食を輟め哺罵て曰、豎儒幾ど乃公の事を敗り、趣に印を銷さしむ、漢王陳平に謂て曰、天下紛々たり、何れの時か定乎、平が曰、項王が骨鯁の臣亞父輩數人、反間を行て其心を疑しめば、楚を破らん事必せり、漢王平に黃金四萬斤をあたへ、其出入を問ず、平多く反間を縱つ、羽大に亞父をうたがふ、骸骨を請て歸る、疽背に發して死す、楚漢王を圍事益急なり、紀信曰、事急なり、請楚を誑さん、乃漢王の車に乘りて東門より出づ、曰、食盡て漢王出降すと、楚人皆城東に之て觀る、漢王西門より去る事を得たり、項羽紀信を燒殺す、酈食其漢王に說て滎陽を收め、敖倉の粟により成皐の險を塞んと、漢王是に隨ふ、酈食其漢王の爲に齊王に說く、これを韓信襲て齊を破る、齊王食其を煎殺以て走る、韓信已に楚の救龍且を破て、假の王となりて齊を鎭めんと請ふ、漢王大に怒て是を罵る、張良・陳平足を躡み耳に付て語る、漢王悟る、復罵て曰、丈夫諸侯を定めば即眞王たらんのみ、何ぞ假を以てせん、信を立て齊王とす、漢黥布を立淮南王とす、項王助け少く食盡く、韓信また兵を進てこれを擊つ、羽漢と約し天下を中分にして、鴻溝以西を漢となし、以東を楚となす、大公呂后を歸し、解て東に歸る、漢王も亦西に歸らんとす、張良・陳平曰、漢天下の大半を有つ、楚

兵饑疲る、今釋して擊ずんば、此虎を養ふて自ら患を遺すなり、漢王是に隨ふ、五年漢王羽を追ふて固凌にいたる、韓信・彭越期にいたらず、張良漢王に勸む、楚地梁地をわりて兩人に許せ、王これに隨ふ、皆兵を引て來る、黥布亦會す、羽垓下にいたる、兵少く食盡く、信等これに乘ず、羽敗れて壁に入、これを圍事數重、羽夜八百餘騎を從へて、圍を潰りて南出す、淮を渡りて道を失ひ、大澤の中へ陷る、漢の追兵これにおよぶ、東城に至り乃二十八騎有、羽其騎に謂曰、我兵を起してより八年、七十餘戰す、未嘗敗せず、今卒に此に困む、これ天我を亡すなり、戰の罪にあらず、今日固く死を決し、願くは諸君の爲に決戰し、必圍を潰し將を斬り、諸君をして知らしめんと、皆其言の如し、是に於て東し烏江を渡らんとす、亭の長船を艤ふて待て曰、江東小なりと雖、亦以て王たるに足る、願くは急に渡れ、羽曰、籍江東の子弟八千人と江を渡て西す、今一人還る事なし、縱ひ江東の父兄憐て我を主とすとも、我何の面目ありて復みん、獨心に愧づといつて乃刎死す、楚地悉く定る、王還て齊王信の壁に入て其軍を奪ひ、信を立て楚王とす、彭越を梁王となし、漢王皇帝のくらゐに即く、帝洛陽の南宮に置酒す、上曰、徹侯諸將皆言へ、我が天下を得る所以の者は何ぞや、項氏の天下を失ふ所以の者は何ぞや、高起王凌對て曰、陛下は人をして城を攻め地を掠せしめ、因てこれを與ふ、天下と其利を同じうす、項羽は然らず、功有者をばこれを害す、賢者をばこれを嫌ふ、戰て勝とも人に功を與へず、地を得ても人に利を與へずと、上の曰、公其一を知りて、いまだ其二を知

らず、夫籌を帷幄の中にめぐらし、勝を千里の外に決するは、我子房に如ず、國家を治め百姓を撫し、餽餉を給て粮道を絶ざるは、我れ蕭何に如ず、百萬の衆を連ね、戰ばかならず勝、攻ればかならず取は、韓信に如ず、此三人は皆人傑なり、我れ能これを用ゆ、此我天下を取所以なり、項羽は一の范增あれども用ゆる事能はず、此我が爲に禽にせらるゝ所以なりと、群臣悦服す、齊人婁敬上に說、洛陽は天下の中にして、德あれば興り易く、德なければ亡び易し、秦の地は山を被り河を帶び、四塞以て固とす、陛下秦の故を案せば、此天下の亢を搤て其脊を拊つなり、上張良に問、良曰、洛陽は四面に敵を受て、武を用ゆるの地にあらず、關中は殽函を左にし、隴蜀を右にす、三面を阻して守、敬が語是なりと、即日に西して關中に都す、六年楚王韓信反すと告て、上陳平が計を用ひて雲夢に遊び、諸侯を陳に會し、因てこれを擒にす、赦して淮陰侯とす、上嘗て信に諸將の能否を問、上の曰、我が如きは幾何に將たらん、信が曰、陛下は十萬に將たるに過ず、上の曰、君に於ては何如、曰、臣は多々益辨ず、上笑て曰、多々益辨ぜば、何を以てか我が爲に擒にせらる、曰、陛下は兵に將たる事能はず、しかも善く將に將たり、此信が陛下の爲に擒にせらるゝ所以なり、且陛下は天授なりと、群臣酒を吞て功をあらそふ、醉て或は妄呼し、劍を拔て柱を撃つ、叔孫通上に說て曰、儒者は與に進で取がたし、與に成を守るべし、願くは魯の諸生を徵て、共に朝儀を興さん、上これに隨ふ、通徵す所及上の左右弟子百餘人と、綿蕝を野外に作りてこれを習はす、七年長樂宮成る、

項羽二十八騎ニテ漢の大軍を破ル圖
楚軍

諸侯群臣皆朝賀す、謁者禮を治し、諸侯王以下を引て奉賀す、上の曰、乃今日皇帝の貴たる事を知ると、十年に呂后韓信を給てこれを斬る、十一年梁王彭越を誅す、淮南王黥布反す、帝自ら將としこれを擊つ、十二年帝布を破て還る、上の布を擊つ時流矢に中らる、疾甚し、呂后問、陛下百歲の後蕭相國死せば、誰かこれに代べきものぞ、曰、曹參、其次を問、曰、王陵、然も少しく戇なり、陳平以て助くべし、平智餘りあれ共、しかも獨任じ難し、周勃重厚にして文少し、大尉となすべし、劉氏を安ぜんものは必勃ならん、此後は亦汝が知所に非ずと、上崩ず、漢王たるもの四年、帝たるもの凡十二年、其後惠・文・景・武・昭・宣の六代を歷て元帝に至て、漢業始て衰ふ、孝成帝政を外家に委し、孝哀不明にして嬖幸朝に盈ち、孝平幼冲を以て位を繼ぎ、王莽これに因て遂に漢祚を移す、光武中興して漢業ふたゝび盛に、明帝殤安質の五帝を歷て桓靈にいたり、姦回を保養し、忠良を殄滅す、多士の憤を積み、四海の怨を畜ふ、是に於て何進戎を召し、董卓釁に乘じ袁紹の徒從て難を構へ、遂に乘輿を播越し宮廟荒となり、大命殞絕す、高祖五年に帝と稱せしより、是に至て二十四世、四百二十六年にして漢滅ぶ、上に說所は殷・周・秦・漢の興亡所以なり、其年を歷るの遠近あるは、德を積と智力を角するの違ひ有を以てなり、孟子曰、君子業を創め統を垂れ、繼べき事をなす、善の謂なりといふ意は、子孫に教へ相繼で行ふべきものは、善道より外になし、如何となれば、智を以てするものは、詐僞なきこと能はず、力を以てするものは、暴行なきこと能はず、詐僞暴行は常訓

となすべからず、古の聖人專ら德行を重んじ、智力の事を黜くものは、厥臨謀をせんがためなり、然るに世降り道衰ふるに及て、專ら智力に任せて、功業の速に成ん事を欲す、秦漢已來いまだ嘗て德行を以て天下を得るもの非ず、故に其世を傳ふる多きものは三四百年、少きものは百年に過ること能はず、此根本固からず、淵源ふかからざるゆへなりとぞ

夫得二暴功一無レ若レ力、權二時機一無レ若レ智、傳二久遠一無レ若レ德、德也者可二以繼一、智力者不レ可二以繼一、守攻勢異也、夫以二力之大者一、與二德之大者一戰、則力如レ克、遂不レ能レ克、以二德之小者一、與二力之小者一戰、則德不レ能レ克、以二智之深者一、與二力之大者一戰、則智先敗後克、夫德者柔也、力者剛也、柔者人之所レ助、剛者人之所レ攻、故智者假レ德得レ助、假レ力成レ功、雜二王霸一爲レ政、非レ不レ知二善之不一レ盡、時勢之不レ得レ已也

此段上文を承て、德と智力の優劣を論じ、後世專ら智力に任ずる所以を說くなり、本文夫暴功を得るは力になしといふは、智力は聖人の黜くる所なりと雖ども、一時に崛起て暴に功業を建る事を爲は、力にしくはしくはなしとぞ、項羽が上將軍宋義を斬り、其兵を領して黃河を渡り、釜を破り船を沈めて必死を示し、秦の章邯と一日の間九たび戰ふて、大に秦の軍を鉅鹿城の下に破り、諸侯の兵四十萬を幷せ秦の國に入り、秦の降王子嬰を殺し、始皇の塚を發き、阿房宮を燒き、三年にして天下を得、自立して霸王と稱するもの是なり、されば其虎頭に乘り得て、虎の尾を收る事を知らず、僅に五

年を歴て滅亡にいたるは、專ら己が力を用ひて、人の力に任ずること能はざる故也、是を以て一時基功を建るといへ共、力を施す事弘からず、韓彭・黥布輩に縮られて遂に力屈するに至る、故にこれを能く力に任ずるものといふべからざれ共、古今力を以て興の暴なる羽が如きものはあらず、また聖人に黜けらるゝといへ共、又稱せらるものあり、孔子は常に仁智並べ稱す、曰、仁者は仁を安んじ、智者は仁を利す、又曰、智者は水を樂む、仁者は山を樂しむ是也、孟子曰、智に惡む所は其鑿するが爲なり、如し智者禹の水をやる若くならば、則智に惡む事なし、禹の水をやるは事なき所にやるなり、もし智者其事なき所に行らば、則智も又大なりと、朱注、天下の理本利順なり、小智の人務如く穿鑿をなす、是を失する所以なり、禹の水を行るは、其自然の勢ひに因りてこれを導くなりと見つべし、智の大なるものは聖賢も是を稱す、智大なるものとは、無理をせぬ智なり、また小智と雖も、よく時に當れば用をなす、是又用ひざる事能はざるもの有り、かの高祖の臣張良・陳平並べ稱すといへ共、其智大小の異なる所は天地懸隔、陳平が六たび奇計を出せしは、數を挾み術を用ひて一時の利害を制するにて、智の小なるものと謂つべし、張良が鴻門の危きを免しめ、前箸をうりて八難を發し、楚地・梁地を韓彭に許して自戰せしむなどは、能く天下の勢ひを揣摩して、項羽を刧制するものにて、智の大なるものなり、故に高祖も良を三傑と稱して、陳平は其數にあらず、然れ共皆時機に應ずるを以て、大小互に用ひらるゝ事を得たり、其餘蕭何が漢中に王たらん事を勸め、韓

信が項羽の弊を論じて、是に反して行はゞ、天下をば得べしといひ、董公が義帝の喪を發せん事を勸め、酈食其が滎陽を收め敖倉に據らん事を說き、婁敬が關中に都するの策を立る、是みな能く時機に當ることを得て、是を用ひて天下を得る所以なり、本文に所謂時機を權る智にしくはなしとは是なり、又久遠に傳ふるは德に若はなしとは上文に說く所、殷周世を傳ふる者皆六七百年、紂の無道なる猶天下三分の一を失はずして、土崩瓦解の勢ひなし、此時に當りて冲庸の君と雖舊政を復する事あらば、周は遂に天下を得べからず、是湯の德澤久遠に及ぶ所なり、又春秋の時に當て周政綱を失ふと雖も、天下猶周を尊ぶ事を知る、五霸の强大なる、猶周室を尊を以て名とせざるはなし、赧王の秦に降る、周猶三十六縣あり、是文武の德澤の久遠に及ぶ所なり、それ德は方あり、智力は方なし、故に智力は專ら攻伐に用ゆべく、德は專ら守文に用ゆべし、守と攻と勢の異なるを以て、施す所も又異事有、今試に德と智力と力を角するの道を論ぜん、夫德の大なるものを以、力の大なるものと戰、力克が如くにして遂に克こと能はず、牧野の戰に紂の衆は億兆、凶惡猛烈の士多し、力餘ありといひつべし、然れ共億兆の衆億兆の意を以戰ふ故、武王の三千一心の衆に敵する事あたはざる是なり、又德の小なる者を以、力の小なる者と戰ば德克事能はず、後漢の末三國の時、劉虞の仁德なる、公孫贊の暴惡に克こと能はざる是也、又智のふかきものを以、力の大なる者と戰は、智先敗れて後に克ん、漢楚の戰に高祖の項羽に克是なり、それ德は柔なり、力は剛なり、柔に克つ其

周の武王殷を伐
殷乃武士戈を倒
しく降參れ百
姓ホ酒食を以て
周の軍を待請て
喜悦の圖
義兵

武王

太公望

理誠に然り、然れ共柔は人の助る所にして、剛は人の攻る所なり、助るもの多きのいたりは天下共に是を助く、攻るもの多きいたりは天下ともにこれを攻む、故に智者は德を假りて助けを得、力をかりて功をなす、專ら王道を用ひず、覇術を辨へて政をなす、善道の盡ざる事を知るといへ共、時勢の然る所止む事を得ざるものなり、是秦以來天下を得て、久遠に傳ふるものゝ作爲なり

尙之繼業、亦可ニ以取レ譬、傳曰、諺云、百里不レ販レ樵、千里不レ販レ糴、居レ之一歲、種レ之以レ穀、十歲樹レ之以レ木、百歲來レ之以レ德者、人物之謂也、夫成早者敗亦早、成晚者敗亦晚、農之於レ末、得レ利也、雖レ少、傳レ世也長矣、弄レ法犯レ姦、博戲惡業、得レ錢也雖レ暴、失レ之亦暴、財悖入者、又悖而出、斯之謂也

此段は上文を承て、商の繼業を論ずるなり、本文上に王者創業垂統の得失、及び今古時勢の異同あるを、悉に度り審に論ずるを承取べし、戰國鬪爭の世、丁壯は軍旅に死し、老若は轉漕に疲る、一時治平に及ぶといへども、戶口減少して種藝・桑麻廢れ、畝丘墟となるもの多し、此時に當て能く小民を役して、新田を墾開し桑麻を植へ、稻田を漑ぎ、歲每に數千石の穀、數千疋の布帛を得て豪農となり、或は山林を開て竹木・銅鐵を出し、或は海に就て魚・鹽の利を射、子孫業を脩めて益張大に至るは、德を以て興るものゝ如し、若くは大旱・風雨・洪水の變に乘じ、米穀を多く求めて百倍の騰價を承けなど、都て機利に就て豪富を得るは、皆智力をもつて興るものに似たり、貨殖傳に曰、諺に言、百里は樵を販がず、千里は糴を販がず、居こと一歲なれば、これを種るに穀を以てし、十歲なれば

これを樹に木を以てす、百歳なればこれを來すに德を以てす、德は人物の謂なりといふ、意は、百里の遠きには樵を販ぎ難く、千里の遠きには糴を販ぎ難しとは、是は漢土の地は北狄西夷に續き、西北に海を見る事なく、東海南海は齊と吳越に屬して、中國の稀に至るところ、黃河・淮油・江漢の外舟楫を以て運送するものなく、我國海運の自在なるがごときにはあらず、故に百歲千里のところへ樵糴を販げば、運賃に費へて損失多し、故に世の人これを諺になして、利には就べく、不利には就べからざるに譬ふ、それ一歲の中に利を得んと欲せば、穀を種るに如はなし、百歲を待て利を得るには德を以てするに如はなし、德とは人物の事なり、后稷の稼穡を以て興り、豳人の老を扶け幼を携へて、大王に從ふがごとき是也、それ成事早き物は、敗る事も又早く、成事晩きものは、敗る事も亦晩し、穀は一年を以て成り、一歲にして枯る、樹は十年にして成り、數十年を歷て枯れ、德は百年にして人を來し、六七百年にして人を失ふ、されば末を以て農に比すれば、農は一年にして利を得るもの、末は一日にして利を得るものにて、利を得る早きは末に如ものはなし、然れ共末の家に於て、子孫相續するものは至て稀にして、農の家は數百年相傳るものあまたあり、是成事早きものは敗るゝも、又早き證とすべし、其餘文吏の刀筆を弄し賄賂を得て、一時暴富の榮をいたし、または冢を掘り錢を鑄、種々姦惡をなして公法を犯し、幸にして免るゝもの無きにしもあらず、或ひは博戲の惡業をなして家を興し、稀に子孫に傳ふるものあり、是等の富を致すは、末に比すれば又十

坦腹怡顔
禪味一脉中
出兜率門
入修羅叢
骰子一轉
囊衣俱空
執彼念珠
投畀博兒

終無一物
帰着本来
成齋瀧忠

博奕(ばくち)にまけて衣服家財(いふくかざい)をとらるゝ圖(づ)

倍に暴なれども、これを失ふも又暴なり、其上皆命がけの商にて、常理を以て論ずべからず、財悖て入るものは又悖て出るとは、是等の類を言なりとぞ

夫農固レ本之道也、末致レ財之道也、以レ末致レ財、以レ本守レ之、以レ武一切、用レ文持レ之、則與二王覇雜用者一同レ道也、商之繼レ道爲レ善

此段一篇の末を結で、商の繼業は農末相兼、文武互に用ゆるの術を制し、子孫をしてこれによらしむべき事を論ず、夫農業は永久下家を傳へ、根本を固するの道なり、末業は貧を資け富を致すの道なり、故に創業の商末を以て財を致し、武を以て一切にすと雖、本を以て根を固くし、文を用てこれを持するの謀あるべし、本を以て根を固くすとは、或は田地・山林・樹竹・家・屋敷等其人々所々の便宜によりて、不窮の基業となるべきものを買置、子孫臨時の變の手當となすべし、是漢高が都を長安に遷して根本を固むるの意なり、文を用てこれを持すとなり、其家政を行ふには、嚴重を重んずといへども、又寛宥をもまじへ、恩澤を以て人を懷くべし、質素を貴といへ共、又禮義をも講じて、夷狄の振舞なかるべし、是智者の徳を假りて助を得、力を假て功をなし、王道覇術雜へ行ふと道を同じくするものなり、されば今の時勢に於て商の繼業を建るは、惟斯道を善とするとなり

○此篇を四段に分ちて解釋す、第一段には、殷・周・秦・漢繼業の善惡、歴年の短脩、聖人の智力を後にし、徳行を先んずる所以を陳て、古今時世の異なる所以を說き、第二段には、徳と智力の優劣を

論じ、後の君子德の尊ぶべきを知らざるにはあらざれども、時勢の然らしむる所、專ら智力に任せざる事を得ず、故に時宜を權りて恩威を施し、王覇雜へて政を治、敎の民を化する古に及ずといへども、猶能數百年の國命を保つ事を得るを說く、第三段には、商の繼業も又古今時勢の異なる所を量り、利を得るの早晚、世を歷るの脩短を考へ、創業・守文・施用の異なる所を知るべきを論ず、第四段には、一篇の末を結びて、農末世を變るの短脩を論じ、末業を以財を致し、本業を以て本を守り、王覇雜へ用ゆるものと道を同じうして、繼業長く子孫に傳ふべきを示すなり、全篇の主意は繼業にあり、繼業は子孫に垂て繼べきものをのこすといふ、所謂繼べきものは德義の善行、以て常訓となすべくして、智力の事は自ら其中に有、然もまた知らずんばあるべからざるものあり、孟子に、天の時、地の理、人の和を論じて、專ら人和を以て重しとす、然れども地の利を得ざれば、人和も又施し難き所あり、是周の東遷て、ふたたび振ふ事あたはざる所以なり、故に商家の繼業德義を以て孫謀を遺と雖も、また地の理により本を固うするの謀無るべけんや、所謂本を固くするとは、田地・山林・樹竹の類、利を得る事少して世を奕る事長きものなり、貨殖傳曰、今秩祿の奉、爵邑の入無くして、樂これと比するものを素封といふ、封者は租稅を食事、率百戶にして二百、千戶の君は二千、朝覲・聘享其中に出づ、庶民・農工、商賈率亦歲每に萬金の息二千、百萬の家には二十萬、而夫傜・租賦其中より出づ衣食の欲、好美する所以を恣にすと言意は、百萬兩の息二十萬兩を出す、

池の堤又ハ
岡山なとの
明地へ有
益の木
と
植させる
図

故に百萬兩の家は二千戸の君に當り、衣食の欲、好美する所を恣にする事を得るとなり、又曰、陸地牧馬二百蹄 五十疋なり 牛蹄角千 百六十七頭 千足の羊、澤中千足の彘 二百五十頭 水居千石の魚陂、魚は斤兩を以てかずを記することをなすといふ こゝろは、池に魚を養ふ、一年に千石を收得て賣なりとなり

山居には千章の材、安邑千樹の棗・燕秦千樹の栗・蜀漢・江陵千樹橘・淮北・常山・巴南・河濟の間千樹の萩・陳夏千畝の漆・齊魯千畝の桑・渭川千畝の竹・及各國萬家の城・帶郭千畝、畝毎に鍾を出すの田あり、鍾は六石四斗なり 若は千畝茜・千畦の薑・韮これ皆千戸侯と等し、然も是富給の資なり、市井を窺ず、異邑に行ず、座して收を待つ、身は處士の義有て、給する事を取といへり、是土地の宜き所を度り、牛馬・羊彘・魚陂・樹井の類を蓄息し、近きものは一年、遠きものは十年を待て得る所の利にして、末の財の致に比すれば、尤利を得るの晩きものなり、然れども市井を窺ず、異邑に行ずして、處士にして千戸侯の富を保つゆへに、司馬遷これを素封といふ、商の繼業には是等の事に傚ひ、其の土地土地により、十年二十年にして成功を得る事を考へ、中年の內に豫め基本を建て、老に至りて子孫に垂て繼業となすべし、都て數十年の後に利を得る事を謀らば、今別に力を盡さずして、漸次に施して成功を得るの類いくらも有べし、魏文侯の時に、李克は務て地の力を盡す、地力を盡すとは、何なりとも其土地に應じたるものを考へ、これを種て產物を得るなり、無用の地あらば、是等の事も試みなすべし、又都會の地は是等の事はなし難しと雖、帶郭の千畝には、畝に鍾を出すの田有れば、

都會又郡會にて繼業となるべき事有べし、若夫川を浚へて田となし山を鑿て金銀を得、諸工を括りて工稅を出し、他の工をして其器を作る事を得せしめずなど、種々無稽の事を徇へ、利說をなして愚民を釣るもの有り、繼業の基を建んとて、是らの惡輩に欺るゝ事勿れ、凡商たる者の事を謀るは、官府の公法、諸侯の國法、土地の支屬する處、官吏の掌用する所、官途の由るべき所に、迂直の違ひある事を考へ、時事の行はるゝ所に、儉易の利ある事を知り、村野・閭里・市井の間に、種々民情の異なる有、猾吏・惡少・劍俠・駔儈の姦惡・狹斜・私窩・悲田・乞丐の狹む所、豪士も頭を低る所あり、獄吏も貴き所ある事を察して、後に時勢に因りて事をなすべし、事の近きものは人皆知りて、これをおこなふ事やすし、遠きものは迂遠にして功なし難し、遠近の間に就き、土地のよろしきところを考へ、不窮の基業建て、子孫臨時の變にそなふ、これ此篇の專ら主として商家に勸るところなり

主權第八

權は則兵權・法權・利權、執て以て人を制する所以のもの、商家の子弟富有の中に育せられ、利權の執りがたくして失ひ易きを知らず、酒色に淫して遊樂に耽り、權移り位失して、家を亡に至るものあげて數ふべからず、故に子孫の爲に巨萬の儲をなし、素封の基を建て、繼業をなすとも、利權を執るの道を知らざれば、船に乘じ梶を失ふが如し、繼業に繼で此篇を置、子弟をして主權の失ふべからず、主位の虛しくすべからざるをしらしむべき事を示す所以なり

盈尺之衡、可レ權ニ天下之輕重一、九重之位、可レ朝ニ天下之倔强一、主レ權者、天下來而取レ稱、主レ位者、天下來而受レ制、位之所レ在權亦在、位之所レ無權亦無、有レ位無レ權、則爲ニ虛位一、有レ權無レ位、則爲ニ陰主一、權之所レ在、有レ威有レ勢、威勢可ニ以傾ニ主家一、故曰、權也者、不レ可レ借ニ於人一也

此段は主位・主權の二ッを擧て、利權の人に借べからざる所以を說くなり、衡ははかりのさをなり、權ははかりのおもりなり、本文の意、彼はかりのさをは一尺計りに足らぬものなれども、天下の物の輕き重きをはかりて其斤兩を定むべく、天子の御座所は九重の内にありて、垂拱きて立るに過ざれ共、遍く天下倔强成る武士共を朝せしめて、其死命を制すべし、權を主どる者の所へは、天下の物斤兩を定めに來り、位を主どる者の所へは、天下の人命令を承に來る、此二ッを主どるものは己動ざれども、人と物と其處へ來りて命令を聞事をなすなり、權と位と名は二ッに別れたれ共、其實は一ッにして、はなれ〳〵なるものにあらず、天子の位に居れば、天子の權有、諸侯の位に居れば諸侯の權あり、一家の主人となれば一家の權歸す、位の在る所には權も又あり、位のなき所には權もなし、故に主人の位は在り乍、主人の權なきものは、名は主人なれ共實は主人に非ず、又家來の席に連りながら主人の權を執ることは、名は家來にて實は家來に非ず、されば權のある所には、自ら威も有勢も有、威勢の有處には人みな靡き從ふ、靡き從ふもの多ければ、遂には主人の家を押領して、忌み憚る事なきものなり、故に古き人の言葉にも、權は猥りに人に借すべからずと、一たびに借せ

ば、自ら執てかへす事無きものなる故なり

兵權法權、人主所三以執而制二天下一也、借レ之者被レ誅、利權財柄、富者所三以執而收二餘贏一、雖レ主レ之無レ被レ誅、如何、貧富之道、雖三人主一不レ能二奪予一也、故白圭曰、吾治二生產一、猶二伊尹呂尚之謀、孫吳用レ兵、商鞅行レ法、是也、是故其智不レ足二與權一レ變、勇不レ足二以決斷一、仁不レ能二取予一、彊不レ能レ有レ所レ守、雖レ欲レ學二吾術一、終不レ告レ之矣、圭豈惜而不レ告乎、假令告レ之、遂不レ能レ悟、故深秘レ之曰レ不レ告

此段は上文を承て、利權は富者の執て財賄を制する所以のものなるを說く、凡天下の大權三ッ、兵權・法權・利權是なり、兵權は則兵馬の權天下の王命に隨はざるものをば征伐するの靈なり、法權は法令の權、天下の不平を平にするの具なり、此二ッのものは、王者の執て天下を制する所なれば、漫にこれを借るものは、忽ち誅戮せらるゝ事なり、利權は富者の執て餘贏を收る所、これを主といへども誅せらるゝ事なし、如何となれば、貧富の道は人主といへどもよくこれを奪予る事あたはず、それ富は人の情性、學ばずして欲する所なり、故に智を盡して能く索ること有、力を餘して財を讓らず、各其能に任へ其力を竭し、分に隨て得る所あれ共、未だ其術盡し知るものあらず、よくこれを知るものは、河流の汲盡すべからざるが如く、春草の刈り絕すべからざるが如し、故に白圭が曰、吾が生產を治するは、伊尹・呂望の謀、孫吳が兵を用ひ、商鞅が法を行ふが如き者なり、是故に智者ありといへども、其人と共に時變を權るに足らず、勇者ありといへ共、其人と共に時宜を決斷する

に足らず、仁者ありといへども、我が守る所を取て人に與ふる事能はず、强者ありといへども、我が攻て取らんと欲するをよく守る所ある事能はず、是我が獨得する所の術あるを以、天下の財賄を自在にする所以なり、人もし我術を學んと願ふもの有とも、我終にこれを告じといへり、白圭が事は使令篇に見へたり、圭が術を行ふは蓋試る所有りて、其長ずる所あるを試み、苟もする而已に非ざれば、術を惜みて人に告ざるに非ず、假令是を告るとも、よくこれを悟るものなければ、却て術の恥となる故に、これを秘して告じといふ、昔韓張子房三略を黄石に得てこれを人に語るに、よく其旨を悟るものなし、沛公劉邦に留に會してこれを語れば、通徹明にせざるものなし、子房の歎じて曰、沛公は天授也、他の諸將にこれを語れば、水を以て石に投ずるが如く、沛公に語ば、石を以て水に投ずるが如しと、萬の事此の如きもの許多あり、故に其人あらざれば、いかなる傳授事も皆無用の事なり、是則白圭が告じといふ所以なり、されば商術には、白圭がいふ所の如き玄妙道理あれば、人主といへどもなほしいまゝに利權を奪予(うばいあたふる)こと能はざるなりとぞ

今素封之家、其祖先之創レ業、皆不レ學而知ニ商術一者也、及ニ富至ニ萬、聽ニ子孫一脩レ之、而其所レ垂之法、皆擇ニ可レ繼者一、使下ニ子孫一主レ位主レ權、永不上レ失レ富、其子孫在ニ於術中一、不レ知ニ祖先之苦心一、廢レ法長レ奢、權移位失、至レ亡レ家者、不レ可ニ勝計一也

此段上文に白圭の商術をいふを承て、今の世の富商にも又よく術を使ふことのあり、又よく術に使

はるゝものあり、又術に使はるゝことだに能はざるものあるを論ず、本文の意、今素封の家を觀るに、其先祖の業を創めし人は、皆學ずしてよく商術をしるものなり、故に一世にしてよく巨萬の富を致し、子孫に繼業を垂れ、祖先の法によつて其生産を修めしむ、其垂るゝ所の法は、皆知り易く行ひ易きものにて、愚なる家主にても行ふべき事なり、故に堅固に其法を守りさへすれば、かく主人の位を失ふことなく、よく主人の權を失ふ事なし、是其祖先の人豫め將來事を察し、玄旨妙用の術、神出鬼沒の計は、愚なる子孫のよくする所にあらざるを知り、商術を家法に寓し、子孫を術中に入れて、財賄を生産するの道を脩めしむ、大抵天下を草創するもの丶、守文の法に繼べき者を垂るゝは皆此意なり、さればよく業を創る者は、其術を使ふて富を得、又よく子孫に垂て保たしむ、よく業を守るものは、其術に使はれて其富をまし、又よく其子に敎へて其術に使はれしむ、此二つはよく術を使ふと、よく術に使はるゝとにて、二つながら其所を得たりと言べし、然るに其子孫の中にも、祖先の術中に在りながら、祖先の苦心を知らず、徳を廢して法外の奢をなし、我が執る所の利權はいつとなくうせ行、儲置たる家財も散じて、家を亡すに至るもの其數勝て計がたし、此如きは術を使ふ事は扨置、術に使はるゝ事だに能はざるものなり、豈悲しき事にあらずやとなり

傳曰、凡編戶之民、富什則卑二下之一、伯則畏二憚之一、千則役、萬則僕、物之理也、可レ見下利權之所レ在、與二人主一同上柄也、今夫智秀二天下一、胸畜二甲兵一者、皆甘而爲二富者役一、爲レ得二庇廕一也、勇冠二三軍一、力

町人の大家へ武士
文人雅客医師・
角力取俳優
雅俗打寄
酒宴の
圖

歟ニ萬夫一者、皆低頭而望レ立ニ下風一、爲ニ貨賄一也、奇衺細工方技之士、聲色之美、思レ入ニ其門一爲レ售ニ所能一也、身以ニ蠢愚之質一、能使ニ智勇巧技呑レ氣者、非ニ利權在レ手之効一乎、故一旦失レ之、雖レ求レ爲ニ一傭夫一、亦不レ可レ得也

此段上文に富商の子孫祖先の法を廢して、利權を失ふ事をいふを承て、利權の在る所には鼠も虎となり、利權のなき所には虎も鼠となるの意を說く也、本文貨殖傳を引て曰、凡編戶の民十倍の富あるものには人是に卑下す、百倍の富あれば人是を憚り恐る、千倍の富あれば人これが爲に使はるゝ事甘ず、萬倍の富あれば人是が家僕となる、是物情の理なりと見るべし、利權の有所には、人主の物を制するの威柄あると道を同じくする事を、殊に今太平の御代に當れば、士に進仕の道なく、萬卷の書を讀み、經世の才を抱き、智は天下に秀で、胸に百萬の甲兵を蓄るものも、貨財なければ一匹夫にも劣り、彼の富者の爲に使役せられて、其命令を受る事を甘ずる者は、其財幣の庇蔭を得るが故なり、勇は三軍冠として、力は萬夫に敵するに足り、單刀に陣を陷しいれ、一箭に三關を破る武士も、留守居・勘定等の官となり、三都の豪富に交を結び、頭を低て下風に立ん事を望は、其財賄を貸ん爲なり、若くは彼の巧に新樣の奇衺を制作せる細工、扁鵲・倉公の如き名醫、世に名高妙藝皆其門に入らん事を願ふものは、各々其よくする所を售ん爲なり、かく人に尊まるゝ富家の主人は、如何なる者ぞと思へば、其身は飽暖中に養育せられて、世間人情の疾苦する所を知らず、多くは文

盲野人の鞠躬持にて、只我まゝ氣まゝいふ事のみ知りたる、蠢く蟲の如き愚人なり、斯る蠢愚の質にて有ながら、能く智勇巧技の士をして、氣をのみ體を屈して其下風に立しむるものは、利權手にあるの効に非ずや、故に此の如き人一旦利柄を失ひ、主位主權なき身となりては、一トリの傭人とならん事を望めども得べからず、扨こそ主位主權の其身にあるは、祖先の法によるを以なれば、其洪大なる恩澤を思ふて、祖先の法を廢すべからずとなり

夫不㆑學㆓商術㆒、不㆑能㆑得㆓小大之用㆒也、不㆑知㆓時務㆒、不㆑能㆑得㆓時置之宜㆒也、不㆑勤㆓習勞㆒、不㆑能㆑明㆓奢侈之所㆘移也、不㆑知㆓主權㆒、不㆑能㆑審㆓財貨之所㆓聚散㆒也、此四者、商之要道、不㆑可㆑不㆑察也、不㆑知㆓商之所㆓以爲㆘商者、不㆑學㆓商術㆒、欲㆘肥馬輕裘、與㆓王孫㆒同㆑流、以㆓此道㆒居㆑富、則不㆑能㆓一朝居㆒也

此段は一篇の末を結び、主權は商の要道にして、財貨の聚散はこれを得ると、是を失ふとに有事を論ず、本文の意、商に四つの要道あり、肝要とする所にして、使令•敎養•接待•繼業は皆四つの要道の内に屬す、故に先商術を學ばざれば、大小の作用を得ること能はず、時務を知らざれば、時に置て宜きを得ること能はず、習勞を勤めざれば、奢侈の移す所を明にすること能はず、主權を知らざれば、財貨の聚散する所を審にする事能はず、此四つのものは商の要道なれば、何れも明察に知らずんばあるべからず、商の商たる所以をしるものは、己商術を明にして、又能く子孫をして商術を學ばしむ、これに反するものは商術を學ばず、肥馬に乘り輕裘を衣て、王孫と流を同じうせんと欲

す、殊にしらず王孫は自ら王孫の業あり、商家は自ら商家の法あり、故に此道を以て千秋萬歳の富に居らんと欲すといへども、一朝の間も居事あたはざるなりとぞ

○此篇を五段に分て解釋す、第一段には、權柄の人に借すべからざるを論じ、第二段には商家の利權は、人主といへども奪予する事能はざるを説、第三段には、富家の子孫祖先の法を廢て、利權を失ふを事をとき、第四段には、利權手に在れば鼠も虎となり、利權手を失ば虎も鼠となる事を説、第五段には、貨財の聚散も利權の得と失にある事を論じて、富家の子孫の必要道を知るべきを説、全篇の主意は主權に在り、權は權變の義ありて、變化移動し易し、且其移動するや尤微にして知れ難く、是を主どるもの察(あきらか)にせずんば有べからず、權に一家の權あり、一郡の權あり、一州の權あり、天下の權あり、齊の桓公の興、管子先一國の權を得て富强の術をなし、諸侯を糺合して天下のの權を得たり、公の死するに及びて、五公子國を爭ひ、一國の權分れて齊の政衰ふ、晋の文公の覇たる、先一國の權を得て天下の權歸す、世々其權を失ずして、七世まで覇業をなす、趙高權を執て秦亡、石顯權を取て漢衰ふ、故に權勢の移る、賤婢奴輩といへ共よくこれを盗めり、富商の子孫よく四要道を明らかにして、利權の移動ところを知り、よくこれを主どりて、永く富を失ふべからず

應變第九

應變とは、時の變に應じて自由自在のはたらきをなし、よく時の宜を得るをいふ、それ人の一生を

過する常の事有、常ならぬ事有、常の事は常になす事にて、常ならぬたまくに有事なり、故に常の事は常に習てなしやすく、常ならぬ事は存外に出で、これに應ずる事難し、所謂常ならぬ事とは、則存外の變事にして、應變とは、是を處置するの道なり、商の業たる常に有ては利を收め、變にありては變の利を收む、常の利は爭ふ者多く、變の利は爭ふもの少く、故に商の大利を得る大變の時に在り、然れ共人の情は愚成ものにて、兼て期したる事さへ、時に臨んではうろたへさわぎて取亂すものなり、まして時變の起るには、定りたる體相なくして、いつも思ひがけぬ所より事起る、故に大變の時に當りて、身の置き所に忙迷して、利の有所に眼の付暇あらず、故に眼前に大利有りとも、人是を爭ふものなし、是則大商の變に乘じて、恣に大利を得る所以なり、凡四民の事いづれの道にも常變有物なれ共、商の業は物價の貴賤によりて利を得る者なれば、常と雖變にして、常ならぬ變は變中の大變なり、これに應ずるの道を知らんと欲せば、則變通の理を明にすべし、此篇に變通の道を論じて、商術の奧妙を知らしむ所以なり、夫れ人の身體に耳目四支の具ありと雖、精神の運用するに非ずんば、用をなす事能はず、此篇は九篇中の精神にして、餘の八篇を運用する所以の者なり、故によく此篇通ぜば、凡骨を換へ俗體を脫して、變通自在の妙用を得べし、見る者心を用ひずばん有べからず

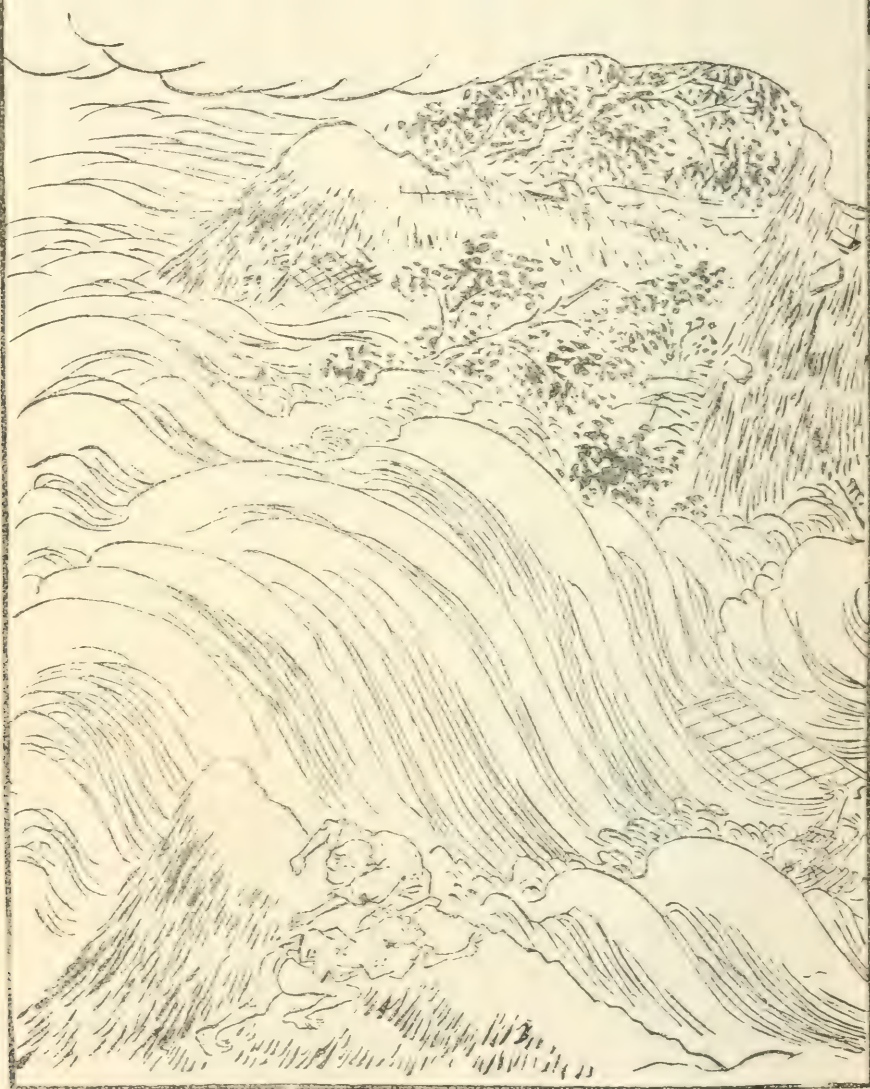
道之有レ常、可二踐而行一也、道之無レ常、不レ可二踐而行一也、法之有レ常可二循而守一也、法之無レ常、不

㆑可㆓循而守㆒也、可㆓踐且行㆒者、可㆓以語㆒也、可㆓循且守㆒者、不㆑可㆓以語㆒也、所㆓以不㆘可㆑語、無㆓可㆑語之形㆒也

此段は應變の事いはんとて、先常有の道と、常なきの道を並べ說くなり、道は則官道・野徑・村路・山溪、大小の異ありといへ共、皆人の常に踐て行所のもの、取て以て事物各當然の理有に譬ふ、夫物に當然の位有て、事に當然の理有、所謂山はこれ山、海は是海、人はこれ人、獸は獸、これ則當然の位にして、山に山蹊の攀べき有、海に海路の濟るべき有、人に人倫の順べきあり、獸に野性の馴べからざるものは、則是當然の理なり、當然の理は人の常に踐て行べき、循て守るべきものにて、物あれば則有とは是をいふなり、蓋是道の常ありて以て語るべきものなり、若夫山は陷て海となり、海は湧て山となり、人は獸の行をなし、獸は人の途に當るが如き、物當然の位を失ふ、事當然の理を滅し、天下に道を踐て行べきなく、人間に法の循て守るべきなきものなり、此の如きは以て常の道となし、常の訓となして人に語るべからざるものなり、語るべからざる所以は、常として語るべき定形なき故なりとぞ

夫道若㆓有㆑恒之性㆒、法因㆓有㆑恒之道㆒、有㆑恒者、情之定體、無㆑恒者、情之變態、情觸㆑事而動、事因㆑時而變、時無㆓常居㆒、天有㆓變易㆒、天之變易不㆑可㆑測、所㆓以不㆘可㆑測者、以㆑變爲㆑體也、故知㆓常之爲㆘常、未㆑可㆓共語㆘變、知㆓變之爲㆘常、始可㆓共語㆘變也

此段は上文に常と變とを比べ說を承て、天道はもと變を以て體とし常とすれども、人は唯常の常たるを知りて、變の常たるを知らざるを論ず、本文の意、聖人の敎を立るは、專ら常を說きて變を說ず、如何となれば、常の事は常にありて、時變の事は稀にして有、故に先常行ふの道を得て、而して後に變に處する道を得べし、然れ共世に常の人は多く、常ならぬ人は少きを以て、孔子も與に共に學ぶべく、未だ與に道に適くべからず、與に道に適べく、未だ與に立べからず、與に立べく、未だ與に權るべからずと曰へり、權は所謂應變の道を權るをいふなり、夫常と變とは事物の上に有のみにあらず、人の情性にも又是有、徒に人の情性に有のみにあらず、天道にも又これ有、彼人倫五常の道は、恒あるの性に若(したが)ふものにして、法制・禁令恒あるの道に因て立る所なり、而も是は是情の定體・喜怒・哀樂の大過不及なきものにして、其變態を擧ば殘忍・刻薄・放辟・邪侈、色に淫し酒に湎し、種々惡症を出して、此段商術の妙用は變に應ずるに有をいふ、本文上に變の常たるを知りて、始て共に變を語るべしといふを承て、先天變・時變・人情の變を擧て、それ天道は變を以て體とすといへ共、然も其中に微動大動と有、一呼吸の間に止る事なきものは變動の徴にして、是を變中の常とす、彼大風・大雨・雷電・晦瞑・山崩・海溢れ、或は大旱・雨降事なく、數千里の間赤地となり、或は四時の風氣惑亂して正を失し、瘟疫流行死者相繼ぎ、或は凶年によりて盜賊所々に起り、これに繼ぐに兵革を以てし、人民命を絕つもの十が七八、是等は皆天道の大動、氣運の凶逆に因る所にして、

地震洪水にあふ諸人難義なる図

變中の大變なるものなり、人事變にも又小動大變ありて、四時と同じく榮枯盛衰す、榮の至は、富四海の內を保ち、衰の至りは、妻孥だに養ふ事あたはず、吾邦に於て古來盛衰の尤(はなはだし)きものを擧ば、平氏は嗣子を以盛に、北條は外舅を以て興る、一は位人臣の極に至り、一は權四海の威を秉、然れ共壽永・建武の戰に、或西海に一家を滅し、或は鎌倉に一族を亡す、是皆人事中の大變なるものなり、又人情の變は所謂喜・怒・哀・樂の四ッ、一日中終食の間も無き事能はず、然も是人情中の小動にして事を敗るに至らず、其大動に至りては、小なるものは命を損じ家を破り、大成者は國を亡し天下を失ふ、此三ッの變の起るは、兼てより其期有事なく、豫めに測待設て備をなす事能はざるものなり、然るに其能く測るべからざるものを以て測る事をなし、よく待事なきものを以て待事をなすものは、商術の妙用なり、其術の至りは深神妙にして、形なきに成り、聲無きに至る、故によく萬の貨の主宰して、其奪予を自在にする事を得たり、白圭が所謂、吾術を學んと欲すといふ事も、これを告ずといふものは是なり

夫四時以レ漸而移、幼老以レ漸而變、是故知二已變之變一、非二知變之至一、知二未變之變一、知變之至也、知變之至、能體二終身之變一、無レ患二一朝之變一、泰山崩二於前一、不レ轉レ眦、西施媚二於側一、不レ動レ情、故能應二卒然一、無レ所二窮極一矣

此段及次の段は上文の意を承て、應變をなす所以のものを錬磨し、妙用を得る所以を論ずれども、

天下の變は無窮にして、是に應ずる道を論せば、一事一言を以て諭すべからず、假令能くこれを論し盡すも、一邊に局する所有りて、萬方に通ずる事能はず、是を以て應變の道を得たりといふべからず、故に此に知門を開通し、情意を排絶して、よく應變する所以の具を琢磨し、無窮の變通を得せしめんと欲す、それ人生れ得て、具足せる所の應變の具あり、此もの固より無窮に應じて自在を得るなれば、情意の爲に障碍せられて變通する事能はず、然れ共人々己が好む所、仕習れたる所、其得手々々の所に就き、纔に一線路を通じて大光明を放つ、たとへば低れ籠たる家の窓戸の隙より明月の光漏すが如し、これを見認んと欲せば、平生の事に心を付て見るべし、人の仕習れ見習れ聽習れたる所、嗜み好める所には、皆夫々の發明する所有て、人にも勝りたる智見を出す、其仕習れ見習れざる所、嗜み好まざる所に至りては、殊の外愚なるものにて、先の智見にくらぶれば、天地懸隔するが如し、是其心を盡すと、其心を盡さゞるとの違によりてなり、孟子の所謂、心を盡せば性を知るとは則此事なり、蓋孟子の心を盡すとは、天下の事々に就て心を盡して、其理を極めざるは無きをいふなり、さればよく心を盡せば、低れ籠たる家に居るもの、一時に舍屋を發きて天外の月を見るが如し、夫能くかくの如にして、應變の具一時に障碍を打破、無窮の妙用をなす事を得るなり、是斯を水上の胡盧子の如く、粘着すれば則轉ずといふ、此意は水の上に浮めたる胡盧子の、何程壓へんとすれ共、くるりくるりとまはりて壓へられぬといふ事なり、轉ずとはくるりくるり

齊

齊の桓公
楚を伐ら
楚王降参の
体其頃の軍ハ
車戦なりしが桓公
管仲皆車に乗る
一車を四馬にて駕す
楚王と家老子文とハ
車より下て礼拝する圖

と自由にかはる事なり、此轉所を得るを應變の妙用とするなり、易に曰、窮すれば變じ、變ずれば通ずと、此意は凡天下の事行つまりて難儀となる事多し、然れ共十分に行詰れば、必變ずるものなり、其變ずる所より、則よく行つまりたる事のよく通ずる路あり、此通ずる所を得るが轉所なり、只これ情見の爲に障碍する所あれば、一所に局して多方に通ずるの道を得ず、いつも同じ料簡にて行事ならば、窮とはいふべからず、行ぬ事故窮といふなり、かゝる時に當りては、以前の料簡をやめ、打てかわりたる所を行ざれば、時の難を救ふ事あたはず、然れ共愚人の思案は、とりもち桶へ足踏入たる如く、先入主となりて思慮を轉ずる事能はず、情見の障碍とは是をいふなり、いかなる智者なりとも、此所を離れざれば事を成す事を得ず、管子に禍を轉じて福となし、敗を轉じて功となすといへり、齊の桓公は賢君にて、我を射殺さんと付ねらふ管仲を擧げ用ひて、國政を任ぜし程の人なり、然れ共好色攝檢すべからざるなり、孔子曰、操ば存し、舍れば亡す、出入時なく、其鄕を知る事なきものか、惟心を謂與と、見つべし人情の變動常なき事を、されば情は事に觸るより動き、事の者(マヽ)時に因りて變ず、時に定りたる居所なく、天に變易の道有、天の變易所は測るべからず、測るべからざる所以は、變を以體とすればなり、それ日は東に出で西に沒すれ共、同じ日にあらず、往く水は斯の如くにして、元の水にあらず、されば天地は曾て一瞬の間も止る事能ざるものなり、故に日毎にかはる同じものと思ひ、時の間も止まる事なきに、常住の思ひをなすは、共々應變の事

を語るべからず、一呼吸の間に山は海と成、海は山となる事を知りて、始て共に變を語るべしとなり

風雨雷電、天之變也、榮枯盛衰、時之變也、喜怒哀樂、情之變也、此三者不㆑可㆓豫測㆒、無㆓以有㆑待、夫能以㆓可㆑不㆑測者㆒爲㆑測、能以㆓無㆑待者㆒爲㆑待、商之妙用也、微哉微哉、成㆓於無形㆒、神哉神哉、至㆓於無聲㆒、故能爲㆓萬貨主宰㆒也

此前に鬩女あるべし の辯ありて、夫人の如きもの六人有、其中に蔡の國の女、桓公と共に池塘に舟を浮めて遊びたり、蔡は水邊の國故、此女水に習れたるにや、戯に舟を蕩かして樂みけるを、桓公は水に習れざる故、蕩かする事なかれと止れども聞入ず、桓公怒て此女を執へ答たんとせしに、此女蔡の國へ逃げ歸りて返らず、桓公使者を立て女を返せよといへども、蔡の國も楚の國を後楯にして女を返す事なかりき、桓公怒て兵を發し、蔡の國を踏破らんといふ、管仲諫むれ共聞入給はず、管仲則桓公の遂に聞入給はざる事を知りて、諫る事を止め、打てかはりたる料簡を出して桓公に進めけるは、君今蔡の國を伐て怒をはらさんと欲すれ共、かゝる事を以て人の國を伐は、天下の諸侯服する事なし、かの蔡の頼とする所は楚の國なり、昔周の昭王南巡漢水に沈められ給ひしより、いまだ周より其罪を糺せし沙汰なし、其上久しく楚の國より周の天子へ貢物を捧る事なし。君今此兩條を以諸侯に告げ、與國を率ゐて楚の罪を伐ち給はゞ、蔡が楚の與國なれば、必楚の味方となりて城守せん、是に於て楚を伐の血祭に先蔡を伐て、楚に與するの罪を糺さば、師に名ありて天下服せんといふ、桓

公これに隨ひ蔡を亡し、楚を伐て名を天下にかゞやかせり、されば事の起りは婦人の事なれ共、これを天子の事になし、素意をも立て、天下をも服して、名を諸侯に擧たるは、管仲が彼轉ずる所を得て、禍を福となし、敗を功となせしなり、見つべし應變の至極は轉所に在る事を、今此轉所を得せしめんとて、心に具る應變の具を琢磨せしむるに、人に聰明不聰明の違ひあれば、俄に其道を得るあり、又漸々進む者も有、其機根は樣々とかはれども、先なし易く知り易き處に就ていはゞ、親しく變移する所を觀るに始る、かの四時の移り行を觀れば、今日は春にして明日は夏と、立仕切たる如くに變ずるものにあらず、春の始には冬の氣候殘り、春の終には夏の氣を含み、漸々移り行て、いつとなくかはるなり、幼きものゝ老に至るも又此理に齊しく、少壯より次第に積りて、いつとなく老境に入るなり。かく漸々に變じ移る者ゆへ、日々變ずる所は見へざれば、春暖・夏熱・秋冷・冬寒、みどりの髮は白首となり、紅顏の美少年は黃面の老翁と成るに至りては、氷炭黑白の變移現然たり。人情は只現在に就て常住の思ひをなし、變の小なるものに驚かずして、變の極に途方を失ふ、變の極はもと變の末極より起るなれば、變は常の時に在りて、變の時に俄に變ずるにあらず、此故に已に變じたる形の顯るゝに付て知るものは、變を知るの至りにあらず、いまだ變ぜざるの以前より、變の有所を知るものこそ、變を知るの至りといふべし、されば變を知るの至極は、一瞬の間も皆變なるを知り、一日片時の間も、常住の思ひをなして油斷する事なく、生涯の變を體として、一

朝の緩をうれふる事なし、此の如くに眞眼をこらして天地の變動を見認ば、我が心の一消一息に變動して、天地と體を同じうする所をも見認べし、よくこれを見認め得ば、死生の境に顚動せず、死を觀る事歸するが如く成事を得て、俄に大變の來る時、兼ねて斯有べしと思ふ故、眼前に泰山の崩れかゝる事有とも、少しも眦を轉じ心を動かす事なく、西施の如き美人、我膝に寄りかゝり戯れ媚る事有とも、これが爲に情をうごかし心を蕩かす事なし、かゝる事にさへ少しも轉動錯亂する事なきものは、よく卒然と思ひかけぬ變事の出て來るに應じ、時の宜を得る故、いか成大變も此人を窮極する事能はざるなり、かの所謂水上の胡盧子の如しとは、此等の人を言なり

夫以ㇾ金注則負、以ㇾ瓦射則勝、非ニ智之拙一、情之拙也、非ニ情之拙一、識之拙也、所ニ以識之拙一、不ㇾ精之故也、是故能知ニ必然之勢一者、不下以ニ勝敗一動上ㇾ心、不下以ニ勝敗一動上ㇾ心、則心常王、心常王、則虛靜而見明、見明則能制ニ勝敗一、不ㇾ期ニ必勝一、勝在ニ其中一

此段は上文を承て、心顚ずれば事を見る事明ならず、心顚倒せざれば事を見る事明なり、明ならざればよく勝敗を制する事を得ず、故によく勝敗を制する事を得んと欲せば、心を動さゞるの道を明らかにすべき事を論ず、夫人と利を爭ふに、必勝を得んと欲するものは、必勝を得こと能はず、必勝を得ん事を欲せざるものは、必勝得る、如何となれば、必勝を得んと欲するものは、必勝を得るに急にして心に餘地なし、心に餘地なければ、必勝を得るの道を明らかにすること能はず、彼金銀

を射物となして變をなす者はまけ、瓦石をかけものとなす者は則勝つ、金を射物にする者の智拙くして、瓦石を注物にする者智巧なるにあらず、必勝に急にして心に餘地あるとの違ひにて、負まじと思ふ情の拙きより、心急に智くらみて、勝負の道を明らかにする事を得ざるなり、世に貧すれば鈍するといふは則此理にして、貧になれば富を得んと欲するの心急に、時の至らぬに心付ず、ひたいれにいれて損をする有、又敗軍の爲に勇を語るべからずといふごとく、初の損に心後れて、めつたに手を縮めて時節を失ふあり、此二ッは進退の違ひあれども、一は躁進みに急迫し、一は恐縮に急迫して心に餘地なく、時機を明らかにすること能はざるなり、かゝる事になり行も、其本を論ずれば、其智識を近淺にして、事の道理を明らかにする事能はざる故なり、凡人の身の上に於て、生の大事死の大事といふ事有りて、生る瀬と死る瀬と程の大變はなし、然れども其境に臨むに及で、いかに死にともなく思ふ共、詮なき事を知りて、平生に思ふ程にもなく、つひ死んで仕まふなり、何を以てか斯くの如くなるなり、必然の勢ひを知りて、とても逃れぬ事とおもひ極めたる故なり、かく明らかなる智を持ながら、事に臨んで決斷する事能はざるは、いまだ其境に臨まざる時に當て、成べきだけ死にともなく、未練未熟の情を動して拙き事をなす也、故に必然の勢を明に知りて、常に覺悟を極めたるものは、勝負は是兵家の常なる事を知りて、武士はいつも討死と極め、商人はいつも手と身とのものと心得る故に、勝たりとも喜びもせず、負たりとてさのみ驚きもせぬなり、かく

心のすはりたるものは、心常に洞にして氣屈する事一點もなし、心洞に氣屈する事なければ、自然と心にかゝる雲もなく、事の理を見る事明かなり、見る事明らかなれば、よく勝負の道を宰制して、時に臨で自在の働きをする事を得るなり、是則測るべからざるものを以て測る事をなし、待事なきものを以て待事をなすの理にして、必勝を期せずして、勝の道は其中にも有なり、昔趙の藺相如は雞を縛の力もなくして、柱を睨て璧を返し、左右を叱りて缶を撃しむ、大史公是を評して曰、死に處することと難し、死するの難きにあらずと、孔子の曰、匹夫匹婦よく溝瀆に經る事ありと、これによりてこれを觀るに、死は誠に難き事に非ず、死を前におきて靜に事を謀るに難しとす、藺相如が振維天下の耳目を聳せりといへども、死に處するの一語を出ず、此段を觀る者此意を了解せば、情意を排絶し智門を開通し、應變の妙用を得べし、此二段は一篇の眼目にして、同じく應變する所以のものを練磨(ねりみがき)得る術を論ず、一は變を觀るより入りて、よく變に體して心を動ざるの道を得るを說き、一は明識(あきらかにしる)るより入て、よく必然の理を察し、心を動かさゞるの道を得る事を說く、工夫二途に出るに似たれ共、其揆一也、蓋應變の道を得るは、よく轉所に在り、轉所を得るは、心を動さゞるに在るを以て也

能明ニ此道一者、形レ人、而無レ形ニ於己一、因レ形置レ勝、人無ニ以知一也、故曰、大智無レ智、大勇無レ勇、大仁無レ仁、無形之謂也、無形理智不レ能レ測、天神不レ能レ窺、與ニ天地一同レ體、與ニ萬物一同レ情、獨立而

大商の家ゟ
千萬金を積
主人来客に
敬礼し千
秋万歳を
唱ゆる圖

無レ所ニ乖戾一者也、術之奥妙、至レ斯爲レ極也

此段は一篇の末を結でよく應變の道を得ればヲ天地萬物と情體を同うし、遙に衆情をはなれて獨り立ち、しかもまた衆情に乖き戾らず、よく衆知を得て變通自在なるを說くなり、本文上の文を承て、此應變の道を明にするものは、天道は變をもつて體とする事を了解して、其智門を開通し、時々刻々の小動には動に隨て變じ、非常の大變に遇ては、變に應じて大變し、心に豫め測る事なく、身に豫め待事なく、虛靜靈明時に隨ひ物に應じて、暫くも跡を止る事なし、故に我が心には形ある事なくして、よく人の形を明亮し、形によりて勝を置事、影の身に隨ひ、響の物に應ずるが如く、人其形跡をしる事なし、もしそれ半點も智に誇り勇に誇り、仁を恃とするの心あれば、一點の曇り鏡面の明を失はしむるが如く、靈通の用をなす事能はず、如何となれば、其誇る所恃とする所、心に機ざして事にあらはる、事にあらはるゝ事あれば、人に致されて人を致す事あたはず、これを無形といひ難し、故に大なる智あるものは、世人其智者なる事を知らず、大なる仁あるものは、世人其仁者なるをしらず、如何となれば、仁智の大なるものは心に仁智を施す、仁智に形なくして、人これをしる事無きゆへなり、人のしる事なきも道理なれ、無形は聖人の智も是測る事能はず、天神の神通力もこれを窺ふ事能はず、天地と體を同じうして、遙に衆情を出て獨り立、又衆情に和して乖き戾る事なきものなり、商術の修行此無形を得るを以て、至極の奥妙にいたるとする也とぞ

○此篇を六段に分ちて解釋す、第一段には、應變の用所をいはんとて、先道に常變有事を論じ、第二段には、天道もと變を以て體とすれども、人は唯常の常たるを知りて、變の常たるを知らざるを說く、第三段には、變の常たる所以は、天人の道常には微變じて、時に臨みて大動大變す、其變動する所閃電光撃石火の如く、倏忽に幻化して測待べからず、然るをよくこれを測待て、應變自在を得るを商術妙用とする事を說く、第四段には、商術の妙用應變自在を得んと欲せば、先四時老幼の變移する所を知り、よく終身の變を體して、一朝の變を愁る事無きに至るべきを論ず、第五段には、能く終身の變を體する事を得ば、智門開通して智識明亮し、よく必然の勢を察して、勝負を以て心を動さゞるを論ず、第六段は、よく天人の變通を了解せば、虛靜にして靈明に、時にしたがひ物に應じて形跡有事なし、商術の妙用此境にいたるを至極とする事を論ず、全篇の主意は應變に有、應變は則九篇の精神商術の妙用、是を得ざれば徒に舟楫を得て、舟を行、帆を使ふ事をしらざるが如し、是を以て商術の奥儀とするなり、而してこれを得るの道は、先變の極を知りて、而後變の通を得、よく變通を體して、天道と共に變化するに在り、故に全篇天人の變移を論じて、専ら情意を脫出し智門を開通する事を說なり、然も容易の事にあらず、虛事に馳て空見に陷る事なかれ、只々實地の修行を積み、したしく艱難辛苦を甞て、幾度か死生の域に出入し、精練磨切して一點の情意をも絕し脫、現然して其術を得べし、此篇の解に禪語をかりて說く所多しといへ共、禪に似て禪に非ず、如何

となれば、彼は寂滅をもつて樂とし、是は成業を以て樂となす、武田信玄禪法を惠林寺の僧にまなび、碧巖集を講究して時々所見を參呈せられけるに、年を歷て信玄の禪法漸々に精密に至らんとす、僧これを止めて曰、大守の禪法是迄なり、桑門の徒のする所大守と道を同じうすべからず、大守もし空寂の道を明らにして、山林の見を發せば、攻城野戰を明らにして土を拓き國を幷せ、民生の塗炭を救ふ志を廢して、敵國の爲に呑噬せられん、大守において禪學の用を論ぜば、矢石雨の如く降、劒戟電を飛すの間に於て、膚撓まず目逃かず、心思安立して機を兩陣の間に決るに在り、大守の修行今已にこれを得たり、是より已上は大守において益す所なきのみ、信玄これに從ひ、參禪の事を休められたり、されば大友宗麟・大内義隆皆禪法を學びて家を失ひ國を亡す、獨信玄はよく是を信じて、土を拓き國を幷せり、要とする所はよくこれを用ゆると用ひざるに在り、此篇の解に、多く禪法老莊の語を用ゆるといへども、其意は則惠林寺の僧と同じ、見る人其意を了て、其文に泥む事なかれ

商道九篇國字解四之卷大尾

文久二壬戌正月

書林

京都三條御幸町
吉野屋仁兵衛

江戸日本橋通一丁目
須原屋茂兵衛

同　二丁目
山城屋佐兵衛

尾州名護屋本町
永樂屋東四郎

大阪心齋橋通淨覺町
河内屋宗兵衛

同北久太郎町
河内屋喜兵衛

勸農策

武元立平著

勸農策上篇

武元立平著

農民ハ國ノ本ニテ、本手强ケレバ枝葉榮ヘ申道理ニテ、農民數多クシテ勢御座候得バ、米穀澤山ニ作リ出シ、國家豐饒ニシテ武運長久ニ御座候、又百姓困窮仕候而ハ、散田多ク物成減少仕候樣ニ成行候ヘバ、御上諸家中迄御難澁ニ相成、武備モ衰ヘ候儀ト奉ㇾ存候、書經ニモ民ハ是國ノ本、本固ケレバ邦寧シトアリ、又四海困窮セバ、天祿永ク終ラント御座候、今御國ハ中國ノ善地ニテ、山海ノ利モ御座候、其上御先代樣御善政ニヨリ、兵强ク民富ミ、他邦ヨリモ我國ヲ欽羨仕居申候處、近頃二十年來凶年多ク御座候ニ付、御百姓一統困窮仕、散田相增、御毛見多相成候故、御物成ノ納リ減少仕候而、御作廻御手詰ニ付、諸家中御減祿被ㇾ爲ㇾ成候御時節柄、誠ニ上下ノ困窮ト恐入奉ㇾ存候、別而無知ノ小民共ハ困窮ノ上、村役人共ヨリ歎キ願ヒ候得ドモ、御時節柄ニテ御救等行屆不ㇾ申候得バ御上ヲ怨望仕、陰口ニハアシ樣ニノミ申、扨又隣國ニハ小國トイヘドモ、下方ヘ手當厚所モ御座候得バ、只今ハ我國ノ民却而他國ヲ羨ミ慕フ樣子ニ成居申候、此上又凶年等御座候ハヾ、一揆騷動等ノ變難ㇾ計、誠ニ憂ヘ

恐ルベキ御時節ト奉レ存候、御上諸役人御心付不レ申候而ハ有二御座一間敷候得ドモ、下方ノ成行委細ニ知シ召サヌ事故、指而御取向方モ無二御座一儀ト奉レ存候、古ヘヨリ明君賢相ハ稼穡ノ艱難ヲ知リ、下民ノ疾苦ヲ察シテ、政事ヲ取行ヒ給フ故ニ、民服シ國治リ候、惣而下情ニ達スルハ政事ノ第一ニ而御座候得ドモ、只今ノ政務ハ皆世家世祿ノ御大臣方ナル故ニ、才智御座候而モ、地方ノ事下民ノ情狀ヲ委敷知リ給ハザルユヘ、其施シ行ヒ給フコト兎角行屆兼候哉ト奉レ存候、御上ニモ御仁惠ノ心被レ爲レ在、下方困窮ノ事ヲ思召候ニヤ、儉約ノ儀等嚴敷被二仰出一候得ドモ、時勢行直不レ申候樣子、孟子ノ所謂仁心仁聞有テ、民其澤ヲカフムラズト云ニ同ジク、御手段附不レ申候而ハ行屆不レ申儀ト奉レ存候、私事先祖以來御領分御百姓ニ而御座候ニ付、地方ノ御法百姓ノ成行ノ儀、委細見聞仕能在候ト相考候ニ、今窮民ヲ救ヒ國ヲ富シ兵ヲ强ク仕候事モ、御取向次第ニ而出來可レ申儀ト奉レ存候、下賤不肖ノ私共不二入申一條々御座候ヘ共、數代御下ニ住家仕蒙二御國恩一居申儀、此上モ末永ク御領分ニ安堵仕度奉レ存候所、只今ノ御時節柄ニ而ハ、御百姓一統相續仕不レ申勢ヒ、甚以恐入奉レ存候ニ付、存付ノ儀書認申候、若御政務ニ御心有御人御座候而、御取用モ被レ爲レ在候ハヾ千慮ノ一得、御益ニモ相立候事モ可レ有二御座一ト、僭越ノ罪ヲ不レ顧陳說仕候、大學ニ、財ヲ成ニ大道アリ、是ヲ生ズルモノ多ク、コレヲ食フモノ少ク、是ヲ作ル者疾ク、是ヲ用ルモノ舒キ時ハ、財恒ニ足ルト御座候、困窮ノ本ハ田地取實少キニヨリ、田地取實少キハ百姓ノ力弱リタルニヨリ、上ニ申ゴトク百姓勢ヒ强ク、多ク米穀ヲ作リ出シ候而、游

ノ者少ク相成候得バ、國豐カニシテ御上諸家中迄富有ナルハ、必然ノ儀ト奉レ存候

一　士農工商是ヲ四民ト申候、其外僧巫醫トノ類御座候、民ハ食ヲ以天トス、其食物ヲ作リ出スハ農ニテ御座候得バ、農民ハ本ニ而、其ノ外諸士・諸職人・商人・僧・巫・醫・トノ類、皆農夫ヨリ食物ヲ取リテ生活仕候者ニ而御座候、夫故ニ農民多ク、其ノ外ノモノ少ク御座候得バ、食足リ財豐カニ相成候、然ルニ今ハ農民年々ニ減ジテ、其ノ外ノ士・工・商・僧・巫・醫・トノ類ハ次第ニ數增シ、別而商人多ク相成候、是ニテ食足ラズ財乏シキハ理リニテ御座候、農民ハ艱苦シテ利少キモノニ而、其ノ外商人ナドハ手ヲ游シテモ、利多ク御座候故、皆農民ヲ厭ヒ離レ候樣ニ成行候、御法ニテ無レ故農民ヲ止メ、外ノ渡世仕候事御制禁御座候事ニテ御座候得ドモ、兎角農業計ニテハ生活仕ガタクニ付キ、片手ニ成共外ノ渡世ヲ營ミ候樣ニ相成候、夫故御田地荒取實少ク、上下ノ困窮ト相成候儀ト奉レ存候

一　近來町方諸商人モ難澁仕、渡世難ニ相成レ樣子、是モ農民減ジ在方ノ商物多ク相成候故ト奉レ存候、農民ハ多キ程勢ヒヨク、商人ハ少キ程勢ヒヨキモノニテ御座候、其ノ譯ハ農民ハ多ケレバ田地ヲ爭ヒ作リ候テ、取實ヨク候故、勢强ク相成、商人ハ少ケレバ賣物ヨク賣レ候故勢ヨク相成候、左候得バ農民ノ數ヲ多ク仕候得バ、町方ニモ利潤ニ相成候儀ト奉レ存候

一　寺社ハ人ノ敬ヒ尊ブニヨリテ立行候物ニテ御座候所、近來ハ世上困窮仕候故、寺社ノ取箇少クニ付、堂塔宕社等造作モ出來不レ申、僧徒巫祝ノ衣食足不レ申ニ付、諸勸化多ク出シ、百姓ヨリ取集候事

多數事ニ御座候、是レ農民ノ勢ヒ強ク相成リ候ヘバ、寺社ヲモ自ラ用ヒ候テ、勸化等不レ仕候而モ相濟候樣ニ成行可レ申儀ト奉レ存候、其ノ外虛無僧・浪人・又ハ廻國千ヶ寺等ノ類數多相成、乞食等モ次第ニ相增シ、少シヅツノ事ニテモ皆農民ヲ損ジ候樣ニ相成申候、且御國中農民共モ生產無ニ御座ニ者多ク、今樣ニ四方ニ離散シテ、乞食仕候樣ニ成行候樣子、兎角農民少ク相成候而、諸人困窮仕申樣子ニ御座候

一 仁政ノ第一ハ稅斂ヲ薄フスルニテ御座候、然ルニ今ノ年貢ノ定法相考候ニ、古ヘ王代ノ法、幷井田ノ法トハ大ニ相違仕リ、今ノ年貢ハ至テ重キ御法ニテ御座候、先井田ノ法ト申ハ、田ノ中ニ井ノ字ヲ畫シ、九ツニ分チ九百畝ト定メ、農夫八人是ヲ受取リ、各百畝ヅツヲ私田トシ、中ノ百畝ヲ公田トシ、八人ノ力ヲ合テ是ヲ作リ、其有米ヲ上納ス、凡十分ニ一分ヲ取ルニ當リ候、是聖人ノ制法ニテ、增減スベカラザル所ト承リ申シ候、又我邦上古ハ知ラズ、中古ヨリ唐ノ租・庸・調ノ三法ヲ以テ民ニ取給フ、孝德天皇大化二年ノ詔ニ曰ハク、凡田ハ長三十步廣十二步ヲ段トシ（三百六十步ナリ、今ハ三百步ヲ以テ段トス）十反ヲ町トシ、反ノ租稻二束二把、町ノ租稻二十二束、山谷阻險地、遠ク人稀ナル所ニハ便リニ隨テ量リ（義解ニ、段ノ地ニテ稻五十束ヲ得、束ノ稻舂テ米五升ヲ得トイフ、サレバ五十束ハ米ニシテ二石五斗ナリ、其內年貢分二束二把ノ米壹斗壹升ナリ、是ヲ二十分ニ一分ヲ取ルニモ當ラザル法ナリ）舊ノ賦役ヲヤメテ田ノ調ヲ行ヒ、凡絹絁絲綿ハ並ニ鄉土ノ出ス所ニ隨ヒ、田一町ニ絹一丈、四町ニ而匹ヲナス、長サ四丈廣サ貳尺半、絁二丈、二町ニ而匹ヲナス、長廣絹ニ同ジ、布四丈、長絹絁ニ同ジク、一町ニ而端ヲナス、別

ニ戸別ノ調ヲ收メ、一戸ニ皆布一丈二尺、凡ソ調ノ副物贄亦鄉土ノ出ス所ニ隨フ、凡官長ハ中馬一百戸毎ニ一疋ヲ輸シ、細馬ノゴトキハ二百戸ゴトニ一疋ヲ輸シ、其馬ヲ買フ、直ハ一戸ゴトニ布一丈二尺、凡ソ兵ハ人身刀弓弓矢幡鼓ヲ輸シ（古ヘハ兵農分ラズ、兵ヲ農ヨリ出セリ）凡仕丁ハ舊三十戸毎ニ一人ヲ改メテ、五十戸ゴトニ、一人ヲ以テ諸司ニ宛テ、五十戸ヲ以テ仕丁一人ノ粮ニアテ、一戸ニ庸布一丈二尺、庸米五升、凡ソ采女ハ郡ノ少領以上ノ姉妹、及ビ子女ノ形容端正ナルヲ貢セ（從丁一人從女二人）一百戸ヲ以テ采女一人ノ粮ニ宛テ、庸布・庸米皆仕丁ニ準ズト、是レ租・庸・調ノ法ノ全ク具リ候初ニ而御座候、其後增損御座候得ドモ、大抵皆是ニ準ジ候、二十分一ノ租法ナレバ、井田十一ノ征法ヨリモ猶輕シ、其ノ外ニ庸・調ト云物御座候得ドモ、是レモ至テ輕キ事ニテ、今ノ足役高掛リヨリ遙ニ少ナルベシ、是ヲ以テ思フニ、王代ノ間、上下共ニ富有安樂ナル事、中々今ノ企及スベキ事ニアラズト被レ存候、夫故ニ二千餘年長久靜謐ナリシ事ト奉レ存候、源平ノ兵亂初リ、武家ノ代ト成候テハ、土地ノ征法次第ニ重クナリ、租・庸・調ノ法モ廢シテ、一變シテ貫高トナリ、又一變シテ今ノ石高ト相成候、武家ノ代ニ成、戰爭ノ時ハ、臨時ノ高掛リ軍役等相增候事ト奉レ存候、東鑑ニ、文治元年、段別ニ兵粮米五升ヲ課セ、弘長三年ノ上洛ニ、百姓等所役段別ニ百文、五町別ニ官駄一疋、夫二人充ベシナド相見候、然レドモ、猶輕キ事ト被レ存候、京都將軍足利家ノ代ニ相成候而ハ、今樣ノ課役次第ニ相增シ、別而義政公ノ時ニ、五年ノ間ニ九度晴ノ大儀ヲ行ハレ、諸家ノ大營萬民ノ費夥敷候ヒショリ、天下初而困窮仕、諸國ノ士民ニ課役ヲカ

ケ、色々ニ様ヲカヘテ譴責仕候ニ付、國々ノ名主百姓ハ耕作ヲモシ得ズ、田畑ヲ捨テ乞食仕、手足ニ任セテモタヘ行候様ニ成行キ候由、義滿公ノ時ハ倉役四季ニ掛リ、義教公ノ代トナリテハ一年ニ十二度掛リ候由、又カノ借錢ヲ破ル爲ニ前代未聞ノ德政ト申事ヲ初、此代ニ十三度迄行レ候由、夫故ニ足利家ノ末世ニハ、天下一日片時安堵仕候事モ無二御座一候ヨシ、其ノ後信長公・秀吉公ノ代トナリテハ戰爭ヤムコトナク、武士ハ多ク、農夫ハ少ク相成、天下彌苦シミ候事ト奉レ存候、又武士ノ戰功ヲ賞セン爲ニ石高ヲ定メ、農民ヨリ取ル所甚重ク相成候、天正中迄ノ檢地ハ方六尺五寸ヲ一歩ト仕居申シ候ヲ、文祿中秀吉公ノ命ニテ、方六尺三寸ヲ一歩トシ、此ノ時ヨリ初而三十歩ヲ一畝トシ、十畝ヲ一反トシ、一段三百歩ト成ル初ニ而御座候、又文祿中、九條ノ法制ノ其三ニ、天下ノ賦税三分二ハ地頭是ヲ取、三分一ハ耕民是ヲ取ベシト秀吉公令セラレ、此ノ時ハ專ラ石高ニ成ツテ、村高何石ト申ハ、直ニ糓納ノ年貢高ナル由ニ御座候、其ノ後米納ト成リ、取箇ト申事出來テ、四ツ物成三ツ五分物成ト申事ニ相成候由、左候ヘバ、村高百石ト申ハ、直ニ糓百石ノ事ニ而御座候ヲ、米ニシテ四十石或ハ三十五石アルヲ、四斗入三斗五升入俵ニ致シ候而、高百石ハ米百俵取ルト申事ニ相成リ候由承傳候、只今地方年貢ノ法、國々少ヅツ相違ハ御座候得ドモ、專ラ免斗代ト申事定リ候而上納仕候、先田地ノ土ニ品ヲ分チ、上田・中田・下田・下々田・開下々田抔ト申シテ、所ニヨリ二十品程ニモ分レ候、其土ニ斗代ト申事極リ候、斗代御國村々相違御座候得ドモ、大抵上田一反二石、中田ハ壹石八斗、下ハ壹石六斗、

畑ハ上畑壹石六斗、中畑壹石三斗、下畑壹石ト申ス位ニテ、夫ヨリ段々下リ申候、是ヲ高ト名付、二十高十八高ナドト申シ候、其高ニ免ヲ極メ候、免ハ所ニ寄、平シ免ト段免トニ樣御座候、平シ免ハ上中下皆一免ニ而、段免ト申スハ、上ハ何程、下ニ又ハ開等ニハ何ホドト高下御座候、御國ナド大抵中分ノ所、田免六ツ・畑免五ツト申ス位ニテ御座候、高ニ免ヲカケテ物成ト名付、上田壹反二十高ニ而貳石、是レニ六ツ免ヲカケテ物成壹石貳斗ニ相成候、物成壹石ニ夫米ト申モノ六升、口米ト申モノ貳升、糠藁代六合五才ヲ加ヘテ、定米トシテ是ヲ上納仕候、左候ヘバ上田一反ニ付斗代二十免六ツナレバ、定米壹石三斗三合三勺上納仕候、又壹俵三斗四升五合入ニ而、三斗貳升ノ切手ニ相成候得バ、其升間一俵ニ貳升五合御座候、左候得バ上田一反ノ年貢米壹石四斗餘ニ相當リ候、高免物成ト申スハ元來籾高ノ事ニテ、免ト申スハ籾ヲ脱グト申儀、物成ト申ハ米ニナルト申事ニテ名付タル由承申候、然レドモ籾壹石ニ、凡米五斗ハ御座候得ドモ、六ツ免ダケノ米ニ無二御座一候、七ツ八ツノ免ハ猶更ノ事ニテ御座候、大抵田地實リ中分ニテ、一反ニ有米貳石ニテ御座候得バ、二十高ト申スハ凡田ノ有米ニ相當リ候、是レニ六ヲカケテ年貢ト定メ候ヘバ、是十分ニ六分ヲ上納スルニテ御座候、凶年等ニテ年貢不足仕候得バ、毛見ト申ス事御座候而年貢相定リ候、毛見ノ法モ六公四民ト申ニ相當リ候、廿田毎ニテ百歩ヅツニ分チ候テ、其有籾下積リ仕、其上一ヶ所ヲ刈取、升ヲ入テ御極被レ遣、其有籾ニ三ヲカケテ德米ト名ヅケ、是ヲ上納仕候、籾貳石ニ而米壹石御座候ヲ、一二三ガ六斗ヲ公米ト仕リ、殘四斗ヲ四分

米ト申シ而民ノ私ト仕候、其故四損六德ト申候、此法ニテ考候而モ、十ニ六ヲ取ルニ相當リ候、左候得バ、今ノ年貢ノ法ハ秀吉公御極候通、三分二地頭是ヲ取リ、三分一耕民是ヲ取ルト申候ニ當リ候、右ノ年貢ノ外ニ、足役幷ニ諸入用ヲ高ヘ割出サセ申候、此高掛リ凡上田壹反ニ米三斗餘モ出シ申候、左候得バ、壹反ノ有米貳石ナレバ、年貢壹石四斗高掛リ三斗出シ候ヘバ、殘リ三斗ホドヤウ〳〵民ノ取所ニテ御座候、壹人ノ農夫ニテ、凡四五反ヲ耕作仕候而、取ル所三五ノ壹石五斗ノ米ニテ家內ヲ育ミ、諸入用迄如何シテ引足リ可レ申、此ノ積リニテハ民ノ食ト仕候ハ何モ無ニ御座一候得ドモ、當國ナドハ總テ二度作ニ而、夏毛ニ麥ヲ作取リ、是ヲ扶持方ト仕、又上中ノ田ハ年貢高ク御座候得共、下々ヨリ以下開方新開等ノ田地ハ、取實モ不足候得ドモ、年貢少ク又餘地モ御座候故、ヤウ〳〵百姓取續候事ト奉レ存候、然レドモ、右之通重キ稅法ニテ御座候故、耕作計ニ而食足リ不レ申、無據片手ノ外ノ渡世ヲ營ミ候事ニテ、必シモ農民ノ苦ミヲ厭ヒ候バカリニテモ無ニ御座一候、井田ノ征法十ガ一、王代ノ租法二十分一ト申スニクラベ候テハ、今ノ年貢十ガ六ト申ハ、大ニ相違ノ事ニテ、不審ナル程ニ奉レ存候、左候ヘバ井田ノ時ト王代ノ民トノ豐ナルト、今ノ民ノ豐ナルトハ同ジク豐ナルト申スニモ、大ニ相違御座候事ト奉レ存候、今ノ世上困窮ハ、本此稅法重キニヨリ申事ニテ御座候ヘバ、仁政ト申ハ稅斂ヲ薄フスルガ第一ニテ、稅斂ヲ薄ク仕候ヘバ、民富國豐ナルハ必然ニテ御座候、然レドモ二百年來濟來リ候年貢ノ法ヲ、今更井田又ハ王代ノ稅法ノゴトクニ仕候事ハ、迚モ出來不レ申候得ドモ、上タル

御人ハ、是等ノ事得與御考辨無ニ御座ニ候而ハ、農夫ノ艱難ナル事御合點ナク、又困窮ヲ救フ手段モ付不レ申候故、歴代ノ租法アラ〳〵書記シ申候、今ノ租法ヲ改メズ其儘ニテモ御取向方ニ而、民富國饒ニ相成可レ申儀下モニ陳說仕候

一 芳烈公民事ニ心ヲ用ヒ給ヒ、和氣郡ニ井田ヲ作リ試ミ給フ、然レドモ、我邦ハ總テ平曠ノ土地少ク御座候故、井田ノ法ハ行レ不レ申候、但シ其法ニ準ジテ征法ヲ立候テ出來可レ申事ト奉レ存候、然ルニ烈公モ夫レ迄ノ免斗代ノ法ヲ改メ給ハザルヲ見ル時ハ、御取向方ニテ法ヲ改メズ候而モ、百姓相續仕候事ト奉レ存候、尤其時代ハ百姓格別貧富ノ差等ナク、皆平均ニ御田地ヲ所持仕、一等耕作ニ力ヲ用ヒ、商人職人等ニ成テ末ヲ逐フ者モ少ナク、諸事簡古ニシテ繁雜ノ入用無ニ御座ニ故ニ、年貢ノ外ニ高掛リト申スモノ至而少ク、人ハミナ淳樸ニシテ、奢侈ノ風無ニ御座ニ候故、上下共ニ富有安樂ナリシ事ト奉レ存候、只今ニナリ、俄ニ其時ノ風俗ニ戻シ候事ハ出來不レ申事ト奉レ存候得ドモ、其流弊ノ出來ル所ヲ察シ候而、時勢ニ應ジテ救ヒ候テ、又中興モ計ルベキ事ト奉レ存候、其ノ儘ニ捨置候テハ、病人ニ醫藥ヲモ用ズ、手ヲ束テ其死ヲ待ト同ジ事ニテ御座候

一 田地モ先年ヨリ段々開キ濟ニテ、古開・開方。新開・新田ナド多ク相成候、ナ荒廢仕候田地モ餘ホド御座候得共、古檢地ノ節ヨリハ開出シ、大ニ相增シ候事ト奉レ存候、左候ヘバ御物成モ相增、又下方ニモ新開地ハ下免ニ而、年貢安ク利分多キ當リニテ御座候所、今様ニ益及ニ困窮ニ申候ハ人力減ジ候故、

地力ヲ盡ス事能ザルニヨリ候儀ト奉レ存候、夫レ故ニ新開田地ハ人力餘リアル時ハ大ニ利益御座候得ドモ、今様ニ農民減少仕人力足ラザル時ハ、新開地却テ損亡多キ事ト奉レ存候、其ノ故ハ田地多ク相成候程人力彌行屆不レ申、古田ノ年貢高キ所ヲ麁略ニ仕候故、土ヤセテ取實少ク相成候、殊ニ新開ハ皆川寄セ川端、又ハ海邊等ニ而御座候故、洪水ノ節ハ砂入・川落等ニ相成、又海邊ハ汐枯等ニ相成候而、大ニ人力ヲ費シ申候、又川邊迄開詰メ、空地少ク、水筋細ク相成候故、少シ洪水有レバ水損多ク、又土地廣ク相成候ホド水不足仕リ、谷川・池掛リ等ハ旱損多ク相成候、水損・旱損等多ク相成候ハ、新開地ノ增候故ト奉レ存候、其上池・堤・井・關・溝等ノ普請ニ多クノ人夫ヲ用ヒ、其ノ入用莫大ノ儀ニテ御座候、シカレドモ人力サヘ行屆申シ候ヘバ、普請等モ手早ク成就仕、其仕方モ念入候様ニ相成、又水旱ノ手當ヲモ能仕候故、新開地利益多ク御座候得ドモ、只今ノゴトク農民衰微仕リ人力不足致候ヘバ、新開地ハ却而古田ノ爲メニ不レ宜、困窮ノ甚ト相成、然ルニ人ノ議スル者、新開セシ荒地ヲ廢ス事ノミ御國益ト申ス事心付候而モ、人力不足仕候ヘバ却而國益トハナラズ、害ニ成候事ヲ不レ存候、新開ヲ務メテ仕候ヨリ、農民ヲ增人力ヲ强ク仕候方第一ニ而、人力餘リ有ル時ハ自然ニ新開モ出來、荒地モ廢シ候事ト奉レ存候

一　惣而土地ノモノヲ生ズルハ、人力ニヨリ候事ト奉レ存候、丈夫一人牛一疋ニ而、平場ナラバ田七八反ヲ耕作シ申スベク、山郷ナラバ三四反ヨリ上ハ得耕シ不レ申、田地多、人力行屆不レ申候ヘバ、地性瘠セ、

又肥シヲモ得用ヒ不レ申故、取實少ク相成候、田地少ク人力餘リアル時ハ、耕シ耘リ等念頃ニ仕、肥シヲモ用ヒ候故、取實多ク御座候、尤邊鄙ノ國ニテ土地廣ク租稅少キ所ハ、田地ヲカワル〳〵休セ候而作リ候ヘバ、取實ヨク御座候由ニ候得ドモ、御國ナド中國ニテ、土地ニ餘計無二御座一候故、租稅重ク、田地ヲ一年モ休セ候而ハ、年貢出來不レ申候ヘバ、地力ヲ盡シテ作リ不レ申テハ物成納リ不レ申候、地力ヲ盡スニハ、農民少ク候テハ行屆不レ申候、然ルニ今耕作スル者年ニ減ジ候故、一人ニテ二人前ノ田地ヲ作リ候様ニ相成リ、耕耘肥シ等行屆不レ申、取實ハ次第ニ少ク相成候而、年貢ハ定ノ通拂出シ、高掛ハ前々ヨリハ大ニ相增候故、農民ノ辛苦困窮言ン方モ無二御座一候、殊ニ牛ヲ持居申者共モ、力弱リ候而ハ、牛ヲモ得養ヒ不レ申様ニ相成リ、牛數先年ヨリ過半減ジ申、此趣ニテハ百姓迚モ得取續申間敷候、但シ兒島ナドノ海邊、又ハ一向北ヘ寄山中ナドハ田地少ク人多ク、耕作ノ外ニ魚・鹽・炭・薪ナドヲ以渡世仕候所ハ、左程ニモ無二御座一候得共、但シ平地ノ田地多キ所、耕作計ヲ渡世ニ仕候村々ハ、如何共可レ仕様無二御座一様ニ相聞ヘ候、平地ノ田地多キ所コソ御物成多ク御座候ニ、左様ノ所亡所仕候様ニ相成候テハ、莫大ノ御損亡ト奉レ存候

一　在方一統困窮仕候內ニ、間ニハ豪富ノ者モ相見ヘ候、是ハ如何シテ富有ニ相成候ゾト申ニ、耕作計ニテ身上仕出シ候ニテハ無二御座一、多クハ酒油店商質屋等ニテ御座候、一向無商買ノ者モ皆金借シヲ仕リ、其利息ヲ取テ手前ヨク相成候ニテ御座候、前ニ申通、今ノ田地ハ年貢高ク御座候故、耕作計

ニテハ、渡世出來不ㇾ申、兎角商人ノ世ノ中ニテ御座候、又ハ金借ホド利分ヨキモノハ無ニ御座一、間々不拂者御座候テ、損亡多ク御座候得共、利分ノ方多キ事ト被ㇾ存候、又借銀スル者ホド衰ムベキ事ハ無ニ御座一候、素ヨリ不足仕候ユヘニ借銀致シ候上ニ、一割半、又ハ二割等ノ利息ヲ加ヘ返濟仕候事、如何シテ出來可ㇾ申哉、夫故ニ所持ノ家財・山林、又ハ年貢安キ田畠ナドハ、此借銀利息ニ皆銀主ヘ取ラレ候樣ニ相成候ニ付キ、豪富ノ者ノ取持仕候田畠ハ、年貢安ク加德御座候田地ニテ御座候、然レドモ此ノ豪富ノ者ト申ハ、十ケ村ニ一人カ貳人ニテ御座候、又借銀モ不ㇾ仕身上程候ニ渡世仕候モノ、百家ノ村ニ十人ニハ過不ㇾ申候、殘ル九十人ハ皆困窮ノ小民ニテ御座候、此小民ノ所持仕居申田畑ハ、不ㇾ殘年貢高キ地ニテ御座候、右ノ豪農ハ年貢ヤスキ田地ヲヨク作リ候故、取實多ク、年貢モヤスク御座候得バ、加德御座候得ドモ、小民ハ力弱ク田地ニ肥シ手間ヲ得用ヒ不ㇾ申、牛ヲモ借雇ヒニテ耕シ候故、思フ儘ニ得仕不ㇾ申、地性瘠衰ヘ取實少ナク、有米不ㇾ殘拂出シ候テモ、年貢高掛リ不足仕候ヘバ、又其不足ヲ借銀仕候テ相濟シ候故、借銀年々ニ嵩高ニ相成候而、如何トモ可ㇾ仕樣モ無ニ御座一候、素食物ハ糟糠・菜雜炊モ腹ニ滿ルナドハ得給不ㇾ申、衣服ハ襤褸モ身ニ周カラズ、至而見苦シク、居宅ニテ烟ヲタテ晝夜ヲ分タズ働キ候而モ、年貢高掛ト借銀ノ利息トハ足リ不ㇾ申候ニ付、男女共壯者ハ皆奉公ニ罷出、人ノ婢僕トナリ、家ニ殘ル者トテハ老弱計ニ相成、彌田地ニ力ヲ用ルコトモナラザレバ彌取實ナク、飢寒ニ及バントスルモノ數多御座候、夫ユヘニ男子モ年タケタル迄妻緣モ得不ㇾ仕、女子モ

一生寡婦ニテクラシ候者多ク御座候ヘバ、是レ内ニ怨女アリ、外ニ曠夫有テ、子ヲ産テ人ノ増事少ク御座候、間ニ妻ヲ娶リ子ヲ生候テモ、一人二人ハ生育候得ドモ、三人四人ニ至リ候テハ、扶持方無二御座一候故、無レ據御法度ニ背キ子ヲ取揚ズ、其ノ儘見殺ニ仕候モノ多ク御座候、カヽル事ドモ誠ニ目モ當ラレヌ有様、申スモ心ヲ痛マシメ候程ノ事ニテ御座候、ケ様ノ譯ニテ農民ノ數減ジ候事ニテ、皆外ノ渡世ヲ營候計ニテモ無二御座一、元來人ノ増申事ハ無二御座一候、痛哭可レ仕事ト奉レ存候

一　極貧者ドモ年貢高掛リ年々未進、及ビ借銀嵩高ニテ得償ヒ不レ申者ハ、其未進ヲ村方ヘ割村相辨ヘ申候、是ヲ村マトヒト申候、此村マトヒニ相成候者ハ、一列ノ百姓ヨリ格ヲ引下ゲ、寄セ小屋ト申候テ、非人小屋ノ様ナル所ヲシソラヒ候テ、其者ヲ指置候テ、其持株田地ハ村方惣作ニ仕申候、是ヲ散田ト申候、元來散田ト申スハ、荒廢仕候惡田ノ儀ニテ御座候處、今ノ散田ハ皆小民ノ持株上田ニテ年貢高キ地、本ハ取實宜敷處ニテ御座候ヲ散田ト申シ候、本取實宜敷上田ニテ御座候得共、下々田ニモ劣リ候様ニ相成取實無二御座一、年貢ハ高ク御座候故、外ヘ請込申者モ無二御座一、無レ據村惣作ニ仕候故、彌地性衰ヘ、荒廢候同様ニ相成、年貢米生立不レ申候ヘドモ、定リノ年貢拂上不レ申候テハ相濟不レ申候故、其ノ間米ヲ村中ヨリ足シヲ仕、又ハ御毛見等願上候テ上納仕候、此散田年年相增候故、御物成次第ニ減少仕候、別テ百姓ハ自分持株田地ノ年貢ヲモ拂兼居申上ゲ、右ノ惣作地間米ヲ出シ、田地ハ手餘リニテ作配仕方無二御座一、必至ニ迷惑仕、次第ニ村マトヒニ及ビ申候、此村マトヒ人相增候ホド農

民ハ減ジ田地ハ餘リ、殘百姓モ得コタヘ不レ申、亡所仕リ候樣ニモ成行候時勢ニテ御座候、ケ樣ノ村方ニ居リ申モノハ、タヾ田地ヲ持申候故却テ身過難レ仕、何卒田地ヲ離サント計仕候、夫故ニ農夫減少仕、御物成生立不レ申樣ニ成リ行、御損亡莫大ノ儀ト奉レ存候、尤海邊山中ナド人多ク田地少キ處ハ、困窮ト申シ候テモ渡世仕安ク、御物成損亡モ無ニ御座一候、タヾ少ニテモ散田御座候村方ハ致方無ニ御座一候、夫故ニ、村々困窮ノ差別ヲ考候ニハ、右ノ惣作散田ニテ相知レ申候、村ヲ並ベ居申候テモ、其困窮ノ次第大ニ不同御座候、是ニテ農民ノ數ヲサヘ相增シ候得ハ、御上下方トモ困窮ハ不レ仕ト申譯能相知レ候儀ト奉レ存候

勸農策上篇終

勸農策 下

一　當時ノ流弊困窮ノ本ハ農民減少仕候故ノ儀、上卷ニ論ジ候通ニ御座候、然ラバ今ノ困窮ヲ救ヒ候致方ト申スハ、第一諸家中在宅被二仰付一候事急務ト奉レ存候、古ヘハ兵農一ツニテ、無事ノトキハ山野ニ散在シテ耕作仕、兵亂御座候時ハ、一族郞等ヲ集メテ軍立仕候事ト奉レ存候、是ヲ士着ノ兵ト申候、御當代ヘ相成候テハ、兵農判然トシテ別レ、百姓ハ田野ニ散在シテ、耕作計仕、年貢ヲ排上、諸士ハ城下ニ集リ居テ、祿ヲ得テ文武ノ道ヲ習フ樣ニ相成申シ候、勿論是ハ良法ニテ、管仲ガ齊國ヲ治メ候仕方、此ノ通ニ士農工商ヲ混雜不レ仕樣ニ、各其所ニ集居キ候事相見ヘ申シ候、是ニテ諸士百姓トモ衣食財用足リ候得バ、甚宜敷御法ニテ御座候、然レドモ只今ノゴトク百姓衰微、田地荒廢仕候樣相成候テハ、御物成納リ少ナク、諸士モ減祿ニテハ衣食用度不足仕候時節ニテ御座候得バ、此弊ヲ救フニハ、又昔ノ通兵農ヲ一ツニ不レ仕候テハ、相成不レ申奉レ存候、今ノ諸士ノ知行ト申ハ、地方ニテ直取リニ而御座候得バ、元來士着ノ法ニテ御座候得ドモ、城下ニ集居テ田地稼穡ノ事ハ預リ知ラズ、百姓ヨリ排上候年貢ヲ、定メノ通リ取納候計ニテ御座候ヘバ、名ハ士着ノ樣ニテ實ノ士着ニテハ無二御座一候、其上城府中ニ集居仕候ヘバ、薪雜事其ノ外諸入用奴婢ノ給米迄、皆知行米ニテ仕候事故、引足リ不レ申、又常

ニ游食ニテ御座候故、酒食宴會等ニ奢リ長ジ、入用多ク相成候故、諸家中皆困窮及ビ候事ト奉レ存候、殊ニ諸家中ノ奴僕ハ、皆在方農民ヨリ出テ相勤候ヘバ、コレニテモ農民多ク減ジ候、又一旦家中ニ奉公仕候ヘバ、美食美服ニテ手足ヲ働サズ安樂ニ暮候事故、再ビ農民ニ立返リ、麁食麁服ニテ苦勞仕候事得仕不レ申候ニ付、是等皆游民ニ成果、小奉公人又ハ小商人等ニ相成申候、是レ大ニ農民ノ減ジ、田地ノ荒レ候本ト奉レ存候、今諸士在宅ト申儀、一通ノ在宅ト申迄ニテハ何ノ益モ無ニ御座一候、其仕方ヲ荒々申候ニ、人多ク地狹、農ニ餘力有テ、惣作散田無ニ御座一村方ハ、不レ殘御藏百姓ニ被ニ仰付一、唯農民少ク手餘地御座候村方ヘ諸士在宅被ニ仰付一、百石ノ知行ナレバ三ツ成、三十石ノ取箇ニテ御座候得バ、地面ニテ三十石ノ年貢出申田地ヲ被ニ下置一、其ノ田地ヲ作リ取リニ可レ被ニ仰付一、三十石ノ年貢地ト申スハ、二十斗代六ツ免ノ地ニテ申候得バ、凡田貳町ナリ、貳町ノ田地ヲ作ルニハ、平場ニテ丈夫四人、山寄セニテ凡五人ヲ用ユベシ、其人ハ其村々ニテ百姓ノ貧者ヲ家內共ニ召抱テ、譜代ノ家來トナシ、又ハ兩三人ハ年切ノ奴婢ニテモ買置而耕作仕リ候ヘバ、主人自身耕作仕候ニハ及ビ不レ申、其ノ家來皆耕民ニ相成申候、扨右ノ田貳町ニテ裏毛ノ麥ヲ取候ヘバ、凡安麥四十石ヲ收ムベシ、四拾石ノ麥ハ二十人ヲ養フベシ、然レバ右ノ家來ノ扶持方ハ麥ニテ足ルベシ、扨二町ノ田ノ有米中分ノ實ノリニテ、四拾石ヲ收ムベシ、其內主人ノ家內喰分ニ十石引テモ、殘リ三十石ハ賣拂ヒテ諸入用トナスベシ、百石ノ知行ニテ三十石取ッテ、其ノ三十石ヲ喰分ト諸入用ニ用候ヲ作リ取リニ仕候ヘバ、

喰分程引テ殘ル所三十石諸入用ニ相成候ヘバ、同ジ百石ノ知行ニテモ、地面ニテ直ニ取リ候ヘバ、大ニ取箇多キ事ニテ御座候、二百石三百石ノ知行モ、此割ニテ推テ知ルベシ、又貧民ヲ譜代ニ召抱候ヘバ、其衣服小遣ヒ等構ヒ候迄ニテ、給米ハ入不レ申、又田野ニ散在仕候得バ、酒食宴會ノ費ヘ少ク、薪雜事ニ錢ヲ出シ不レ申候得バ、大ニ利分多御座候、尤右ノ田地ニ高掛リヲ出シ、又耕作仕候ニ牛銀・肥代・農具等、又ハ家來ノ衣服諸遣ヒニ入用御座候得ドモ、是モ最初ハ其ノ入用多カルベク候ヘドモ、四五年ノ後ハ入用モ瑣細ノ事ニテ、取納ル所多ク相成可レ申候、扨テ又平士以下モ在宅仕候得バ、是ハ田地割合モ少ク御座候ヘバ、自身モ農業仕候樣ニ可レ仕事ニ御座候、此ノ法行レ候テ彼惣作散田ト申ハ一向無ニ御座一候樣ニ相成リ、人力多ク田地ニヨク力ヲ用ヒ候ヘバ土肥ヘ候テ、四五年ノ後ハ取實倍シ、米穀澤山ニ相成可レ申候、左候ヘバ諸家中ハ勿論、不日ニ富有ニ相成可レ申農民モ勢强ク困窮ノ患ハ有ニ御座一間敷奉レ存候、ケ樣ニ相成候ヘバ、勿論散田毛見等ハ少ク相成、御物成ノ納年々相增可レ申、又人力餘リアル時ハ、荒地モ自然ニ開發シ、新田ヲモ開可レ申候、尤最初諸士在宅被ニ仰付一候節ハ、居宅普請等入用多カルベク候得ドモ、其入用何ホド御座候テモ、出方手段可レ有ニ御座一儀ト奉レ存候、此手段ハ筆ニノベガタク、臨時ノ計ニ可ニ相成一儀ニ御座候

一　年貢不足仕候ヲ未進ト申シ候、此未進又ハ未納ト申詞ハ、元來表向ヘカヽリ候儀ニテ御座候處、今ノ未進ト申ハ、皆私事ニテ、公ニハ少シモ未進ハ不レ仕候、尤御法嚴敷年貢不足仕候ヘバ、百姓村役人

ドモ曲事ニ被ニ仰付一候事故、今未進ト申スハ表向ニハ米壹合モ無ニ御座一、皆內分ニテ借銀仕公儀ヲ皆濟仕候、公儀ヨリモ拜借銀出居申スモ御座候得ドモ、可レ成ホドハ下方ニテ借銀仕候、此未進借銀ハ皆頭百姓、又ハ有德成諸士町人ノ手ヨリ出申候、御國中未進銀高凡貳千參四百貫目御座候由、當年貢高掛リヨリモ、此ノ未進借銀ノ利息ニ貧民共皆苦候儀ニ御座候、此未進銀差別片付出來不レ申候テハ、小民安堵仕候事ハ無ニ御座一候、彼德政ト申ス事ハ足利氏ノ衰政、法トスベキ事ニテ無ニ御座一候、別ニ借銀片付仕方可レ有ニ御座一、是モ臨時ノ取計ニテ、筆紙ニ難レ宣儀ニ御座候

一　上巻ニモ申スゴトク、小民ノ借銀仕候程哀ムベキ者ハ無ニ御座一、家財田畑山林モ此借銀ノ利息ニ取ラレ、果ハ身ヲ賣リ候樣ニ相成候、又金借シホド利分多キ事ハ無ニ御座一、利息ハ二割天下ノ通法ニテ御座候得ドモ、一割又ハ一割二三歩・四五歩・七八歩段々御座候、此ノ利息ト申ハ少シモ苦勞セズシテ取候事故、是レニ過タル利方ハ無ニ御座一候、在々ニ加德有百姓、幷町家ノ有德成モノモ、多クハ此金借シニテ身上仕出シ候ニテ御座候、年貢安ク取實ヨキ加德ノ田畠モ、皆此ノ利息ニテ買取所持仕候而、下男下女ヲ召抱へ、自身ハ安樂ニ暮シ申候、是ヲ兼幷游惰ノ弊ト申候テ、百姓平均ナラザル譯、古へヨリ憂ト仕候儀ニテ御座候、兼幷ナルモノハ多クハ游惰ニ成申シ候、然レドモ人ニ貧富ノ次第アルハ自然ノ道理ニテ御座候、俄カニ平均ニハナラザル事ニテ御座候得ドモ、御上ヨリ手厚御世話無ニ御座一候テハ小民取續不レ申候、此兼幷ノ豪農富商ドモハ、御上ノ御用金等ヲモ出シ御用立居申、又下方へ

モ金銀米穀等借シ付、相應ノ救ヒヲモ仕居申シ候故、小民共ハ難澁ノ時ヲ救ハレ候恩ヲ思ヒ候テ、此豪農富商ヘ諂事ヘ候事、公儀ヲ恐レルヨリモ甚敷相成居申シ候故、今ハ乍レ恐公儀ノ權威恩德ヨリモ、金持ノ權威恩德重ク相成居申シ候、此兼幷游惰ノ弊ヲ止メ、小民ヲ取立不レ申候テハ、國家平治ハ出來不レ申候、其ノ仕方ヲ相考候ニ、彼未進借銀ヲ下方ニテ內分ニ仕候事ヲ嚴敷御停止御座候テ、皆公儀ヨリ拜借可レ被ニ仰付一候、左樣ニテハ御上ノ拜借出所有ニ御座一間鋪ト申シ不審付申候得ドモ、是モ何程モ出所御座候、其ノ手段ハ是又筆紙ニ難レ盡儀ニ御座候、ケ樣ニ御上ヨリ不レ殘拜借被ニ仰付一候テ、手厚御世話被レ爲レ在、小百姓ノ手前得ト吟味ノ上、其ノ不足ホド御借付被レ遣、利息御定ノ上、取立候ハ嚴敷被ニ仰付一、又能々吟味ノ上、彌難澁ニテ得拂不レ申小民共ヘハ、利息御引被レ遣、又ハ元銀ヲモ御減少被レ下候樣被ニ成下一候ハヾ、小民如何計リ難レ有可レ奉レ存候、扨又右ノ利息莫大ノ儀ニ御座候得バ、間ニ借捨リニ被ニ仰付一候テモ、御損亡ハ無ニ御座一儀ト奉レ存候、左候ヘバ、カノ金借共ノ權威恩德御上ヘ移リ、豪農富商共ノ利分、却テ御上ノ利益ト相成申候、豪農富商ノ權ヲ抑ヘ、兼幷ノ弊ヲヤメ、小民ヲ利シ國ヲ平治仕候事、是レヨリ宜敷仕方ハ無ニ御座一ト奉レ存候、又俄ニ兼幷ノ弊ヲ止ント仕候テハ、豪農富商共ノ田地ヲ削奪シ、小民ニ返シ與ヘ候樣ノ說モ御座候得ドモ、是ハ彼德政ト申ス仕方ヨリモ理無樣ニ奉レ存候、本價ヲ出シ買集メ候田地ヲ、其アタヒヲ償ヒ候テ取戻シ候事ハ、莫大ノ銀數ニテ迚モ出來不レ申、又故ナク田地ヲ奪ヒ候ハヾ、豪民共一向服シ不レ申、亂ヲ興シ候樣ニモ可ニ相成一、殊ニ

今ノ無力ノ小百姓共、自分持株田地ヲサヘ作リ兼居申上、假ニ田地ヲ返シ與ヘ候テモ所詮得作リ不レ申、却テ散田ヲ多クコシラヘ、困窮ノ基ニ相成可レ申候。唯上ニ申候策ヲ用ヒ、御上ヨリ手厚ク御世話御座候テ、金持ノ權利ヲ押ヘ、小百姓ヲ取立候樣御仕向御座候ヘバ、小民共自然ニ勢ヨク相成、田地ハ年々買戻シ、民平均ニ相成可レ申儀ト奉レ存候

一　春ヨリ夏麥ノ熟スル迄、貧民食ニ乏ク難澁仕候故、彼ノ豪農富商共ノ手前ニテ春扶持方ヲ借リ申シ候、是モ二割ノ利息ニテ、米麥又ハ銀札等ヲ借リ候テ、秋熟ノ時年貢ヨリ先ニ此春扶持方ヲ償ヒ申候、夫レ故多クハ御年貢不足仕候、其不足仕候事ハ存ジナガラ、一日モ食ヲ絶事ハ成不レ申事故無レ據借リヲ仕リ、又早ク償ヒ不レ申候ヘバ後ヲ借シ不レ申候故、御年貢モ春扶持方ヲ先ヘ拂、利息ヲ取ラレテガラ後ノ難儀ヲ考ヘ、豪農富商ニ諂ヒ事ヘ申候、此ノ春扶持方ヲモ下方ニテ借リ候事御停止御座候テ、御上ヨリ御吟味ノ上拜借被二仰付一テ、扨テ取立ハ利息ヲ加ヘ、秋ノ御年貢ト一所ニ御取立可レ被二仰付一候、扨又牛ハ農民第一ノ物、牛數少クテハ田地耕シ行屆不レ申候ヘバ、牛銀ト號シ、是モ御吟味ノ上御借シ可レ被レ下。又肥シハ、作モノニナクテ叶ザル物ニテ御座候得バ、肥シ代ト名付是モ拜借可レ被二仰付一候、ケ樣ニ諸事御上ヨリ手厚ク被レ用二御心一候ヘバ、百姓一等心持行キ直リ、十倍出精可レ仕候、然ルニ只今ノ拜借ハ下方ヨリ色々歎キ願候ヘドモ、多クハ相立不レ申、又間ニ被二仰付一候テモ少々ノ事ニテ、下方潤ヒニ相成不レ申、又拜借取立口ハ寛ニ過候故、拜借ト申スハ唯被レ遣候物ノ樣ニ下方ニ存居

申候、又間ニハ拜借被仰付候テモ、小百姓ノ手前ヘ行屆不申、中途ニテ姦曲ノ役人等引込ミ、又ハ游惰奢侈ニテ産ヲ破リ候樣成モノヘ頂戴被仰付候樣ノ事モ相聞ヘバ、ケ樣ノ者ハ御咎コソ可被仰付儀、御救ヒニ及ビ申スモノドモニテハ無御座、唯可哀モノハ、小民ノ耕作出精仕候テモ、無據病難又ハ凶作等ニテ、難澁仕候樣成モノ共ニテ御座候、上ニ申スゴトク諸拜借銀、御上ヨリ實意百姓御憐愍ノ仁政ニテ被成下候事ニテ御座候ヘバ、御上ニハ御手詰ノ御時節柄ニテ御座候得ドモ、銀子出所ハ何程モ可有御座儀ト奉存候、扨又一通リ御惠ミ被遣候計リニハ無御座候、始終國家平治上下富有ノ策ニテ御座候

一　農民減ジ候ハ外ノ渡世營候計ニテモ無御座、困窮仕候故年過候テモ、妻緣モ得不仕、鰥寡ノ者多ク、又出生ノ子ヲ取揚ズ、見殺シ仕候樣ノ事ニテ農民數增不申、甚可哀事ニテ御座候、孟子ノ人ヲ殺スニ挺ヲ以スルト政トハ、以異ナル事有ヤト申シ候コト思ヒ合サレ候、鰥寡孤獨ハ仁政ノ最急務ニテ御座候得バ、御上ヨリ被付御心、男子三十ニテ妻ヲ呼ブモノ、女子二十ニテ得嫁入不仕モノ共ハ、其ノ難澁ノ筋御糺シノ上御助力被仰付、妻緣取結ビ候樣可被仰付儀ト奉存候、扨又出生ノ子御座候ハヾ、村役人共ヨリ心ヲ付、若扶持方無御座、得生育不申樣ナル極貧者ハ、願上候上、御扶持被遣候樣可被仰付儀ト奉存候

一　第一申上度奉存候ハ、御國益御利益ナド申スハ諸役人ノ常言ニテ御座候、此利ト申ニ二ツ御座候

テ、道理ニ隨テ自然ニ出來候利ハ順利ニテ、至極宜御座候得ドモ、今ノ利ト申ハ多ク下ヲ剝テ上ヲ足シ候事ヲ申シ候、唯御上ノ御利益トノミ相考候ヘバ、御國危亂ノ本ニテ御座候、孔子モ利ニヨリテ行ヘバ怨オホシト宣ヒ、孟子開卷一章ニモ、利ヲ深ク戒メラレ候、我ニ利有バ人ニ損有リ、御上ニ利益御座候得バ下方損亡仕候、下方損亡仕候ヘバ、御上モ立不レ申候、人君ハ民ノ父母ト申候ゴトク、上ノ下ヲ見ルコト親ノ子ヲ思フゴトク、手厚ク御心ヲ御用候ヘバ、下亦力ヲ盡シテ、上ニ奉ジ候樣ニ相成申シ候、周易ノ益ノ卦ニ、上ヲ損ジテ下ヲ益ス、民喜コトカギリナシト御座候、然ルニ下ヲ損ジ上ヲ益候事ヲ御利益ト申スハ、大成心得違ニテ御座候、孟獻子ハ下ヲ聚斂スル家來ヲ持タンヨリ、上ノ物ヲ盜ム家來ヲ持タルガマシナラント申候、又魯ノ哀公孔子ノ門人有若ニ、凶年打續キテ國ノ財用足ラズ、如何セント問給ヒシ時、若有答テ如何シテ徹ノ法ヲ用ヒ給ハザルトイフ、徹ト申ハ、カノ井田ノ法ニテ、九百畝ノ內百畝ヲ公田トシ、農夫八人ノ力ヲ合セ是ヲ耕シ、其ノ有米ヲ上納ス、十ニ一ヲ取ルノ法ニテ、此ノ時ハ戰國ニテ軍用多キニ付、私田八百畝ノ內ニテ又十分一ヲ取リ候故、什二ヲ取ニ當リ候故、有若本ノ通リ十一ヲ取ル計リニテ、私田ノ稅ヲ止給ヘト申ナリ、其時哀公二ヲ取リテサヘ我猶足ラザルニ、如何シテ徹スベキトアレバ、有若コタヘテ、百姓足レバ、君タレト共ニカ足ラザラン、百姓足ラズンバ、君誰ト共ニカ足ラントイヘリ、多ク取リテ足ラザル物ヲ、少ナク取ラバ足ラント申スハ、如何ニモ理ナキ樣ニ御座候得ドモ、百姓ハ國ノ本ニテ御座候ヘバ、百姓サヘ强御座候ヘバ國

ハ棄ヘ申候、上ガ足ラヌト申シ候テ下ヨリ取テ足サント仕候ハ、譬ヘバ腹飢ルト申候テ、手足ノ肉ヲ割テ喰フ如クニテ、滿腹スルニ隨テ身ハ倒レ死スルニ至リ申候、殊ニ今ノ貧窮ノ百姓ニ聚歛ノ事ノミ行ハレテ、假貸賑恤ノ仁政ナクンバ、危亡ノ至ル目前ノ儀ト奉レ存候、扨又飢タルモノニハ食ヲナシ安ク、渇タルモノニハ飲ヲナシ安シト申スゴトク、今ノ困窮ノ民ハ少シノ事ニテ大ニ悅ビ、上ヲ戴キ候樣ニ相成可レ申、トカク民心ノ向背一大事ニテ、百姓御上ヲ怨ミ候樣相成候テハ御國立ガタク、百姓御上ヘ心服仕候ヘバ、財用無二御座一候テモ御國ハ强シト申スベク候、惣テ人ヨリ物ヲ取ラント仕候テハ取レ不レ申、與ヘント仕リ候ヘバ取レ申道理ニテ御座候、御上ニ仁惠ノ政行レ候ヘバ、下民十倍ノ力ヲ出シ、御上ヘ返報仕可レ申候、管仲ガ與ルガ取リタル事ヲ知ルハ政ノ寶ナリト申ハ、覇術ナガラ是ニ相違ハ無二御座一候

一 上ヨリ下ヲ待ツ事、誠ヲ推ストキハ下モ信ヲ失ハズ、上ヨリ下ヲ疑ヘバ、下上ヲ僞リ候ハ必要ノ儀ト奉レ存候、御毛見ト申ス事撰詞等モ被二仰付一、至テ嚴密ノ御法ニテ御座候ヘドモ、近來ハ段々私曲ノ儀增長仕候樣相聞候、其ノ事共ハ明ラサマニハ申ガタク儀ニテ御座候、其私曲仕候モ下方不情相計候デハ無二御座一、左樣ニ不レ仕候テハ百姓得取續不レ申樣子故、無レ據私曲ヲ仕候事ト奉レ存候、殊ニ御國ナドハ、裏毛ノ麥作百姓第一ノ事ニテ、麥ヲ取不レ申テハ農民ノ食無二御座一候、然ルニ今ノ毛見ハ時節遲ク相成候故、北ハ寄メル山鄕ニテハ、毛見後ニハ一向麥生ヒ立不レ申候、夫故毛見ヲ受候テハ甚不爲

ニテ御座候得ドモ、年貢不足仕候ヘバ、無レ據御毛見願上、近來ハ年々御毛見相増候樣成行候、夫故御上ニハ御物成減少仕リ、下方ニモ不作仕候上ニ、麥作取不レ申候ヘバ大ニ難澁仕候、右ノ樣子ニテ今ノ御毛見ト申ス事ハ、上下ノ不爲ト奉レ存候、御先代樣ヨリ相定リ候御法ニテモ、弊出來仕候ヘバ改革不レ仕候テハ、相成不レ申儀ト奉レ存候、譬ヘバ重代ノ珍器ニテモ損ジ候テハ、繕ヒ不レ申候テハ用ヒラレ不レ申候、今御毛見ノ法ヲ相考ヘ候ニ、凶作御座候節ハ下方村役人ドモ田地野見仕、御年貢不足仕候有姿ヲ何程々々ト申ス事ヲ書上候樣被二仰付一候上、得度御吟味候テ、中ニ能程御年貢御引被レ下、時節後レ不レ申樣刈上仕候ハヾ、麥作ノ害ニモ成リ不レ申、又切升ニテ相定リ候ヨリ却テ甲乙無二御座一、私曲モ出來不レ申儀ト奉レ存候、其ノ內無精ニテ不作仕候者共ハ嚴敷被二仰付一、又作方ハ程々ニ取實御座候テモ、病難死難等ニテ御年貢米不足仕候モノナドハ、餘計ニ御減免可レ被二仰付一儀ト奉レ存候、ケ樣ニ結構ニ被二仰付一候ハヾ、下方一統難レ有奉レ存候得バ、格別出精仕、大抵ノ儀ハ御役介不二申上一候樣相成、御物成納リ相增候樣相成可レ申奉レ存候、彼ノ井田ノ法ハ中百畝ヲ公田ト仕、其有米ヲ上納仕候事ニテ御座候得バ豐年ニハ多ク、凶年ニハ少ク、毛見ニ及ビ不レ申事ト被レ存候、今ノ人情ニテ計リ候ヘバ、私田ニハ力ヲ用ヒテ、公田ヲバ麁略ニ仕、又有ヲモ無キト僞リ、少ナク上納仕候モ難レ計被レ存候ヘ共、上ニ仁政有レバ、下モ上ヲ戴キ服シ候樣ニ相成、詩經ニ、カノ公田ニ雨降リテ、終ニ我私ニ及ブト詠ジ候如ク、私田ヨリ公田ヲ大切ニ仕リ力ヲ用ヒ申シ候、今ノ毛見モ下方ヨリ申出候通ニ御減免

被二仰付一、實意ヲ以テ御取計被二仰付一、百姓取續候樣手厚ク御世話被レ爲レ在候ハヾ、下方ヨリ御上ヲ爲リ、私曲等仕候儀ハ勿論無二御座一、格別出精仕、御毛見不レ願上一候樣ニ相成可レ申儀ト奉レ存候

一　上ニ論ジ候ゴトク、今ノ小民ハ御上ヨリ手厚ク被レ用二御心一、假貸賑郵シ給ハズンバ、得取續申間敷樣子ニテ御座候、然レドモ又此ニ一難御座候ハ、上ニ御仁惠ノ政ヲ施サント思召シ候テモ、中ニ姦曲私贓ノ役人御座候テハ、右拜借御救ヒ等下ノ潤ヒニハ相成不レ申、中程ニテ多クハ消失仕候、是ハ法ヲヨク立候テ、嚴刑ヲ設ケ不レ申候テハ相成不レ申候、ケ樣ニ申シ候ヘバ、申韓刑名ノ術ノ樣ニ相聞申シ候得ドモ、左樣ニテハ無二御座一候、書經ニモ、刑法ノ事ヲ委細ニ載セ御座候通、聖人モ刑法無二御座一候テハ、政治ハ出來不レ申ト奉レ存候、刑ハ刑ナキニ期スト御座候テ、御仕置嚴敷被二仰付一候ハ、罪人無二御座一樣ニ相成候爲ノ儀ニテ御座候、仁政ヲ施サント思召候得バ、彼姦猾私贓ノ族ヲ嚴敷不レ被二仰付一候テハ、小民ヘ御恩澤及ビ不レ申儀ト奉レ存候、殊ニ只今ハ困窮無力ノ小民ヘハ御法嚴敷行屆候テモ、富強ノ豪民權勢ノ官吏ハ御法ヲ背キ候テモ、兎角シテ御仕置ヲ遁レ候樣ニ相成申候、博奕等ノ御制禁モ牢舍手鎖等被二仰付一候ハ、皆貧窮モノ計ノ樣ニ相聞申候、是ニテハ令行レ禁止ムト申樣ニ、法立候事ハ無二御座一ト奉レ存候

一　近來在方ニ小店小商人ノ相増候事數多キ事ニテ御座候、是町方困窮ノ本、在方奢侈ノ基ニテ御座候、山奥ノ村ニテモ呉服物・小間物等賣モノアレバ、買フモノ御座候テ、無用ノ錢ヲ費シ申樣ニ相

成候、又他國ヨリ入込申ス商人モ次第ニ相增申候、今ハ城下ヘ出不レ申候テモ、在方ニテ惣テノ商ヒモノ調ヒ候故、大ニ町方商買不繁昌ノ本ト相成申シ候、本ヨリ在方商人ノ儀ハ御制禁モ御座候事ニテ御座候得ドモ、只今ハ耕作計リニテハ糊口出來不レ申ニ付、無レ據片手ニテモ外ノ商買ヲ營ミ申ス事故、商人嚴敷御制禁御座候ヘバ、飢寒ニ及ビ候者御座候、然ドモ此制禁無二御座一候テハ、彌田畠荒廢農民衰微ニ相成候得バ、在方ニテ新ニ商人ニ成、店ヲ出シ候事ハ勿論嚴敷御停止被二仰付一、又是レ迄商ヒ賣小店等出シ居リ申者モ、見計ノ上相止候樣被二仰付一、御加損米又ハ牛銀肥シ代等拜借被二仰付一候テ、農民ニ相成候樣可レ被二仰付一儀ト奉レ存候、農業ホド勞苦仕利少キ事ハ無二御座一候得バ、如何ニモ御上ヨリ手厚被レ用二御心一候樣ニ無二御座一候テハ、農民相增候事ハ出來不レ申奉レ存候、元來商人ハ農人ヨリ一格引下リ候事ニテ御座候得ドモ、農民ハ至テ麁體ニテ見苦敷、商人ハ美服游手ニテ上品ニ相見候事故、兎角商人ニ成度存候樣子ニ御座候、左候ヘバ在方ニテ商人ニ相成候者ハ、農民生ヨリハ急度格式引下リ候樣嚴敷被二仰付一候ハヾ、商人ヲ好申者少ク相成可レ申、又他國ヨリ入込ム商人ハ、國境幷湊ニテ御吟味御座候テ、ミダリニ入込不レ申樣被二仰付一、別テ奢ケ間敷商ヒ物等ハ嚴敷、御制禁可レ有二御座一儀ト奉レ存候

一　近來嚴敷儉約被二仰付一候テモ、兎角行屆不レ申候趣ニ相聞候、本ヨリ一同ノ流俗時勢トハ申ナガラ痛敷事奉レ存候、シカシ平生勤勞仕、一日ノ餘澤ニテ酒食宴會等仕候事ハ可レ有儀ニ御座候、今ハ游惰

ニ暮シ候上、奢侈ニ長ジ候故困窮仕候事ト奉レ存候、是ヲ引直シ申ス仕方ハ、唯本ニ反リテ勸農ノ政行レ候ハヾ奢侈ハ自然ニ相止、儉約ノ制令ニ及ビ不レ申儀ト奉レ存候、其ノ譯ハ耕作出精仕、炎天極寒ヲモ厭ハズ山野ヲ働クモノ、衣服飲食ハ何ニテモ撰嫌ハ不レ仕候、兎角人氣游惰ニ相成候所ヨリ居宅等ニ物好仕リ、麁服ヲ厭ヒ酒肴等ニ費多ク相成候事ト奉レ存候、又小民ノ不情相成者ハ、如何程辛苦仕候テモ渡世出來不レ申ニ付、一向ヤケニ相成候テ人ノ金銀ヲ借取ニ仕リ、又ハ博奕・小盜等仕候テ、衣食ニ奢候樣成モノモ御座候、是等ハ不埒成者共ニテ御座候ヘ共、本ト困窮故ノ事ニテ御座候ヘバ可レ憐事ニテ御座候、是等ノ者ハ御上ヨリ手厚ク被レ用ニ御心一拜借等被ニ仰付一、耕作ニ本ヅキ出精仕候樣取向御座候ヘバ、農民ニ相成候得バ御上ヨリ御助力被レ遣、渡世仕安キ事ヲ樂ミ、力ヲ盡シテ田畑ヲ働キ候樣相成候得バ、其不行跡幷奢リハ相止可レ申候、又諸士ノ奢ハ在宅土着被ニ仰付一候ハヾ山野ニ散在仕、酒食宴會等ノ費自ラ少ナク、儉約ニ相成可レ申、又彼黨幷游惰ノ族ノ奢リ申ハ、上ニ申如ク小民ノ借銀ヲ御上ヨリ御世話御座候得バ、此者共金借シノ利ヲ抑ヘラレ、農業ノミ心ヲ用ヒ候樣相成候ハヾ、此者トモ、華美ヲ仕リ候事モ相止可レ申、又在方商人御制禁御座候ハヾ、色々ノ奢リ物賣廻候者無ニ御座一、自然ニ儉約ニ相成可レ申儀ト奉レ存候

一　武備ハ御國第一ノ儀ニテ御座候、然レドモ士民困窮仕候テハ勿論武備調ヒ不レ申、兵糧ノ手當モ無ニ御座一候ヘバ、先國ヲ富シ用ヲ足シ候樣ニ仕候ガ武備ノ本ト奉レ存候、國ヲ富シ用ヲ足スニハ、農

ヲ勸メ兵ヲ土着ニ不レ仕テハ出來不レ申候、諸家中在宅ニ相成候ヘバ、一同ニ勝手向宜敷相成、武具・馬具等美ヲ盡シ候樣相成、又貧民ヲ召抱ヘ譜代ノ家來トナシ候テ常々恩顧ヲ加ヘ、無事ノ時ハ耕作シ、亂有時ハ陣中ヘ召レ候樣相成候ハヾ、素恩義有主人ノ爲ニハ急度用ニ立、離散不レ仕樣相成候ハヾ、兵强ク相成候儀ト奉レ存候、只今ノゴトク諸士ノ家來皆一季半季ノ奴僕ニテハ、主從ノ名コソ御座候得ドモ、何ノ恩義モ無ニ御座一候ヘバ大事ノ時ハ逃奔リ、何ノ用ニモ相立申間鋪候、左候得バ諸士土着ニ相成候ハ兵ヲ强ク仕候致方、武備ノ第一ト奉レ存候、扨又在宅ニ相成候ヘバ、武藝稽古場ハ城下ニ立置、諸士ノ子弟ヲ集メテ稽古仕候樣可ニ相成一、又御城守衞等ノ儀ハ代番ニテ相勤候樣可ニ相成一、是等ノ取計ハ又其上如何樣トモ致方可レ有ニ御座一儀ト奉レ存候

一　金銀ハ世ノ重寶トスル者ニテ御座候得ドモ、饑饉ノ時至リ餓死ニ及バントスル時、百貫目ノ金銀タリトモ一斗ノ米穀ニ及ズ候故ニ、米穀程貴ベキ物ハ無ニ御座一、金銀ハ手輕キモノナル故、盜賊ノ恐レ御座候得ドモ、米穀ハ重キ物ナル故ニ、盜賊ノ難ヲ免カレ候、然ルニ今ノ人ハ金銀ノミ重ンジテ、用意金又軍用金ナド申シテ貯ヘ候者御座候得ドモ、米穀ヲ蓄ヘ凶賊ノ難ヲ慮ル者ハ無ニ御座一、別シテ御國用ニハ米穀ノ蓄ヘ無ニ御座一テハ不レ叶儀ト奉レ存候、勸農ノ政有レ之田地取實多ク、米穀澤山ニ相成候ハヾ、幾藏モ糴收ニテ圍置候ハヾ、凶年饑饉ヲモ凌ギ、軍用兵糧ノ手當ニモ宜敷儀ト奉レ存候

一　國ノ興廢ハ民心ニ於テ見ルベク、民心上ニ服スル時ハ國興リ、民心上ニ離ルヽ時ハ國廢シ候儀ト

奉レ存候、今ノゴトク小民困窮仕リ候テハ、乍レ恐御上ヲ怨望仕リ候者多ク相聞候、此儘ニテモ豊年打續キ候ハヾ無事ニ可レ有ニ御座一候得ドモ、一旦凶年饑饉ノ時至リ候ハヾ、所々ニ一揆騷動等ヨリ事始マリ、兵亂起リ申ス程難レ計奉レ存候、治世ニモ亂ヲ忘ルベカラザル事ニテ御座候得バ、其手當無ニ御座一テハ不レ叶儀、其手當ト申スハ平生民心ヲ懐ケ安ンズル事第一ト奉レ存候、家中諸士ハ常ニ國祿ヲ食テ恩義ヲ存候ヘバ、離散仕候事ハ有ニ御座一間敷候得ドモ、下民一同上ヲ怨ミ亡所仕候樣相成候ハバ、誰ト共ニカ國ヲ守リ可レ申哉、其ノ時ニ至リ俄ニ民ニ恩信ヲ施ス事ハ出來不レ申候ヘバ、常ニ仁政ヲ施シ民心上ニ服シ、國富兵强ク御座候ハヾ、一國離散不レ仕ノミナラズ、他邦ノ民モ皆我國ヲ慕ヒ來リ可レ申、左樣ニ相成候ハヾ、軍ヲ出シテ不レ勝トイフ事ナク、國與リ可レ申、仁者無敵ト申スハ此事ニテ、可レ有ニ御座一、然レバ小國タリトモ上下相和シテ、一國一心ニ相成リ候ハヾ、盤石ノ基ニテ、大國タリトモ民背キ衆散ゼバ、累卵ノ危キニテ御座候

一　民富國豊カニ相成候上、敎化ヲ施シ不レ申候テハ不レ叶儀ト奉レ存候、下地敎化無ニ御座一候テ、御仕置被ニ仰付一候ハ、敎ヘズシテ殺スト申スモノニテ御座候、今ノ世一統困窮仕候所ヨリ人情甚惡敷相成、不法成儀仕候族數多出來申候、敎ヲ不レ施シテ不レ叶儀ニ御座候、然ドモ今俄ニ敎化ヲ行ント仕候ハ、所謂昔後スル所ヲ知ラズト申スモノニテ御座候、孔子モ是ヲ富マシ後ニ是ヲ敎ント有、又食ヲ足シ兵ヲ足シ、民是ヲ信ズト宣フ、孟子ニモ、恒ノ産アル者ハ恒ノ心アリ、恒産ナキモノハ恒ノ心ナシト

言ヒ、管子モ衣食足リテ禮節ヲ知リ、倉廩實チテ榮辱ヲシルト申候ヘバ、勝手向宜敷相成衣食ニ難澁不レ仕樣ニ相成候ヘバ、自然ニ人氣和ラギ、惡人無ニ御座一樣ニ相成可レ申候、又孟子ニ此事ヲ論ジテ、今日暮方ニ人ノ門戸ヲ叩テ水カ火カヲ乞ヒ候ハヾ、誰ニテモ早速與ヘ可レ申、仁政行レ候ハヾ、米穀ノ澤山ナル事水火ノゴトク相成可レ申、左候ハヾ人情ノ惡敷モノハ有レ之間敷ト申ス事相見候、米穀ヲ水火ノゴトク澤山ニ作リ出シ候事ハ、カノ勸農ノ政事ニテ無ニ御座一テハ出來不レ申儀ト奉レ存候、先上ニ段々申上候策ヲ御用ヒ御座候テ、民富國豐カニ相成候ハヾ、其ノ上教化ノ方ハ在々所々學問所ヲ建候樣ニ成リトモ、如何樣共致方可レ有ニ御座一儀ト奉レ存候、何分今時ノ如ク上下困窮仕候而、農民年々減ジ、散田次第ニ相增候テハ、御國危亂ノ本ニテ御座候得バ、是ヲ救フ致方ハ第一諸士在宅土着被ニ仰付一、知行ニ準ジテ田地ヲ割付ケ、貧民ヲ奴僕ニシテ耕作仕候樣被ニ仰付一、村々未進・借銀・春扶持方・牛銀・肥代等、御上ヨリ手厚ク御世話被レ爲レ在、怨女曠夫少ク、生子ヲ殺シ不レ申樣ニ御仁惠ヲ施サレ、凶作毛見ノ法ハ實意ヲ以下方ヨリ申上候通、御減免被ニ仰付一、商人御制禁御座候而、奢侈ノ風ヲ自然ニ打チ止メ、農民ニ立歸リ耕作計出精仕候樣被ニ仰付一、姦猾私賊ノ役人ヲ嚴敷被ニ仰付一、困窮無力ノ小民ヲ御取立被レ爲レ在候樣ニ相成リ、兼幷游惰ノ弊ナク皆田畑ニ力ヲ用ヒ、肥シ手間等行屆候樣ニ相成候ハヾ、三双倍ノ取實モ御座候テ、米穀澤山ニ上下富饒ニ御座候ハヾ、人情モ行直リ、武備モ調ヒ、文教モ行ハレ、御國治安御運長久ノ策ト奉レ存候、然レドモ策ハ人ニヨリ候儀、其ノ人無ニ御座一候テハ良

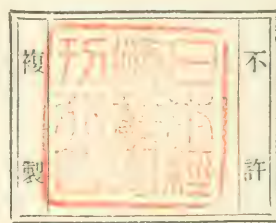
策ニテモ行レ不レ申候得バ、先ヅ其人ヲ御撰ミ被レ爲レ在候事第一ト奉レ存候、古人ノ詞ニモ、人君ハ賢ヲ求ルニ勞シテ、人ヲ得ルニ逸スト承リ候

勸農策下篇終

宮崎幸麿
小西武治
校

大正五年一月十一日印刷
大正五年一月十五日發行

日本經濟叢書
卷二十
非賣品

編者　瀧本誠一
發行者　佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地
印刷者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
日本經濟叢書刊行會
電話本局三一八五番
振替口座東京二六八一〇番

理事　高木範之丞
佐藤卯兵衛

CONTENTS

of the twentieth volume

BIBLIOTHECA JAPONICA ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XX

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI
1916.